

Aqours と沼津市の布屋 さん

春夏秋冬2017

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

静岡県沼津市に佇む、とある布屋さん。

古くから地元根付くそのお店は、浦の星女学院すぐ近くに健在する。

店主であつた祖母が亡くなり、高校卒業後すぐ、19歳の若さで店を継いだ、淡春
〈あわい はる〉。

これは、そんな布屋さんとアイドルグループ、Aqoursとの生活を描いたものである。

Aqoursとオリ主の物語ですが、そんなにシリアスしません。

基本進行はアニメの本筋に則ります。

Twitterはじめました。

<https://twitter.com/allseason2017>

目次

新学期の準備

千歌ちゃん曜ちゃんと布屋さん

1

浦の星女学院と布屋さん

11

小動物たちと布屋さん

19

大金持ちと布屋さん

29

堕天使と布屋さん

39

体育少女と布屋さん

46

転入生と布屋さん

54

アニメ本編（1期）

入学式と布屋さん

63

海の音と布屋さん

77

作詞作曲と布屋さん

89

ライブ準備と布屋さん

100

ライブ当日と布屋さん

111

2年生と布屋さん（上）

123

2年生と布屋さん（下）

137

文学少女と布屋さん

151

新メンバーと布屋さん

160

治らぬ病と布屋さん

172

学院事情と布屋さん

187

PV撮影と布屋さん

197

東京出発と布屋さん

211

東京ライブ前日と布屋さん

223

帰ったAqoursと布屋さん

心残りと布屋さん	248	3年生と布屋さん(上)	404
新生Aqoursと布屋さん	258	3年生と布屋さん(下)	415
1年生と布屋さん(上)	273	宝石姉妹と布屋さん	431
1年生と布屋さん(下)	281	罪な接吻と布屋さん	444
夏の始まりと布屋さん	293	CYaRon!の少女と布屋さん	456
合宿と布屋さん	304	ツツジの花達と布屋さん	477
少女の決意と布屋さん	320	レーシングゲームと布屋さん	494
嫉妬ファイヤーと布屋さん	337	アクションゲームと布屋さん	510
東京デートと布屋さん	359	シミュレーションゲームと布屋さん	525
結果発表と布屋さん	372	たまには昔の話と布屋さん	539
μ'sの背中と布屋さん	383	橙な少女と布屋さん	552
平凡な日常の布屋さん			

天体観測と布屋さん	568
図書館の少女と布屋さん	582
イングリツシユと布屋さん	596
ヨーソローな少女と布屋さん	613
黒いダイヤと布屋さん	626
泳げないルビーと布屋さん	642
お絵描きと布屋さん	659
運の悪い墮天使と布屋さん	677
普通の1日と布屋さん	690
普通の1日と布屋さん	702
普通の1日と布屋さん	717
普通の1日と布屋さん	730
普通の1日と布屋さん	745

普通の1日と布屋さん	760
普通の1日と布屋さん	778
普通の1日と布屋さん	794
普通の1日と布屋さん	808
ポウリングと布屋さん	823
お勉強と布屋さん	841
とある夜と布屋さん	859
駄弁るA q o u r sと布屋さん	873
駄弁るA q o u r sと布屋さん	888
駄弁るA q o u r sと布屋さん	900

983	駄弁る A q o u r s と布屋さん 9	デートの持ち物と布屋さん 1	11581145112811111099
969	駄弁る A q o u r s と布屋さん 8	雨の日と布屋さん 2	
954	駄弁る A q o u r s と布屋さん 7	雨の日と布屋さん 1	
942	駄弁る A q o u r s と布屋さん 6	イベント事と布屋さん	
928	駄弁る A q o u r s と布屋さん 5	よくある 1 日と布屋さん 5	1084107310591044103310201006
		よくある 1 日と布屋さん 4	
		よくある 1 日と布屋さん 3	
		よくある 1 日と布屋さん 2	
		よくある 1 日と布屋さん 1	
		デートの持ち物と布屋さん 3	
		デートの持ち物と布屋さん 2	
996	キャンブと布屋さん 1	キャンブと布屋さん 2	

1307	2ndシリーズのスタートと布屋さん	
1296	2ndシリーズの幕開けと布屋さん	
1280	アニメ本編(2期)	
	記憶喪失と布屋さん2(更新停止中)	1260
	記憶喪失と布屋さん1	1237
	キャンプと布屋さん7	1224
	キャンプと布屋さん6	1211
	キャンプと布屋さん5	1194
	キャンプと布屋さん4	1178
	キャンプと布屋さん3	

新学期の準備

千歌ちゃん曜ちゃんと布屋さん

静岡県沼津市。

そこにある、全校生徒100人にも満たない高校、浦の星女学院。

そんな高校のすぐ近くに、俺の店はある。

「ハル君、昨日は何人お客さん来たの？」

「発注依頼が2人だね」

「お店、大丈夫？」

「ほっといてくれ」

目の前にいる痛いところを突いてくる女の子の名は、高海千歌ちゃん。

昔から付き合いのある女の子で、浦の星女学院に通う2年生だ。

「そうだよ千歌ちゃん。本当のことでも、言っただいじなこと悪いことがあるよ」

「そうだね。それが言っちゃいけないことだったね」

千歌ちゃんの後ろから会話に入ってきたのは、同じく浦の星女学院に通う渡辺曜ちゃん。

これまた、痛いところを突いてくるなあ。

二人は幼馴染であり、こうしてうちのお店にやってくるというのもそうそう珍しいことではない。

まあ面白い物してくれることは珍しいんだけどね。

「千歌ちゃんも曜ちゃんも、学校はどうしたのさ」

「今は春休みだよ？」

なんてこった。

「あー…もうそんな季節なのか。宿題はやったのかい？」

「ここでやろうと思ってる！」

そう言っつてノート、教科書、筆箱を取り出す千歌ちゃん。

初めからその気だったらしい。

「いや、ここ俺の仕事場だし。その机、一応商品なんだけど」

「どうせお客さんもしばらくこないでしょー」

「ここにいれば、テキトーな時間にご飯とお菓子出てくるもんねー。いやー、いい勉強場

所だよー」

「あと飲み物もね！あ、私冷たいお茶がいいなー」

「私もー」

曜ちゃんまで同じものを取り出し始めた。

こうなると、この2人は引き下がらないだろう。

そう思い、仕方なくこちらが引き下がることにする。

「はあ…。もうわかったから、せめて奥の部屋でやっててくれ。お茶は後で持つていくから」

「はいー！」

「ヨーロー！」

2人で敬礼の真似事をして奥へ入っていく。

さて、お茶の準備でもするか。

なんだかんだ言っても、お店が閑散としているよりは、華の女子高生がいてくれた方が幾分色がいいというものだ。

※

2人が勉強を始めて1時間ほど経過。

時刻は12時を過ぎ、大した接客もしていないのだが腹の虫が活動を始めた。

「…なんか食べるかな」

つい、そんな言葉が口をつく。

発注依頼表を確認する。

今日取りに来るお客さんは、今から2時間後だ。

これなら大丈夫だろう。

「お昼ごはん作るけど、なんか食べたいものあるかい？」

店先の営業中を休憩中に返し、部屋奥の和室にいる彼女たちに声をかける。

2人は真面目に勉強を…してゐるわけではなかった。

「あ、私はなんでもいいよー」

「私もー」

曜ちゃんはペンを握っているしノートも開いている。

まあ勉強はしてたのだろう。

対して千歌ちゃん。ノートは開いているが、ペンは握られていない。

というか

「勉強はどうしたんだい、千歌ちゃん」

「だってー、全然わかんないんだもん！」

「だからって、寝転がってる理由にはならんでしょうが」

千歌ちゃんから反省の色は見られない。

仕方ない。

「千歌ちゃんのお母さんからさつき、『勉強やってなければご飯はなしでいいです』と連絡をもらったよ」

「えええええ！そんなー！」

「あはは…」

千歌ちゃんは大声をあげる。

曜ちゃんは苦笑いだ。

「空いた時間は俺が教えるから、ちよつとずつ進めよう」

「ほんとー!?!」

「あくまで空いた時間だけどね」

「じゃあ私も私もー!」

曜ちゃんまで教えることになったのは少し予想外だった。

とはいえ、2人の学力はそんなに知らないが、まあ高校1年で出された宿題であれば教えるくらいはどうかなるだろう。

「それで、昼は何にするの?」

「そうだね…チャーハンでも作ろうか」

「いいね!」

キッチンへ向かい調理を始める。

5分ほどして、2人も手伝いに来てくれた。

曜ちゃんは随分慣れているようで、豪快ながらもなかなかいい味付けをしてくれる。

「将来はいいお嫁さんになるねえ」

って言ったたら、曜ちゃんは照れているようだったが、千歌ちゃんは機嫌が悪そうだった。

残念ながら理由はわからない。

※

「うー…疲れた…」

「宿題、あんなに溜め込んでた千歌ちゃんが悪いよ」

「あはは…」

日がだいぶ傾き、月が顔を出し始めた頃、ようやく宿題を終えることができた。

少しくらい他の日に持ち込めばいいのでは？と言っても、今日やると譲らなかつた。

「でもこれで、明日から全力で遊べるよ！」

「やたら今日にこだわってたね。明日から何かあるのかい？」

俺がそう言ったことに対し、曜ちゃんが逆に驚いていた。

「あれ？千歌ちゃん、ハル君にまだ言っただ言っただ言っただの？」

「うん！驚かそうと思って！」

「ほう。何か面白いことでもやるのかな」

これは少し興味がある。

宿題嫌いな千歌ちゃんがここまでやったのだ。

きつと、何か外せない用事でもあるのだろう。

「その通り！なんと私と曜ちゃんは！」

そこで一区切り置く千歌ちゃん。

随分もったいぶった言い方をしてくれるなあ。

曜ちゃんはどうと

「そこまで大げさでもない気が…」

と苦笑いしているのだが。

やがて千歌ちゃんは、指を北に向かって指して

「東京に、行くのです！」

そう、言い放った。

「…ほうほう、東京にかい。それはいいね。ぜひ楽しんできなよ」

「つてあれ？あんまり驚いてない!？」

そりゃ、こつちは仕事柄何度か行ってるしね。

高校の時は遊びにも行っただし、東京に行くこと自体はそんなに驚かない。

それよりも

「千歌ちゃんが指差してる方に、東京はないんじゃないか？」

「あれー!？」

さっきの口ぶりだと2人で行くようだし、驚きより心配の方が遥かに大きい。

「心配しなくても、私もいるから大丈夫だよ」

「んー…。まあとにかく、気をつけてね」

「ヨーソロー！」

敬礼する曜ちゃん。

「特に、ナンパには気をつけるように。2人とも可愛いんだから、気を抜かないように

ね」

「あー…うん。し、心配ありがとう」

「こういうの、ずるいよね」

2人とも縮こまってしまった。

顔を赤らめている様子を見る限り、相変わらず褒められ慣れていないらしい。

あ、くしやみ出そう。

「…ハル君、ほとんど何も考えずに言ってるんだろなあ」

「…そういうところ、ほんとにずるいよね…」

「ハックシヨン！…って、何か言った？」

「なんでもないです」

どうやら何か聞き漏らしたようだが、2人がいいと言ってるので、まあよしとする。

※

次の日、彼女たちを駅まで見送りに行った。

幸いにも、配達先が駅の近くだったのでその足で向かったのだ。

浮足立っていたようで少し心配だったが、彼女たちももう16歳だ。大丈夫だろう。

「行ってきまーす！」

「ヨーソロー！」

彼女たちも、東京で見ることになるのだろうか。

数年前、この街にも存在していた。

”スクールアイドル”というやつを。

浦の星女学院と布屋さん

「では、そのようにお願ひしますわ」

「了解。今年も、入学者は多く無さそうだね」

「そう…ですわね。悲しいことですが」

そう言つて表情に影を落とす女の子。

彼女は、黒澤ダイヤちゃん。

浦の星女学院に通う2年生…だったけど、今年からは3年生だ。

生徒会長を務める彼女が、今日この店にやってきている理由は、生徒会で使う備品の購入だ。

本来、学校で正式に取り扱う備品は、当然学校単位で購入を行っている。

授業で取り扱つたりするものは多くがそれだ。

しかし、生徒会が『学生からの要望』を、学校を通さずに叶えようとするのが多々有る。

寒いから膝掛けを…とか

部活用備品が足りなくて…とか
そんな感じ。

お店が少ないこの町では、うちのようないくつかの小さい店が雑貨系売買の中間を担うことがある。

うちの店は本来布屋さんだが、こういった行いは大分前からやってきているし、鼻屑にしてもらえる分デメリツトもあまりない。

「そういえば、こうやって物を買ってくれるのはありがたいけど、お金はどこから出てきているんだい？ こういう買い物は、正規のルートではないんだらう？」

「学校側の黙認があるのですわ。生徒会活動予算の中に、毎年『その他』という分配が割り当てられているんです」

「なるほどねえ」

ちなみに、なぜわざわざ学校を通さないか、だが。

大きな理由は購入に至るまでのスピードである。

学校を通さなくてはならない場合、書類を作り、学校が審査し、そこから購入手続きへと入っていくので、申請から手元へ来るまでには結構な時間がかかる。

その点、生徒会に頼めば生徒会長の認可一つですぐにうちに申し込めるわけだ。

ちなみにその場合の料金だが、市販で買った場合と同じだけの送料をいただいでい

る。

さすがに、タダではできんよ。うちが破産しちゃう。

「とはいえ、そんなに高額な予算は貰えませんが。こちらとしては、ハルさんに毎回低価で面倒をかけてしまい申し訳ありませんわ」

「いや、電話かけて取りに行くだけだしね」

ここに配達で届けてもらうこともできる。

けどそれをすると、そこで送料を取られてしまう。

そうになると、俺の取り分が無くなってしまうので、お得意さんに電話して、商品があれば直接取りに行くようにしている。

「それより、さっきの話になってしまっけど…生徒、やっぱり減っているのかい？」

「ええ…。廃校…というのは、さすがにまだ無いとは思いますが」

そう言うダイヤちゃんの表情は暗い。

浦の星女学院を彼女がどれくらい好きかは、この店で話す中でよく伝わってきている。

ダイヤちゃんとは、会長になる以前から彼女のお家柄、付き合いがあった。

なので、彼女が浦の星に入学してからどういった想いを抱えて過ごしてきたかは、それなりに聞いている。

「俺としても、お得意さんがいなくなってしまうのは困るね。学校存続、ぜひ頑張っておくれよ」

そう言うのと彼女は目を見開き、そして少し優しい表情になる。

「それは、言われなくともそのつもりですわ」

少し呆れたように、そう続けた。

「そうは言っても、たかだか送料分の儲けなんて、知れた額でしょうに」

「金額だけで言えばそうなんだけどね。いやはや、仕事中に女子高生が見えるんだ。それも合理的にね。それだけで、元は十分に取れてるよ」

「セクハラですわ」

今度はジト目だ。

いいじゃないか。

暗い表情よりは、ずっとこつちの方が可愛い。

「言ってくれば、私は…」

「? なんの話だい?」

「な、なんでもありませんわ! この朴念仁!」

手元にあつたクツションを投げつけられる。

てかそれ、うちの商品なんだけど。

ここに来る子たちは、うちの商品をなんだと思っているのやら。

「あー、わかったわかった。なんで怒ってるかはわかんないけど、お菓子でも食べて行きなさいよ」

「何もわかってないではありませんか！…プリンでお願いしますわ」

「はいよ。確か冷蔵庫に抹茶のが…」

冷蔵庫に3個あつたはずのプリンは、1個になっていた。

代わりに、冷蔵庫の扉にメモが貼つてある。

『ごめんね！こんどおわびするから！千歌&曜』

女の子らしい可愛い字だねこんちくしょう。

「利子はトイチって事にしよう」

「あら？さすがにその1個はもらえせんわね」

「いや、いいよ気にしなくて。自分で食べるつもりはなかったしね」

だからと言って、あの娘たちにあげるつもりもなかったのだが。

「そうですの？じゃあお言葉に甘えますわ」

「うん。まあ味わって食べておくれよ」

スプーンを使い、プリンを口にするダイヤちゃん。

それだけの動きでも、育ちの良さを感じさせられる。

先日、チャーハンを口に掻き込んで咽せた娘とはえらい違いだ。

「なんですの？あまりじろじろ見られると恥ずかしいのですが」

「ああ、申し訳ない。様になってるなーと思って」

「ふふ。なんですの、それ」

やっと、笑顔を見た気がする。

今日に限らず、高校1年の秋頃から笑っているのを見る機会が減った。

理由は、だいたい聞いている。

スクールアイドルが関係している事も。

それでも、やっぱりこの子には笑っていて欲しいものだ。

そんなことを考えている時だった。

「じゃあ…」

プリンに乗せたスプーンをこちらに持ってくるダイヤちゃん。

なんなんだろうか。

「ここ、ここ」で『あーん』というやつをやるのは、様になってないのですの？」

顔を赤くしてそんなことを口にする。

『あーん』をしてくれる理由は不明だが、慣れていないんだろことは容易に想像がつく。

「いや、それも可愛らしくていいんじゃないかな？」

「…はあ。平然と言いますのね」

せつかくさつきまで笑顔だったのに、なぜか少し落ち込んだ様子だ。

ダイヤちゃんほどの美人にあってもらって、それはそれは嬉しいに決まっているのに。

…って

「おっと」

スプーンから滑り落ちそうになっていたプリンを口で捕まえる。

思わずプリンを頂いてしまった。

「…うん。やっぱり美味しいね。このメーカーは、値段の割に風味がいい」
気づくと、ダイヤちゃんが固まっている。

口をパクパクさせて何か言っている様だがいまいち聞き取れない。

「か、か、かか…かんせ…っ」

「ん？ああ確かに、完成された味だね」

次の瞬間、ダイヤちゃんがものすごい勢いでプリンを口に放り込んだ。

そしてそのまま

「ぐ、ぐちそうさまですわー!!」

「え、ちよっ」

『バターン』

走って出てってしまった。

「…なんだったんだろうか」

プリンが口に合わなかったということはないと思うのだが…

眩きに、答えるものはもちろんいなかった。

小動物たちと布屋さん

どうもハルです。

今日は久しぶりに沼津駅のあたりまで来ています。

色んな雑貨と、本屋が目的です。

「テレビ、最近はこの様なサイズのが売ってるのか…うわ、しかも結構安い」

一昔前では考えられない様な値段で高性能な電気機器が売っている。

時代が進み、モノを作る生産技術はとんでもない勢いで進んでいる現代社会。

さつき衣類も見てきたけど、あれもすごかった。

あの低価格であの品質。

これはうちも、なんか手を打たないと持たんな。

「今時布単体じゃあ厳しいのかなあ。いつそ本格的に、物流業界の方に仕事を切り替え
てしまおうか…」

そんなことをぶつぶつ言いながら、行きつけの本屋にやってきた。

特段、読書が好きというわけではないが、店番をしているときの一番の暇つぶしとい
えば、これに限る。

目に付いた本を適当にかごに放り込んでいく。

小説、雑誌、専門書などなど……どんなジャンルにせよ、暇なときに文字を追うというのは、思いの外時間が進むものだ。

そうして歩いていて幾分か経った時。

「よし、まあこんなもんか。レジに……ん？」

レジに向かおうとした俺の目に入ってきたのは、本の妖怪だった。

高く積まれた本が、不安定そうにうねっている。

「お、重いずら〜」

「花丸ちゃん危ないよお」

妖怪ではなく人間らしい。

よく見ると手も足も見えるな。

顔が見えないその存在は、おぼつかない足取りでなんとか前に進んでいる。

手に持っている本は頭を越すほど積まれており、どう見てもキャパシティーオーバーだ。

その横で不安そうな顔をしているのは……

「あれ？ルビイちゃん？」

「え、あれ？は、ハルさん!？」

赤い髪をツインテールにまとめる女の子。

彼女の名前は黒澤ルビィちゃん。

浦の星女学院会長、黒澤ダイヤちゃんの妹であり、彼女同様俺と長い付き合いがある。急に名前を呼ばれたからか、ルビィちゃんはものすごいびっくりした様子だ。

動揺のあまり一歩後ろに下がってしまった、そのままもう一人の子にぶつかつた。

「わ、わわわ……あ、ああー！」

いよいよバランスを保てなくなつたその子は、本の重さに負けそのまま前に倒れこむ。

ビターンという音が聞こえてきそうなほど華麗にこけた女の子。

当然、持っていた本は勢い良く空中に投擲され……

俺の方に飛んできた。

ゴス

飛んできた本は、俺の目、喉、腹を直撃。

「ぐえーぬぐうおおおう……」

痛い。尋常じゃないくらい痛いんだけど。

まさかの3冊クリティカル。

思わず唖っていると、ルビィちゃんが心配して駆けて来てくれた。

「だ、大丈夫ですか？」

「う、うん。それよりそつちは…」

結構な勢いで倒れてたし、2人に怪我が無いか心配だ。

「わ、私は大丈夫ですよ」

「マルも大丈夫ずらく」

ルビイちゃんともう1人の女の子も、お尻を抑えているが問題は無さそうだ。

一安心しつつ、散らばってしまった本を拾いつつ、女の子の方に目をやる。

ルビイちゃんよりも若干背が低く、栗色の髪を肩の下くらいまで揺らしている女の子。

結構スタイルがよろしいようで。

「ハルさん、大丈夫ですか？」

「え？ああ、全く問題無いよ。はい、これで全部かな」

危ない危ない。

ダイヤちゃんならともかく、ルビイちゃんにこういう話はご法度だ。

後でダイヤちゃんにしばき倒される。

「あ、ありがとうございます…じゃない、ありがとうございます」

「どういたしまして。随分たくさん本を読んだね。あ、俺の名前は淡　春くあわいはるだよ。・気軽にハルって呼んでおくれ」

「あ、国木田花丸です。ルビイちゃんの友達で同学年です。お兄さんは…えと…ルビイちゃんのお知り合い？」

「うん。えーと…」

「まあ、兄みたいなものだよ。昔から付き合いがあつてね」

「おー。お兄さんずら」

さつきから妙な語尾が出てるな、この子。

どつかの方言なんだろうか。

それとも口癖？

「むー…。ハルさんのバカ…」

「ん？ルビイちゃんなんか言った？」

「なんでもないです！」

そういつてそっぽを向いてしまった。

最近ちよいちよいこういうことがあるな。

と、そんな時。

『ぐ』

腹の音がなった。

多分、ルビイちゃんだな。

とはいえ、さすがにそれを口にするほどデリカシーに欠けているつもりはない。

ちようど昼飯時だ。

「こつちからご飯に誘うとしようじゃないか。」

「お昼、2人は済ませたかい？」

「マルはまだず…まだです」

「あー、敬語は適当でいいよ。あとその語尾、無理して治さなくてもいいんじゃない？」

「そ、そうずら？」

「うん、それはそれでかわいいんじゃない？」

「かわっ！」

一気に真っ赤になった。

なかなか面白い子だ。

「ルビイちゃんは、どうするんだい？」

「っーん」

「えーと…ルビイちゃん？」

「っーん」

なぜかへソを曲げてしまったらしい。

うーん、どうしたものか。

「怒ってるのかーい？」

「べつに、怒ってないです。ハルさんにデリカシーがないことくらい、知ってますし」

前言撤回。

俺にデリカシーはないらしい。

「お昼」

「ん？」

「プリンつけてくれたら、許してあげます」

「りょーかいりょーかい。好きなもの頼みなされ」

「うんー！」

笑顔に戻るルビイちゃん。

理由は結局分からずじまいだが、まあ機嫌を直してくれたようなので良しとしよう。

こうやってわがままを言われるのも、ルビイちゃんから信用されている証なわけだしね。

「じゃあ行くこうか。行き先は…2人に任せるよ」

「出発ずらー！」

「うん！」

その辺のファミレスでいいかな。

などと思っていながら、ふと花丸ちゃんの方を見ると

「むむむ…今度は気をつけるぞら…」

本の妖怪に変身し直していた。

つてちよいちよい。

「本、持つの手伝うよ」

「え、でも…」

「いや、その状態で歩くのは危なすぎるから」

さすがに全部持つのは無理だけど、半分以上はこちらが持つことにする。

この子普段、どういう買い物してるのだろうか。

「おー。お兄さん、結構力持ちずら」

「力があるんじゃないかって、バランスとるのが得意なんだ。仕事柄ね」

「仕事？ハルさん、仕事してるずら？」

その質問には、ルビィちゃんが答えてくれた。

「ハルさんはね、布屋さんやってるの。浦の星女学院のそばにお店があるんだよ。学校

にもいろいろくれるんだよ」

「ずら!?じゃあ、オラたちもお世話になるずら」

「うん!そうだね」

そんな会話を2人がしていた。

会話から察するに、2人は浦の星女学院に入学するらしい。

「2人とも来年から浦の星に入るのかな?」

「そうずら」

「お姉ちゃんも、いますから」

「そうかいそうかい、来年はぜひうちをご鼻屑に」

というか、ご鼻屑にしてもらわないとうちが危ない。

残念ながら、うちに経済的余裕は全くないのだ。

そんな話をしながら歩いていると、飲食店が立ち並ぶところまでやってくる。

さて、どこにしようかと考えていたら、花丸ちゃんが横で目を輝かせていた。

「み、未来ずらく」

どうやら、変わった未来観をお持ちらしい。

「花丸ちゃん!ハルさんがなんでもおごつてくれるつて!」

「え、それはデザートだけ…」

「ほんとずら!わーい!都会のご飯ずらー」

「いや、あの」

2人は先へ行ってしまった。

昔は、何をしてても一步引いて引つ込み思案だったルビイちゃん。

ただの人見知りなのか、最近はわりとお姉ちゃんに似てきている気がする。

結構強引なところとか。

財布の中身を確認。

結局、さつき買う予定だった本は買わずじまいだった。

その分のお金たちがそこにおり…。

・サイ○リヤあたりで、済ませてもらえませんかね…。

本買うお金は、ルビイちゃんと花丸ちゃんのお腹に消えましたとき。

大金持ちと布屋さん

「お金がね、ないんですよ」

「いや、そんなこと言われても」

今日のお客さんは、アメリカ被れ…ではなく、正式にアメリカの血を半分もつ女の子。
小原鞠莉。通称マリーちゃん。

「ここ、そんなにマナーに困ってるの?」

「いや、最低限やっていくだけのお金はあるんだよ。君のともそうだけど、固定客も結構いるしね」

「じゃあなんで」

「思ったより、彼女たちが食べたから…かなあ」

「? なんの話しよ」

先日の、ルビィちゃんと花丸ちゃんとの食事。

結局、全額おごったわけだが。

花丸ちゃんが、予想以上に食べた。

それはもう、こちらが驚くほどに。

うちはなんとか黒字でやっていけているものの、間違っても余裕があるわけではない。

何かあったときのために、貯金も結構しておく必要があるし。

なので、自分の趣味に使えるお金は、かなーり少ないのだ。

「久しぶりに会えたというのに、それがファーストトークなの？」

少し残念そうな顔をされてしまう。

「ああ、それは申し訳ない。そうだね、せつかく久しぶりの会話なんだ。向こうでの話しても・聞かせてほしいね」

「ザッツライト！ そうじゃないとー」

うって変わって、いい笑顔になるマリーちゃん。

彼女は、現在はアメリカの学校に留学している。

普段は、当然そちらで生活をしているのだが、この町を随分気に入っているらしく、結構な頻度でこちらに顔を出しているのだ。

その手段はなんと自家用ヘリコプター。

さすがに、あのヘリでアメリカと日本を往復しているわけではないと思うが…。

彼女の家は、全国にホテルチェーンを展開する大富豪。

近くにある淡島ホテルもその一角だ。

そのホテルの布団やクッションなどの発注を、うちが引き受けていることから、彼女とは交流がある。

その気になれば、自社でも有名どころでも、どこからでも調達はできるのだろうか、うちの祖母と縁があつたらしく、わざわざこのちっこい店で買つてくれているのだ。

いずれにせよ、彼女が俺なんかとは格が違うお嬢様であることは確かだ。

アメリカでの生活、学校、友達などたくさん話しをしてくれるマリーちゃん。

「アメリカの人って、みんな相当食べる印象だけど、実際そうなのかい？」

「みんながみんなそうではないわ。もちろん、食べる人はとんでもなくらい食べるけど。こーんな大きいピッツアを一人で食べちゃうんだから」

そう言つて手で円を描くマリーちゃん。

え、それさすがに拡張表現だよな？

そのサイズ、俺の1日分より多いよ？

「ジョークでしょって顔してるわね。残念ながら事実よ」

ふふんと鼻を鳴らす。

なんてこつた。

俺とは常識が違う食事をしてるらしい。

「逆に、ハルは食べなさすぎなのよ。もつと食べないと、いざつて時にパワーが出ないわ

よっ。」

「布屋さんにいざっていう時はこないから。規則正しく食べてればそれで十分だから」

「じゃあ、昨日の夜は何食べたの？」

「カップラーメン」

「どこが規則正しいのよ！」

ちやんと三食食べているんだから、食べないよりは規則正しいじゃないか。

「マナー、そんなにないの？」

「なぜカップ麺からその発想に至ったのか。場合によってはたくさんの人を敵に回す

よ」

「だって、カップ麺でしょみん…」

「ストツプだよ。金に余裕のある人でも、カップ麺食べる人はいくらでもいるんだから」

「んく…でもやっぱ、体にはよくないわよ？」

「まあ…それだけにはならないようにしているよ」

俺だって、常にカップ麺を晩御飯にはしていない。

というか、もともと昨日は本にお金使う予定だったのだ。

カップ麺ではなくとも、そうそうお金のかかったご飯は用意しなかっただろう。

ちなみに、自炊しなかった理由は単純に時間がなかったから。

昨日、テレビ見てたら寝落ちしてしまって、気づいたら夜の10時を過ぎてしまったのだ。

何か思いついたように、マリーちゃんの表情が変わる。

どうかしたのだろうか。

「そうだわ！今日はうちで一緒にディナーにしましょう！」

「うちって…マリーちゃんのこと？」

「ザッツライ！ホテルの食事だし、味は保証できるわ！」

マリーちゃんが言っているのは、おそらく淡島ホテルだろう。

この辺でも指折りの高級ホテルで、観光客が減りがちなこの街でも、未だに業績を残し続ける宿泊施設だ。

「さっきも言ったように、俺お金ないよ？」

「私と食べれば、お金はとらないわ」

「それはありがたいけど…仮にも20歳の男が、女子高生にすぎるってのは…」

「ああそういうえば、今日、卒業旅行の女子高生たちが、集団で予約をとってるんだったわ」

「たまには歳下の厚意に甘えるとしようか」

思わず口をついてしまった。

ほとんど条件反射だったよ。

「オツケー、決まりね！じゃあ7時頃来てね！それじゃ！」

そう言って、店を出て行くマリーちゃん。

てつきり、一緒に行くもんだと思っていたのだが。

「あれ？帰るのかーい？」

「準備があるのよー！」

そういって、急ぎ足で行ってしまった。

はて。

あの子に何かすることもあるのだろうか。

※

7時10分前。

俺は淡島ホテルの前に来ていた。

歳下、それも女子高生に食事で釣られる20歳というのも、それはそれは滑稽な絵面なのだろう。

しかしながら世の中には、どうしようもない格差があるのだ。

あの子は大金持ち。

俺は貧乏人。

ノブレス・オブリージユ。

富むものは貧しきものに施しを。

「それもまた、世のきまり」

「何をぶつぶつ言ってるの？」

気づいたらマリリーちゃんが後ろにいた。

「入って。もう準備はできているから」

そう言つて、食事の場に案内される。

こうしてマリリーちゃんにお呼ばれされるのは初めてではないので、何度か通つたことがある通路だが、相変わらず高そうな雰囲気でも落ち着かない。

「そういえば、件の女子高生たちは？」

「ここに1人いるじゃない」

「チェンジで」

「なんでよ！」

マリリーちゃんが美人なのは確かだが、俺が見たいのはそういうものじゃないのだ。

そんなことを考えていたら、顔面にパンチが飛んできた。しかもグー。

「な、なにをするんだい」

「なんだか、ルードなこと考えてたみたいだから。それよりはいい、着いたわよくわからない装飾が施された部屋に入る。」

マリリーちゃん曰く、家族が使うための食事場なんだそうだと、席、10席くらいあるけど。

「いただきます」

机に並べられた食事たちは、どれも美味しそうだと。

一品だけでも、俺の食事の1日分を裕に超える値段なんだろうなあ。と、そこで気づく。

違和感のある一品が、机にあることに。

なんか奇妙な色の…スープ？

具材も浮いているが…お世辞にも食欲をそそる見た目とは言えない。マリリーちゃんの方を見ると、妙にそわそわしている気がする。

あ…なるほど。

「最初は、スープをいただくよ」

俺は一言そう言ってその禍々しいスープを口にします。

多分、学校の友達にでも振る舞うのだろう。

その練習のために、俺にこれを出したと…。

わざわざ呼んでくれた上に、気合い入れて作ってくれたのだ。

男の見せ所だろう。

などと考えながら口にしたのだが。

「あれ？結構美味しい」

「リアリー!？」

「うん、見た目はちよいアレだけど。味は美味しいね」

「そ、そつか。ふふ、よかった」

マリーちゃんはとても嬉しそうだ。

「見た目に関しては直した方がいいとは思うけど…味は十分、友達に食べさせても大丈夫だと思うよ」

俺がそう言うのと、マリーちゃんはキョトンとした顔になる。

「あれ？友達に食べさせる前に、俺に食べさせて味見をさせたんじゃないのかい？」

「…はあ。ここまで鈍感だと、さすがにアングリーにもなれないわね」

※

「そういえば、留学はいつまでの予定なんだい？」

食事をとりながら、疑問に思っていたことを聞く。

彼女の志望進学先は、海外の大学だったはずだ。

やっぱりそのまま卒業まで向こうにいるんだらうか。

と思つた矢先だった。

「来年の春には帰ってくるわ」

「……………はい？」

今度は俺が、キョトンとする番だった。

墮天使と木屋さん

誰にだって、自分が普通の人間とは違って、すごい存在なんだと思いたい時がある。それはなにも若い時だけでなく、どれだけ歳を取っても、その感情は存在する。

しかし大人は、生きていく上で大事なものは、むしろ調和の能力なのだということに気づくのだ。

それはとても大事なことであり、横に倣えて生きていくことができるのは、本当に素晴らしい能力である。

逆に。

それができない人間を、人々は『おかしい人』というのだ。

※

「やっぱり私、おかしいのかしら…」

「逆に、おかしくないと思ってるのかい？」

ため息まじりにそんなことを言っているのは、津島善子ちゃん。

通称、善子ちゃん…ではなく、ヨハネちゃん。
洗礼者ヨハネ。

旧約時代最大の預言者と言われるほどの預言者だ。

イエスの到来を告げる役割を担っていたとされる、旧約時代の重要な人物である。

そのイエスの弟子にもヨハネはいる。

使徒ヨハネと呼ばれるその人は、こちらは新約聖書に登場する聖人だ。

そして、俺の目の前にいる彼女は、墮天使ヨハネなんだそうだ。

「今日はどうしんだい。まさか、そんな話をするために来たのかい？」

「そんなって！私にはとても深刻なの！」

机を叩いて主張するヨハネちゃん。

その机は商品ではないけど、俺の大事な作業台なんだ。大事にしておくれよ。

「私、来年から高校生なの…」

「ああ、そういえばそうだったね。どこの高校に行くんだい？」

「浦の星女学院よ。すぐそこの」

「おや、そうだったのかい。今後もうちをご最真に頼むよ」

「つて、そういう話じゃなくて」

「ああ、君が深刻な中二病だって話だったね」

「そうだけどー！」

話を聞くと、どうやら中二病を直したいらしい。

中学の時、その尋常じやない中二つぷりを発揮して見事に学校で浮いてしまったことはすでに聞いている。

学校にも少し行けない期間があつたほどだ。

俺と交流があつたのは、この中二病が関わってくる。

いかにもな中二服というのは、店で買うと結構な価格になったりする。

小物も多く、中二病なのに、中二にはなかなか手が出にくいものも多い。

そこで彼女がした判断は、自分で作ることだった。

素材を買い、そこから自分で裁縫する。

手先が器用だった彼女ならではの発想だろう。

実際、作られた作品のクオリティは高く、思わず舌を巻くほどだった。

だが。

高校生からは中二病を立派に直し、リア充になりたいんだそうだ。

「だったら直せばいいじゃないか。幸い、学校には中学の知り合いは少ないんだらう？
だったらあとは、君の振る舞い次第だと思うがね」

「それは…：そうなんだけど…：体にそういう振る舞い方が染み付いちやつて、ほとんど反

射的に出ちやうのよ」

なんだそれは。

こちらとしては普通に面白いな。

よし。

「ああ！あつちから大天使ミカエルが！」

「なんですって!?…ふふ、ついに天から逃げた私を追って来たのね…」

「これは重症ですわ」

「何させるのよ！」

「いや、どれくらい染み付いているのか気になっちゃって」

ほとんど条件反射のレベルのようだ。

これを直そうと思ったら、相当手間がかかるだろう。

「もうそれ、直さないほうがいいんじゃないの？」

「はあ？」

「今の善子ちゃん、面白いし。高校の人たちは、案外そういうのも受け入れてくれるん

じゃないの？」

「適当言わないでよ…。中学の時はそれで浮いちゃったんだから…」

落ち込んだ表情になる善子ちゃん。

「どうやら、結構深刻に悩んでいるらしい。」

「じゃあやつぱり、取り繕うしかないよ。人と付き合っていくには、自分を殺さなきゃいけないことも多くあるんだ。その練習ってことで受け入れるしかないんじゃないかな」

「そう…よね。自分でも、それはわかるのよ。けど…」

「不安かい？」

驚いたようにこちらを見る。

自分を隠しても、条件反射のように出てきてしまう本当の自分。

それが不安なんだろうというのは、想像に難くない。

「不安になる気持ちはわかるよ。でも、どうせあと一月以内には学校に行かなきゃならないんだ。だったら、その時までには正直に生きていたいんじゃないかい？」

「自分を隠す練習をしろとは言わないの？」

「それで何とかなるならするといひさ」

「…ふふ。どうにもならなさそう」

苦笑いでそう言う。

「なあに、心配はいらないよ。それで学校に行けなくなったら、またここに来るといい。勉強は教えてあげるし、話しくらいなら付き合うからね」

さすがに墮天使ごっこに付き合うのは無理だが。

実際、高校の子たちがどう受け取るかは本当にわからない。

面白い子だと受け入れられるか。

はたまた、変わり者だと煙たがられるか。

どちらも、そこに善意があっても悪意はない。

変わり者に近づかないのは、人の本来の姿だから。

でもそれは

「変わり者同士、仲良くしよう」

この子を面白いと思ってる自分も、大して変わらんだろう。

善子ちゃんも、キョトンとしている。

かと思えば、さっきまでとは違い、はつきりと笑顔になった。

「ふふ。ほんと、変わった人ね」

「よく言われるよ」

「私、リア充になれるように頑張るわ」

「うん、頑張っておくれ」

※

夕日が空を赤く染める。

善子ちゃんが帰ってから2時間ほど経過した。

今日も今日とて、お客は少ない。

そういうえば、千歌ちゃんと曜ちゃんはいつ帰ってくるんだろうか。

そのへん、聞き忘れていた。

暇だし、メールでも送るか。

そう思っていたとき。

作業台にケータイがある。

商売中に自分のケータイは出さないので、これは俺のではない。

「…善子ちゃん、忘れてったのかな？」

真つ黒なケータイに、髑髏の紋章。

ほぼ確定だが、一応、自分の電話から善子ちゃんのケータイに着信を入れる。

目の前のケータイから、聞いたこともない呪文みたいなものが詠唱された。

「…これ、着信音なのか…」

…善子ちゃん。

君はリア充になれても、中二病卒業は無理そうだよ。

体育少女と布屋さん

「はい、これで修繕完了」

「ありがとー。おぉー綺麗な縫い目。さすがハル！」

「一応、裁縫もサービスの一つだからね、うちは」

デザインとか持つてきてもらえれば、衣類やクッションなどの小物の裁縫も受けるのが、うち、淡屋のお仕事だ。

実際は、一から作るよりは、今回のように修繕を求められることの方が多いのだが。今、俺と話しており、修繕依頼を持つてきてくれたのは松浦果南ちゃん。

呼び方は果南ちゃんだ。

浦の星女学院に通い、千歌ちゃん、曜ちゃんと長い付き合いで、彼女たちの一つ上、今年から高校3年生の女の子である。

彼女は小さい頃から随分アクティブに動きまわっており、結構な頻度で服に穴を開けていた。

その度に、彼女の母が服を持つてきていたのだが、いつしか自分で持つてくるようになっていった。

いい加減に服を大事にしろと怒られたのがきつかけらしい。
そら怒るわ。

「果南ちゃん、今回は何したんだい。女の子がシャツに穴開けるって、何してたか想像できなさんだけど」

「いや、ランニングしてたら木に引つ掛けちゃって。あはは」

「あー…なるほど」

確かに、この町には木が多い。

歩道が狭いところもあるので、木に服を引つ掛けるといふのは、あながちおかしいことではないだろう。

ただし

「…穴、背中に開くもんなのか…?」

どんなランニングをすれば、背中に木を引つ掛けるのか。

バク転しながら走ったのか?

怖くて聞く勇氣はないが。

「そういえば学校、まだ休んでいるのかい?」

「…うん。まだお父さん、よくならないから」

「そうかいそうかい。いや、申し訳ないね、こういう話題を出してしまって」

「ああ、いや、大丈夫だよ。ハルが心配してそういう話してくれるの、よくわかってるから」

「俺だけじゃない。千歌ちゃんや曜ちゃん、マリーちゃんも心配はしてる」

「うん。そうやって考えてくれてること、感謝してるよ。お父さんの調子、だいぶ良くなってきているからね。早ければ5月中くらいには復帰できるよ」

お父さんの体調が悪くなり、仕事に支障が出始めたのが去年の冬頃。

自営業の彼女の家は、お父さんが働けないのはかなりの痛手だった。

そこで、一番仕事をよく見てきた果南ちゃんが、急遽代役を務めることになったのだ。

その間、学校は休学となっている。

2年から3年、それも高校。

人生をかけたとても大事な時期だ。

文句の一つも言いたくなるだろうに。

それでも、誰も責めることなく、彼女は本当によくやっていると思う。

「つて、なんでそんな深刻な顔してるの？ 復帰できるって言ってるのに」

笑顔で言う。

「ああ、ごめんよ。ついね」

「そんなに考えなくてもいいよ。多分、ハルが思ってるほど、重いことじゃないし。みんな

なはちゃんと待っててくれる。：離れたところにいる友達まで、ちゃんと気にしてくれる」

最後の友達というのは、マリーちゃんのことだろう。

2人はかつて、同じグループで活動した、最大の親友だ。

「それに」

「それに？」

そこまで言つて、すぐ近くまで来る果南ちゃん。

人差指をこちらに向けて、彼女は続ける。

「勉強は、ハルが教えてくれるんでしょ？」

また、笑顔になる。

その笑顔は見ているこっちまで笑顔にさせるような、魅力的な表情だ。

「もちろんだよ。俺にできることなら、なんでも教えるさ」

「ふふ。頼もしいね」

「と言つても、正直君に教えられることはだいぶ減ってきているよ。君、飲み込みいいね」

「そんなことないよ。まだまだ、教えてもらいたいことたくさんあるもん」

「そうかねえ」

基礎教科に関しては学校のカリキュラムはある程度教えたし、彼女本人は非常にストイックだ。

必要とあれば自分で進めていく能力もある。

「わからないところ、あるのかい？」

「うーん…：そうだねえ…」

「保健体育、とか」

そう言つて、肩をはだけさせる果南ちゃん。

ここまでは走つて来たと言つていた。

そのためか、うっすらかいた汗が、彼女の綺麗な肌をより妖艶に見せている。

つて、ちよつとちよつと。

「ダメだよ果南ちゃん。運動して暑いのはわかるけど、まだ冷えやすい季節なんだ。服

はちゃんと着ないと」

女の子として、色気を出すのも大事だ。

けどここには俺しかいないんだし、そういつたことより体調を優先してもらわない

と。

「…はあ。そういうところ、ほんとに変わらないね」

「これでも歳上なんだから、君の体調に気を使うのは当然だろう」

「いや、そうじゃなくてね…まあいいや。直接言えない私にも責任はあるし」
「何の話だい？」

「なんでもないよー」

何事もなかったように服を着なおす果南ちゃん。

なんだったんだらうか。

「…チカたちも、苦労してるんだらうなあ」

「ああ、そうだね。東京は、俺たち田舎民にはかなり疲れる場所だらうからね」

「ああ、うん。もうそれでいいよ」

そういう意味ではなかったらしい。

会話が噛み合っていない気がするが、おそらく気のせいだ。

「チカたち、いつ帰ってくるって？」

「昨日のメールだと、明日には帰ってくるそうだよ。随分テンションが上がってたみたいだね、文章がめちやくちやだったよ」

まあ、文体がおかしいのはそんなに珍しくもないのだが。

だが今回は、理由がはっきりわかっていた。

「スクールアイドル、見てきたんだそうだ」

「…：そうなんだ…」

「…心配しなくても大丈夫さ。千歌ちゃんたちに、君たちのことは言わないよ」
「本当？」

「俺、嘘はあまり言わないつもりだけど、そういう信用はあるのかな？」

「…ん。そうだね。ごめんね、気使わせて」

「たまには歳上に甘えなさいよ。いつも頑張りすぎるんだから」

「…言われなくても、いつも甘えてるよ…」

ん？

最後、声が小さくて聞き取れなかった。

「よっし！気持ち切り替えて勉強しよ！教えてくれるんだよね？」

「え、今？まだ仕事中なんだけど」

「えー。さつき、なんでもするって言ってなかった？」

「ちよつ、そこでそうくるのかい？」

「あはは。冗談だよ。奥の部屋、借りるね」

そう言つて、奥の和室に行つてしまった。

こういう時、あつさり引いてくれるのが彼女の良いところだ。

良いところだが…

「もう少し、わがまま言つても良いんだけどなあ」

時刻は昼の3時半。

予約があつた分の商売は、すでに済ませた。
入り口のとこの看板を返し、休憩中にする。

「さて…。暇だし、勉強でもしようかな」

転入生と布屋さん

千歌ちゃんの家の方に、お引越してやってきた家族がいるらしい。

そんな情報を聞いたのは、千歌ちゃんたちが東京へ行く1週間ほど前だ。

「ここに引越してくるって珍しいよねー」

「そうだねー。どれくらい歳の人なんだろう」

そんな会話を、千歌ちゃんと曜ちゃんがしていたのを思い出したのは、ついさっきのこと。

今日、あの2人が東京から帰ってくる。

お土産を今日中に持ってきてくれるらしいが、おそらく夕方だろう。

そう考え、今の内にダイヤちゃんに依頼された物品を届けに行くことにした。

荷台に荷物に乗せ、校門のあたりに来たところで、別のお客さんを見つける。

あたりをキョロキョロしているが、何か用事でもあるのだろうか。

しかし気になるのが…

「制服、ここじゃないようだけど…どこの高校だったかな」

「わっぴゃあー！」

ものすごい驚いて飛び退かれてしまった。

ちよつとシヨックだ。

「ああ、えと…驚かせてしまったかな。申し訳ない」

「え、あ、いや、すみません、こちらこそ」

そこにいたのは、ワインレッドの髪をした女の子。

・これまた、随分かわいらしい女の子だこと。

「改めて、こんにちは。自分、この町で布屋をやってますアワイと申します。あそこの店ですね。そちらは？浦の星の生徒ではないようですが…」

そう言つて、うちを指差す。

こうしてみると、お世辞にも現代的な建物ではないなど改めて思う。

とりあえずここは敬語だ。

どう見ても目の前の女の子は俺より年下だが、それは敬語を使わない理由にはならんのだ。

「布屋さん…？あ、すみません。私、桜内といいます。えつと…来月からここに通うんです」

「なるほど。その下見つてことですか？」

「はい。でも、入つていいかもわからなくて」

それでキョロキョロしていたのか。

「だったら、一緒に来ますか？ちようと自分も、ここに用があつて来たので」

その提案に、一旦キョトンとした表情を見せた桜内さんだが、すぐにほころんだように笑みを見せてくれた。

「ありがとうございます。ご一緒させてもらいます」

人生初のナンパ成功。

これは嬉しい。

目的地が学校でなければ、確実に逮捕事案だが。

台車をガラガラしながら、生徒会室に向かう。

とりあえずは、校内探索の許可を会長にもらうことにしたのだ。

俺の目的もダイヤちゃんなので、ちようどいい。

「布屋さんって言ってましたけど…アワイさん、何歳なんですか？」

「20歳です。今年21になりますかね。そちらは…3年生ですか？」

「いえ。今年で2年生で…私、そんなにおばさんに見えますか？」

「いやいや、対応が随分落ち着いてますから。大人っぽく見えたんですよ」

冗談を言ってくれる程度には、心を開いてくれたらしい。

そんな、なんてことはない雑談を交わすこと数分。

はつきりとわかったのは、この子がとてもいい子だということだった。

※

「…と、こんなもんですかね」

「…ええ、頼んでいたものはこれで全部ですわ。ご苦労様です。それと…桜内さん、でしたっけ？」

「は、はい」

「この方に、何か破廉恥なことはされませんでしたか？」

生徒会室にて。

持ってきた備品の報告をダイヤちゃんに済ませるのと同時に、桜内さんをダイヤちゃんに紹介した。

流れとして、正しい大人の行いのはずなんだが。

「ダイヤちゃんは俺をなんだと思ってるんだい？」

「毎朝女子高生を見て楽しむ男、ですわね」

「否定はできないけど、手は絶対出さないよ」

「…的を絞って、出していただきたい手もあるんですけどね…」

「商売の話かい？最近は確かに、いろいろ手を出している気はするが」

「はあ…。そうではないのですけど」

「あはは…えと、私は何もされませんでしたよ」

苦笑い気味の桜内さん。

「こういうときにドン引きしなくても、性格の良さが伺えるというものだ。

「それじゃ、俺はそろそろ仕事に戻るよ」

「あら？仕事中でしたの？」

「うちは月曜定休で、それ以外は毎日開店中だよ」

「あなたを見ている限りは…いえ、なんでもありませんわ」

「今日はなかなか辛口だね、ダイヤちゃん」

まあ言い合うつもりはない。

というか、言い合って勝てる土俵じゃない。

非常に悲しいことだが、ダイヤちゃんは間違ったことは言っていないのだ。

「それじゃあ。桜内さんも、機会があれば」

「あ、今日はありがとうございました」

「いいいえ。貴重なべっぴんさんとの会話ですから。店番より有意義な時間でした」

「べっぴんって…／＼／」

「はあ…またそうやって、女性を口説くのですね」

などというダイヤちゃんの言葉はひとまず聞かなかったことにして、桜内さんに話し続ける。

「それと」

「は、はい！」

いや、そんな畏まらなくても。

「敬語、使わなくていいですよ。というか、敬語だと落ち着かなくて」

「え、でも歳上の方にそれは」

「歳上なんて意識しなくていいですわ。ハルさんの周りは、みんなそんな感じですし」

「そうそう。それに、敬語だと妙に距離感を取られてみたいで落ち着かないんです」

「じゃ、じゃあその…ハル、さん？そっちも、敬語はなしにしましょう」

「おっと。そう言ってくれるならそうしよう。桜内ちゃん？」

「梨子です」

「じゃあ梨子ちゃんだね」

「ふふ。名前、親以外に呼ばれたのは久しぶり」

「そうかいそうかい。お暇なら、いつでもうちに来るといいよ。君くらいの歳の子、うちに結構来るんだ」

「ええ。私、手芸も結構好きだから。いろいろ買いに行くわ」

「それじゃ、今後とも、ぜひご鼻屑に。もちろんダイヤちゃんも」

「ええ、また」

手を振ってくれた2人を背に、帰り道を歩く。

実に幸せな時間だった。

これで、明日からも頑張れるというものだ。

※

店に戻ってきた。

とりあえず看板を営業中に返そうとしたとき、後ろから声が聞こえてきた。

「ああー！ やつと帰ってきたー！」

「ハルくんどこ行ってたのー！」

「いや、どこ行って…」

思いの外、彼女たちは早く帰ってきたらしい。

しかも、どういうわけかご立腹の様子で。

「商品のお届けに行ってたんだよ。立派なお仕事」

「だったら先に言つてよー!」

「いやなんでやねん」

身を乗り出してくる千歌ちゃんに軽いチョップを入れる。

外回る度に報告してたらキリがないわ。

「それで、どうしたんだい。東京行つてたんだらう?」

「あ、そうそう」

要件を思い出したのか、千歌ちゃんと曜ちゃんが何か入った袋を手渡してくる。

「はいこれお土産!」

「私からもだよ!」

「わざわざありがとう。でも、明日でもよかつたんじゃないのかい?」

「そ、それは…その…」

なにやら言い淀んでいる。

千歌ちゃんがはつきりとものを言わないのはちよつと珍しい。

「千歌ちゃん、昨日のハルくんのメールで、すごい喜んでたんだよー。それで、明日は真っ先にお土産持つてこうつて…」

「わー!わー!よ、曜ちゃんこそ昨日、『私の方にはメール来ないのか…』つて言つてため息ついてたのに!」

「ちよ、ち、千歌ちゃん！それは内緒って約束だったのにー！」

なんかよくわからないが、とりあえずは昨日のメールを受けてお土産を真っ先に持ってきたらしい。

つまりはあれか、催促していると思われたのか。

「2人とも、店先ではあんまり騒がないでくれ。お礼と言ってはなんだけど、お茶くらは出すよ？寄ってくかい？」

「いいの？わーい、それ、私も食べたかったんだー」

「ヨーソーローー！」

「あれ？お土産を開けるつもりはなかったんだけど…」

まあ、彼女たちが買ってきたものだ。

よしとしよう。

春休みが、間もなく終わる。

各々の思いを胸に。

新たな1年が、始まる。

アニメ本編（1期）

入学式と布屋さん

春。

桜が宙を舞い、風景をピンクに染める今日。

ついにこの日がやってきた。

浦の星女学院の入学式である。

新品で、まだ着慣れない制服に袖を通し、新たな学校生活の場に足を踏み込む。

在校生たちからしてみれば、また日常が戻って来る。

そんな日である。

そんな景色を、俺は店から見ている。

「素晴らしい景色だ」

見渡す限りの女子高生たち。

これこそまさに天国といって差し支えないだろう。

これを見るためだけに、開店時間を朝の7時半としている。

準備と同時に、朝この天より与えられし景観を眺める。

そうすることで、1日に必要な活動エネルギーをチャージするのだ。

「お兄さんこんにちはー」

「こんにちはー」

「はい、こんにちは」

中には、うちの前を通る時に挨拶してくれる子もいる。

毎朝こうやって店の前を掃いていたら、顔を覚えてくれた子もいたようで、こうして挨拶してくれる子が出てきたのだ。

「いやー、役得役得」

などとやっていたら

「スクールアイドル！やりませんかー！」

「今流行りの、スクールアイドルです！あなたも！あなたも！スクールアイドルやりませんかー！」

という声が聞こえてきた。

学校の外にもいる俺にも聞こえるほどの大声で叫んでいるとは。

※

東京から帰ってきたその日。

千歌ちゃんが唐突に放った一言。

「私、スクールアイドルをやるうと思えます！」

「…それはまた、随分ぶつとんだね」

メールでは暑苦しく…ではなく、熱くスクールアイドルについて語っていたが、自身アイドル活動をしようと言うほどだったのか。

「まあ、やってみたらいいんじゃないかい？」

「あれ？それだけ？」

「別に反対する理由もないだろう。やりたいならやるといい。せつかくの高校生活なんだから」

「千歌ちゃんには合わない、とか言うと思ってたよー。ハルくん、スクールアイドル好きだったっけ？」

「俺は女子高生が大好きなんだよ。当然、スクールアイドルもその一環で大好きさ」

「うわあ。見境ないなあ」

「そんなことより！」

机をバンバン叩く千歌ちゃん。

それ商品だつて言ってるじゃないか。

何回同じ注意をさせるんだい。

「スクールアイドルって、何から始めればいいのかない?」

「何ってそりゃ、まずは部活申請をしてだね…」

と、そこで思い出す。

2年前、同じことを言っていた女の子たち。

『これしかありませんわ!』

『一緒にやろう!学校を救おう!』

彼女たちが初めにやったこと。

それは

「:メンバー、集めることじゃないかい?」

「メンバー?」

「そうそう。人数集めないと、申請もできないだろう。何人が集めて、それから生徒会に持っていかないと」

「なるほど…:そうだね!」

そう言うと、握った拳を空に掲げた。

「μ、sだつて最初は9人じゃなかったみたいだし、1人ずつ集めていかないと！」
「あはは。頑張つてね、千歌ちゃん！」

※

そう言っていたけど、どうやら曜ちゃんも協力しているようだ。

声がここまで聞こえてくる。

部員集めだけ協力しているのか、もしくは正式に部員としての登録もしているのか。
どちらにせよ、千歌ちゃんと何かに熱中したいと言っていたし、喜んで協力している
のだろう。

今の傾向は、とてもいいことだ。

これまで、どんなことにもものめり込めなかつた千歌ちゃん。
自分には才能がない、やりきれない。

そう感じて途中で投げてしまっていた。

それが、今回は頑張ろうとしている。

やれるだけのことは、最後までやってみるといい。

「…で、ボロボロだったと」

時刻は昼12時半。

今日は入学式だけらしく、学校は午前で終わりだったらしい。

戦果報告ということでウチに来ている、千歌ちゃんと曜ちゃん。

随分落ち込んだ様子で、俺が作ったお蕎麦を食べている。

まあ表情を見れば、何があつたかは伝わってくるが。

「メンバーが集まらなかつたのもシヨックだったけど、それ以上に生徒会長だよ！『ス

クールアイドルなど私は認めませんわ！』だつてさ」

「あー…なるほど…」

「生徒会長、アイドルとか嫌いみたいみたい。前も、やりたいって言つてたクラスの子

が、会長にばつさり切られてたもん」

「えー！曜ちゃん、知つてたのー!？」

「ごめん！やる気の千歌ちゃん見てたら言い出せなくて！」

「そんなあ〜」

ダイヤちゃんがそう言うのは、ある程度は予想できた。

彼女なりに、千歌ちゃんたちが傷つかないようにしているんだろうが。

不器用。それに尽きる。

「千歌ちゃん、諦める?」

「諦めない!」

気を引き締め直す千歌ちゃん。

それを見て、曜ちゃんも嬉しそうだ。

この様子なら、まだ大丈夫だろう。

「お蕎麦、おかわり!」

「私も!」

「2杯目からは有料だよ」

「ツケで!」

「どこで覚えてきたんだい、そんな言葉…」

結局あの後、さらにもう一杯のお蕎麦を食べ、2人は帰って行った。

果南ちゃんのところに持って行くものがあるんだそうだ。

こちらとしても、今日は珍しく予約が立て込んでいるのだ。

気合を入れて仕事に取り組むとしようじゃないか。

※

一通り仕事を終えたのは、5時頃だった。

思いの外早く終えたものの、なんとなく疲れただけで外に出ることにした。

こんな程度で疲れていたなら、一般企業ではやっていけないぞ。

就職して行った友人によく言われることだ。

この町に支えられているからこそ、自分がやっていけているのは、よく自覚している。

まあ、時間がある分収入は絶望的にならないのだが。

若干、センチメンタルな気分になりながら海岸を歩いていると、見知った背中を見つけた。

というかあれは…

「千歌ちゃん？おーい…」

とそこまで言った瞬間、弾かれたように千歌ちゃんが走り出した。

どこかに向かっているのかと、少し先を見ると、誰か立っている。

というよりは、そちらも走っているようだ。

その先は…

「…海？え、まじで？」

そんな言葉が、思わず口をつく。

なんとか千歌ちゃんが追いついて、止めに入ったが

『ザッパーン!!』

2人一緒に海に落ちた。

っていやいや、そんな場合じゃない。

「おーい！大丈夫かー？」

そう呼びかけて5秒ほどしてから

「ぷはあっ」

2人が顔を出した。

何が何だかわからないが、ひとまずやるべきことをやろう。

「タオル、取ってくるから、早く上がりなさいよー」

「あ、ありがとうー！ハルくん」

「え、あれ？ハルさん？」

水をかきながら、俺に気づく2人。

2人が岸に戻って来る間に、タオルと適当なライター、着火剤を持ってきた。

あまり褒められたことではないが、適当に火を使って暖をとることにする。

「くちゅん！」

可愛らしいくしゃみだこと。

「大丈夫かい？」

「沖繩じゃないんだから、風邪ひくよ。海に入りたければ、ダイビング施設行かないと」

「ええ…そうね」

「どうやら、何か考えているようだ。」

「まあ、何も考えずに海に飛び込むわけではないか。」

「飛び込んだ理由、聞いてもいいかい？」

「…海の音、聞きたくて」

「海の音？」

「そこで、梨子ちゃんは黙ってしまった。」

「そつから先は、あまり立ち入らない方が良い話題ってことなのか。」

「ここは、下手な詮索はやめておこう。」

「と、俺が思った矢先だった。」

「…まあ、君が話したくないというのであれば…」

「海中の音ってこと？」

「こういう時、千歌ちゃんの凶太さは羨ましい。」

「これには梨子ちゃんも苦笑いだ。」

「そして、少しだけ、事情を話してくれた。」

梨子ちゃんは、ピアノを弾いていて、作曲もできるらしい。

その作曲の中で、海をテーマとしたいんだそうだ。

そのために、『海の音』を聞きたいとのことだ。

会話の中で、梨子ちゃんが東京から来たことに千歌ちゃんは食いついていた。

『海の音』というのが、俺は気になるのだが。

「誰かスクールアイドルは知ってる？」

「スクールアイドル……？」

「うん！東京には有名なグループもいっぱいいるでしょ？」

「……なんの話？」

「……え？」

ほう。

スクールアイドルをご存知ないようだ。

音楽に関わりながらスクールアイドルを知らないということは、よほどピアノ一筋で

やってきたんだろう。

千歌ちゃんが、スクールアイドルのことをいろいろな語り始めた。

自分なりの言葉で、必死にその良さを伝えている。

そのまま話しの流れで、直接動画を見せることにしたらしい。

ポケットからケータイを取り出していた。

「千歌ちゃん、制服ごと飛び込んだけど、ケータイは無事だったのかい？」

「え？つて、あああー！」

画面は真つ暗なまま動かなかった。

そりゃそうだろうさ。

「どうしよう!？」

「ケータイシヨップで、とりあえず代用品を借りよう。8時くらいまではやってるだろ

うしね」

「怒られるかな!？」

「あー…まあ、それは諦めてくれ」

「そんなあ！」

「それより、本題。これでしよ、千歌ちゃんが言つてた動画」

梨子ちゃんの感想は、思ったより普通だというもの。

でも、それは千歌ちゃんの思つていた通りの感想だったようだ。

千歌ちゃんは話す。

自分が、とても普通の人間だったことを。

そうやって、これまで生きてきたことを。

μ s だって、普通の高校生の集まりだけど。

それはとても輝いていたのだと。

「私も、輝きたいって、そう思ったの！」

千歌ちゃんは、はつきりそう言った。

その後は、千歌ちゃんも梨子ちゃんも自己紹介の時間だった。

学年が同じだということ、そして。

音乃木坂学院高校に通っていたということ。

そういう話を、した。

・服が乾いてきて、そろそろ帰ろうとした時、唐突に千歌ちゃんが言った。

「そういえば、ハルくんと梨子ちゃん、知り合いなの？」

「ちよつと前に会ったんだよ。仕事の途中でね」

「そうなの？ 梨子ちゃん、ハルくんに何もきれなかった？」

とてつもないデジャブを感じる。

打ち合わせでもしてるのかい？

「ふふ。大丈夫。とても親切にしてくれたわ」

「逆に何すると思ったんだい」

「セクハラ」

「これは、俺が訴えてもいいパターンではないかな…」

※

次の日、部員が2人になったと大喜びで千歌ちゃんが店にやってきた。

2人目の部員は曜ちゃんだそうだ。

その報告の後、会長にまたも門前払いをくらったこと、作曲係がいなことを突かれたこと、作曲の能力を持っているであろう梨子ちゃんに、スクールアイドルを拒否されたことを話してくれた。

こちらの報告は、ずいぶん沈んだ様子だったが。

「梨子ちゃんの気持ちも、正直理解はできるよ」

「む…絶対諦めないんだからー!」

千歌ちゃんの声が木霊する。

彼女のスクールアイドルライフは、前途多難なスタートのようだ。

海の音と布屋さん

ピアノを弾く手が、震える。

こんなことが、最近はだいたい増えてきた。

楽しくて、嬉しくて、始めたはずのピアノなのに。

ここでこうして弾くそれは、そんな感情とは程遠いものを、私に供給する。

お客さんが見ているのに。

指が、思うように動かない。

詩を、思うように追えない。

思うように、弾けない。

そして。

※

「いめんなさい」

今日、もう幾度となく聞いたセリフだ。

どれだけスクールアイドルのいいところをアピールしても、梨子ちゃんはそう返してくるのだった。

でも、絶対作曲してもらうんだからー！

「…で、やつぱり大敗だったと」

「あー…あはは」

「はー…前途多難すぎるよお…」

「梨子ちゃんの件に関しては、まあコメントを控えるけどね。μ s の件に関しては、千歌ちゃんにも問題があるよ」

「だってー。あれがμじゃなくてμだなんて思わなかったんだもん」

あれで、ダイヤちゃんはμ s の大ファンなのだ。

それも、崇拜のレベルで。

そりや、名前の読み方を間違えれば怒られるだろうさ。

ダイヤちゃんはそれを隠してるつもりらしいが。

「あ、そういえばね！ここに来る前に、花丸ちゃんって子と、ルビィちゃんって子と会ってね、すっごい可愛いの！きつとあの子達もスクールアイドルに向いてると思うんだけどなあ」

「ああ、あの2人かい」

「え？ハルくん知ってるの？」

「これは曜ちゃんの質問。」

「ちよつとご縁があつてね」

「なにそれ！聞いてないよー！じゃあじゃあ、ハルくんからも2人を説得してほしいな
！」

「残念ながら、時間外労働は受け付けてないんだ」

「じゃあ今度みかん持つてくるから！」

「…そもそも、会ったことがあるというだけで、そんなに話す仲ではないんだけど」

「そこをなんとか！」

「まあ、考えておくれよ」

ルビィちゃんとはともかく、花丸ちゃんとはこの前初めて会ったのだ。

とても説得なんてできる間柄ではない。

「あ、あと梨子ちゃんの説得もお願ひ！」

「君は俺の仕事場をどこだと思ってるんだい」

花丸ちゃんと同じだ。

会つて間もないというのに、何をどう説得しろというのか。

その後、バスが出るということで2人は帰って行った。

学校がある日に彼女たちが来るのは、だいたいこのパターンだ。

目的があつてうちに来るといふよりは、バスがくるまでの暇つぶし。

今日も、10分ほど居座つてから帰つたのだつた。

翌日、夕方に千歌ちゃんの家へ向かつた。

千歌ちゃんのお家は大きな旅館なのだが、そこで使っている布団に穴が空いたので、修繕依頼を受けていたのだ。

きつちりと品物を渡し、滞りなく仕事を終える。

帰る前、千歌に会つていきますか？とお姉さんに言われたが、いつでも会えるのでと断つた。

帰ろうとしたとき、海に人影が見えた。

体育座りをしているようだがあれは…梨子ちゃんかな。

「夕焼けに染まる海、それを眺め、ため息をつく美少女。いい絵だね」

「は、ハルさん!?!ど、どうしてここに!?!」

「随分悩ましげな背中が見えたんでね。知らない人ならいざ知らず、君みたいな美少女を放つとくことはできないよ」

「あ、あんまり美少女とか言わないで／＼／＼」

思ったことを言っているだけなのだがね。

嘘をついたり、オブラートに包んだりというのは、得意ではないのだ。

「『海の音』、聞けたかい？」

「…いえ」

「そうかい。ピアノ、弾くんだったかな」

「ええ。小さいときから、ずっとやってきたの。…でも、最近はスランプで。それで、環

境変えてみれば…『海の音』が聞ければ、変えられるかなって」

「なるほど。そういうことだったのか」

「なんだそれって、笑われても仕方ないことだけどね」

「笑わないさ。というかね」

何も笑うことなんてない。

失敗続きでもやめずに、自分なりに活路を見出そうとしているのだ。

俺よりずっと立派じゃないか。

梨子ちゃんの方を向く。

「変わるさ。梨子ちゃんなら、絶対」

会ってそんなに経ってはいないけど。

なんとなく、そう思ったのだ。

「…………ふふっ」

一瞬キョトンとして、笑顔を浮かべる梨子ちゃん。

はて？

「何かおかしなことを言ったかな？」

「いえ。昨日、千歌ちゃんに全く同じことを言われたなーって」

「なんてこつたい」

まさかの二番煎じ。

しかも千歌ちゃんの後追いとは。

確かに千歌ちゃんなら言いそうとか思っではいたが。

なんとも複雑な気分だ。

「これはあれだね。俺は今、とてつもなく恥ずかしい状態だね」

「ふふ。そんなことないわ」

気恥ずかしくて、思わずそっぽを向く。

直接は見れないが、梨子ちゃんは相変わらず笑っているようだ。

「2人とも、本当に変な人だけど…」

そのまま、顔が見える位置まで移動して

「ありがとう」

そう、口にした。

次の日。

相変わらず長くはないバス待ちの時間に、うちへやってきた千歌ちゃんと曜ちゃん。

「ハルくん、昨日うち来たんだって？」

「ああ、仕事関係でね」

「どうして声かけてくれなかったの!？」

「…それに関しては、こちら反省しているよ」

千歌ちゃんから梨子ちゃんのことを聞いておけば、あんな恥ずかしい二番煎じを演じることはなかったのだ。

ちくしょう。

「そういえば昨日、梨子ちゃんに会ってね」

「なんか言ってた!？」

「日曜日、『海の音』を聞きに行く約束をしたそうじゃないか？」

「…なんでちよつとやさぐれてんの？」

「ほつといってくれ」

どうやら表情に出てしまっていたらしい。

これはよくないな。

「ハルくんも、日曜日くる?」

「残念だけど、日曜は休みじゃないからね。君達で楽しんでくるといい」

「そっかー。残念」

「朗報を期待しておくよ」

※

日曜。

偶然にも、果南ちゃんのうちから仕事が来てたので、俺もダイビングショップへ向かった。

偶然、あくまで偶然さ。

お父さんがあまり体を動かかせない状態だから、店を手伝いに来てくれという依頼だった。

毎週というわけではなく、偶然人が多い時などにこうして呼び出されるのだ。

店で商売するより、こちらの方が収入がいいというのは、なんとも言えない気分にな

るが。

「うち、本格的に何でも屋になった方がいいのだろうか」

「何をいきなり言ってるの？ほら、仕事仕事。ボンベ、運んどいてね」

「りよーかい」

お客さんが減ってきて、大分手が空き始めた頃、千歌ちゃんたちがやってきた。

潜る、とは直接言ってなかったが、ここに来るのはだいたい予想通りだ。

「あれー？ハルくんがいるー」

「ほんとだ！なんでなんで？」

「えと……こんにちは、ハルさん」

「今日はこちらでバイトですお客様方」

手慣れたお客、手慣れた店員、互いをよく知る間柄。

そんなわけで、手続きはかなり早く終える。

梨子ちゃんは、果南ちゃんから手ほどきを受けていた。

3人を乗せたボートがスポットに向かう。

大分余裕が出てきたこともあり、俺と果南ちゃんも同乗する。

と、そこまでは流れでそうなったのだが。

「確かに君達が少し心配だったのは否定しないさ。だけどね」

視界が、揺れる。

足元が、ふらつく。

胃の中身が、本来とは逆方向に…

「な、なぜ、船に弱い俺まで乗ることに…うぶ」

「いい加減それ直さないよ。まだ乗って3分くらいだよ？」

「ハルくん、相変わらず船ダメなんだねー」

「この町で船に弱いつて、結構大変だよねー」

「だ、大丈夫なの？」

君達は鬼かい？

まともに心配してくれるのが梨子ちゃんじゃない。

「ごめん、やっぱ俺降りるよ。というかここで降ろして」

「この季節でこの距離を、スーツ着ないで泳ぐのはほとんど自殺行為だよ」

「いや、でもやばい。海の音、もうさつきから俺には害悪でしかないもん」

「はい。じゃあこの辺で潜るよー。梨子ちゃん、心の準備はいいかな？」

「え、あ、私はいいいけど…ハ、ハルさんは」

「あーいいのいいの。いつものことだから」

鬼3人と天使1人。

とはいえ、彼女達の言うことももつともだ。

こうなることはある程度予測した上で来たのだから。

梨子ちゃんは気にしなくていいのだよ。

「大丈夫だよ梨子ちゃん。間違っても、海にはリバーズしないから」

そういつて、手に持ったビニール袋を見せる。

『海の音』聞いておいで。そうだな。せつかくだから明るいところに行くといいよ」

記憶の限りでは、1回は船に上がってきた彼女達だったが、その後、何かを思いついたようでもう一度潜りなおしていた。

結局、彼女達が海に入っていたのは何分くらいだろうか。

終始酔いと戦っていた俺は、まともなアドバイスなどできなかつた。

それでも、上がってきた彼女達の表情は、明るかつた。

結果はどうだったとか、聞く必要はなさそうだ。

彼女達の楽しそうな表情を見て、俺は安心して。

ビニール袋にリバーズ。

3人はこつちを見て何か言っている。

いや。

恥ずかしいからあんまり見ないで。

「明るいところ、行つてきたよ。ハルさん」

梨子ちゃんが何か言っていたようだが、さすがに聞きとる余裕は、自分にはなかつた。

作詞作曲と布屋さん

俺が盛大にリバーシし、梨子ちゃんが無事に『海の音』を聞いた翌日。

梨子ちゃんは作曲係を正式に受けてくれたらしい。

とはいえ、スクールアイドルをやるといっわけではないようだ。

そんな報告を、千歌ちゃん、曜ちゃん、梨子ちゃんて持つてきてくれた。

「作曲、受けてくれたんだね」

「ええ。今ならピアノ、少しは弾けそうだから」

「そうかい。それはよかった」

「でもね、まだ問題があるの」

「問題？メンバーかい？」

「それも問題だけどね…それ以上に」

「私、作曲するときにはあらかじめある詞をもとにするの…だから」

「なるほど。歌詞…かい」

歌の次は詞。

そりゃそうだ。

「まあそこは、3人で協力してやるしかないんじゃないかい？」

「ええまあ。それで、3人で集まれる場所に行こうってなったんだけど」

「それならここがいいでしょ？もしくは私のうち」

「その心は？」

「ご飯出てくるし、最悪バス逃しても送ってくれるし！」

「お帰りはあちらだよ」

「ひどい！」

うちで作詞をするのは構わない。

頼りにされるといふのは悪くないのだし。

でも千歌ちゃんのは、頼りにするといふよりは当てにされている気がする。

「ハルくん…私からも、ダメ？」

「えと…ごめんなさい、私からも」

梨子ちゃんはずいぶん言わすが、曜ちゃんもわりと常識人だ。

長年千歌ちゃんに付き合っているだけある。

だからこそ、常識人2人のお願いと云うのは断りづらい。

「はあ…。やるなら奥の和室でね。あと、あまり騒ぎすぎないように」

「やったー！」

そのまま2人は奥へ行ってしまった。

しまった。

何時までやるのかくらいは聞くべきだったな。

「ふふ。なんだかんだ言って、優しいのね」

「俺はもともと優しいんだよ。あ、何時までいるかは決めてるかい？」

「いえ、特には。できるまでにはと思うわ」

「…ちなみに、作詞って普通はどれくらい時間がかかるんだい？」

「人によってだいぶ違うけど…3時間くらいは見積もった方がいいと思う」

「はあ…わかった。頑張ってくれ」

晩ご飯、今日は4人分作るかな。

材料あつたっけか。

※

ハルさんに許可をもらったので、3人で詞を考える。

チカちゃんはどうかやら、恋をテーマにした詞を作りたいらしい。

しかし、大分難航していた。

「やっぱり、恋の歌は難しいんじゃない？」

「いや！*♪* sのスノハレみたいな曲作りたいもん！」

「そうは言っても…チカちゃん、恋愛経験は？」

「うえっ!?!いや…あるにはあるけど…」

ああそうだった。

「ハルさんでしょ？」

「えええ！ち、ちがつ、いや、ちがくないけど！」

「見れば誰だつてわかるわよ。…例外を除いて」

「あー…ハルくん鈍感だもんねー。…私のアピールも、全く気づいてくれないし」

「曜ちゃんも好きなの？」

「え？あー…あはは」

曜ちゃんもだったとは初耳だった。

とはいえ、思い返せば確かにその通りと思えることは多々あった気がする。

「梨子ちゃんは!?!」

「そうだねー。1人だけ内緒はするいよねー」

「え？私？」

私は…

これまでずっとピアノ一筋でやってきたから。
恋愛なんて一度も…。

『制服、ここじゃないようだけど…どこの高校だったかな』

『君みたいな美少女を放っておけないよ』

『変わるさ、梨子ちゃんなら』

「…ハル、さん」

つい、口をついた言葉だった。

何も考えずに、言ってしまった。

しまった、と思ったけど。

こういうとき、恋する乙女は鋭いもので。

「ハルくん!？」

「な、なな、なんですと…!」

「ま、まさかの、ライブル出現…!」

「い、いや、違うの!そういう意味じゃなくて!ほら私、ずっとピアノ一筋だったから、
そもそもまともな交流ある男の人ってハルさんくらいだなーって!」

「私たちと同じじゃん!」

「だからそうじゃなくてー!」

「おい、ちよつとやかましいよ。もう少しポリユームを下げてだね」

「「うわああああー!!!」」

「…たつた今ポリユームを下げろと言っただろう…」

そう、多分違うはず。

まだあつて日も浅いのに。

恋なんて、してるはずないよ。

その後、ハルさんが作ってくれたカレーライスをいただき、私たちは作詞の続きに取り掛かっていた。

テーマが恋と知ったハルさんは、とても驚いていた。

『千歌ちゃんたちが恋…そうか、千歌ちゃんたちには縁がないものだと思っただけ、誰か好きな人でもいるのかい?』

『ああ…うん、一応ね』

『私も…一応』

『そうかそうか。今度、どういう男か教えて欲しいね』

『鈍感でセクハラ発言する最低野郎』

『…とんでもないのを好きになったね、君たち』

そんな会話をしていた。

さすがに、チカちゃんとか曜ちゃんがかわいそうだった。

『で、でもそれじゃあその男をテーマに詞を書くのは難しそうだね。うーん…そうだな、千歌ちゃん』

『…ん？なに？』

『なんでそんな冷たい視線をしているのかはこの際後回しにしよう。スクールアイドルに対して、ドキドキする気持ちとかはないかい？』

『スクールアイドルに対して？』

『そう。それで詞は書けないかい？』

それを聞いて、チカちゃんはハツとした表情をしていた。

『書ける！書けるよ！』

そして、今に至るのだ。

チカちゃんは人が変わったように、すごい勢いで詞を書いている。

海で語ってくれた、チカちゃんが思うスクールアイドル。

本当に、心の底からスクールアイドルが好きんだろう。

その気持ちを、溢れんばかりに紙に書き連ねている。

「千歌ちゃん、すごい勢いだね」

「ええ。これなら大丈夫そう」

曜ちゃんとも、そんな会話をする。

ふとコップを見たら、3人とも飲み物が空になっていることに気づく。

「私、お茶取ってくるね」

「あ、手伝おつか？」

「んん。大丈夫。チカちゃん、手伝ってあげて」

ハルさんから教えてもらったように、冷蔵庫からお茶を取り出す。

一応お客さんにも出せるようにと、良い葉を使っているらしい。

「おや、休憩かな？」

お茶をコップに注いでいると、ハルさんがやってきた。

手には、空のコップが握られている。

「まだお茶はあるかい？」

「ええ、まだ足りると思うわ」

お茶を飲みながら、少しだけハルさんと話をする。

「作詞、順調かい？」

「ええ。チカちゃん、すごいわ。スクールアイドル、本当に好きなのね」

「ああ。そうだね。梨子ちゃん、パソコンかスマホは持っているかい？」

「え？そりや、持ってるけど」

「そうかい。じゃあこれ、よかつたら家ででも聞いてみると良い」

そういつてハルさんが渡してくれたのは、一枚の・メモ。

書かれているのは、歌詞？

メモ帳の一番上には、『ユメノトビラ』と書かれていた。

「これは？」

「千歌ちゃんか、俺に最初に持ってきてくれた^ん、sの歌だよ。そうやって、わざわざ歌詞を書いてくれたんだ」

「歌詞を？どうして？」

「さあね。それは俺にも全くわからないけど。あの子なりに、スクールアイドルの魅力を伝えようとしたのかもじゃない」

そういつて微笑むハルさんの表情は、とても優しかった。

『ユメノトビラ』

夢の、扉。

「基本的には、俺はこういうことはあまり言わないんだけどね。それでも、ここは言わせてもらうよ」

表情を引き締め、ハルさんは言った。

「スクールアイドル、やってみないかい？今の君には、きっとプラスになるはずだよ」

※

「ハルくんハルくん!!」

『バッタアーン!』

ものすごい音とともに入ってきた千歌ちゃん。

お客の来店を知らせるベルが、もうこれでもかかってくらい暴れる。

扉が壊れたらどうするんだい。

「どうしたんだい、騒々しいね？」

「梨子ちゃんが！梨子ちゃんがー！」

「うん、梨子ちゃんが？」

「スクールアイドル、やってくれるって！」

お！

ほうほう。

「そうかいそうかい。それはよかつたじゃないか」

「うん！」

俺が言った時には、保留にしていた梨子ちゃん。

きつと、昨日の夜何かあったんだろう。

多分、心を動かしたのは…

「千歌ちゃん、膝にあざができてるじゃないか。一体何をしたんだい」

「え？うわー！」

「鉄棒の上に正座でもしてたのかい？」

「違うよ！手すりの上に乗ってただけ！」

「いや、ほんとに何してるのさ」

心を動かしたのは。

きつと。

スクールアイドルだ。

ライブ準備と布屋さん

「それでね、急にぐわーってヘリコプターがやってきてー」

「今日も今日とて、身振り手振りで話しをしてくれる千歌ちゃん。」

「なんでも、新しい歌の練習中にヘリコプターが襲来したんだそう。」

「このへんで、そんな無茶苦茶ができるのは、おおよそあの家庭くらいだろう。」

「で、降りてきたのは小原家の人かい？」

「あれ？見てたの？」

「他にそんな悪趣味なことやる人はいないし、できる人もいない」

「などと言っていたら。」

「悪趣味とは、またバッドな言い方してくれるわねー。ハル」

「砂浜にヘリコプターなんて、砂が飛び散って危ないんだ。悪趣味と言わずになんというのか」

「減らず口は相変わらずねー」

「やれやれといったような反応を示すのは、マリーちゃん。」

「いつから聞いていたのやら。」

それとも地獄耳的な感覚で駆けつけてきたのか。

「あれ？理事長とハルくん、お知り合いなの？」

「ノー！マリーだよ！」

「あ、あはは。おーけーおーけー」

「ちなみに質問にはイエスだよ。いつからの付き合いだったかは憶えてないけどね。それより、わざわざどうしたんだい？こんなところに来て」

「オー！これ、どう！久しぶりに着た浦の星のユニフォーム！」

「1、2年前に散々見たよ」

「あの時とは、色気が全然違うでしょ！」

そういつてその場で回って見せてくれるマリーちゃん。

いやいや。

「スカート、そんなに短いんだから、回ったら中見えるよ」

「ノー！エッチ！変態！」

「ハルくんのばか！」

「…理不尽じゃないかい」

スカートを抑えて怒るマリーちゃん。

そして一緒に怒る千歌ちゃん。

「それで、本当にそれだけのために来たのかい？」

「明日、ダイヤのところに挨拶に行くの。一緒に来て？」

「…はい？ いや、理由が全くわからないんだが」

「大丈夫！ちゃんと関係者として話は通してあげるから！」

「人の話はちゃんと聞きなさいよ。あと、明日は仕事があつてだね」

「月曜は定休でしょ？」

「ばれていたか。」

ちなみに現状、台車に段ボール積んで、店のエプロンつけて学校に行けば、特にお咎めなしで学校へは入れるのだ。

なぜ、ダイヤちゃんのところへ一緒に行かないといけないのか、それが知りたい。

「…だつて」

「だつて？」

「ダイヤ、多分怒るだろうし」

「…ああ」

なるほど。

そりゃあ怒るでしょ。

マリーちゃんにとって留学は、間違いなくプラスになる。

そう判断して、かつてダイヤちゃんと果南ちゃんは彼女を海外へ送り出したのだから。

それが、まさか1年程度で帰ってくるなど、想定外だろう。

「とうるか、ダイヤちゃんにも話していなかったのかい？」

「ハル以外には話せないわ。みんな怒るもん」

「俺が怒ることは考えなかったのかい？」

「それは怖くないから大丈夫」

「真面目な顔で言うことじゃないな。千歌ちゃんも、『あーなるほど』みたいな顔しないで」

俺にそう言われ、さっきまで黙っていた千歌ちゃんが話しに入ってくる。

「そもそも私、全然話見えてこないんだけど、ここにいていいの？」

「ノープロブレム。どうせ詳しいことは明日話すからねー」

「…わかった、わかったよ。明日、頼まれてた依頼もやらなきゃいけないしね。同行しよう」

「ザツツライト！そうじゃないと！」

「頼まれてた依頼？」

「発電機の動作確認だよ」

「へー。そんなのもやるんだ」

「専門的なことをやるわけじゃない。ネットにあがってる確認手順をたどるだけだよ」

「それじゃ、明日の授業後にダイヤを理事長室に呼ぶから。そのときに来てちょうだい」

「あいよ。りよーかい」

「それじゃ、ハワイユー」

言いたいことだけ言って帰るマリーちゃん。

明日、大丈夫だろうか。

「なんか、大変そうだね」

「千歌ちゃんから見てもそう見えるかい？」

「うん。でもなんというか、ハルくん、ちよつとだけ嬉しそう」

「嬉しそう…かい」

「なんとなくね」

たしかに。

あの3人がまた揃うのを、俺はちよつと期待しているのかもしれない。

千歌ちゃん、君はやっぱり、そういうのは本当に鋭いね。

※

「わからないに決まっています!」

理事長室にダイヤちゃんの声が響く。

案の定である。

今、理事長室にいるのは千歌ちゃん、曜ちゃん、梨子ちゃんの2年生一同。

ダイヤちゃんとマリーちゃんとの3年組。

そして俺。

「ん〜。ダイヤ久しぶり〜。随分大きくなって〜」

「触らないでいただけます?」

「…胸は相変わらずねえ」

「やかましい!…ですわ」

昨日、怒られるのを嫌がっていたのはなんだったのか。

どう見てもマリーちゃんの方からいじり倒してるじゃないか。

「まったく…1年のときにいなくなっただと思えば、こんなときにどういうつもりですの」

「シャイニー!」

マリーちゃんはカーテンを開けて、太陽の光をめいっぱい受けていた。

これにはダイヤちゃんもブチ切れ寸前。

マリーちゃんのリボンを掴んで引き寄せる。

「人の話を聞かないのは相変わらずのようね」

「ごもつともだ」

これ、俺は確実にいらなだろう。

「とにかく。高校3年生が理事長なんて、冗談にもほどがありますわ」

「そっちは本当よ」

「は？」

そういつて、任命状と書かれた紙を見せてくれるマリーちゃん。

その旨は、たしかにマリーちゃんが理事長として認可されたことを示している。

さすがは小原家。

金に物を言わせて、生徒を理事長にしてしまうとは。

というか、理事長つてことはもしかして収入があるのか？

あるとしたら、俺は確実にこの子に収入で負けていることになるのでは？

…なんとも言えない気分だ。

マリーちゃんが言うには。

浦の星女学院に新しくできたスクールアイドル、これをダイヤちゃんが妨害しないよ

うにするため、理事長になったんだそうだ。

1年以上の間が空いてもなお、2人、いや3人の間には、スクールアイドルを介したわだかまりが存在しているらしい。

喧嘩をしているわけではないというのに。

マリーちゃんは、3人を連れて体育館へ向かった。

どうやら、彼女たちの最初のライブはそこでやるらしい。

その間に、俺は依頼されていた発電機の話をダイヤちゃんとすることにした。

そのために、学校の備品室に向かう。

「まったく。鞠莉さんはどういうつもりなのかしら」

「さあねえ。彼女なりに、いろいろ思うところはあるんだろうけど」

「それにしたって、まさか留学を中断してまで……これでは果南さんが……」

彼女たち3人の複雑な事情は知らない。

聞いたら教えてくれるかもしれないけど、それはまだ、やるべきことではない。

聞くのは、彼女たちが前に進むときにしようと。

そう、決めたのは、彼女たちの表情を見たからだ。

みんな、互いを大事にしようとしているのがわかったから。

誰かに話を聞けば、誰かの味方になってしまう気がしたから。

それは、誰かを敵に回してしまうことと同じ。

そんなの、公平ではない。

「着きましたわ。えーと…これですわ。これの整備、お願いしますわ」

「はいよ。メーカーも型番もはつきり残ってる。これなら手順を探すのは簡単そうだ
あとは実際に整備できるかだが。」

「これは運次第だな。」

「それと」

「ん？」

「体育館の照明設備、あれも見ていただけますか？」

「あ…オツケー。追加注文、承ったよ」

敵なんて、俺の周りには誰一人いないのだ。

※

マリーちゃんから、千歌ちゃんたちにはグループ存続の条件が提示されたらしい。
その条件は

「体育館を、お客さんでいっぱい…だって」

「ほう。それはまた、結構な難易度で」

あそこをいっぱいになると、100人じゃ全く足りないだろう。

つまりは、浦の星の生徒全員集める程度では足りないということ。

味方と言いつつ、なかなかえげつない条件なこと。

「それでね、早速作戦会議をしようと思って」

「町内放送で呼びかけたら？多分できると思うよ？」

「あとはチラシ配りとかかなー」

というのを、うちの店でやってくれる件のスクールアイドルたち。

「…はあ。もうごちやごちや言わないから、せめて奥の部屋でやっておくれ」

次の日から、彼女たちの宣伝活動が本格的に始まった。

昨日の間に作ったチラシをあちこちで配り、

町内放送であえてグダグダに話すという高度テクニクで人々の関心を引きつけた。

そうして、あつという間にその日はやって来た。

彼女たちスクールアイドルは、

いや。

A q o u r s は。

ライブの日を迎えたのだ。

ライブ当日と布屋さん

浦の星女学院スクールアイドル、Aqours。

まさか、この名をもう一度目にし、耳にするととは思わなかった。

ずっと歳下の子供だと思っていた千歌ちゃんたちが、まさかこうして、再びこの名を表に出してくれるとは、夢にも思わなんだ。

俺には、人を呼ぶことはできないし、ましてパフォーマンズに関わってやることはできないけど、大人にやれることを、全力でやるとしようじゃないか。

「おーい、ハルくん。注文したやつ、できてるかい？」

「こんにちは、鈴木さん。できてますよ。はい、一応確認してください」

「ありがとうね。お、こんなポスターここにあったかい？」

「ああ、これ。今度の土曜日に、そこでライブがあるんです。よければ、見に行つてやてください。」

「ライブ？ハルくんがやるのかい？」

「いやまさか。自分のよく知る子がやるんです。内容は保証しますよ」

「そうかいそうかい。ハルくんがそこまで言うなら、行つてみようかねえ」

「そこにチラシもあるんで、よければ持ってってください」
チラシを10枚ほど持ってってくれた。

これで、ちよつとでもお客さんが呼べればいいのだが。

※

いよいよ当日。

ダイヤちゃんに頼まれた発電機の整備は、きっちり終わらせてある。

大きな故障もなく、ほとんど掃除しただけで終わったが、ありがたい額の報酬をいた
だいた。

体育館のステージ、照明機材の整備も問題ない。

天気は、雨。

天気予報では雷の予報も出ていた。

「もうちつとだけ、頑張ってくれよ」

空に向かって、思わずつぶやいた。

今自分は、沼津駅のあたりにいる。

珍しく、沼津駅あたりの宿泊施設から注文が入ったのだ。

この辺りの宿泊施設は、まだまだ元気なところも多い。

できるかぎり仲良くしておこうと、配達もこちらが受け追うことにしたのだ。

ポスターに書いてある開場時刻まで、あと5分くらい。

開演はそのさらに30分後。

開場直後にお客さんがやってくるということもないだろう。

車で行けば、そこそこいい時間になるだろう。

店の看板は、すでに『本日休業』となっている

と、その時気付いた。

自分のスマホに、SNSのメッセージ受信ランプが点灯している。

なんとなく、嫌な予感がして。

普段はこんな時間には開かないSNSアプリを起動すると、そこには千歌ちゃんからのメッセージが記されていた。

受信時刻は、今から1時間ほど前。

そのメッセージは

『今日の開演、13時半だよ！絶対来てね！私がんばるから！』

…開演、13時半？

今の時刻は、13時25分。

開演、5分前。

ポスターには、14時開演とはつきり示されている。

時間が30分前倒しになった？

いや、そんな話は聞いてない。

…まさか

「開演時間と開場時間、間違えてる？」

いやいやいやいや。

いくらなんでも、2人もついでるんだ。

そんな間違い、するわけがない。

でも、もし2人も気づいてないんだとしたら。

いや、逆だ。

気づいたとしたら、千歌ちゃんから訂正のメッセージくらいあるはずだ。

慌てて、車を走らせる。

Bluetooth機能を使い、運転に支障がないように電話をかける。

その電話相手は

『はい、もしもしっ！』

「あ、ダイヤちゃんかい？今どこにいるかな？」

『今？…一応、学校ですわ。彼女たちが、問題を起こさないように…って、なんか慌てているようですが、何かあったんですの？』

「千歌ちゃんたち、何してる？」

『何って、そりゃあ準備を…ちよつと早いですわね』

「ダイヤちゃん、ちよつと聞いてくれ。実は…」

ダイヤちゃんに、俺の考えを話す。

千歌ちゃんが、時間を勘違いしている可能性があること。

周りの2人も、それに気づいていない可能性があること。

できれば、それを2人に伝えて欲しいこと。

『なるほど…。事情はわかりましたわ』

「じゃあ…」

『ですが』

そこでダイヤちゃんは、俺の話を遮って進める。

『時間管理も、本来はアイドルの立派な仕事ですわ。それを誤ったなら、そのツケも自分で回収していただかないといけません』

「なっ、それはっ」

『ハルさん』

ダイヤちゃんが、声を出す。

そうして、続ける。

『彼女たちは、ここで何かしないと、スクールアイドルとしてやっていけなくなるのですか？あなたの信じた子たちは、お客がいないと心が折れるような子たちですよ？』

「…それは…」

スクールアイドルのことを、それはそれは楽しそうに語っていた。

自分も、ああなりたいと話していた。

今日まで、全力で努力もしてきた。

そして

あの子は今

一人じゃない。

「…わかった。こつちも今から向かうよ。あの子達を、頼む」

『…ええ。急いでいらしてください。そうじゃないと』

『ハルさんが入る場所、無くなってしまうわ』

そう言って、ダイヤちゃんが電話を切った。

最後の、どういう意味なんだ？

そんな疑問の答えは、会場に着いてすぐわかった。
考えるまでも、心配するまでもなかった。

学校は

お客さんでいっぱいだった。

車を停める場所なんてなくて

仕方ないから店の方に車を置いて

体育館まで走った。

到着したのは

本来の開演1分前。

立つ場所が、本当になくて

やっと探しだしたその場所には、ダイヤちゃんが立っていた。

「時間、ギリギリですわ」

「はは…。そうだね。どうやら俺は、とんでもないバカ野郎だったみたいだよ」

「それは、いつも言ってるではありませんか。バカでセクハラ野郎で鈍感で、そして」

「そして?」

「いつまで経っても、過保護ですわ」

「そう、みたいだね」

ステージの上を、踊り

ステージの上で、歌う。

なんだ。

「みんな、輝いてるじゃないか」

「当たり前ですわ。みんな、いつまでも子供ではないのです。彼女達も、私たちも。いい

加減、見方を考え直した方がいいのではなくて？」

「ははは。違うない」

いつまでも子供だったのは、俺の方だったらしい。

これは、彼女たちに対する態度を、改めないとな。

その後。

ダイヤちゃん、終わった直後の千歌ちゃんたちに何か言っていた。

俺はその場を動けなかったから、何を言っているかは聞こえなかったけど。

あの子達の輝きは、まだ目に残っていた。

※

「で、今後は君たちを大人扱いするから、食事代をとることにしたよ」

「ええええー!!」

ライブの後、ボランティアで片付けをやっているとときの会話である。

「なんでなんで！よくわかんないー！」

「横暴だー！ハルくんの横暴だー！」

「ええいやかましい。自分は子供じゃないって、日頃言ってたじゃないか。大人扱いなんだ、喜びなさいよ」

「ごはんくれないなら私子供でいいからー！」

「私もー！」

「子供か君たちは」

「うんー！」

「いや、そうじゃなくてね」

どうやら何を言ってもダメなようだ。

と、梨子ちゃんが妙に大人しいことに気づく。

「あれ？梨子ちゃん、どうしたんだい？」

「あ、いえ。さすがに私はそこまでできないので」

苦笑い気味の梨子ちゃん。

この子は割と大人だな。

「…梨子ちゃん、何か食べたいものあるかい？」

「え？」

「がんばったからね。何か食べに行こうじゃないか。もちろん、俺が出すよ」

「で、でも」

「いいんだ。こういうときは甘えないと、もったいないよ」

梨子ちゃんの頭に手を乗せる。

「…あ／＼／＼」

「おっと。すまない。昔の癖で」

千歌ちゃんたちには昔、よくやっていた。

そういえば最近あまりしなくなっていたが、つい出てしまった。

まずいことをした。

そう思ったのだが。

「だ、大丈夫。その、嫌ではないから」

「嫌ならちゃんと言ってくれていいよ。ほんと、申し訳なかった」

「だ、大丈夫だから。びっくりしただけ。その、むしろもう少し…」

ん？

声が小さくて聞き取れなかったのだが。

そう言おうとしたら

「ずるいずるい！私もー！」

横から千歌ちゃんが割り込んできた。

「癖でやつちやうなら、私でもいいでしょー」

「ハルくん、私でもいいよ！」

「いや、だからその癖を直そうとしてるんじゃないか」

「直さなくていいの！」

「君たちが俺のことを、セクハラ野郎というから直すことにしたというのに……」

その呟きは聞こえていないのか。

ものすごい形相で迫ってくる2人。

頭を撫でられる顔じゃないだろう。

まったく。

「大人になったって、思ったんだけどなあ」

浦の星女学院スクールアイドル、A q u o r s。

その初ライブは
大成功で、幕を閉じた。

2年生と布屋さん（上）

大成功に終わったライブ翌日。

俺たちは、有名な遊園地に来ていた。

沼津から車で3時間ほど。

朝の6時に出発し、ついさつきようやく到着したのだった。

「おおおー！とうちやーくー！」

「ジェットコースター！見てるだけでワクワクするね！」

「2人とも、駐車場ではしゃぐと危ないわよ」

「というか、門すらくぐつてないこの段階で、なぜあもテンションを上げられるのか」

「えつと…ごめんなさい。本当は仕事だったのに…」

「ん？いやいや、それは構わないよ。もともと、今日は店を開けるつもりはなかったしね」

※

「…遊園地に行きたい？」

『ええ、そうみたいなの。車でみんなを送つてくときにね、話してたの』

ライブが終わつて、みんながそれぞれの家に着いてからしばらくして、千歌ちゃんのお姉さんである志満さんから連絡があつた。

「自分はいいですけど、明日ですよね？」

『うん。ご褒美つてことで。お金はちゃんと個人で出させるから、送迎やつてくれないかな？』

「あの子たち、体力持つんですか？」

『それは大丈夫。ハル君が誘えば、すぐ回復するだろうから』

「そんなもんですかね？」

『そんなもんだよ。あ、千歌ちゃんに変わるね。千歌ちゃん、ハル君から電話だよ』

『バタバタバタバタ、ドタドタドタ、ガツチャーン』

『いったあーい！』

「…あの？大丈夫かい…？」

『あ、もしもしハルくん？』

「ああ、こんばんは」

『どうしたの〜？』

「あー、うん。眠そうだね」

『そりゃあ、さすがに疲れたよ』

案の定だ。

これで誘って大丈夫なのか？

「いや、今日、千歌ちゃんよく頑張ってたからさ」

『うん…』

「明日、遊園地でもどうかなーって…」

『行く!!』

耳が、耳がキーンって、キーンってなった。

まさかこんな音量が来るとは…!!

「明日だよ？大丈夫なのかい？」

『うん！全然平気だよ!』

「…そうかい。わかった。明日、早いけど頑張って起きてくれ」

『うん!』

「じゃあ時間だけど…」

※

そんなわけで、3人を連れて遊園地にやってきたのだった。

「お店って、そんな簡単に休めるものなの？」

「どうせお客さんはほとんどいないんだし、大丈夫じゃない？」

「それは大丈夫なのかしら？」

「大丈夫じゃないから。お店の状況も俺の心も」

千歌ちゃん、笑いながら言うんじゃないよ。

わりとデッドラインギリギリなんだから。

そんな会話をしつつ、ゲートのところに並ぶ。

すでにゲート前には、開園をまだかまだかと待っている人で溢れている。

「さすがに休日だと人が多いねー」

「そうだね。だから、入園するまでは勝手な行動は控えるように」

「曜ちゃん梨子ちゃん、写真撮ろうよ、あっちで！」

「ヨーソーロー！」

「あ、ちよつと待って！」

「話を聞けー！」

「これは、なかなか大変そうだ。」

『楽しんでってくださいいねー』

お姉さんにチケットを切ってもらい、ようやく入園できた。

さて、座りやすそうなベンチを…

「やつと入れたー。何から乗るー?」

「やっぱ景気付けにジェットコースターじゃない?」

「後だと並びそうだしね。私もそれでいいと思う」

「決まりだね。どれ乗ろうねー」

最初はジェットコースターか。

それなら。

「俺は外で見てるから、好きなものに乗ってきたらいいよ」

「ええー!ハルくん乗らないの?」

「なんでなんでー!?!」

「もしかして、絶叫系苦手なの?」

「もしかしなくても苦手だよ。船もまったくダメだっただろう。あんな感じになるんだ」

思い出すだけで酔いそうだ。

飛行機や車はいいのだが、船と絶叫系は本当にダメだ。

「そうなんだ。それは大変ね」

「ハルくん、昔からそうだもんねー」

「そっかー…」

3人から明らかに元気がなくなる。

え。

いやいや。

なんで？

まさか俺と乗りたかったのか？

いやいや、死んじゃうって。

でも、明らかにテンションが下がっている3人。

ここで引き下がっていいのか。

頑張った3人を労うためにやってきたのに。

その3人を悲しませることを、俺がやっていいのか。

ここは…！

「ハルさん、大丈夫？」

「あー、うん…うぷっ」

「全然大丈夫じゃなさそうだね…」

「もー。無理するから」

「でも珍しいね。ハルくんが無茶するの」

「俺も、今日はいけると思ってたんだ」

「いや、最初は乗らないって言ってたじゃん。いけるとは思えなかったよ」

千歌ちゃんが苦笑いでそう言う。

結局、限界まで耐え続けた俺は、人が少ないうちに並ぼうという3人について行って、絶叫系を5つほど乗った。

結果、この惨状である。

「すまないね。ここで休憩してるから、みんな楽しんできてくれ。大丈夫、一時間もすれば復活するから」

「うーん…あ、そうだ！2人とも、ちょっとこっちきて」

なんだか、3人で集まって話を始めた。

作戦会議だろうか。

耳には入ってくるが、理解するほど脳が働いていない。

彼女たちの言葉が、耳に入っては素通りしていく。

だめだ、ちよつと意識が…。

「じゃんけん？」

「うん。勝った人が、ここに残ってハルクんの面倒をみるの」

「勝った人？負けた人じゃなくて？」

「その方が、お徳感あつていいでしょ？それに…ハルクんと、2人きりだよ。勝った人の方が、いいと思わない？」

「!!」

（千歌ちゃん、なんとという提案を…。確かにここに残れば、ハルクんと2人きり）

（最近胸にあるこの思い。これがなんなのか確かめるためにも、ハルさんとは2人きりになりたかったのよね）

（そりや、帰ってからその気になれば2人きりにはなれるよ。でも、それはあくまで妹のような状態。今この状態なら、弱ったハルクンを介護できる。頼りにされる側になれるんだよ）

（（負けられない!）（））

「じゃあ、いくよ」

「「さーいしよーはぐー、じゃーんけーん…」」

空が、見える。

さつきまで、絶叫系を乗り回して…

ああそうだ。

酔ってそのまま寝てしまったのか。

あの子達は、ちゃんと楽しめているだろうか。

そう思った時だった。

「あ、目、覚めた？」

「…曜ちゃん？」

「うん。おはよー、ハルくん」

「ああ、おはよう」

「体調はどう？」

「少しマシになってきたよ。…千歌ちゃんたちは？」

「千歌ちゃん達はアトラクション並んでるよ。さすがに3人とも行くわけにはいかないからね。1人はここに残ることにしたんだー」

「そうかい。それはありがたいけど、悪いことをしてしまったね。もう大丈夫だから、遊んでくるといい」

「今更どうするのさ。一人で、なんて嫌だし、並んでるところに割り込むわけにもいかな
いでしょ」

言われてみればそうだ。

相当頭は回ってないらしい。

「確かに、それもそうだね。いや、本当に申し訳ないよ」

「いいのいいの！それよりどう？曜さんの膝枕は？」

言われて気づいた。

自分は今、膝枕をされている。

場所も、ベンチではなくどこかの広場みたいだ。

移動した記憶すらないのだが。

「ああ、最高の気分だよ」

「…本当にそう思ってるの？」

「本当本当。感動で涙すら出そうだよ」

「はあ…。だったらもうちよつと喜んでくれてもいいのに」

「酔いのせいでテンションは上げられないんだ。すまんね」

「いいよ。体調、まだ良くなさそうだし」

そんなことを言いながら、髪を撫でられる。

どうにも恥ずかしい。

が、面倒をかけたのだ。

これくらいは我慢しよう。

「こうしてるとさ」

「ああ」

「…こ、恋人に、見えたりするのかな？／＼／＼」

「んー…見えるんじゃないかい？ 曜ちゃんには悪いけどね」

「ハルくんは、嫌じゃないの？」

「そりゃあ構わないよ」

「え！なんで!？」

「見えたところで事実とは違うんだ。あまり気にしないよ」

「ああ…そういうこと…はあ」

なぜか少し落ち込む曜ちゃん。

おかしいな。

やはり恋人に見られるのは嫌ということなのか。

「どうせまた、間違ったこと考えてるんだろうなー」

「い、いふあいふあい。ふあにするんふあい」

「なーんーでーもー」

ほっぺを摘まれてしまう。

さつきから何なんだい。

「ねえ、ハルくん」

「なんだい？」

「…好きな子、いる？」

「女子高生」

「即答：ねえ、私も、女子高生だよ」

「知ってるさ。だから君も好きだよ」

「嬉しいのにすごく複雑。…ハルくんのバカ」

なんでさ。

「…はあ」

もう何度目かもわからない曜ちゃんのため息。

せつかくの遊園地だというのに、随分ため息が多いものだ。

「あんまりため息をつくと、幸せが逃げてしまうよ」

「誰のせいだと」

「君は笑顔の方が可愛いんだ。笑った方が得だよ」

「…へ？」

「高校入ってから、君はますます可愛くなつたんだ。もつと笑つてた方がいい」

「ちよ、ちよつと待つて」

「笑つてる曜ちゃんは、本当に綺麗なんだから」

「~~~~~つ／＼／／」

あ、真つ赤になつた。

まあ、ため息よりはいいか。

なんて思つた直後。

「ハルくん」

「ん？」

「今、こつち見ないで」

「ああ。じゃあ、目はつむつて」

「潰しとくね」

「…はい？ぶべつ」

瞬間。

チヨツプが入つた。

い、痛い！

め、目が開けられない！

「しばらくそのままにしてて」

「言われんでもそうなるわ！」

俺の目が再度利用可能になるまで、実に10分の時間を要した。
なんだったんだ、本当に。

2年生と布屋さん（下）

曜ちゃんの膝枕を、目潰しされた状態で堪能していると、千歌ちゃんたちが戻ってきた。

「あー！曜ちゃんずるい！」

「へっへーん。勝者の特権です！」

「ああ、おかえり、2人とも迷惑かけてすまなかったね」

「それより大丈夫？これ、よかったら」

そう言つて、水をくれる梨子ちゃん。

ありがたい。

少し喉が渴いてたんだ。

「ああ、ありがとう。いただくよ」

状態を起こして、水を受け取る。

なんとなく受け取っていたが、どうやら両手に持っていたらしい。

理由もなく右手に持っていた方をもらった。

「あ、そっちは…」

「ぐくぐく…ふはあ。ん、ありがと…う？」

梨子ちゃんが真つ赤だ。

どうしたんだろう。

「間接キス…」

「ハルくん、セクハラだー！」

「~~~~~っ／／／」

そういうことか。

2本持ってたのは、片方は自分用ってことだったのか。

悪いことをしてしまった。

「えーと。すまない。悪気はなかったんだ」

「あ、えと、うん。わかってる。大丈夫だから／／／」

「ずるいよハルくん！ほら、私のも飲んでいいよ！」

「い、痛い、痛いから。キャップついたまま押し付けるんじゃない」

ギザギザが当たってるから。

跡つくから。

※

午後は、絶叫系以外に行こう。

そういう話を、食事をとりながらしていた。

俺が休んでいる間に、周れる限りは周ってきたんだそう。

午後に行く場所は、お化け屋敷や観覧車の、非絶叫系。

まあ、それなら問題は全くない。

「お化け屋敷」

「あはは！暗い暗い！」

「あ、千歌ちゃん待ってー！」

「ちゃんと出口で待ってるんだぞー」

「はーい！」

さすが、あの2人はこういうものも平気らしい。

・そもそも、住んでいる町が、夜はかなり暗くなるからね。

暗さに慣れているのもあるんだろう。

対して、梨子ちゃんは。

『づああああ』

「ひいひいひいー！」

『ギエアアア』

「ひゃああああー！」

『どうおおおおお』

「もういやあああー！」

ある意味、最も正しい楽しみ方と言える。

さすが、音楽をやつてて、アイドルもやつてるだけはある。

悲鳴の出し方もとてもきれいだ。

「梨子ちゃん、大丈夫かい？」

「大丈夫じゃない！大丈夫じゃないです！」

「よくそんな状態で、ついでこようと思つたね」

「ハルさんが船乗つたり、絶叫系乗つたのと同じよ！」

「要するに強がりかい」

意外なような、そうでもないような。

さつきから腕にしがみつかれてはいるが、それもあまり意識してやっているとまではないのだろう。

「ゴーカート」

「千歌ちゃん、くれぐれも安全運転で頼むよ」

「オツケー、しっかり捕まってるね。飛ばすよー!」

「俺の話聞いている?」

思い切りアクセルを踏み込む千歌ちゃん。

つて、正面壁、壁!

「あつぶなーい!」

「ぐえっ」

急ハンドルでかわす。

そのまま、左に右に、壁スレスレを全速力で走り抜ける。

酔いはしないが、ヒヤヒヤする。

「も、もうちよつと安全運転をだね…」

「よっしゃー、次のカーブ!」

・ 「話を聞けえ!」

「あの、あれ大丈夫なの?」

「大丈夫大丈夫。なんだかんだ言ってる、ハルくん付き合いいいから。それより、梨子ちゃんもしつかりつかまってなよ」

「へ？」

「負けないよお！千歌ちゃん！」

「え、きゃあぁー！」

何事も、中途半端を嫌がり、全力の千歌ちゃんは

アクセルも中途半端に踏まず

ベタ踏みオンリーでした。

…何かがおかしい。

くメリーゴーランドく

「…どうして、メリーゴーランドで俺は馬に乗ってるんだ」

「あははは！似合ってるよー！」

「はははは！うんうん！白馬の王子様ー！」

「2人とも、あんまり笑ったら…つく…くくくつ」

「……………」

3人が乗っているのは、コーヒークップみたいなやつだ。

そこに俺も入れればよかったのだが、4人入るには狭かった。

しかし、客の数的に、2人ずつに分かれるほど乗り物が空いておらず、結果としてこ

うなつたわけだ。

これはもう、普通に恥ずかしい。

「ハルくーん！写真撮るからこつち向いてー！」

「あ、その写真、後で私にもちようだい！」

「あ、私も」

「いや、勘弁してくれ」

なんて言っていたのだが。

『カシャカシャカシャカシャカシャカシャ！』

「ねえそれ、連射してない？音すごい聞こえるんだけど」

「はーい、笑ってー。王子様ー」

いっそ殺してくれ…。

※

そんなこんなで、遊園地最後のアトラクションに乗る俺たち。

「やっぱ、遊園地の締めといえば観覧車だよねー」

「ねー」

「たしかに、それはあるわね」

夕日が景色を赤く染める。

上から眺めるその景色は、普段のそれとはまた別の美しさを映し出す。

「楽しかったね、今日」

「うん！」

「ええ。楽しかったわ」

千歌ちゃんは、それを聞いて嬉しそうにして

俺に向き直った。

「ハルくんは？」

「もちろん、楽しかったさ」

「また、来たい？」

「そうだね」

でもそれは。

遊園地に限った話ではなく。

「君たちとなら、多分どこへ行っても楽しいよ。今日、そう思った」

少し恥ずかしいけど。

俺は嘘が苦手だから。

そうやって、正直に伝えておく。

「そっか。えへへ」

千歌ちゃんは、とても嬉しそうに笑ってくれる。

曜ちゃんも、梨子ちゃんも、笑顔だ。

夕日より、眩しい笑顔だった。

「ねえハルくん、これ、どこ向かってるの?」

「あんまり見ない場所だねー」

「山、ですか?」

「俺のお気に入りの場所だよ。あと15分くらいだ」

大きな山ではない。

ちよっとだけ高くて、人気の少ない山。

整地はあまりされていないが、一応頂上までは車で行けるのだ。

「ま、まさかハルくん、私たちを山に連れ込んで変なことを…」

「できると思ってるのかい?」

「無理だね」

「男としては複雑だよ」

もちろん、やらしいことをするつもりはない。

上から見る景色、それを見て欲しいのだ。

「つと、この辺だね。外に出ようか」

「あれ？ここ頂上じゃないよ」

「頂上まで行くと、木が邪魔で景色が見にくいんだ。ここが一番いいスポットなんだよ」

「へ〜…随分詳しいね。はっ！まさか」

「ん？」

「誰かとデートでここにきたことが!？」

「!？」

その瞬間、曜ちゃんと梨子ちゃんがすごい勢いでこちらを向いた。

早っ！

しかも怖い怖い。

気のせいかな寒気を感じる。

「そんなわけないだろう。俺、生まれてこのかた、お付き合いすらしたことないんだから」

「そっだよねー。あはは」

「ほっ」

「なんで安心するんだい君達。…ほら、見てくれ。これが、今日俺が君達にできる最後の
労いだよ」

そこにあるのは。

光り輝く、町。

ビル、住居、店。

その他多くの、人がいるからこそ浮き上がる、光たち。

大都会の夜景に比べれば、それはあまりに規模が小さいものだけだ。

千歌ちゃんたちには珍しい景色のはずだ。

梨子ちゃんは、もしかしたらこれよりずっと綺麗な景色も見慣れているのかもしれないけど。

それでも、見てもらいたかった。

だって。

「この景色、俺がこの前のライブで見た君達そっくりなんだ」

「へ？」

「この町、行きに通ったんだよ。でも、こんな風には見えなかっただろう？…それが今、
こんなにも輝いてる」

千歌ちゃんが言っていた。

普段は普通の女子高生が、
とても輝くスクールアイドル。

Aqoursだつて、ちゃんと輝いていたんだと、伝えたかった。

「そっか…」

伝わったかはわからない。

でも。

「綺麗だね」

「うん」

「ええ」

3人は、そう言ってくれた。

「ハルくん！」

「なんだい？」

「大好きだよ！」

「え？」

「千歌ちゃん!？」

「ほう？」

思わぬセリフ。

ドキツとするじゃないか。

「は、ハルくん！私も、私もだよ！」

「ええ、そんな。わ、私だって…っ」

なんてことだ。

まさか、彼女たちがそんなに慕ってくれていたとは。

しかしだね。

「とてもありがたいが、それは本当に好きになった人用にとっておかないと」

そう。

軽率に男に言っただけいいセリフではないのだ。

「あー…うん。そうだね…ハルくんは、そうだよね…」

なぜか落ち込む千歌ちゃん。

「…ハルくん、さすがにそれはひどすぎるよ…」

「…ハルさん、ひどい…」

そしてなぜか2人からも責められてしまった。

うーん…わからん。

「「はあ…」」

せつかく綺麗な景色を見ながらだということの。

彼女たちは、息の揃ったため息を着いていた。

文学少女と布屋さん

ライブ成功の翌日。

の翌日。

彼女たちは、マリーちゃんの出した課題をちゃんとクリアできたので、ちゃんと部活動認定をもらえたらしい。

先ほど、千歌ちゃんからそういうメールをもらった。

ついでに片付けを手伝えと書かれていたが、外出中につき無理と返信。

俺の方は、今日は定休日だ。

お前昨日も休んだら。

そう言われても反論の余地は一切ないのだが、月曜定休で知れ渡っているうちに、わざわざ今日来るお客もない。

そんなわけで、久しぶりのないもない1日を堪能することにする。

午前は、お店に置くお茶請け、食料に加えて、お茶の葉。

午後は、普段商品を安く売ってくれているお得意さんのところに行き、商品カタログをいただく。

その後は本屋に向かった。

前回、ルビイちゃんとは花丸ちゃんのために、食事代として消え去った本代。

そのとき買えなかった本を、今日は買いに来たのだ。

「…って、あれは…」

雑誌コーナーで、知った背中を見つける。

花丸ちゃんだ。

手に持っているのは…雑誌？

彼女も結構な読書家みたいなので、どんな本を読むか少し気になるところだ。

一步、二歩と後ろから近づくが、気づく様子はない。

ついに、すぐ後ろまで来てしまった。

見ると、スクールアイドルの雑誌だったようだ。

同じページをしばらく見てたかと思うと

『丸には無理ずら…』

そう言つて、本を閉じてしまった。

「何が無理なんだい？」

「ひゃあああ！」

「しーっ。静かに」

「あ、ハルさん……」

「驚かせてすまないね。そんなつもりもなかったんだけど」

「あ、いえ」

「その雑誌、買うのかい？」

「え？ いやいや。丸にはこういうのは……似合わないから……」

どこからそんな言葉がでてくるのか。

その見た目でよくもまあ言えたもんだと思う。

自分の可愛さを理解できていないらしい。

「そういえば俺、この雑誌買う予定だったんだよ。ちよつと失礼」

「ハルさんも、スクールアイドルに興味あるずら？」

「もちろん。かわいいじゃないか」

「うん……そうだね。……丸とは違うずら」

その眩きは、まるで自分に言い聞かせてるみたいだった。

そんなことはないさ。

君も、輝くことができる。

そう思ったのだが。

そのまま、2人で帰路につく。

「すいません、送ってもらっちゃって」

「いやいや、いいんだよ。どこか寄りたいたところがあつたら、遠慮なく言っておくれ」

「ありがとうずら」

「いえいえ」

車を運転しながら、花丸ちゃんと話す。

さて、どんな話をしようか。

「花丸ちゃん、部活とかやってるのかい？」

「丸は図書委員をやってるから、部活とかはちよつと…」

「そうなのかい。本、本当に好きなんだね」

「うん。…丸の、一番の居場所だから」

「それは…」

どういう意味なのか。

聞いていいものか、少し気が引けた。

チラッと見えた横顔が、寂しそうだったからだ。

どうしたものかと考えていたら、今度は花丸ちゃんから話を持ちかけてきた。

「そういえばハルさん、ルビィちゃんとは仲良いずら？」

「そうだね。少なくとも俺はそう思っているよ。ルビイちゃんのこと、何かあるのかいっ。」

「スクールアイドル、ルビイちゃんはやりたそうずら」

「ああ。なんとなくわかるよ」

昔から、スクールアイドルは好きだったみたいだし。

μ s のことも、ダイヤちゃんとよく話してたとも聞いている。でも。

彼女はスクールアイドルをやるのを、とても躊躇うだろう。

なぜなら。

「ルビイちゃん、周りに気を使って、やりたいって言い出せなさそうずら」

「お姉ちゃんも、相当頑固だからねえ」

「うん。…それに、丸にも気を使ってるみたいだし」

「そういう性格だからね。殻を破るのは、一筋縄ではいかないだろうさ」

自分だけでは新しいことを始められない。

まして、お姉ちゃんに対して後ろめたい気持ちがある。

ルビイちゃんの足枷は、彼女にとってはとても重い。

「でも丸は、スクールアイドル、やってほしいずら。あの子の輝きを、もつと広いところ

に、解き放つてあげたいすら」

「…そうかい。そうだね、だつたら…」

君が先導すればいい。

作戦は…

「これ、よかつたら受け取つてくれるかい？」

「え、これつて…」

別れ際、買った雑誌を花丸ちゃんに渡す。

花丸ちゃんが見ていた、スクールアイドルの雑誌だ。

「間違えて2冊買ったんだ。1冊余らせるのはもったいないだろう？せつかくだから、受け取つてくれないかい？」

「あ…うん。ありがとすら」

「お礼を言うのはこちらさ。引き取つてもらうんだからね」

「ふふ」

とりあえずは受け取つてもらえた。

ルビィちゃんを任せただの。

これくらいのお礼は安いものだ。

※

「ハルくんハルくん！」

「なんだい騒々しいね」

「大ニユース！大ニユースなの！」

「わかったから、机をバンバンしないでくれ」

お茶が倒れたらどうするんだい。

「で、どうしたんだい？」

「部員がね。増えたの！」

聞くと、1年生が2人、スクールアイドル部に体験入部を希望してきたらしい。

「そうかい。それはよかったじゃないか」

「あんまり驚かないんだね」

曜ちゃんがそんなことを言う。

まあ昨日の時点で知っていたからね。

とはさすがに言えないので。

「これでも驚いてるよ。どういう子たちなんだい？」

「かわいい子！」

「それはよかった」

「前に、花丸ちゃんとルビイちゃんって話したでしょ？あの2人よ」

梨子ちゃんがそう補足してくれる。

案の定である。

「そういえば君達、なんでここに来てるんだい。まだ練習中だろ？」

「うん！これから淡島神社に行くんだよ！」

「淡島神社…登るのかい？」

「その通り！」

淡島神社は、名前の通り淡島にある神社だ。

何度か行ったことはあるが、頂上までの階段が結構な長さだった記憶がある。

「あれを登るのかい…。まあ、頑張ってくれ」

「うん！」

「ヨーソロー！」

「行つてきます」

そう言つて、3人は出て行つた。

「お待たせー！」

「千歌先輩も、ハルさんと知り合いなんですか？」

「そういえばルビイちゃんたちも知り合いって言ってたっけ？」

「はい！」

小さい音だが、そんな会話が聞こえてくる。

少しだけ後ろ姿が見えたが、1年生2人も、ちゃんと溶け込んでいるようだ。
さて。

こちらはこちらの仕事をするのでしょうか。

ケータイを出し、目当ての番号を開く。

発信。

「あ、もしもし。ダイヤちゃんかい？ ちょっと・いいかい？」

新メンバーと布屋さん

小さい頃から、目立たない子だった。

運動も苦手だったし

学芸会も木の役で

だんだん一人で遊ぶことが増えていった。
本を読むことが大好きになっていった。

図書室はいつしか、丸の居場所になって
いつもそこで、空想を膨らませていた。

読み終わった時、少し寂しかったけど

本があれば、大丈夫だと、思った。

そんなとき出会ったのが、ルビイちゃん。

丸の大切な、友達。

「これ、一気に登ってるんですか？」

「もちろん！」

「いつも途中で休憩しちゃうんだけどねー」

「えへへ」

こ、これを登るすら…?」

角度、結構凄じ上に、頂上は見えないほど高い。

「じゃあ、*μ* s 目指してー…よい…どーん！」

そんな合図とともに、みんな一斉にスタートする。

みんな、早い。

スタートしてすぐに、大分離される。

少し経つ頃には、もうルビイちゃんの背中も見えなくなっていた。

「やっぱり、丸には…」

それでも、なんとか上がっていくと、そこにはルビイちゃんがいた。

「一緒にいこ」

やっぱり、待ってたんだ。

ルビイちゃんは、優しいから。

でも。

「…だめだよ」

「…ええ？」

思ってもいない言葉に、ルビイちゃんが戸惑うのがわかる。
でもね。

「ルビイちゃんは、走らなきゃ」

「花丸ちゃん？」

「もつと、自分の気持ち、大切にしなきゃ」

息も絶え絶えに、なんとか言葉を紡ぐ。

今、言わなきゃいけないんだ。

「自分に嘘ついて、無理に人に合わせても、辛いだけだよ」

ルビイちゃんが、否定しようとする。

でも、それも否定して、私は続けるんだ。

「スクールアイドル、なりたいんでしょ？ だったら、前に進まなきゃ！」

少しだけ躊躇したルビイちゃん。

でも、前に進んでくれた。

これで、大丈夫。

ルビイちゃんは、階段を登る。

新しい世界へ、進むんだ。

私は、階段を下る。

元の世界に、戻るために。

何もかも溜め込んでしまうその子の、素晴らしい輝きを

思い切り、解放してあげたかった。

閉じたその扉を、開けてあげたかった。

それが、丸の夢だった。

そして、最後の仕上げは

「なんですの？こんなどこまで呼び出して」

そこにいたのは、浦の星女学院生徒会長、黒澤ダイヤさん。

ルビイちゃんの、お姉ちゃん。

「あの…ルビイちゃんの話を…気持ちを、聞いてあげてください」

「…ルビイの…？」

私が伝えたかったのは、それだけ。

その一言だけ伝えて、私はその場を去った。

これで、ハルさんと話した作戦は、全部終わり。

ルビイちゃんは、スクールアイドルに、なれるはず。

翌日。

私は、図書館へ、自分の居場所へ向かう。

丸の話は、これでおしまい。

もう夢は叶ったから、丸は本の世界に戻るの。

偶然目に入る、ハルさんが買ってくれた、雑誌。

その中で、なぜか丸の目を引き続けた、あるページ。

でも

「大丈夫。1人でも」

だから

「…ばいばい」

ページを閉じようとしたそのとき。

扉が、開かれる音がした。

※

「やあ。調子はどうだい？」

花丸ちゃんが、目を見開いて驚いている。

ああそうか。

「なに、新しい本の入荷を頼まれてね。それを持ってきたのさ」

言いながら、台車に乗せた本を見せる。

積みまれているのは、今学期より入荷された新しい教科書や、新調された辞書など。

「ああ…。えと、お疲れ様ずら」

「よければ、手伝つてくれないかい？ここにはあまり来なくてね。置き場があまりわかつていないものもあるんだ」

「うん、手伝うずら」

2人で本棚に本を置いていく。

もちろん、場所の指示を仰ぐだけで、本を持たせたりはしていないさ。

「…で、これはここずら」

「了解。すまないね、手伝わせて」

「いや。お礼を言うのはこっちずら」

「ほう。何かお礼されるようなことをやったかな」

「ルビイちゃん、スクールアイドル、始めたずら」

「…そうかい。それはよかった」

じゃあ、作戦はあと少しで終わりだな。

ここから先は、花丸ちゃんが知らない作戦のスタートだよ。

と言つても、俺にやることはないのだが。
そうだな。

作戦の要であるルビィちゃんが来るまで、適当にお話でもしていようか。

「花丸ちゃんは、やらないのかい？ スクールアイドル」

その質問に、少し驚いたような様子を見せる。

でも、すぐに諦めたような表情になった。

「丸には…無理すら」

「おや。それはどうしてだい」

「丸は…アイドルみたいな輝き、なにも持ってないから」

聞けば。

彼女は昔から人の輪にはあまり入らず、本の世界で生きてきたんだそうだ。

気づけばそこが自分の居場所になり

それ以外の場所には、あまりいられなくなってしまうた。

彼女の言っていた

『図書館が、居場所』

それは、そういう意味だったんだ。

そして彼女は言う。

そんな自分には、人を楽しませることなど不可能だと。

「丸がアイドルなんてやってたら、A q o u r s のファンは喜んでくれないすら」
自信がない。

彼女の抱える問題はそれだ。

様子を見る分には、スクールアイドルをやりたくないわけではないわけではない。

でもそれは、自信を持ってと言われて解決するものではない。

やってみるしか、自信をつける方法なんてないのだから。

まずは、自分に正直に、やりたいことをやってほしい。

だったら、言うべきは一つだけだろう。

「自分に嘘ついて、無理に人に合わせても、辛いだけ…だそうだよ」

「っ！」

とても、驚いた顔をする。

自分が言われるなんて、思ってもみなかったのだろう。

だってその言葉は

昨日、花丸ちゃんが、ルビィちゃんに放った言葉だから。

「なんで…」

「偶然、そこにいただけさ。なんとなく、心に残ってね」

驚いた顔は変わらない。

でも、俺の話はちゃんと聞こえているようだ。

「Aqoursのファン…か。そりゃ、そこまで考えるのは立派だけどね。スクールアイドルが輝くのは、自分がやりたいことを、全力でやっている時なんだ」

だからμ'sは、輝いた。

だからAqoursは、輝いた。

何を知った口をつて、言われるかもしれないけど。

でも、これが俺の持論なのだ。

「それに、だよ」

結局、俺が言いたいのは、この一言なんだ。

ちゃんと、聞いておいてくれよ。

「Aqoursのファン1号である俺はね、花丸ちゃんがAqoursに入ってくれたら、とても嬉しいよ」

「ハルさん…」

ここに、喜ぶファンがいること

それは、忘れないでほしいものだ。

花丸ちゃんの表情から、何を思っているかはわからない。

まあ後は、花丸ちゃんの親友に任せるとしようじゃないか。

「ルビィね！」

「っ！ルビィ…ちゃん？」

ルビィちゃんの想いが、打ち明けられる。

親友だからこそわかる、花丸ちゃんの様子。

そこからわかる、彼女の想い。

それら全てを踏まえて、ルビィちゃんは

花丸ちゃんと、スクールアイドルがやりたいのだと

言葉を、紡いだ。

なんだ。

作戦なんて、何もいらなかったじゃないか。

そんなことを思いながら

俺は図書室を、後にした。

※

「ねえハルくん、何読んでるのー？」

「ああ、スクールアイドルの雑誌だよ。ほら」

「あぁー！μ，sだ！」

「そうだよ。その子、かわいいだろ？」

「μ，sはみんなかわいいよ！」

「いや、そうなんだけどさ」

花丸ちゃんがずっと見ていたページ。

開いていたページに写っていたのは

『星空凜』

μ，sのメンバーの1人。

かつてその子も、自分にアイドルは無理だと言っていたそうさ。

「ねえ、もしかして、ハルくんはこういうタイプが好みのの？」

「ええっ!？」

「…なんでそういう話になったのさ」

「だって、このページずっと見てたんでしょ？服装？それとも髪型？」

「見てたのはなんとなくだよ」

と、言っても3人の耳には届いていないようで。

なんかよく分からない話を繰り返していた。

「うくん…髪の色はそこそこ近い？長さは…どうだろう？」

「長さだけならともかく、私は色は全然だなあ。服装…うくん…作ってみようか」

「長さも色もだめ…か、髪型だけなら…。服は…どうやっても無理ね」

「…俺の話、聞いてくれよ」

そのページを見てかわいいと思っていたのは確かだが、好みとかそういうのではないよ。

「もう！ハルくんはどういう女の子がいいの!?!」

「なんでそんな話が出るんだい」

「はつきりして！ハルくん！」

「はつきりしてちょうだい！ハルさん！」

「話を…聞いてくれ」

好きな女の子？

普段なら、女子高生だと即答するがね。

今は…

話を聞く子が好きです。

治らぬ病と布屋さん

春の温かみが残るこの時期。

我が商売所、淡屋にも緩やかな時間が流れる。

そこに、少女の声が木霊していた。

「やってしまったあああああああああ」

「やかましいよ」

「だってええええええええええ！うわあああああああああああ！」

「ええい！やかましいと言ってるんだ」

目の前で叫ぶ女の子、善子ちゃん。

又の名を、ヨハネちゃん。

入学前に、リア充になるんだと宣言してくれた善子ちゃん。

最近、人が少しずつ成長して、変わっていく姿を見ることが増えたので、感覚が麻痺

していた。

「よりにもよって、自己紹介でえええうあああああああ」

人は、急には変わらない。

当たり前のこと。

まあだからといって

「普通、入学式初日にやらかすかね？」

「ああああああー！」

俺の机のどこまで来たかと思えば、机をバンバンする。

それ、やめなさいって言ってるじゃないか。

「何よ墮天使って!？」

「知らんよ」

「ヨハネって何!？」

「知らんけど」

「リトルデーモン？サタン？いるわけないでしょ!？そんなもーん!!」

「そうだね」

言いたいことを言い切ったのか。

それとも単純に疲れたのか。

その場にへたり込む善子ちゃん。

「はあ…。お茶でも飲むかい？」

「…うん」

一旦席を立ち、お茶を汲みに行く。

冷蔵庫に、今日入れたやつが残っていたはずだ。

「はい、これ」

「…ありがとう」

「それで…」

一息いれ、とりあえずは事情を聞こう。

「なんだって自己紹介でやらかしたんだい？」

「き、緊張して。取り繕えなくて…」

「取り繕わないと墮天使が出るって…逆に大したもんだよ」

普通は、意識しないと墮天使の真似事などできないというのに。

あいも変わらず、重度の厨二病は継続中のようだ。

「学校、行けていないんだって？」

「…ええ。行けるわけ、ないでしょ…」

「気持ちにはわからんでもないけどね。…学校、行きたくないのかい？」

「そうじゃないけど…」

彼女の場合、顔を合わせられないから学校へ行けないのだ。

入学前からも言っていたが、行けるなら行きたいという意思はある。

であるならば、なんとかしてやりたいのだが。

…そうだな。

ここは一旦、彼女たちに任せてみようか。

「まあなんだ。一旦、学校の屋上にでも行ってみるといい。いきなりみんなと合流するよりは、まず学校そのものに行く練習だよ」

「屋上…?」

「人、多分あまりいないだろうからね。まだ誰かと会いたくはないだろうか?」

「うん…」

「気が向いたら、行ってごらん」

「…わかったわ」

もちろん嘘だ。

屋上は、A q o u r s の練習場所。

花丸ちゃんと善子ちゃんは知り合いだったはずなので、顔を合わせるならまずそこからだろう。

きつと花丸ちゃんなら、助けてくれるだろうしね。

※

数日後。

お店に知った顔のお客さんがいらっしやった。

「こんにちは。今、よろしくて?」

「こんにちは、ダイヤちゃん。何かお仕事の話かい?」

「いえ。今日はそういうわけではありませんわ」

「ほう。まあダイヤちゃんなら余計なことはいらないだろうし、中、入りなよ」

「そうさせていただきますわ」

俺の作業用机をまたいで反対側に座るダイヤちゃん。

対面ではなく、やや横にずれた位置に座っているのは、外の様子が見えるようにするため。

育ちがいいからこそその、自然な気遣いだ。

「自然にそういうことができるのは、やはり感心するよ」

「…なんのことですか?」

「いや、なんでもないよ。それで、要件は何かな?」

「これ、見ていただけますか?」

そう言うと、手に持っていたノートパソコンを開いて見せてくれる。

画面に映っているのは…A q o u r s…？

なんというか、随分これまでと方向性が違うようだが…。

画面に映るA q o u r sの面々は、白と黒を基調にしたゴスロリのような服をしている。

「この服は、善子ちゃんの作ったのとそっくりだ」

しかも、善子ちゃんと思わしき子が、センターになっている。

気のせいではなかったらしい。

善子ちゃん、とりあえずは学校に行けたんだな。

しかし…

学校で何をしてるんだ？あの子は。

「これは…？」

「お察しの通り、A q o u r sですわ」

「…どうしてこうなったんだい？」

「これまでとは違う方向性で攻めた結果だそうですわ」

「…なるほど」

まあ確かに。

斬新ではある。

…だが。

「若干、いかがわしく感じてしまうんだが」

「同感ですわ。それで、先ほど説教しましたわ」

「まあ、そうだろうね」

思わず苦笑いをしてしまう。

きつと、鬼の形相だったのだろう。

ルビイちゃんの自己紹介、確かに可愛いが、ダイヤちゃんが黙っているはずはない。

ちなみにルビイちゃんはヨハネちゃんのリトルデーモン4号だそうだ。

善子ちゃん。

まじで学校で何してるんだ？

「要件は、これを見せることかい？」

「それもありますけど…。しばらくの間、彼女達の様子をしっかりと見ておいて欲しいのですわ」

「様子…？」

彼女によれば。

このくらいの頃は、ランクの変動が起こりにくく、焦りが見え始めるころなんだそう

だ。

結果として、今回のように斬新さを求めることも不思議ではない。

個性を出していこうっていうのも、十分わかる。

でもそれは、自分たちの良さの上に成り立たないと意味がないのだ。

「あの子達が間違った方向へ行かないように、見張れつてことかな？」

「端的に言えばそうなりますわ。仮にも学校の名を背負っているのです。節度をもつていただかないといけませんわ」

言っていることは、一つの本音ではあるのだろう。

ただその裏には、彼女達を心配していることも、ちゃんと伝わってくる。

「わかった。やれることなんてほとんどないだろうけどね。まあブレイキの役目くらいは承るよ」

「手間をかけますわ」

「気にしなくていいよ。美人の依頼は断らない主義なんだ」

「っ！あ、あなたはまたそうやって…」

そっぽ向いてしまった。

まあ怒っているわけではなさそうなので、よしとする。

さて…

ブレーキか…。

まずやることは…。

夕日が差し込み、月が顔を出す頃。

本日の仕事を終えた俺は、お店に堕天使を召喚することにした。

学校帰りに、ちよつと寄ってもらうだけだが。

「善子ちゃん、学校で何があつたんだい？」

「…わざわざ聞くことは、何があつたか知ってるんでしょ？」

「俺が知ってるのは、A q o u r s が堕天使になって、鬼に怒られたってことだけだよ」

「それが全てよ。私が我儘言つたから、みんなに迷惑かけたの」

善子ちゃんは、そう話す。

その様は、善子ちゃんのなりたがっていた、普通の女子高生だった。

つまりこれが、彼女のなりたかつた姿。

本当に？

「大丈夫。スクールアイドルは断つたから。最後に我儘聞いてもらえて、すつきりした

もん」

微笑みながら、そう言った。

「…墮天使は、もう、卒業」

それが君の、決断なのかい？

「じゃあ、私は行くわ」

そう言つて、彼女は出て行つた。

お世辞にも上手とは言えない。

そんな、作り笑いだった。

そうかい。

じゃあ、申し訳ないけどね。

「もう一度、墮天使してもらおうよ」

ケータイから、よく知つた番号を引き出す。

千歌ちゃん、君なら、墮天使も輝かせられるだろ？

翌日。

早朝から、5人の墮天使が、マンションの前に並ぶ。

それはそれはシユールな光景だ。

マンションは、善子ちゃんの住むマンション。

俺は、少し遠くからそれを見ていた。
少しして。

善子ちゃんが出てきた。

千歌ちゃんが、声をかける。

善子ちゃんを

いや

堕天使ヨハネを仲間にするべく。

善子ちゃんは否定するけど

千歌ちゃんにはさらにそれを否定するのだ。

「いいんだよ！堕天使で！自分が好きならそれでいいんだよ！」

俺が言葉にはできなかつたことを、彼女はあっさり口にする。

その言葉は

まっすぐで、強い。

なんて思つてたら

善子ちゃんが逃げた。

それを追う、Aqours一行。

「……えっ？」

ちよつと待つて。

ダメだつて。

俺、ここ数年運動なんてまともにしてないんだから。

もちろん止まることはなく

ようやく追いついた俺が見たのは

手を取り合う、千歌ちゃんと善子ちゃんだった。

何があつたかはわからないけれど。

墮天使は

笑つていた。

※

「むー…」

「どうしたの？千歌ちゃん」

「最近、ハルくんの周りに女の子が多い気がする…」

「あー…確かにねー…」

「ハルさんの周り、昔からあんなに女の子多いぞら？」

「うーん…どうなんだろ。よく考えたら、意識したことなかったかも」

「千歌ちゃん以外のライバルがいるなんて、考えてもなかったからねえ」

「曜先輩も、長い付き合いずら？」

「千歌ちゃんと同じくらいだよ」

「へー…」

「ルビイちゃんも、好きなのよね？」

「ピギ!?そ、その…はい。な、なんでわかったんですか？」

「ふふ。さすがにわかるわよ」

「そういう梨子ちゃんもでしょ？」

「ええ!?!の、ノーコメントで!」

「ええー!自分だけ内緒なのー!?!」

「善子ちゃんは…聞くまでもないずら」

「ぬあ!?!ち、違うわ!この墮天使が、人間ごときとなんて…」

「でも、今日ハルさんが来てくれて嬉しそうだったずら」

「ちつがーう!」

「は、花丸ちゃんは好きじゃないの?」

「丸?丸は…好き、かも」

「は、花丸ちゃんも…!?!」

「私は違うってばー!!」

「ハックシヨイ!!」

「あら、風邪ですの?」

「いや、そんなことはないと思うのだが…」

「そーよ! フールはカゼひかないもん!」

「それもそうですわね」

「おっと、頭痛もしてきた。やっぱり風邪みたいだ」

「そんなことより!」

バンバンと机を叩くダイヤちゃん。

ねえ、それ叩かないでって言ったよね?

同じこと何回も言われるのは、バカじゃないの?

「あのメール、どういうことですか?」

「…読んでの通り、よ」

「…そんな…」

清々しいほど透き通る空。

店に入り込む暖かい風。

しかし。

俺たちの周りには

不穏な空気が、流れていた。

学院事情と布屋さん

沼津の高校と統合し、浦の星女学院を廃校とする。

そんな話が出ていることを、先ほどマリーちゃんから聞いた。

いわゆる統廃合というやつだ。

ダイヤちゃんは、とてもショックを受けていた。

薄々感づいていたとはいえ、いざ言葉にされるとキツかったんだろう。

マリーちゃんも、珍しく茶化す雰囲気は出してなかった。

そうさせないために、理事長にまでなったんだと、彼女は言っていた。

そして俺は

「さて。早速、廃校を阻止する手段を考えようか」

「……」

「おや？どうしたんだい2人とも？」

「いや……」

「なんというか……」

おかしいな。

彼女たちも廃校は絶対に阻止したいはずだが。

どうも乗り気ではないのか。

「協力してくださるのはありがたいですけど」

「なんでそんなにやる気なの？」

「なんだ、そんなことかい。決まってるじゃないか」

もちろん、お得意様というのもある。

けど、それだけじゃない。

あそこには、俺の思い出もたくさんある。

目の前にいる2人と違って、色んな思い出を作ってきた。

浦の星女学院は、それらが全部詰まっているんだ。

だから

「女子高生が見たいから間違えた綺麗な太ももじゃなくてみずみずしい肌。おっけーも

う嘘つくのやめるよ」

「何一つ嘘すらつけてないですわ！」

「隠し事できないのは知ってたケド……これは重症すぎよ」

ダイヤちゃんが机をバンバンする。

マリーちゃんは呆れ気味だ。

「簡単に言えば、女子高生が見れなくなるから廃校を阻止したいと」

「…うん。まあ端的に言っただけならまあさうなるね」

身も蓋もない説明だが。

「まあ、ふじゅーんな動機であっても、行動しようとしてくれるだけイイわ」

「はあ…。そうですわね」

「どうにも後ろ向きな感じがするが…まあいいだろう」

2人に席に座ってもらい、早速話し合いをスタートする。

題目は当然、廃校阻止の方法だ。

「私は、まずは知名度を広めることが重要だと思いますわ」

「そうだね。問題は、その手段かな」

「…ええ」

「ノー！あるでしょ？知名度を上げる、手っ取り早い方法が！」

「ほう」

「…」

そんな方法があるのか。

それはぜひ知りたいところだが。

「スクールアイドル！これに尽きるわ！」

「なるほど」

「…やっぱり、そうですね。申し訳ありませんが、用事を思い出しましたわ」

「な！ダイヤ…！」

ダイヤちゃんが席を立つ。

俺が何を言っても止まりそうにはなかった。

「帰るのかい？」

「…ええ」

「そうかい。また来てくれ」

「ちよつ、ハル…」

「また来てくれるんだろう？」

俺がそう言うと、ダイヤちゃんは少しだけこちらを見て

「…ええ。また来ますわ」

そう言ってくれた。

「だそうだよ、マリーちゃん。だから大丈夫さ」

「ハル…」

「すぐに解決する問題ではないんだ。焦らずいこうじゃないか」

マリーちゃんは、一応は納得してくれたみたいだ。

渋々と言った感じではあるが、引き下がってくれた。

ダイヤちゃんが出て行つてから数分。

少しの間2人とも黙っていたが、マリーちゃんがその沈黙を破つた。

「ハルは、相変わらずダイヤに甘いわね」

「俺は美少女に優しいんだ。だから君や果南ちゃんにも優しいだろう?」

「…ふふ。またダイヤに、『破廉恥ですわ!』って怒られるわよ?」

「それは困つた。けど」

「ん?けど…なに?」

「君と果南ちゃんがいる場のなら、それもまた一興さ」

彼女たちが1年の時は、そんな景色も珍しくはなかったのだ。

それが、日常だったから。

「…うん。また、果南とダイヤに怒ってもらわないとね」

「怒られる役は、君に任せるよ」

「そのときは道連れよ」

「お手柔らかに頼むよ」

「2人に言つてちょうだい」

「それもそうだ」

完全な笑顔とは言えなかったけど

マリーちゃんは、少しだけ笑ってくれていた。

※

マリーちゃんが帰って1時間ほどして、花丸ちゃんたち1年生組がやってきた。

「今日は君たちかい」

「こ、こんにはハルさん」

「こんにはずらく」

「ふふふ…墮天使ヨハネ、降臨」

「魂ならあげないよ」

「それは悪魔！」

乗り出してくる善子ちゃん。

なんだ、知っていたのか？

「今日はハルさんに報告があつて来たずら」

「報告？」

「実は…」

「浦の星女学院、廃校になるかもしれないのよ」

「ああ、そのことかい」

「知ってたんですか？」

「まあね。ダイヤちゃんから聞いてるんだ」

むしろ、一般生徒である彼女たちに伝わっていることの方が驚きだ。

人数の少ない高校だし、生徒全員が把握するのも時間の問題だろう。

「それで、Aqoursのメンバーはなんて言ってるんだい？」

気になるのはそこだ。

廃校を推進する子はいないとは思うが…。

「丸は、都会の高校通えるならそれもアリかなって」

そういう考えの子もいるのか。

廃校賛成とまではいかなくとも、特に反対ではないと。

「私は断固として反対よ！」

まあ善子ちゃんはどうだろうさ。

中学のときの友達が大勢いるところとの合併だからね。

この子が高校を浦の星にした意味がなくなる。

「私は…知らない人が一杯になるのはちよつと…」

これが一番普通の反応だろう。

ようやく生活に慣れてきた1年生にとって、また一から生活を作り直すなど、考えたくない話だ。

「一応、みんなで廃校阻止の方法を考えてたんですけど…」

「ふむ」

俺たちが先ほどまでやってたことと同じか。

彼女たちはどんな答えを出したんだらうか。

「最初は、μ、sを参考にしようってなったずら」

「μ、sを？」

「そうよ。でも…」

μ、sは自分たちの高校を有名にするためにスクールアイドルを立ち上げた。

結果としては大成功だったわけだが、その過程といえは…

「スクールアイドルとして、何か特別なことをしていたわけじゃないってことかい」

「そうなんです。ランキングシステムに登録して、予選を勝ち抜いて、ラブライブで有名になる…考えてみれば、スクールアイドルとしては普通というか、当たり前のことというか」

「まあ、だからこそ『スクールアイドル』の伝説なんだろうしね」

スクールアイドルとしてやるべきことを全うし、その上で頂点に立ったからこそその今だ。

とはいえ。

「千歌先輩が、それだけじゃだめだーって言ってたずら」

「そうだろうねえ」

なんとなく想像できることだ。

「で、μ's がやってたことの一つに、PV 作成があつたの」

「ああ。そういえばいくつか見せてもらった記憶があるよ」

確かにPVなら、宣伝効果はあるだろう。

もちろん、Aquours の知名度がそれなりにあつてこそだが。

「早速撮りに行くのかい?」

「はい。今から色々周る予定です」

「そうかい。頑張ってくれ」

「ハルは来ないの?」

「まさかと思うけど、俺が今仕事申中だということを忘れていいのかい?」

ちよつと失礼じゃないかな、善子ちゃん。

確かにお客がいなさすぎて、読書に熱中していたが。

「まあ、できたら見せておくれ。楽しみにしとくから」

「ずら！これは頑張らないといけないずら…！」

「は、ハルさんに見てもらうなんて…！失敗できない…！」

「き、気にしすぎよ！あ、あんた達は！か、加工だつてできるんだから」

「？」

若干、空気が変わったような気が…。

一応やる気にはなつてくれたみたいだし、まあいいか。

しかしこの町のいいところか。

女子高生がいることか、女の子の比率が若干高いことか、優しい女の子が多いと

ことか…

あれ？

PVで魅力を伝えるの、結構難しくない？

PV撮影と布屋さん

原付を走らせ、ダイビングショップへ向かう。

もちろん、ダイビングをしに来たわけではない。

船、乗れないからね。

ここに来たのは、とある人物に会うためだ。

さて、手が空いてるといいんだが…。

「ありがとうございます！また来てくださいね！」

「お、いたいた。果南ちゃん」

「あれ？ハルじゃん。どうしたの？」

「ちよいと野暮用でね。今いいかな？」

「うーん…あと少ししたら次のお客さんが来るから…ちよつと厳しいかも」

「そうかい。じゃあここで待たせてもらっていいかい？」

「いいけど…つてそつち、キツチンだよ」

「簡単なメニューなら作れるさ。手も空いてて暇だからね。手伝わせてくれるかい？」

「…バイト代、出せないよ？」

「次のお客さん、若い女の子なんだろう？見物料つてことだね」

「はは！よくわかったね」

「センサーに反応があつたんだ」

もちろん嘘だ。

さつき、果南ちゃんのお父さんに会った際に聞いただけ。

ちなみに、店の食事を作る仕事もそれなりにやらせてもらっているので、今回もその許可はもらっている。

「ふう…。これで終わりかな？」

「うん。ありがとね、結局片付けまで手伝わせて」

「いや、いいんだ。こちらが申し出たことだしね」

「晩御飯、食べてつてよ。お話もあるんでしょ？」

「おや。それはありがたいね」

厚意に甘え、一緒にご飯を頂くことにした。

お父さんとお母さんは明日の準備ということで、2人で食事をする。

「君のご両親より早く頂いてしまうとは。申し訳ないね」

「いーよ、気にしなくて。お母さんも喜んでたし。それより、話したいことつて？」

「ああそうだね。実はだね…」

果南ちゃんに、廃校の話をする。

今は休学をしているものの、果南ちゃんだって浦の星女学院の立派な一員だ。

その彼女が、廃校についてどう思うか聞きたかった。

「マリーちゃんやダイヤちゃんは、君との思い出をすごく大事そうにしていたよ。2人とも、廃校には断固として反対しているようだった」

「…そう…なんだ」

そう言葉にする果南ちゃんは、何を思っていたのか。

それは、俺にはわからないけど。

彼女だって、ちゃんと2人を想い続けているの知っている。

「君にその気があるなら、彼女たちを助けてあげてほしいんだ」

「そんなこと、言いに来たの？」

「ああ。おかしいかい？」

「ふふ。おかしいよ。当たり前じゃん」

苦笑いでそう言われてしまった。

でも。

「ハルらしくて、嫌いじゃないよ」

ちゃんと、そう言ってくれた。

※

A q o u r s が P V 撮影をするんだと聞いた数日後。

彼女達になんとか完成させ、それをマリーちゃん：つまりは理事長に見せたらしい。果たしてどんな反応をしたのか、そう聞いたら

「『このテイタラアクですかあ』だってさー！」

「さすがにあれは、ちよつとキツかったねえ」
体たらく。

みつともない様。

そういう評価をつけられたらしい。

「ハルさんは、どう思うの？」

「これを見て、かい？」

彼女たちなりに頑張ったのはわかる。

みんな、大小あれどこの町が好きなんだということも、ちゃんと伝わって来る。

「俺は、結構いいと思うけどね」

ただ。

相手が悪い。

相手はマリーちゃん。

比較対象はμ's。

マリーちゃんから見たら、もつともつと、伝えるべき魅力があるだろうって思えてしまおうだろう。

マリーちゃんの知っている魅力は、彼女たちは聞かなかつたらしい。

聞いてちゃダメだって思ったの。

それは、大事なことだと思うから。

自分たちでわからないと、PV作る資格なんてない。

そうやって、千歌ちゃんは言った。

千歌ちゃんがそう言うなら、それでいいんだろう。

頑張つて、この町や学校の魅力を見つけておくれ。

とはいえ。

「結局、PV撮影の作戦は決まらず、と」

「だつて……」

さつき、意気揚々として部屋に入ってきた千歌ちゃん。

みんなを見てたら、またやる気が湧いてきたんだと、そう言っていたが。

やる気と仕事は噛み合わないもので。

難航は相変わらずのようだ。

「町や学校の魅力、わからなかったのかい？」

「違うよ！魅力なんて、挙げ始めたらキリがないよ！…キリがないから…」

「言葉にまとまらないと」

「…うん」

ぐでーんとする千歌ちゃん。

曜ちゃんと梨子ちゃんがそれにフオローを入れる。

「千歌ちゃんの気持ち、わかるよー。なんというか、人に伝えるのって難しいよねー」

「ええ、そうね。大変だと思っわ」

なんて話をしていたら、ルビィちゃんの声が聞こえてきた。

「せんぱーい！バス来ましたー」

「はーい！今行くー。曜ちゃん、梨子ちゃん！あ、ハルクんまたね！」

「じゃあ、また」

「じゃあねーハルクん！ヨーソローー！」

「ああ、頑張ってくれ」

賑やかしく出ていった3人。

あの学校の魅力、か。

そりやあたくさんあるが。

ここ最近で一番感じる魅力といえば。

「あの子達がいること、かなあ」

A q o u r s の背中を見つつ、そんなことをつぶやいていた。

翌朝。

いや、もはや朝と呼べるかも怪しい時間。

午前4時。

そろそろ頃合いだと思い、店のエプロンをつけて外に出る。

今日は海開きの日だ。

毎年この日は、町の人が集まってゴミ拾いをする事になっている。

そのために、この日は朝早くから浜辺に多くの人が集まるのだ。

ゴミ袋、軍手、ゴミを挟む名前を知らないあれ。

一通りのゴミ拾いセットを持って海に行くと、もう既にまばらに人が来ていた。

既に火を灯されたぼんぼりが、うつすらと辺りを照らしている。

「おはようございます」

「おーおはよう、ハルくん。朝早くからご苦労さん」

「いえ、お互い様ですから。手伝うことありますか？」

「まだ人が来てないから、そんなにやることもないんだが…：そうだな、人が多くなってきたら、このゴミ袋持って歩いてくれ」

「…これ、今年は何が持つんですか？」

「田中んとこの息子くん、今年は何帰って来れねえらしいからよ。若いし頼むわ」

笑いながらそういう、目の前のおじさん。

この手の催しの時には率先して色々やってくれる、面倒見のいい人だ。

ただし、人選は下手らしい。

渡されたゴミ袋。

家庭用の大きいゴミ袋だが、みんなのゴミを回収するためのものだ。

一箇所に置くより、若い人何人かが収集用のゴミ袋を持って歩き回ったほうが効率がいいだろうとのこと。

まあ、それはいいんだ。

問題なのは…

「これ、ゴミによつてはものすごい重くなるんだよな……」

しかも、満タンになったらまた新しい袋に変えて回収を行う。

基本的にはずっと動き回る仕事だ。

「…体力、もつかな」

ちらほらと人が来始め、本格的にゴミ拾いがスタートするまで、そんなに時間はかからなかった。

集めてくれたゴミを俺がさらに集め、回収場に持つていく。

何往復かしたところで、千歌ちゃん、曜ちゃんを発見。

道具も持つているようだし、少し前からいたようだ。

「やあ、おはよう」

「ハルくん！おはよー！」

「おはヨースロー！」

「朝から元気だね、君たち」

「なんかハルくんは疲れてそうだね。つて、あれ？今年ハルくんも収集係なの？」

「そうみたいだよ」

「へー。あ、梨子ちゃんだ」

「え？ほんとだ！おーい！梨子ちゃん」

そう言いながら2人は走って行った。

本当、体力があるようで羨ましいよ。

俺もその後を歩いて追う。

「おはよう、梨子ちゃん」

「ハルさん。おはよう」

曜ちゃんが色々説明しているが、どうやら梨子ちゃんにはなかなか珍しい光景らしい。

少し驚きながらも、それを眺める梨子ちゃん。

何かを思いついたらしい。

「これなんじゃないかな。この町のいいところ」

梨子ちゃんがつぶやいた。

人を指したのか。

景色を指したのか。

この催しを指したのか。

はたまたぼんぼりのことを指したのか。

俺にはわからなかったけど。

千歌ちゃんには、何かが伝わったようで。

「そうだ！」

弾かれたように、走って行って、そのまま高台に立った。

そんなに勢い良く上ると危ないよ。

なんて、言うつもりはなかった。

あんなにやる気を見せているんだ。

口を出すのは、野暮っものだろう。

「皆さんに、協力してもらいたいことがあります！」

そうやって、叫んだ。

後日、改めて作ったというPVを見せてもらった。

そこには、たくさんぼんぼりが映っていた。

ああ、そういうえぼうちに、似たような布の発注依頼がたくさん来てたな。

このためだったのか。

実のところ、あの後千歌ちゃんが叫んでたことは、俺には聞こえていなかった。

というよりは、どんなことをしてくれるかを楽しみにしていたので、あえて聞かなかったのだ。

「このスカイランタン、ハルくんはこの布がいっぱい使われてるんだよ？」
「…これ、スカイランタンっていうのかい」

ぼんぼりとは何が違うんだろうか？

飛ばか飛ばないかの違いなのか？

もしかしてこの町で使っているのも、ぼんぼりではなくランタンなのか？

画面に映っているのは、A q o u r s の文字に並べられた無数のぼんぼり、ではなくスカイランタン。

そしてそれが、曲のサビに入ると同時に空へ舞っていく。

とても綺麗だ。

そう思った。

あれ？

でも。

俺はなんでこの撮影の様子を知らないんだ？

「これ、すごく綺麗だけど、いつ撮ったんだい？」

「ハルくんがよその県に行ってた時だよ？」

「…なんでよりによってその日に」

格安のエアコンをチラシで見かけた日か。

よりもよって。

今回のPV撮影、わりと楽しみにしてたというのに…。

1日くらい、待ってくれてもよかったじゃないか…。

画面上では、俺のそんな気持ちに反応するかのようには、スカイランタンが空へ登っていき、やがて消える映像が映されていた。

※

「そういえば、壇上で1人踊ってたそうじゃないか？」

「なあっ！なぜそれをつっ!？」

「へく…あらあら、ダイヤく？」

「ち、違いますわ！あれはその…プリントが落ちそうになつたので、慌てて」

「プリントを持って壇上にかかる時点で、普通ではないよ」

「あらあらく？ダイヤ、やつぱり未練があるのねく」

「そりやそうさ。元はといえば、ダイヤちゃんが一番スクールアイドルを愛していたんだからね」

「それもそうよねー」

「あはははははは」

「そおい！」

「ぐおえっ」

「ああ！ハルが鳩尾に突きを食らってしまったわ」

「次はあなたの番ですわよ？鞠莉さん？」

「ノー！ジョーク！イッツジョーク！」

「ジョークで済んだら…警察はいらないのですわ!!」

「ノオオオオオオオオ！」

空に、断末魔が木霊した。

ダイヤちゃんをからかうのは、しばらくやめておこう。

東京出発と布屋さん

「東京からのお誘いがあった？」

「そう！東京で、スクールアイドルイベントがあつてね、そこで一緒に歌いませんかつて！」

「これ、すごいことだよね！」

「そうだね…」

そう話す千歌ちゃんと曜ちゃん。

東京でのイベント。

そう聞くと、どうしても思い出されるのは、ダイヤちゃんたちのこと。

「それ、君たちは行くのかい？」

「もちろん！」

「学校側は、許可をくれたのかい？」

「うん！」

「そうかい」

マリーちゃんは、そういう判断なわけだ。

だったらまあ、俺が止める理由もあるまい。

「ぜひ頑張ってくれ。貴重な経験だろう」

「ヨソロー！」

曜ちゃんが敬礼して答えてくれる。

その後、雑談をしていたらバスが来て、彼女たちは帰って行った。マリーちゃんやダイヤちゃんは、何を思っているんだろうか。などと思っていたら

「ハロー。ハル、今いいかしら？」

「おっと、噂をすれば」

「噂？！人しかいないじゃない」

「言葉の綾というやつさ。それで、どうしたんだい？」

「Aqoursのみんなが、東京に行くわ」

やっぱりその話かい。

こつちから話す必要がなくなってありがたいよ。

「そうみたいだね。許可、出したらしいじゃないか」

「ええ。あの子達ならもしかしたら、越えられるかもしれないから」

「ああ、そうだね。可能性はあると思うよ」

2年前。

彼女達が越えられなかった壁。

それを越えられるかもしれないと、彼女は言う。

「お茶、出すからちよつと待っていてくれ」

「サンキュー、ハル」

冷蔵庫からお茶を出してコップに注ぐ。

それを机に置いたところで、話を再開する。

「ダイヤは、多分反対すると思うわ」

「はは、そうだろうね」

ダイヤちゃんは、ルビィちゃんは当たり前としても、Aqoursのことも大事に思ってくれている。

彼女なりに、Aqoursのサポートは色々してくれているのだ。

だからこそ。

彼女達の自信を奪ってしまうような現実を、叩きつけたくないと考えるだろう。

それがダイヤちゃんなりの優しさなのだ。

「でも私はね、この壁は、越えなきゃいけないと思っているの」

「本気でスクールアイドルやるなら、かい？」

「スクールアイドルとして、学校を救おうとしているなら、よ」

「そうかい」

そしてこれも、マリーちゃんなりの優しさだ。

マリーちゃんとダイヤちゃん。

2人の考えがこういう形で食い違うのは、昔から変わっていない。

「2人とも不器用だからね、相変わらず」

言葉で伝えてあげればいいものを。

自分たちの思いも経験も、結局隠したままなんて。

頑固なとこまで、そっくりだよ。

※

千歌ちゃん達が東京へ行く当日。

俺は千歌ちゃん、梨子ちゃん、花丸ちゃん、ルビィちゃんの4人を駅まで送ることに
なった。

『ハルくんが送ってあげたほうが、多分嬉しいと思うから』

そうやって志満さんから連絡があつたのだ。

まあそれは構わないのだが。

「東京トツプス！東京スカート！東京シューズ！そして…東京バッグ！」

「…一体、何がどうしたの？」

「かわいいでしょ！」

「君は一度東京に行つたんじゃないのかい？」

その時に何を見てきたんだ、この子は？

まるでバブル時代の女性のような服に身を包む千歌ちゃん。

「俺、最近では東京行つてなかつたから知らないんだけどさ。もしかして、最近では東京だと

こういうのが普通なのかい？」

「いや、全然そんなことないから」

「安心したよ」

なんて言っていたら。

「おはようございまーす」

花丸ちゃんとルビイちゃんが来たみたいだ。

「やあ、おはよ…うっ？」

「うえっ？」

思わず俺と梨子ちゃんの声が上がります。

なんというか、ルビィちゃんはやたらピンクだ。

装飾も多い。

対して花丸ちゃん。

なんの格好だ？冒険家？

「ちや、ちゃんとしてますか？」

「こ、これで、渋谷の険しい谷も大丈夫すーら！」

言いながらピッケルを構える花丸ちゃん。

まさかそれで電車に乗るつもりだったのか…。

「…何、その仰々しい格好は…？」

「ガーン」

2人はシヨックを受けているようだった。

いや、当たり前でしょ。

君たちにとって東京はどこにあるんだい。

「2人とも地方感丸出しだよ」

千歌ちゃんがそう言って笑っている。

君、人のこと言えないからね？

着替えた3人と梨子ちゃんを乗せて、車を走らせる。

「結局、いつもの服になってしまった…」

「いいじゃないか。今の花丸ちゃん、かわいいよ」

「ほ、ほんとずら!?!」

「ああ、ほんとさ」

「そ、そつか…えへへ」

「む…ハルさん！運転に集中してちょうだいっ」

「おっと、すまないね」

梨子ちゃんに怒られてしまった。

集中集中。

少しして、無事に駅に到着した。

近くの駐車場に車を止める。

短い時間だ、駐車料金のことはこの際忘れよう。

「そう、たかが一食か二食我慢するだけなのだ…」

「何をブツブツ言ってるの?」

「いや、こちらの話さ。あれ?千歌ちゃんたちは?」

「ああ、あの子達なら…」

そう言いながら梨子ちゃんが目線をやる。

そこにいたのは…

「私はヨハネ！せつかくのステージ、溜まりに溜まった墮天使キャラを、開放しまくるの
！」

「「お、おう」」

…なんですかね、あれ。

できれば近づきたくないのだが。

その後、千歌ちゃん達の友達がやってきて、激励を受けていた2年生組。

時間もそろそろだ。

「梨子ちゃん」

「ん？」

「彼女達を頼むよ。東京、慣れてない子たちなんだね」

「ふふ。ええ」

梨子ちゃんはそう言ってくれた。

「いつてきまーす!!」

「あい、いつてらっしやい」

手を振って彼女達を見送った。
さて。

どうなることやら。

夕方。

最近はいい物をしてないお客さんが多かったので、久しぶりに商売のためだけに接客をした一日だった。

こういう日は久しいな。

時間もいい頃合いだし、店の札を閉店に返す。

そのまま店に戻ろうとした時だった。

「こんにちは、ハルさん」

「おや、ダイヤちゃん。こんにちは」

「今、よろしくて？」

「ああ、今日は結構暇なんだ。中、入るかい？」

「あら。いつもは暇ではないみたいですね」

「普段は忙しくて仕方ないんだ」

「ふふ。そういうことにしますわ」

「なんか用かい？」

「いえ：用事があつた方がよかつたのですの？」

「そんなことないさ」

学校帰りの暇つぶしらしい。

用事もなく来るのは珍しいことだ。

ルビイちゃんがいなくて寂しいのだろうか。

それともそういう気分だったのか。

いずれにしても、独り身同士仲良くしようじゃないか。

「晩御飯、食べてくかい？」

「え？いいんですの？」

「ダイヤちゃんには普段から鼻屑にしてもらつてるからね」

「ではご一緒させていただけますわ」

「ご両親に聞かなくていいのかい？」

「この時間ならまだ作つてないでしょうから。すぐ連絡を入れれば大丈夫ですわ」

「そうかい」

じゃあ心配なさそうだ。

いいね。

今日は美人さんと一緒に夜ご飯だ。

「それで、夕食は何にするつもりですか?」

「ああ、今から買い物に行こうと思ってたんだ。その時に決めるつもりだったんだよね」

「そうだったんですの?じゃあ、買い物、ご一緒にしてもよろしくて?」

「もちろんだよ。ありがたい。少し待っていてくれ、準備してくるよ」

「ええ」

「将来結婚とかしたら、こうして奥さんと歩くのかなあ」

「なえ!? け、結婚!」

「あ、でもこんな甲斐性なしと結婚してくれる人はいないか」

「…そ、そんなことはないのでは? あなたの周り、女の子は多いですわよ?」

「ははは。こんなおっさんに恋愛感情持つてる子なんていないだろうさ」

「ハルさん、まだ20歳ですわよ?」

「20歳超えたら、10代から見たらもれなくおっさんだよ」

「それでも、あなたを好きになる人もいますわ」

「へえ。それは不思議な子だ。ぜひ会ってみたいね」

「…はあ」

「あれ？なんでため息？」

「なんでもありませんわ」

「ごちそうさまでした」

今日は麻婆豆腐にした。

ひき肉が安かったのだ。

片付けを適当にしつつ、ダイヤちゃんとお話をする。

「あの子達、元気にやってるかね」

「そうですわね。一応は学校の名を背負っていること、自覚していればいいですけど」

「心配だって、素直に言えばいいのに」

「な！心配などしてませんわ！」

「そうかいそうかい」

「話を聞きなさい！」

部屋に、ダイヤちゃんの声が響き渡る。

ダイヤちゃんの心配しているみんなは…

今、何してるかな。

東京ライブ前日と布屋さん

『まだ起きてますか？』

そんなメッセージを俺のSNSが受信したのは今から3分ほど前のこと。

大してやることもないのでそろそろ寝ようかと考えていたところに、それはやってきた。

差出人は、梨子ちゃんだ。

『暇だから寝ようかと思ってたところだよ』

とりあえずそう返信する。

『少しだけ、時間ありませんか？』

そう返ってきた。

『いくらでもあるよ』

送ってから数秒後、携帯に着信。

梨子ちゃんからだ。

「はい、もしもし。淡屋です」

『ふふ。これ、私用の携帯だったんじゃないの？』

「どんなときでも商人の自覚をしていることが、売上向上の秘訣なんだ」

『成果は出ているのかしら?』

「成果が出るにはまだかかるらしいよ」

『それは残念だわ』

言いながら、笑っていることがわかる。

まさか皮肉を言うためだけに電話したわけではあるまい。

「なんか用だったかい?」

『いえ。特に用はないのだけど…なんか眠れなくて』

「そうかい。まあ明日が本番だからね。気持ちはわかるさ」

『ごめんなさい。寝るつもりだったんでしょ?』

「美少女との電話の方が睡眠より大事なんだ。問題ないね」

『…ふふ。ありがとう』

「そうは言っても、明日は体力を使うだろう。夜更かしも程々にね。寝れなくとも、横になっただけで体力は回復できるから」

『うん。ご心配ありがとう』

わりといつも通りの梨子ちゃん。

まだ寝るつもりは無さそうだし、少しだけお話でもしようじゃないか。

「久しぶりの東京、どうだい？」

『うーん…特には変わってないかな』

「そうかい。みんな、はしゃいでいただろう？振り回されなかったかい？」

『そうね。でも、私もちよつと…』

「ん？なんて？」

『ああ、ちがうの。なんでもないわ』

「…？まあいいか」

そこで一つ、聞きたいことを思いつく。

聞いていいものか少し考えたが、とりあえずは聞いてみる。

「音乃木坂は、行ってきたかい？」

『…いいえ、行かなかったわ』

「そうか。てつきり、千歌ちゃんあたりは行きたいって言うと思っただけだね」

『ええ。言ってたわ。でも、私は留守番してると言ったら、行かないことになっちゃった』

「…そうかい」

『悪いことしたわ』

「みんなはそんなこと思ってないさ。君がそんなに考えることじゃない」

むしろ、我慢して梨子ちゃんがついて行ったり、梨子ちゃんに一人留守番をさせる方が、千歌ちゃんとしては嫌だろう。

そういう気遣いは、あのメンバーはよくできるんだ。

『…私、中学の時はね、ピアノの全国大会出たことがあるの』

「それはすごいな」

『だからね、高校入る時は、結構期待されてたの』

「当然だね」

『でも結局、大会では上手くいかなくて』

「…ああ」

『期待に、応えられなかった』

それは、どんな気持ちなんだろうか。

普通の生活をしてきた俺には、きつと想像もできないプレッシャーなのだろう。

そういう世界を、この子は歩いてきたんだ。

「すごいね」

『…え？』

思わず出たような言葉だった。

「俺が君と同じ歳だったときは、いかにスカートの中を覗くかしか考えてなかったんだ」

『それはそれで問題じゃない?』

「なのに君は、すでに周りの人の期待に応えようとしている。すごいことさ」

『でも、応えられなかったわ』

「いいんだ、それは」

『∴即答するのね』

「周囲の期待に100%応えられたら、そりゃあすごいけどね。そんな人間、どうせこの世にはほほいないのさ」

梨子ちゃんから、「反応はない。」

でも、ちゃんと聞いてくれてることはわかる。

「だから、今は∴ピアノが弾けるようになるまでは、期待のことなんて忘れてしまおうとい
い。案外、そうしてたらまた弾けるようになるさ」

『そんなものなの?』

「ああ。そんなものさ。大人が言うんだ、信用できるだろう?」

『スカートの中を覗くことに、青春を費やした大人の言うことよね?』

「一つのことには全力を注いだんだ。立派なことだろう」

『ものは言いようね』

「言い方次第で印象を変える。大人の基本技能さ」

『ますます信用できなくなっちゃうわよ？』

「おっと、それは困るね」

『ふふ。…ねえ』

「なんだい？」

『ありがとう』

不意打ちの言葉だった。

何かお礼を言われることをした覚えも全くなかったので尚更だ。

『ハルさん、照れてるでしょ』

「…ああ。一本取られたよ」

『ふふ』

まさか照れていることまで察知されるとは。

最近は梨子ちゃんにからかわれることも多くなつたもんだ。

『そろそろ寝るわ。明日、お迎えよろしくね』

「ああ、頑張ってくれ」

『ええ。それじゃ』

まあ。

からかわれるだけで彼女が笑顔を見せてくれるというのなら

それも悪くはないだろう。

※

そろそろ、千歌ちゃんたちのライブが始まる頃か。

時計を見て、ふと思う。

彼女たちなら大丈夫だ。

そう思っているのだが。

「時間の流れって、こんなに遅かったかな」

そんな言葉が、つい口をついてしまう。

2年前、俺のよく知るスクールアイドルたちも、東京でライブを行った。

そのときは…無事成功とは言えない結果だった。

その記憶が、今でも脳裏に焼き付いている。

あのときの、彼女たちの表情は今でも忘れられないのだ。

「…果南ちゃんあたりに、女々しい、なんて言われそうだ」

仕方ないので、気分を変えるためにお茶を汲む。

今日は、とてもものが渴く。

彼女たちの結果が届いたのは、それから結構経ってからだった。

その間、お客さんが来なかったのは幸か不幸か。

彼女たちは、ちゃんと歌えて、踊れたらしい。

それも、これまでで一番のクオリティだったそう。

きつちり、ベストを尽くした。

そういうメッセージが、アプリに届いていた。

そして。

その結果が、写真で送られていた。

得票数と、順位。

0票で、30組中30位。

それが、今の彼女たちの、ベストの結果だということ。

それが、現実だった。

帰ったAqoursと布屋さん

「一緒に、駅まで迎えに行かないかい？」

「電話も使わず、わざわざ直接言いに来るなんて。よっぽどですわね」

「正直、今回はかなり強く頼み込むつもりだったからね。断られたら土下座でもしよう
と思っただけなんだ」

「…家の前でそれは、勘弁していただきたいですわ」

結果を受け取り、電車に乗った時間を聞いた俺はダイヤちゃんの家に向いていた。

インターホンで彼女を呼び、入り口のところで話しているのが現状である。

「…まあ、今回は、こちらからもお願いしようと思ってました」

「ルビイちゃん、心配だもんね」

「…ええ。もちろんそれもありますわ」

ルビイちゃんだけじゃない。

きつと、Aqoursみんなのことを心配してくれているのだろう。

得票のことはまだ聞いてないみたいだ。

俺から伝えるのは、今はやめておこう。

「よし、とりあえず迎えに行こうか」

「もう帰ってきますの？」

「今から行けば、2時間前には着けるよ」

「…そんな早くついてどうしますの？」

「迎えてあげるに決まってるじゃないか」

「少し落ち着いてください」

呆れたようにため息を吐くダイヤちゃん。

焦っていること、ばれたらしい。

結局、みんなが到着する5分ほど前に駅に到着した。

長く感じる5分が経過してから、彼女たちと思わしき集団を見つけた。

ところが。

「…彼女たち、人気なんだね」

「スクールアイドルとしての活動は、よく知られていますわ。だからこそ、今の彼女たちには少し辛いかもしれません…」

そう言うダイヤちゃん。

彼女たちは、クラスの女の子たちに囲まれていた。

結構な人数の子に囲まれており、この状態では話しかけ辛い。

それを見るダイヤちゃん表情は複雑そうだ。

ダイヤちゃんは得票数はわからなくとも、結果が芳しくないのは予想ができていたのかもしれない。

「迎えに行つてきますわ。ハルさんはここで待つててください」

「ああ、わかった。頼んだよ」

少しだけ遠くから、彼女たちを眺める。

ダイヤちゃんが、Aqoursに声をかける。

すぐに、ルビイちゃんが飛びついて泣いているのが見えた。

それを優しく撫でるダイヤちゃん。

俺は、少しの間その場を動けなかった。

帰る前、少しだけ海を見に行くことにした。

ダイヤちゃんが、話したいことがあるんだそう。

きつと、自分たちの過去のことだろう。

打ち明けるんだと、車で言っていた。

相変わらず俺は、みんなと少しだけ距離を置いて行つた。

すぐ近くに行かないのは、かける言葉が見つからなかったから。同じ経験を、俺はしていないのだ。

だから、この場はダイヤちゃんが任せていた。

我ながら情けない。

何かしたいのに、できることが思いつかない。

でも、それで時間が経つのを待つだけにはいかない。

今、ダイヤちゃんが時間を作ってくれている間に、俺は俺のやれることを探さないと。海辺までやって来た。

ダイヤちゃんが少しずつ語り始める。

今のスクールアイドルの状況を。

A—R—I—S—E、*μ*sの活躍以降、その数は爆発的に増加し、レベルが飛躍的に上がったこと。

A—q—o—u—r—sのやったことが、決して悪かったわけではなくただただ、相手が悪かったのだということ。

そして。

彼女たち、つまりはダイヤちゃんたちが東京でライブをやったときは

歌えなかったということ。

みんなをそれぞれのおうちに送り、最後に千歌ちゃんと梨子ちゃんを送りに来た。

結局かける言葉も碌に見つからなかったが、それでもなんとか言葉を繋ぐ。

「じゃあ、今日はゆっくり寝るんだよ」

「ええ。ありがとう」

「千歌ちゃんも、早くお風呂に入るんだよ？」

「うん…」

千歌ちゃんの返事は、生返事だ。

「千歌ちゃん…大丈夫？」

「…うん。少し、考えてみるね。私がちゃんとしないと、みんな困っちゃうもんね」

そう言って、力なく微笑む。

結局今日は

誰も、笑っていないかった。

ああ、ダメだ。

こういう空気は、苦手なんだ。

励ます言葉は、全く思い浮かばない。

励ます方法も、考えられない。

それでも。

俺にできる何かを、やらないといけない。

うまい言葉を考えることはできなかった。

だけど。

「言葉で示せないなら、せめて行動で示さないとね…」

義理のためでも、同情でもない。

ただ俺が、あの子達のあるな表情を見たくないってだけ。

あの曇った顔を、晴らしたいだけ。

「励ます話ができないなら、せめて話を聞くくらいはしようじゃないか」

空を見て、誰にでもなく呟く。

電話じゃなく、直接話したい。

この時間は無理だろう。

でも、できる限り早めがいい。

であるならば、待ち伏せしよう。

「場所は…あそこしかない…かな」

※

朝。

結局あまり寝れなかった私は、海に来ていた。

自分でもよくわからないけど。

海に来たら、何か見える気がした。

ここからじゃ、何も見えない。

いつそ、このまま水に浸かろうか。

そんな風に、考えてたときだった。

見たいものは見えなかったけど

思わぬものが、見えたんだ。

「おはよう、千歌ちゃん。君も海水浴かい？」

そこにいたのは

昨日と同じ服のまま海に浸かる

ハルくんだった。

「よかつたら、話し相手になつてくれるかい？」

やつと来てくれた。

もともと海に浸かつて待つつもりはなかったのだが、見ていたら入りたくなつたのだ。

それがどれくらい前のことかはもう忘れたが。

とはいえ、予想通りここに来てくれたのだ。

案外、俺の直感も当てになることがあるらしい。

「なに……してるの？風邪ひくよ？」

それが、最初の一言。

とても驚いているようだ。

そりやそうか。

「海水浴だよ。人が多いのが苦手だからね、人の少ない時間に来たんだ」

今度は何も言わない千歌ちゃん。

なんだい、反応してくれないのか。

じゃあ、話を続けるとしよう。

千歌ちゃんの方は見ないで、言葉を発する。

「けど、さすがにそろそろ寂しくなってきたね。話し相手を探していたところなんだ」

「そんなの、来るわけじゃないじゃん…」

「ああ、俺もそれに気づいたところだったんだが…君が来てくれた」

「それは…」

そこから、何を続けたかったのか。

それはわからない。

言い切る前に、千歌ちゃんはまた黙ってしまったから。

「千歌ちゃん」

「ん？」

「スクールアイドル、続けるのかい？」

「…っ」

千歌ちゃんの方は見ずに、質問だけ投げかける。

その質問に、ちよつとだけ驚いたようだが。

それでも、ちゃんと返事はくれた。

「…うん。続けるよ。ここでやめたら、何もわからないままになっちゃうから」

その言葉を聞いた俺は、どんな表情をしていたんだろうか。まだ日も差していない海面に、俺の顔が映ることはない。

バシヤリという音が聞こえる。

後ろで、千歌ちゃんも海に入ったようだ。

「だってまだゼロだもん。ゼロ、だもん。…ゼロなんだよ…」

ちよつとずつ、声は近づいてくる。

でも、その声はどんどん弱くなる。

歌の練習をして

ダンスの練習をして

衣装を練って

PVも作って

みんなで努力して

「スクールアイドルとして、輝きたいって…っ」

ダムが、決壊する。

溜め込んでた思いが、溢れ出す。

「なのにならなかったんだよ！悔しいじゃん！」

何かを叩く音がする。

振り向くと、千歌ちゃんが自分の頭を叩いたようだった。

さらに手を振り上げて

そのままもう一回叩こうとするその手を、止める。

振り払おうとは、しなかった。

「差がすごいあるとか、昔とは違うとか、そんなのどうでもいい！」

そのまま、もたれかかってくる。

千歌ちゃんは続ける。

「悔しい！やっぱ私……」

海水で濡れた俺の服に

千歌ちゃんの涙が染み込む。

「悔しいんだよ……」

涙は、止まらない。

袖までびしょ濡れの俺が今彼女を抱きしめたら、髪まで海水で濡れてしまう。

だから代わりに、腕まくりをして頭を撫でる。

もちろん、その手は乾いていることを確認したよ。

「…それが君の気持ちだろう。柄にもなく我慢なんて、似合わなかったよ」
「だって私が泣いたら、みんな落ち込むでしょ？今まで頑張ってきたのに。せつかくスクールアイドルやってくれたのに…悲しくなっちゃうでしょ？」

涙は止まらず、声はますます震える。

我慢、しすぎだよ。

「だから…っだからあ…っ」

「…そうかい、よく頑張ったじゃないか」

リーダーとして、全部背負い込もうとした千歌ちゃん。

辛くて、きつい体験だっただろう。

それでも、頑張り通した目の前の女の子。

ちよっとでも、ほんのちよっとでも彼女の頑張りを労うように。

俺は、手を動かしていた。

しばらく、嗚咽だけが聞こえていた。

その間俺は、ずっと彼女の頭を撫で続けた。

それから、少しして。

こちらに向かってくる5つの影を見つける。

遠目にも分かる、Aqoursのメンバーたち。

小走り：じゃないな、ほとんど全力疾走でこっちへやって来る。

みんな、やっぱり気にしてくれてるらしい。

いいメンバーだよ。

「いいかい、千歌ちゃん。みんな、千歌ちゃんのためにスクールアイドルをやってるわけじゃないさ。自分で決めてやってるんだ」

「そうよ」

「…え？」

俺の言葉に答えてくれたのは梨子ちゃん。

驚いてそちらを向く千歌ちゃん。

そこには

Aqoursのメンバーが揃っていた。

服が濡れることなんて、気にもせず。

みんな、気づいたら千歌ちゃんのすぐ近くまでやってきていた。

ここから先は、彼女たちの出番かな。

入れ違いになるように、俺はその場を離れる。

途中、曜ちゃんに話しかけられた。

「ハルくん？」

「あとは、君たちに任せましたよ」

「帰っちゃうの？」

「タオルをとってくるだけさ」

「…ん。ありがとね」

それだけの会話。

俺がやることはやったのさ。

後ろから、また千歌ちゃんの鳴き声が聞こえる。

せつかく泣き止んだというのに。

今度はAqoursのみんなに泣かされてしまったようだ。

「戻ってきたときには、笑っていてくれよ」

雲が開け、陽の光が差し込む。

空は、やっとな晴れた。

※

「ごほっげほっ。つく、まさか、本当に風邪をひくとは」

「そりゃあ、陽も出てない時間から、3時間も海に浸かってれば風邪もひくわよ」
「むしろよく凍死しなかったね」

「バカは風邪ひかないっていうけど、今回はバカだからひいた風邪ね」

みんながよく勉強とか食事とかに使っているうちの和室。

そこで、今俺は寝込んでいた。

理由は風邪。

だるいし、咳が出る。

なのに、曜ちゃん和梨子ちゃんがあまり優しくくない。

呆れられているようだ。

「ごめんね、ハルくん。私に気を使って…」

「違う。ただの海水浴だ。君に気を使ったからじゃない」

逆に、千歌ちゃんが随分しおらしい。

なんだい、その顔は。

調子が狂うじゃないか。

あ、もう狂ってたな。

「世話をしてくれるのはありがたいが、君たちにまで風邪をうつすわけにはいかないん

だ。早めに帰りなさいよ」

「でも、私のせいでひいた風邪だし…」

「だから気にしなくていいと言っているのに」

「ハルくん、ちゃんとマスクしてるし大丈夫でしょ」

「責任はとれないよ」

「そうは言っても、千歌ちゃんたちが風邪を引いたら、ハルさんだって心配するでしょ？
それと同じよ」

「…反論はできないね」

大事な知人が病気になれば、当然心配くらいする。

そういう意味では、ちゃんと看病したいと思うのも自然なのだろうか。

「ハルくん、私たちが風邪引いたら看病してくれるの？」

「あ、じゃあ私にうつしていいよ！」

「曜ちゃんずるい！私が原因作っちゃったんだから、私が責任持つて風邪をひきとるよ
…はい、うつして！」

「無茶言わんでくれ。つてこら、マスクをとるんじゃない」

「あの、わ、私にうつしてもいいのよ？」

「君まで何を言ってるんだい…。みんな、そんなに学校が休みたいのかい」

「「そうじゃない！」「」

とりあえず、マスクを返してくれ。
のど、痛いんだ。

あと、耳元で叫ばないでくれ。

そんな文句を言う元気は

もう俺にはなかった。

風邪、辛いなあ…

千歌ちゃんは、笑ってる。

俺が笑えるようになるのは、まだ数日かかるらしい。

心残りとは布屋さん

『スクールアイドル、やめたんだ』

果南ちゃんからそれを聞いた俺は、どんな表情をしていたのだろうか。

理由は何なのかとか。

本当にやめなきやいけなかったのかとか。

思いつくことはいくつもあつたけど

言葉にはならなかった。

東京でのライブが失敗に終わったことは聞いていた。

でも、それを理由にするなんて思えなかった。

マリーちゃんが海外へ留学したのは、そのすぐ後。

スクールアイドルをやめたのは、

メンバーがいなくなってしまうからだったのか。

それとも…

※

「夏祭りでライブを？」

「そうなんです。一応、運営委員会の方からオファーがあったみたいです」

「向こうから話を持ちかけられたのかい。それはすごいじゃないか」

「ただ…」

「練習時間、あまりないから」

「それもそうだ。」

今日、店に来ているのは1年生3人。

話しているのは、今度行われる夏祭りのこと。

夏祭りのステージで、A q o u r s のライブをやってほしいと言われたんだそう。

東京でのことを乗り越えた彼女たちに、これはいい追い風になるだろう。

参加は大いに賛成だ。

「まあでも、君たちならなんとかなるだろうさ。がんばってみたらいい」

「千歌先輩も、今やれることを全力でって言ってました」

「そうかい。いいじゃないか」

「まったく。この前から妙にやる気にあふれちゃって。ついてくこつちの身にもなって

ほしいわ」

そんなことを言うのは善子ちゃん。

口で言うわりには、ずいぶん嬉しそうだ。

最初は少し心配だったものの、最近は善子ちゃんもだいぶ学校に馴染んできたみたいだ。

心底安心である。

「なんにせよ、元気でやってるようだと安心したよ。ラブライブ予選まで、このまま突っ切ってくれ」

「んー…」

「それが…」

「そうともいえないのよ…」

「おおっ…」

おや。

どうしたんだらうか。

今のこの子たちに、何か不安材料があるのか。

俺には心当たりがないのだが…。

「その…詳しいことは、千歌先輩に聞いてほしいすら」

「そうかい。じゃあまあ、そうさせてもらうよ」

なんだろう。
気になる。

夜。

時間もあつたので千歌ちゃんに電話をかけることにした。

最近、女の子と電話することが少し増えたな。

着信履歴を見てそんなことを思う。

『プルルルルガチャ』

「もしもしハルくん？どうしたのー？」

「ワンコールかい。早いね」

「そんなことのために電話したの？」

「いや、違うよ。ちよつと聞きたいことがあつてね」

「聞きたいこと？」

昼に1年生たちとした話をする。

祭り参加は賛成であること。

自分はそれを大いに応援していること。

ただ

何かまだ問題があるんじゃないかということ。

「問題っていうかね、果南ちゃんのことです…」

「ああ、なるほど。そういうことかい」

果南ちゃんと千歌ちゃんは昔から付き合いがある。

小さい時は、一緒に遊んでいた記憶もある。

加えて、実は果南ちゃんたちもスクールアイドルをやっていたことを知ったのだ。

色々、気になる部分もあるのだろう。

「スクールアイドル、なんでやめちゃったのかなって」

「東京のライブ、失敗したからじゃないのかい？」

「…ハルくんは、それが本当に理由だと思う？」

「…思わないね」

千歌ちゃんからの質問は思わぬものだった。

意図せぬ返しに、本音が口をつく。

「やっぱり、ハルくんもそうなんだ」

「彼女は昔からとにかく前進思考だ。一つの失敗が、立ち直れないくらいのストッパーになるとは思えないよ。それに」

「それに？」

「彼女がスクールアイドルをやりたくないようには、見えないんだ」

先日修繕した彼女の服。

あれは、スクールアイドルをやっていたときの練習着だった。

果南ちゃんは今でもあのシャツを着て、日課だった練習をやり続けている。

スクールアイドルが嫌なんて、到底思えない。

「あのね、ルビィちゃんが言ってたの」

『逃げてるわけじゃありませんわ。だから、果南さんのことを逃げたなんて言わないで』

そうやって、ダイヤちゃんがマリーちゃんに言っていたのを聞いたらしい。

逃げたわけじゃない。

「…そんなこと、マリーちゃんだってわかっているだろう」

「うん。私もそう思うんだ。だからね」

「ああ」

「果南ちゃんたちにも、もう一度スクールアイドルやってもらえないかなって」

「…そうかい。いいと思うよ」

「本当!？」

電話越しに聞こえる、千歌ちゃんの驚いた声。

何か驚かせるようなことを言っただろうか。

「なんで聞き返すんだい」

「ハルくんのことだから、『人の考えにはあまり踏み入らないほうがいいよ』とか女々しいこと言うんじゃないかって」

「女々しいは余計だよ。それは大人な意見というんだ」

「あはは。でも、果南ちゃんたちを仲間に入れるのは、賛成なんだね」

「ああ。俺も見てみたいんだ」

あの子達が、もう一度スクールアイドルとして輝くところを。

いつかまた、ステージに戻ってきてほしいって、思ってた。

でも、それは俺にはできなかつた。

だから。

「千歌ちゃん」

「ん?なに?ハルくん」

「あの子達を、頼むよ」

「うん!でも、ハルくんも協力してね!」

「俺にできることならね」

俺1人ではできなかったけど。

千歌ちゃん達となら

果南ちゃん達の止まった時間も、動かせるはずだ。

「神社でね、ダンスの練習してたの！」

「昨日の今日で、いきなり核心付いた情報を持ってきたね」

「あと、すごい距離ランニングしてた」

「ああ、それは日課みたいだね。昔、一度だけついてったことがあったよ」

「ハルくん、ついていけないの？」

「そんなわけないじゃないか」

彼女の半分も持たなかった。

距離もペースも、俺には歯が立たないレベルでした。

しかしまあ、ダンスといいランニングといい、どう考えてもスクールアイドルに未練があるのは明らかだ。

わからないのは…

「なんであそこまでするのに、スクールアイドルはやらないんだろう？」
まあそういうことだ。

性格、能力、やる気。

どれをとつても、あの子はスクールアイドルをやりたがってるようにしか見えない。

「今日ね、鞠莉先輩もいたの」

「マリーちゃんも？」

「うん…でもね、なんというか…」

「喧嘩でもしていたかい？」

「うーん…喧嘩ではないとは思うんだけど…うーん…」

「なにやら説明しづらいことがあったみたいだね」

要約すると。

マリーちゃんは、今のAqoursと一緒にスクールアイドルをやろうと果南ちゃんに言ったそうだ。

果南ちゃんはそれを拒絶した。

最後に、もうマリーちゃんの顔を見たくない、とまで言ったらしい。

「それはまた…朝からきついね」

「さすがに鞠莉先輩がかわいそうだったよ…」

「それは…うん、そうだね」

そこまでギスギスしていたのか。

アイドルとか関係なく、これはなんとかしなくては。

果南ちゃんの休学も、間もなく終わる。

そうすればまた、マリーちゃんも果南ちゃんは学校で顔を合わせるのだ。

それが、こんな喧嘩状態でなんて、辛すぎる。

あの子達には、笑っていて欲しいのだ。

仕方ない。

少しずつ彼女達を引き込んでもらうつもりだったのだが。

予定変更だ。

ここは

大人の俺が、人肌脱ごうじゃないか。

新生Aqoursと布屋さん

『放課後、3人を部室に呼びました！詳しい話をここで聞くのです！』

敬礼するよくわからないキャラクターと一緒に、そんなメッセージが送られてきたのは少し前。

確か今日は、果南ちゃんの休学か明ける日だったはずだ。

そんな日からこうして3年を部室に呼びつけるとは。

「さすが千歌ちゃん。動きが早いね」

感心感心。

千歌ちゃんの事情聴取に、あの子達がどれだけ正直に答えてくれるものか。

3人が学校で顔を合わせたのは、ずいぶん久しぶりのこと。

ここで仲違いをすれば、おそらく今後にも支障がでるだろう。

今日、ちゃんと心の内を明かせるかどうか、以後の生活に関わってくる。

「今日が勝負どころかな」

空を仰ぐ。

少し遠くに雲が見える。

「雨、降らないでくれよ」

外に出る予定なんてないのに、そんな言葉を口にしていた。

『果南ちゃんが怒って出て行っちゃいました（泣）』

そんなメッセージが届いたのは、心配していた雨が少しずつ降り始めていた時だった。

※

少しずつ降り始めた雨が、石の階段を湿らせる。

ところどころ、滑りやすくなっている階段を、注意して登っていく。

目的地は、私の好きな場所。

淡島神社。

ランニングのゴールで、隠れて歌やダンスの練習にも使う場所。

千歌達にはばれちゃったけど、昔は、私がここで練習しているのは、一人しか知らなかった。

『（ハハ）、ダンスの練習にはいいんだよ』

『ほうほう。頂上なのに踊り場とは、なかなか洒落ているじゃないか』

その朴念仁はそんなことを言っていたっけか。

最高に寒いギャグだった。

『ちなみに今のは、ダンスの場所で踊り場っていうのと、階段の踊り場というのをかけていて…』

『いや、説明しなくていいから、余計に哀れになるから』

彼は納得いってなかったが、そんな彼しかここで私が練習していることは知らなかった。

何か悩んだり、落ち込んだりした時も、よくここに来ていた。

何も考えずにここで体を動かすと、それだけで気が晴れるのだ。

さつきまで、千歌達としていた話しを思い出す。

何を隠しているのかと聞かれた。

私が隠し事をしてるって、あの子達は確信していた。

それは正しい。

スクールアイドルが嫌いなわなない。

まして、やりたくないなんて大嘘だ。

未練だつてもちろんある。

自分でやりたいと言ったことをやりきららないなんて、私らしくないのもわかってるんだ。

でも、そんなことより

ずっとずっと大切なものが、私にはあるんだ。

「鞠莉の大切な未来を、私なんかが潰しちゃいけないんだ」

東京でのライブの時、鞠莉は足に怪我を負っていた。

そのまま踊れば、大けがになるかもしれないほどだった。

鞠莉の性格だ。

言ってもやめないのなんてわかってた。

だから、私は歌わなかった。

そうすれば、ライブは始まらずに終わるから。

鞠莉には、海外の学校への留学という話しが来ていた。

タイミングとしては、ここしかないと思った。

だから、スクールアイドルを私はやめた。

これで、あの子は正しい未来へ進めるから。

そう。

正しい、未来に。

あの子の進むべき未来に、私はいない。

「これで……いいんだよ」

すぐそこにある鳥居に向かってつぶやく。

誰に言ったのかもわからない言葉。

返事はない……はずだった。

なのに

「いや、残念ながらよくないんだ」

そんな声が、聞こえた。

※

果南ちゃんが出て行った。

そう連絡を受けた俺は、迷いなくこの神社に向かっていた。

ここに来ることに、根拠はないが、確信はあった。

長い付き合いからくる勘だ。

どうやら、正しかったらしい。

散々やれ朴念仁だとかやれ鈍感だとか言われる俺だが、そんなことないじゃないか。

「なんのことは全くわからないけど、とりあえずその結論は間違ってると思うよ」

「ハル…なんでここに」

驚いている果南ちゃん。

理由なんて、わかってるだろうに。

「決まっているだろう。君を迎えに来たんだ」

「…千歌達に何か言われたの？」

「そんなんじゃないさ。君がここに来たのは、俺以外は誰も知らないよ」

「……」

果南ちゃんは何も言わない。

今彼女は、何を考えているのか。

表情からは読み取れない。

「そんなに警戒しなくていいじゃないか。ほら、傘。そろそろ雨も本降りになる。長居

は得策じゃないよ」

そう言つて傘を渡そうとするが、果南ちゃんは受け取ってくれない。

これは困った。

などと思つていたときだった。

「聞かないの？なんでスクールアイドルやめたのか」

そんなことを、果南ちゃんが口にした。

「ここに来たってことは、いろんなこと、千歌達に聞いてるんでしょ？」

「そうだね。君たちを勧誘しようとしていることは聞いてるよ。その度に、断られていくこともね」

雨粒が、少しずつ大きくなってきた。

もうあと数分もすれば、傘なしじゃ厳しくなるだろう。

雨と同じように。

果南ちゃんが、ポツポツと話し始める。

「私がスクールアイドルをやったら、多分鞠莉も付いて来ちゃうんだ」

「そうだろうね。多分、ダイヤちゃんも一緒に来るだろうさ」

「でもね、それって、鞠莉から未来を奪うってことなんだよ」

「…ほう。詳しく聞かせてくれよ」

傘も受け取らず、果南ちゃんは話してくれた。

独り言のように。

自分に言い聞かせるように。

この2年、どういうつもりでいたか。

マリーちゃんの言葉を、どんな気持ちで躲してきたか。
早い話。

果南ちゃんが、どれだけマリーちゃんを好きかってことを話してくれたのだ。
ちようど、話がひと段落したくらいだろうか。

『ブルルルルル』

携帯のバイブが鳴った。

長い。

電話みたいだ。

「ちよつとごめんよ、電話だ。もしも…」

『ハルくん！大変！鞠莉さんが出てっちゃった！』

「落ち着いてくれ。出たっつて、この雨で？」

『うん！ダイヤさんから、果南ちゃんの話聞いて…』

「あー、なるほど。…そうだね。そっちはしばらく待機しててくれ」

『え!?!ちよ、ハルくん!?!』

「大丈夫だ。マリーちゃんの居場所は大体想像つくから。俺が今から君たちのところ行くから、それまで待機」

『ほんとに?ほんとに大丈夫!?!』

「大丈夫大丈夫。じゃ、またあとで」

そうして、電話を切る。

俺は改めて、果南ちゃんに向き直った。

「マリーちゃんが、部室で待つてるそうだ」

「鞠莉が？ どうして？」

「さあねえ。まあ行つてあげてくれ。言いたいこと、そこでぶちまけてくるといい」

「……どういうこと？」

「君の想い、素晴らしいことだよ。でもそれは、マリーちゃんだって同じなんだ。あの子だって、留学や編入なんかよりずっと大事にしたいものがある。それをちゃんと、聞いてあげるといい」

何か心当たりがあるのか。

それとも何もわからないから考え込んでいるのか。

黙り込む果南ちゃん。

「それに、だ」

「？」

「お互い、我慢の限界だろう。いい加減、喧嘩の一つでもしてきたらいい」

どっちも、お互いを思いすぎているが故に、互いに身動きがとれていないのだ。

いっそ、ぶつかって碎けてしまった方がいい。

大丈夫。

彼女たちなら、壊れてもすぐ治るから。

走っていく果南ちゃんの背中を見て、そんなことを考えていた。

果南ちゃんが学校へ向かって30分くらいしてからだろうか。

千歌ちゃんたちにも学校へ来るように電話し、自分も学校へ向かう。

部室の前まで行くと、そこにはダイヤちゃんの姿があった。

「おや。てつきり、千歌ちゃんたちといると思ってたよ」

「一応様子見で、先に来たのですわ」

「そうかい。で、様子はどうだい？」

「……ちゃんと、お互いの気持ちを理解できたみたいですよ。今あそこに割り込むのは、いくらハルさんでも野暮つてものです」

「はは。違う。門のどこまで行こうか。千歌ちゃんたちもそろそろ来るはずだよ」

「ええ。そうですわね」

2人で、ゆつくりと校門まで歩く。

ダイヤちゃんの横顔は、憑き物が落ちたようにすつきりしていた。

「仲直り、できてよかったね」

「もともと、彼女たちは險悪になどなっていないのです。ただ、すれ違っていただけ」
「そんな2人をずっと見守ってきたんだろう？君も、大概世話焼きだねえ」

「お互い様ですわ」

「まったくだよ」

大好きな親友2人がすれ違っているのを、ずっと横で見守り続けてきたダイヤちゃ
ん。

その胸の内は、言葉になどせずとも伝わってくる。

そして俺も。

「ハルさん、さつきからニヤニヤしすぎでは？」

「女子校を歩いているんだ。健全な男子なら当たり前だろう」

「出禁にでもいたしまししょうか」

「手は出さないんだ。勘弁してくれよ」

「生徒会長にそういう話をするのですよ？誠意つてもものを見せていただかないと」

「おっと、そうくるかい。いいだろう。今度、その誠意とやらを見せることにするよ」

「ふふふ。楽しみにしときますわ」

軽口をたたき合う俺たち。

誠意…ね。

考えておこうじゃないか。

校門のどこまで来ると、千歌ちゃんたちが待っていた。

「ダイヤさんて、ほんとに2人が好きなんですね」

顔をあわせるなり、いきなりそんなことを言う。

ダイヤちゃんの方は、少し顔を赤らめている。

間違っではないないし、否定もできないのだろう。

「それより、これから2人を頼みましたよ。ああ見えて、2人とも繊細ですから」

それは君もでしょうに。

なんて思っていたら、千歌ちゃんがダイヤちゃんに寄って行って、こう言った。

「じゃあ、ダイヤさんもいてくれないと!」

「えっ? 私は生徒会長ですわよ。とてもそんな時間は…」

ここにきてまだそんなことを言うのかい。

素直じゃないね、まったく。

「ハルさん、なんですかその顔は?」

「いやいや。なんでもないよ」

「なんかムカつきますわね」

「不本意ながらよく言われるよ」

「生徒会の仕事なら大丈夫です！鞠莉さんも果南ちゃんも、それに」

千歌ちゃんが、視線をやる。

そこにいたのは、Aqoursのメンバーたちだ。

千歌ちゃんだけじゃなく、ちゃんとみんな来ていたらしい。

ルビィちゃんが、何か持っていることに気づく。

あれは…衣装？

「ルビィ？」

そう言われたルビィちゃんが、ダイヤちゃんに歩み寄る。

とても嬉しそうだ。

「親愛なるお姉ちゃん！ようこそ、Aqoursへ！」

言って、衣装を手渡す。

どうやら、ダイヤちゃん用の衣装だったらしい。

見たことのない衣装。

Aqoursの子達^が作った訳ではないだろう。

つまり。

2年前からずっと、ダイヤちゃんたちを待ち続けた衣装なんだ。俺と、同じで。

※

空いっばいに、光の花が咲く。

それを背景に、彼女たちAqoursが舞う。

2年前にすでに存在したスクールアイドルグループ、Aqours。

はじめは、3人だったそれは

今では9人になった。

その9人で初めてのライブ。

曲名は

『未熟DREAMER』か。すくなくとも今の彼女たちは、俺なんかよりずっと大人なんだが」

そんなことを呟いてしまう。

綺麗だ。

彼女たちを見て思う。

こんな景色を見れる日を、
ずっと、
ずっと、
待ってたんだよ。

1年生と布屋さん（上）

「次は綿菓子食べたいぞら！」

「ずら丸、さつきりんご飴食べたじゃない」

「でも綿菓子は食べてないよ？」

「いやそうだけど！」

「善子ちゃんもルビィちゃんも、好きなもの食べるといい」

「あ、ありがとうございます。でもいいんですか？」

「何がだい？」

「お金よ。いつも金欠なのに大丈夫なの？」

「たまになら大丈夫さ。今日くらいカツコつけさせてくれ」

「ありがとうございます！」

「うむ。ありがたく食べてくれ」

「ずら丸のその神経、ときどき見習いたくなるわ」

「あはは…」

本日は夏祭りライブの翌日。
祭り自体は2日体制である。

なので、2日目は普通のお客さんとして楽しんでいるのであった。
「そういえばお店の方はいいんですか？」

「ばあちゃんのとときから、祭りの日にお客が来たことはないんだ」

それに、一応扉のところへ俺の携帯の番号を貼っておいた。

急用のお客さんがいれば連絡が来るはずだ。

「今日は他のことなんて考えなくていいんだ。せつかくのお祭りなんだからね」

※

事の発端はあの祭りの後。

素晴らしいライブの余韻を感じつつ、出店を見て周っていた時だった。
携帯に着信が入ったのだ。

画面に表示されているのは、『黒澤ルビィ』の名前。

「もっもっ」

『あ、は、ハルさんですか？』

「ああ、そうだよ。お疲れさん。いいライブだった」

『ほんとですか!?!』

「ほんとだよ。ほんとだから、あまり電話越しに大声を出さないでくれ」

『えへへ…あ、そ、そうじゃなくて!』

「?どうしたんだい?」

『明日、花丸ちゃんと善子ちゃんと一緒に、祭りに行こうって話になったんですが…』

「ほうほう。いいじゃないか」

ようやく9人揃ったAqours。

みんながみんな、自分なりに想いのもとに努力して成功させたこのライブ。

1年生だって、慣れない環境の中で必死に努力したのだ。

ここいらで羽を伸ばすのも大事だろう。

『えっと、それですね…』

「ふむ」

どうにもはつきりしない話し方だ。

なんだろうか。

『は、ハルさんもどうかなって思ってた…』

「俺も?」

『は、はい、よければ。花丸ちゃんと善子ちゃんも、ぜひって』

「それはありがたいね」

『じゃ、じゃあ』

「ああ、ご一緒させてもらうよ」

『あ、ありがとうございます！』

「いや、お礼を言われるようなことはないんだけどね」

むしろこっちのセリフだろうに。

『じゃあ、集合場所ですけど…』

※

そして今は、1年生と共に祭りを楽しんでいるというわけである。

「ん？善子ちゃん、なんだいそれは？」

「たこ焼きよ」

「それはわかる。けどなんか…赤くね？」

「タバスコかけ放題って書いてあったのよ」

「…用途がわからないが…」

実際にこうして使っている人がいるということは、需要はあるんだろうか。

それにしてもかけすぎだとは思うが。

「のど、壊さない程度にしときなさいよ」

「これくらい平気よ。ハルも食べる？」

「遠慮しとくよ。というか、その色はあかんでしょ。俺には耐えられそうもない」

「んー。この刺激が美味しいのに」

そう言つてたこ焼きを頬張る善子ちゃん。

ほんとに美味しそうに食べている。

すごいな。

「善子ちゃん、辛いのが平気なんだね」

「ルビィちゃんは逆に、辛いのが苦手だったよね」

「はい、小さい時からそういうの弱くて…子供っぽいですか？」

「いや、俺も辛いのは苦手だからね」

「意外すら」

「そうかい？わりと見た目通りだと思うんだが…」

「大人っぽいし、そういうのは平気だと思つてたすら」

「そんなことないわよ。ハル、甘いもの大好きだし」

「へく。善子ちゃん、よく知ってるすら」

「なあつ！た、たまたまよ！」

「ルビイちゃんはポテトかな？」

「はい。い、いりますか？」

「じゃあ一本だけ」

「ど、どうぞ」

ルビイちゃんからフライドポテトをいただいてしまった。

おいしい。

「それ、詰め放題のやつだよね？」

「はい。でも私、あまりうまく詰められなくて」

「俺もあれは苦手なんだ。別にそんなに詰め込む気もないんだけど、なんとなく損した

気分になるんだよね」

「あはは。わかります」

そもそも出来る限り詰めたとして、果たして得になるのか。

「でも、こういうときは毎回買っちゃうんです」

「その気持ちもわかるよ。雰囲気というのは、食の上ではとても大事な要素だしね」

そういう意味では、損得に限らず買う価値はあるのだろう。

おいしそうにポテトを食べるルビイちゃん。

その様子はさながら小動物のようで。

なんというか

目に優しい光景である。

「これは…少なくとも200円以上の価値があるね」

「？」

「いや、気にしなくていいんだ」

よくよく考えれば

スクールアイドルをやるような女子高生3人をつれて歩いているのだ。

なかなか嬉しい状況なわけだ。

「花丸ちゃんは…なんというか、おいしそうだね」

「ハルさんも食べるずら？」

「いいのかい？」

「もともと出してくれたのはハルさんずら」

「それは気にしなくていいと…まあいい。もらおうかな」

「はい、あーん」

「うむ。…うん、いけるね」

「えへへ」

花丸ちゃんから綿菓子をもらった。

これまた素朴な味で美味しい。

「む、花丸ちゃん、ずるい…」

「ずら丸、やるわね」

なんかよくわからないが、ルビイちゃんと善子ちゃんが唸っている。

なんだろうか。

「ハル、ほら、のども渴いたでしょ!?!お茶あるよ、ほら!」

「痛い痛い。押し付けるんじゃない。ってこのやり取り、前もやった記憶があるんだがっ」

腹ごしらえは済んだ。

次は、遊びの時間だ。

1年生と布屋さん（下）

一通り食べたいものを食べた俺たちは、食べ物以外の屋台を楽しむ事にした。

「射的に輪投げに、金魚すくいにヨーヨー釣り…案外、食べ物以外にもたくさんあるのね」

「缶落としなんかもあるね？善子ちゃんは祭り、あまり行かないのかい？」

「し、知り合いに会ったら嫌でしょ…」

「ああ…」

切実な悩みだ。

「ちよつと、本気で同情するのやめてよ。余計哀れになるでしょ」

「いや、うん、すまない」

「だからそれをやめなさいってば！」

少しして、光る玩具のお店を見つけた。

光る腕輪や、剣の形を模しているのであろう玩具。

こういうものは、なぜかいい歳になっても惹きつけられるものがある。

使い道など微塵もないのだが。

「こ、これは！」

「どうしたんだい、善子ちゃん？」

「闇の紋章だわ……！」

「……そうだね」

善子ちゃんが手にしているのは、髑髏の描かれたワッペンだ。

気合の入った学ランとかの裏に刺繍されてそうなやつだ。

「……それ、ほしいのかい？」

「べ、別にそんなことないわ」

目が泳ぎまわっている。

隠す意味はないな。

「……おじさん、これ一つ。あ、袋はいいです」

「あ」

「ほれ。嘘をつくなら、もう少し上手につくことだよ」

「……ん。ありがと」

嬉しそうにしてくれる善子ちゃん。

まあ、このためなら安いもんだろう。

「さて、次に行こうか」

「はーい」

く射的

「やったー！当てたずらー！え？倒さないともらえない？ガーン」
「射的あるあるだね」

というか、この手のやつは倒すことなど本当にできるのか？
ゲーム機など、微動だにもしないんだが。

「私も、当てたけど倒せなかったわ。あれ、絶対倒れないわよ」
同感だ。

「わ、私はまず当てることができるかどうか…」

「そんなに気張らなくていいよ。好きなものを狙うといい」

「は、はい。じゃああのぬいぐるみを…えいつ」

『ポス』

そんな音と共に、ルビイちゃんの狙いだったリスのぬいぐるみが倒れていく。

お、取れたじゃないか？

などと思った瞬間だった。

『ポコ…ボタン』

「「「あ」」」

・倒れたぬいぐるみがかまさかの方向に転がり、横にあつたゲーム機を倒した。

おお。

ああやつて倒すのが正解だったのか。

「おおー！ルビイちゃん、すごいぞらー！」

「え、え？あれ？あれー？」

「あれ、ちゃんと倒したことになるのよね？」

「ダブル取りはありつて書いてあるよ」

というか、こうしないと倒せないんじゃないか？

「お嬢ちゃん、やるじゃないか」

「あ、えつと、ありがとうございます」

店員さんは感心しているようだった。

逆にルビイちゃんは苦笑いだった。

ダイヤちゃんもルビイちゃんも、ゲームはやらないはずだが。

結局、善子ちゃんのうちに預けておくということになった。

「別にあげてもいいんだけど…」

「さすがにもらえるわけないでしょ」

善子ちゃんは複雑そうだ。

く 缶落としく

「やったー！缶倒したずら！え、今度は落とさないとだめ？ガーン」

「これは缶落としあるあるだね」

「こんなのもあるのね」

缶落としては、積まれている空き缶に向けてボールを投げつけてそれを崩すゲームだ。

ボールといっても、お手玉のようなものを投げるのだが。

積まれた空き缶は、倒すだけではダメで、机の上から落とさなくてはならない。

落とした空き缶の数に応じて、商品がもらえるのである。

「場所によっては、単に的当てと言ったりもするらしいね」

「ルビィ、これ苦手です…」

「そうなのかい？」

「狙ったところ、全然行かないから…」

ルビィちゃんの場合、そのパワー不足も影響がある。

缶を落とさなくてはならないので、投げる際にある程度力を入れる必要があるのだ。

「ふふふ…こは私に任せなさい」

「善子ちゃん、得意なのかい？」

「やるのは初めてよ！でも、コントロールはそこそこ自信があるの」
顔を片手で覆う善子ちゃん。

中二つぽいポーズだ。

そういえば運動神経結構いいねよ、善子ちゃん。

「見てなさい！魔界から魔力を受けし私の、ナイトメアボール！」

「うん、わかったから声には出さなくてくれ。こっちまで恥ずかしくなるから」

とてつもなく恥ずかしいことを叫びながら放たれたお手玉は、見事に全ての缶を落と
した。

まじでか。

「ふっふっふ。どう？」

「おおー！善子ちゃん、すごいぞらー！」

「善子ちゃんすごいね！」

「ヨハネよ」

ヨハネちゃんはドヤ顔だ。

ちなみに商品としてもらったのは、巨大なエアガンだった。

どう考えてもヨハネの武器ではないよ、それ。

「ヨーヨー釣り」

「今度こそ、丸が活躍する番ずら……」

「ヨーヨー釣りで活躍ってなによ」

「が、がんばって！花丸ちゃん！」

和紙で作ったような紐の先端に揺れるフック型の針。

その針が、花丸ちゃんの手の動きに合わせて右へ、左へ動き回る。

ヨーヨー、この場合は水風船だが

こいつは別に動かないのだから、狙いを定めてゆっくり釣ればいいものを。

思わず苦笑いをしてしまう。

「よ、よし、ひっかっかっかっかっかっかっか……このまま……」

ようやく針に引っ掛けたヨーヨーを、慎重に持ち上げていく花丸ちゃん。

ああ。

濡れた紐をそんなにゆっくり持ち上げたら……

『ポチャン』

無情にもプールに帰っていくヨーヨー。

花丸ちゃんの手に残っているのは、使い道をなくした紐のみ。

「あー…やってしまったぞら…」

「惜しかったんだけどね…」

どよんとした空気が漂う。

なにも、ただのヨーヨーすくいでそこまで重くしなくても…。

「ちよつと、なんとかしてよ」

「どうしろって言うんだい」

「わかんないけど。やりづらいじゃない」

「そう言われても…あ、ほら、残念賞でちゃんと一個もらってるじゃないか」

「でも、なんか元氣ないわよ」

少し遠くから見ていた俺と善子ちゃんのところに戻ってきた、花丸ちゃんとルビィ

ちゃん。

ヨーヨーはもらったはずだが、どうにも花丸ちゃんの表情は浮かない。

「花丸ちゃん、どうしたんだい？」

「…丸だけ活躍できてないぞら」

「…なるほど」

「丸も何かでいいとこ見せたいぞら！」

「そんなこと言ってもねえ…」

いいところ……か。

なんでかはわからないが、要するに格好をつけたいわけだ。
難しいな……

そもそも、お祭りとはそういうものではないし。

「……あ」

「「？」」

「……カレー、余ってたんだ」

※

「おかわりずらー」

「花丸ちゃん、そんなに食べても大丈夫？」

「大丈夫ずらー！」

「いくらでもあるから、ゆっくり食べてくれ」

「もう少し辛くても良かったんじゃない？」

「タバスコならあるよ」

「いただくわ！」

「ごめん、冗談なんだ」

「わ、私はこれくらいの辛さでいいかなって」

まあそれが普通だろう。

昨日、なんとなく食べたくなつたのでカレーを作つたのだが、作りすぎてしまったのだ。

その処理に困っていたので、3人を呼んだわけである。

期待通り、花丸ちゃんがよく食べてくれている。

「でもよかつたんですか？ 晩御飯までもらっちゃって」

「良いもなにも、こっちから頼んだんだ。余らせるのはもつたないしね」

一人暮らしにおいて、カレーの作りすぎは、焼きそばのフライパン直食いや雨の日に洗濯物を取り込み忘れるくらい定番の出来事なのだ。

「これがずら丸の活躍の場なの？」

「実際大活躍しているじゃないか」

「まあそうだけど」

苦笑い気味の善子ちゃん。

でも

「おいしいずら〜」

カレーを頬張る花丸ちゃんを見て、微笑みを見せてくれた。

「美味しそうに食べ物を食べる姿が、花丸ちゃんのいいところだよ。可愛いじゃないか」
「ずらっ!!」

善子ちゃんに言ったつもりだったのだが。

花丸ちゃんに聞こえていたらしい。

「そ、その、おいしいからつい…」

「ん?そのまま食べてくれて構わないよ?」

「そ、その、ちよつとはずかし…」

あれ?

手が止まってしまった。

ああ、そういうことか。

「すまないね。食事中にあまりジロジロ見るのは礼儀がなかったよ」

「え?あ、いや、そうじゃなくて…」

?

違うらしい。

顔も赤くなっているし、もしかして体調でも悪いのか。

そう思い、花丸ちゃんのおでこに手を当てる。

「ちよつと熱いね。大丈夫…」

「ふ、不意打ちはだめずらー!」

メコツ。

そんな音ともに、顔面に強い衝撃を感じる。

「自業自得ね」

「ハルさん…鈍感は相変わらず…」

意識を失う直前に聞いたのは

2人のそんな眩きだった。

夏の始まりと布屋さん

夏が、目前に迫っている。

いや、人によってはもう今が夏だという場合もあるだろう。

暦によれば、夏は大体6、7、8月を示すみたいだが、6月はまだ真夏というにはいささか涼しい。

そう。

夏真っ盛りといえ、やはりこの7月なのだ。

話は変わるが

ここ、内浦は海水浴場としてそこそこのいい場所だ。

例年、それなりに多くのお客さんがここに海水浴を楽しみに来る。

結局

何が言いたいかというと、だ。

「今週の土日がね、楽しみで仕方ないんだよ」

「うわあ」

「さすがにひきますわ」

「まあいつものハルだけどねえ」

今日うちに来ているのは、3年生3人。

先日、新生Aqoursとしては初のライブをやりとげた彼女たち。

メンバーともうまくやれているみたいで、今日はその報告をしに来ていた。

「まったく…ハルさん、この時期はいつも女の子のことばかり考えてますの?」

「いつもつてことはないが…まあ9割方は」

「ほとんどじゃありませんか!」

「夏という季節なんだ。仕方ない」

「仕方ない?」

この質問はマリーちゃんからだ。

「女子達は薄着になりやすく、露出が魅力的になるだろう? 加えてウオータースポーツが盛んになるからね。水着を見る機会も非常に多くなる。さらには、祭りとかのおかげで、普段はなかなかお目にかかれなような浴衣姿を見ることもできる。なんとまあ、魅力的な季節か」

女の子のことを考えてしまうのも、仕方ないというものだ。

「あ、もしも警察ですの?」

「待ちたまえダイヤちゃん」

「放してくださいますか？今大事な電話をしているので」

「放したら俺は逆に捕まるだろう」

「自覚はあるのですね」

「君の目を見ればわかる」

「ミミを見るよりひどい。」

「まあ、ハルも男の子だからね。多少はそういうのも仕方ないんじゃない？」

「どこが多少ですか？」

「ハルの場合、思ったことをすぐにスピーキングしてしまうのが問題なのよ」

「嘘をついたり隠し事をするのが苦手なんだ」

「口を開けなければいいと思うんだけど」

「欲求には忠実でね」

「やはり警察に引き渡しましょう」

「はは、手厳しいね」

そんな会話をする。

なんだかんだ言っても、そんな会話をしてくれるダイヤちゃんも、大概優しい。

ダイヤちゃんが携帯から手を離さないこと、そしてディスプレイに常に表示されている110の番号が非常に気にはなるが。

「ねえハル？」

「ん？なんだい？」

「私達も女子高生だよ？」

「そうだね」

「水着とかも着るよ？」

「ああ、今でも目に焼き付いているよ」

「結構、薄着の時もあるよね？」

「そもそも君たち、スカートはかなり短いじゃないか」

「…そういう対象では見ないの？」

「！！」

ダイヤちゃんとマリーちゃんが勢い良くこちらに向く。

どうしたというんだい。

「そういう対象っていうと…君たちを女の子としてってことかい？」

「そ、そうだね」

「ハッキリ答えてちょうだい」

「有耶無耶にしたら承知しませんわ」

「…答えるから、そんなに睨まないでくれよ」

今にも机を乗り越えそうなくらい詰めてくる。

暑い暑い。

「もちろん、君たちだって大層魅力的だよ。見た目に関しては言わずもがなだし、内面の良さだってたくさん知っているしね」

「…そういうの、よく簡単に言えるね」

「何度も言うけど、隠すのが苦手なんだ」

「はあ…だからこそわかってしまう」

「そこにはない」

「特別な好意…」

「お？」

なんのことはよく分からない。

ただ、なぜかがっかりしているようだった。

おかしいな。

褒めたつもりだったのに。

※

「ワレワレハ〜ウチュウジンダ〜」

扇風機に向かって言葉が発する千歌ちゃん。

エアコンはあるのだが、予算の都合上まだ使いたくはないので、今日は扇風機で我慢である。

「今時そんなセリフを聞くとは思わなかったよ」

「扇風機と言ったらこれでしょー」

「そうなの？」

「いや、千歌ちゃんだけだよ」

「え？ 私もやるよー？」

「じゃあ千歌ちゃんと曜ちゃんが特別なんだ」

「いやいや、むしろやらないほうが特別なんだよ」

笑いながらそんなことを言われてしまう。

「それをやると、目が乾いて最悪失明するよ」

「えーうそ!?!」

「うん。今思いついただけだから、多分間違ってるよ」

「なあー！ハルくんが嘘ついたー！」

「いけないんだー！」

指をさしてブーブー言ってくる。

小学生か、君たちは。

「ハルくん、嘘つかないって言ってたのにー」

「思いついたことをそのまま言っただけなんだ。嘘をついたつもりはないよ」

「屁理屈だー」

「まあそうだけど」

そんな会話をしていた時だ。

梨子ちゃんが、扇風機を見て何か驚いていた。

「どうしたんだい、梨子ちゃん」

「あの、これ、真ん中の部分壊れているの？」

「真ん中？ああ、それはそういう仕様なんだよ」

「ええーなんで？」

梨子ちゃんが驚いていたのは、扇風機の真ん中に穴が空いていたことらしい。

昔の扇風機は、大体こんな風に真ん中に穴が空いていたのだが、どうやら梨子ちゃん
は初めて見たようだ。

「よく考えたら理由は知らないね。そういうもんだと思ってたよ」

「あ、危ないじゃない」

「まあ確かにね」

指なんか巻き込まれようものなら、それはそれは危険だろう。

でも、なんで穴空いてるんだろう。

「今だと、むしろ羽のない扇風機もあるよね」

「あれはすごく高いんだ。魅力的なんだけどね」

安いエアコンなら買えてしまうレベルである。

「そういえば、ここはエアコンつけないの？」

「電気代の節約だよ」

「長い時間つけると、あつという間にすごい電気代になるもんね」

「そういうことだよ。学校ではエアコンが付いているかい？」

「付いてないよー。もう毎日暑くて暑くて」

「そりゃあ寝てれば暑いだろうさ」

「なんでわかったの!？」

「なんとなくだよ」

「当てるつもりもなかったのだが。」

「でも、寝てなくても結構暑いだよ」

「ねー。もう、汗で手が濡れちゃってねー。ノートが張り付くんだよー」

「汗で透ける制服も、女子高生の一つの魅力なんだ。申し訳ないけど、我慢してくれ」
「あ、もしもし警察ですか？」

「おーけー。少し弁明の時間をもらおうか」

「署で聞くわ」

笑顔の梨子ちゃん。

ちよつと怖い。

「このやりとり、先日3年生とやったばかりなんだがね。」

もしかして、そういう対処の仕方をA q o u r sの間で決めているのか？

「最近は梨子ちゃんも、ハルくんの扱いが上手くなったよねー」

「まったくだよ」

「ふふ。そうかしら」

「ちよつと妬げちやうよー」

「まだまだ、千歌ちゃんや曜ちゃんには勝てないわ。もつと上手に扱うようになってみ

せるわ」

「勘弁してくれ」

嬉しそうな梨子ちゃん。

「案外、旦那を尻に敷くタイプの奥さんになるのかね」

「ほえっ!? お、奥さん? / / /」

「ああ。…なんか変なこと言ったかな?」

「べ、別に、ハルさんの奥さんでも…」

「もう少し大きな声で言ってくれるかな?」

「なんでもありません!」

「そ、そうかい」

「ハルくん!」

割り込むように千歌ちゃんがやってきた。

「どうしたんだい」

「私、私はどんな奥さんになりそう!?」

「急にどうしたんだい」

「いいから!」

「そうだね…持ち前の明るさで、いつも家庭を明るくしてくれる奥さん、かな」

「~~~~~ / /」

顔を真っ赤にしている千歌ちゃん。

多分、嬉しそうにしている。

「ハルくんハルくん! 私は?」

「君までかい」

今度は曜ちゃんだ。

「曜ちゃんは…そうだね。案外、旦那の意見を尊重するタイプになるんじゃないかい？
なんというか、困ったら優しく励ましてくれそう」

「くっ／＼／／そっかそっか。えへへ／＼／」

というか俺は、何を偉そうに人の評価などしているのか。

結婚どころか、彼女すらできたことなどないというのに。

「あ、じゃあ」

「ん？」

「ハルさんは、その3つの中ならどのタイプが一番好きなの？」

「…それは、ここで答えなくてはいけないかい？」

「…もちろん！」

「…どれも魅力的ってことで、ファイナルアンサーだよ」

「…えええー！」

「やかましいわ」

そのあと、しばらく問い詰められ続けました。

みんな魅力的、嘘じゃないんだけどなあ。

合宿と布屋さん

今日から学校が夏休みに入る。

その知らせを聞いたのは、1週間ほど前のこと。

毎年、当たり前前に訪れるこの長期休暇は、俺のモチベーションを非常に下げるイベントだ。

「今日から実に1ヶ月…その間、女子高生がここを通ることはない…」

背もたれに体を預けつつ、そんなことを呟く。

目線の先は、もちろん浦の星女学院。

ただでさえ暑くて滅入るというのに、さらにはモチベーションまで削られる。

「はあー」

ため息をやめろと言われても、無茶な話である。

「もー、ハルくん、いつまでそうしてるのー?」

「私たちが来てから、もう5分くらいそうしてるよね」

「高校生にとっては、夏休みはビッグイベントなんだよ。外せなんて言われても、それこそ全国の高校生を敵に回すよ」

「…そりゃあ、わかっってはいるんだがね」

でも、考えてしまうものは仕方ないのだ。

本日来ているのは、2年生3人組である。

千歌ちゃんが、何かを思い出したように話を始めた。

「あ、そういえばね！私たち、合宿をやることになったんだよ」

「合宿…かい？」

「そう！*μ*、sもやってたみたいだからね！」

今日の活動中、ダイヤちゃんが夏休みの特訓メニューを開示したらしい。

その内容はかなりハードだったらしく、千歌ちゃん、曜ちゃん、果南ちゃんがしなくてはならないお家の手伝いに支障が出るものだったようだ。

そこで、練習時間を夕方から夜に拡張するため、合宿をすることにしたんだそうだ。

「そうかい。いいんじゃないかい？」

泊まる場所は千歌ちゃんのお家らしい。

まあ差し入れくらいは考えておこう。

「ちなみにこれ、ダイヤちゃんが最初に提示した練習メニューだよ」

そう言って、曜ちゃんが写真を見せてくれる。

円グラフの形状になったそれには、練習メニューの時間バランスが記されていた。
「…なんない、これ。拷問か何か？」

遠泳15km、ランニングも15kmに加えて、当然のダンスレッズンに発声練習。
さらには

「精神統一？」

練習…なのか？

逆に見てみたい気もするが。

巻き込まれるのは勘弁なので、夕方には行かないでおこう。

「いつからなんない？」

「明日だよ」

「また随分急だね」

「ダイヤさん、張り切ってたからねー」

「空回り、しなきゃいいけどね」

昔からそういうタイプだし。

「ちなみに明日は朝4時に海の家集合だって」

訂正。

すでに空回っていた。

電車もバスも、まだ動いていない時間だろうに…。

と、そこで気付いた。

どうも、さつきから梨子ちゃんの言葉がない。

気になってそちらに目をやると、なんだか考え事をしているようだった。

どうしたのか。

そう聞きたいところだが、ここでは話しくいだろうと思い、ひとまず保留。

何もないといいのだが。

※

朝4時。

さすがに、本当に来た子はいないだろうと思いつつも、一応海へ出向く。

電車はなくとも車はあるのだ。

もしAqoursの誰かがいたとしたら、さすがに暇だろうし、何より危ない。

念のための様子見である。

「あ、ハルさん！おはようずらー！」

「…本当にいたよ」

遠くから人影が見えた時はまさかと思ったが、花丸ちゃんがそこにいた。
素直すぎる。

「おはよう花丸ちゃん。他に人は？」

「丸以外、誰も来てないすら…」

「…だろうね」

「しゅ、集合時間、4時って言ってたすら！」

「…ダイヤちゃんは後でお説教だね」

「やあっほーう！」

「まっぶしー！」

海に向かって走っていく、千歌ちゃんと曜ちゃん。

それにつられて、海へ飛び込んでいく数名。

海岸に残っているのは、ダイヤちゃん、梨子ちゃん、花丸ちゃんに善子ちゃんだ。

ちなみに俺は引率となった。

先ほど、花丸ちゃん以外のメンバーが来始めたくらいのタイミングで、志満さんがいらっしやった。

そこで、引率を頼まれたのである。

もちろん、店が暇な時間に少しだけ見に来るくらいだが。
え？いつも暇？

それが意外に夏休みには人が来るんだ。

エアコンの修理をしてくれ、とかでね。

：仕事内容がおかしいのは、さすがに自覚している。

「今年も、ここのお手伝いなんだね」

お世辞にも綺麗とは言い難い様相の海の家。

時々、こちらの手伝いに来ることもある。

とはいえ

「横のお店、だいぶ賑わってるね」

「去年も売り上げではだいぶ負けてたからね」

そろそろお手伝いも必要なさそうだ。

なんて思っていたのだが。

「今年も、そうはいきませんわ！」

ダイヤちゃんがやけに張り切っている。

どうやら、売上げを向上させるつもりらしい。

成功したら、うちの店の売上げも向上させて欲しいものである。

「…これ、なあに」

妙な格好に身を包んだ千歌ちゃんと梨子ちゃんが言う。

「ごもつともな発言である。」

「それで、海の家にお客を呼ぶのですわー」

…あれで呼べるのか？

2人の今の格好は、箱から手足と顔だけ出したような状態だ。

箱には『海の家』と書いてある。

ダイヤちゃんは、海を家の屋根の上から演説している。

彼女はバカではないはずだが、今日は高いところが好きらしい。

「とおうっ！」

そのまま飛び降りたかと思えば、チラシを果南ちゃんに手渡す。

なんかよく聞こえないが、果南ちゃんにチラシ配りを任せるようだ。

まあスタイルいいしね。

人の目は大いに惹けるだろう。

ダイヤちゃんの言葉の中に

「他のジャリどもでは女の魅力に欠けますので！」

というセリフがあった気がするが、気のせいとする。

「そして、曜さん、鞠莉さん、善子さん」

「ヨハネ！」

「あなた方には料理を担当してもらいますわ！」

「ええっ？」

「どうかしましたか？ハルさん」

「ああ、いや、なんでもないよ…」

曜ちゃんはまあ大丈夫だ。

うちでご飯を作るときには結構手伝ってもらっているしね。

善子ちゃんとマリーちゃんは…

激辛と、見た目超軽視型の料理をしていた記憶があるのだが…

そんなことを考えている間に、話はまとまったようにで

「じゃあ…レッツ、クッキング！」

「おー！」

となってしまっていた。

不安だ。

そう思いつつも、俺は店に戻った。

夜。

店の戸締りをして、再び彼女たちのところへやって来た。

そこにいたのは、ドラム缶に貯めた水で、全身の砂を落とす彼女たち。

手で触ってみたが、結構冷たかった。

あのプランを本当にやったかは不明だが、結構な距離を走っていたようだし、体幹トレーニングなどもきっちりやったそうだ。

「大したもんだねえ」

おそらく、今の俺が彼女たちと運動で勝負しても、まともに勝てないだろう。

「うう…冷やつこい…」

「我慢して。まだ砂落ちてないよ」

「まったく、お湯はないんですの？」

少しして

「あんたたちー！他のお客さんもいるから、絶対うるさくしたらダメだからねー！」

そんな声がかかる。

「わかってるー」

「言ったからねー!」

釘を刺しに来たのは、千歌ちゃんのお姉さんである、美渡さん。

目が合ったので、軽く会釈をする。

そしたら、手招きのジエスチャーをされた。

こっちへ来い、ということなのか。

「どうしました、美渡さん?」

「ハルくん、今日はどこに泊まるの?」

「どこって…普通に家ですよ?」

「え?でもそれじゃあ夜這いもできないよ?」

「ハナっからする気ないです。俺をなんだと思ってるんですか」

「千歌からは、変態って聞いてるけど」

「紳士です。女子高生に手は出しません」

「でも、みんな可愛いよー」

「それは同感ですが、夜這いって」

「でもほら。あの子たち、多分ハルくんに襲われても抵抗しないよ」

「おっさんですかあんたは」

「お姉さんだよ?」

ものすごいニヤニヤしながら言われる。
だいたい、9人で一部屋だったはずだ。

そんなところでどうやって夜這いなんぞしろと。

「まあそれは冗談として」

「冗談が重いです」

「今日、というか合宿中はうちの方に泊まらない？」

ん？

「なんでですか？」

「決まってるでしょー。千歌たちが喜ぶから」

そうやって言う美渡さんは、さっきまでのようなニヤニヤした表情じゃなく、優しい笑顔だった。

このテンションの切り替えは、少しずるいと思う。

「俺、お金ありませんよ？」

「泊まるのは宿の方じゃなくて、私室の方だよ。部屋、余ってるんだ」

「でもさすがに、少し悪い気が…」

「女子大のサークルが、その一週間泊まりに来るんだよね。その相手もバイトとしてやってもらおうかな」

「なんなりとお申し付けを。命に代えても仕事を全うしましょう」

「あつはつは、それでこそハルくんだよ。変態は間違つてなかつたねー。じゃ、部屋案内するから」

そのまま美渡さんに着いていこうとした時、後ろから声がかかった。

「あれ？ハルくんどっか行くの？」

「ん？ああちよつとね」

「私たち、これから海の家行くから、用が済んだら来てねー」

「りよーかい」

海の家？

この時間にお客さんは来ないだろうに。

そんなことを考えていたのだが。

「…これを、完食するのかい？」

「美渡姉が、余った食材は自分たちで処分しなさいって」

「…まあ、言わんとすることはわかるよ。ただ、これは…」

余っているもの。

そのほとんどは、マリーちゃんと善子ちゃんが作ったものだ。

シャイ煮と堕天使の涙。

シャイ煮は、相も変わらず見た目が悪いスープ。

作り方が前と変わっていないのなら、おそらく味はまあ良いだろう。

堕天使の涙は、黒いたこ焼き。

この黒は……こげ、ではないのか？

なんにせよ、見た目がどちらも良いとは言いがたい。

海の家で売するような商品としては、不適切だろう。

みんなが、まずはシャイ煮に口をつける。

彼女らも俺の時と同じで、見た目に反した味に驚いているようだった。

それを見て、マリーちゃんは嬉しそうである。

「ふっふっふ……シャイ煮は、ウォーターシが世界から集めたスペーシャルな食材で作った、究

極の料理デース」

「……で、一杯いくらくらいするんですの？」

恐る恐るといった感じで、ダイヤちゃんが聞く。

「んー……一杯10万円くらいかな？」

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

事も無げに答えるマリーちゃん。

そりゃ売れんわ。

どこのアホが、万札10枚持ち歩いて海水浴に来るといふのか。

「つ、次は墮天使の涙を…」

ルビィちゃん、真つ黒なたこ焼きを口に入れる。

すると、その顔は徐々に赤くなっていき…

「ピギャ~~~~っ!!」

叫びながら外へ駆けていった。

「辛い辛い辛い辛い~~~~!!」

そう叫びながら、同じところを走り回っていた。

「フツ」

「ちよつと、一体何を入れたんですの!?!」

食ってかかるダイヤちゃん。

そりゃそうだよね。

「タコの代わりに大量のタバスコで味付けをした、これぞ…墮天使の涙!」

そう言いながら、墮天使の涙を口に放る善子ちゃん。

試しに1つ食べたなら、数分間口の中が麻痺状態になった。

今度、A q o u r s のメンバーで料理教室でもやるべきか。

そう考えさせられた。

夜中になった。

A q u o u r s のみんなもそろそろ寝た頃だろうか。

そんな事を考えながら、海岸を歩く。

自分の家以外で寝るのは久しぶりなのだ。

せつかくと思い、海の周りを散歩する事になっていた。

そんな時だった。

女の子2人の背中を見つけた。

千歌ちゃんと梨子ちゃんだ。

声を掛けようかとも思ったが、そんな雰囲気ではなかった。

合宿前に、梨子ちゃんが何か考え事をしているようだったし、そのことだろうか。

放っておくのも気が引けたので、いつ話しかけようかと考えている時だった。

2人で笑い合っている。

かと思つたら、梨子ちゃんがそのまま旅館に戻っていった。

千歌ちゃんは、少しの間動かない。

やがて梨子ちゃんに呼ばれて、その後を追っていた。

梨子ちゃんは笑顔だ。

千歌ちゃんも、笑っているようには見えな

でもそれが

作り笑いだっていうことは、少し遠くからでもわかった。

少女の決意と布屋さん

『何があったのか教えて欲しい』

あの後、すぐにそういうメッセージを送った。

返信はすぐに来た。

『見たの?』

『偶然だけどね』

そのまま、続けてメッセージを送る。

『もちろん、話せないならそれでもいい』

1分程してから、返信が来た。

『さっきのとき、来れる?』

「すまないね。何度も外出させてしまつて」

「んーん。大丈夫。ハルくんにも相談しようと思つてたから」

「そうかい。話し、聞かせてくれるかい」

「うん。…あのね」

聞くところによれば。

ラブライブの予備予選が8月20日にあるそうだ。

そしてその日は、ピアノのコンクールの日でもあるらしい。

梨子ちゃんには、そのコンクールに対する招待が来ていた。

でも彼女は、今はスクールアイドルを優先したいからと、それを断るつもりらしい。

「梨子ちゃんがね、大事なものはA q o u r sなんだって言ってくれたのは、すごく嬉しかったんだよ」

「そうだね」

「でもね、私ね」

「ああ」

「梨子ちゃんがスクールアイドルやって、何かが変わって、もう一度ピアノに前向きになれたらいいなって、そう思ってたんだ」

「そうかい」

「だからね…」

千歌ちゃんは、そこで言葉を止める。

「だったら」

「え？」

「だったら、それを伝えてあげるといい」

千歌ちゃんは黙って聞いてくれている。

「君の気持ちも、考えも。梨子ちゃんにどうして欲しくて、どうなって欲しいのか」
「で、でも…」

「梨子ちゃんがピアノを選んだら、君はあの子を裏切り者っていうのかい？」

「そ、そんなわけないよ！だって梨子ちゃんにとって、ピアノだってすごく大事なものなんだもん！」

身振り手振りで伝えてくれる千歌ちゃん。

思わず笑いがこみ上げる。

「はは。ああ、そうだろうね」

「…だからその気持ちに、こたえを出して欲しいの…」

大事なピアノに、梨子ちゃんが出すべき『こたえ』。

それは、正解という意味での『答え』なのか。

または、反応という意味での『応え』なのか。

「それが、千歌ちゃんの考えなんだろう。じゃあ、伝えてあげたらいいじゃないか」
「梨子ちゃんなりに、どうするかは決めちゃってるんだよ？」

「それは梨子ちゃんだけで考えた場合だろう。君の想いは、まだあの子には伝わってな

「い」

「それは…」

「君の考えと梨子ちゃんへの考え、どちらも間違つてなどないんだ。どちらも正しい。だから、その2つを踏まえて出した結論が、梨子ちゃんなりの『答え』つてやつなんだよ」
我ながらカッコつけた言い方である。

結局、俺が言いたいことなど簡単なのだ。

『自分の気持ち、話せばいい』

それだけのこと。

千歌ちゃんなら、それだけでちゃんとできることは、よく知っているのだ。

「…ふふ。ハルくん、今カッコつけたでしょ」

「気のせいだよ」

「わかるよ。長い付き合いなんでもん」

考えを見透かされた上に、普段のセリフまで取られてしまった。

「でも…ありがとう」

少々恥ずかしいとは思った。

けどまあ。

千歌ちゃんの表情がだいぶ良くなったのだ。

収穫はあつたということにしておこう。

※

『ズウウ〜ン』

そんな効果音が聞こえてきそうなポーズをとっているのは、善子ちゃんとマリーちゃん。
ん。

「今日も売れなかったんだね…」

そういうことらしい。

そらそらだろ。

「できた！カレーにしてみました！」

曜ちゃんが何かアレنجジしたらしい。

そこにあつたのは

「船乗りカレー with シャイ煮と愉快的な堕天使の涙たち」

だそうだ。

まあアレنجジは曜ちゃんだし、カレーなら大体のものは合うだろう。

・A q o u r s のみんなも美味しそうにしていた。

ふと気になって千歌ちゃんを見る。

少し、考え事をしているようだった。

今日あたりにも、梨子ちゃんに話しをするんだらう。

そう思っていたら、曜ちゃんがそれに気付いたみたいで、千歌ちゃんに話しかけていた。

そういえば、梨子ちゃんが来てからというもの、あの子達が2人きりになる機会は減った気がする。

そんな、全く関係ないことを考えていた。

「どう？千歌たちは」

「よく頑張つてると思いますよ」

「そうだねー。まさか千歌があんなに頑張るなんてねー」

ロビーで、美渡さんとそんな雑談を交わす。

この人も、なんだかんだで面倒見がいい。

「それでそれで、毎日みんなの水着見れてどう？」

「眼福です」

「あっはっは、相変わらず正直だねー」

「自分の長所ですから」

「短所兼用にならなきゃいいけどね」

「というか、女子高生の水着みて楽しくない方が不自然じゃないですか」

「まあそりゃそうかももしれないけどねえ。あ、じゃあ私の水着でも楽しいの？」

「……………」

「何か言いなさいよ」

「チエンジ……ごふ」

言い切る前に殴られた。

痛い。

他のお客さんに見られたらどうするんだ。

そんなやりとりをしている時だった。

「あぎやあああああああ〜！」

悲鳴が聞こえてきた。

今の叫び方、多分ダイヤちゃんだ。

昨日釘を刺されたばかりだというのに。

「はあ…。まったく、注意してくるわ」

「行ってらっしゃいませ」

怒らせたなら怖いのは、たった今痛感した。

みんなも、賢明な判断をした方がいい。

心の中で、そう祈ることにした。

『学校まで送ってほしいの』

まだ夜が明けてもない頃、そんなメッセージがやってきた。

聞きたいことは沢山あったが、まずは返信する。

『いつ?』

『今から』

『急ぎなのかい?』

『うん』

『全員は乗せられないよ』

『私と梨子ちゃんだけ』

『学校、開けられるのかい?』

『多分、大丈夫』

そんなやりとりをした。

ここで梨子ちゃんの名前を出されては、断りにくいじゃないか。

『いいよ。駐車場で待ってる』

『ありがとう!』

スタンプと一緒に送られてきた、そんなメッセージ。

日の出までは、まだ2時間くらいある。

「居眠り運転、気をつけないとな」

昨日の今日で、あの子なりにやるべきこと、言うべきことを考えたのだろう。
止めるつもりは毛頭ない。

2人を乗せて、車を出す。

当然目的は、浦の星女学院。

「こんな夜中にどこいくの?」

「いいからいいから」

まだ行き先は伝えていなかったようで、梨子ちゃんからそんな質問が飛ぶ。

「大丈夫、すぐにわかるよ」

「ハルさんまで…って、この道…」

さすがに、毎日バスから見ている景色だけあり、すぐわかったらしい。

学校の門は開放状態だった。

駐車場に車を止める。

「門が全開の時点で、防犯もクソもないが…校舎、開くのかい？」

「部室の鍵で開くんだよ」

「…生徒を信用しすぎじゃないかな」

3人で、校舎の中を歩いていく。

やがて、ある教室の前で立ち止まった。

『音楽室』

教室のプレートには、そう書いてある。

「考えてみたら、聞いてみたこと無かったなって。ここだったら、思いっきり弾いても大

丈夫だから」

そう言いながら、千歌ちゃんは楽譜を梨子ちゃんに手渡した。

「梨子ちゃんが自分で考えて、悩んで、一生懸命気持ち込めて作った曲でしょ？」

手渡した楽譜。

それは梨子ちゃんが作ったものらしい。

「聞いてみたくて！」

「…でも…」

「おねがーい。少しだけでいいから」

千歌ちゃんなりの説得。

「…そんな、いい曲じゃないよ」

「俺も、聞いてみたいんだがね」

「え？」

「梨子ちゃんのピアノ、よく考えたら俺は聞いたことないんだ。だから…聞いてみたい」

そこに、嘘はない。

千歌ちゃんに加勢するとかではなく、ただ単純に、梨子ちゃんのピアノを聴いてみたいと思ったのだ。

やがて、梨子ちゃんが演奏の準備を始めてくれた。

鍵盤に、指を添える。

少しだけ、指が震えているのがわかった。

「梨子ちゃん」

「…なにかしら？」

「弾く前に、一度深呼吸だ」

「…どうして？」

「いいからいいから」

少し納得はいかないようだったが、応じてくれた。

ゆっくり息を吸い、ゆっくり吐き出す。

「聴かせるなんて考えなくていい。弾きたいように弾いてくれ」
「…うん」

震えは、治ったようだ。

表情も、さつきよりずっと柔らかい。

千歌ちゃんも、それを見て微笑んでいた。

演奏が、始まった。

夜の静寂を、引き裂くわけではない。

調和するような、綺麗な音色。

初心者の俺に、難しい技能のことなんてわからないけど。

心地よい音だった。

お客が2人だけのささやかなコンサート。

でも俺は

人生初のこのコンサートを、忘れることはないだろう。

日の出が近づいてきた。

車を海沿いの駐車場に停める。

千歌ちゃんから、日の出を見たいとリクエストをもらったのだ。

2人が、車から降りて行く。

「俺はここで待つてるよ」

「ハルくん」

「言いたいこと、決めたんだろう？伝えてくるといい」

「…うん」

「どんなこたえになったって、それも一つの正解なんだ。気楽に行くといいよ」

「うん！」

「…2人で何の相談？」

「なんでもないよ。向こうの方が、日の出は綺麗に見える。少し歩くことになるけどね」

「そうだね。梨子ちゃん、行こうっ」

「あ、ちよつと待って千歌ちゃん」

駆けて行く千歌ちゃん。

その後を追う梨子ちゃん。

背中を見て思う。

どちらも、頼りない背中なんかじゃない。

色んなことを考えて、背負って、傷ついて、それでも進んできた強さが、ちゃんとそ

こにある。

「気付いたら、立派になっちゃったなあ」

思わずそんな言葉が漏れてしまったけど。

多分俺の口元は、気持ち悪いくらいニヤついてたんだろうな。

※

日の出から少しして、手をつないだ2人が戻ってきた。

その表情は、どちらも笑顔だった。

どうやら、無事に話を終えたようだ。

「おかえり、2人とも」

「ただいま」

「缶コーヒード良ければ飲むかい？」

結果として。

梨子ちゃんはピアノの大会に出るらしい。

車のすぐ横で話を聞く。

なんとなく、そこで聞きたい気分だったのだ。

「千歌ちゃん、ちゃんと待っていてくれるって言ってくれたんです」

「そうかいそうかい。待つためには、予備予選勝たないとね」

「うん！負けられないよ！」

「応援するよ。ぜひ頑張ってくれ」

「あら？私は応援してもらえないの？」

「まさか。梨子ちゃんの応援だつてするよ」

「東京で？」

「ええ!?ハルくん、東京行っちゃうの!？」

「なんでそうなるんだい」

「え？一緒に来てくれてもいいのよ？」

「それはだめ！」

別に東京まで応援に行くつもりはなかったのだが。

千歌ちゃんがわりと本気だ。

そりゃあ親友とこんな男を2人きりにはさせたくないんだろうけどね。

「冗談を真に受けすぎだよ。梨子ちゃんも、あまり千歌ちゃんをからかいすぎないよう

に」

「ふふふ。そうね」

「へ？冗談？」

「そりゃあそうでしょ」

東京に行くお金が、俺のどこから捻出されるというのか。

「ふ、2人してからかったな〜っ」

「それは梨子ちゃんだけだよ」

「ハルくんのバカー！」

耳元でそう叫んで走って行ってしまった。

「あら〜…」

「み、耳が…っ」

まだキーンって言ってる。

「ハルさん、迎えに行つてあげたら？」

梨子ちゃんは笑っている。

「何だが嬉しそうだね」

「ええ」

「…いいこと、あつたのかな」

「ふふ。そうね。…この町に来てよかつたって、そう思ったの」

「それはまた壮大だね」

「ほら、迎えに行つてあげないと、千歌ちゃん余計に怒つちやうわよ？」
「はあ…行つてくるよ」

少し遠くで、こちらに向けて舌を出している千歌ちゃん。

背中は立派になったが、振舞いが大人になるには、まだかかるらしい。

嫉妬ファイヤーと布屋さん

真夏の太陽が、容赦なくプールを熱する。

その熱は、プールにばらまかれた水を躊躇いなく蒸発させ、湿度を上昇させる。

水は蒸発するとき熱を奪う。

それを利用して涼しくなるのが、水撒きだ。

だがそれは、この高音高湿度の環境下では、まさに焼け石に水という状態なのだ。

つまり。

「もう、帰りたい」

「文句言つてないで、手を動かすのですわ！」

「…なんで俺が、こんなことを…」

梨子ちゃんが東京に行った当日のことである。

見送りには俺も参加しており、見送りの済んだし、店に戻ろうとしたときだった

「ハルさん、今日はまだ仕事が残ってますわ」

そうダイヤちゃんに呼び止められた。

そのまま部室に連れて行かれ、ミーティングにも参加。俺は必要ないだろうと思いつつも聞いていたときだった。

「ダイヤちゃんが特訓と称して、プール掃除を一同に言い渡したのだった。もちろん、ハルさんも参加ですわ」

「え、いや、仕事あるから…」

「今日は月曜ですわ」

背景からすごい音が聞こえてきそうな気迫で迫られた。断れませんでしたとさ。

「ずらー！」

「びぎやー！」

花丸ちゃんとルビィちゃんが転倒した。

床は、かなりつるつるだし仕方ない。

あ、立ち上がろうとしてまたこけた。

「ハル、大丈夫？」

「暑すぎて死にそうだよ」

「日ごろから外に出てないですからねー」

「そうなんだよ。暑さに耐性が全くできてないんだ」

果南ちゃんとマリーちゃんと同情される。

女子高生に同情される20歳の姿である。

「まあでも、みんなまで約束したもんね。生徒会長の仕事は手伝うって」

それはA q o u r sのみんだね。

俺は関係ないね。

と、考えた直後だった。

「そうだよ！みんなちゃんと磨かなきゃ！ヨーソーロー！」

そんな声が響いた。

こんな中でよく元気を保てるものだ。

そんなことを思いつつ、声の方を見る。

「デツキブラシと言えば甲板磨き！となれば、これです！」

「…水兵？」

そういう服装をしていた。

よくは知らないが、少なくとも、今この場に似つかわしい服ではないのだけはわかつ

た。

「どうハルくん？つてうわー！」

感想を聞いてきた直後にこけた。

「ああ、似合ってるよ、可愛い可愛い」

「そっかー。えへへ」

「あなた！その格好はなんですか?!」

ダイヤちゃんはお怒りのようだった。

掃除が完了したのは、それから数時間後。

相も変わらず太陽は絶好調だが、プールの滑りはとれたので、もう転倒することはなさそうさ。

「そうさ、ここで一回ダンスレッスンをやってみない？」

「…危ないんじゃない？」

と言ったが、案外みんなは乗り気なようで、その提案を飲んでいく。

まあ、かなり滑りにくくはなったし大丈夫…か？

みんなが各々のポジションにつき、スタートしようかというタイミングになったとき。

「…あれ？」

千歌ちゃんが、ことの重大さに気付いた。

本来梨子ちゃんがいたそのスペース。

当然、今は空白だ。

奇数人でのダンスは、基本的には必ず真ん中が存在する。それに対して偶数人の場合は、中心がない。

中心を作ろうとすれば、左右での対象性が取れなくなる。つまりは。

「今の形は、少し見栄えがよろしくないかもしれないかもしれませんがね」

ダイヤちゃんが言った。

まあそういうことである。

彼女らのできる選択は2つ。

ダンスそのものを変える。

もしくは

「誰かが、梨子ちゃんの代わりに入るか……」

代役を立てる。

梨子ちゃんの代わりに、千歌ちゃんと最も上手に連携が取れるであろう人物。みんなの答えが出るまで、そんなに時間はかからなかった。

自然に、その人物に視線が集中する。

「……え？ 私!？」

曜ちゃん。

俺も、君が適任だと思うよ。

そんなわけで、2人で合わせる練習をする。

流れで、俺もその場に居合わせることにした。

しかし。

思いの外、うまく連携が取れない。

2人が背中合わせになる動き。

そこで必ずぶつかっている。

「私が悪いの。同じところで遅れちゃって」

「ああ違うよ。私が歩幅、曜ちゃんに合わせられなくて」

そんな感じで、失敗しては謝るを延々繰り返し返している。

両名共、よく頑張っているのはわかるが…

「案外、簡単にはいかないのね」

「これ、気持ちの問題もあると思うよ」

「ハート？」

「そうだね…心の問題って言ってもいいかもしれない」

マリーちゃんとそんな会話をする。

千歌ちゃんも曜ちゃんも、互いを気遣い過ぎだ。

そんな風に合わせるだけじゃ、いつまでたっても連携などできないだろうに。

「なんかハル、複雑そうだね」

「…なんというか、昔の君たちを見ているみたいだね」

簡単にいつてしまえば。

じれつたい。ものすごく。

1年生と2年生は先に帰ることになった。

そのまま俺は帰っても良かったのだが、まだあの2人の様子が気になったので、途中で着いていくことにした。

3年生は、生徒会の事務仕事が残ってるんだそう。

ダイヤちゃんのことだ。

どうせ自分一人でやろうとしていたんだろう。

果南ちゃんとマリーちゃんには見透かされていた。

帰りにコンビニに寄る。

1年生がアイスを食べてる間、千歌ちゃんと曜ちゃんは練習を続けていた。

俺はそれを見ているが……
やはり合わない。

どうしたもんか。

そう思っていた時だった。

「千歌ちゃん」

「ん？」

「もう一度、梨子ちゃんと練習してた通りにやってみて？」

「え？でも……」

「いいからいいから。ほら、いくよ」

そうして練習を始める。

今度は、ぶつかるとはなかった。

曜ちゃんが、千歌ちゃんに合わせたのだ。

運動神経がよく、それでいてフォームを柔軟に変えていけるからこそその芸当。

さすがだと思う。

けど……

『プルルルルルル プルルルルルル』

千歌ちゃんの携帯が鳴る。

着信らしい。

練習はこらで一区切りだろうし、コンビニに飲み物を買に行く。

この時期は、冷たいお茶が美味い。

アイスのところが視界に入った。

そこにある、みかん味のアイス。

2つに割って食べられるそれは、昔、千歌ちゃんと曜ちゃんと曜ちゃんが分けて食べてたものと
同じだ。

最近、そんな景色を見ていない。

帰り際。

曜ちゃんの持つビニール袋に、割られたまま食べられてない、そのアイスがあった。

これは…

このアイスはね。

2人で食べるから、美味しいんだよ。

その日の夜。

最近利用率が上がってきたSNSアプリで、曜ちゃんにメッセージを送る。

『今、少しいいかい』

返事はすぐ来た。

『どうしたの?』

『電話してもいいかい?』

送信してすぐに、曜ちゃんの方から電話が来た。

「もしもし」

『ハルくんどうしたの? 珍しいね』

「ちよつと気になる事があってね」

『気になる事?』

「君の調子が悪そうって事についてね。気になってるんだ」

余計な話は思いつかない。

単刀直入に話を切り出す。

『∴ハルくんにも、ばれちゃうんだ』

「他に、同じ事を言った人がいたのかい?」

『うん。鞠莉ちゃんにね』

「ほう。それはちよつと驚いた」

自分の境遇があつたからこそ、声をかけるべきと判断したのだろうか。

「先に、マリーちゃんに言われた事を聞いてもいいかい？」

『いいけど…どうして？』

「同じ話をしたら恥ずかしいだろう」

『ああ、そういう…と言つても、話を聞いてもらうことが多かつたから、鞠莉ちゃん自身はそんなに話してないよ』

「そうかい。あの子に聞き上手な一面があつたとはね」

『鞠莉ちゃんに言われたのは…そう、本音をちゃんとぶつけなさいって』

「…なるほど」

『2年間も本音を言えなかつた自分が言うんだから、間違いありませんって』

「…そうだね」

…やっべ。

困つたな。

言いたいこと、鞠莉ちゃんに言われちゃつてるじゃないか。

しかも、経験のことを考えたら重みが違う。

俺が言うより、全然価値のある言葉になつてしまつている。

だんまりが続いたからだろうか。

曜ちゃんがこちらの様子を気にしてくれた。

『…ハルくん？』

「ああ」

『どうしたの？大丈夫？』

「大丈夫だ。後輩に完全にいいところ取られたからって、落ち込んでなんてないよ」

『隠す気はないんだね』

「正直困ってるんだ」

『ハルくんも、同じこと言うつもりだったの？』

「そうだね。本音でぶつからないと伝わらないよって、言おうとしてた」

『あはは、そのまんまだね』

「びっくりだよ」

ある意味、先に聞いておいてよかったのかもしれないが。

『…でもね』

電話越しに、曜ちゃんのトーンが下がる。

『本音って、どうやってぶつければいいんだらうって…』

ああ。

その悩みにやっぱり行き着いたのか。

彼女たちは、みんな俺とは違う。

言うべきことを考えて、言葉を口にする。

本音をポロポロこぼす俺とは、正反対。

だからこそ、俺とは違うところで悩むのだ。

『ぶつけるべき本音って、なんなのか、自分でもよくわからないんだ』

あはは、と

乾いた笑いが聞こえる。

表情は見えなくとも、本気で笑っていないことなど簡単にわかる。

こんな状態の曜ちゃんを、放っておけるわけない。

何か、手を考えるんだ。

ぶつけようにも、自分の本音がわからない。

曜ちゃんはそこで悩んでる。

だったら…

「だったら、千歌ちゃんの本音を聞くしかないね」

俺には、それしか思いつかなかった。

「明日まで待ってくれ。君に、千歌ちゃんの本音を見せてあげるよ」

※

次の日の夜。

結局私は、本音を打ち明けることはできなかつた。

「はあ…」

今日もらったシユシユを見て、ついため息をついてしまう。

私、何やつてるんだろう…。

ハルくんからも、連絡はまだない。

千歌ちゃんの本音って、なんだったんだろう。

そう思ってたときだった。

携帯に着信が入る。

画面に表示されているのは『桜内梨子』の文字。

それを見た私は、どんな表情をしてたんだろう。

きつと、複雑な顔をしてたんだろうな。

「…あ…」

意を決して、電話に出る。

まず最初は、梨子ちゃんからごめんと言われた。

自分が抜けたところ、埋め合わせしてもらったから、らしい。

それから、千歌ちゃんに合わせず自分のやり方をするようにと言われた。

千歌ちゃんも、そうして欲しいって思ってるから。

そう、梨子ちゃんは言った。

でも

「…そんなこと、ないよ…」

私は、そんな風に返してしまった。

ダメとわかってるのに、言葉はどんどん出てしまう。

「千歌ちゃんの側には、梨子ちゃんが一番合ってると思う。だって千歌ちゃん、梨子ちゃ

んといると嬉しそうだし」

わかってしまった。

多分、これが私の本音なんだ。

「梨子ちゃんのために頑張るって、言ってるし…」

少しずつ、目に涙が浮かんでしまう。

「…そんなこと、思ってたんだ」

梨子ちゃんが、言う。

少し、驚いたように。

少し、呆れたように。

「千歌ちゃん、前話してたんだよ？」

「うん、じゃあ」

電話を、切る。

梨子ちゃんが教えてくれた、千歌ちゃんの気持ち。

千歌ちゃんの、本音。

「千歌ちゃんが……」

そう、口にしたときだった。

「曜ちゃん!!」

声が、聞こえた。

慌てて後ろを振り返ったけど、そこには誰もいなかった。
気のせいかと思ったときだった。

「よーうちやあーんー!」

やっぱり、聞こえた。

聞こえたのは、玄関の方。

そこには。

練習着を着て、肩で息をしている千歌ちゃんがいた。

「千歌ちゃん…どうして?」

「練習しようと思って!」

「練習?」

「うん!ハルクんと話したの!やっぱり曜ちゃん、自分のステップでダンスした方がいい!」

突然のことに、私は言葉が出なかった。

それでも、千歌ちゃんは続ける。

「合わせるんじゃないなくて、一から作り直した方がいい!曜ちゃんと私の2人で!!」

そうやって、言ってくれた。

思わず、言葉が詰まった。

流れそうになる涙を隠して、急いで玄関に走る。

『あのね、千歌ちゃん前話してたんだよ?』

『曜ちゃんの誘い、いっつも断ってばかりでずっとそれが気になっているって』

『だから、スクールアイドルは絶対一緒にやるんだって』

『絶対曜ちゃんとやりとげるとって』

梨子ちゃんが教えてくれた千歌ちゃんの本音。

それが、頭に流れる。

玄関まで来たけど、泣いているとこ見られたくなくて

後ろ向きのまま、千歌ちゃんに近づく。

手だけ伸ばして、千歌ちゃんの肩に触れた。

シャツが、汗で濡れてる。

「…汗びつしより。どうしたの？」

「バス終わってたし、美渡姉たちも忙しいって言うし…」

「…ハルくんは？一緒にいたんじゃないの？」

「なんでか知らないけど、今日は自転車で行きなさいって。もうわけわかんないよねー」

ハルくんは文句を言う千歌ちゃん。

「ハルくん、今日いきなりうちきてき、ダンスはどうかって聞いてきたの」

「曜ちゃんが合わせてくれてるって言ったたら、君はそれでいいのかいとか言ってきてね」

「そんなの、ダメに決まってるじゃんって返したの」

「っ！」

「だったたら、ちゃんと練習してきなさいって言われたんだよ。じゃあ送ってくれてもいいのこー」

私はバカだ。

バカだったんだ。

「バカ曜だ…」

「バカ曜…？わあ！」

千歌ちゃんに抱きつく。

二人して、地面に倒れこむ。

涙は、もう止まらなかった。

「ちよつとー汚れるよー」

「いいの！」

「もう…風邪ひくよー？」

「いいの！」

「もう、恥ずかしいってー」

「いいの！」

「もー、何、なんで泣いてるのー？」

「いいのー！」

結局私は、不安だったのだ。

私は、千歌ちゃんには必要ないんじゃないかって。

でも

そんなことは全くなくて。

千歌ちゃんは、ちゃんと私も必要としてくれてて。

そんな本音を

千歌ちゃんは最初から、私にぶつけてくれてたんだ。

「もしもし?」

『あ、ハルさん?』

「ああ、どうだった?」

『どうって…普通に曜ちゃんと電話したよ』

「すまないね、手間かけて。その…あの子、元気なかつただろう」

『元々、穴埋めしてもらったお礼は言うつもりだったから。曜ちゃん、千歌ちゃんは自分を必要としないんじゃないかって。そんなわけないのにね』

「まったくだよ。千歌ちゃんにとってみれば、君も曜ちゃんも、唯一無二だというのに」

『ふふ、そうね。そう言ってあげればよかったのに』

「状況が悪かったんだ。俺が言っても軽い言葉にしかならなかった。…まあ、それを理

由に女子高生に頼むのも情けない話だが」

『適材適所ってことよ。それより、あの話本当なの？』

「ああ、時間はなんとかかなりそうだよ」

『嬉しいけど、無理しない程度にね』

「注意はしておくよ」

※

「「こんにちはー！」」

「いらっしやい。暑いのに元気だね」

「もう明後日が予備予選だからね！気合入ってるよ！」

「ヨーソーロー！」

「そうかい、がんばってくれ。ああ、冷凍庫にアイスがあるよ」

「わーい」

2人が、奥の部屋に駆けていく。

冷凍庫にあるのは、みかん味のアイス。

2つに割って楽しむやつだ。

「最近、2人で食べていなかったようだからね」

「私はついこの前食べたよ?」

「2人で食べたわけではないだろう? 誰かと食べるから美味しいんだ、それは」

「ハルくん…ふふ、そうだね!」

「なにになに? なんの話し?」

「なんでもない、こっちの話しき」

「そうそう」

「あー! 2人で隠し事してるー! ずるいー」

「ハルくんが変態っていう事についてだよー」

「そんなの、隠れてないじゃん!」

「ちよつと待つんだ、今のはスルーできない」

誰が君たちの仲介役をやったと思ってるんだい。

…あ、梨子ちゃんか。

やってくるラブライブ予備予選。

決戦の日は、明後日だ。

東京デートと布屋さん

東京―沼津間。

新幹線を使うと4500から5000円程度。

要する時間は約一時間半。

「往復で1万円近くかかるけど…大丈夫だったの?」

「さすがに、君たちの晴れ舞台でケケケチしてられないよ」

梨子ちゃんと、そんな話をする。

今いるのは、東京。

梨子ちゃんが案内してくれたカフェで紅茶を飲んでいる。

「そう言ってくれるのはありがたいけど…無理してない?」

「ここで君の演奏を見なかつたら、それこそ後悔でやつてられなかつただろうからね」

「…もう。簡単に言うのね」

「事実だからね」

今日は、8月21日。

千歌ちゃんたちのライブ予備予選と、梨子ちゃんのピアノコンクールがあった翌

日だ。

※

A q o u r s 全員の晴れ舞台を見届けるつもりだった。

梨子ちゃんだつてA q o u r s の一人なのだ。

場所がみんなとちよつと違うだけで、見ないなどありえない。

でも、物理的な距離が邪魔をする。

どうしようもない、この移動距離。

神様なんて、普段はお腹が痛くなつた時しか頼らないが、今回は頼み込んだ。

淡島神社で、心を込めてお参りした。

そんな時。

運は俺に味方した。

千歌ちゃんたちの発表順位は、くじの結果先頭になった。

梨子ちゃんの発表はかなり後ろの順番だった。

淡島神社で、土下座してお参りした甲斐があつたのだ。

そんなわけで、千歌ちゃんの発表を見てすぐに東京へ発つた。

ぎりぎりではあったが、梨子ちゃんの発表は見る事ができた。

ライブも、ピアノも、見に来て良かったと心底思える出来だった。

表彰式も終わり、余韻を味わうように、会場のロビーで休んでいた時。

後ろから、声を掛けられた。

「ハルさん、本当に来たのね」

「お疲れ様、梨子ちゃん。ちゃんと行くって言ってあったろう。約束は守るのが、大人のマナーなんだ」

「子供でも守るわよ？」

「それはそうだね。これは失言だった」

「ふふふ。千歌ちゃんたち、どうだった？」

「完璧だったよ。千歌ちゃんと曜ちゃんの連携も、文句無しだったさ」

「そう。よかった」

「君の演奏も、とてもよかった。来てよかったよ」

「そ、そう／＼／＼」

自分が褒められるのは慣れてないのだろうか。

照れているように見える。

でも、このレベルの演奏なら褒められるのは慣れているだろうに。

「わ、私も、ハルさんに聞いてもらえて…」

「ん？すまないが音量を上げてくれるかな」

「なんでもないですつ」

「そ、そうかい」

「ね、ねえ」

「ん？」

「私の演奏、よかったのよね？」

「ああ。感動したよ。賞も取ってたんだし、客観的に見ても魅力的な演奏だったんだろ
うさ」

「だ、だからそのね…」

「？」

なんか梨子ちゃんに落ち着きがない。

どうしたんだろうか。

「な、撫でて欲しいな…つて／＼／＼」

「ああ、そんなことかい」

椅子から腰を上げ、梨子ちゃんの前に立つ。

綺麗な梨子ちゃんの髪を傷つけないよう、優しく撫でる。

「…こうされるの、好きなの／＼／」

「いいじゃないか」

「ハルさんは、嫌じゃない？」

「まさか。役得だよ」

「ふふ。そっか」

「して欲しい時はいつでも言うといい」

「…うん。ありがとう」

そんな話をしていた時だった。

少し向こうから、梨子ちゃんによく似た女性がやって来た。

「梨子ー。そろそろ…ってあら。お邪魔だったかしら」

「え、お、お母さん!?ち、違うの、これは!」

「あ、梨子ちゃんのお母さんでしたか。初めまして。自分、アワイと申します。梨子さんには普段からお世話になっております」

「あ、じゃああなたが『ハルさん』なのね。こちらこそ、娘がお世話になってます。お話は、梨子からよく聞いてますよ」

「そうですか。どんなお話か気になりますね」

「今日はどういう話をしたーとかですね。いつも、優しい優しいって…」

「ストップ！ストップ！」

梨子ちゃんが割り込んできた。

どうやらセクハラ発言に関してでは伝わってないらしい。

安心である。

「お、お母さん、今日はいいでしょ！それよりほら、晩御飯食べに行くんでしょ！」

「あらあら。あ、ハルさんもどうですか？色々、聞きたいこともあるんですよ」

「ご一緒していいんですか？」

「ええ、梨子も喜ぶでしょうし」

「お母さん！」

結局、ご一緒させてもらった。

普段お世話になってるからと言われて、きつちり奢ってもらってしまった。

ありがたいが、大変申し訳ない。

「すみません、出してもらっちゃって」

「いえいえ。あ、ハルさん、明日何かご用事でもありますか？」

「明日ですか？いえ、特にやる事も無かったので、適当に観光でもしようかと思つてまし

たから」

「じゃあ、この子も一緒にどうですか？」

「ええ!？」

「梨子ちゃんも一緒に…ですか？」

「ええ。そこそこ住んでいますし、道案内くらいはできると思いますよ」

「ありがたいですけど、梨子ちゃんに悪い…」

「大丈夫です！」

「そ、そうなのかい」

「じゃあ決まりですね。ハルさん、明日のデート、お願いしますね」

「あつはつは。リードされるのは俺ですけどね」

「あら、そうでしたね」

「ふ、二人で私をからかって…! バカー!!」

「ぐえー!」

俺の腹に一発ぶち込んで、梨子ちゃんは走って行ってしまった。

痛い。

「あら。じゃあハルさん、明日はお願いしますね」

※

そんな理由で、今は梨子ちゃんとデートしている訳である。

「この後どうしようか」

「ハルさん、どっか行きたいところある？」

「行きたいところ…そうだね。あ、電気街かな」

「電気街？…秋葉原のこと？」

「ああ、そうだね」

「何か見たいものがあるの？」

「いや、単純に電化製品を…」

「前から思ってたけど、ハルさん、電化製品見るの好きなの？」

「機械いじりとか、男はみんな好きなんだよ」

「そうなの？」

「そうなんだ」

「じゃあ行きましようか。他に見たいものとかあつたら言つてね」

「こちらとしては、梨子ちゃんに先導を任せたいのだがね」

「住んでいると、案外観光の場所っていうのは分からないものなのよ」

「ああ、なんかわかるよ」

秋葉原に着く。

そっから先は、割と普通のデートだった。

適当に電化製品を見て、その価格を見て二人で苦笑いをした。

羽のない扇風機も売っていた。

服の店では、せつかくなので試着をしてもらった。

元が可愛いので、どんな服も合うなーとか思っていた。

ゲームセンターにも行った。

二人で1000円ほどかけて、ぬいぐるみをとった。

ダンスゲームで勝負したら、トリプルスコアの差をつけられて大敗した。

そりゃ勝てんよ。

気付けば日は沈み、星も見え始める時刻になっていた。

「晩御飯、どうだったかな」

「すごくおいしかったわ。ハルさん、あんな場所よく知ってたわね」

「修学旅行で来た時に行ったことがあったんだ。まだあつてよかったよ」

「へー…そういうの、覚えてられるものなのね」

「なぜか忘れてなかったんだよね」

今いるのは、東京タワー最上階。

ここだけは、必ず行っておきたかったのだ。

「スカイツリーじゃなくて、東京タワーなのね」

「修学旅行の時に来たことがあってね。ここからの夜景を見てみたいと、ずっと思ってたんだ」

「そうなんだ」

「悪いね、付き合わせて」

「…私が、一緒に来たいから来てるのよ」

「そうかい。ありがたいね」

梨子ちゃんも東京タワーに来たかったらしい。

偶然行ききたいところが同じでよかった。

「多分、私の気持ちは伝わってないんだらうなあ…」

「？」

違うのか？

仕方ない。

何か別の話題でもするとしよう。

「昨日も言っただけど、君の演奏、素晴らしかったよ」

「急にどうしたの？」

「なんとなく、ちゃんと伝えたくてね」

「ふふ。ありがとう」

「緊張はしなかったのかい？」

「しなかった、なんてことはもちろんないわ」

でも、と言って、梨子ちゃんは続ける。

「みんなと、一緒にやってるんだって思ったたら、緊張より楽しさの方がずっと大きかったの」

「そうかい」

スランプになっていたと、梨子ちゃんは言っていた。

大好きだったピアノが、弾けなくなってしまうたと。

とても辛かったはずだ。

苦しかったはずだ。

でも、彼女はそれを乗り越えた。

ピアノを、楽しく弾けたと言った。

「よかった、本当に」

思わず、口をつくそんな言葉。

「人のこと、そこまで心配してたの？」

「当たり前だろう」

「ハルさんにとつては、人の心配は当たり前なのね」

「友人を心配するのに、理由も条件もいらないうさ」

「そう…そうね。千歌ちゃんも、いえ。A q o u r s のみんなも、お互いを大事にしてるものね」

「君だつて、その一人だ」

「ええ。そうね」

「それに、だ」

「ん？」

「俺は、女の子には優しいんだ。心配するのも、大事にするのも当たり前だね」

「ふふ。ハルさん、やつぱり千歌ちゃん以上に変な人ね」

「どういうわけか、よく言われるよ」

「でも、そんなハルさんだから…」

腕を、組まれた。

暗いから怖いんだろうか。

それとも、人肌が恋しくなったのか。

なにせよ、振り払うつもりもない。

「好きに、なったのよ」

囁くように、何かを呟いた梨子ちゃん。
周りの音もあって、あまりよく聞き取れなかったけど。
悪い気分では、なかった。

結果発表と布屋さん

ラブライブ予備予選の結果発表。

それが、今日行われる。

発表自体は、スマホからも閲覧することができ、俺と梨子ちゃんも一緒に結果開示の瞬間を持っている。

大手の喫茶店で、紅茶を片手に優雅に待機である。

昨日千歌ちゃんと電話で話した限りだと、とても緊張しているようだった。

むしろライブ前より緊張しているようにも見えた。

逆に、梨子ちゃんは案外落ち着いている。

「梨子ちゃん、あまり緊張してなさそうだね」

「さすがにそんなことないけど…」

「けど？」

「みんななら、大丈夫。そう信じてるから」

「…そうかい。それはいいね」

「逆にハルさんはだいぶ緊張しているのね」

「お？なんでそう思うんだい？」

「いや、何でって…」

そう言つて梨子ちゃんが、俺のティーカップを指差す。

「それ、何いれてるの？」

「甘いのが飲みたくてね。砂糖だよ」

「それ塩よ」

「似たようなものさ」

「さすがに動揺しすぎでしょ」

そんなことはない。

あれ？

この紅茶何かしよっぱいな。

「ハルさん、A q o u r sの事になると本当に落ち着かなくなるのね」

「誰かにそう聞いたのかい」

「ダイヤさんたち…3年生のみんなが言ってたわ」

「確かにあの子たちなら言いそうだ」

そんな話をしていた時だった。

スマホに映されていた画面が切り替わる。

はつきりと浮かび上がる文字。

『予選通過者発表はこちら』

意を決して、ボタンを押す。

「A q o u r s の…『あ』は!？」

一番上に表示されてる文字。

『イーゾーエクスプレス』

血の気が引いた。

スマホを落としそうになる。

「そんな…」

「ハルさん、一応言っておくけどそれ、エントリー順だから名前は関係ないわよ」

「…知ってたさ」

「本当に嘘がつかないのね」

気をとりなおして、『A q o u r s』の文字を探す。

そして。

「…あつた」

上から4つ目。

そこにはつきりと表示される。

『A q o u r s 』

その名前。

「はあああく。よかった…」

「ふふ。やっと気が休めるわね」

「隠してたけど、相当緊張してたんだよ」

「まだ隠してたつもりなの!?!」

とりあえず、おめでどうと連絡をしよう。

そう思ったが。

「…俺より先に、言葉を送るべき子がいたね」

「ハルさん？」

「電話、してあげてくれ。あの子たちに」

「そうね」

電話をかける梨子ちゃん。

すぐに繋がったらしい。

向こうの様子は当然見えないけど、雰囲気は良さそうだ。

次は、9人で。

そうやって梨子ちゃんが言ったのを、はつきりと聞き取った。

行ける事、信じてるよ。

そんな事を考えて、紅茶に手をつける。

「しよっぱー！何だい、この紅茶は…」

誰ですか、俺の紅茶に塩入れたのは。

器用ないたずらするなあ。

※

「入学説明会希望者？」

『うん…また0人だったの…』

「そうかい」

今回の予選突破を機に、A q o u r s はかなり有名なスクールアイドルとなった。

街じやかなりの知名度となっただろうし、動画の再生数も、これまでとは桁違いに増加している。

でも、入学希望者がそれで増えるかと言われたら、また別の話。

こういうのも、そんなに珍しい話ではない。

『なんで増えないのかなあ』

「例えば、だ。あるところに、野球が大好きな中学生がいたとする。実力は中の中だ」
『うん』

「その子の街の高校が、あるとき少人数ながら甲子園でベスト4に入ったとしよう」
『うん』

「高校は少人数のまま、入部すればすぐにでもレギュラーをつかめるかもしれない。その子は野球が大好きだが…少年はその高校に入学すると思うかい？」

『…わかんない』

「少年は思うのさ。『あの人たちは特別だった。俺にはできない。足を引く張るのはごめん』ってね」

『…それは…うん』

かつて、千歌ちゃんもそういう考えを持ってた事はあるんだ。

否定はできないだろう。

『でも』

『うん』

『環境とか、今の状況とか、言い訳にしたらダメだと思いの！』

『…うむ』

『それが分かった上で、スクールアイドルやってるんだもん！』

「そうかい」

悪くない考えた。

停滞的な考えをするより、がむしやらにでも前を見るその姿勢は、千歌ちゃんらしくていい。

「それで、何かやりたい事でも考えてるのかい？」

『うん…あのね、μ s は、この時期にはもう廃校は阻止してたんだった』

「ああ、そうなのかい」

さすがだ。

そもそも、生徒の形成する一グループが、学校の存続に影響を与える事自体がすごいというのに。

『でね、もう一度、東京に行こうと思ってるの』

「ほう」

『μ s と私たち、どこが違うのか。どうしてμ s は、音乃木坂を救えたのか。何がすごかったのか。この目で見ておきたいんだ』

「いいんじゃないかい」

『うん。みんなも、賛成してくれたんだ』

「そうかい。じゃあ頑張ってくれ」

『あれ？ハルくんは一緒に来ないの？』

「俺は明日には帰る予定なんだ。君たちが来るのは明後日なんだろう？」

『えー！梨子ちゃんは滞在期間1日延ばしてくるって言ってたよ！』

「東京でもう一泊となると、かかる費用も馬鹿にならないんだよ」

『そこをなんとか！』

「無い袖は振れないんだ」

『けちー！』

「悪いね。それじゃ」

電話を切る。

新幹線も電車も、乗車券自体はまだ買っていない。

つまり、急ぐ必要はない。

だが、宿泊費が持たない。

そもそも、ホテルも取れるか分からないしね。

と、思っていたのだが。

「…は？電車が止まった？」

「はい。申し訳ありませんが、人身事故が発生してまして」

「…それ、解除されるのにどれくらいかかるんですか？」

「まだなんとも言えません、今日中は厳しいかと…」

「…なんてこった」

千歌ちゃんと電話した翌日の事だった。

人の多い時間は避けたかったので、夕方に出て遅い時間に沼津に着くようにしようと思っていた。

そしたらこの事態である。

人身事故によって電車が動かない。

「さすがにこれは予想してなかった」

いきなり交通手段を断たれてしまった。

車は無い。

タクシーなど問題外。

バスは昨日の段階で予約が埋まっていた。

「カラオケかネットカフェかなあ…」

とりあえずは一晩明かして、早朝に帰ろう。

そう決めた時だった。

『ブルルルルルル』

携帯のバイブ音。

電話だ。

梨子ちゃんからだ。

「はいもしもし」

『あ、ハルさん?』

「ああ、そうだよ。どうしたんだい」

『いや、電車止まったって聞いてたから。大丈夫かなって』

「そのことかい。まあちょうど足止めを食らったよ」

『え?それって大丈夫じゃないじゃない』

「まあ1日くらいは大丈夫さ」

『どうするの?』

「まあこの辺だとカラオケかな」

『なっ体壊すわよ?』

「夏だし、1日くらい大丈夫さ」

『他に泊まれる場所ないの?』

「お金の問題もあるんだ」

そこまで言ってから、梨子ちゃんが少し黙ってしまった。
少ししてから、また声が聞こえた。

『…ねえ』

「ん？」

『宿泊分のお金が浮いたら』

「うん？」

『その分、明日私たちと行動できない？』

「…仮にそんな手段があればね」

『じゃ、じゃあ…うち、こない？』

「…へ？」

人生初の女の子宅でのお泊まり。

それはまさかの、女子高生宅でした。

寝た部屋？

キツチンで寝たよ。

μ'sの背中と布屋さん

「それで、何か遺言はありますか？」

「ハル〜？ちゃんと説明してよね」

「嫁入り前のレディーのうちに泊まるなんて」

「お、お姉ちゃん、降ろしてあげないとハルさん、多分話せないよ」

「は、ハルさんが死んじやうずら！」

「3年生って、割と脳筋よね」

「脳筋？」

「千歌ちゃんは知らなくていいと思う」

ダイヤちゃんと果南ちゃんに胸ぐらを掴まれて持ち上げられる。

足が完全に浮いてる。

すごい力だ。

昨日、交通の関係から梨子ちゃんのお家に泊まらせてもらった。

もちろん、手を出すなんてしてないし、ラッキースケベの一切に至るまで可能性を

除去するために手を尽くした。

にも関わらずこの有様である。

そりゃあ、悪いことをしたとは思っているが、ここまでしなくてもいいじゃないか…
あ、意識が。

「わー！ハルさん、白目向いてる！」

「は、ハルさーん!!」

※

「それで、本当に何もしていませんのね？」

「当たり前だろう。梨子ちゃんにも確認したらしい」

「ええ。何も…そう、本当に何も…」

なぜか梨子ちゃんが複雑そうな表情をしている。
なんだろうか。

「…お風呂出る時、下着とか悩んだ私が馬鹿だったわ…」

よく聞こえないが何か言っている。

はて？

「だいたい、俺が何かすると本気で思っているのかい？」

「日頃の発言から、それが通ると思ってるの？」

「…手は、出さないから」

「信用ナツシングねー」

「今更ながらに、日頃の発言について反省しているよ」

多分改善はされないが。

どうせ嘘が付けないんだしね。

「まあまあ、ダイヤさんたちも少し落ち着いて。そろそろ移動しよう？」

千歌ちゃんがそう言って仕切り直す。

ありがたい。

「とは言っても、まずはどこから行く？」

「タワー？ ツリー？ ヒルズ？」

「遊びに来たんじゃありませんわ」

ダイヤちゃんのそんなセリフに、横の果南ちゃんは苦笑い気味だ。

まあ、彼女たちの本来の目的は、 μ 'sと自分たちの違いをはつきりさせる事だっただけだ。

「まずは神社！」

千歌ちゃんがそう言った。

どうやらそれは決まっているらしい。

「実はね、ある人に話聞きたくて、すっごい調べたんだー。そしたら会ってくれるってある人？」

考えたが、特に心当たりがない。

「ある人？誰すら？」

心当たりがないのは、俺だけではないらしい。

「話を聞くにはうってつけのすっごい人だよー」

へえ。

そうなのか。

「東京、神社……」

「すっごい人……まさか……」

ルビイちゃんとダイヤちゃんが目を輝かせ始めた。

いや、多分君らの予想は違うと思う。

μ, sではないと思うよ。

絶対。

「お久しぶりです」

「お久しぶりー」

「なんだ〜」

案の定である。

神社に向かったAqoursを待っていたのは、2人組のユニット。

千歌ちゃんたちから一度聞いた事がある。

確か、Saint Snowという名前のスクールアイドルたちだったはずだ。

彼女たちが東京でライブをした時に、その発表を見たと言っていた記憶がある。

というか、ダイヤちゃんたち若干失礼じゃないかね。

そのまま、Aqoursを歓迎すると言って、UTXの方に移動となった。

「お兄さんは…マネージャーですか？」

「久しぶりにお兄さんと言ってもらった事に、俺は大変感動しているよ。それはそうと、マネージャーではないね。まあAqoursのファンって事で」

「ファン…そうですか。私たち、Saint Snowという名前で、スクールアイドルをやってます」

「ああ、一応話には聞いてますよ。予備予選突破、おめでとうございます」
「ふふ。どうもです」

「じゃあ、あの子たちの事、頼みますね」

「あれ？一緒に来ないんですか？」

「さすがに、都会の女子校には入れないですよ」

田舎ならいいのかと言われるとそんな事はないが。

まあ、完全アウェイの女子校に、男一人で入れるほどメンタルは強くないのだ。

「そんなわけで、適当に辺りをうろついているから、終わったら連絡してくれ」

「ん、わかったー」

「ヨーソロー！ハルくん、迷子にならないようにねー」

「もしもの時は迷子センターを使うから、よろしく頼むよ」

入り口で、彼女たちを見送る。

さて。

どう時間を潰そうか。

そうだ。

お腹が減って来たし、饅頭でも買いに行くとしよう。

ちやうど、興味のある店が近くにあるんだ。

歩いて来れるほどの位置に、その店はあつた。

扉を開けて、中に入る。

店員さんの、元気な声で迎えられた。

「いらつしやいませー」

オレンジの髪を片側で結ぶ女性。

表情や声から、明るい印象を与えるその人。

画面で見たのは、もう数年前のものはずだったが。

その可愛さは、今もまだ色褪せていなかった。

「ん？お兄さんどうしました？」

「ああ、これは失礼。つい見惚れてしまつて」

「えー。なんですかそれ」

笑つて返される。

その笑顔も、画面越しに見るそれよりもずっと魅力的だった。

「お兄さん、観光ですか？」

「んー…まあそんなところですね」

「もしかしてデートですか？」

「だったら彼女連れてきてますよ」

「それもそうですよねー。作らないんですか？」

「簡単に言わんでください。それ、俺の今年中の目標なんです」

「達成できそうですか？」

「前途多難ですね」

「あはは！あ、じゃあこれあげますよ」

「…鳥の羽？」

真っ白な羽だった。

なんだこれ。

「それ、人の想いを感知する羽。つまり、想いをつなぐバトンなんですよ！」

「ほう。人の想いを」

「強い目標を持っている人のところに舞い降りるんです。で、持っている目標が叶うんです」

「それは凄い。なんの鳥なんですか」

「私が高校生の際に、空から落ちてきたんです」

「……………」

「あー！お兄さん、信じてないでしょ！」

「俺、理系なんですよ」

「私もです！」

そんな会話をしながら、饅頭を詰めてもらった。

ついでに羽ももらった。

どうすんだ、これ。

困っていた直後、強い風が吹いた。

そして。

「あー……」

羽は風にさらわれていった。

「…強い目標を持つている人のところに舞い降りるんだっけ」

どうやら俺は、大した目標を持っていないと判断されたらしい。

間違っていないがカンに触るな。

とはいえ。

「いやー…あれがかつて、スクールアイドルの頂点に立った女性ですか」

やっぱり。

すごい可愛かったな。

再びUTXまで戻ってきた。

千歌ちゃんたちからの連絡はまだない。

あとどれくらいか。

そう思ってた時だった。

上方に存在する大きなモニター。

そこに、今年のラブライブのファイナルステージについて映し出されていた。

そこにはつきりと表示される『AKIBA DOME』の文字。

例年通り、今年もあそこが会場らしい。

ぶらぶらしているようかと思ったら、偶然にも千歌ちゃんたちを見つけた。

彼女たちもこれを見に来ていたらしい。

声をかけようとしたが、少々躊躇われた。

モニターを見ている彼女達の表情が、少し沈んでいたのだ。

雰囲気、少し気圧されてしまったようだ。

なんと声をかけようかと思っていた時だった。

「ねえ。音乃木坂、行ってみない？」

そんな声が聞こえた。

声の発信源は梨子ちゃんだ。

みんな、少し驚いていた。

千歌ちゃんは、心配そうに確認までしていた。
でも。

梨子ちゃんは、今度は大丈夫だと、そう言った。
ならば、俺から言うことは何も無い。

音乃木坂学院下。

高校の階段下に、俺たちはやってきた。

坂、長いな。

毎日これを登って通学するのか。

なんというか…

「スカートの中、見えそう」

「とおう！」

「ぐえ…痛いじゃないか」

思ったことを口にしたら、マリーちゃんに一発もらってしまった。
脇腹に。

「っ！」

「あっ」

「千歌ちゃん!？」

「待つて待つてー！」

唐突に千歌ちゃんが走り出した。

それを追うみんなが走っていく。

俺は、それをゆっくり歩いて追いかける。

走る？それは無理。

前方を駆けていく行く彼女達。

疲れた俺は、踊り場で一休みする。

というか、ここで待つてもいいかもしれない。

やがて頂上についた9人は、横並びにそこに立つ。

なかなか様になってるじゃないか。

そんな風に思っていた時だった。

気づいたら、ダイヤちゃんの横に誰か立っている。

制服から察するに、音乃木坂の生徒かな？

休日に出校してるとは、ご苦労なことだ。

みんなと何か話している。

あまり聞き取れないが、はっきりと分かったのは、ここには μ sに関する痕跡は残っていないこと。

何も、残していかなかったことだ。

物なんてなくても、心は繋がっているから。

それで、いいんだ。

そう、その子は言った。

それが μ sなりに出した、最後の答え。

「大した物だね」

そう呟いた時だった。

「転ぶわよ〜」

「だーいじょーぶ！それ！」

小さい女の子が、階段に向けて走ってきているのが見えた。

その子は勢いに任せて手すりに乗り、そのまま滑って降りてきた。

そして綺麗に着地。

両手を広げて、体操選手のようにポーズをとる。

「お見事」

拍手と共にそんな言葉を送る。

「えへへ！」

満面の笑みで返された。

この子の髪型、さっきの饅頭屋さんと同じだ。

この子も将来、スクールアイドルでもやりたいんだらうか。

「でも危ないよ。怪我をしてしまう」

「大丈夫だよ！」

「怪我をする子はみんなそう言うんだ」

「私は大丈夫！」

「そうかい」

「すいませーん。もう、危ないでしょ」

「さっき言われたよー！」

この子のお母さんが追いついてきた。

軽く会釈をしてから、手を引いて歩いていく。

別れ際、笑顔と共に手を振ってくれた。

あれは将来美人になる。

その後すぐに、Aqoursのみんなが戻ってきた。

みんな、いい笑顔だ。

「ハルくん、結局上まで来なかったね」

「あそこはスクールアイドルの聖域だよ。俺が踏み込める領域じゃない」

「なにそれ」

笑われた。

まあいいか。

※

帰りの電車。

人気がない駅に電車が停まった。

根府川あたりだろうか。

海が少し遠くに見える。

ぼーっと海を見ていたら。

「ねえ！海、見に行かない!?!みんなで！」

不意に、千歌ちゃんがそう言った。

そしてそのまま電車の外に行ってしまった。

「千歌ちゃん！」

みんな、弾かれたように走っていく。

俺も、後を追った。

海まではすぐに着いた。

水平線に飲まれる直前の太陽が、海を赤く染め上げる。

内浦とはまた違った海の景色。

「私ね、わかった気がする。μ、sの何がすごかったのか」

海を見ながら、千歌ちゃんが言う。

「多分ね、比べたらダメなんだよ。追いかけてやダメなんだよ。μ、sもラブライブも」

μ、sは、何かを追いかけてアイドルをやっていた訳ではない。

みんなの夢を乗せて、自由に走って、飛んだ。

でもそれは、目標が無いってことじゃない。

目標も、自分たちで決めたんだ。

そこに向かって、走った。

自分たちが本当にやりたいことを、目標にしたんだ。

そんな μ 'sの目標は、何だったのか。

それは、今となってはわからない。

でも、彼女たちはちゃんと、そこにたどり着いた。

そして。

「Aqoursは、どこに向かって走っていくんだい？」

Aqoursの目標は、何なのか。

「私は、ゼロを・イチにしたい！」

0を1に。

そうやって、千歌ちゃんのはつきり言った。

「あの時のまま、終わりがたくない！」

千歌ちゃんのその声に、反論する者はいなかった。

みんな、同じ考えのようだ。

μ 'sの背中を追うんじゃない。

彼女たちに考えて、見つけた、ゴール。

9人が、円陣を組む。

親指と人差し指を伸ばし、みんなで一つの大きな0を作る。
そして。

「ゼロからイチへ！今、全力で輝こう！A q o u r s e !」

『サンシャイン!!』

みんなが、手を掲げる。

その手が示すのは、人差し指で作られた1。

駅で、改めて電車を待つ。

横に立つ千歌ちゃんの表情は明るかった。

「答え、見つけたんだね」

「うん！」

「そうかい。それは良かった」

「うん！」

「その目標、大事にするといい」

「ハルくん？」

「俺にはできなかつたんだ。そんな風に走ることは」

「どうして?」

「どうして…まあ、良くも悪くも普通だったからかなあ」

でもそれだと、普通の人は高校時代に大きな目標なしで生きてるみたいだな。

それは違うし…。

「まあとにかく、目標持つて走り抜けるなんて、誰にでもできることじゃないんだ。頑張ってくれ」

「ハルくんは」

「ん?」

「ハルくんは、今は目標はないの?」

「俺かい?…そうだね…」

俺の、今の目標。

売り上げとか、最近傷つき方が大きい俺の名誉回復とか、いろいろあるが…

一番の目標は、まあこれしかないだろう。

「君たちの手助けをすること、かな」

「それ、目標なの?」

「君らの目標が達成されれば終了だからね。そういう意味では、君らと同等と言える」

「屁理屈だね」

「大人なんてそんなものさ」

そんな会話をしている時だった。

空から、羽が落ちてきた。

真っ白の羽。

そしてそれは、ゆっくりと千歌ちゃんの手元に降りてくる。

驚いた。

この翼は…

「きれい…」

「…そうだね」

「なんだろう、これ」

「何って、そりゃ…」

鳥の羽。

そう言おうと思った。

でも、思い出した。

鰻頭屋さんでの出来事。

「…バトン…かな」

「バトン？」

「そうだよ。想いをつなぐバトン、だそうだ」
「…そっか」

μ sの想い。

μ sの背中を追っているのは決して手に取れないそのバトン。
それは今、A q o u r sに、伝わったのだ。

平凡な日常の布屋さん

3年生と布屋さん（上）

「ここがラウン○ワンかい」

「そう！今日は思いっきり遊ぶわよ！」

「うん！」

「ええ！」

「…お手柔らかに頼むよ」

※

東京から帰って来た後。

別れ際の駅でマリーちゃんにこんなことを言われた。

「ハル、1年生のみんなとお祭りに行ったというのは本当？」

特に否定する理由もなかったなので、肯定する。

「そうだね。楽しませてもらったよ」

「美味しかったぞら〜」

「た、楽しかったですね」

「わ、私は別に、行きたいなんて行ってなかったけどね」

「でも、ハルさん来るって聞いて一番喜んでたのは善子ちゃんだったぞら」

「ちつがああああう！」

「あんまり外で叫ばないように」

「ぬぐつ」

何か言いたげではあったが、善子ちゃんは一応口を閉じた。

「それで、その祭りがどうしたんだい」

「聞いた話によれば、ハル、2年生の子たちともデートしているんでしょ？」

「デート？…遊園地のことかい」

「あー。楽しかったね、あれ」

「うん！」

「そうね」

と、そのあたりで、マリーちゃんに胸ぐらを掴まれた。

そのまま前後に揺さぶられる。

「私たち3年生だけ何も無いなんて不公平・よー！」

「確かにそうですわね」

「そうだねー」

「ふ、二人とも、先にマリーちゃんを止めてくれ」

あ、頭がグワングワン揺れる。

酔う、酔うから。

「私たちもどつかに連れてつてくれるなら、助けてあげる」

「わ、わかったから。助けてくれ」

「おお、ナイスですわ果南さん」

ようやく解放される。

「やつぱり、3年生が一番強引よね」

「あれくらいの方が、ハルさんは振り向いてくれるすら？」

「あ、あれは私にはできなさそう…」

「私もあれくらいしないと、ハルくん気づいてくれないのかなあ？」

「でもハルくん、あれでも気づいてなさそうだよ？」

「鈍感な筋金入りね…」

1年も2年も、なぜか呆れたようにため息をついている。

なんなんだい。

※

そんなわけでラウン〇ワンに来たわけだが、目的はスポ〇チャである。

ハーフコートの子、バレーボールやテニスのコートに加えて、バツティング、ピッチングに至るまでを要する、スポーツのレジャー施設である。

「チームを2つに分けて勝負しよう！」

「ああ……まあそうなる気はしてたよ」

一応それに備えて、服は動きやすいものにしてきたし、靴も運動靴だ。

しかし、俺はスポーツが得意ではない。

逆にこの3人は運動神経が結構良い。

果南ちゃんに至ってはAqoursでも一番だ。

チームを組むなら、俺と組む方が不利だろう。

そう思っていたのだが。

「じゃあハルは私とだね」

「え？」

「ノー。ハルの面倒は私が見るわー」

「ん？」

「いえいえ。ハルさんではお二人の足を引っ張ってしまいますわ」

「お？」

…あれ？

「あの、3人も。俺と組んだら、勝率はぐんと下がるよ？それを分かっているかい？」

「「もちろん」」

「…俺は今、すこしだけ傷ついたよ」

だったらなんで俺と組もうというのか。

（ハルと組んでカッコイイとこ見せるのは私だよ）

（得点取るたびに喜んだフリして抱きつくのヨ）

（活躍できずにへこんだハルさんを、励ますのですわ）

「何を考えているかわからないけど、君たち、目つきが怖いよ」

俺としては、誰と組んだところで足を引っ張ることになるだろうから、そこまでチームわけにはこだわっていないのだが。

「じゃんけんでいいんじゃないかい？こんな事で揉めても仕方ないだろう」

「ノーノー。せっかく勝負できるものが沢山あるんだから」

「チーム分けの方法も勝負で決めよう」

「ですが、3人とも得意なものが違いますわ」

「じゃあ、何の種目で決めるかを決めるための勝負を…」

「キリがない！」

結局、じゃんけんで決める事になった。

結果。

「ふっふっふ…私の勝利ですわ！」

「いや、まだ勝負すらしてないんだが」

「ダイヤちゃんじゃんけんに勝った。」

「チヨキを高々と掲げている。」

「ようやくチームが決まったね。最初は何から行くんだい？」

「ウエイト！先にルールの確認よ」

「ルール？」

「ルールも何も、2対2でやれる競技を適当にやるだけじゃないのか。」

「まずは、これは真剣勝負である事を忘れないように」

「もちろんそのつもりですわ」

「そして、真剣勝負において」

「うん」

「敗者が勝者の命令を聞くのは、当然の事」

真面目な顔で言う果南ちゃん。

マリーちゃんは横で頷いている。

「初めて聞くルールなんだが」

「望むところですよわ！」

「ダイヤちゃん？」

「いやいや。」

勝てない。勝てないから。

「種目は全部で6つやるよ」

「各チームで3つずつ選ぶんですね」

「イエス！ただし、一度やったのはノーよ」

「了解したよ」

できる限り、俺たちが有利になるものを選ぼう。

最初の選択権は果南ちゃんたちになった。

最初は何でくるのか。

「よし、最初はあれしかないね」

「バスケットボール！」

いきなりスタミナを使うものだ。

運動不足の自分には、正直きつい。

2 on 2のバスケ。

攻守を順に交代して行う、シンプルな勝負だ。

それぞれ攻撃が5回になるように勝負し、その中の総得点を競う。

勝利回数ではなく、総得点というところがポイントだ。

仮に、1回1回の勝負では負け越しても、勝った際に3ポイントで勝てていけば、総得点では逆転のチャンスがあるという事である。

相手の得点をできる限り抑え、まぐれでも3ポイントで稼ぐ。

勝つにはこれしかない。

「よし、行くよー」

「ダイヤちゃん、マリーちゃんは任せたよ」

「了解ですわ！」

さあ、出だしが肝心だ。

ここで抑えて…

「よっ」

スタート直後。

ハーフライン。

果南ちゃんは、そこからボールを投擲。

綺麗なワンハンドシュート。

放られたボールは美しい弧を描き。

『パッ』

リングのど真ん中を通過した。

「…ええ」

え。

いや。

嘘でしょ？

「ちよつとハルさん！ちゃんとマークしてください！」

「いや、ちよつと待って。あれは想定できない」

「果南さんのシュートレンジは、コート全てですわ」

「怖すぎだろー！」

どっかの漫画で聞いたよ、そのセリフ。

「ふふふ。次はハルたちの番だね。はい、どうぞ」

ボールを受け取る。

俺はハーフラインからシュートなどできないので、おとなしくダイヤちゃんにパスを回そうと考える。

ワンドリブルについて、パスコースを探そうとした次の瞬間。

手に帰ってくるはずだったボールが無い。

「ハル。ちゃんと相手も見ておかないとだめだよ。こんなにあっさり取られちゃって」

「…いつとったの？」

「ん？そりやあ今だよ」

「ちよつとハルさん、何してますの？」

「…ごめんダイヤちゃん、マークする相手変わってくれる？」

「はあ…仕方ありませんわね」

結局、勝つことはできなかった。

しかし、驚いたのは果南ちゃんにダイヤちゃんが対抗していたことだった。

そういうえば、海の家屋根から飛び降りて平気だったり、この子空中戦得意だった

な。

そんなことを思った。

ちなみにマリーちゃんも人並み以上には上手かった。

「ハル、運動不足過ぎるんじゃない?」

「そうねー」

「そうですわねえ」

∴運動不足は認めるが。

幾ら何でも、レベルが違いすぎる。

まだ一戦目。

あと五戦。

∴体、もつかな。

3年生と布屋さん（下）

バスケットで負けた俺たち。

次の種目選択権は俺たちにある。

「ハルさん、何か得意なものがありますの？」

「なくはないが…まずはダイヤちゃんに任せるよ」

「いいんですの？」

「もちろん」

勝負も大事だが、本来の目的はこの子たちのリフレッシュだ。

それを忘れてはいけない。

「そうですわね…じゃあ、あれにしましょう」

ダイヤちゃんが指差したのは、テニスコート。

硬式、軟式どちらも用意してあるようだ。

…なぜか、嫌な予感がした。

〈テニス〉

「行きますわよー…とおおお！」

すごい掛け声とともに、ダイヤちゃんの渾身のサーブが放たれる。

「とりゃー！」

リターンするのは果南ちゃんだ。

俺の方にボールが飛んできた。

「よっ」と

なんとか打ち返す。

2人のように速くはないが、大きく弧を描いて相手コート奥に落下する。

はずだった。

落下地点では、マリーちゃんが構えていた。

そのポーズは、まるでサーブを打つ時のようだ。

そして。

サーブを打つ時の要領で、マリーちゃんはラケットを振り下ろす。

『バコオオンー！』

体重を乗せた一撃。

それは、俺のラケットを弾いていった。

「……………え」

「あら…ハルさん、ラケットちゃんと握っておかないと、危ないですよ？」
「コメントそれだけ？」

鞠莉・果南：2―0：ハル・ダイヤ

くエアホッケーく

「な、どこに打つてもダイヤのところに行っちゃう！」

「どうなってるの!？」

「ふっふっふ。これぞ黒澤家に伝わる奥義、パーフェクトホッケーですわ！」

「君のお家には、エアホッケー専用の奥義があるのかい」

家に伝わるなら、ルビィちゃんもできるのか、これ。

『テレテレレレ〜ン』

呑気な音声とともに、2枚目のパックが落ちてくる。

2枚のパックが同時に動き回っている状態。

目が回りそうだ。

「さあハルさん！そちらのパックの支配は任せましたわ！」

「すみません、その奥義が誰にでもできると思わないでくれますか？」

結局、ダイヤちゃんが2枚とも操っていた。
どういう理屈なんだ、あれ。

鞠莉・果南：2―1：ハル・ダイヤ

くバレーボールく

「行くよ、鞠莉！」

「カモン！」

果南ちゃんの綺麗なトスから、マリーちゃんの強烈なアタックがくる。

「おっと」

なんとかそれを止め、ダイヤちゃんに上げる。

「ナイスですわ、ハルさん！」

ダイヤちゃんがトスの体勢に入る。

それに合わせて、アタック準備をする俺。

「行きますわよ、ハルさん！」

「ああ！」

タイミングは完璧。

よし、このまま…

そこまで思った瞬間だった。

目の前に、ブロックがいる。

しかも2枚。

少人数のバレーで、後ろほったらかしの特攻ブロック。

恐ろしいほどの、攻めの姿勢。

だが、気付いた時には遅かった。

アタックに入った俺の動きは止まらない。

だったら。

「ブロックごと、ぶち抜くー」

そのまま、一気に腕を振り抜いた。

腕の運動エネルギーを受け取ったボールは、そのままブロックに当たり…

まるで金属の壁に当たったかのような勢いで、俺の顔面に帰ってきた。

「いっふっー」

ブロックが、堅い…じゃなくて、硬かった。

鞠莉・果南：3―1：ハル・ダイヤ

くパターゴルフく

「ハルさん、これは得意なんですよのね」

「急がなくていい競技なら、ペースが崩れないからね」

「なんとというか…ハルらしいね」

「私はこれ苦手！じれったいー！」

マリーちゃんが悲鳴を上げている。

思いつきり動けないこの競技は、マリーちゃんとは相性が悪いらしい。

「私もこれは苦手だなー。感覚がうまくつかめないや」

果南ちゃんも同様だ。

「なんとというか、女性3人と男性1人の集まりで、男性が一番得意なのがこれというのも、変な感じですよわね」

「…自覚はあるよ」

「ふふ。でも、勝負は勝負ですよ。悪いことではありません」

「ああ。任せてくれ」

ちなみに、マリーちゃんと果南ちゃんは途中でフラストレーションが溜まりすぎたらしく、壁に向けて思いつきり打っていた。

体に当たったら穴が空きそうだった。

鞠莉・果南：3―2：ハル・ダイヤ

くピツチングく

「これがラストだよ！」

「俺たちが勝てなければ、負け越し確定か……」

「絶対勝ちますわよ！」

いわゆるストラックアウト。

ルールは単純。

2人で15球を投げ、当てた的の数で勝負する。

得点は関係なし。

とにかく、当てれば良いというシンプルなルール。

先行は果南ちゃんたちだった。

9枚中8枚。

いきなりかなり当ててきた。

「私たちが勝つには、パーフェクトしかありませんわ」

「そうだね。…まあ、大丈夫だよ」

「ハルさん？随分余裕ですわね」

「ああ、まあね」

実は、これが意外に得意だったりする。

「…君たちには隠していたけどね。俺、コントロールには自信あるんだ」

「えっ？」

「ハルが？」

「コントロール!？」

3人とも驚いている。

そうだろう。

さあ見ておくといい。

これが俺の本気だよ！

「ふん！」

俺の手から放たれたボールは、吸い込まれるようにボードに向かい…

狙った的、1番にヒットする。

「…ふむ」

「「・遅い」」

「最初のコメントがそれかい」

感心してもらええると思つたら、思わぬコメントだった。

「あのフォームでそのスピードって……どんな投げ方してるの」

「見ての通りだよ」

「あのスピードで向こうまで届くのが信じられないわ」

「狙ったところに行つてるだろう」

確かに、俺のピッチングは制球に神経を割きすぎで、球速は非常に遅い。

以前測つた時は、35 km/hだった。

千歌ちゃんと曜ちゃんは、それを見て爆笑していた。

だが、ちゃんと狙つたところに行くんだ。

この勝負ならこれでいいはずだ。

ダイヤちゃんと順に投げ、いよいよ俺たちも8枚抜き。

残つた球数はあと1球。

投げるのは俺だ。

「ハルさん……ここで当てて延長に持ち込むのですわ!」

「ハルがここで外したら、ピッチングは同点で、総合では私たちの勝ちだよな?」

「そうよ！ 私たちのビクトリー！」

「必ず延長に引きずり込むよ」

残ったのは5番のみ。

ど真ん中。

大丈夫。

これなら問題無い。

モーションに入る。

左手を的の方へ伸ばし、テイクバックした右手を上げ…

力を入れたその瞬間。

「あ！ 向こうのバッティングコーナーでミニスカの女子高生が!!」

「!!」

条件反射だった。

身体のありとあらゆる部分が、その言葉に反応する。

「…あ」

気づいた時には遅かった。

ボールはすでに手から離れ、あらぬ方向へ飛んで行った。

「ハ〜ル〜さ〜ん〜…?」

「あ、いや、ダイヤちゃんあのね。これはね…」

「何をしているんですのおおお!」

「ぐ、ぐええ。悪かった。悪かったから」

首が締まる勢いで胸ぐらをつかまれる。

そして前後に揺すられる。

く、苦しい…。

「ウイーアーウイナー!」

「いえーい」

マリーちゃんと果南ちゃんがハイタッチしている。

女子高生という単語、これは間違いなく俺の弱点だ。

改めて、それを痛感したのだった。

※

「まあ負けは負けですわ。約束は守ります」

「足を引つ張つたのは主に俺だからね。命令されるのは俺だけでもいいよ」

「そういうわけにもいきませんわ。負ける時は潔くなくては」

「男前だね」

少なくとも俺より男前な振る舞いである。

夕方。

帰り道の車の中。

筋肉痛になること間違いなしの腕をなんとか動かし、ハンドルを握る。

「そんなに心配しなくても、無茶な命令はしないよー」

「そーよ、まったく」

苦笑いの果南ちゃん。

マリーちゃんからは呆れの色が見える。

「命令はもう決めているのかい？」

「うん、まあねー」

「ほう、じゃあ聞かせてもらおうか」

2人は一拍置き、話を続けた。

「夏休みの終わりにね、Aqoursのみんなでキャンプをしようって話があるんだ」

「そうですわね」

「普段から海はずっと見てるから、たまには山でお泊まりしようってねー」
「なるほどね」

「ハルには、それについてきてほしいんだ」

「それが命令かい？」

「イエス！」

「なるほど…」

なんというか。

わざわざ命令にしなくてもいいレベルである。

「命令になんてしなくても、誘ってくれば行くんだがね」

そんなことを口にした。

した瞬間だった。

バックミラー越しに、果南ちゃんとマリーちゃん目の目が光った気がした。

「…ハル、それは本当？」

「男ににっこーんはないわよね？」

にっこーん…ああ、二言か。

「…まあ、そうだね」

「じゃあ命令は別で」

「…切り替えが早くないかい？」

始めからある程度予測されていたらしい。

「じゃあ、キャンプはハルも参加決定で」

「命令はまた考えとくねー」

「…お手柔らかに頼むよ」

笑顔の2人。

というか、ダイヤちゃんには命令はないのかい。

「あ、ダイヤにはもう何をしてもらうか決めてるよー」

「そ、そうでしたの!？」

「ダイヤに与える命令はー…」

「好きな人のいいところ発表!!」

「ピギヤツ!？」

「好きな人のいいところ？」

好きな人を直接発表させないあたり、2人の優しさ何だろうか。

というか、好きな人がいたのか。

「ハル、多分勘違いしてるけど、ダイヤの好きな人は誰かバレバレだからね」
「好きな人発表に意味はナツシングよ」

なんと。

さすがが幼馴染だ。

「…あー…これは、まったく気付いてないね」

「いつも通りねー。まあそれはそうと」

助手席に座るダイヤちゃんが、硬直状態だ。

「ダイヤ、まだ何も言っていないのに顔が真っ赤よ?」

「あつはつは。そうだねー好きなどこ3つ、言ってもらおうか」

果南ちゃんとマリーちゃんがニヤニヤしている。

「くくくつ!は、ハルさん!」

「なんだい?」

「耳、塞いでてもらえます?」

「運転中だよ」

「だーいじょうぶよ、ダイヤ」

「そうそう、どうせハルにはバレないから」

「くくくつ、他人事だと思つてく…つ」

「あつはっは、罰ゲームだからね」

「…いいでしょう。いいところを3つ、申してさしあげますわ!」

横で宣言するダイヤちゃん。

「1つ目は…」

好きな人のいいところを3つ、ちゃんと語ってくれたダイヤちゃん。

本当にその人のことが好きなんだなあ。

そんな感想を抱かせるのだった。

「あれで気づかないって、どんな神経してるんだろう」

「そこは昔からまったく変わってませんわ」

「好かれてる自覚はあるんだろうけど、それが恋愛だなんて微塵も思っていないみたいね」

「それがまた厄介なんだよねえ」

「「はあく」」

少女たちは、ため息をつく。

彼女たちの前に立ちはだかる壁は高く、険しい。

宝石姉妹と布屋さん

『ピンポーン』

大きな門についているインターホンを押す。

いつ来ても、門の大きさには圧倒される。

「は、はーい！」

向こうから家の住人がやってきた。

「こ、こんにちは、ハルさん」

「こんにちは、ルビイちゃん」

「今日はえつと…すいません、呼び出しちゃって…」

「いや、構わないよ。ここの方が広いしね」

今日ここに来たのは、1日家庭教師のためである。

休み明けのテスト対策で、ルビイちゃんから勉強を教えて欲しいと頼まれたのである。

見慣れた廊下を通って、とある一室に案内される。

部屋の真ん中に大きな机があり、すでにノートと教科書が開かれていた。

「お茶を持ってくるので、少し待っててもらえますか？」

「ああ、お構いなく」

トタトタと駆けていくルビイちゃん。

こけないか心配になる。

待っている間に、教科書を拝見する。

ついでに、勉強用のものならいいだろうと思い、ノートも見せてもらう。

「ふむ……」

丁寧に書き込まれた文字達。

大事なところもペンでしっかりマークされている。

しかし。

「こんなにきつちりやっついては、効率が悪いな……」

明らかにテストには出ないであろう場所まで、マーカーが引かれている。

ノートも、提出するわけでもないのに相当丁寧にまとめられている。

このやり方では、どうあっても時間が足りない。

一つ一つを丁寧に処理しようとするのはいい事だが、効率よくやるのも重要な事だ。

そういう意味では、ルビイちゃんはダイヤちゃんに比べて勉強が不得意だ。

一言で言ってしまうえば、要領が悪いのだ。

そんな風に考えていたら、ルビイちゃんがお茶を持ってやってきた。

「すいません。お待たせしました」

「いやいや、気にしないでくれ」

「あ、それ…」

「ああ、勉強ノートを見させてもらってたんだ。もしかしてまずかったかい？」

「い、いえ、大丈夫です。その…どう思いますか？」

「ん…そうだね」

さつき思った事を伝える。

効率が悪いやり方をしている事。

ポイントの押さえ方が若干悪い事。

「うー…やっぱり、そうなんですね…」

「とはいえ、努力自体は十分に評価できるくらいしてるんだ。やり方さえしつかりすれば、十分結果は出るだろう」

「ほ、本当ですか？」

「ああ。そのために来てるんだからね」

「お、お願ひしますっ」

「あいよ」

勉強を始める。

思った通り、ルビィちゃんのやり方は不器用な勉強法だ。

教科書の端から端まで、無理にでも覚えようとしている。

結果、大事なところがふわふわした状態で覚えてしまっているわけだ。

染み付いたやり方はすぐには変わらないが、なんとか記憶の強弱を身につけてもらう。

ちなみに、俺が勉強を教えられるのはあくまで基本レベルである。

教科書の解説を分かりやすくする程度。

赤本の解説？

それは無理。能力が圧倒的に足りません。

「ふう…ひとまず数学はこんなものかな」

「ありがとうございます。ハルさん、教えるの上手ですね」

「いや、そうでもないさ」

もともとやる気はあるので、こちらとしては教えがいのがあるのだ。

そんな会話をしている時だった。

「ルビィー。そろそろお昼にしますわよー…って、ハルさん？」

「やあこんにちは、ダイヤちゃん」

「ああ、こんにちはハルさん。いらしてたんですね」

「ルビィちゃんと勉強してたんだ」

「あらそうでしたの。ご苦労様ですわ」

「いや、頑張ったのはルビィちゃんだからね」

「午後も勉強ですか？」

「ルビィちゃん次第だよ」

「は、ハルさんが良ければ、午後も…」

「ということなので、午後も勉強会だね」

「ふむ…」

ダイヤちゃんが何やら考え始めた。

かと思えば、すぐに言葉を続けた。

「午後は、私も参加してよろしくて？」

「ダイヤちゃんも？」

「うゆっ」

俺はもちろん構わないが…

ルビィちゃんはどうかだろうか。

「わ、私は良いですけど」

まあそりゃそうか。

「もちろん俺も賛成だよ。ただ…」

「ただ？」

「俺が君に教えられる事は何もないよ？」

「ふふ。それは構いませんわ。勉強は自分で進めますから」

「そうかい。それならそれで構わないが、かえって集中しにくくないのかい？」

「それくらいで途切れるほど、やわな集中力ではありませんわ」

「それもそうか」

「それに…」

「それに？」

俺とルビィちゃんを見て、ダイヤちゃんは続ける。

「一人でやるより、好きな人の側で勉強する方が、私は燃えるタイプですの」

「うゆ!!」

「ほう。それはいい」

「え？あれ？」

この場合の好きな人というのは、ルビイちゃんの事だろう。

素晴らしい姉妹愛だ。

「ルビイ、この朴念仁には絶対に私の想いは伝わってないですわ。だから心配はいりません」

「あ、そ、そうなんだ」

なにやらよく分からない会話を繰り返しているようだが、気にしない事にする。

「それより、先にお昼にしましょう。用意してありますわ」

「あれ？俺もいいのかい？」

「ハルさんがいたのは想定外でしたけど、まあ、あまりはいくらでもありますから」

「ありがたいよ」

そんなわけで、一緒に食事をいただいた。

今日はお母さんが作ってくれたらしい。

とても美味しかった。

※

午後。

お昼をいただいてから勉強を再開し、さらに数時間。

ダイヤちゃんもルビイちゃんも、ぶっ続けて勉強をやっている。すごい集中力だ。

だが、さすがに午前からの勉強で疲れたのだろう。

ルビイちゃんの瞼が重そうである。

「ルビイちゃん、眠たいかい？」

「うゆっ！だ、大丈夫です」

「眠い時に無理やりやっても集中できないだろう。昼寝でもするといい」

「え、で、でも……」

「1時間したら起こしてあげるからね」

「えと……」

「私も、いいと思いますわよ」

「お、お姉ちゃん……」

少し考えたが、一眠りする事にしたようだ。

「じゃ、じゃあ少しだけ……」

「ん。掛けるものがあるといいんだが」

「み、短い時間ですか」

「いやいや、体を冷やすのは良くないよ」

「持ってきますわ。ちよつと待っていてください」

「頼むよ」

「あ、ご、ごめんね、お姉ちゃん」

「ふふ。構いませんわ」

そうやって部屋を出て行くダイヤちゃん。

すぐにタオルケットを持ってきてくれた。

それを被って寝転がるルビィちゃん。

だが、どうにも落ち着きがない。

「どうしたんだい?」

「…えと、ハルさんをお願い事、してもいいですか…?」

「お願い?」

なんだろうか。

まあ余程の事でもない限りは断るつもりもないが。

「そ、その…」

「ふむ」

大分言いあぐねている。

はて。

「ひ…」

「ひ？」

「ひ、膝枕、してもらってもいいですか！」

「膝枕？」

「は、はい！」

「あら」

「もちろん構わないよ。どうぞ」

そう言つて、自分の膝を叩く。

恐る恐るといった感じに、ルビィちゃんが頭を乗せる。

そういえば髪を解いていないが、痛くはないのだろうか。

「し、失礼します」

「高さ、大丈夫かい？」

「は、はい…」

最初は緊張していたようだが、数分してから寝息が聞こえてきた。

可愛らしい寝顔である。

「疲れていたのかな」

「練習も毎日ありますからね」

「あのメニューをこなしているんだ。感心するよ」

「ハルさんも参加します？大丈夫、手を引つ張つてあげますわ」

「足を引つ張るのはごめんだよ」

「それは残念ですわ」

笑っているダイヤちゃん。

そのまま、視線をルビィちゃんの方にやる。

「この子も、頑張っていますわ」

「ああ、そうだね」

ルビィちゃんの頭を撫でる。

触り心地のいい髪だ。

「ルビィ、気持ち良さそうですね」

「そうなのかい」

「ええ。とても」

「ダイヤちゃんも、お昼寝するかい？」

「そう…ですわね。そうさせてもらいますわ」

すぐに2枚目のタオルケットを持ってきたダイヤちゃん。

「ダイヤちゃんはどこで寝るんだい？」

「ふふ。もう決めていますわ」

そう言うのと、ルビイちゃんとは反対側にやってきた。

そのまま、体重を預けてきた。

「右側、お借りしますわね」

「構わないよ」

「重いですか？」

「まさか。もつと体重をかけてもいいくらいだよ」

「ふふふ。それは良かったですわ」

左側に、膝枕で寝ているルビイちゃん。

右側に、体重を預けてくるダイヤちゃん。

「両手に花…いや、両手に宝石だね」

「うまいこと言ったつもりですか？」

「どうだろうね」

さらに数分して、右側からも寝息が聞こえてきた。

ルビイちゃんだけじゃない。

ダイヤちゃんだって、がんばっているのだ。

これで、少しでも気が休まるといいな。

2人の寝顔を見て。

そんなことを、思った。

罪な接吻と布屋さん

ある日の夕方。

閉店間際の時間。

お客さんもこれ以上来る気配は無さそうだし、そろそろ今日の営業を終えようかと思っていた時だった。

「チャオ〜」

「こんにちは、ハルさん」

「お邪魔するわよ」

「おや、いらつしやい」

やってきたのは、マリーちゃん、梨子ちゃん、善子ちゃんの3人である。

不思議な組み合わせだ。

「今日はまた珍しいメンツだね」

「そう? Guilty Kissのメンバーだよ?」

「ギルティ……?」

「Guilty Kissよ」

「あれ？千歌ちゃんから聞いてない？」

「なんのことだい？」

心当たりが全くない。

単語にも聞き覚えがない。

「私たち3人のユニット名よ」

「そうなのかい。そういえば、3つのユニットを作ったという話は聞いたような…」

「私たちがそのうちの一つよ」

「てつきり学年で分けたと思っていたよ」

「グーとパーで決めたわ」

「そんなんでいいのかい」

「リーダーが言うんだから良いんじゃない？」

まあそれもそうか。

「それで、今日はどのような御用件で」

「衣装について聞こうと思って」

「衣装？」

「ユニットである以上は、ある程度一貫した衣装を決めたいんだけど、なかなか決まらなくて」

「で、ハルのオピニオンを聞こうと思ったのよー」

オピニオン…意見か。

この場合は正しい使い方なのか？

いや、どうでも良いことなのだが。

「衣装とிட்டたって、俺にその手のセンスはあんまり無いよ」

「いや、仮にも布屋がそれじゃいかんでしょ」

「頼まれて作るのと、頼まれたものを用意するのが仕事なんだ」

「そうだけどさ」

「センスはともかくとしても、ハルさんの意見を聞くくらいは良いでしょ？」

「まあそれはもちろん。俺の意見でよければ、いくらでも出すよ」

「オー！ベリーグッド！」

マリーちゃんがそう言う。

すると、すぐに電話でどこかと連絡を取り始めた。

「…うん、そうそう。その、貧相な店よ。そこに持ってきて」

「貧相な店ってうちのこと？」

数分して。

うちに大量の段ボールが、黒服の人たちに運び込まれた。

何かは分からない。

さっきの電話からしても、呼んだのはマリーちゃんて確定だろうが。

「これは？」

「衣装よ！」

「衣装？」

「イエス！」

「理由を聞いて良いかい」

「同感ね」

「そうね」

「オーケー」

言つて、段ボールの一つから衣装を取り出すマリーちゃん。

それを、自分の前に当てながら話す。

「ハル、これ、私に似合うと思う？」

「ふむ…似合うとは思うが、どちらか言えば善子ちゃんの方が似合う気がするよ」

「えっ。そ、そう…／／／」

「これが、衣装をここに持つてきた理由よ」

「…つまり、試着とかするから、それを見て判定しろと？」

「オフコース！」

「なるほど」

俺が一からアイディアを出すのではなくて、既存の服から大体のイメージを作るわけだ。

確かに、それならこちらとしてもやりやすい。

「服は、俺が選ぶのかい？」

「ノーノー。ハルは、私たちがコーデイネートしたものを評価してくれればいいの」

「なんというか、上から目線になってしまつて恐縮なんだが」

「いいのいいの。というか、梨子もよっちゃちゃんも、ハルに見てもらいたって思つてるでしょうし」

「ヨハネ！それに思つてない／＼／＼」

「わ、私は、その：／／／」

「まあ、あくまで凡人の意見としてでも聞いてくれ」

「んー…実際はとてつもなく大きい一票なんだけどねえ」

マリーちゃんが何を言っているかはよく分からないが、まあ彼女らの色々な衣装を見せてもらえるなら、かなりありがたいことだ。

3人とも美少女なわけだし。

「じゃあ2人とも、早速着替えましょう！奥の部屋、借りるわよー」

「あいよ」

3人が着替えに行っている間に、店の看板を『本日終了』に替えておく。
さて。

どんな姿が拝めるのか。

※

「まずはこれ！梨子の制服スタイルー！」

「シンプルだけど、やっぱり破壊力があるね」

「す、スカート短すぎない？」

「普段もみんな短いじゃない」

「みんなが短すぎるの！」

スカートの裾を抑えて言う梨子ちゃん。

いや、君も大概短いとは思うけどね。

梨子ちゃんの今の格好は、いわゆる改造制服というやつだ。

基礎はブレザーの制服なんだろうが、ブレスレットにリボンの柄、頭の被り物と、細

かくオシヤレに工夫されている。

もともと制服好きで俺としては、これだけで十分可愛い。

「さあハル！感想を！」

「言いたいことは山ほどあるが、とりあえずは100点だよ」

「まとめすぎでしょ！この後やりづらいじゃない！」

「いや、そう言われてもね」

善子ちゃんに怒られた。

「さあ次はよつちゃんだよー！」

「ヨハネ！」

「これは…和服がモデルかな？」

「そ、そうよ！べ、別に似合わないならそう言ってもいいんだから」

「いやまさか。普段とのギャップも相まってとても綺麗に見えるよ」

「そ、そう…／＼／＼」

今の善子ちゃんは、紺色の和服に身を包んでいる。

足に履いているのはブーツ。

以前お祭りの時にも和服テイストの衣装は来ていたが、あれに比べて色彩を大分暗め
にしている。

代わりに、所々に散らされている白い花の模様が綺麗に浮かび、元々黒髪美人の善子
ちゃんの綺麗さとマッチしている。

梨子ちゃんの衣装が鉄板の可愛さなら、こちらは善子ちゃんに合わせた綺麗さだ。

素晴らしい。

「さあハル！感想を！」

「言いたいことは山ほどあるが、とりあえずは100点だよ」

「変わってないじゃない！」

「むっ…善子ちゃんと同点…」

「あんたはボケないで！ツツコミ追いつかないから！」

また善子ちゃんに怒られた。

「次はワターシの番です！」

「ほう…これはまた」

「うわ…綺麗…」

「黙ってればお嬢様よね、ほんとに」

マリーちゃんが来ているのはドレスである。

華美な装飾はないドレス。

スカートもひざ下程度の長さで、短過ぎず長過ぎずといった状態。

その姿は、彼女が真性のお嬢様であることをありありと体现する。

加えて。

「ふふ…ハル、どうかしら」

「そうやって落ち着いて言葉を出していると、本当にお嬢様のようなだよ」

「褒めているの？」

「ああ、とても綺麗だ」

「そう…ふふ。ありがとう」

日頃どれだけあれでも、やはり元は育ちのいい女の子。

立ち振る舞いは、ダイヤちゃんと肩を並べるほど綺麗だ。

「点数、つけてもらえる？」

「そうだね…言いたいことは山ほどあるが、とりあえずは100点だよ」

「台無しよバカ」

「ま、鞠莉さんにも追いつかれてしまった…」

「梨子あんた、もしかしてハルのことになると周りが見えなくなるの？」
やっぱり善子ちゃんに怒られた。

結局、いろんな服を見せてもらったが、一つに定まることはなかった。

「結局、メンバー衣装は決まらずね…」

「まあこういう日もあるさ」

「あんたがテキトーに点数つけるからでしょ！」

「失礼な。どれも厳正な選考の末の結果だよ」

「全部100点になるような選考を、厳正とは言わないのよ！」

「…うう、結局1番にはなれなかった…」

「やっぱりみんな何着ても可愛いのねー」

「少しは深刻に考えろアホどもおおお！」

善子ちゃんが叫んでいた。

ちなみに。

後日、A q o u r sのみんなとも相談して衣装を決めたそうだ。

その服をわざわざ着て来てくれた。

とてもよく似合っていたし、Guilty Kissの名前にぴったりの衣装だった。

さすが、女の子たちだ。

すごくいいセンスをしている。

梨子ちゃんの格好が、なんというかとてもイケメンスタイルだった。

あれは、俺よりも女の子にもてそうだなあ。

そんなくだらないことを思ったのだった。

※

「あれ？善子ちゃんなんだかお疲れずら？」

「ヨハネよ…最近、私の周りがボケばかりになってる気がするの」

「ボケ？」

「もともとは善子ちゃんがボケる側だったはずら」

「鞠莉はもともとボケ体質だったけど…梨子も最近、結構ボケてくるのよ」

「うゆ…えつと、よくわからないけど、お疲れ様、善子ちゃん」

「…あんたのお姉ちゃんも、時々ものすごい勢いでボケ倒すわよね」
「？」

「でも、ツツコミしてる時の善子ちゃん、とっても輝いてるすら」

「そ、そうだね。活き活きしてる感じがするよ」

「違うのお！私は、ボケでもツツコミでもないのー！」

「私は、墮天使ヨハネなのおおおおお!!」

CYaRon!の少女と布屋さん

「こんにちはー!」

「ハルくん! ヨーソロー!」

「こ、こんにちは、ハルさん」

「いらつしやい。来店はもう少し静かに頼むよ」

「まあまあ、普段閑散としてるんだから、来客くらい賑やかでもいいでしょー?」

「おや千歌ちゃん、いつの間にそんな洒落た言い回しを覚えたんだい」

「えへへー。私も日々成長しているのです!」

「人の皮肉も分かるようになってくれ」

それを見て苦笑いする曜ちゃんとルビイちゃん。

「このメンツは…確かCYaRon!のメンバーだったはずだ。」

「今日はユニットごとに練習でもしたのかい?」

「あれ? よくわかったね」

「それでもないと、このメンバーだけっていうのは割と珍しいだろう」

「んー…言われてみればそうかも」

千歌ちゃん和曜ちゃんがいるなら、だいたい梨子ちゃんもいるし、ルビィちゃんがいるならだいたい花丸ちゃんもいる。

「先日は Guilty Kiss のメンバーがやって来たけど、今回は君達なんだね」
「そうだよー」

「それで、何かご用かい？」

「ああ、そうそう。ちよつとハルくんにお問い合わせがあつてねー」

「お願い？」

「うん。で、その前にちよつと聞きたいんだけど…」

「ふむ」

「ハルくん、水着好き？」

「もちろん」

「見に行きたくない？」

「行けるなら行きたいね」

「あのね、今度親交を深めるために、この3人でプールに行こうって話になったの」

「ほう」

「ただねー」

「その…ちよつと遠くて」

「なるほど」

つまりは、足になれと。

プールか。

このまえプール掃除は手伝ったが、遊びに行くというのはかなり久しいな。海には行くものの、これも遊びで行くことはあまりないし。

「…そうだね、月曜なら構わないよ」

「本当!？」

「まあたまにはいいだろう」

「「やったー!」」

行き先のプールは、そこそこ大きなところ。

ウォータースライダーに流れるプールのような定番のものまで、いろいろ揃っている。

時は夏休み。

まだまだ人は多いだろう。

つまり。

「水着の女の子を、心いくまで拝見させてもらおう」

「とう!」

「ぐえ」

曜ちゃんに脇腹を殴られた。

※

そんな訳で、CYaRon!一行と俺でプールにやって来た。

着替えをさっさと終わらせ、更衣室外で彼女らが出てくるのを待つ。

その間に、プールで遊ぶ人々を見る。

月曜とはいえ、夏休みだからだろうか。

家族連れも珍しくない。

だが、それ以上に。

「…素晴らしい」

目を開けているだけで視界に入る、女の子の水着姿。

そこにその存在があるだけで、人(男)を幸せにする。

「人類の作った偉大な価値観の一つだろう」

「ハルくん、なにブツブツ言ってるの?」

「どうせ水着の女の子見て、訳わからないこと考えてたんでしょ?」

「訳わからないこと？」

気づいたら、3人が着替えを終えて横まで来ていた。

「おかえり3人とも。3人とも、合宿の時のとはまた別の水着なんだね」

「わかるの？」

「そりゃあね」

「よく見てるね」

「君たちのことなんだ。当たり前だろう」

「…ずるい」

「なんのことだい」

千歌ちゃんがなぜかムスツとしている。

怒っている訳ではなさそうだが…。

「ねえねえハルくん！水着どう？」

「似合ってるよ。とても可愛い」

「そっかー。えへへ」

「ルビイちゃんも千歌ちゃんも、よく似合ってるよ」

「そ、そっか…えへへ」

「うゆ…／／」

実際、彼女たちは可愛い。

ここには水着の女の子は数多くいるが、その中でもトップクラスだろう。もちろん、鼻真目があることは否定できないが。

「ねえハルくん！」

「なんだい？」

上機嫌に、曜ちゃんが話しかけてくる。

「このメガネ、ちよつとかけてくれる？」

「ん？突然どうしたんだい？」

「マリーちゃんから借りたの。水泳の前にかけるといいんだって」

「意味が全くわからないんだが」

「いいからいいから、一回かけてみてよ」

「…まあいいけどさ」

マリーちゃんからというのが若干気になるが、とりあえずはメガネを受け取る。

なんてことはない、普通のメガネだ。

「それでね、ちよつと質問があるんだけど」

「質問？」

「そうそう。私たちのこと、可愛いって思ってるんだよね？」

「もちろん」

「他の子達より？」

「少なくとも今この場所では、一番だと思っよ」

「そっかそっかー。じゃあっ」

「じゃあ？」

「他の女の子見てたら、罰ゲームね」

「……はい？」

「だから、他の女の子に見とれたら罰ゲーム」

「おぉー。それいい！ 曜ちゃん、それいいよ！」

「いや、ちよつと待ってくれ、どういことだい」

「そういうことだよ！ ハルクくんが他の女の子に見とれるたびに、罰ゲームを受けてもらいます」

「言っていることがよくわからないが…それをどうやって判断するつもりだい」

まさか俺を監視するわけでもあるまい。

「ふふふ…それでそのメガネですよ」

物理的にだ。

「ぬぐおおおおつ」

い、痛い痛い！

ま、まさかこれは…！

「あつはつは！無理やり外そうとすると、そうやって電気が流れるから気をつけてねー」

「さ、先に言ってくれ」

「ちなみに、私たち以外の女の子を2秒以上見た場合も同じです」

「…呪いの装備だ…」

試しに、少し向こうにいた女の子を眺める。

1…

2…

『バリバリバリバリ！』

「ぐおおおおお！」

「言ったそばから何してるのさ」

「ハルくん、痛そうだねー」

「だ、大丈夫ですか…？」

ルビィちゃん以外はあまり心配してくれてない。

というかだ。

「こんな電源を持ったまま、プールに入って大丈夫なのかい？」

「……………あ」

「おい」

俺はその日、プールに入れないことが確定した。

「はあ……まあいいさ。どこかで待っているから、遊んでくるといい」

「えーと……ごめんね。後でなんか奢るから」

「わ、私も一緒に待機しましょうか？」

「いや、君らの親交を深めるのが目的なんだからね。楽しんできてくれ」

まあ元々、俺は監督役をやるつもりだったし問題は無い。

問題は、そこではないのだ。

※

「視線を……どこにやればいいんだ」

彼女らが遊びに行つて数分。

すでに俺は、視線のやり場に困っていた。

水着とは、ロマンなのだ。

そりゃあ、下心がないかと言われれば、それは嘘になる。

肌の露出に対し、間違いなく色欲は出るし、それを見て興奮するのも当たり前だ。しかしながら。

それらを見ることだけが、プールの楽しみではない。

それらが近くにあり、見えるというその状況自体が、プールというものの楽しみの一つなのだ。

え？

純粹に水遊びを楽しむ？

それは無理。

疲れるもん。

そして俺は今、その楽しみとロマンを奪われているというわけだ。

「はあ……」

自然とため息がこぼれる。

俺はこの時間、一体何を見てればいいのか。

若くて。

普段とは違う環境でテンションが上がっていて。

少々警戒の薄れた。

そんな、女の子たちを見れると思っていたのだが…。

…あれ？

よく考えたらそれって…

※

「ただいまー」

「も、戻りました」

「おかえり、3人とも」

「荷物番、ありがとね」

「これ、お礼のジュースだよ」

「ありがとう」

くれたのは炭酸のジュースだ。

見た目的にメロンソーダかな。

「ハルくん、結局電気ショックは何回くらい受けたの？」

曜ちゃんが笑いながら聞いてくる。

ふっふっふ…俺が何度も同じ攻撃をくらうと思ったのかい。

「君の期待にはそぐわないだろうが、1回も受けてないんだよ、これが」

「「ええ!?!」」

「…なんで3人とも驚いているんだい」

大変に不本意だ。

「その、電気ショックの回数で賭けをしてたんだよねー」

「賭けって…あまり褒められたことじゃないね」

「賭けって言っても、その、負けた人は、『好きな人のいいところを発表する』っていう罰ゲームを受けるっていうルールだったんですけどね」

「その罰ゲーム、つい最近聞いたんだが」

「お、お姉ちゃんが教えてくれました」

「…その罰ゲームを受けたのは、そのお姉ちゃんだったわけだが」

よく話す気になったものだ。

「それでね、ハルくんの電気ショックを受けた回数を外した人が罰ゲームってルールだったの」

「なるほどね。それで、当てた人は？」

「いやー、残念ながら、0回に賭けた人はいなかったねえ」

「少し失礼じゃないかい」

「ちなみに賭けたのは…」

「わ、私が2回です」

「これがルビィちゃん。」

「私は6回に賭けたよー」

「これが千歌ちゃん。」

「私は10回であります!」

「そして最後は曜ちゃんだ。」

「千歌ちゃんと曜ちゃんは、俺をなんだと思っているのか。」

「じゃあ残念だが、3人とも罰ゲームだね」

「そうだねー」

「うゆ…は、恥ずかしいです／＼」

「1人3つっていうルールだったよね」

「3つというのもダイヤちゃんたちと同じなのか。」

「そういえば。」

「3人とも、お互いの好きな人を知っているのかい?」

「いや、知ってるも何も…」

「むしろ知らないのは本人だけというか…」

「気づいてもらえないだけというか…」

「なんだか複雑そうな表情をする3人。」

「どうしたのか。」

「しかし…」

「君たちにそこまで思ってもらえるとは、好かれている人は幸せ者だね」

「うるさい朴念仁」

「…なんで怒られたんだ？」

ルビィちゃんが横で苦笑いしている。

この状況を飲み込んでいるらしい。

罰ゲームの実行は帰り道ということになった。

午後も遊びつくし、帰るのは日が沈みかけの頃だった。

※

帰り道。

車を運転しつつ、彼女らと会話をする。

「ねえねえハルくん」

「どうしたんだい、曜ちゃん」

「そういうばなんで、電気ショックを回避できたの？あの状態で、よく平常心を保てたね」

「なんでって…まるで、女の子を見てないと俺が死ぬみたいじゃないか」

「だいたい合ってるでしょ？」

「……いや、そんなことないよ」

「ハルくんは嘘つけないでしょ」

やれやれといった感じの曜ちゃん。

「まあ、そうだね。実は女の子自体は見てたんだよ」

「え？どういふこと？」

「じゃあ電気ショック受けてたの？」

「いや、それは違う」

「じゃ、じゃあなんで…」

「簡単な話だろう」

若い。

普段とは違う環境でテンションが上がっている。

少々警戒の薄れている。

そんな可愛い女の子。

よくよく考えれば、探す必要など微塵もない。

「君たちが、あの場所で一番可愛かった。だったら、視線なんて別にあちこち動かす必要はなかったわけだ」

「…ええ？」

「ちよ、そ、それって…」

「は、ハルさん…ずっと…!」

「ああ、君たちだけ見続けていた」

…あれ？

このセリフ、結構まざくね？

これではまるで…

「は、は、ハルくんの…へんたい!／＼／＼」

「ぐえー!ちよ、運転中、運転中だから!確かに否定はできないと思ったけど!2人も、助けてくれ!」

「は、ハルくんが、ず、ずっと…っ／＼／」

「あわわわわわ／＼／」

「ちよつと?」

2人とも心ここにあらずといった感じだ。

俺は千歌ちゃんに首を絞められ続けている。

いくら周りに他の車がないとはいえ、危ないことに変わりはない。

「わ、悪かったから!ま、まさかそんなに怒るとはっ」

「そりゃ怒るよ!」

なんとか手を離してくれた千歌ちゃん。

「いや、その…確かに、悪いことをしたね。ジロジロ見続けたのは確かに不躰だったよ」

「…反省してるの?」

「ああ、ごめんよ」

「…別に、見るなどは言っていないけど…あんまり見られたら恥ずかしいじゃん…」

「そうだね。悪いことをしたよ。次は気をつける」

「…どうやって?どう気をつけるの?」

千歌ちゃんがジト目で聞いてくる。

これはいけない。

なんとか、反省の意を伝えなくては。

「そうだね…プールでは君たち以外を見ることにするよ」

「それはダメ!!」

「…どうしろと?」

3人の様子は良くは見えないが、なんかもじもじしている空気が漂っている。

「さ、先に言ってくれれば、私はずっと見られても大丈夫だから。と、というか、ず、ずつと見ててくれても良いんだよ?／／／」

「わ、私もだよ、ハルくん!み、見たいって言うならその…い、いつでも…／／／」
「る、ルビイも大丈夫です!が、がんばルビイ!／／／」

全然今の状況が読めない。

彼女たちは俺にどうして欲しいんだ?

考える。

プール。

視線。

先に言つてあれば、ずっと見ていても良い。

他の人を見てはダメ。

ここから導き出される結論。

それは…

「ナンパ防止？」

「は？」

「え？」

「あれ？違うのかい？」

ナンパされないように見張るくらいなら許可してやるよという事ではないのか？

「…はあああゝ」

ものスゴイ大きなため息をつかれた。

あれ？

「ハルくん…」

「ほんと…」

「さすがのルビィも、ふんばルビィできなさそうです…」

ミラーすら見ていないのに、彼女らが肩を落としているのが分かる。

おかしいな。

その後。

3人の罰ゲーム。

好きな人の良いところ3つ発表だったはずが。

なぜか、空気が読めないとか鈍感だとか、マイナスなところばかり挙げていた。その人の欠点まで好きという事なのだろうか。

そうやって聞いたら、見た事もなくらい冷たい目をされた。

一体、俺が何を間違えたんだ？

ツツジの花達と布屋さん

『今日の夜、AZALEAのメンバーでハルのところ行っても良い?』

果南ちゃんからそんな連絡が来たのは、営業終了の直後だった。

もちろん構わないという旨の返信をして、何時頃やつてくるのかを聞く。

だいたい8時くらい。

そういう返信だった。

AZALEAというのは、Aqoursの中のユニットの一つである。

ダイヤちゃん、果南ちゃん、花丸ちゃんの3人で構成されるユニットだ。

基本的にはぶっ飛んだ事をやらないメンツなので、夜に来るといふ事自体が珍しく感じる。

「それだけ、大事な用事って事なのかな」

だとすれば、しっかり話を聞かなくては。

大人としての仕事を果たさないと。

・※

「恋話を聞かせて欲しいんですの」

うちに来ていきなりこの言葉である。

本当に脈略なくこの話になった。

「…誰か、説明を頼むよ」

「ダイヤ、ちゃんと説明しないとハルが困ってるよ」

「あら？メールで説明してないのですの？」

「どう説明すればいいのか分からなかったし」

「確かに、説明するのは難しそうすら」

「まあ、話は聞こうじゃないか」

というか、とりあえず聞かないと、状況が読めない。

「そうですわね…ユニットを3つ作ったのは聞いてますわね？」

「ああ、どちらもうちに來ているからね。AZALEA以外だと、Guilty KissとCYARON!だったかな」

「その通りですわ」

「一応、それぞれにテーマというか、特徴みたいなのがあるんだよ」

「特徴？」

「そうずら。Guilty Kissが小悪魔、CYARON!が元気って感じずら」
「ああ、なるほど」

確かにそんな雰囲気は分かる。

しかし。

「それが今回の件にどんな関係が？」

「私たちのテーマ、なんだと思います？」

「君たちの…かい？」

ずいぶん突然だ。

うーん…

そうだな…

花丸ちゃん。

ダイヤちゃん。

果南ちゃん。

この3人のユニット…

「清楚、とかかな」

「あ、それいいですわね。いただきますわ」

「おー、さすがハルさんずら」

「清楚……かー。そう思ってくれてたんだねー」

……あれ？

てつきりそれは決まっついて、そこから話を繋げてくると思っっていたのだが。

「テーマありきでもってきたわけじゃなかったのかい？」

「ええ、全く」

ちよつと待つて。

「君たちは一体何をするために来たんだい？」

「ハルさんの恋話を聞くためですわ」

「今の会話……君たちのテーマの話ははなんだったんだい？」

「え？……なんと聞くだけですか！」

「よし、時間を返してくれ」

なんだったんだ、この時間は。

「ダイヤ……話が進まない」

「果南さんが説明したほうがいいんじゃないずら？」

「そうしてくれ」

ダイヤちゃんが不満そうにしていたが、果南ちゃんから説明を聞く。

「ユニットのテーマで悩んだのは本当なんだ」

「うん」

「それで、ダイヤが恋愛で行こうって言い出してね」

「ふむ。理由が気になるね」

「μ s のスノハレみたいな歌をやりたいたからですわ！」

「発想が千歌ちゃんと同じだよ」

「で、恋愛の話を聞きに行こうって事になったの」

「…いや、テーマが恋愛になったからって、別に話を聞く必要はない気がするんだが…」

「あはは。まあそれは私も言ったんだけどねー」

「ダイヤさん、一度言うのと止まらないずら」

事情は分かった。

「残念ながら、私たちは恋愛経験が少ないですわ。ですので、たとえ人の話であろうと、恋愛というものを知ることが大事と考えましたの」

「それは結構なことだが、君たちのテーマは今さっき変わったじゃないか」

「そうですわね。ハルさんの案で、『清楚』を採用しましたわ」

「…で、恋愛のお話を聞く意味は？」

「……………あれ？」

「この子は、時々バカなんじゃないかと思わされる。」

いや、成績は申し分ないし、基本は頭の回転も早いのだが。そんなわけで早速目的を失った彼女たち。

「…で、どうするんだい?」

「困りましたわね」

「ちなみに、清楚というテーマに関しては俺は一切助力できないと思うよ」

「変態ですしね」

「変態だもんねえ」

「変態さんずら」

「俺は今傷ついているよ」

それはともかくとして。

「あ、でも」

花丸ちゃんが何か思いついたようだ。

「ハルさんの恋話、丸は少し聞きたいずら」

「はい?」

「あ、それは確かに」

「え?」

「それもそうですわね」

「いやいや」

何を言ってるんだこの子たちは。

恋話？

「ないよ、そんなの」

「ないってことはないでしょ」

「そうですわ！よく考えたら、そこそこ長い付き合いなのに、ハルさんからそういう話を聞いたことがなかったですし」

「ハルさん大人だし、聞いてみたいすら」

「いや、だからね、俺は恋人はおろかキスすらしたことがないんだよ」

なんか言ってる少し悲しくなってきた。

というか、その辺の事情はダイヤちゃんや果南ちゃんは知ってるはずだ。

「え？ハルさん、恋人とかできたことないすら？」

「残念ながらね」

「い、意外すら…」

「そうかい？」

「ハルさん大人っぽいから、結構モテると思ってたすら」

「まったくそんなことはなくてね。いやはや、悲しいことだよ」

告白したこともなければ、されたことなどもっとない。

まさに無縁だったわけだ。

「果南さん、どう思います?」

「ハルの場合、ただ単純に気づいてなかったただけっていうのも考えられるよね」

「下手したら、告白されても気づかなかさそうなレベルですものね」

ダイヤちゃんと果南ちゃんがなにやらヒソヒソ話している。

内容は分からないが、失礼なことを言われている気がするぞ。

「まあそんなわけで、人様に話せるような恋話とやらは持ち合わせていないんだ。すまないね」

「へっそっかあ」

気のせいか、花丸ちゃんが少し微笑んでいる。

なんでだ?

「じゃ、じゃあハルさん、今は彼女とかいないはずらね!」

「そうだけど、なんで嬉しそうなの?」

ちよつと失礼じゃない?

「あら花丸さん、そんなことを心配してましたの?」

「ハルに彼女なんているわけないじゃん!」

「君たちは俺の恋話を聞きに来たんじゃないのかい」

2人で笑っている。

これはちよつとどころじゃなく失礼だよね。

「別に彼女がいなくなつて、片想いとかの恋話くらいはあると思つてたのですわ」

「まあなかつたみたいだけどねー」

「悪いけどね」

「んー。どうする、ダイヤ」

「そうですわねえ」

考える3年2人。

そもそも、恋話ならまだ君らの方があつたらうに。

「あ、じゃあ好みのタイプとか…」

「あ、それはいいですわね」

「なるほどー。いいんじゃない？」

「別に話すのはいいが、どう考えても恋話じゃないよ、それ」

「これから恋に繋がるかもしれないじゃん」

「そうですわ！」

「そうずら！」

「…ものは言いようだね」

というか、好みのタイプと恋愛は一致しないことも多いと聞いたが。

「…まあいいか。好みのタイプ…女子高生？…あ、ちよつと待つて果南ちゃん、笑顔のまま拳を構えないで」

「冗談はいいから」

「わ、分かったから、拳はやめて」

笑顔なのがとても怖い。

「えつと…そうだね、とりあえずは年齢はある程度近い方がいいかな」

「ほう」

「ど、どれくらいまでなら良いずら!？」

「どれくらい…5つくらいかなあ」

「ハル、今年で21歳だっけ？」

「そうだね」

「つまり、ストライクゾーンは16歳から26歳と」

「こ、今年で丸も16歳!せ、セーフずら!」

「ていうか、今のハルが16歳の女の子と付き合うつて…」

「犯罪臭がしますわね」

「ま、丸は大丈夫ずら！」

「なんの話をしているんだい、君たちは」

「他にはありませんの？」

「他と言われてもね」

「あ、じゃあ、彼女にしたい性格とか」

「性格？」

「そうですね。大和撫子とか、元気満点の体育少女とか、文学少女とか」

「なるほど…。そうだね」

今ダイヤちゃんが挙げてくれたものはどれも非常に魅力的だ。

しかし。

正直な話そこまでのこだわりなどない。

俺は…

「俺としては、自分を好きにさえなってくれればそれでいいよ。というか、それが一番大事だ」

性格とかはまあ、好きになってしまえばそれが好きな性格となるだろう。

「あら。ずいぶんまともな答えですわね」

「まあたまにはね」

「自分を好きになつてくれる人かー」

「す、素敵ずら〜」

「もつとも、そんな人がいるかという話だけどね」

「案外、身近にいるのではなくて？」

「そんなことを言うダイヤちゃん。」

「いやいや。」

「いたら気づいてるだろう」

「「それはない」」

「そんなまさか」

「ハルさんには」

「絶対に」

「気づけないすら」

「∴そうかい」

「すごい勢いで言い切られた。」

彼女らによれば、俺は自分を好きになつてくれた人には気づけないらしい。

「あの、改善する方法とかないかな」

「そんなの、私が聞きたいですわ」

「まったくだねえ」

呆れているようだ。

「…それで、聞きたいのは以上かい？」

「うーん…そうだねー…」

「ま、丸はもう一個だけ聞きたいことがあるぞら」

「どうぞ」

最後は花丸ちゃんらしい。

なんだろうか。

「は、ハルさんは、そもそも恋人がほしいずら？」

「!!」

「…ふむ」

なるほど。

考えたことがなかったな。

よくよく考えたら、自分に恋人がいるという状況を想像したことがなかった。

そう考えると、好みとかタイプとか以前の問題だったな。

「そうだね…。いるかいらないかと言われると困るが…まあ、いらなとは言えないね」

俺の言葉に、彼女たちは何も言わない。

次のセリフを待っているようだ。

「ただ…俺は今の生活をとても堪能していてね。恋人ができたらかこの生活が崩れるというなら…正直考えものかな…と、思うよ」

「ハルさん…」

「ふふふ」

「あはは、そっかそっかー」

3人の表情から察する分には、悪い印象ではなさそうだ。

「まだ、告白はできそうもありませんわね」

「そうだねえ」

「そうみたいすら」

「ん？何か言ったかい？」

「なんでもありませんわ」

とはいえ目下のところ。

「まあ、このままいくと一生今のままという可能性もあるがね」

そんなことを言った時だった。

「あ、じゃあその時は私がもらってあげるよ。ハル、ウチの仕事もだいたいこなせるで

しよっよ」

「果南ちゃんところ?…まあ、船以外ならね」

「そうでしょー」

「なあっ!?!」

果南ちゃんからの思わぬ提案だった。

かと思えば。

「ちよ、ちよつと果南さん、それは抜け駆けですわ!」

「えー。ちよつとくらいいいじゃん」

「か、果南さんずるいずら!じゃ、じゃあ丸だつて…は、ハルさん!」

「ん?」

「丸のところはお寺だから、け、けけ、結婚すれば、仮にハルさんのお店が潰れても仕事に困らないずらー!」

「なんか少し不穏な事を言われた気もするけど…まあありがたい提案として受け取っておくよ」

「は、花丸さんまで!」

「おー。やるね、花丸ちゃん」

「くつ…こ、こうなったら私も…!ハルさん!」

「さつきから何だい?」

「う、うちは、男子の兄弟がいませんの」

「そうだね」

「だ、だから…うちに嫁げば、ハルさんが事実上の当主になれますわよ！」

「…何を言ってるんだい、君は」

なんかとんでもないことを言い出した。

「ダイヤ…」

「ダイヤさん…」

2人もちよつと引いてる。

というか、万が一俺が黒澤家に婿入りしたとしても、黒澤姉妹を抑えて当主になるというのはありえないだろう。

ダイヤちゃんはそのほどまでに優秀なのだ。

「3人が何を言いたいかはよく分からないが、まあありがたく受け取っておくよ。わざわざ同情してくれてありがとう」

「この状況でなおそのセリフが出るのは、さすがとしか言えないよ」

「はあ…」

「あれ？なんでため息？」

まあ実際、彼女たちに婿入りしたらそれはそれで楽しそうではある。

そんなこと、万に一つも起こりえないような確率なんだろうが。
ただ。

それでももし、そんなことがあるなら…

「俺は、尻に敷かれながら生活することになりそうだ」

ため息をつく彼女たちを見て

そんなことを思ったのだった。

レーシングゲームと布屋さん

夕方と夜の間くらいの時間。

俺は善子ちゃんと電話をしていた。

「ゲーム？」

『そうよ。みんな…というか、鞠莉がやりたいつて』

「ふむ。いいんじゃないかな？」

『あ、じゃあ今日の夜行くから。よろしくね』

「え？うち？しかも今日？」

『だって、ハルのうちのテレビ、大きいでしょ？』

「まあ、何人かでゲームやるだけなら十分なサイズだね」

『部屋も、あそこはそれなりに広いでしょ？』

「5、6人程度が適任の人数だよ。さすがに、Aqours全員は無理がある」

『あ、行くのはGuilty Kissだけだから大丈夫よ』

「なるほど…まあ3人なら大丈夫かな」

『ハルも入れて4人よ。じゃ、みんなに連絡入れとくから』

「了解。来る前に一応連絡だけするようにしてくれ」

『ん。それじゃ』

そんなわけで、今夜 Guilty Kiss の面々が来るらしい。

ゲームをやるために来るみたいだが…。

俺は友達の家で少しやったことがあるという程度で、自分では所有したことがない。

なので、ド素人である。

梨子ちゃんとマリーちゃんも、そんなに経験があるとは思えないが…。

何のジャンルのゲームをやるんだろうか。

※

「ハル〜。ボンジュール〜」

「こんばんは、マリーちゃん」

「ハルさん、こんばんは」

「こんばんは。いらっしやい」

「お邪魔するわよ」

「善子ちゃんもいらっしやい」

午後7時半。

3人がやってきた。

「3人とも、車で来たのかな？」

「イエース。うちの車で来たわ」

「なるほど。帰りも迎えが来るのかい？」

「ノー。帰りはハルが送るからいいって言ってるわ」

「それ、普通は俺が言うセリフのはずなんだけど」

「泊まってもいいのよ？」

「なあっ!？」

「ええっ!？」

「場所がないよ」

「4人くつつけばいけるわ！」

「∴送るから、勘弁してくれ」

「というか、くつついてもほぼ無理だ。」

「布団、そんなにないしね。」

「まあそんなことはいいから。ほら、ゲームやるんでしょ？」

「そうだね」

善子ちゃんが手慣れた手つきで準備を始める。

特に手伝う必要もなさそうだ。

「ところで、何のゲームをやるつもりなんだい」

「レーシングゲームよ！」

「レーシング？」

「うん。今日、練習中に鞠莉さんがやりたいてって言ってね」

「へえ。なんか理由でもあったのかな？」

「イエス！前、つい最近ね、ダイヤと果南の3人で話してた時なんだけど…」

『将来乗りたい車？』

『何ですの突然』

『パピーが新しい車を買ったのよ。それでなんとなくな〜』

『なるほどね〜。私は…仕事にも使えるといいから、ある程度手軽なのがいいかな〜』

『そうですわねえ。私も、そこまで高価な車は興味ないですわね。というより、免許もない今の段階ではなんとも言えませんわね』

『そうだね〜。鞠莉は、何か乗りたいのあるの？』

『イエース！もちろんスポーツカーだよ！』

『『え〃え〃つ』』

『ん？何、その反応？』

『いえ…』

『鞠莉、運転荒そうだから…ちよつと怖いな…つて』

『ノー！2人ともそんな風に見てるの!?!』

『そうは言っても…』

『ねえ…』

『ぐぬぬぬ…』

「という会話があつたんデース」

「ああ、なるほど」

「…まさか、それで悔しいからゲームで見返そうとしてるの？」

「イエース！」

「どう考えてもおかしいでしょ！」

おお。

俺の代わりに突っ込んでくれた。

「そもそも、ゲームが上手いからって運転が上手い証拠にはならないんじゃ…」

「そうだね」

「でも、私たちまだ車の運転はできないから！実際に見せることはできないのでーす！」

「まあそりゃあね」

「だからゲームで見せるんでーす！」

「そこがおかしいのよ！」

「同感だよ」

善子ちゃんが声を張り上げる。

マリーちゃんはまったく聞く耳持たずだ。

「…まあ、目的はなんであれ、ゲームをやるのはいいんじゃないかい？」

「そ、そうね。私はゲームとか全然やらないから、あまり上手くないと思うけど」

梨子ちゃんが賛同してくれた。

善子ちゃんも、俺と梨子ちゃんを見て納得はしてくれたいみたいだ。

「はあ…。まあそうね」

「ザツツライト！私のドライビングテクニク、見せてあげるわ！」

「いや、見せるのはゲームのテクニクだから」

わざわざそんなところにもツツコミを入れる。

Guilty Kiss内でのツツコミポジションが板についてきたようだ。

「俺は…まあ無難にマ○オかな」

「私はよくわからないから、かわいいしピ○チね」

「私はク○パよ！」

「私はワル○ージ」

なんというか、みんなわりとイメージ通りのチョイスである。

キャラクターによってカートのパフォーマンスが異なるらしく、それぞれ特性が書かれている。

俺と梨子ちゃんはスタンダードな性能。

善子ちゃんは最高速度が高い代わりに他が低く、腕次第で使いこなせるかが変わるタイプ。

そして。

肝心のマリーちゃんは。

「鞠莉…なんでク○パ」

「みんなをはじき飛ばせば勝てるでしょ？」

「あんたやっぱり運動向いてないわ」

まあ、そういう性能のキャラである。

「コースは…ランダムでいいわよね。アイテムは普通にありでいきましょう」

「よくわからないからそのへんは任せたよ」

「えっと…アクセルがこのボタンで…ブレーキがここ…」

「ブレーキは基本的には使わないわ。スピード落としたかったらアクセルから手放せば良いから」

「へえ…それで止まるのかい。エンジンブレーキが強い車なんだね」

「いや、そのへんは私にはわからないから。あんまり現実と同じにしないで」

「ん？ドリフトのオートとマニュアル？よっちゃん、これは何？」

「ヨハネよ。とりあえずはオートで良いと思うわ」

そんなこんなで、みんなの設定が終了。

いよいよスタートである。

『ピッピッピ…ピーン！』

そんな合図とともにレースが始まる。

「うわ！みんな早い！」

「NPCでもロケットスタートやってくるからね。まあすぐ追いつくから気にしなくて良いわよ」

「そういう善子ちゃんも早いね」

「私もロケットスタートしたからね。やり方、後で教えてあげるわ。ちなみに、失敗すると…」

「ノー！煙あげたよー！」

「あんな感じで、スタートで出遅れるわ」

「なるほど」

ちらつと見ると、マリーちゃんの車が煙をあげて止まっていた。

そこからはある程度普通にレースが進み…

結果。

1位：善子ちゃん。

6位：梨子ちゃん。

間にNPCが入り…

11位：俺。

12位：マリーちゃん。

となった。

ちなみに12位はドベだ。

「あんたら下手すぎでしょ！」

「おかしいな…一度も落ちたりぶつかったりはしてないんだが…」

「いや、それでこの順位って…なにしてたのよ」

善子ちゃんが呆れている。

「コツは掴んだわ！次は1位取れるよー！」

マリーちゃんはずいぶん自信満々である。

ある意味すごい。

「善子ちゃんと言うまでもないけど…梨子ちゃん、結構ゲームうまいだね」

「そ、そうかしら」

「少なくともこの二人よりは断然いいですよ。一応半分より上だし」

「あ、ありがとう」

「これなら、将来は運転を善子ちゃんか梨子ちゃんに任せられるね」

「しょ、将来!?そ、それって…」

「ゲームと現実とは別だってハルも言ってたじゃない。あと梨子、乙女モードにならないで。その状態だとあなたボケまくるから」

「は、ハルさんとドライブデート…」

「話を聞けえ！」

「それじゃ、今度は私見てるだけにするから」

「うむ。アドバイス頼むよ」

「それでどうにかなるならね…」

少しの間、善子ちゃんが後ろからアドバイスをくれることになった。

まあ、一人だけぶつちぎってもやりごたえはないだろうしね。

せひご教授願おうじゃないか。

くハルの場合く

「…ねえ、何してるのあんた」

「何って…レースだよ」

「…そのスピードは何？」

「いくらゲームだからって、ぶつかつたら危ないだろう。安全第一だよ」

「どこの世界に！レーシングゲームで！壁も！他のカートも！ましてアイテムボックスすらぶつからずに走ろうとする馬鹿がいるかー！」

「うわあ、なんなんだい突然」

「トロトロ走り過ぎなのよ！そんなんで勝てるわけないでしょ！ほら、アクセルボタン

なんてこの際押しっぱなしで良いから！」

「ちよ、危ない危ない！ぶつかるとかじゃないか！」

「ちよっとくらいいいのよ！ほら！」

「うわー！」

「…二人とも、くつついてるわね」

「よつちゃん、羨ましいねー」

「そこ、よそ見しない！」

〈 梨子の場合 〉

「梨子は…まあそこまで変なプレイングはないわよね」

「そ、そうなの？」

「やつぱ、ピアノとかやってた分、手の反応が良かったりするのかしら」

「そんなことないと思うけど…」

「でも、なんで順位が微妙なのかしら」

「単純に実力の問題じゃないかしら」

「それでも、もうちよっとくらい上でもいい気が…あ、アイテムよ。それとって」

「う、うん！」

「よし、赤甲羅ね。さっさと撃っちゃいましょ」

「そ、それはダメ！」

「…は？」

「だって甲羅って、カートにぶつけるんでしょ？」

「そうよ。それで転倒してる間にこつちが抜くんだから。それがどうしたのよ」

「ハルさんに当たったら…かわいそうじゃない」

「…はあああああ？」

「ハルさんのカートに当たったら、もっと順位が落ちちゃうかもしれないでしょ？かわいそうじゃない」

「当たるわけじゃないでしょ！あんな後ろで、ドベ争いしてるやつに！」

「も、もしかしたらがあるでしょ？」

「ないわよ！…もしかしてあんた、そんな理由でアイテム使っていないんじゃないでしょ
うね」

「使っていないわ」

「ドヤ顔で何言ってるのよ！あんた、本当にハルが関わるとポンコツ化するわね！いいからほら……ていー！」

「あ、あー！ハルさん、避けてー！」

「当たらないわよ！」

く鞠莉の場合く

「そおおい！」

「ちよ、ちよつと！カーブ！カーブだから！少しくらい減速してよ！」

「私にブレーキなんていらぬわ！」

「アクセルから手離せって言ってるのよ！」

「嫌よ！」

「どこで意地になってんの!?!」

「あ、落ちる、落ちるー！」

「はあ…ほら、言わんこつちやない」

「ああ！ほら、早く釣り上げなさいよ！ハルに抜かれちゃったじゃない！」

「いや、無茶言わないであげてよ」

「さあ行くわよ！アクセルぜんかーい！」

「今までのやりとりなんだったのよ！」

「ノー！今度は潰されたわ！」

「ああ、ドツスンね」

「立ち上がりなさい、ク○パ！あなたなら立ち上がれるわ！」

「いや、あんたのせいで立ち上がれないのよ。さつきからもう壁という壁に当たってトラウマになってんのよ」

「亀なのにトラウマ？」

「やかましいわ」

※

「ふう…なんとかみんな、半分より上くらいにはなれるようになったね」

「本当になんとかね」

「よっちゃん、疲れてるね。大丈夫？」

「ほら、ウオーターあるよ」

「ヨハネよ。誰のせいで疲れてると…」

そうぼやきながら、水に口をつける善子ちゃん。

これだけ文句を言いながらも、ちゃんと付き合ってくれるあたり優しさが伺える。

「でも、これで私のドライビングテクニクを果南とダイヤにアピールできるわ！」

「無理よ」

「無理そうね」

「無理だろうね」

「アレー!？」

そりやあね。

壁に散々衝突するのは相変わらず。

それを利用して他のキャラクターに体当たりすることで順位をあげていくプレイスタイルを確立したマリーちゃん。

安全運転とは程遠い。

というかむしろ…。

「果南ちゃんとダイヤちゃんの意見が正しいと証明するだけなんじゃ…」
そう思わされるのだった。

アクションゲームと布屋さん

「ハルくんこんばんはー」

「ヨーソロー！」

「こ、こんばんは」

「いらっしやい3人とも」

挨拶とともに店にやってくるCYaRon!の3人。

時刻は夜。

店の営業はすでに終了した時間である。

彼女たちが今日うちにやって来た目的は、ゲームをやることである。

先日、Guilty Kissのメンバーとゲームをやったことが千歌ちゃん達にも

伝わったらしく、他のメンバーともやらないと不公平だと言われたのだった。

何がどう不公平なのかは不明だが、一緒にゲームをやるといふのは悪くない。

なので、とりあえずは受け入れることにしたのだ。

「セッティングはできてるよ。あとはソフトを入れればすぐにでもできる」

「おー！さっすがー」

「といっても、肝心のソフトはないよ。誰か持ってきたのかい？」

「うん！友達から借りてきたよ」

「えっと：マ○オブラザーズ：まあゲームの定番だね」

「そうなんですか？」

「まあ：多分日本でも知らない人はほぼいないんじゃないかなと」

もちろん、プレイしたことがない人はそれなりにいるのだろうか。

しかし今時のマ○オは4人プレイもできるのか。

「梨子ちゃんたちとは勝負だったみたいだけど、たまにはみんなで協力するのもいいでしょう。」

「それもそうだね」

「ふっふっふ。ハルくん、私に頼ってもいいんだよ？」

「おや。曜ちゃんはやったことがあるのかな？」

「友達の家でちよつとだけねー」

「なるほど。まあ頼りにさせてもらおうよ」

「ヨーソロー！」

敬礼で返してくれる曜ちゃん。

曜ちゃんのゲームの腕はどうなんだろうか。

正直想像ができないところである。

「わ、私は足を引つ張りそうです…」

「いや、ゲームなんだからそれはいいんだよ。気楽にやるといい」

「そ、そうですか？」

「足を引つ張るのは俺も同じだろうからね。仲良くミスをしようじゃないか」

「お、お揃いですか？」

「ん？まあそうだね」

「そ、そうですか…えへへ」

なんか嬉しそうだ。

どうしたんだろうか。

「ほらほら、そろそろやるよー」

「はい、コントローラ持ってねー」

そんなわけで、ゲームを開始するのだった。

※

ピ〇チ姫がお城から攫われ、それを助けに行くことで物語が始まる。

「この作品のいつもの流れだ。」

「マ○オって、王子様の割にはおじさんだよねー」

「いや、マ○オはもともと王子様じゃないよ。城の配管工のおじさんだったんだからね」

「え!?! そうなの!?!」

「うん。一応、そのあとは冒険家になったそうだが…俺も詳しくは知らないよ」

「へー…でも、なんで姫様助けに行くんだろう。それこそ王子様は?」

「それも知らないんだ。調べれば分かりそうだけどね」

そんな下らない話をしながら導入のムービーを見る。

やがてそれも終わり、いよいよプレイの時間だ。

「最初は平坦な道にクリボーだね」

「これはだいたい昔からそうだね」

「こ、これを避けられないんですか?」

「横には避けられないからジャンプしてねー」

「これ、案外気を抜くとクリボーにやられるんだよね」

「そうそう! 調子に乗ってダッシュとかしてね!」

「いやいや、4人もいてそんなのいないってー」

などと言っていたら。

「あ」

「あ」

「あ」

千歌ちゃん、曜ちゃん、俺の3人がジャンプのタイミングを誤りクリボーに激突。先ほどまでの会話は見事なフラグだったらしい。

「…あ、こ、これジャンプで潰せるんですね!」

そしてルビイちゃんだけきっちり生き残った。

「…ルビイちゃんいなかったらいきなり全滅だったね」

「もう!ハルくん何してるの!」

「いや、人のこと言えた義理じゃないだろう」

「あ、この箱叩いたら多分アイテム出てくるよ!」

「まあタイミング的にもそうっぽいね」

「アイテム…ですか?」

「攻略を便利してくれるアイテムだよ。直接見た方が早いかな」

「よーし!じゃあ箱叩くからね。ていつ!」

「あ」

「あ」

「あ」

千歌ちゃんが出現させたアイテム。

勢いよく飛び上がったそれらは…

箱の上のいたルビィちゃんが全部吸いとったのだった。

「…ルビィちゃん、上にいたんだ」

「…見ればわかるだろう。何て事をしてくれたんだい…」

「うはー。やっちゃいましたなあ」

「あ、あの、もしかしてまずい事しちゃいました…?」

ルビィちゃんが申し訳なさそうな表情をしている。

「いやいや。どう考えてもルビィちゃんは悪くないから」

「もう！ハルくん言つてよ！」

「いや、これは俺も悪くないよね」

現状、残りストックはルビィちゃんだけが5。

俺を含め他3人は3。

そう。

クリボー激突はあの後ももう一度あったのだ。

その時もルビィちゃんだけきつちり躲していたが。

…もしかして、ルビィちゃんが一番うまい？

「ストックが減っている3人がアイテムなしとは…」

「け、経験者の余裕だから」

「よ、ヨーソロー」

「…2人とも、余裕があるようには見えないんだが」

大丈夫だろうか。

「うわー！こんなとこに落下場所がー！」

「このクリボー、タイミングがー！」

「ここをゆつくり…あ、魚飛んできた」

「あー！私のヨッシー！」

「ヨーソロー！この大きいコイン、私がつちやいますよー！…あ、天井に挟まれた」

大丈夫じゃなかった。

ルビイちゃん以外の3人は、数秒に一回のペースでストックを消費し続けている状態である。

「な、なんとか最後までこれましたね」

「…いや、これあくまで1面ボスだからね…最後まで行くならこの数倍の長さがあるはずだよ」

「そ、そんなにですか!?!」

驚くルビイちゃん。

しかし、そのルビイちゃんはほぼストックを減らしていない。

危険地帯を無難に回避し、危ないタイミングでは焦らず一時停止をしてギミック確認をする。

ゆったりしながらも堅実に手を進めた結果、一番上手に進む事になったのだった。

対して俺たち3人。

猪突猛進のごとく進んでいく千歌ちゃんと曜ちゃんは、影から出てくるようなギミックにあっさりやられている。

また、常時ダッシュ状態のため、転落などのミスも頻発してるのだった。

俺も人のことを言えた義理ではなく、反応の鈍さが致命的に出ており、急に出てくる

敵にやられ続けている。

「…曜ちゃん、頼っていいとか言ってなかったっけ？」

「うん！頼っていいよー！」

「まだそのセリフが出てくることに、むしろ俺は感心を覚えているよ」

「ほら！ハルくんはもつとサクサク動かないと！」

「ねえ、君と俺のリセット回数が同じであることは見えているかい？」

なぜかこの2人は未だに自信満々である。

しかし、数字がありありと物語っている。

一番上手いのはルビィちゃんだ。

「さあ！いよいよ一面ボスだよ！」

「気合入れていくよ！」

「は、はい！」

画面上を動き回る敵。

倒し方は…いつも通り、頭を3回くらい踏みつけばいいんだろうか。

「こ、これ、どうやって倒すんですか？」

「頭踏むんだよ！」

「は、はい！」

「最初は私がいくよー！ヨーソローー！」

掛け声とともに曜ちゃんのキャラが敵に向かっていく。

そして、ヒップドロップのモーションに入り…敵の正面と衝突してストックを削られた。

「あれー？」

「おおよそ予測通りのオチだよ」

「次は私がいくよー！とおー！」

案の定外れるヒップドロップ。

そのまま敵とぶつかって削れるストック。

「なんで!？」

「理由は画面に映ってるね」

これまた予想を裏切らない。

「仕方ないね。ここは大人の俺が一肌脱ぐよ」

「おおー！」

「いけー！ハルくーん！」

「ああ、見ててくれよ」

これが大人のプレイングだよ。

千歌ちゃん曜ちゃんたちとは違い、ジャンプ地点からきっちりと考えてある。ギミックも覚えた。

このタイミングにここで飛ばせば、落下するときちようど敵が真下に入る。複雑な操作を必要としない。

最低限の動きで済む方法を探し出す。

これぞ大人のやり方。

「今だー！」

ジャンプボタンを押す。

飛び立とうとした俺のキャラクターは、最大の高さに到達する前に敵と衝突。無残にも散っていった。

「…あれ？」

「何してるのさー!!」

おかしいな。

タイミングは良かったはずなんだが。

結局。

一面ボスはルビイちゃんが倒した。

そこで時間がある程度経ってしまったので、その日はお開きとなったのだった。

※

「むー…絶対にリベンジするから！」

「私も！」

「うんまあ、好きなききに來るといいよ」

かくいう俺も、さすがにもう少し上手になりたいものだ。

今日苦戦してなんとか突破したエリアも、あくまで1面。

この後まだまだ続くのだ。

今のままでは確実に詰む。

「でもあれだねー。あんなにボロボロになりながらお姫様を助けに行くって、マ〇オつてよっぽどピ〇チ姫のことが好きなんだね」

千歌ちゃんがそんなことを言う。

ボロボロにしていたのは主に俺たち3人で、ルビィちゃんの場合はそこまでボロボロになっっていたかっただと思うが。

「大事な人…とかなのかな？」

「そうなんじゃないかな。命かけて助けに行くんだから、相当思い入れのある相手なんだろうね」

「うーん…」

千歌ちゃんが何かを考えている。

かと思えば、すぐに口を開いて。

「私たちが攫われたら、ハルくんは助けてくれる？」

急にそんな質問をされるのだった。

「当たり前だろう」

すぐに返す。

迷うことはない。

「おー。即答だね」

「そりゃあね。さすがに、マ○オほど華麗には行けないけどね」

「ハルくんの運動神経じゃあ、クリボーも避けられないだろうね」

笑いながら千歌ちゃんに言われる。

「でも、助けに来てくれるんですか？」

「逆に放置すると思うかい？」

「それは…なさそうですね」

「ハルくん、女子高生のことになると周り見えなくなるからねー」

曜ちゃんにはそんなことを言われるのだった。

いやいや。

「さすがにそこまで見境なくないよ。君たちだから行くんだ」

「そうなの？」

「俺はA q o u r sのメンバーが大好きだからね。君らに何かあったらじつとしていられないんだよ」

「そ、そっか…／／／」

「サラツと言うなあ…／／／」

「は、恥ずかしいです…／／／」

「？」

なんか変なことを言っただろうか。

「そういえばルビィちゃん、妙に敵を避けること中心になってたよね。倒せる敵も避けてたし」

「あ、それはその…あんまり、キャラクターに傷ついてほしくなくて…針とか炎とか、当

たつたら痛そうじゃないですか」

「……………」

なるほど。

ルビイちゃんには勝てないな。

そう思わされたのだった。

シミュレーションゲームと木屋さん

「さあ！今度は私たちのターンですわ！」

「いらつしやいダイヤちゃん。夜なのに元気だね」

「はろー、ハル」

「ハロー、果南ちゃん」

「ハルさんこんばんはすら」

「こんばんは。いらつしやい」

先日の Guilty Kiss、CYARON! の流れに則り、今日は AZALEA の面々がやってきた。

彼女らも例に漏れず、ゲームをやるためにやってきたのだった。

「他の子達から聞いているとは思うけど、うちにソフトはないよ。誰か持ってきたのかい？」

そう。

我が家はゲームをやらないので、ソフトなどないのだ。

今置いてあるハードも善子ちゃんがうちに置いてるだけだしね。

「もちろん、用意してきましたわ」

「今日借りてきたんだよー」

「そうかい。誰から借りたんだい」

「千歌ちゃんのお姉さんずら」

「……………え」

志満さんはあまりゲームをやらない。

おそらく、彼女らにソフトを渡したのは美渡さんだ。

なんか嫌な予感がする。

「…ソフト、見せてもらってもいいかな」

「ん？どうぞ？..」

「ありがとう」

ダイヤちゃんからソフトを手渡される。

パッケージに写っているのは、中心に大きく女の子。

その両サイドにも女の子。

さらにそれらの後ろに、幸薄そうな女の子。

「ギャルゲーだね、これ」

高校生の女の子たちに何渡してんだあの人。

「ぎやるげえ？なにずらか、それ」

花丸ちゃんが聞いてきた。

まあ、確かにこの子なら知らなくてもおかしくはないか。

「うーん…そうだね…まああれだよ、女の子たちを口説き落としていくゲームだよ」

「口説き落とす？」

「い、いかがわしいゲームですか？」

「いや、これは全年齢対象だから…まあキスとかその程度じゃないかな」

「ふーん。具体的に何を楽しむゲームなのさ」

「何を…そうだなあ。可愛くて理想が詰まった女の子と、ドキドキするような恋愛をし

たり、イチヤイチャライフを楽しむ…かなあ」

「ハルさんはあまりやったことないずら？」

「実はないんだ。だから、こうして直接見るのは初めてだよ」

「へえ…。あ、色んな女の子とラブラブになるんでしょ？主人公ってそんなにもてる

の？」

「作品にはよるだろうけど…魅力的な男性が多いのは確かなんじゃないかな」

知識は全くないので、完全に予想だが。

さすがに、人並み以上に不愉快な人物がモテるようなゲームではない…と思う。

「じゃあこのゲームは、男性がモテるために参考になったりするんですの？」
「いや、どうだろう。主人公補正もあるだろうしね」

「まあそうだよな」

むしろそれよりは…

「男性から見た理想の女性…みたいなのが見えるんじゃないかな」

「!!」

なんと言つても、男性がやりたいこと、なりたい関係などなど、様々な理想が詰め込まれているのだ。

そういう意味では、ある意味女性の方が参考にできる…

いや、そんなわけではないか。

「まあ、あくまでゲームだからね。そんな真に受けるようなことじゃない…」

「やりましょう、ハルさん」

「え」

「やろう、ハル」

「ん？」

「ハルさん、やるすら」

「おお？」

あれ、おかしいな。

なぜか3人の闘志に火がついてる。

いや、やる気があるのはいいが…

「あの、これ、一人用のゲームだよ？ こういうのもなんだが、わざわざ4人でやるものじゃない」

「構いませんわ」

「ハルがプレイしてよ」

「丸たちは後ろから見てるすら」

「君たち、うちにゲームをやりに来たんだよね？」

そう言ったが、華麗にスルーされた。

(男性から見て魅力的な女性が作品になっている…つまり)

(このゲームでハルが喜んでり楽しそうにしていることをすれば)

(ハルさんの気持ちを惹きつけられるかもしれないぞ！)

「…なんでプレイしない君たちの方が気合入ってるんだ」

後ろから闘志がものすごい伝わってくる。

怖い。

※

『名前を入力してね』

画面にそんなメッセージが浮かぶ。

そこから設定するのか。

「これ、本名でやるのが普通なんですか?」

「どうなんだろう。俺はちよつと恥ずかしいから、適当に名前をつけたいんだが…」

「どんな名前にするの?」

「うーん…なんか思いつかないかい?」

「いきなり名前って言われると…ちよつと難しいすら」

「まあそうだよね」

とはいえそこまで時間をかけることでもないの、何かテキストに…

「あ、じゃあ頭文字をくつつけましょう」

「頭文字?」

「この4人の頭文字ですわ」

ハル。

ダイヤちゃん。

果南ちゃん。

花丸ちゃん。

頭文字を打ち込んで…

『あなたの名前は、「ダ・ハハカ」だね!』

「どこの国の人すら!?!」

「苗字が『ダ』 1文字って…日本にはいないよね」

「世界にもいるのかわからないけどね」

なにはともあれ、名前は決まった。

いよいよ本題のゲームである。

画面上では、2年生まで普通に生きてきた主人公が、今年こそ何か楽しいことを探そうと意気込んでいる。

そしてそんな主人公は、幼なじみらしい女の子と一緒に登校するのだった。

「…俺の知ってる普通の生活とは違うみたいだ」

「これ、幼馴染の女の子いい子すぎない?」

「というよりは、明らかに主人公に好意を寄せていますわね」

「なのに主人公は全く気付いてないすら」

「これだけ露骨なら、普通は気付くだろう」

「……………」

「あれ？どうしたんだい3人とも」

「「はあく……………」」

なぜかため息をつかれた。

何か失言でもあったのだろうか。

「…気にせず、ゲームを続けてください」

「あ、ああ、そうさせてもらおうよ」

そんなわけでゲームを進めていく。

転入生がやってきた。

1学期早々の転入生とは。

ああでも、梨子ちゃんも春からの転校生だったな。

「転校生の席が主人公の後ろになりましたわね」

「どんな席の配置にすれば主人公の後ろだけ空いてる状態になるんだろうね」

「ま、まあそこは突っ込まないほうがいいぞら」

「ダイヤもハルもゲームなんだから、・あんまり堅苦しく見てちやだめだよ」
果南ちゃんに笑われながら言われてしまった。
それもそうか。

『はじめまして。なんか困ったことがあったらすぐに言ってくれ！』
『あ、ありがとう』

画面上では早速転入生と挨拶を交わす主人公。

「転入してきた生徒にすぐに声をかけるというのはなかなかいい心掛けですわ」
「そうだねー」

『あ、俺の名前は「ダ・ハハカ」っていうんだ。ハハカって呼んでくれ』
『いい名前だね、ハハカくん！よろしくね』

「どこが!？」

「てかこれ、仮に苗字で呼ぶ子がきたらダって呼ばれるんだよね」

「めちやくちや分かりにくいぞら！」

さらにゲームは進んでいく。

以降も様々なキャラクターたちと出会いながら交友を深めていく。

「…なんというか、出会う女の子がことごとくいい子たちだね」

「まあ、そりゃあね」

「しかも、めちやくちやかわいいすら」

「そうだね」

「…あまり、参考にはならなさそうですわね」

「どういふことだい？」

最後のダイヤちゃんの言葉だけはあまり意味がわからなかった。

とはいえ、可愛くていい子たちばかり出てくるといふのはその通りである。

「とうかさ、なんでこんなにいい子たちなのに誰一人恋人がいないの？」

「そこは突っ込んでいけないうんじやないかな」

彼氏持ちのヒロインって…

攻略する気にならないだろう。

ならないよね？

「しかしハルさん、そろそろ誰を攻略するか決めてもいいのでは？」

「あー…そうだねえ…」

「悩んでるの？」

「うーん…なんというかね…」

「好きな子がいないはずら？」

「まあ…そうなるかなあ」

いやまあ、自分では理由がわかっている。

なんでこのヒロインたちに惹かれないのか。

実のところ、ゲームをやる前からこうなる気はしていたのだ。

「珍しいですわね。ハルさん、女子高生が大好きなのに」

「ねー。女子高生だったら見境なく好きになるのに」

「しかも可愛い女の子ばかりずら」

「…さすがの俺でも、そこまで腐ったつもりはないんだが…」

しかしながら否定することも難しい。

今後は言動に気を使ったほうがいいのだろうか。

「…あのね、俺は別にこのヒロインたちに魅力を感じてないわけじゃないんだよ」

「そうなんですの？」

「じゃあどうしたのさ」

「まあ、なんとというかね…」

言いにくい。

とはいえ、誤魔化せそうにはない。

仕方ない。

白状するでしょう。

「どのヒロインも、君たち以上の魅力を感じなくてね。いまいち攻略する気にはなれないんだよ」

まあそういうことだ。

現実とゲームを比較されてもと言われてしまえば、反論の余地は一切ない。

しかしながら、そう感じてしまっているのでどうしようもないのだ。

そして、このセリフはさすがに恥ずかしい。

なので、何か言って茶化してもらいたかったのだが…

「そ、そうなんだ／＼／＼」

「そ、そうですのね／＼／＼」

「ず、ずら／＼／＼」

なぜか反応が返ってこなかった。

ますます恥ずかしさがこみ上げてくる。

な、何か言ってくれよ。

結局。

そのまま誰ともくつつかずに親友（男）と仲良くなるというエンディングを迎えた。

どうやら、俺はゲームでも恋人を作ることにはできないらしい。

後日。

「結局、ハルさんが女の子のどんな仕草に魅力を感じるかはわかりませんでしたわね」

「そうだねえ」

「でも、みんなでゲームするのも楽しかったずら」

「ふふ。そうですね…それに」

「それに？」

「ハルさんが、ゲームの女の子たち以上に私たちに魅力を感じていると分かっただけで

も、大いに収穫はありましたわ」

「あー、なるほど」

「それもそうぞらね」

そんな会話がされていたそうなの。

たまには昔の話と布屋さん

『いいかいハル。お前は、特に何か凄い才能はない』

「…え？ちよ、ばあちゃん？」

『死んだお前の父も母も、そりゃあ絵に描いたような普通人間だった』

「と、突然どうしたの？」

『最近お前が、ちよつと勉強に力を入れてしていると聞いたんじや。でも、才能的にそこまです実を結ばないだろうから、身の丈に合った努力にするようアドバイスをしようと思つてのう』

「小学生の孫に言うことじやないよね!？」

『お前に唯一与えられた才能は、隠し事ができないその性格じや』

「そ、それは才能なの？」

『もちろんじや。嘘に慣れるというのは、人としては寂しいことじや。だったら、いつそ嘘なんてつけない方が良い』

「ばあちゃん…」

『正直に生きるんじや、ハル。そうすれば、自ずとお前の周りには人が集まる』

「人……」

『お前に才能はなくとも、周りにいる人は、その才能でお前を助けてくれるじやろう』
「助けてくれる？」

『そうじゃ。人を助け、人に助けられなさい。そのために、お前は正直に生きなさい』

※

『チユンチユン』

朝の日差しが、カーテンの隙間から差し込んでくる。

時計を確認。

目覚ましの音になるより少しだけ早く、目が覚めたらしい。

懐かしい夢を見た。

祖母が亡くなる前にした会話の夢。

今にして思えば、小学生の子供に対してなんて話をしてるんだと思わされる内容だ。

とはいえ、今の状況を鑑みると、あながち間違ったことは言っていないのかもしれない。

祖母に言われたように生きた結果、今自分は笑って生きているのだから。

「こんにちはーハルくん」

「ハルさん、こんにちは」

昼下がりに。

千歌ちゃんと梨子ちゃんが挨拶とともに店にやってきた。

「いらつしやい。今日は二人かい？」

「曜ちゃんは部活なんだって」

「ああ、なるほど」

あの子は水泳部なのだ。

夏は部活真つ盛りの頃だろう。

「あれ？ハルくん、珍しいもの見てるね」

「これは…アルバム？」

「ああ、そうだよ。ちよつとそういう気分だったんだ」

机に広げられているアルバム。

広げられてもの以外にも、数冊のアルバムが机の上には置かれている状態だ。

「懐かしいねー」

「これ、私も見て良いの？」

「もちろんだよ。といつても、何も面白いことはないと思うがね」

「わー！この時のハルくんかわいいー！」

「ほ、本当っ」

「…いつのを見てるんだい」

見ると、ここちに来たばかりのときに祖母と撮った写真を見ていたようだ。

「これ…ハルさんのおばあちゃん？」

「そうだよー。優しいおばあさんだったんだよ」

「そうだったかな。結構厳しいおばあさんだった記憶があるんだけど」

先にも述べたような話以外にも、生き方を説かれたことは数知れず。

結構な頻度で怒られたものだった。

「…写真、おばあちゃんと写っているのは多いけど…ご両親は？」

「あ、えつとね…」

「俺が小さい時に事故で死んでしまったんだ。だから、写真もまともに残っていないん

だよ」

「あ、ご、ごめんなさい…」

「いや、いいんだ。気に病まないでくれ」

このまま気を使われると、逆にこちらが気にしてしまう。

「そうだね。ちよつとした過去話でも聞かないか？」

「過去って…ハルさんの？」

「もちろん強制はしないけどね」

「あ、私は聞きたーい！」

「千歌ちゃんは大体知ってるじゃないかい」

「なんとなく！」

「まあいいんだけどね」

「えつと…じゃあよければ私も」

「おっけー。先にお茶を入れてくるからちよつと待っていてくれ」

3人分のお茶をコップに入れ、話をする。

なんてことはない。

ただの一人の、普通の過去話。

「元々、俺はこつちには住んでいなくてね。両親が死んですぐに、こつちに住んでいた祖母に引き取られたんだ」

「そうだったの…」

「祖母の店…まあこの布屋だけど。それが、古くからこの街と繋がりが深かったこともあつてね、街の人にもいろいろ面倒を見てもらったよ」

「この街は、みんな優しいからね」

「そうだね。本当にそう思うよ。千歌ちゃんたちと会ったのは…俺が小学生くらいのことだったかな」

「そうだよー。懐かしいねー。その時の写真が…あ、ほらあつたよー」

「本当ね。ふふ、四人ともかわいいわ」

写真に写っている、俺、千歌ちゃん、曜ちゃん、果南ちゃんの4人。

川沿いを散歩している時に、ザリガニ釣りをしている彼女たちを見つけたのが出会いだった気がする。

「ハルくん、性格はこの時から変わってないよねー」

「え、小学校の時からこの性格なの?」

「今の発言は、どう受け取れば良いのかな?」

「あ、いや、悪い意味じゃないのよ。その、小学校の時から変た…大人っぽい性格だったのかなって」

今、明らかに口を滑らしたよね。

変態って言おうとしてたよね。

「…まあ、小学校に入るまでは大人に囲まれて生活していたからね。影響を受けながら育ったんだ。店の手伝いも少しだけしていたからね」

「なるほど」

ちなみに善子ちゃんと黒澤姉妹との出会いはこの接客関係である。

善子ちゃんとの出会いはその制作の手伝い。

黒澤家は、祖母の仕事について行った際に出会ったのだ。

「そのまま中学に上がって…高校へも無難に進学したよ。両親が他界しているとはいえ、そこまで不自由なく生活してたさ」

そう考えると、かなり恵まれているもんだと思う。

「ただ…そこでね、一つ問題があったんだ」

「問題？」

「…あー…私は聞いたことがある。梨子ちゃん、馬鹿馬鹿しいからあまり聞かなくても良いよ」

「何を言うんだい。俺にとっては重大な問題だったんだよ」

「何かしら。見当がつかないわね…」

高校への進学。

学力相応の高校へ進んだ俺は、そこでとんでもないことに気づいたのだ。

「…高校がね、男子校だったんだよ…」

「……………」

「だから言ったでしょ、馬鹿馬鹿しいって」

「…そうね」

そうねとはなんだ。

もうあの時の絶望感と言ったらなかった。

「…事前に調べることなんて、いくらでもできたでしょう」

梨子ちゃんにため息をつかれながら言われる。

まあその通りだが。

「完全に調査不足…というよりは、まさか男子校ではないだろうと思ってたんだよ」

「さすがにハルくんがバカだと思う」

「反論はできないね」

ちなみに。

高校生活は楽しかった。

男子校ならではのバカみたいなノリとか、妙な団結とか、楽しいことはいくつもあつ

たのだ。

決して、灰色ではない青春だった。

しかし。

しかし、だ。

「…結局、女の子とは無縁の生活だったんだよ…」

「そりゃそうだよねー」

「東京だと、男子校と女子校で交流があるところもあったけど…ハルさんのところはなかったのね」

「そうだね。学校単位でそういうのはなかったよ。…あ、でも一度だけ合コンに誘われたことがあったんだよ」

「え!？」

「何それ!?!聞いてないよ!ハルくん!」

「わざわざ言っていないからね。それに、別に何かあったわけでもないし」

「『本当に!?!』」

「…なんでそんな食い気味なんだい」

アドレスの交換すらなかったのだ。

ただまあ、女の子との久しぶりの会話は大変楽しかったことだけは覚えている。

「話を戻すけどね。高校生の時は、そのまま大学に進学するつもりでいたんだよ」

「そうだったの？」

「うん。ただ、2年の冬くらいに祖母が病気になってね。そのまま春に亡くなったんだ

よ」

「…そう」

倒れてからも、祖母は相変わらざるの振る舞いだった。

息を引き取るその直前まで冗談を言っていたし。

『私が今死ぬと、お前は自分の名前を書いた時に私を思い出すじやろう』

『どういふことさ』

『私が春に死ぬ。お前の名前は春。ほら、思い出すじやろ』

『笑えない冗談の上に遠回りすぎる。他に言うことがあるだろう』

結局、あの会話のせいで名前を書くたびに意識するようになってしまった。

精神的な呪いの装備状態である。

とはいえ、店主を失ったこの店をどうするかというのは、地域の人たちの間でも話し合われた。

地味ながらも、この街に深く根付き、人々の相談もよく受けていたここをあつさり潰しているものかと言う声が多かったのだ。

そこで、俺が後継として立候補したというわけである。

「大学はよかつたの？」

「もともと、そこまで進学に強い意志はなくてね。これも一つの道だろうくらいにしか思っていないかったよ」

「周りからは無理してないかって心配されてたけどねー」

「そりゃそうよね」

お前にはできないだろうというセリフは、ほとんど無かった。

純粹に、俺の将来を気にかけてくれる人が大勢いたのだ。

でも、そんな人たちだったからこそ、俺なりにこの街に何か恩返しをしたかった。

視野の狭い俺は、店を継ぐことで街の人の力になれると考えたのだ。

そんなわけで、高校を卒業してすぐにこの店主となったのである。

それが、果たして正しかったかはまだわからない。

今はまだ、とにかく仕事をこなす段階だ。

「ハルさん、大変だったのね」

「まあ楽ではなかったが：何度も言うように、周りの助けがすごくあったからね。絶望したことはなかったよ」

『正直に生きる。そうすれば人が集まって、お前を助けてくれる』

祖母のその言葉は、あながち間違いでは無かったのだろう。

そして。

アルバムに視線を落とす。

幼い自分と祖母が共に映る写真。

その横に並ぶ、もう一枚の写真。

Aqoursのみんなど、俺が映るその写真。

「今度は、俺が人の力にならないとね」

自然と、そんな言葉が出る。

「なんかハルくん、今日は妙にノスタルジックな感じだね」

「そうね。何かあったのかしら」

「そうだね…」

何か適当な理由でもつけようかと思っただけど。

それはやめた。

「なんとなく、そういう気分だったんだよ」

嘘は、どうせつけないのだ。

橙な少女と布屋さん

「やつほー、ハルくん」

「こんばんは、千歌ちゃん」

「この時間にここにきてるの、珍しいね」

「十千万旅館から発注をもらっていったんだ。正真正銘、お仕事だよ」

「やつぱり珍しいことじゃん！」

「俺が仕事をしているのはそんなに珍しいかい」

「うん！」

なんかボロクソに言われている気がするが、反論できないのが悔やまれる。

現在はうちの店の営業が終了している時間だ。

発注依頼のあったものは、この時間に届けてもらえればいいというありがたい言葉を送ったので、この時間を持ってきた次第である。

千歌ちゃんとそんな話をしていたら、志満さんがこちらへやってきた。

「ありがとね、ハルくん」

「いえいえ。こちらこそ、ご利用ありがとうございます」

「そういえばハルくん、晩御飯まだだよね？」

「ええ、そうですね」

「じゃあうちで食べてつてよ。千歌ちゃんも喜ぶだろうし」

「あ、いいんですか？助かりますよ」

「ハルくんも今日は一緒なの？やったー！」

そんなわけで、今日は高海家で晩御飯をいただくことになった。

いやはやありがたい話である。

「じゃあ、ご飯できるまでは千歌の部屋で待つてねー」

「あ、手伝いますよ？」

「いやいや。千歌ちゃんの相手してあげて。その方が喜ぶだろうから」

「し、志満姉！／＼／＼」

「まあ、志満さんがそう言うならそうさせてもらいます。すいませんね」

「気にしなさんな。お姉さんに任せなさいい」

どっかの漫画にでてきそうなセリフとともにキッチンの方へ行く志満さん。

あの人は要領もいいし、確かに俺がいると逆に邪魔になるだろう。

「さて…それじゃあ部屋に行こうか」

「そ、そうだねっ」

「ん？どうかしたのかい？」

「な、なんでもないよ！」

「それならいいんだけどね」

なんというか、若干ぎこちなさを感じる。

どうかしたんだろうか。

（よ、よくよく考えたらハルくんと部屋で二人きり：／／／これまで二人きりはあつたけど：今思うと、自分の部屋に二人きりって／／／）

「おや？千歌ちゃん、顔が赤いよ？大丈夫かい？」

「だ、大丈夫だからー！先に部屋片付けてくるー！」

「あ、ちよつと：行つてしまった」

すごい勢いで走つて行つた。

部屋に見られたらまずいものでもあつたのだろうか。

確かに、年頃の女の子の部屋に男が入るといふのはいささか気が引けるものがある。

うーん…

「とりあえず、部屋の前で待つことにしよう」

そう考え、千歌ちゃんの部屋に向かうのだった。

「は、入っていいよー」

「ん。じゃあお邪魔するよ」

「ど、どうぞ」

「なんで君が緊張しているんだい。部屋の主は千歌ちゃんだろうに」

「…むしろ、ハルくんが普通すぎて複雑だよ…」

「？」

なんのことだろうか。

「はあく。もういいよ、ハルくんは考えなくて。なんか、緊張してた私がバカみたい」

「そうかい。…ふむ。部屋、思ってたより片付いているね」

「私だつて女の子なんだよ？部屋くらい片付けるよ」

「…さつき、美渡さんの部屋がチラツと見えてね」

「一緒にしないでよ！」

いや、それは少し失礼…でもないか。

「しかしあれだね。こういう時、視線をどこにやればいいのか悩むね」

「どういうこと？」

「部屋、じろじろ見渡すのも失礼だろう」

「さつき、片付けがどうか言ってなかった？」

「さつきのはパツと見の印象の話さ」

「そういう変なところは気遣いできるのは、本当に変わらないよね」

「ほめ言葉として受け取っておくよ」

「はあ。もういいよ、それで」

呆れられたらしい。

おかしいな、気を使ったはずなんだが。

「視線とか気にしなくて良いから。こっちじつと見られてる方が落ち着かないし」

「そうかい、それは助かるよ」

「あ、飲み物とつてくるからちよつと待ってて」

「お構いなく」

そのまま部屋を出て行く千歌ちゃん。

何気なしに、机の上に視線をやる。

そこにあつたのは、一枚の写真。

あれって…。

数分もしないうちに千歌ちゃんが戻ってきた。

「ただいま！」

「おかえり。随分早かったね」

「志満姉がもう準備してくれてたんだー」

「なるほど。さすがだね」

晩御飯を作っている最中だろうに。

さすがの手際の良さである。

「あ、あとこれもどうぞって」

「みかんだね。……飯前なんだけど、大丈夫なのかい？」

「まあまあ、一個くらいならいいでしょー」

「まあ、もらえるならありがたくもらうけどね」

机の上に、みかんが幾つか入った箱が置かれた。

随分色のきれいなみかんだ。

みかんを受け取り、皮をむく。

この時、なんとなく切らないように剥きたくなってしまうのは俺だけではないはず

だ。

「ハルくん、見てみてー。浮くみかん〜」

「小学生か、君は」

「ノリが悪いなー」

「くだらない事やってないで、さつきとただこうじゃないか」

いただきます。

心の中で呟いてみかんを一口に放る。

うむ。甘くて美味しい。

「おいしく。やっぱこれだよね〜」

「そういえば千歌ちゃん、一番好きな食べ物なんだっけ、みかん」

「そうだよ！千歌と言ったらみかん！くらいに覚えておいていいからね」

なぜか誇らしげである。

自分の髪色についても、オレンジではなくみかん色というくらいだし、何か思い入れがあるのかもしれない。

「そんなわけで、二つ目をいただきます」

そう言つて、机の上のみかんをとって皮を剥き始めた。

「いやいや、二つはさすがに食べ過ぎでしょ。本当にご飯入らなくなるよ」

「大丈夫だつて！みかんは別腹だから」

「いや、それ、食べる順序逆だから」

「ご飯が別腹？」

「志満さんに怒られるよ」

俺の制止もどこ吹く風。

美味しそうに二つ目のみかんを頬張る千歌ちゃん。

…どうなつても責任はとらないよ。

「…それで、ご飯が食べられなくなつたと」

「……はい。ごめんなさい」

「あつはつは！ばっかだねー千歌は」

「■うう…」

志満さんがお説教モードで、美渡さんはその横で笑っている。

まあ、こればかりは美渡さんに同感である。

「ハルくうくん…」

「そんな目で見られても、今回ばかりは俺も止めたからね。自業自得だよ」

「そんなあー」

「ほーら千歌ちゃん。まだまだご飯は残ってるわよう。ちゃーんと食べてねー？」
直接怒っている様子は見せていないが、逃がさないぞというオーラを感じる。

お残しは絶対に許しません。

そんな雰囲気を放っている。

怖い。

「ご、ご、ごめんなさーいー！」

千歌ちゃんの声が木霊した。

※

「うう…もう、何も入らない」

「ああ…うん、お疲れ様」

「もう…しばらくみかん食べない」

「そうかい」

多分明日には懲りずに食べているのだろうけど。

二人で、海岸沿いを歩く。

消化のために外を少し歩こうという話になったのだ。

お腹がプンタプンの状態で歩くのはきつくはないかいと聞いたが、大丈夫と言い張っていた。

だが、さすがにちよつと顔色が良くない。

「千歌ちゃん、どう考えても消化に影響出てるよね？」

「だ、大丈夫だよ」

「何を意地になつてているんだい」

「だ、だって…最近ハルくんと二人きりなんて、滅多にないし…」

「なんか言つたかい？」

「何もありませんー！うぶ…」

「ああ、もう。そんな声を出すから。ほら、ちよつと向こうで休もうか」

「う、うん」

防波堤に、二人で腰を下ろす。

千歌ちゃんの背中をささるうかと思つたが、よく考えたら吐かせたいわけではないのでやめておく。

「こうして二人でゆったりするのは久しぶりだね」

「そうだね。夜の海でつてなると…本当にいつ以来かな」

「うーん…何年かぶり？」

「…まあ、俺もそこまでちゃんと覚えてないけどさ」

二人で、夜の海を眺める。

そこに会話は無い。

響く音は、時々通る車の音と、波の音だけ。

でも、心地よいものだった。

「私の中一の時にさ」

「ああ」

「ハルくんがここで励ましてくれたの、覚えてる？」

「…うん。覚えてるよ」

思い出したのは、さっきだけだね。

「自分が普通すぎるって言って悩んでたんだよね」

「あはは。そこまで覚えてるんだ」

「なんとなくね」

「…曜ちゃんたちが、部活とかで輝くの見えさ…自分の普通つぷりに苦しんでた」

「そうだね」

「それを励ますために、ハルくんがここで叫んでくれたんだよね」

「…そうだったかな」

「ふふ。覚えてるでしょ？」

「どうだろうね」

「まあいいんだ。私は、ちゃんと覚えてるから」

絶対、忘れないから。

そんな風に、千歌ちゃんが言った気がした。

叫んだ内容。

もちろん、覚えているさ。

千歌ちゃんが、自分は普通すぎるってあんまり言うから。

俺が、つい叫んだのだ。

『普通星人なら！ここにいてもいざおおおおお！』

『高校生にもなって、何も自慢できることもなくて！』

『部活も委員会も目立ったことはやってなくて!』

『よりによって自分の婆ちゃんには、お前に才能はないなんて言われるような!』

『そんな! 史上最強の普通星人が!』

『千歌ちゃん! 君のすぐ側にいいいいいいいい!』

今思うと…若かったなあと思う。

というか馬鹿すぎる。

まさしく黒歴史だ。

ああ、恥ずかしい。

「あの日から、私は、自分を普通星人って笑えるようになったんだよ」

「そうだったのかい」

「うん。だって…」

そこまで言って、千歌ちゃんが少し歩く。

そのままこちらに振り返って、言葉を繋ぐ。

「普通星人は、私とハルくんだけの、お揃いだから」

その時の千歌ちゃんは、笑顔だった。

彼女の背景に浮かぶ、無数の星々。

明かりの少ないこの街は、星が空を満遍なく照らす。

それでも。

その笑顔は。

どの星よりも、綺麗な輝きを放っていた。

「…普通星人…ね」

今の君は。

星より綺麗だよ。

※

「お邪魔します」

「お邪魔します」

「お茶とみかん取ってくるから、曜ちゃんと梨子ちゃんは適当に座っててー」

「うん。ありがとう」

「ヨーソーロー！」

『ドタドタドタドタ』

「ふふ。そんなに急がなくてもいいのに」

「千歌ちゃん、今日はなんだか嬉しそうだね」

「何か良い事でもあったのかしら」

「んー…あれ？これって…」

「写真…よね」

「前からあつたっけ？」

「どうだろう。そこまでよく見てなかったから…」

「写ってるのは…千歌ちゃんとハルくん？」

「制服、浦の星のじゃないわね」

「ああ、これ、私と千歌ちゃんの中学のだよ」

「へえー…なんか書いてあるわね」

「本当だ。えーと…」

「「普通星人…コンビ？」」

「懐かしい写真があったなあ」

若気の至りで叫びまくったあの日。

千歌ちゃんと一緒に写真を撮ったのだ。

普通星人コンビ誕生記念とかなんとか言っていた。

「あれを見ると、その度に思い出すからなあ…」

できれば人目には映らない位置に置いといてくれと言ったんだが。

あそこにあつたら、友達とか来たから見られてしまうだろうに。

「はあ…捨ててくれないかなあ…」

誰にでもなく呟く。

その声に、もちろん応えるものなどいなかった。

天体観測と布屋さん

「ほらハル、あとちよつとで頂上だよ！」

「わ、わかっているから。でも、もう少しだけ、ペースを落としてくれ」

「もー。仕方ないなあ」

「む、むしろ、なんで君はそんなに元気なんだ」

時刻は夜。

俺は望遠鏡を担いで果南ちゃんと淡島神社の階段を上っていた。

果南ちゃんは背中にカバンを背負っている。

目的は天体観測。

つまりは星を見に行くことである。

果南ちゃんは昔から星を見るのが好きなので、こうして彼女と天体観測に行くのはそこまで珍しいことじゃない。

見る場所が淡島神社というのもいつも通りである。

しかし、何度上ってもこの淡島神社の階段はきつい。

段数ももちろんだが、この傾斜角と場所によって異なる段の高さが、その上り辛さを

際立たせている。

もうちよつと整備してくれてもいいじゃないか。

そんなしょうもないことを考えながら階段を上る。

「ハル、またロクでもないこと考えてるでしょ」

「この最悪な立地条件について頭の中で嘆いていただけだよ」

「そんなに悪くないでしょ？」

「せめて階段くらいは整備してほしいんだ」

「相変わらずハルは体力ないなあ」

そう言いながら笑われる。

体力ないのはその通りだが、逆に君はありすぎだと思う。

息ひとつ切れる様子のない果南ちゃん。

スクールアイドルってみんな体力すごいんだらうか。

しばらくして、ようやく頂上に到達。

夜とはいえ季節は夏。

結構な汗をかいてしまった。

「はあっはあっ…っ、疲れた…」

「お疲れ様、ハル。といつても本来の目的はこの後だけどね」

「そ、そうだね。すぐ、息を整えるから、ちよつとだけ待ってくれ」

「ほーい。あ、レジャーシートだけ敷いとくね」

「た、頼むよ」

果南ちゃんがレジャーシートを敷く。

その間に、俺は息を整える。

大きく息を吸い、ゆっくりと吐く。

その動作を繰り返す。

よしよし。

落ち着いてきたぞ。

「ふう。よし、果南ちゃん手伝うよ」

「いや、シート敷いただけだからね。まあ座って」

「ああ、ありがとね」

「いえいえ」

二人でレジャーシートの上に腰を下ろす。

持ってきた望遠鏡もシートの上に置いておく。

使用するのはまだ後だ。

「照明、色変えるよ」

「ん、お願いね」

先ほどから道を照らしてきてくれたランプの色を切り替える。

白色から赤色へ。

白色の光は強すぎて瞳孔を小さくしてしまうのだ。

そうすると、星の光が捉えづらくなってしまふ。

赤色の光ではそういう事がないので、天体観測では赤色の光をよく使うんだそう。

まあ簡単に言ってしまうえば、暗闇に目を慣れやすくするために赤の光を使うらしい。

光がぼんやりとした赤色に変わり、先ほどまでとはまた違った彩で辺りを照らし出す。

この光景も、思えば最近はあまり見てなかったと感ずる。

「天体観測、いつ以来だったかな」

「うーん……高二の冬くらいにやって……それ以来？」

「てことは数ヶ月ぶりか。長かったような、短かったような」

「色んなことがあったもんねー」

「ほんとにね」

なんの因果か、再びA q o u r sの結成を千歌ちゃん達から聞いたのが4月頃。

それから1年生の仲間を増やし、東京にライブに行き、そして3年生も仲間に加える。そんなイベント尽くしの3ヶ月だった。

「俺の人生の中でも、トップクラスに密度の高い数ヶ月だったよ」

「あはは。ごめんね、たくさん迷惑かけて」

「いや、そういうつもりで言ったんじゃないよ。というか、俺は何もしてないからね」
そう。

本当に何もしていないのだ。

スクールアイドルをやって、輝こうと言った千歌ちゃん。

それを側で支え続け、ともに輝こうとした曜ちゃん。

壁を越え、自身のスランプを乗り越えた梨子ちゃん。

憧れ続けたアイドルの世界に勇気を出して足を踏み入れたルビィちゃん。

自信の無さという壁を壊し、本の世界から飛び出した花丸ちゃん。

在りたい自分の居場所を見つけた善子ちゃん。

親友のために自分を隠し続けてきた果南ちゃん。

そんな親友に正面からぶつかって仲直りしたマリーちゃん。

大好きな親友二人を、ずっと待ち続けたダイヤちゃん。

そんな彼女たちに俺がしたのは、近くに居続けただけなのだ。

「ハルならそう言うと思うたよ。どうせ私が何言つたつて、自分は何もしてないつて言い通すんでしょ」

「本当に何もしてないからなあ」

「でも、この数ヶ月はハルだつて忙しかったんでしょ？」

「忙しかったりしたのは、君たちを見てハラハラし続けていたからだよ。何か行動していたからじゃない」

「はあ……やっぱりそう言うんだね」

果南ちゃんは呆れている様子だ。

「ああ、そういえばお茶を持ってきたんだよ。飲むかい？」

「ん、もらう」

「はい」

「ありがとう」

コップにお茶を入れて手渡す。

それなりに冷やしてあるお茶だ。

「さっきの話だけどね」

「ああ」

「何もしてなくても、ハルはいつも側にいてくれたでしょ？」

「そりゃあ店が学校の近くにあるしね」

「いや、そういう物理的な話じゃなくてね」

「君たちとは長い付き合いなんだから。心配にもなるさ」

俺がそう言うのと、果南ちゃんはこちらを向いた。

そして。

「そうやって、下手に干渉せずに見守ってくれたのが、私たちには嬉しかったんだよ」

笑顔でそう言われてしまった。

まいったね。

思わず照れそうになるよ。

「…何もできなかつただけさ。買い被り過ぎだよ」

「たまには素直に褒められてよ！」

そう言われてもね。

まあ、彼女たち…果南ちゃんだけかもしれないが、俺が近くにいることを不満には思われてないなら、それだけでもありがたい話だ。

「好きな人が、ちゃんと見守ってくれてるって事はね、本当に嬉しいんだよ」

ボソツと、果南ちゃんが何かを呟く。

もう一度言ってくれと頼もうとしたのだが。

「よし！そろそろ天体観測始めよつか！」

そんな声に上書きされてしまった。

まあ、聞くのはまたの機会にしよう。

「あれが夏の大三角だっけ」

「いや、ハルがどれ指差してるのかわかんないよ」

「ほら、あそこのやたら光ってるやつさ」

「どれも光ってるよ。方角は合ってるし、多分当たってるんじゃない？」

「よしよし。で、あれがさそり座だ」

「いや、それは違うから。方角全然違うから」

「あれ？」

おかしいな。

あの形はサソリに見えたのだが。

二人でレジャーシートの上に寝転がって星を眺める。

そのまま、星をテキストに指差してこんな会話をするのが、俺たちの天体観測である。

「ハル、星座は昔から覚えるの苦手だよね」

「形は覚えられるんだよ。場所が覚わらないんだ」

「場所覚える方が簡単じゃん」

「それでもないと思うんだけどね」

これだけ星があると、形を覚えていても特定しづらい。

なぜなら、星がたくさんあれば、その辺の星をつないで同じ形を作れるからである。

しかも時間によって少しずつ動くし。

つまりは、他の星との位置関係も覚えてないと、結局星座の特定はできないのである。

「ああでも、一つだけはつきり覚えてるのがあるよ」

「そうなの？」

「うむ」

「へー。どれどれ」

「天の川」

「範囲広すぎ！しかも星座じゃないし」

この場所からは天の川がよく見えるのだ。

一番最初に覚えた空の目印である。

次に覚えたのは…

「もう…これだけ天体観測してるんだから。他に何か覚えてるやつないの？」

「ああ、あるよ。自信持って覚えてるのがもう一個だけ」

「一個しかないの・…まあいいや。どれ覚えてるのさ」

「そうだね…この時期なら多分…あ、あつた。あれだよ」

「いや、だから指さされても…あれ？あの辺の星座って…」

「ああ。水瓶座だよ。場所、当たってるだろう？」

「う、うん。合ってるけど…よく覚えてたね。そんなメジャーじゃないでしょ」

「いやいや、何を言ってるんだい」

そりゃあ覚えているさ。

なんてったって。

「水瓶座は君の誕生月の星座だろう」

「!!…お、覚えてたんだ」

天体観測をする上で、果南ちゃんからはたくさん星座のお話を聞いた。お陰様でたくさん星座の形を覚え、その位置を忘れてきた。しかしそんな中でも形も位置もよく覚えられているものがある。俺を天体観測に誘ってくれた彼女が、最初に教えてくれた星座。

『あれがね、水瓶座だよ。あれとあれを結んで…』

『水瓶…変わった形だね』

『見えるのは8月ね。私の生まれ月の星座なんだよ』

『生まれ月…果南ちゃんは2月生まれなのに、生まれ月の星座は8月に見えるんだね』
『そういうものなんだよ』

懐かしい会話。

それでも、いまだ忘れることのない天体観測の始まりである。

「まあ残念ながら、それ以外なかなか覚わらないんだけどね」

「…そっか。もう、ハルには困ったなあ」

「あれ？なんでちよつと嬉しそうなの？」

「もー。じゃあ、ハルが星座全部覚えるまで付き合っただけよ」

「え、いや、全部って？まさか星座全部？」

「んーん。天体全部」

「何百年天体観測をやるつもりなんだい」

「いいんだよ、何年でも」

「何年だって、何十年だって、何百年だって…側にいるんだから」

優しい笑顔でそんなことを言われてしまった。

なんだか告白みたいだなあ。

そんなことを思ったのだった。

※

翌日。

「あれ？なんかハルくん、動きがぎこちなくなない？」

「あ、ああ。き、昨日ちよつとね」

「もしかして筋肉痛？だめだよー、準備運動なしで動いたら」

「ハルさん、ただでさえ運動不足だもんね」

「それに関しては改めて痛感しているよ」

彼女らの言う通り、俺はとてつもない筋肉痛に襲われていた。

それはそれは痛くて仕方ない。

動くたびに痛むので、おそらくロボットみたいな動きになっている事だろう。

目の前の彼女たちは、トレーニングのために淡島神社を登っているんだよな…

改めて凄さを実感する。

「ん？こっち見てどうしたの？」

「ああ。君たちはすごいなーって思ってたね」

「あっはっは。どうしたのさ急に」

そんな会話をしていた時だった。

「そういえば、今日果南ちゃんがすごく楽しそうだったんだよー」

千歌ちゃんがそんな話をふってきた。

「楽しそうだったのかい？」

「うん」

「そうね。なんというか…ずっとニコニコしてるっていうか…そんな感じ？」

「そうだねー」

「…そうかい。それはよかったよ」

しかしそうか。

俺は筋肉痛でこんな状態なわけだが…

果南ちゃんは、元気に練習できているのか。

…いい加減、俺も体力つけた方がいいのかもしれない。

図書館の少女と布屋さん

今日は久しぶりに図書館にやってきている。

店番の時によく読書をしている俺だが、最近読む本がなくなってきたのだ。

とはいえ金欠気味の現状、新しい本を買うのは少々厳しい。

そんなわけで、図書館を利用することにしたのである。

普段から図書館でいいだろと言われればその通りだが、本屋に行くといついでに手が出てしまうんだよね。

適当に本を眺めながら歩く。

ジャンルはバラバラに、目に付いた本を取っていく。

少し歩いたくらいの時だ。

前方に、知った顔を発見。

少し高い位置にある本に、背伸びをして手を伸ばしている少女。

肩下まである栗色の髪を揺らすその女の子は、おそらく花丸ちゃんだろう。

いつもの制服じゃなく、今日はワンピースのようだ。

ワンピースで腕を上上げると、自然に衣服全体が持ち上がる。

そのため、彼女の綺麗なふとももが露わになっている。

下着は…さすがに見えなさそうだが、それでもだいぶきわどい状態だ。

目には優しい光景だが…

このまま見ているだけ、というわけにもいかないだろう。

そう思い、彼女の取ろうとしている本に手を伸ばす。

「はい、これでよかったかな？」

「あ…あれ？ハルさん？」

「うん。そうだよ。この本を取ろうとしてたみたいけど…合ってるかい？」

「あ、うん。ありがとずら」

「お安い御用だよ。これ以外にも取る本はあるかい？」

「あるけど…どうしてずら？」

「よければ手伝うよ」

「いいずら？」

「もちろんだよ」

「でも、ハルさんに悪いずら…」

「美少女と図書館を散策するんだ。こちらにデメリットはないだろう」

「び、美少女っ／＼／＼」

「それでも悪いと思うなら、適当におすすめの本でも教えてくれ」

「わ、わかつたずら／＼／＼」

そう言いながら花丸ちゃんがうつむいてしまっている。

美少女という単語に反応しているようだが：言われ慣れていないんだろうか。

そんな経緯を経て、花丸ちゃんと共に図書館を歩く。

彼女のおすすめの本は物語が多かった。

「これ、どういってお話なんだい？」

「お兄さんな男の子と、妹みたいな女の子の恋愛を描いた本ずら」

「恋愛か」

「そうずら。それまでは妹として見てた子にだんだん女の子としての魅力を感じていく

話ずら。ハルさん、これで女心を勉強するといはずら」

「女心……ふむ」

これで勉強できるかは別として、まあたまには恋愛小説もいいだろう。

お互いに目星の本を手につったところで受付へ。

手続きを済ませて本日の内容は終了である。

「さて。これからどうするか？」

「ハルさん、何か用事があるすら」

「いや、特にないよ。今日は店も休みだしね」

「ほへー。そうなんだ」

二人で図書館を出つつそんな話をする。

バスで帰ると言っていた花丸ちゃんだが、せつかくなので車で送ることにしたのだ。

「花丸ちゃんは何か用事でもあるのかな？」

「まる？まるもその…特にはないすら」

「そうなのかい」

夏休みだし、用事ならいくらでもあると思ったのだが。

この偶然は運命ということにしておこう。

「それなら、午後は俺とデートでもいかがかな？」

「で!?で、でで、で、でえと!」

ものすごい反応を見せられる。

「うん。お互い時間が空いてるみたいだしね。…そんなに嫌だったかい？」

「ち、ちがうすら!嫌とかじゃなくて!そ、その…お、おらでよければ…お願いします」

／

「お、付き合ってくれるかい。ありがたいね」

「な、なんでハルさんはそんなに平気そうずら…／＼／」
「？」

「どういうことだろうか。」

「また何か変なことでも行っちゃったのかな？」

「まあいいかな。とりあえずは…そうだね、お昼ご飯に行こうか」

「そ、そうずらねっ／＼／」

「なんか花丸ちゃん、ぎこちなくない？」

「そ、そんなことないずらよっ」

「…歩くとき、右手と右足が一緒に出てるよ」

「い、いつものことずらー！」

「普段からそうやって歩いてるの？」

「とりあえずは車に乗り、行きつけの喫茶店に向かう。」

その間、花丸ちゃんはなぜか下を向いていた。

時々視線をこつちにやっていたように感じたが…

「気のせいかな？」

（うー…普通に過ごすだけならなんでもないので…デートって思うと落ち着かないずら

∴
／／
／

喫茶店に着き、席に座る。

幸いあまり混んでいなかったようで、待つことなく席に着くことができた。

「今日は俺が出すからね。好きなものを頼んでくれ」

「ハルさん、なんだかんだ言っつていつも出してくれてるすら」

「そうだったかな。まあ歳上だしね」

さすがに、高校1年生の女の子にお金を氣遣われるのは…うん。

こういう時くらいは見栄を張りたいのだ。

最初は躊躇していた花丸ちゃんだったが、とりあえずは奢られてくれることになった。

注文を済ませ料理を待つ頃、ようやく花丸ちゃん表情はいつも通りに戻ってきたようだった。

「ご飯、楽しみずらく」

「そうだね。うん。やつといつも通りの花丸ちゃんになってくれたみたいだね」

「あ、えつと、その…」

「いや、その方がいいと思うよ。顔も随分赤くて心配してたんだ」

「それはハルさんのせいすら」

「…え。俺、なんかしたっけ?」

「はあ…。まあでも、今日は許してあげるすら」

「んんー?」

なんだかよくわからないが、呆れられたようだ。

まあ、いつも通りになつてくれたみたいだし、ここはそれでいいということにしよう。

「この食事は俺としては美味しいんだが…口に合うといいな」

「よく来るすら?」

「一応は小学生くらいの時からばあさんと来ていたんだよ」

「ばあさん?」

「ああ、そういえば花丸ちゃんには話していなかったね。ばあさんって言うのは、俺の祖

母でね…」

以前梨子ちゃんに話したことを花丸ちゃんにも話す。

よくよく考えると、A q o u r s のメンバーはこれで全員が俺のばあさんのことを知っているか、聞いたことがあるという状態になったわけだ。

いや、だからなんだという話だが。

「花丸ちゃんのお婆あちゃんはどういう人なんだい？」

「まるの婆ちゃんも東北生まれずら。爺ちゃんが内浦生まれなんだよ」

「そうだったのかい。てことは、時々出てくる方言は東北のものなんだね」

「うん。本当は隠すつもりなんだけど…つい」

「いいじゃないか。方言、かわいいと思うよ」

「む／＼／＼で、でも、まるは一応アイドルだから。ほ、方言はだめずら」

「んー…そういうもんかねえ」

「少なくとも、ジャスコに入っただけで『都会ずらー！』とか叫んでるうちは普通のアイドルとは違うと思うのだが…」

「そんな話をしていたら、料理が運ばれてきた。」

「食べてる最中、花丸ちゃんに感想を聞こうと思ったが、その必要はなかった。」

「表情を見れば、彼女がどんな感想を抱いているかはすぐ分かったからだ。」

「なんというか。」

「とても幸せそうに食べてくれている。」

「…自分の幸せで人も幸せにする能力…だね」

「？」

「間違いない、アイドルにふさわしい能力だと思うよ。」

※

その後。

俺たちは電気屋さんへ向かった。

デートで家電つてどうなのとは思わなくもないが、他にいく場所が思いつかなかったのだ。

もちろん、花丸ちゃんにも意見は聞いたが。

『ハルさんの行きたいところなら、どこでも大丈夫すら』

と、ありがたい言葉をもらってしまったのだ。

さて…

これで花丸ちゃんは楽しんでくれるのか…

ちらつと花丸ちゃんの様子を伺う。

「おおー！未来すら！未来の道具すらー！」

目を輝かせていた。

おお。

予想外に良い反応だ。

「ハルさんハルさん、これはなにずら!?!」

「ああ、それは浄水器だね。水道に取り付けると、水がきれいなるんだよ」
「水道の水? もともとは汚いずら?」

「ああ…うん、べつに汚いわけじゃないんだけどね」

それについては、細かく考えると議論を呼ぶので深くは考えないのが良い。

俺も詳しくは知らないしね。

「ハルさん、あつちは何ずら!?!」

「それはプリンターだね。つて、それは学校にもあるんじゃないかい?」

「こんな大きいの見覚えなはずら」

「そうなの?」

業務用のプリンターはそんなに珍しいものでもないと思うんだけど…。

「おおー! ぱ、ぱそこんがこんなに小さく…」

「それは電子辞書だね。パソコンとはまた違うよ」

「じ、辞書!? これが! め、めくるところがないずら…」

「それ、文字を打って単語を調べるんだよ。その辺はパソコンと同じかな」

適当に文字を打って単語を入力する。

打った単語は『内浦』

写真はさすがに出てこなかったが、ちゃんと内浦のことをいろいろ表示してくれた。

「おぉー！すごいぞらー！」

「……ここまで感心してくれるのはうれしいけど、君は普段どんな道具に囲まれて生きてるんだい？」

電子辞書なんて、ところによつては高校でも使用が許可されているはずなんだが。

とはいえ、横でこれだけ目を輝かせてくれているのを見ると、こちらとしても嬉しいものである。

「よし、花丸ちゃん」

「何ぞら？」

「他にもいろいろな家電があるんだ。今日はそれを紹介するよ」

「おぉー！家電ツアーぞらー！」

「うむ。よく聞くように」

側から見たらとてつもなくアホらしいと思うが。

まあ、たまにはこういうのも良いだろう。

「今日はありがとうね。楽しい一日だったよ」

「こちらこそありがとうございます。そ、その、で、でえと、楽しかったすら／＼／＼」
そう言つて笑顔を見せてくれる花丸ちゃん。
うむ。

この笑顔だけでも、一日分の価値があつたというものだ。
夕日が水平線に顔を半分隠す頃。

俺たちは彼女のお寺の駐車場にいた。

もちろん、花丸ちゃんをお家に送り届けに来たのである。

「また、時間があればご一緒してくれるかな?」

「そ、それはもちろんずら!」

そんな風に返してくれた。

ありがたいことである。

「さて、それじゃそろそろ御暇させてもらおうかな。花丸ちゃんも晩御飯の時間だろうしね」

「あ、は、ハルさんっ」

「ん?どうかしたかい?」

「え、えつと、その…」

両手を前に合わせて何かを言おうとしている。

だが、何を言おうとしているかは俺には分からない。

「あ、頭…」

「頭？」

「な、撫でて欲しいすら…／＼／＼」

思わず呆気にとられてしまった。

言いくそうだったし、もつとすごいことを言われるかと思ったよ。

「そんなことかい。お安い御用だよ」

そう言つて、彼女の頭に手を乗せる。

千歌ちゃんや曜ちゃんより少し小さい背丈の花丸ちゃん。

ルビイちゃんと同じくらいかな？

そんなことを思つた。

「どうか？嫌だったら言つてくれよ」

「んん。嫌じゃないよ。すごく落ち着くすら」

「それはよかつたよ」

嘘を言っているようには見えない。

理由は分からないが、彼女が不快でないなら撫で甲斐もあるというものだ。

「ルビイちゃんが、ハルさんは撫でるのが上手つて言つてたすら」

「ははは。そうなのかい。それは初耳だよ」

「まるも、上手だと思うぞら／＼／＼」

どれくらいそうしてたかは分からない。

でも。

ずっと頑張っている彼女の疲れが、少しでも取れたらいいな。

そんな事を考えながら。

俺は頭を撫でるのだった。

イングリツシユと布屋さん

ランドセルを背負った果南ちゃんが、学校帰りにうちにやってきた。

宿題をやっていた俺は、その果南ちゃんに呼び出されて店の外にいる。

『ハルー、この子だよー』

『え、えつと…コ、コンニチハ…』

果南ちゃんの手招きのもと、金髪の女の子が俺の前にやってきた。

前情報によると、彼女はつい先日果南ちゃんの小学校に転入してきた女の子らしい。

しかも外国からだ。

『ああ、こんにちは。名前は…小原鞠莉ちゃん、だったかな』

『イ、イエス』

『日本語はどれくらい話せるんだい？』

『まだあんまり話せないんだって。だから、ハルが通訳になつてよ』

この子をここに連れてきた理由はこれだ。

果南ちゃんは言語が通じなくても問題はないのだろうか、この小原さんはそうじゃない。

い。

自分の言語がまったく通じない環境など、恐怖で仕方ないだろう。

だから、少しでも会話が通じる人を探しておく必要がある。

この前俺がそういう話を果南ちゃんにしたら、じゃあお前が通訳をやれと果南ちゃんに言われたのだった。

『果南ちゃん、かなり無茶を言っている自覚はあるかい?』

『英語習ってるんでしょ?』

『学校で勉強してるだけだよ。コミュニケーションがとれるものじゃないんだが…』

『え、えつと…』

『ほら、鞠莉も困ってるでしょ。ほら、とりあえず自己紹介してよ!』

『…それもそうだね。小原さん…いや、ミス小原?』

『イ、イエス』

だいぶ不安そうな表情を見せる目の前の女の子。

そりやそうだ。

『あー…まいねーむ、いず、ハル』

できる限り優しく、ゆっくりと話しかける。

この子の恐怖心を少しでもやわらげるように。

『ハル…?』

『いえす。えつと…』

『ハル、英語下手すぎない？』

『水を差すんじゃないよ。じゃなくて…』

『？』

次は何を言おうかと思つたが…

わりとすぐ思いついた。

『みす小原』

『い、いえす』

まだ緊張の色が残る彼女の前に立ち、目線の高さを合わせる。

そして。

『あいあむ、ゆあ、ふれんど』

彼女の目を見て、そう言った。

※

『ピピピピピピピピピピピピピ』

「ンーン」

朝の目覚ましの音で目を覚ます。

「懐かしい夢だったねー」

思わず口をつくそんなワード。

机の上に目をやると、つい最近撮った写真がそこにある。

そこに写っているのは、私と先ほど夢に出てきた男の子が成長した姿。

あれから、数年が経った。

私は日本語を不自由なく話せるようになった。

結局彼も果南も英語はできなかったから、自然に私が日本語を覚えていった。

「ふふふ。ハル、Englishは本当にへたっぴだったな」

そんな言葉を口にするけど、どうしても笑みがこぼれる。

今日は、ハルのところに行こう。

そう思うと、自然にテンションが上がってきちゃった。

「うーん…困った」

言葉にしながら頭を抱える。

つい先ほど、いつもうちの店を最員にしてくれてるお客さんから電話があった。

電話内容は簡単な衣服の修繕依頼。

お客さんの中には忘れている人もいるが、うちの店は布の発注のみだけでなく、簡単なものであれば裁縫も受けるのだ。

もちろん、修繕もその一つ。

そんなわけで、この依頼そのものはそこまで問題はない。

問題はそこではなくて…

「外国のお客さんかあ…」

うちがいよいよ海外へ名前が知られた…というわけではもちろんない。

なんでも、今回電話をくれたお得意さんの友人からの依頼だそうだ。

依頼があつたのは普通の衣類の修繕。

それくらいなら直接コンタクトを取らなくてもいいのでは？と思つたが、その外国人さんは海外で会社を経営してらしく、今のうちにコネを作っておくためにも話しておけと言われたのだ。

確かに、海外とはいえ経営者に名前を覚えてもらえるのは大きい。

そういうわけでこの依頼を受けたのだが…

「日本語が話せないというのは予想外だった…」

そのお客さんが来るのは明日。

英語でのコミュニケーションを身につける暇はない。

「さて…どうしたものか」

そうぼやいた時だった。

「チャオー、ハル」

店の扉を開けて、店に入ってくる少女が一人。

「マリー…ちゃん…?」

「ん?そうだけど…どうしたの、ハル。いつもに増して間抜けな顔して」

「マリーちゃん!」

「ひゃあ!ど、どうしたのよ〃〃〃」

思わず彼女の手を取ってしまう。

「君に、お願いがある!」

「つまりは、Translateしろってこと?」

「そうだね。通訳をお願いしたいんだ」

マリーちゃんに事情を話し、力になってくれと頼み込む。

俺が話せないなら、話せる人間に頼む方が得策だ。

今年21歳になろうという男が、女子高生に仕事の手伝いを頼む絵面。

それはそれは滑稽だろう。

でも仕方ないのだ。

高校の時から平均点を維持し続ける俺の英語は、会話という点にはまったくと言っていいほど適応できていないのだから。

「私は別に構わないけど…」

「ほ、本当かい?」

「ハルから頼られるってあまりないしねー」

表情に笑みを浮かべながらそんなことを言われる。

ありがたい限りだ。

「助かるよ。お礼は必ずするからね」

「really?」

「ああ。俺にできることならね」

「OK！気合入れちゃうよー！」

「頼むよ」

そんなわけで、頼もしい味方がついたのだった。

翌日。

店のエプロンを着用したマリーちゃんとともに開店準備をする。

「何も、開店時間から付き合ってもらわなくてもよかつたんだがね。件のお客さんがいらつしやるのは昼過ぎらしいし、それくらいにいてくれれば良いんだよ？」

「何度も言ってるでしょ。やるからには中途半端にはやらないわ。今日はworkをする日なんだから」

「その心意気はありがたいんだけどね…」

土曜日とはいえマリーちゃんにしてみれば立派な休日だろう。

それをほぼ1日消費させてしまうというのは…

さすがに気が引けるといふものだ。

「お礼はしてくれるんでしょ？」

「それはもちろんだけどね」

「じゃあいいのよ。それにね」

「ふむ」

「…ふふ。なんでもない」

「？」

（ハルと一日に一緒に居られるんだから。それだけでご褒美だよ）

なんだかよく分からないが、マリーちゃんは楽しそうだ。

まあ、本人が良いと言うのであれば…いいのかな？

仕事に入る。

今日は珍しく客足が多く、幸か不幸かマリーちゃんにもよく仕事がまわってきた。

慣れていないだろうし大変かと思っただが、あまり心配はいらなかつたらしい。

まったく問題なく接客をこなしていた。

「あら、今日は随分きれいな店員さんがいるのね」

「ふふ。1日だけのアルバイトです」

「そうなの？お客さんは少ないけど…頑張つてね」

「おばさん、余計なことと言わないでください」

確かに普段はお客は多くないが…

今日はそこそこいるんだから。

「お、今日は可愛らしい子がいるじゃないか」

「1日だけ手伝ってもらってるんですよ」

「そうかいそうかい。てつきり嫁さんでももらったのかと思ったよ」

「よ、嫁!?!／／」

「…この子はまだ高校生ですよ」

「女の子は16歳で結婚できるんだ。問題はないだろう」

「…マリーちゃんに悪いですから」

「満更でもなさそうに見えるけどなあ」

ニヤニヤしながら言うおじさん。

さっさと用事を済ませて帰ってもらおう。

マリーちゃんのことを知っているお客さんも結構いらっしやったが、知らないお客さんからもこんな感じで悪くない評判をもらっていた。

昼過ぎ頃。

予定通りに外国人さんがやってきた。

マリーちゃんに訊してもらいつつ事情を聞く。

なんでも、誕生日に娘さんにもらった衣服なんだそうだ。

衣服そのものは買い直すことがいくらでもできるだろう。

でも、娘さんの気持ちがかもったこの服は世界に一つしかない。

そこで、穴の空いてしまったこの服を急いで持ってきたらしい。

見た所、修繕は十分に可能だろう。

安心してくれと伝えるようマリーちゃんに頼んだ。

マリーちゃんが英語でそのことを伝えると、彼はとても嬉しそうな表情をしていた。

修繕のサイズなどから大体の必要日数を出し、それも伝える。

まだ日本にいるかも確認した上で後日取りに来るようお願いをし、今日のマリーちゃんの本来的なお仕事が完了した。

その後も、滞りなく仕事を行う俺とマリーちゃん。

定刻通りに営業終了となった。

「ふう…お疲れ様、マリーちゃん」

「これくらい大したことないよ…って言いたいんだけどねー。ちよつと疲れたかも」
苦笑いでそんなことを言うマリーちゃん。

慣れていない環境で1日働いたのだ。

無理もないだろう。

「今日はお客さんも多かったからね。だいぶ助かったよ。ちよつと待っていてくれ、お茶を入れるからね」

「うん。Thank you」

コップにお茶を入れてマリーちゃんに渡す。

いい飲みっぷりである。

「改めて今日はありがとう。本当に助かったよ」

「こつちもいい経験になったよ。働くって大変なん德斯ネー」

「あはは…そうだねえ」

「でも…大切なことだなんて思ったよ」

「そうかい」

「お客さん、みんな嬉しそうだったし。ハルも、普段は見ないような真面目な顔してた」

「普段は見ない…と」

「今日のハルは…大人っぽかったよ」

「普段から大人で紳士のつもりだけどね」

「普段は変態だよ」

「そいつは困ったね」

「冗談を言うくらいには体力が残っているらしい。」

「…冗談だよな？」

「ねえ、ハル」

「ん？どうしたんだい、マリーちゃん」

「昨日ね、夢を見たの」

「夢？」

「ハルと初めて会った時の夢だよ」

「あー…そういえば、あの時も英語で苦戦した記憶があるよ」

「覚えてるの？」

「もちろん。忘れないさ」

「そっか」

「こちらに来たばかりのときのマリーちゃんは、今ほど日本語が話せなかった。」

「そのため、俺は学校で習っていた英語を最大限駆使して話そうとしたのだ。」

「あの時の英語は…今思い出すとめちゃくちゃだったね」

「アハハ。そうだね。文法は間違いだらけだったし、単語も全然バリエーションがなく

て…『この人、英語は話せないんだな』って思ったよ」

「ばれていたのかい。それは恥ずかしいね」

「でもね。なんとかして私と話そうとするハルの姿が、私には嬉しかった」
「そうかいそうかい」

『あいあむ、ゆあ、ふれんど』

『Friend?』

『いえーす、いえーす。ういーあーふれんど』

『Friend!』

そんな会話をしたことを覚えている。

「ハルは、こっちに来てから3人目の友達だったんだよ」

「果南ちゃん、ダイヤちゃんに次いで…ってとこかな」

「イエス。それでね…」

「ふむ」

「…私の…初恋の人…」

呟くように口にするマリーちゃん。

その声はあまりに小さくて、俺には聞き取れなかった。

「えっと…もう一度言ってくれるかい？」

「ノー。もう言わないよ」

「うーん…まあ無理にとは言わないけどね」

消化不良な感じである。

「それより、お礼っていうのは何をくれるの？」

「それに関しては君の希望を聞くよ。何か考えといてくれ」

「うーん…あ、じゃあ一つだけいい？」

「まあお手柔らかに頼むよ」

「簡単だよー」

そう言うと、マリーちゃんはポケットからスマホを取り出した。

そのまま何か操作をしている。

なんだろうか。

通販とか…？

あまり高いものは買えないが…。

「ハル、こつちきて」

「ん？このへんでいいかな？」

「もうちよつとこつち…うん、これくらいかな」

「…だいたい近くない？」

「外国じゃnormalなんだよ！」

「そうなのか」

ほとんどくつついた状態になる。

「ここまでくれば、マリーちゃんが何をしたいかはわかった。

「…写真を撮るのがお礼になるのかい？」

「いえーす！」

「君がいいならそれでいいんだけどね」

「ほら、笑って笑ってー。ほら、撮るよー」

「カッコよく撮ってくれよ」

「自己責任だよー」

そんな経緯で撮った写真を見せてもらう。

うちの店のエプロンをつけた俺とマリーちゃんが写っている。

同じものを装着しているのに、その華々しさは段違いだ。

「ふふ。いい写真デスネー」

なぜかマリーちゃんはご満悦だ。

「みんなに自慢しちゃいまーす」

なるのか、自慢に。

ちなみに、アルバイト代はちゃんと払った。

さすがに、あれだけ働いてもらってタダ働きにはできないからね。

その日の夜。

あの写真はなんだというメッセージが8件。

なんだって…

普通の写真じゃないか…。

メッセージから怒りが伝わってきたのは、気のせいだと思いたい。

ヨーソローな少女と布屋さん

とある昼下がりに。

暖かい日光が差し込む今日。

店に、一人の女の子がやってきた。

「こんにちはー、ハルくん！」

「こんにちは。いらっしやい曜ちゃん」

「頼んだやつできてるー?」

「ああ、用意できてるよ。確認してくれ」

彼女は曜ちゃん。

本日は珍しく正式なお客さんとしてやってきたのだった。

「えーと…これとこれと…うん、全部あるね！ありがとね、ハルくん」

「これが仕事だからね。今後もしも鼻屑に頼むよ」

「お店、潰れちゃうもんね」

笑いながらそう言われる。

あまり笑い事でもないのだが。

「これ、衣装に使うのかい？」

「そうだよー」

「テーマは水に関する何かなのかな？」

「あれ？よく分かったね。話してたっけ？」

「寒色系の色が多かったからなんとなくね」

「それだけでわかるの？」

「君たちの性格とかその辺も考慮してね。・まあ、本当に当たるとも思っていなかったけど」

「へー…すごいね！」

「どうもありがとう。衣装の案はもうできてるのかい？」

「案はできてるよー。だからすぐ取り掛かるのであります！」

そんな言葉とともに敬礼をしてくれる曜ちゃん。

「そうかい。がんばってくれ」

「うん！」

そう言つて、奥の部屋に向かっていく曜ちゃん。

「つて、え？」

「ん？」

おっ。

「何しようとしてるんだい？」

「何って…衣装作るんだよ？」

「…どこで？」

「()で」

「…なるほど」

「もー。びっくりしたじゃん」

「いや、どう考えてもびっくりしたのはこっちだよね？」

衣装をここで作るなんて話は聞いてない。

そりゃあ、道具とかは揃っているし、ここでやる方がやりやすい部分はあるのかもしれないが。

俺が微妙な表情をしていたからだろうか。

今度は曜ちゃん不安そうな表情になってしまった。

「も、もしかしてダメだった…？」

上目遣いにそんなことを聞いてくる。

その表情は反則だ。

「…いや、構わないよ。君一人なら騒ぐこともないだろうしね」

「ほ、本当に……？」

ずいぶんしおらしくなっちゃった。

あんまり縮こまれると、こちらの調子が狂うじゃないか。

「本当だよ。ちょうど人がいなくて寂しかったところなんだ。ぜひうちで作ってつくれ」

「ハルくん……。うん！ありがとうございます！」

安心したように、また笑顔になった曜ちゃん。

そして、今度こそ奥の部屋に向かっていった。

いつもテンションの高い曜ちゃんがあんな風にしおらしくなるのは、ちょっと反則だ
と思うんだ。

※

しばらくして、営業時間終了の時間がやってきた。

結局、あの後一度もこちらへ顔を出さなかつた曜ちゃん。

相当集中しているらしい。

さつきから、ずっと作業の音が聞こえ続けている。

店の後片付けを一通り済ませ、部屋の奥へ行く。

思った通り、曜ちゃんは脇目も振らずに服を作り続けていた。

「…大分長いことやつているね。一息入れたらどうだい？」

「わ！ハルくん。えつと…」

「いや、何か用があるわけじゃないから。手は止めなくてもいいよ」

「あ、ごめんね。これだけやったらひと段落するから」

「ああ。その間にお茶でも入れてくるよ」

そんなわけで冷蔵庫のお茶をコップに注ぎ、改めて部屋に戻る。

ちよんどひと段落したようで、曜ちゃんが手を止めていた。

「はい、お茶」

「ありがとー。お仕事は？」

「もう営業終了時間だよ」

「え、嘘？気付いたら大分時間経ってたんだねー」

「そうだね。それも気付いてなかったのかい」

「集中してたからね。曜さん、やるときはやるタイプなんです」

腰に手を当て、ふんすと聞こえてきそうなポーズをとる曜ちゃん。

「君が努力家なのはよく知ってるよ。今更確認するまでもなくね」

「…そ、そつか／＼／＼…普通に褒められると、逆に困っちゃうよ…」

「とはいえ、あんまり一人で頑張りすぎないようにね。みんなにも手伝うように言うんだよ」

「普段は大分助けられてるよ。今日はみんな用事があつたんだ」

「そうだったのか…。それで、一人で頑張りうとしたわけかい」

「今日中に仕上げる必要もないんだけどねー。なんとなく気合入っちゃって」

「頑張るのは結構なことだが、体を壊したら元も子もないんだ。無理はしないでくれ」
「はーい」

そんな会話をしてお茶に口をつける。

時刻はもう夕方から夜になろうという時間。

そろそろ晩ご飯をどうするか決めないといけない頃だ。

「晩ご飯作るけど、曜ちゃんはどうするかな？」

「どうするって？」

「うちで食べてくなら二人分作るよ」

「いいの？」

「もちろん。頑張ってたからね。これくらいのサービスはするさ」

「わーい！食べる食べる」

「あいよ。じゃあまあしばらく休んでてくれ」

そう言つてキツチンに立つ。

冷蔵庫を開けて食材を確認。

ひき肉、玉ねぎ、卵に牛乳…

ふむ。

今日は、曜ちゃんの好きなものをつくるとしよう。

そう思い準備に取り掛かろうとしたときだった。

「あ、ハルくん。この玉ねぎはみじん切りでいいの？」

「…なんでここにいるんだい」

エプロン姿の曜ちゃんがそこにいた。

格好から判断するに、料理を手伝う気みたいだが。

「ハルくんだけにやらせるなんて悪いよ。場所まで借りてるのに」

「別に店の邪魔をしてたわけでもないんだ。気にすることじゃないよ」

「いいの！私が手伝いたいから手伝うんだから」

「まあ、君がそれでいいならいんだがね」

曜ちゃんは人並みもしくはそれ以上に料理ができる。

手伝いをしてくれるならありがたいのは確かだ。

「じゃあまあ、調理に取り掛かりますかね」

「ヨースロー！」

そんな掛け声とともに調理を始める。

一人以外でこの調理場に立ったのは久しぶりだ。

「「ごちそうさまでした」」

手を合わせる。

二人で作ったハンバーグはなかなかの出来だった。

「おいしかったねー」

「ああ。さすが曜ちゃんだね」

「いやいや、ハルくんの味付けが良かったんだよー」

「定番レシピに沿って作っただけだけどね。そう言ってくれればありがたいよ」

「布屋さんより定食屋さんの方が向いてるんじゃない？」

「この場所で定食屋を開いたとして、誰が来てくれるんだい」

「布屋さんでも同じことが言える気がするんだけど」

「返す言葉もないね」

だからと言って定食屋にジョブチェンジするつもりはないが。

人様に提供できるほど自分の料理の腕に自信はない。

「そういうえば、ちよつと聞きたかったんだけど」

「ん？どうしたの？」

「大したことじゃないんだけどね。今日はなんでうちで作業をしてたのかわかって」

「ああ、そのことかー」

別にうちで作業をすることに異論はない。

道具もあるし、合理的ではあるが…

「今日は手伝ってくれる人がいなかっただろう？無理に今日うちでやらなくても、他の日にやることはできたんじゃないかと思ってね」

急ぎではないと言っていた。

だったら、わざわざ今日やる必要はなかったわけだ。

それこそ、人手が確保できるときに部室でやるなりした方が効率は良かっただろうと思っただのだ。

「うーん…まあその…むしろ一人だったから来たといえますか…」

「ん？どういう意味かな」

（一人だとハルくんの近くを独占できたみたいで好きとか：時々聞こえてくるハルくんの声に安心するとか：それでニヤニヤしちゃう姿を他の人に見られたくないとか：理由はたくさんあるんだよね）

なにやら曜ちゃんが言いにくそうにしている。

悪いことを聞いてしまったのだろうか。

「あー、まあ、言いにくいならそれで構わないよ」

「そ、その、たまにはここで一人で作業したかったんだよー！」

「そうなのかい」

「う、うん！」

ふむ。

確かに一人で無心に作業をしたい時というものもあるのかもしれない。

あれ？

でもそれだと…

「俺がいても邪魔なんじゃない？」

「ハルくんがいないと意味ないじゃん！」

「え？」

「あ」

どういうことだろうか。

考えようとした時、曜ちゃんが両手を振って説明を始めた。

「ち、違うのーあ、いや、違うはないけど！そ、その、ハルくんはいないといけないとか
そう言うことじゃなくてええええ！／／／」

「わ、わかったから落ち着いてくれ」

「で、でもその、いなかったら不安になつちやうから！やっぱそこにおいて欲しいっていう
か……って私なに言ってるのー！」

顔を真っ赤にして叫んでいる。

何を伝えたいのかさっぱりだが、とりあえずパニックになっていることは分かる。

昔から時々こういう状態になる曜ちゃん。

普段は千歌ちゃんのブレーキ役の曜ちゃんだが、一度パニックになるとこんな感じで
自分にブレーキがかかけられなくなる。

こういう時の対策は一つ。

「ほら、落ち着いて」

「あつ……」

曜ちゃんの頭に手を置く。

撫でるといふよりも、本当に手を置いてあるだけのような状態。

それでも、こうすると少しだけ落ち着きを取り戻してくれるのは変わらないようだ。

「まあその、無理に答えなくてもいいから。なんとなくここで作業をしたかったというならそれでも良いんだ」

「……うん。ありがと」

「ただ……ここでやる以上は俺はほぼいるからね。それは勘弁しておくれ」

「うん。むしろ……いて欲しいから、大丈夫だよ」

最後の一言はよく聞こえなかったけど。

この場所を居心地が良いと言ってくれるなら、それはそれでいいのだ。

「こうして君の頭を撫でるのは久しぶりだね」

「うん。ハルくんの手、落ち着く」

「そうかい。それはよかった」

昔はよくこうしていたのだが。

いつからか機会が減っていた。

それでもこうして受け入れてくれる。

こういうのも悪くない。
なるほど。

確かにたまには二人きりの時間というのも大事なようだ。
そんなことを思ったのだった。

黒いダイヤと布屋さん

『パパ…ママ…?』

少女は呟く。

『ハハハ…どハハ?』

先ほどまで一緒にいたと思っていた両親とはぐれてしまった少女。
見知らぬ土地に見知らぬ人々。

『う…う…う…』

その目には、徐々に涙が溜まっていき。

『う、うわああああああああん』

やがて、それは溢れ出してしまった。

そんな少女に、声をかける少年が一人。

少女を見つけると、彼は迷いなく話しかけに行つた。

『おやおや。そんなに泣いてどうしたんだい?』

『うぐつ、えぐつ、お、お兄さん、だあれ?』

顔を涙でぐしゃぐしゃにしながら言う少女。

そんな少女の顔をハンカチで拭きつつ、少年は答えるのだった。

『俺かい？俺の名前はハルっていうんだよ』

『は、ハル？』

『そう、ハル。そちらの名前も教えてもらえるかい？』

『わ、私、く、黒澤ダイヤ…』

『ほうほう。見た目通り綺麗な名前だね』

『へ？』

『ああいや、今はそんなことはどうでもいいね。ダイヤちゃんは、どうして泣いてたのかな』

『パパたちとはぐれちゃって…ぐす』

『そっかそっか。それじゃあ俺と同じだね』

『…へ？』

『俺も君と同じ、迷子ってやつだよ』

少年は、笑顔でそう言った。

「…あれから、もう10年も経つんですのね」

机の整頓をしていたら、少し懐かしいものを発見してしまった。もう使えない、古びた切符。

東京でそれを使ったのは、今から10年前。

初めて東京に行った時の事。

両親とともに訪れたその場所で、私は迷子になってしまった。

まだ幼かった自分にとって、右も左もわからない土地で迷子になるといふのは、まるで一人宇宙にでも放り出されたかのように感じるほど怖かった。

誰とも知らず助けを求めた。

でも、誰もその手を掴もうとはしてくれなくて。

泣きじやくるしかできなかった自分のその手を掴んだのは。

自分より三つ歳上の男の子だった。

「私を助けてくれたかと思ったら、自分も迷子の最中だというのですから」

『君の親御さんを探すのを手伝うから、俺のばあちゃんがいたら教えてくれ。頭から鬼の角が生えてそうなばあさんだよ』

そう言われ、二人で駅を歩き回ったのだ。

それを思い出し、私は思わず呆れを含んだ笑みを浮かべてしまう。

「あの頃からハルさんは、あんまり変わってませんわね」

色あせた切符と、変わらないあの人。

あの人も、まだその時の事を覚えているんでしょうか。

※

「遠足の下見？」

「ええ。同伴していただけないかと思いましたが」

「それはもちろん構わないけど。またなんで」

「事情については説明しますわ」

「よろしく頼むよ」

ある日の夕方。

いつものように、浦の星女学院に注文されていた物品を届けに生徒会室へやってきた。

届けた物品の名簿を確認し、不備がない事を確かめたところで、ダイヤちゃんから先ほどのような話を持ちかけられたわけである。

「浦の星女学院に遠足があるのは知っていますわね」

「そりゃあね」

遠足と言っても、イメージは社会見学のようなもの。

美術館、博物館、科学館といったところに行くのだ。

行くのはその年の三年生。

受験勉強で疲れている生徒たちのリフレッシュと、進路に対して希望を持たせる事を目的にしているらしい。

「その遠足、実は毎年生徒会が事前見学に行っているんです」

「へえ」

「それで、今年も例に漏れず行くのですが…：他にも他の生徒会メンバーの都合が悪いみたいで」

「うむ」

「私は一人でもいいのですが、すでに行き帰りのチケットなどが用意されているみたいなんです」

「それは…使わないともったいないね」

「ええ。それで、せっかくならとハルさんを誘った次第ですわ」

「なるほどね。でも俺でいいのかい？ A q o u r s の他の子とか…」

「それも考えましたけど、正直さすがに生徒会以外の生徒を呼ぶのもどうかと思いましたが」

「ああ、確かにね」

生徒のための遠足。

その事前見学で一般生徒を連れて行ってしまふのは、確かに気がひけるものがあるが、そう思う。うだ。

「そういう事なら喜んでお供するよ」

「恩にきますわ」

そんなわけで、週末にダイヤちゃんと科学館デートのお約束となった。

なかなかどうして、役得なこともあるもんだ。

※

「おおー…これは大きいね」

「日本でも有数の科学館の一つですからね。特にあのプラネタリウムは世界でも最大級みたいですよ」

「それは…すごいね」

電車を乗り継ぎ、名古屋市の科学館へやってきた。

休日ということもあって人はなかなか多く、はぐれないように気を使う必要がある。そうだ。

「さて。それじゃあ参りましょう」

「そうだね」

ダイヤちゃんと二人で施設を見て歩く。

もちろんその過程で楽しめるものは楽しみつつ、必要な情報があればメモをしていく。

初めは事前見学など本当に必要かと疑問に思ったが、案外、行ってみるとその重要性が分かる。

「催し物については整理券が必要みたいですわね」

「そうだね」

「これはあらかじめ生徒に伝えておいて、並ぶ必要がある事を知らせておく必要がありますわ」

「たしかにね」

「ここは小さな子どもが多いですわ」

「体験型が多いみたいだからね」

「高校三年生と言えども、調子にのるとこういう子どもへの配慮が欠けてしまう恐れがありますわ」

「テンションが上がると、周りが見えなくなる事もあるからね」

「ですので、この場所へ来る時はちゃんと周りを見るように伝えておきましょう」
「なるほど」

「ここは休憩場所ですが：長居はしないように注意しておきましょう」

「他のお客さんも使うだろうしね」

「再入場は自由ですし、長く休憩したいならすぐ近くの公園を使っただきましよう」
「あそこ、すごい広かったもんなあ」

といった感じで、パンフレットにメモをしていくダイヤちゃん。

普段遊ぶ時はハイテンションに暴れる彼女だが、さすがは黒澤家長女。

今の彼女は、才色兼備の生徒会長と呼ぶにふさわしい振る舞いをしている。
そんなことを思いながら彼女を眺めていたら、どうやら気づかれたらしい。

「：どうしましたか？私の顔に何か」

「いやすまないね。悪気はないんだよ」

「それは分かっていますわ。ただ、あまり人の顔をジロジロ見るのはいただけませんわ」
「悪かったよ。つい見とれてしまっただけ」

「なあつ！ま、またハルさんはそういうことをサラツと…」

「事実だからね」

「…はあ。もういいですわ。先に行きますわよ」

「うむ」

そんな会話も挟みつつ、二人でさらに施設見学を進める。

ひと段落ついたのは、午後三時くらい。

お腹も減ったし、一度外に出て先ほど話にもあがっていた公園へやってきた。

かなりの広さがあり、家族連れやカップルなどなど、色んなグループがいるようだった。

それを眺めつつ、ダイヤちゃんと共にコンビ二で買ってきたおにぎりに手をつける。

「本当なら、私が作ってきててもよかったです…」

「持つて歩くには不便だしね。そこまで気を使う必要はないよ」

「私の料理、振る舞いたかったんですけどね」

「君が料理上手なのは知ってるよ。それこそ、またいつでも作ってくれ」

「ええ。そうさせていただきますわ」

「それはそうと…今日はこんな感じでもよかったのかな？」

「こんな感じとは？」

「俺、一応は君の付き添いで来たけど…普通に見て周っただけだったからね」

施設とかを見て率直な感想くらは俺も言った。

けど、対処方を考えたりメモをとったりしたのは全部ダイヤちゃんだ。

俺がやったことといえば、本当に横を着いて歩いたり思いついたことを口にしただけ。

正直、戦力になったとはとても言い難いだろう。

「構いません。もともとこうなるのは予想できていましたし」

「なんとというか、自分が情けなくなるね」

「というより、急なお誘いで来てくれただけで十分なんです」

「十分…ねえ」

「ええ。それだけで私にとって…」

そこまで言ったところで、少し強い風が吹いた。

そのせいでダイヤちゃんの言葉が聞き取れなくなってしまう。

「強い風だったね」

「そうですわね」

「聞こえなかったから続きを言ってもらえるかい」

「…風に流されて忘れてしまいましたわ」

「それは困ったね。走ったら取りに行けるかな」

「ハルさんの体力では不可能でしょうね」

「それもそうだ」

「風っていうのは、回り回って地球を一周するみたいですよ」

「なるほど。じゃあそれまで待ってれば話の続きが聞けそうだね」

「ふふ。そうですね」

風が地球を一周するのに、どれくらいの時間がかかるんだろうか。

というか、そもそも風が地球一周するというのは本当なのか。

何はともあれ、風がここに戻ってくるまでは俺がダイヤちゃんにとってどう力になれていたかは内緒みたいだ。

それからどれくらい経ったか。

おにぎりも食べ終わり、二人でテキトーな話をしつつ景色を眺めていた。間にはゆったりとした空気が流れている。

「ハルさん」

「なんだい」

「退屈ではないですか？」

「横に美人さんがいるからね。丸一日でもこうしていられるよ」

「…そ、そういうことを聞いたのではありませんわ」

「違ったのかい」

「…科学館とか含めて、退屈ではなかったかと聞いているんです」

「ああ、なるほど。もちろん楽しかったよ」

「ほ、本当ですか？」

「俺が嘘つけないのは知ってるだろう」

「そ、そうですけど…まあ、楽しんでいただけただけなら」

「というか、君といてつまらないわけないだろうに」

「…はあ…そういうセリフ、よくさらっと言えますわね」

「嘘はつけないからね」

「口を閉じるという選択肢はないのかと聞いているんですわ」

「表情に出るから同じだよ」

「呆れた開き直りですわ」

「遺憾ながら、よく言われるよ」

「はあ…」

ため息をつく、ダイヤちゃん。

赤くなったりため息をついたり、忙しいものだ。

「…ハルさんは、昔から本当に変わりませんわね」

「それもよく言われるよ」

「これ、覚えていますか？」

「切符…ああ、これかい。また懐かしいものを持ってきたね」

「昨日、掃除をしている時に見つけたんです」

見せられた切符。

東京都内の電車に自由に乗れる一日乗車券。

ダイヤちゃんと初めて会った日、俺が彼女に渡したものだ。

『これがあれば好きな駅に行けるからね。一応、君に渡しておくよ』

『え、でも…』

『さすがに、君の両親が娘を置いて他の駅に行くってことはないと思うけど…念のためね』

「結局そのあと、すぐご両親を見つけて意味はなかったね」

「しかも、ハルさんがその後すぐ行ってしまったから、これを返しそびれたんですよ」
「そうだったねえ」

「というか、よく覚えてましたわね」

「可愛い子との初対面を忘れてたりしないさ」

「今ならともかく、あの時の私はまだ8歳ですわよ」

「美人になる素質が見えてたんだよ」

「場合によっては犯罪臭がしますわね」

「でも、今にして思えば俺の見立ては正しかったらしい」

「はあ…あの時やるべきは、両親探しではなくお巡りさんへの通報だったみたいですよ」
「ね」

「はっは。タイムマシンができたら通告してきてあげておくれ」

ちなみに、その後うちのばあさんと黒澤家が仕事で関わっていることを知り、ダイヤちゃんも奇跡的に再開したのである。

これまた、今にして思えば珍しいことだと思う。

「…あの時、ハルさんが私の手をとってくれたこと、本当に嬉しかったですよ」

「急に感謝されると、さすがに照れるよ」

「でも、嘘は言ってませんので」

「おっと、そうくるかい」

「いつものお返しですわ」

笑顔で言うダイヤちゃん。

その横顔は、思わず見惚れるほど綺麗だ。

初対面のとき、この子は将来美人になりそうだなあとか思ったわけだが。

勘は正しかったらしい。

そんなことを思った時だった。

『ジュオオオオ』

不意に、強い風が吹いた。

目にもものが入らないようにしながらダイヤちゃんを見ると、髪を抑えながら口を動かすところが見えた。

「…今度は、私とその手を掴んで見せます…」

何を言ったかまでは、聞き取ることとはできない。

また、風と共にダイヤちゃんの言葉が流されてしまった。

何を言ったのか聞き返そうかと思った。

けど。

この風が地球を一周するまで、待つのもいいだろう。

そう思い、俺は口を閉じるのだった。

泳げないルビーと布屋さん

バシヤバシヤバシヤ。

不規則に水を叩く音が、セミの鳴き声とともに空に溶けていく。

音の発信源では、女の子が必死にバタ足で前へ進もうとしている。

しかしながら、その音源が動くことはなし。

虚しくその場で足を動かすだけという状態になっているのだった。

「…これは、なかなか先が長そうだね」

その光景を見て、俺はそんな言葉を呟くのだった。

※

「泳ぎを教えて欲しい…かい」

「は、はい。明後日その、水泳のテストがあつて」

とある土曜日のお昼頃。

俺は珍しく一人でうちに来ているルビィちゃんとお話をしていた。

「明後日…厳しいね」

「どんな泳ぎ方でも25m泳げればいいんです！犬かきでも素潜りでも！」

「水泳の授業でそれはどうなんだろうね」

「だ、だからその…」

「…ああ、うん。協力するよ。だから、その捨てられた子犬みたいな目で見ないでくれな
いかな」

「うう…ハルさんのお仕事が終わってからでいいので、なんとかお願いします」

目に涙を浮かべてこちらを見上げるルビーちゃん。

どうやら結構焦っているらしく、表情から不安の色が見られる。

ただでさえ小動物チツクな彼女だ。

こういう頼み方をされてしまうと、俺でなくとも断るのは難しいだろう。

いや、別に断るつもりなんて毛頭ないんだけどさ。

「ちなみに聞くけど、俺以外の人に頼むという選択肢はなかったのかい？」

「もちろんなくはないんですけど…その、練習で疲れているみんなに、泳ぎの練習まで付
き合わせてしまうのは…」

「ああ、なるほどね」

「ハルさんだってお仕事があるのに、頼んでしまうのは申し訳ないんですけど…」

「いや、それは気にしなくていいよ。さすがに君たちの練習ほど体力は使っていないから」

「ごめんなさい…」

「謝る必要もないから、泳げるようになったらお礼の言葉でも添えておくれ」

「は、はい。お願いします」

「うむ。といつても、俺もそんなに泳げるわけではないんだけどね」

「か、形だけでもなんとかつ」

「まあ最善を尽くすよ」

そんな会話の後、ルビィちゃんが浦の星女学院へ向かっていった。

お昼休憩の中でうちへ来たらしく、まだ午後の練習が残っているようだ。

Aquorsの練習は、俺の知っている限り結構ハードだったはず。

その後で水泳までやろうというのだから、大したものである。

泳ぎの練習を手伝ってあげられるのは、今日の夕方と明日の夕方。

二日間で泳げるようになるというのは、正直相当厳しいだろう。

でも、ここまで頑張ろうとしているのだ。

可能な限り力になりたいね。

※

「なーんて、思ってたんだけどねえ…」

学校のプールを借りて泳ぎの練習をするルビーちゃんと、それを眺める俺。

律儀にスク水を着て水泳帽子を着用する彼女を眺めつつ、どうしたものかと考える。

現状、25m泳げるようになるのは難しそうだ。

泳ぎ方が指定されていないので、フォームのことは考えなくていい。

そうなること、ポイントとなることは3つ。

浮けること。

息継ぎができること。

進めること。

この3つができれば、どれだけ減茶苦茶な形でもとりあえず25m進むことができる。

もちろんこれらを最も効率よくできるのが、クロールなどのような既存の泳ぎ方なわけだが。

さて。

ルビーちゃんだが。

「す、進まないです…」

「そうだねえ」

「浮くこと自体はできなくはない。

が、進まない。」

「かろうじて進めるレベルのバタ足をしようとすると、力が入りすぎて今度は沈んでしまう。」

「息継ぎについては、まずこの二つができるようになってからだろう。」

「ひとまず、一度壁に手をつけてバタ足の練習をしようか」

「はい。そうします」

「両手を壁につき、体を浮かすルビィちゃん。」

「やがて、バタ足を行う。」

「うーん…力を入れすぎかな」

「力…ですか？」

「そうそう。そんなに大きく足を動かす必要はないんじゃないかな」

「な、なるほど。やってみますっ」

「それから30分ほど経っただろうか。」

「先ほどに比べて、いささか改善されているバタ足。」

まだまだ形としては荒いが、最低限前に進むことくらいはできそうだ。

「よしよし。まあこんなもんじゃないかな」

「よ、よくなりましたか？」

「うん。大分ね。次は実際に泳いでみようか」

「は、はい！」

壁を蹴りルビーちゃんがスタートする。

両手を重ねて前方に伸ばし、先ほどまで練習していたバタ足で少しずつ前へ進んでいく。

お。

先ほどよりは十分よくなっているじゃないか。

これなら、なんとか明日中に…

などと思っていた矢先。

ルビーちゃんの体が、徐々に沈んでいく。

やがて、体が完全に沈みきったところで、ルビーちゃんが顔を出した。

「ぶはあー！」

「大丈夫かい？」

「あ、はい。えつと…」

「10mくらい進んだね。大進歩だよ」

「あと15m…」

「まあ、あせらず行こうじゃないか」

「は、はいっ」

再び壁を蹴り、泳ぎだすルビイちゃん。

先ほどと同じくして、10mほど進んだところで沈むのだった。

バタ足に集中しすぎて今度は上半身に無駄な力が入っているんだろう。

このまま見えていても埒が明かない。

ビート板でもあればいいのだけど。

と思ったけど、よくよく考えれば俺が手を引けばいいだけか。

「うゆ…」

「お疲れ様ルビイちゃん」

「あ、あれ？ハルさん？ハルさんもプールに浸かって…どうしたんですか？」

「練習、手伝おうと思ってるね」

「手伝う…ですか？」

「うん。手、持つからそのままバタ足しておくれ」

「手…ええ!？」

「そんなに驚くことかい？あ、もしかして嫌だった…」

「そうじゃないです！…その、手…」

「手？」

「うう…な、なんでもないです…」

「？」

よくわからないけど、手をつなぐことに抵抗があるらしい。

嫌というわけではないけど、手をつなぐことが…

その後、ルビーちゃんの手を持って前へ泳ぐ練習を継続。

さすがに泳げるようにはならなかったが、最低限浮いた状態で前進することはできる

ようになった。

明日中に息継ぎをできるようにしたら、ひとまずは25m泳ぐことはできるだろう。

※

ルビーちゃんとの水泳練習2日目。

今日も今日とて練習に励んだルビーちゃん。

俺の予想を上回る気合で、彼女はなんとか25m泳ぎきって見せた。

といつても、やれば必ず泳ぎきれるというわけではない。

3回くらいトライして1回泳ぎきれるかどうかといったところ。

調子次第で泳ぎきれるかが変わる状態だ。

正直厳しいと思つていただけに、これでも大健闘だと思う。

テスト直前の2日でここまで持つてきたのだ。

一度決めたら、なんとかできるまで努力し続ける。

その努力の仕方は、お世辞にも器用なやり方とは言えない。

でも、ひたむきに頑張り続ける。

その点は、彼女の素晴らしい長所であり昔から変わらないところだ。

人事を尽くしてなんとやら。

あとは運を天に任せるしかないだろう。

練習を終えて、今俺はルビイちゃんに着替え終わるのを待つている。

更衣室の出口あたりで、スポーツドリンクを飲みつつ待機中だ。

待つている間、特に意識もせずあたりを見回す。

生徒会へ荷物を届けに来ること自体はそこそこあるが、プールの方へ来るといふのは

あまり多くない。

今更ながら、女子校のプールを使わせてもらったというのはなかなか貴重な経験をしたのかもしれない。

なんて口にしたら、ダイヤちゃんあたりに出禁をくらいそうだが。

「ハルさん、お待たせしましたっ」

「ああ、おかえりルビィちゃん」

「ま、待たせちゃってごめんなさい」

「いやいや。大して待ってもいけないからね。気にしないでくれ」

「練習に付き合ってくれたのも、ありがとうございます」

「それについても、俺がやりたくてやってるからね。気にしないでくれ」

まだ乾ききっていない髪を、タオルで拭くルビィちゃんとともに校舎を歩く。

普段のツインテールと違い、髪を流している彼女。

チラリとのぞくうなじを見つつ、普段とは違った魅力を感じるのだった。

「色っぽさも存分に漂っているね」

「ハルさん、何か言いましたか？」

「いや、何も言っていないよ。それより、今日は晩御飯を一緒に食べないかい？」

「え？ いいんですか？」

「いいも何も、こつちが頼んでるんだけどね」

「あ、でも、おうちでもう晩御飯作っちゃってるかも…」

「それについては、さつきダイヤちゃんに電話しておいたから大丈夫だよ」

「あ、そうなんですか。じゃあお言葉に甘えて…つてあれ？」

「ん？」

「お姉ちゃんに連絡つて…もし私が家で食べるつて言ったらハルさんどうするつもりだったんですか？」

「その時はその時でなんとかするつもりだったよ」

「なんとかって…ふふ。ハルさん、悪い人ですね」

「君のお姉ちゃんにはよく言われるよ」

『今日は、ルビイちゃんにうちで晩御飯を食べてもらおうと思ってるんだ』

『はあ。それは構いませんが。なぜハルさんから連絡を？』

『まだルビイちゃんは着替えてるみたいだね』

『…ルビイはハルさんと晩御飯を食べることを知ってますの？』

『いや、これから誘うつもりだったよ』

『…普通は誘ってから連絡するものではなくて？』

『早めに連絡した方がいいかなと思って』

『たかが10分程度でしょうに…はあ…まあいいですわ。承知しました。あまり遅くならないようにと伝えておいてください』

『ほいよ』

そんな電話をしたのが少し前。

ルビーちゃんが着替えている時に交わしたやり取りである。

※

家に帰り、あらかじめ用意しておいた晩御飯を盛り付ける。

メニューは冷やし中華。

「のせるものは一通り準備しておいたから、好きなものをとっておくれ」

「美味しそうですねー。あ、いただきます」

「どうぞどうぞ」

ちゆるちゆると小さい動作で冷やし中華をすするルビーちゃん。

なんというか、こういうところまで小動物チックなんだなあと感じるのだった。

食事が終わり、付けていたテレビを二人で眺める。

もう少しお腹が落ち着いたら、ルビイちゃんを家に送るとしよう。

そんなことを思いつつぽーっとテレビを見ていたら、ルビイちゃんに話しかけられた。

「こういう風にハルさんと二人きりでご飯を食べるの、久しぶりな気がします」

「そうだねえ。昔はちよいちよいあったもんね」

「はい。あの時間、結構好きだったんですよ」

「そうだったのかい。こっちが一方的に話しかけてただけで、君は退屈してるもんだと思ってたよ」

「そ、そんなことないですよっ」

俺が中学生の頃、ばあさんの仕事について回ることがそこそこあった。

当時すでに外で遊ぶことが多かったダイヤちゃんに対し、ルビイちゃんは家にいることが多く、黒澤家に来ていた俺と顔を合わせることも珍しくなかったのだ。

お昼時に伺った時なんかは、子供たちでお昼ご飯を食べておくようにと言われることもあった。

その際、ルビーちゃんと二人きりでご飯を食べていたのだ。

「初対面の時は、随分警戒されてたっけなあ」

「うゆ…その、ごめんなさいです」

「いやまあ、歳が5つ離れている男子なんて怖いと思ってても仕方ないと思うよ」

一緒にご飯を食べるといっても、ルビーちゃんがこちらをとても警戒しているのははっきり伝わってきており最初はどうしたものかと考えたりもした。

いきなり声をかけたら、ますます警戒させてしまうと思って、しばらくは黙っていても思っただが…。

「ハルさんが声をかけてくれたから、私、あの時話せたんですよ」

「声をかける…ねえ。とてつもなくしやうもないことを話したね」

「ハルさん、憶えてるんですか？」

「そりやね」

『ソーメンってさ』

『びぎいつ』

『…変わった悲鳴だね。じゃなくて。ソーメンってわかるかな？』

『は、はい…』

『あれってさ、なんで夏に食べるのが通例になってるんだろうね』

『…は、はい？』

『簡単に作れるんだからさ、他の時期じゃだめだったのかなーって』

『そ、その…夏バテしやすい時期だから、しよ、消化にいい…とか』

『ああ、なるほどね。確かにありそうだ』

ちなみにこれと言ったとき、食べていたのは親子丼。

しかも季節は冬。

「あまりに唐突すぎて、私思わず笑っちゃいましたもん」

「我ながら、本当にどうしてあの話題を思いついたのか疑問で仕方ないよ」

「でも、あれのおかげで私、ハルさんと話せるようになりました」

「俺の頭の悪さが役に立った瞬間かな」

最も、あの頃から頭がよくなった訳ではないのだが。

「今は、俺のことを怖いとは思わないかい？」

「ふふ。はい。全然」

「それはよかったよ」

「…怖いどころかむしろ…」

小さく呟くように口にするルビーちゃん。

その声は、俺が聞き取るには少し小さすぎた。

「んー…ごめんよ。もう一度言ってくれるかい？」

「ふふふ…今はまだ、言えないです」

「それは、言いにくいってことなのかな？」

「えつと…な、内緒です」

「そうかい」

顔を赤くして、微笑みながら言うルビーちゃん。

恥ずかしいのか、照れているのか。

いずれにしても、無理に今聞き出すようなことではなさそうだ。

「いずれ、気が向いたら話しておくれよ」

「は、はいっ」

「いつか…ぜったいに…」

また、小さな声で何か呟くルビーちゃん。
相変わらずその言葉は聞き取れなかった。

けど。

気が向いたら話してくれるらしいし、それまでは待つていようじゃないか。これから、こうしてご飯を食べる機会はいくらでもあるだろうから。

お絵描きと布屋さん

「おお。梨子ちゃん、やっぱり絵上手だね」

「あ、ちよつとつ。まだ描き終わってないから恥ずかしいんだけど…」

「いやいや。この段階でももうすでにとても上手なのが分かるよ」

「…も、もう。わ、私のはいいからハルさんの絵を見せてよ!」

「それは構わないけど…正直コメントに困ると思うよ」

季節は5月。

あと少しすれば人々の生活には『暖かさ』から『暑さ』が顔を見せるであろう今日この頃。

俺は梨子ちゃんとそこそこ大きい公園にやってきていた。

目的は風景のスケッチ。

休日ということもあってそこそここの人がいる中で、二人でスケッチブックを膝に乗せて景色を模写しているのであった。

「ハルさんの絵…なんていうか、影が少ないのね」

「布屋ってこともあって、デザインや製図の方がやることが多くてね。影をつけるとい

うのは苦手なんだよ」

「でも、形の捉え方は上手だと思う。ハルさんが言うほど下手ってことはないわよ」
「嬉しいことを言ってくれるね。ありがとう」

梨子ちゃんの指導をもとにして、少しずつ目に見える風景を紙に落としていく。
言われた通りに影を落としていくだけで、絵には少しずつ立体感が感じられるようになった。

「梨子ちゃん、教えるの上手だね」

「ハルさんの飲み込みがいいのよ」

笑顔でそんなことを言われてしまう。

正直、風景なんかよりこの笑顔を絵に収めたいところだが…

残念ながら、俺の画力ではこの魅力を表現することはできなさそうだ。

※

「え？」

「うん。絵」

「・ああいや、おれの『え』は疑問の『え』であって名詞の『絵』じゃないんだけど…ま

あいいや」

「なんのこと?」

「気にしないでくれ」

「えつと…話、続けていい?」

「うん」

ここの発端は2日前。

学校帰りにうちに寄った梨子ちゃんとの話がきつかけだった。

「私が美術部だつてことは、前にも少し話したと思うの」

「そうだね。もともと絵を描くのが好きって言つてたしね」

「うん。でね、こつちに来て生活もだいぶ落ち着いたし、そろそろ学校や家の外でもスケッチをしてみたいんだけど…」

「その場所の候補がない…」と

「そうなの。まだあんまりこの辺の事知らないから。スケッチにいい場所ないかなつて、ハルさんに聞きに来たの」

「なるほどね」

と言う事らしい。

とはいえ。

「頼りにしてくれるのはありがたいけど、どういふところが良いのか検討もつかないんだけど」

「家や学校で見られない景色だったら、大体なんでも良いわよ?」

「んー…もう少し絞ってくれるかな」

「じゃあえつと…静かなとこ、かなあ」

「ふむ…静か…ねえ」

そう言われて真つ先に浮かんだのは淡島神社。

あそこもあそこで綺麗な風景だし、スケッチには悪くないとは思うけど…

せつかくだし、行ったことがまだない場所の方が良いだろう。

「公園とかでもいいのかい?」

「うん、もちろん。スケッチしてる事が邪魔になつたりしなければ大丈夫よ」

「そうかい。じゃあ大丈夫だと思う」

「心当たり、ありそう?」

「うん。そうだね」

「じゃあその場所、教えてくれるかしら」

「ああ、もちろん教えても良いんだけど…そうだね。せつかくだから、俺もご一緒できないかな?」

「…へ？」

思ってもいなかったという表情の梨子ちゃん。

「い、一緒に？」

「うん。…て、そんなに驚く事かい？」

「そ、それってふ、二人きりで…」

「他に誘いたい人がいるのかな？」

「そ、そういうわけじゃないけど！で、でもそれって…で、で…」

「で？」

「公園デートみたいなもの…」

「ん？」

どんどん小さくなっていく梨子ちゃんの声。

正直、最後の方はほとんど聞こえなかった。

とはいえ、スケッチについては公園で大丈夫そうだ。

「えっと…公園で大丈夫って事でいいのかな？」

「あ、うん。そ、それでオツケーよ」

「なんかちよつときこちな…」

「気のせいよ」

遮られた。

※

まあそんなわけで、梨子ちゃんと公園に来たわけである。

公園といっても、遊具とかはほとんどなくて、結構広い草原が広がる場所なんだけね。少し大きな木の陰。

芝生にレジャーシートを敷いた上で、二人して鉛筆を走らせる。

「あんまり目立った建物とか遊具がないけど、これでよかったのかい？」

「ええ。こういう風景を描くのだって、私は好きよ」

「それはよかった」

短い会話。

長い沈黙。

会話がないその間は、子供の笑い声や風の音で埋められる。

それからどれくらい絵を描いていたんだろうか。

二人の間に、これまでとは別の音が鳴り響いた。

『ぐうう〜』

「おっと、失礼」

「ふふふ。ハルさん、お腹減ったの？」

「どうやらそうらしい。時間は…ああ、12時半過ぎてるね」

「もうそんな時間だったのね」

「お昼はどうするか決めているかい？」

「あ、えつと…その、ね？」

何かを言いあぐねている様子の梨子ちゃん。

食べたいものでもあるんだろうか。

「ハルさん、サンドイッチとか…好き？」

「サンドイッチ？ そうだね。妙なものでも挟んでなければ、大体好きはずだよ」

「卵とかハムとか…かな」

「それなら大好きだよ」

「そ、そう？」

「サンドイッチが食べたいのかい？ んー…近くにそういう店とかあったかな？」

「…いや、私の様子見て気づいてよ」

「ん?」

「はあ…」

なぜだかため息をついてる梨子ちゃん。

かと思えば、カバンの中から弁当箱のようなものを取り出した。

「それ、お弁当かな?」

「そうよ。その…サンドイッチ、作ってきたからよかつたら」

「おお。いいのかい?」

「うん。嫌じゃなかつたら、だけど…」

「嫌だなんてそんなまさか。ありがたくいただくよ」

いただきますをして梨子ちゃんが作ってくれた卵サンドをいただく。

口の中に、マヨネーズの酸味と卵の味が広がる。

おいしい。

とても。

思わず無言で頬張ってしまう。

美味しくて、つい言葉もなく食べていたからだろうか。

「ど、どう…?」

少し不安そうな表情で、梨子ちゃんにそう聞かれてしまった。

「とてつもなく美味しいよ」

「そ、そう？ほ、本当に？」

「もちろん。嘘はつかないしつけないよ」

「そ、そっか…えへへ」

続いてハムサンドも手に取る。

うん、これも文句なしに美味である。

「梨子ちゃん、料理上手なんだね」

「上手かはわからないけど、料理をするのは好きなの」

「なるほど。いや、これなら料理上手を名乗っても問題ないと思うけどね」

「サンドイツチだけで大げさじゃない？」

「得意料理が一つでもあったら料理上手を名乗っても良いのさ」

「世の中が料理上手だらけになりそうね」

「良い世の中じゃないか」

そんな話をしつつお昼を楽しむ。

美味しい料理に、横には可愛い女の子の笑顔。

贅沢なお昼ご飯だ。

「ハルさん？どうしたの？」

「どうしたとは？」

「んー…なんだか嬉しそうだったから」

「そりゃあね。美人さんとお昼を一緒に一緒にしてるんだ。嬉しいに決まってるじゃないか」

「なっ…だ、だから、そういうこと簡単に言わないでよっ」

「事実だからね」

お昼を食べ終わったのは、それから30分程してからだ。

手を合わせてごちそうさまをした俺たちは、特に何をするともなくのんびりしている。

「絵を描くのは、もう少しだけ休憩してからかな」

「そうね。…って、ハルさん、眠そうね」

「ああ。お腹もいっぱいになったし、ちよつとだけ寝不足でね。」

「寝不足って…何かやることでもあったの？」

「梨子ちゃんとスケッチに行くのが楽しみで眠れなかったんだよ」

「…楽しみにしてくれるのは嬉しいけど、遠足前の小学生じゃないんだから」

「男はいつまでたつても心は少年なんだよ」

「ハルさんみたいな小学生は問題があると思う」

とはいえ、寝不足の理由はあるが嘘でもなかったりする。

昨日、美術部とスケッチに行くのに全く絵が描けないのもさすがにどうかと思った俺は、ちよつとだけ絵を描く練習をしたのだ。

もちろん1日くらいで上手になつてなるわけがないので、本当に知識として最低限勉強をただけ。

景色を描くときはこういうところを見る、とか。

どういう物から描く、とか。

そんな感じ。

で、調べていたら案外面白くて寝るのが遅くなつてしまつたわけである。

「眠かつたらお昼寝でもする?」

「お昼寝?」

「うん。何が何でも描かないといけないわけでもないし…なんなら、少ししたら起こしてあげるから」

「んー…そうだね。お言葉に甘えさせてもらおうかな」

このままだと、描いている途中で寝ちやいそうだし、その方が梨子ちゃんにも悪いだろう。

そう判断し、その場に横になる。

静かな昼下がりに。

暑すぎず寒すぎずの気温。

「これは…とても気持ちがいいね」

「ふふ。そっか。少ししたら起こすね」

「ああ、頼むよ」

俺の意識が眠りに落ちるまで、時間はほとんどかからなかった。

「…ハルさん？…もう寝ちゃった…かな？」

「普段じっくり見れないから、こういう時くらい、じっと見てもいいよね…」

「あ、それと、写真も1枚くらい…」

※

「…ん」

「あ、ハルさん起きた？」

「ああ、えっと…おはよう」

目が覚めたら、視界はすでに橙色になっていた。

少し寝るつもりだったのが、結構長く寝てしまっていたようだ。

「今、何時くらいかな」

「5時過ぎくらいよ。起こそうと思ったんだけど、ハルさん、すごく気持ち良さそうだったから」

「そうかい。それは申し訳なかったね」

「ん。大丈夫。起こさなかったのはこっちだしね」

と、会話しながら気づいた。

俺が寝る直前と、頭の高さが違う。

というか。

「…膝枕、だね」

「あ、うん。頭、敷くものなくて痛そうだったから。えつと…いや、だったかな?」

「まさか。むしろ、梨子ちゃんには悪かったかな。重かっただろう」

「ううん。そ、その…わたしも…楽しんだから」

「お?」

まあ嫌ではなかったみたいだしよしとする。

「それで…絵は描けたのかな?」

「うん。描きたい分は描けたから、今日はそろそろ帰ろうかなって」

「そうだね。すまないね」

「もう。何度も言ってるでしょ、気にしないでって。そろそろ肌寒くなってきたし、帰るのもちようどいいと思うの」

帰り支度を整え、その場を立つ。

そんな時だ。

『バサリ』

梨子ちゃんの持っていたスケッチブックが落ちてしまった。

なんの気なしにそれを拾う。

幸い、紙が折れたりということはないようだ。

地面も濡れていなかったみたいで、その心配もなさそうである。

ただ一つ気になったのは、落ちた際に開いていたページ。

「はい、梨子ちゃん」

「あ、ごめんねハルさん……って」

汚れ確認をするだろうと思い、開いていたページをそのまま渡す。

瞬間、梨子ちゃんの顔から血の気が引いていくのを感じた。

そこに描かれていた絵。

「俺の絵、かな」

「う、うわあああああああ！ち、違うの！こ、これはええと…そ、その、ひ、人を描く練習をしようと思っただけなの！」

「ああ、そうなのかい。梨子ちゃん、人を描くこともあるんだね」

「そ、そうなの！た、たまにはって」

「…なんか汗すごくない？」

「きよ、今日は暑いわね」

「さつき肌寒くなってきたって言ってなかったっけ」

まあいいか。

とはいえ、人を描く練習として俺を描いたのか…。

ん…

「被写体としては地味じゃない？」

「へ？」

「いや、もつとこう、花のある人というか、ふさわしい人がいるんじゃないかな、と」

「…そりゃあ、模写の練習になるような体型の人とかっていうのはいるけど…」

「だよね」

「で、でもいいのよっ」

そう言つて、少しだけ早足で前に出る梨子ちゃん。

夕日をバックにして、彼女の全身が眼に映る。

綺麗な髪を緩やかな風になびかせるその姿は、美少女と呼ぶにふさわしい後姿だ。

「…どうせ、ハルさん以外の人、描くつもりなんてそうそうないんだから…」

小さな声でつぶやく梨子ちゃん。

こちらを向かずに口にしたその言葉は、残念ながら俺の耳に届くことはなかった。
でも。

言つてすぐこちらを振り向いた梨子ちゃんが、すごく綺麗だったからかな。

もう一度聞こうとは思えなかったのだった。

※

「ねえねえハル」

「どうしたんだい、善子ちゃん」

「最近、リリーと何かあった？」

「リリーって…ああ、梨子ちゃんか。何かって…この前少し街を案内したよ」

「その時に何かした？」

「いや、特に何もしてないはずだけど…どうしたのさ」

「なんかね、この前練習の休憩中にリリーがスマホ見てたんだけどさ」

「うん」

「なんか、画面見てニヤニヤしてたのよね」

「はあ」

「で、どうしたのって聞いても教えてくれないのよね」

「俺にも全く心当たりがないんだけど」

「いや、多分9割方ハル関係だと思うわよ」

「ほうほう。その根拠は？」

「その直後にポンコツ化するから」

「…どういふことかな？」

「リリーはあんたが絡むとポンコツ化するのよ」

「そりやまた困った性質だね」

「あんたの鈍感に比べれば100倍はマシだけどね」

「残念だけど、本当に心当たりはないよ」

「んー…絶対ハル関係だと思っただけだなあ」

翌日。

誰かさんの寝顔の写真がA q o u r s内で出回ったが、もちろん、その事実を本人が知る事はなかったそうだ。

運の悪い墮天使と布屋さん

『ふふふ…だてんしヨハネ！参上！』

『参上より降臨の方がそれっぽいんじゃないかな？』

『え？あ、そうね…だてんしヨハネ、降臨！』

『そうかい。あ、それで今回頼まれてた中二病の衣装についてだけどね』

『ちよつともうちよつと恐れ慄いてよ！それに中二病衣装じゃない！だてんしの・衣装！』

『いやいや、まだ小学4年生で中二病にかかっているんだ。君から見たら大人な病気だよ』

『ばかにしてるでしょ！』

『褒めてるんだよ』

『むぐぐぐぐ…』

『まあまあ、そう怒りなさんな。しかめっ面をしてると、可愛い顔が台無しだよ』

『だれのせいよ！』

『ほら、もつと笑って笑ってー』

『またバカにしているー!』

『してないってば。嘘も言っていないよ。笑顔の君は、本当に可愛いんだから』

『うっ…ほ、褒められても嬉しくないもん』

『そう思うならそれでもいいけどね。笑っている時の君の顔は…そうだね、墮天使なんかじゃなくて…』

『天使の笑顔ってやつだと思っただよ』

※

「今日、尋常じゃないくらい運が悪いのよね」

「また唐突だね」

「たつた今思い出したのよ」

「そうかい」

商品であるにも関わらず、もうこの店に来るほとんどの人がそれを忘れて平気で座る椅子。

今日も今日とてその椅子にはとあるお客様が座つてらつしやる。

プリンを頬張りつつ俺と話す少女。

墮天使ヨハネこと、津島善子ちゃんである。

「まあ、A q o u r s に入れた事自体がかなりの幸運だっただろうしね。運を使い切つたんじゃないかな？」

「うっ…た、確かに、悪い事ではなかったと思うけど…」

「中学までは、友達一人作るのもそれはそれは苦労していたわけだしね。今は相当恵まれた環境だろう」

「う、うるさいわね。わかつてるわよ、そんなこと」

善子ちゃんがA q o u r s に入ってから2週間ほど。

現在の様子とかを聞くために、今日は俺が彼女を呼んだのだ。

話を聞いている限りでは、なんだかんだ仲良くやれているみたいだ。

一安心である。

「…何ニヤニヤしてるのよ」

「善子ちゃんの成長が嬉しくてね」

「なんかムカつくんだけど」

「それは困ったね」

「私かね」

最近バタバタしすぎて、よくよく考えるとこんなやりとりも久しぶりである事を思い出す。

罵倒されて喜ぶ趣味は俺にはないが、こんな会話は悪くないだろう。

「それで、運が悪いって話だったね」

「そうなのよね。本当、呪われてるんじゃないかって思うくらい」

「呪われてるって…堕天使が言うとしても不思議な言葉だね」

「そ、それはいいから」

「例えばどんな不運に見舞われてるんだい？」

「…今朝、自転車乗ろうとしたらね」

「うん」

「ブレーキ、切れてた」

「パンクじゃなくてブレーキ…」

地味に…いや、結構普通にきつい。

「…他には？」

「仕方ないから歩いてバス停まで行こうとしたら、ちょうど雨に降られたわ」

「こっちは降ってなかったから、そのあたりだけだったんだね」

「ちなみにバス乗った直後に止んだわ」

「…言葉が出ないよ」

確かに、十分不幸に見舞われていると言えるレベルだ。

「それで、ちゃんと終えてあつた宿題が、雨で濡れたから提出できなかったんだけど」
「もうそれだけでも不幸だね」

「さすがに先生も同情して、別の宿題を出すからそれをやってこいってことになったわ」
「そりやまた、なんとも言えない救済措置だね」

まあ、管理が甘いと一蹴されなかつただけでも不幸中の幸いだったというべきなのか。

「それで…その、ハルにお願いがあるんだけど…」

「うん」

「…宿題、手伝ってくれませんか…」

「…まあ、会話の流れでなんとなくそうくるとは思ったけどね」

珍しく申し訳なさそうな顔をしている善子ちゃん。

実のところ、今回雨で提出できなかった宿題も俺が手伝ったのだ。

だから、この短いスパンの間に同じような宿題を手伝ってもらうことに抵抗があるの
だろう。

気がひけるのもわかる。

「べつに、手伝うのは構わないよ。範囲も前回と同じなら、手間もそんなにかからないだろうしね」

「ほ、ほんとに?」

「もちろんだよ。だから、そんなに不安な顔をしなくていい」

「そ、そっか…その、ありがとうね」

「うむ」

心底安心した表情の善子ちゃん。

断られる心配でもしてたんだろうか。

さすがに、さっきまでの話からこの申し出を断る人なんてそうそういないとは思うんだけどね。

「ただ、効率だけ考えたらA q o u r sの他のメンバーに頼むのも手だったんじゃないのかな? 経緯を考えたら、ダイヤちゃんとかだって手伝ってくれたと思うよ」

「もちろん、それも考えたわよ。でも…」

「でも?」

「…みんな、用事がことごとく被ってて…」

「…そんなとこにまで不運の余波が…」

さすがに同情せざるを得ない。

と、そんな経緯で善子ちゃんの宿題を手伝うこととなった。

「ごちそうさまでした」

手を合わせて、晩御飯を終える。

あれから二人で宿題を終わらせ、時間も時間だということ、今日はうちで善子ちゃんにご飯を食べていくことにしたのだった。

「相変わらず、ハルのご飯おいしいわね」

「おいしいかは別として、君たちの好みはそれなりに把握してるからね」

「それでこんなにできるものなのね」

食後のお茶を二人で飲みつつ、そんな会話をする。

まあ善子ちゃんも極端に辛いもの好きだし、特に好みはわかりやすい方なだけだね。

「ずずず…」

お茶をすすする音。

静かでのどかな空気。

しかしながら。

実は先ほど、ちよつと問題が見つかっていたりする。

「いやいや、全然ちよつとじゃないでしょ」

「…まあうん。そうだね」

善子ちゃんを送るため、車を出そうとしたついさつき。

近所のおじさんから電話がかかってきた。

その内容は、小さな土砂崩れで道が途絶えてしまったとのこと。

規模も小さく、明日にでも復帰は十分可能だが、今日一晩はそのあたりを通らないようにとのことだ。

普段なら全く困らないのだが…

この道、善子ちゃんの家までに、通って避けられぬ道なのだ。

そういうわけで、帰る手段を無くしたわけである。

「マリーちゃんに頼んでヘリでも出してもらうかい？」

「そんな仰々しい帰宅はしたくないわね」

「上手くやればかつこよく帰宅できるよ。それこそ墮天使っぽく」

「できるか！…どうすんのよ」

「まあ…泊まってくしかないかなあ」

「いいの?」

「そりやあもちろん。ここで外に放り出すほど鬼畜じゃないよ」

「それはわかつてるけど」

「寝る部屋、分けた方がいいかな?」

「いや、そこまで気使わなくていいから」

会話の後。

善子ちゃんのご両親に連絡を取り、お風呂に入って早くも寝る時間となった。

「シャツ、ダボダボだね」

「そりやあんたのシャツだからね」

「でも制服で寝るわけにはいかないからね。別に、商品のやつ使ってもいいんだけど…」

「そ、それは悪いから!」

「…普段から君たち、商品のクツション投げてるよね」

「き、気のせいよ!別にハルのシャツが着たいからとか、そういうのじゃないから!」

「ああ、それはわかつてるよ」

「ああ、わかつてないパターンね、これ」

話をしつつ、二人で布団を敷く。

もともとはばあさんと二人暮しだったこともあって、布団自体は一つじゃない。

まあ布団が一つだったところで、同じ布団で寝ようとするほどデリカシーがないつもりはないけど。

「…あなた、そういうところは地味に紳士よね」

「普段から紳士なんだよ」

照明の消えた部屋で、二人布団に入りながらなんでもないことを話しつつ、眠気が降りてくるのを待つ。

「明日が学校なくてよかったわ」

「あつたところで、ここからならすぐだと思っただけだね」

「女の子は朝の準備がいろいろあるのよ。そういう道具、ここほとんどないじゃない」

「なるほど。あ、でも、千歌ちゃんとか曜ちゃんとか、いろいろ置いていってるから身だしなみを整える道具はそれなりにあると思うよ」

「それもどうなのよ…」

「ああでも、さすがに下着類はないよ」

「あつたら即刻通報してるわよ」

「忘れ物や商品という線を疑ってほしいね」

「日頃の行いを反省することね」

「墮天使に言われると思わなかったよ」

「やかましいわ」

少しずつ、意識が遠のいていく。

女の子と話しながら眠りにつけるというのは、よくよく考えると贅沢なものだ。

※

横から、静かな寝息が聞こえてくる。

普段は減らず口を叩くその口も、今は規則正しく呼吸をしているのみ。

ていうか…

「なんで平然と寝れるのよ、こいつ」

少し自分の魅力に自信をなくす。

いや、多分魅力とかそういう問題じゃないんだろうけどさ。

普段から散々女子高生大好きって言つといて、いざ横にいと絶対手は出さない。

しかも自分には縁がないと思ってるみたいだし。

「…墮天使の黒魔術でも、こいつの鈍感さは治せないわよね」

ハルとの付き合いは長い。

私が小学生のときにはもう知り合ってたし。

墮天使を名乗る私と、距離を取ろうとする人はやっぱり多かった当時。

分け隔てなく接してくれたのが、気になるようになったきっかけ。

中二病をやめろって、言われたことはない。

どんな姿でも、どんな形でも、こいつは受け入れようとしてくれた。

一言多いのは昔からだけど。

それでも、距離を置かれたことはなかった。

「…今日一日、色んな不運がつきまとってきたけど」

よくよく考えると、それ全部が積み重なってこそこの今この瞬間ね。

「そう考えると、不幸が積み重なってできた幸運なのね」

穏やかな寝顔のハルを見て、思わずつぶやく。

『笑顔の君は、天使のように見えるよ』

昔、彼が何気なく言ったそんな一言。

多分、こいつはそんなこと覚えてないんだらうなあ。

「ねえハル。天使はね、嫉妬を覚えたから墮天使になっちゃったっていう説もあるのよ」

「私が墮天使になっちゃった理由の一つは、きっとハルなんだから、ちゃんと責任とって

よね」

口から出たそんな一言は、誰の耳にも入ることもなく闇に溶けていくのだった。

普通の1日と布屋さん

真夏の昼過ぎ。

外からセミの大合唱が鳴り響くこの時間。

『カランカラン』

「あつっーい！ハルクーん」

「ヨーソーロー！」

「こんにちは」

扉のベルが鳴り響き、お客の来店を知らせる。

読んでいる本から目線を動かすまでもなく、誰がやって来たのかは分かる。

「いらつしやい、3人とも。暑い中でご苦勞様」

「ほんとだよー」

「もう朝から太陽が元気だねー」

「日焼けしちやいそうで心配よ」

本日やってきたのは2年生3人組。

夏真っ盛りの今日。

青空には雲ひとつなく、空は太陽が完全に支配している状態だ。

気温も朝から容赦なく上昇しており、さすがに今日は店でもエアコンをつけている。

「あー…涼しー」

「ねー…」

「わざわざエアコンの前に行かなくても、部屋は全体的に涼しいだろうに」

「気分の問題だよ！」

「そうそう。気分気分」

そう言つて、エアコンの前に陣取つて二人で冷風を仰ぐ。

まあ気持ち良さそうなので良しとする。

「二人とも、あんまりそうしていると風邪ひくわよ。ほら、先に汗だけでも拭いておかないと」

梨子ちゃんがタオルを二人に渡す。

さすが、よく気がきくものだ。

「梨子ちゃんありがとー」

「ありがとー」

その間に、俺は冷蔵庫へ向かい、アイスを取ってくる。

今日は箱のアイスだ。

「はい、お疲れ様のアイスだよ。食べるかい？」

「わーい、食べる食べるー！」

「おおー！カップアイスだね。ハルくん、気がきくねー！」

「えつと…もらっちゃっていいの？」

「もちろんだよ。どうせ一人じゃ食べきれないからね」

「ん。ありがと」

箱からアイスを取り出してスプーンとともに手渡す。

味はテキトーに選んだが…どうかな。

「んーおいしー！」

「ねー。やっぱこの時期はアイスですなあ」

「ふふ。そうね」

うむ。

悪くなさそうだ。

お気に召してくれたらしい。

「あれ？ハルくんは食べないの？」

「俺はいいよ。あんまりお腹を冷やしたくなくてね」

外に出れば暑いのは言わずもなだが、それに合わせてあちこちでエアコンが効いて

いるし、食べ物もお腹を冷やしてしまうようなものが多い。

この時期というのは、案外体を冷やしやすいのだ。

加えて、中学生くらいの頃調子に乗ってアイスを食べ過ぎた結果、お腹を壊したこともあり、人一倍この時期は食べ物に敏感なのである。

「ハルくん、そこは相変わらずだねー」

「誰だっってお腹が痛いのは嫌だろう?」

「いや、食べ過ぎなきや大丈夫だよ」

「どうにもそういう考えにはもっていけなくてね」

「一口くらいなら大丈夫じゃない?」

「一口?」

「ええ」

そう言ったときだ。

梨子ちゃんが、スプーンにアイスを乗せてこちらに差し出してきた。

いわゆるあーんというやつだ。

「いいのかい?」

「もちろん。ほら、溶けちゃうわ／＼／」

「では失礼して」

差し出されたスプーンからアイスをいただく。
うん、おいしい。

「美人に食べさせてもらうと、味も数段美味しく感じるね」

「そ、そう／＼／」

「あー！梨子ちゃんずるい！」

「私のもほら、ハルくんあーん！」

「わ、わかつたから。口を開けるまで待つてくれ」

そんなことを言つてたら、口を開けた瞬間にアイスを突つ込まれた。

これは多分、あーんではないね。

しかも、一気に飲み込んだせいで頭痛がやってきた。

これはアイスクリーム頭痛というらしい。

い、痛い…。

「か、間接キス…うへへ」

「…梨子ちゃん、よつちゃんからハルくんが絡むとポンコツになるつて聞いてたけど…」

「本当みたいだねえ」

3人が何か話していたようだが、聞き取る余裕はなかった。

※

「どうかな。たまには紅茶にしてみたよ」

「おいしいです」

「まるはもうちよつとだけ砂糖が欲しいすら」

「はい、これね」

「ありがとうすら」

「ふふふ…墮天使にはこっちの方が似合うわね」

「まあ、普段の緑茶じゃあ墮天使っぽくはないね」

そんな会話をしながら1年生の3人とティータイムに勤しむ。

本日やってきたのはこの3人だ。

喉も渴いているだろうと思ひ飲み物を用意することにしたのだが、先日、紅茶の茶葉をもらっていたので、今日はアイスティーにしたのである。

「適当にお茶請けのお菓子もあるからね。ぜひ食べてくれ」

「あ、ありがとうございます」

「何か今日は妙に羽振りがいいわね。何かあったの？」

「普段からそこまでケケケチしているつもりはないんだがね」

「別にケチだなんて言っていないわ。でも、自分から出してくるのは珍しいなって思ったのよ」

「そうだったかな？」

「そうよ」

「そうらしい。」

「これは普段の態度を少し改めないといけないな。」

「あ、これ賞味期限が明日すら」

「ほんとだ。あ、こっちは今日だね」

「…それが理由で私たちに出したのね」

「心当たりがないね」

「ジト目で善子ちゃんに見つめられる。」

「そんなに見ないでくれよ。」

「照れるじゃないか。」

「はあ…まあいいわ。過ぎてるわけじゃないしね。余り物でも美味しくいただくわ」

「いただきます」

「い、いただきます」

「どうぞどうぞ」

ちなみに用意したお茶菓子は饅頭とかそういう和風のお菓子だ。

おいしいんだが、足が早いんだよね。

「おいしいずら〜」

「そうだね。でも、こんなに美味しいのにどうして余ったんですか？」

「ちよつと買いすぎちやつてね。お客さんにも渡してるし、消費できると思ってたんだが」

「買いすぎたつて…なんでそんなに買ったのよ」

「ああ、店員さんが美人だね」

「うわ」

「うわつて」

善子ちゃんに苦い顔をされる。

引いているのかな？

「美人さんだったずら？」

「ああ。綺麗な人だったよ」

「ハルさん、それに釣られちやつたずら？」

「あれよあれよと勧められてるうちにね。気付いたらたくさん買ってたんだよ」

「完全に相手の思う壺じゃない…」

「男の性だからね。味は美味しいし良しとしようじゃないか」

「言ってることはもつともだけど、自分で開き直すことじゃないわね」

「しかも理由が情けないすら」

「うゆ…」

「はっはっは。手厳しいね」

でも何も言い返せなかった。

ちよつと傷ついた。

「君らだって、格好いい店員さんに勧められたら、思うところはあるだろう」

「ないわ」

「ないすら」

「ないです」

「あれ？」

真っ向から否定された。

「残念だけど、私…というよりは、A q o u r s のメンバーに色仕掛けは効果ないと思う

わよ」

「それもそうずらねえ」

「まあ…あはは」

「大した自信だね。何か理由でもあるのかな？」

「…別に…」

「心に決めた人がい…もが」

「ず、ら、ま、るう。余計なこと言わなくていいの！」

「も、もがもが」

花丸ちゃんが無かを言おうとしていたみたいだが、途中で善子ちゃんに口を押さえられていた。

よく分からないが、イケメンに勧められても買わない理由がちゃんとあるらしい。

うーん…

すごいね。

感心するよ。

「ハルさん、多分分かってないですよね…」

「何がだい？」

「Aoursに色仕掛けが効かない理由です」

「君らの育ちが良いからだろう」

「…はあ…」

「あれ？なんでため息？」

そんな会話をしていたら、善子ちゃんがこちらに戻ってきた。

「とうか、ハルが節操なさすぎなのよ。あんな、美人なら誰でもいいわけ？」

「そういうわけではないよ。好印象を持ったきっかけは間違いなくそれだけど、たくさん買った理由はちゃんと他にあるんだよ」

「他の理由？」

「お姉さんが綺麗だったからたくさん買ったんじゃない？」

「言っただろう、あれよあれよと勧められたって。話し方がうまかったんだよ」

「なんか言われたわけ？」

「まあうん。ちよつとね」

「き、気になります！」

「ずら！」

「いや、別に大したことじゃないよ」

お姉さんがいろいろ説明してくれたが。

切り札となったのは一言のみである。

『これを食べれば、どんな人でも笑顔になりますよ』

『ほう。どんな人でもですか？』

『はい。それくらい美味しいんですから』
『なるほど』

「そんな話をしてね。あわよくば君らの笑顔でも拝見しようと思っていたんだよ」
仕方ないのでそれを話す。

恥ずかしいので言うつもりはなかったのだが。

「…そう／＼／＼」

「…ずら／＼／＼」

「…うゆ／＼／＼」

下を向いてしまった。

いや、何か言ってくれよ。

余計恥ずかしいじゃないか。

それから数分。

4人で下を向いたまま黙々とお菓子を食べて続けたのだった。

普通の1日と布屋さん2

「衣装サイズの寸法？」

「そうよ。ここで測らせてちょうだい」

夕方。

閉店して間もないこの時間。

いつものようにお店にはA q o u r sの子達がやって来ていた。

本日のお客さんは1年生組である。

「そりやあもちろん構わないけど…部屋にメジャーはなかったかな？」

「ついこの前壊れちゃったんです」

「壊れたって…そんなに使い込んでいたのかい」

「いや…千歌ちゃんも善子ちゃんが遊んでたら壊れたすら」

「…メジャーでどうやって遊んだんだい君達は」

「そ、そんなのどうでもいいでしょ！ほら！メジャー貸してよ！」

「壊さないでくれよ」

「わかつてるわよ!」

そう言つて筆笥からメジャーを取り出す善子ちゃん。

「善子ちゃんメジャーの場所、よく知ってるね」

「手馴れてるぞら」

「ぐ、偶然よ!」

「いやいや。昔からここでよく裁縫をしているからだろう」

「ちよ、ちよつと!」

中二グツズの裁縫をよくここで行つていた善子ちゃん。

その時から道具の場所は変わつていないので、自然に手が伸びたのだろう。

「善子ちゃん、ここでああいう衣装作つてたんだね」

「道具が揃つてるからよ!ほ、他に理由はないわ!」

「本当にそれだけぞら?ハルさんの近くで作業したかつたとか…むぐ」

「ず、ら、ま、るう〜」

「む、むぐむぐ」

花丸ちゃんが何かを言おうとして善子ちゃんに口を押さえられる。

つい最近見た覚えのある光景だ。

「ほらほら、採寸するんだらう」

「そ、そうね！ほら、ルビイもずら丸も、さっさと済ませるわよ！」
「も、もがもが」

「よ、善子ちゃん、手は離してあげて…」

まだ口を押さえていたのか。

いい加減顔色が悪くなり始めている花丸ちゃんを解放し、3人は奥の部屋に向かっていった。

もちろん目的は衣装のための採寸である。

最初は俺も手伝おうかと思ったが、よくよく考えるとセクハラ扱いされそうなのでやめておいた。

しかし、サイズというのはそんなに簡単に変わっていくものなんだろうか。

少なくとも彼女たちは、夏祭りのための衣装作りで一回寸法は取っているはずだ。

それからまだ1ヶ月足らずなんだが…

成長期だからかなあ。

そんなくだらないことを考えつつ、読書に励もうかと思つた時である。

「ちよつ、ずら丸、あんたまた大きくなったの…？」

「う、うらやましい…」

「んん？特に変わってないはずらよ？」

「いや、数字がちゃんと物語ってるのよ」

そんな会話が聞こえてきた。

…まあその、身長の話だよな。

まさか俺に聞こえるような声で、胸の話とかをしているわけではあるまい。

「ウエストは全然変わってないのにバストだけ…つく！どんな生活してたのよっ」

「どんなって…普通に生活してただけずら」

「花丸ちゃん、あんなに食べてるのに…」

「全部胸に行ってるってこと…？ぐぬぬううう」

「ま、まる、なんか悪いことしたずら？」

…さて。

どうしたものか。

いや、聞こえてきて嫌なことではない。

なんとなく心踊る会話ではある。

しかし…。

盗み聞きしているみたいで、ちよつと気が引けてしまうのも事実である。とりあえず、聞かなかつたこととして読書に集中するとしよう。

幸い、読んでいるのは物語だ。

熱中して読めば、外の音など耳には…。

「あんたこれ、ちよつとは分けなさいよ！」

「ちよ、よ、善子ちゃん、やめるずらー。あ、あははは。くすぐったいずらー」

「よ、善子ちゃん、あんまりあばれちゃだめだよ」

…だめだ。

まったく集中できない。

「はあ…」

ため息を一つつき、椅子から腰をあげる。

仕方ないから注意することにしたのだ。

声が大きいとだけ言えば、その意図は彼女たちに伝わるだろう。

そう考え、襖の前に立つ。

ノックはできないので、外から掛け声で存在を知らせる。

「おーい、3人とも。さすがに声が大きいから、ちよつとポリユームを下げてくださいかな」

「あ、は、ハルさん？わ、わかりましたー。ほら、二人とも、ハルさんもそう言ってるから…」

「は、ハルさんずら!?!って、わ、わあああー!」

「ちよ、ずら丸、あんたどこ掴んで…ってひやあああああ!」

「わああ!善子ちゃん、ルビイを掴んじゃ…ぴぎやあああ!」

「え、君たち中で何を…」

そこまで言った時だった。

俺の声に驚いたのだろう。

中途半端に衣装を着ていた花丸ちゃんが転倒。

それに巻き込まれて善子ちゃんも転倒。

さらにそこでとつさに掴まれたルビイちゃんも転倒。

三人が一気に倒れこんだ衝撃で、俺と彼女たちを隔っていた襖が外れこちらに倒れてきた。

一瞬、下着姿の花丸ちゃんが見えた気がしたが、残念ながらその時の記憶はあまり鮮

明ではない。

なぜなら。

倒れてきた襖の骨組みが俺の頭を直撃。

俺の意識はそこで闇に落ちたからである。

翌日。

善子ちゃんから

「ずら丸の下着、見てないわよね？」

そんなことを聞かれた。

もちろん。

「三途の川しか見てないよ」

そうやって返すのだった。

俺のそんな一言に、1年生3人がバツの悪そうな顔をしたことは、言うまでもない。

※

『コンコンコン』

「どうぞ」

3回ノックをし、中の返事があつてから扉を開ける。

「こんにちは、ダイヤちゃん」

「ええ。こんにちは、ハルさん」

やつてきたのは、浦の星女学院生徒会室。

頼まれていた物品の配達である。

台車に3つの段ボールを積み、ここまで運んできたのだ。

「暑い中でご苦労様ですわ」

「仕事だからね。とりあえず確認をお願いするよ」

「ええ」

そんな話をしていた時だ。

『バツターン』

そんな音とともに、ノックもなく生徒会室の扉が開けられた。

「シャイニー！ダイヤー！つて、あれ？ハル？」

「こんにちは、マリーちゃん」

「こら鞠莉、ちゃんとノックしないとまた怒られるよ…つて、ハルじゃん」

「果南ちゃんもこんにちは」

やってきたのはマリーちゃんと果南ちゃん。

「ハル、何か用でもあるの?」

「うん。物品の配達だよ。君たちこそ、ダイヤちゃんに何か用だったかな?」

大事な用事だったりするなら、早々にここを立ち去らないといけないが…

「ノー。教室じゃ暑いから涼みに来たんだです」

「あはは。まあそういうことだよ」

立ち去る必要はなさそうだ。

「まったく…ここは生徒会室であって遊び場ではないのです。涼みたいなら図書館でも

どこでもあるでしょう」

「図書館じゃトークができないでしょー」

「ここもそういう場所ではありませんわ!」

「そんな堅いこと言わずにー。ほら、ダイヤだつて私たちが来て嬉しいんでしょー」

「なあつ。そ、そんなことありませんわ!」

「あはは。ダイヤは分かりやすいなー」

「ぐぬぬ…」

ダイヤちゃんが唸っている。

まあ、この二人を相手に口先勝負は分が悪いだろう。

マリリーちゃんも果南ちゃんも、ダイヤちゃんの扱いは大層心得ているわけだし。

「まあまあ、ダイヤちゃん。せっかくだし仕事の手伝いでもしてもらおうじゃないか」

「ハルさんまで…はあ。分かりましたわ。他の生徒に示しがつきませんから、あまり騒がないようにしてくださいね」

「シャーイニー！」

言いながら備品の箱を元氣よく開けるマリリーちゃん。

ダイヤちゃんの話は聞いていなかったらしい。

「さ、わ、が、な、い、で、く、だ、さ、い、ね」

「ジヨークジヨーク」

鬼の形相のダイヤちゃん。

これはマリリーちゃんが悪い。

その後、物品確認を4人で行い、俺の本日の仕事は終了した。

ダイヤちゃんがお茶を出してくれたので、今は生徒会室でお茶を飲んでゆっくりしている時間である。

「んー。お茶美味しいです」

「そうだね。喉も渴いていたから尚更だね」

「いくらエアコン効いてても、さすがに作業すると少し汗かくもんねー」

「この部屋はエアコンは弱めにしてありますからね。少しだけ強くいたしましょうか」
そう言つてエアコンのコントロールドールパネルに向かうダイヤちゃん。

なんとなくその後ろ姿を眺めていたら、マリーちゃんに小声で話しかけられた。

「ハル」

「なんだい、マリーちゃん」

「ダイヤ、シャツ透けてる」

「……………急にどうしたんだい」

「いや、なんとなく」

「なんとなくで男に振る会話じゃないね、それ」

「この時期は気をつけないとねー。まあ下着じゃないからいいんだけどね」

「俺の話を聞いてくれよ」

「鞠莉とハル、何ココソコソ話してるの？」

「どうせ大したことじゃないんでしょ」

ダイヤちゃんが戻ってきた。

「否定できないね」

「大事なことなのにー」

内容については俺の口からは話せないので、適当に流すことにする。

「あ、ダイヤ、お茶の二杯目もらっていい?」

「ええ、ちよつと待っていてください」

「ああいいよ。それくらい自分でやるから」

そう言つて席を立つ果南ちゃん。

その後ろ姿を見ていたら、またしてもマリーちゃんに声をかけられた。

「ハル」

「今度はなんだい」

「果南、下着透けてる」

「……………」

いやいや。

「て、Tシャツの間違いやないかな?」

「いやいや、あれブラ線だよ」

「ほら、キャミソールというやつじゃないかな?よく知らないけど、女性は制服の下にそういうのを着るんだろう?」

「ハルさんと鞠莉さん、何をこそこそ話していますの?」

「またくだらない話?」

果南ちゃんが戻ってきた。

「もう。くだらなくなんかないよー」

「いや、俺もくだらないと思うよ」

ここで深く話を掘り下げると、最悪俺の命にかかわるので適当に流しておく。

ブラ透けとかそういうのはね、ばれないように楽しむものなんだよ。

仮に見つけても、それは口にせず心の中で小さくガッツポーズするのが、紳士の嗜みなのだ。

「ハル、なんでドヤ顔してるの？」

「自分の紳士っぷりに感心しているのさ」

「あつはつは。馬鹿みたいだよー」

「やかましいよ」

そんなやりとりをマリーちゃんとしていた時だった。

「ああ、そういうえば果南さん」

「ん？」

ダイヤちゃんがそんな一言を発する。

「・今日は泳ぐ用事でもあるんですの？」

「そうそう。曜に頼まれて水泳部の練習手伝うんだよ」

「水泳部の練習？手伝うことなんてあるのかい？」

「張り合う相手がいる方がいいタイム出るんだってさ」

「なるほど」

曜ちゃんらしいね。

にしても。

「ダイヤ、よく果南が水泳の用事あるってわかったね」

「当たり前ではありませんか。水着、ずっと透けてますわよ」

「え？あ、ほんとだー。校則違反だっけ？」

「まったく…あまり感心できた行いではありませんわよ」

「あっはっは。次は気をつけるよ」

なるほど。

透けていたのは下着ではなく水着だったのか。

残念だったような、安心したような。

少し複雑な気分になった。

ちなみにマリーちゃんは

「下着をチラ見せして誘惑する作戦じゃなかったのねー」

と呟いていた。

誰を誘惑したいかは知らないけどね。
心臓に悪いからやめていただきたいものである。

普通の1日と布屋さん3

「属性？」

「うん。属性だって」

「…もう少し分かりやすく話してくれるかな」

「ハルはどんな属性の女の子が好きなのかなーって話になったのよ」

「どんなって…女子高生？」

「いや、そういうことじゃなくてね」

「ほら、ツンデレ？とかそういうの。私もよく知らないんだけどね」

「ああ、なるほど」

本日店にやってきたのは、善子ちゃん、梨子ちゃん、果南ちゃんの3人だ。

組み合わせとしては珍しい。

なんでも、じゃんけんが決まったらしい。

話題を持ってきたのは善子ちゃん。

梨子ちゃんが言ってくれたように、話題は女の子の属性について。

ツンデレとかヤンデレとかそういう言った類のものようだ。

…女子高生と話す内容ではない気がする。

「ハル、普段から女の子好きって言ってるじゃん？」

「そうだね」

「バカの一つ覚えみたいに言ってるわね」

「否定はできないね」

「見境ないわよね」

「そこまで言う？」

なんか悲しくなるから話を進めてほしい。

「まあそれでね、鞠莉が、女の子のどの属性がハルは好きなんだろうって言い始めてね」

「なんでそう繋がるのかはいまいち分からないんだけど」

「アイドルの雑誌に書いてあったのよ。ほら、これ」

そう言つて梨子ちゃんがスクールアイドルの雑誌を見せてくれた。

そこには、カジジュアルなスタイルの服に身を包んだ女の子が映っていた。

おそらく、これも女子高生なんだろう。

容姿も、まだ大人というにはいささか幼さが見える姿をしている。

表情や服装から、幼さを残しつつ背伸びをした大人っぽさというのを表現しているよ

うに取れるその写真。

見出しには、『クーデレ女子の魅力!』と大きく書かれている。

この写真から『クール』を連想するのは分かるが、『クーデレ』を連想させるのは無理があると思うんだけど。

まあ、突っ込んででも仕方ないか。

「なるほど。これを見て、そんな話題を思いついたわけだね」

「そうよ。まあ、A q o u r sにはあんまりそういう属性に当てはまるような子はいないんだけどね」

「ねえ、そういう属性? っていうのはそもそもどういうのがあるの?」

「私も知らないんだよね。ハルはよく知ってそうだし、まずそこから教えてよ」

そうやってきたのは梨子ちゃんと果南ちゃん。

確かに、この二人はそういうのはあまり詳しくなさそうだ。

「もちろん説明するのはいいけど…部室で話題にしてたんじゃないのかい?」

「知ってる人は盛り上がりすぎてたけど、私みたいに知らない人はついていけてなかったよ」

「ついていけなかったのに、よく俺の好きな属性を聞く気になったね」

「みんなに聞いて来るように言われちゃったからね」

「そういうことよ」

果南ちゃんと梨子ちゃんは苦笑い。

善子ちゃんは呆れ気味である。

「まあじゃあ、まずはその属性とやらについて話すでしょうじゃないか」

どこから話すべきか。

そうだな…まずは、『デレ』というものについて説明しよう。

「ツンデレ、クーデレ、ヤンデレ、他にもマイナーなものだとクズデレだったり鬱デレだったりと実は結構な種類があるんだ」

「私も聞いたことがないがあるわね」

「一般にあまり定着していないものもあるからね。それはともかく、いずれも『デレ』という言葉がついてるんだ」

「そうだね」

「これは、いわゆる好きな人に対してデレデレしている状態を指すんだよ」

「デレデレ？」

「梨子、あんたがハルに向ける態度のことよ」

「よ、よっちゃん！／＼／＼」

「ヨハネよ」

梨子ちゃんが善子ちゃんに何か言っているが、とりあえずスルー。

話を続ける。

「この『デレ』という言葉の前に何かつけることで、そのデレ方の属性が決まるんだ」
「デレ方の属性？」

「そう。例えばこの、『クーデレ』というのは、『デレ』の前に『クール』という言葉がついてるんだよ」

「なるほど…」

「意味としては人によって若干捉え方が異なるが…一般的には、『普段クールな子が、ある特定の人の前でだけ見せるデレ姿』を指しているものとされるね」

「もしくは、クールにデレるって意味で使う人もいるかもね」

「む、難しいね」

「想像がしにくい・わね」

真剣な表情を見せてくれる果南ちゃんと梨子ちゃん。

そこまで難しく考えることでもないんだけどね。

「…ハルが普段の状態で、ちよつとだけ顔を赤らめて『君のことが心配でたまらないんだ』って言うてるのが、私の言うクーデレよ」

「…な、なるほど／／／」

「…クーデレ、いいかも／／／」

「いやいやいやいや」

なにそのおぞましい例え。

想像するだけで気分が悪くなりそうだよ。

「A q o u r s のメンバーでこれに当てはまりそうなのは…梨子ちゃんとダイヤちゃん

…かなあ」

「私？」

そもそも二人のデレ姿自体が見覚えのないわけだが。

あくまでイメージである。

梨子ちゃん、大人っぽいしクーデレに入る気がする。

「…梨子、普段は確かにそれなりに大人っぽいけど、ハルが絡むとポンコツになるし、

クーデレではないと思うの」

「ちよ、よ、よっちゃん！」

「ヨハネよ」

「ダイヤも、クールって言われると違和感ある気がするなあ」

「ふむ…：そうかい」

どうやら彼女達から見ると、梨子ちゃんもダイヤちゃんもクーデレにはあまり当てはまらないようだ。

「ほ、ほら、他の種類もあるんでしょ？それについて教えてよっ」

「ん？ああ、そうだね」

梨子ちゃんに急かさされたので、他の『デレ』についてもお話しすることにする。

「とりあえずは有名なのは『ツンデレ』というやつだね」

「あ、ツンデレは知ってるよ。よっちゃんのことでしょ？」

「違うわよ！」

「そう、善子ちゃんみたいなのタイプのことだね」

「違うって言うてるでしょ!!」

机をバンバンして訴える善子ちゃん。

「ツンデレという言葉自体は、最近は男女間だけでなく友情的な意味でも用いられることが多くなってきたね」

「普段ツンツンしてて、時と場合によってはデレるって意味であってるの？」

「そうだね。最近はそういう意味合いで使われるのが一般的だろう」

「最近？」

「そう。昔は少しだけ違う意味で使われてたんだよ」

「そうなの？」

「昔は、出会った頃はツンツンしていて、時間が経つにつれてデレていくことをツンデレと言っていたんだよ」

「へえー。そうだったんだ」

「とはいえ、最近のような使われ方についても特に違和感を感じないんだけどね。でもそう考えると、ダイヤはこのツンデレになるような…」

「ああ、確かにそうとも言えるね」

「ダイヤさん、普段は割とツンツンしてるもんね」

「デレるシーンなんて、私ほとんど見たことないんだけど」

「3年生のみんなには結構デレてる気がするがね」

「いや、ハルにもデレてるんだけど」

「この唐変木が気づくわけないでしょ」

善子ちゃんが呆れる。

理由が読み取れないが、もしかして馬鹿にされているのかな？

「さつき言ってたやんでれ？って言うのはなんなの？」

『『ヤンデレ』だね。一時アニメ業界では流行った属性だよ』

「病んでいる状態でデレるのがヤンデレよ」

「病んでいるって…病気？」

「よっちゃんみたいな人？」

「梨子、さつきから喧嘩売ってんの？」

「そう、善子ちゃんみたいな人のことさ」

「あんたは喧嘩売ってるわよね！」

「中二病も立派なびよう…ぐえ」

「ヤンデレとは関係ないでしょうが！」

「ハル、大丈夫？」

善子ちゃんからパンチをいただいた。

さすが墮天使。

重たい一撃である。

「ま、まあ冗談は置いておくとして、ヤンデレで言う所の『病み』というのはね、ある人のことが好きすぎてどうにかなっちゃった状態のことを指しているんだよ」

「好きすぎて…?」

「ほら、ストーカーとかそういうのよ」

「ああ…なるほど?」

「他にも、強すぎる独占欲だったりとかかな」

「独占?」

「束縛つてやつよ。手錠とかつけて、家から出れないようにしたりとかね」

「うええ?」

「て、手錠？」

「さすがに極端な例だとは思うけどね」

「そういう属性が好きな人っているの？」

「需要自体はあるといえばあるわね」

「大人気だった時代もあったわけだしねえ」

「へえ〜…」

素直に驚いているようだ。

そんなに真面目に聞く必要もないと思うんだがね。

結局、話をしていたらそれなりに時間が経ってしまっていた。

話す自分もどうかとは思うが、ちゃんと聞こうとする梨子ちゃんと果南ちゃんも、よくまあ付き合えるものだと思う。

彼女達をバス停まで送る。

と言つても、大した距離ではないが。

「じゃあ、気をつけて帰るんだよ」

「ええ、わざわざお見送りありがとうね」

「君たちに何かあったらこまるからね」

「何かあっても、ハルよりは私たちのの方が大丈夫だと思うよ」

笑いながら果南ちゃんにそんなことを言われる。

否定はできない。

「あ、ねえハル」

「ん？どうしたんだい？」

不意に、善子ちゃんが何か思い出したように声を出した。

「最初にも聞いてたけど、結局ハルが好きな属性ってなんだったのよ」

「……あ」

「ああ、それなら……」

そこまで言ったところでバスが来た。

話している時間はなさそうだ。

「……まあ、続きはまた今度だね」

「仕方ないねえ」

「ちゃんと話してよね」

「絶対よ！」

「はいよ。それじゃあね」

手を振ってバスの発車を見送る。

やがてバスが見えなくなった頃に、俺はポツリと眩くのだった。

「…デレに属性とかなくても、俺に分かるようにデレてくれればいいんだよね」

自覚はないが、鈍感だとか朴念仁だとかボロクソに言われているのだ。

仮に俺にデレてくれる子がいるなら、俺に分かるようにしてくれればそれでいい。

「もつとも、そんな相手に会えるかすら怪しいかなあ」

意味のない独り言。

自虐的に発したその言葉に、なんとも言えない虚しさを感じるのだった。

※

「…って、絶対あの馬鹿は考えてるわよ」

「ば、馬鹿って」

「でも、確かに考えてそう」

「正面からデレたって、あいつはぜええつたいに気づかないわ」

「あ、うん、それは…否定できない」

「というか、Aqoursのメンバーは割と積極的だと思うんだけどねえ」

「あれで気付けないのに、正面からデレたって気づくわけないでしょ」

「ハルさんの事だから、『こんなに慕われるなんて、嬉しいね』とか言いそうね」

「あはは。言いそう言いそう」

「笑い事じゃないでしょ、まったく…どうにかなんないかしら」

「よっちゃん、そんなに気づいて欲しいんだね」

「ハルのこと大好きだもんねー」

「なあっ！ち、ちがうわよ！ず、ずら丸とルビイが気づいてもらえないって言ってたから

…」

「そうだねー」

「そうよねー」

「ぐぬぬぬ…そんな…そんな優しい目で、墮天使を見るんじやなああああいい！」

普通の1日と布屋さん4

「チャオー、ハル」

「こ、こんにちは」

「ハルくん、ヨーソロー！」

「いらつしやい3人とも」

本日うちにやってきたのはマリーちゃん、曜ちゃん、ルビイちゃんの3人。

珍しく正式なお客様としてやってきたのだ。

「頼んであったの、できてる？」

「できてるよ。あと、依頼されてた修繕もね。確認をお願いするよ」

「はい。ありがとねー」

頼まれていたのは、商品の発注と衣装の修繕依頼。

すでにどちらも完了しており、受け渡しのために彼女たちに来てもらったわけである。

「…うん、大丈夫そうだね」

「イツツ、パーフェクト！」

「ハルさん、ありがとうございます」

「いえいえ。こちらこそご利用どうもありがとうございます。また頼むよ」

そんな会話をしていると、ふと彼女たちの荷物に目が行く。

さつきまでは気づかなかつたが、大きめのビニール袋を持ってきていたようだ。

「それ、なんだい?」

「ああ、これ?」

「食材ですよ」

「食材? 何かに使うのかな?」

「せっかくハルのところ来るんだし、ディナーを一緒にしようと思ったんでーす」

「ほう。晩御飯を」

「だ、だめですか…?」

ルビイちゃんに上目遣いで聞かれた。

不安そうな表情が見て取れる。

「いや、もちろん構わないんだけどね。君たちのおうちは大丈夫なのかい?」

「イエース! うちには許可取ってありまーす!」

「うちもだよー! ちゃんと晩御飯のお手伝いするようにしてねー」

「わ、私も話してありますよ。迷惑はかけないようにしてお姉ちゃんに言われてます」

「そうかいそうかい。じゃあ特に異論はないよ」

美少女3人と晩御飯。

素晴らしい晩餐会だね。

そんなわけで、早速晩御飯の用意に取り掛かる。

食材から判断されるメニューは…

「シチュー…かな？」

「当たり前だよ！さっすがハルくん！」

「いや、ここにルーがあるからね。これ見て他の選択肢あげる人はいないでしょ」

「それもそうだね」

「じゃあ玉ねぎはこっちで切るから…曜ちゃんはジャガイモを頼むよ」

「ヨーロッパ！あ、必要な調理器具一通り出してくね」

「ん、頼むよ」

話をしながら、テキパキと調理を進めていく俺と曜ちゃん。

二人でキッチンに立つことは珍しくないのです、お互いに無駄なく動けるのだ。

「曜、なんか慣れてるわね…」

「ハルさんと息が合ってる感じで…ちよつと羨ましいです」

後ろから声が聞こえる気がするが、なんて言ってるかまでは聞き取れない。

仕事がなくて退屈してるんだらうか。

「マリーちゃんやんは肉の準備を頼むよ。ルビイちゃんはお願いできるかな？」

「オツケー！任せて！」

「が、頑張ります！」

そう言つて気合満々で調理に取り掛かつてくれた。

ふむ。

やっぱり退屈してたのかな。

4人で役割分担をしつつ調理をしていく。

みんなが食材を切り終え、あとは火にかけるだけという段階になった。

なったのだが…

「…このにんじん、やたら小さくない？」

「も、もしかして切り過ぎちゃいました？普段食べてる時のサイズにしたんですけど…」

「私が食べてる時もこれくらいの大きさだよー？」

「確かに、食べる時はこれくらいのサイズになればいいんだけどね」

「火にかけてる時ににんじんはどんどん溶けちゃうんだよねー。だから、最初はちよつ

と大き目にしておくんだよ」

「そ、そうだったんですか!？」

この世の終わりのように顔を青ざめるルビイちゃん。

「まあ、たまには小さいにんじんといいのもありじゃないかな」

「そうだねー」

「私も気にしないでですよー」

「ということだから、そんなに絶望的な顔しなくて大丈夫だよ、ルビイちゃん」

「うゆ…ごめんさい」

「あはは。まあカレーとかシチュー作る時にみんな通る道だよねー。私も昔やったもん」

「そうだね。君と千歌ちゃんは野菜をことごとくみじん切りにしてくれたからね」

みじん切りにされた野菜を使ってカレーを作った結果、残ったのはほぼ肉のみだった。

ああいうのを英国式カレーというんだろうか。

「で、鞠莉ちゃんの用意してくれたお肉がこれ…」

「鶏肉っていうのは文句ないんだけどね。…でかくね？」

「食べ応え重視でーす」

「いや、食べ応えありすぎでしょ」

マリーちゃんが用意してくれたのは鶏肉。

問題はそのサイズ。

ケンタツキーのフライドチキンみたいなサイズの肉がボウルいっぱい用意されている。

「これ、一口じゃ食べにくいよねー」

「わ、私には無理そうです…」

「俺にも無理だよ。これだけ大きいとシチューのルウが絡みにくいと思うんだけど」

「そうなの？うーん…じゃあ仕方ないからもう半分くらいのサイズにしましょー」

「4分の1にしてくれ」

「オーケー！」

そんな経緯を経て、ようやくシチューが完成する。

ご飯、シチューに加えて適当にサラダを用意し、晩御飯の準備は完了だ。

「さて…それでは」

「いただきます」

「いただきます」

味は…うん、美味しい。

ルウは市販だし、特別なアレンジも加えてはいないが、美味しいものは美味しいのだ。みんなを見ても、美味しそうに食べているし不満はなさそうだ。

みんなが一通り食事を終え、ちよつとした雑談の時間になった。各々の近況やA q o u r sの状況などを聞く。

この暑い中でもみんな頑張ってるみたいだ。

関心関心。

そんな時だ。

「あ、そういえば今日ね、血液型の話になったんだよ」

曜ちゃんがそんな言葉を発した。

「血液型？」

「そうそう。みんなの血液型と、性格とかそんな感じ」

「あー、なるほど」

ネタとしては定番ではある。

しかしながら。

「血液型と性格は、一切関係がないってお医者さんが言ってたよ」

「そ、そうなんですか!?!」

ルビィちゃんが驚いている。

いや、そんなに驚くことかね。

そもそも、血液というのはその中にいくつもの分類を持っているのだ。

一般化しているA、B、O、ABの4つはそんな分類のうちの一種類。

これを一般化している大きな要因は、輸血の際にこの型で判断するたためらしい。

まあ要するに、何かあつた際に輸血可能かどうか判断するために普及している情報つてこと。

なので、これに性格が付随するつてことはあまり考えられないというわけだ。

「というわけだよ」

「へへ」

「そ、そうだったんですね」

「マリーちゃんには知ってたんじゃないのかな？」

「オフコース。もちろん知ってたよ」

「だろうね」

「でも、面白いからいいのでーす」

「まあ…そうだね」

「というわけでハルくん！」

「なんだい」

「私たちの血液型を当ててみて！」

「…そうきたか」

「ミスしたら、明日からハルのことを『鈍感』って呼ぶわ！」

「一年のうち360日くらい言われてる気がするんだけど」

まあいいか。

さつきも言ったように、血液型と性格は本来関係ない…しかし。

なんとなく予想したりするのは一興である。

食後の頭の運動としては悪くないだろう。

一般に、血液型で性格診断をする場合、大体特徴とされるものがある。

A型は几帳面。

B型は気分屋。

O型はおおらか。

AB型はマイペース。

さて。

彼女たちはどれに当てはまるか…。

「まずマリーちゃんだけど…AB型かな」

「おー。正解です。さつきがハル！」

マイペースって言う点で言えば、マリーちゃんはA B型以外には考えられないだろう。

「次に曜ちゃんは…」

「うんうん」

なぜかワクワクして待っている曜ちゃん。

これは…当ててもらおうことを期待しているのか？

結構難しいぞ…これは。

几帳面…はちよつと当てはまるな。

気分屋…これはなんとも言えないが、気分どころどころやることを変えたりはしないと思

思う。

おおらか…当てはまる気がするが、これは本人の純粋な優しきな気がする。

マイペース…当てはまる…のか？

A型かA B型…。

うん、まああとは勘でいいだろう。

「曜ちゃんはA B型かな」

「正解！ハルくんすごい！」

おお。

当たるとは思わなかった。

俺の勤も捨てたもんじゃないらしい。

「じゃあ最後にルビイちゃんだけど…」

「は、はい！」

ルビイちゃんはわりと予想しやすい。

定番通りの性格と血液型関係を信じるなら…

「ルビイちゃんはA型だと思う」

「あ、合ってます！すごいです！」

不器用ではあるが、几帳面という点ではやはりA型だろう。

と、ここまで性格から血液型を予想してきたわけだが…

「案外、性格で予想できるもんだね」

「ねー。でも、ハルくんもよくわかったね」

「私たちの性格、ちゃんと把握できてるんだねー」

「それなりに長い付き合いだからね」

「ちよ、ちよつと嬉しいです…えへへ」

「まあそういうわけだから、俺のあだ名を『鈍感』から直してくれ」

「考えときまーす」

そこで、ふと気になることが出てきた。

「そういえば、なんだって急に血液型の話になったんだい？」

なんとなくかもしれないが、理由でもあったのだろうか。

「ああ、それねー。いやー実はね」

「血液型の相性占いつてあるでしょ？あれをやってたんでーす」

「その、千歌先輩の持ってきた雑誌に載ってたんですよ」

「なるほど」

それでその話題になった…と。

「けど、性格と血液型に直接の関係がない以上、相性なんでもっと関係ないと思うんだけどね」

「そうは言っても、女の子は気になっちゃうんだよ」

「あはは…」

「気にしなくても、A q o u r s のみんなは仲良いじゃないか」

「いや、誰もA q o u r s のみんなとの相性は気にしてないよ。仲良いの分かってるし」

「お？じゃあ誰と誰の相性を気にするんだい」

何気なくした質問。

しかし。

「ええっ／＼／＼／＼、その、ルビイちゃんに聞いたら良いんじゃない？」

「ええ!?!／＼／＼だ、誰って…うう、言えないですう／＼／」

「？」

なぜか曜ちゃんとルビイちゃんが動揺している。

はて。

「…ハル、この流れで誰との相性を知りたいか分からないの？」

「そう言われてもね」

「…やっぱハルくんのあだ名は…」

「鈍感で決定ですね」

「あれ？」

次の日から1週間くらい。

事あるごとに鈍感呼ばわりされた俺。

なんでだ…。

謎は深まるばかりであった。

※

「そういえば、ハルの血液型は聞いたの？」

「「あ」」

「あつて：あんたら何しに昨日ハルのとこ行ったのよ」

「話してたら忘れちゃってたよー」

「まったく：せっかく相性占いのための本があるというのに」

「肝心の相手の血液型が分からないと、どうしようもないずら」

「というか、誰も知らないっていうのも驚きだよねー」

「ねー。誰か一人くらいは知ってると思ってたんだけど」

「案外、そういうのって聞く機会ないんだよね」

「あ、じゃあ逆に、ハルの血液型を予想してみようよ」

「ハルさんの：？」

「とりあえずA型ではなさそうね。几帳面な感じはないし」

「じゃあB型もなさそうだね。気分屋って感じじゃないから」

「じゃあO型：どんな特徴があるずら？」

「おおらか：みたいだけど、なんか違う」

「おおらかって言ったら、花丸ちゃんみたいなイメージです」

「残ったのはAB型？特徴は：」

「マイペース…ですわね」

「マイペースかと言われると…」

「ものすごい微妙ね…」

「つて、結局どれも当てはまらないじゃん！」

「そうだねえ」

「やっぱり性格と血液型って関係ないんだね」

「そうみたいネー」

「ですね」

夏の空の下。

悩む少女たち。

もちろんその問題に。

答えが出る事はなかったそうだ。

普通の1日と布屋さん5

「はい？トランプ？」

「その通りですわ」

「やろうよ、ハルくん！」

「急にどうしたんだい」

本日俺は、千歌ちゃんのおうちにいる。

仕事のお話で来ていたのだが、ちょうど帰り際に千歌ちゃん達と出くわし、こうして一緒にいるのだった。

一緒にいるのは千歌ちゃんに加え、ダイヤちゃんと花丸ちゃんだ。

これまた珍しいメンツだと感じる。

「今日ね、A q o u r s のみんなでトランプやったんだよ！」

「9人で？」

「ええ、9人で、ですわ」

「大富豪とかババ抜きとかだと…一人あたり6枚…少なすぎないかい？」

「2箱使ったすら」

「だったら2グループに分けてやればよかった気もするがね」

「そんなことはどうでもいいの！それより！」

「ハルさん！私達と勝負ですわ！」

「丸達の特訓に付き合って欲しいすら！」

「特訓？」

さすがに事情が読めないで、どんな経緯で今に至ったのかを聞くことにした。

曰く、みんなでトランプをやった後は各学年ごとで適当に遊んだそうだ。

そして、その時に各々引つかかることを言われたらしい。

3年生の大富豪の際、ダイヤちゃんはこんな会話をしたんだそうだ。

『ダイヤ、表情に出過ぎだよ。それじゃあここから勝負かけますって言ってるようなもんじゃん』

『あはは。ダイヤよわーい。これならよっほど負けないわねー』

『ぐぬぬぬぬ…』

2年生の7並べの際は千歌ちゃんが…。

『千歌ちゃん、スペードの10出したいでしょ』

『うええっ!?そ、そんなことないよっ』

『ふふふ。千歌ちゃん、ずっとそこ見てるからね。丸分かりよ』

『ええ〜…そ、そんなあ…』

1年生のババ抜きの際は花丸ちゃんが…。

『ずら丸、今ババ引いたでしょ』

『な、なんでわかつたずら!』

『花丸ちゃん、目に見えて残念そうにするからね』

『ルビイもある程度分かりやすいけど、あんたは分かりやすすぎよ』

『ず、ずらあ〜…』

「…要するに、3人とも弱すぎて相手にならないと」

「はつきり言われたずら!」

「それで、俺と勝負してちよつとは改善を図ろうってことかい?」

「それもありませんが…」

「ハルくん、私たちより弱いでしょ?」

「…俺をボコボコにして自信をつけようっていうのかな?」

「そういうこと!」

「おっと、そろそろ仕事の時間だ。じゃ、お疲れ様だよ」

そう言つて席を立とうとした。

が、両手をダイヤちゃんの花丸ちゃんに掴まれその行為は失敗に終わる。

「本日の営業は終了しているはずですわ」

「は、ハルさん、お願いずら…」

花丸ちゃんからはわりと素直な気持ちが見える。

おそらく、普通にいい勝負ができるようになりたいのだろう。

それはいい。

それはいいんだ。

問題は千歌ちゃんとダイヤちゃんだ。

表情から伺える様子。

『こいつなら嘘もつけないし勝てそう』

そんな考えが伝わってくる。

なめられている。確実に。

「…あのね、俺とトランプ勝負したところで、君らの弱点が改善されるってことはないと思ふよ」

「それでもいいの！とりあえず勝負しよう！」

そう言つて食いついてくる千歌ちゃん。

「俺ならサンドバッグにできると思っていないかい？」

「ギクッ」

分かりやすい。

「…はあ…。まあいいか。この後やることもないしね。でも、あんまりサンドバッグとしては期待しないでくれよ」

どうやらこの子たちは何か勘違いしている。

確かに、俺は嘘をつくのが非常に苦手だ。

だから、嘘をつかないといけない勝負はとてつもなく弱い。それは事実。

しかし。

しかし、だ。

そうでない勝負については、少し事情が違うんだよね。

※

「おかしい…おかしいですわー！」

「なんでー！なんで勝てないのー！」

「ハルさん…むちゃくちゃ強いすら」

「強いわけじゃないよ。運がいいんだ」

そういうことである。

トランプゲームになると、昔から妙に運がいいのだ。

とてつもなく良いというわけではない。

どちらか言うくと、『悪い手になりにくい』といった感じ。

大富豪ならジョーカーはないけど効果持ちカードや2，1といった強いカードを複数持ちやすい。

7並べなら7はないけど3以下、10以上もほぼない。

ババ抜きならスタート時点でカードが2，3枚になる。

こんな感じである。

ちなみに、ババ抜きはババを所持したら負けだ。

表情で確実にばれるからね。

「トランプゲームは、確かに嘘がつけないのが痛手だけだね。運があればある程度は勝てるんだよ」

「ぐぬぬぬぬ〜…」

まあそれを抜きにしても彼女達は弱すぎるが。

「ハルくんなら勝てるって思ったのに！…」

項垂れる千歌ちゃん。

すっかり自信を失いつつあるようだ。

俺が彼女達とトランプをやることに難色を示したのはこれが理由。

彼女達の自信を回復させてやるほど負けてあげられないのだ。

え？わざと手抜けばいいじゃんって？

それは無理。

嘘はばれちゃうから。

「だから言つてあつただろう。サンドバッグとしては期待できないよって」

「それにしても意外すぎますわ…。こうも勝てないなんて…」

「いや、君らが弱すぎるのも…いや、なんでもない」

ちなみに果南ちゃんやマリーちゃんとはトランプをやったことがある。

その時の勝率は5割程度。

つまりは、運がよくても本来はそこまでぶつちぎって強くはないってことだ。

「ううー…どうしたら勝てるようになるかなあ」

「何か…何か手を…」

「たかだかトランプでそこまでこだわる必要はないと思うがね」

「でも、一回くらいルビィちゃんと善子ちゃんに勝ちたいぞら！」

「そんなもんかねえ」

あくまで勝利にこだわっているらしい。

まあ俺に勝ったところで、A q o u r sの子達に勝てるというわけではないだろうが
…。

そこまで言うなら俺にくらいは勝っていただきたいところだ。

しかしどうしたものか。

いつそ俺が不利なゲームにするというのはどうか。

例えば…

「ダウトでもやるかい?」

「それは却下ですわ」

「というか、実はもう私たち3人でやったんだよねー」

「そうだったのか。どうだった?」

「お互いにバレバレすぎて決着がつかなかったぞら」

「そこにハルさんまで入ってきたら、本当に永遠にやり続けることになりますわ」

「…なるほど」

嘘をつき合うゲームで、嘘のつけない4人で勝負…

確かにエンドレスになりそうだ。

そうになると、いよいよ手が思いつかないな。

いつそ、彼女達が劇的に強くなるような魔法でもないものか……
そんなしようなないことを考えてた時だった。

「千歌ー、お菓子持ってきたから扉開けてー」

「あ、はい」

扉の向こうから声が聞こえてきた。

扉を開けると、そこにいたのは千歌ちゃんのお姉さんである美渡さん。

両手でお盆を持ち、その上にはお菓子が乗っている。

「はい、これ、みんなで分けて食べてねー」

「ありがとうございます」

「ありがとうございますすら」

「どうもです美渡さん」

「ほいほーい……ん？トランプ?」

机の上に置いてあるトランプを見て、美渡さんが言う。

「みんなでトランプやってたんだよー。でも、全然勝てないの……」

「あはは。千歌弱いもんねー。逆にハルくんは意外に強いでしょ?」

「ええ……本当に意外でしたわ……」

「まったく勝てないぞら」

「まったく勝てないくらい強かったっけ？」

「俺はそんな自覚ありませんがね」

「ていうか、なんでまたトランプなんてやってるのさ」

「ああ、それなんですけどね…」

美渡さんに事情を話す。

ここにいる3人は、各学年で一番弱いこと。

俺になら勝てるかもしれない、勝てば自信になるかもしれないと勝負を挑んできたこと。

そして、予想外の結果に打ちひしがれていること。

「なるほどねー。ん…ハルくん、ハルくん」

「どうしたんですか美渡さん」

「ちよつと廊下でお話しよう」

「はい？…いやまあ構いませんけど」

「ん。じゃあちよつとハルくん借りるねー」

そう言つて廊下に出る美渡さん。

当然、俺はそれについていく。

「さてハルくん。君は彼女達にどうしてほしい？」

「どうって…あれだけへこんでいるのを見るのは、正直忍びないので勝たせてあげたいですね」

「だろうねー。でも、手を抜くのは無理と」

「バレバレになりますし」

「不便だねえ」

笑いながら言われる。

「そんなことを言うために呼んだんですか？」

「いやいや。ハルくんが上手に負ける方法を教えてあげようと思ってね」

「ほう。そんな妙案が」

「ハルくんが手を抜けないなら、千歌たちに強くなってもらおう」

人差し指をたててそんなことを言う美渡さん。

「いやいや。」

「そんなすぐに上手くなれば苦労しないですって」

「大丈夫大丈夫。私には必殺技があるんだよ」

「必殺技って…」

「まあまあ、見てなさいよ」

言つて、部屋に戻つていく美渡さん。
何をするつもりなんだろうか。

「ねえねえ3人とも」

「ん？お姉ちゃんどうしたの？」

「何かありまして？」

「いやいや、大したことじゃないんだけどね。さつきハルくと話しててさー」

「うん」

そこで一拍空け、美渡さんは続けた。

「今からやる大富豪、7並べ、ババ抜きでハルくんより上の順位だった子は、ハルくんが
買い物デートをしてくれるって」

『ガタガタガタ！』

「え？」

なんだそれ。

いや、別にデートどうこうじゃなくて。

彼女達のトランプ上達はどこに行つたんだ。

そんなことを考えていたが。

「か、勝てば……」

「ハルさんと…」

「…デートっ！」

なんか知らないが、彼女達から闘志が燃えているのを感じられる。

え？

デートしたいの？

…あ、買い物の方が。

でも俺金欠だから、あまり高い買い物はできないよ？

お金は出さなくてもいいって言われそうだけど、さすがにそれは年上の男性としてのプライドがあるしね。

まあそれ以前に、彼女達に負けなければいいか。

悪いが、俺の財布事情を考えても出費は抑えたいんだ。

勝たせてはやれないよ。

「よし、じゃあ勝負といこうか」

『3種のゲームをやり、それぞれで1位だった子と買い物デートをする』

そんな約束のもと、俺たちはトランプを再開した。

結果。

「あがりですわ！」

「え？」

「はい！9出して終わり！」

「お？」

「スタート時点でカード1枚！ハルさんが引いて終わりずらー！」

「ちよっ」

完敗。

こちらの抵抗する間も一切ないままに勝負を持つて行かれた。

さっきまで全くできていなかったはずの、戦局を読むという行為がなぜかマスターされておき、こちらの手をことごとく潰され。

常に真剣そのものの表情をすることで、表情から読まれるという弱点を無くし。

俺の唯一の強みであった運が、なぜか全く機能しなくなった。

勝負中、花丸ちゃんが念仏みたいなのを唱えていた気がするが、それは関係ないと思いたい。

あれで運を吸われていた気がしたが、あくまで気のせいということにしておこう。

まあ何はともあれ、俺は3人に完全敗北を喫したのだった。

「ハルくん！私たちの勝ちだよね！」

「そうだね」

「約束、覚えていますわよね！」

「もちろんだよ」

「ハルさんとお買い物ずらー！」

「…お手柔らかに頼むよ」

なんかもうトランプ勝負のことがないがしろになっている気もするが。

…まあ、彼女達は笑っているし、これはこれでいいか。

俺が負けるっていう本来の目的も果たせているしね。

というか、美渡さんはこの結果を予想していたのか。

…すごいな。

お金は…うん。

ご飯、抜けるところを抜こう。

その後1週間。

毎日朝食のみで生活したことは秘密である。

普通の1日と布屋さん6

『ぐう〜』

とある昼下がり。

いつもなら、お昼ご飯を食べるこの時間。

俺の胃袋は、いつも通りにご飯が供給されないことにお怒りらしく、音を出して食事の摂取を要求してきていた。

その音は近くにいた曜ちゃん達にも聞こえたらしい。

「ハル、お腹減ってるの?」

「ちよつとね」

「でもすごい音なつてたよ?」

「お腹の減り具合に関わらず、13時になるとなるんだよ」

「いや、目覚ましじゃないんだから」

「へー。便利だね。まさに体内時計ってやつ?」

「曜も信じないだよ」

俺が会話をしているのは曜ちゃんと善子ちゃん。

珍しい組み合わせに見えるが、帰るバスが同じということもあり案外よく一緒になるらしい。

曜ちゃんはともかく、善子ちゃんはお世辞にも交友関係が広いとは言い難い。

こうして歳上と仲良くなっているというのは、こちらとしても嬉しいものである。

「…ハル、なんか失礼なこと考えてない?」

「考えてないよ。善子ちゃんは友達が多くて羨ましいなって思ってたんだ」

「やっぱバカにしてるでしょ」

「そんなまさか」

「ハルくん、羨ましがるほど友達いなかったっけ?」

「そうでもないつもりだけど、たくさんって・ほどでもないとは思うよ」

「そっかー」

「ちなみに恋人は?」

「友達を作るので精一杯でね」

「あつそ」

「聞いたってそれはひどいじゃないか」

『ぐうぐう』

話している最中、またしてもお腹がなった。

消化するものなどないはずなのに、今日はずいぶん元気なことだ。

「13時になるんじゃないやなかったの？」

「10分ごとになるんだよ」

「うるさいからそのアラーム止めてくれる？」

「残念だけど食事を取らないと止められなくてね」

「不便な目覚ましだねー」

「まったくだよ」

曜ちゃんがにししと笑う。

善子ちゃんは呆れている感じだ。

「ていうか、お昼ご飯どうしたのよ」

「最近金欠でね」

「なんか大きな買い物でもしたの？」

「この前古本屋で大量の本を買ってね」

「アホなの？」

「安くなつててつい」

「それで大量に買ったら完全に向こうの思う壺よね」

「返す言葉もないね」

『ぐうぐ』

三度目のアラーム音。

「もう10分…」

「まだ10分経ってないわよ」

「…たまには目覚ましが大調を起こすこともあるさ」

「不調なのはあんたの頭でしょ」

「手厳しいね。否定はできないけど」

「でも、ご飯食べてないと本当に体調崩しちゃうよ？ハルくん、ただでさえ体力ないんだから」

「それもそうなんだけど、ない袖は振れないんだ」

一応、朝と夜はしっかりと食べているし、睡眠もそれなりには取っている。

一食抜いた程度で体調を崩すことはないと思う。

「これから夏真っ盛りなんだから、体調管理はしっかりしなさいよね」

「お、心配してくれるのかい」

「なあつ！ち、違うわよ！Aquorsの衣装はここで買うことも多いから、あんたがいなくなるとちよつと困るってだけで…」

「心配してくれてありがとうね」

「話聞きなさいよ！」

机をバンバンしてくる善子ちゃん。

普段なら注意するところだが、こういうときくらいは良しとしよう。

「お昼ご飯、いつまで抜きにしてくつもりなの？金欠が原因なら、ある程度経ったらまたお昼食べるんですよ？」

「そうだね。多分後一週間くらいかな」

「そっかー…あ、そうだ！」

曜ちゃんが何か思いついたらしい。

「明日から私がお弁当持ってきてあげるよ！」

「お弁当？でも君学校があるだろう」

「朝持ってきてあげるから、お昼に食べてよ。それなら大丈夫でしょ？」

「もちろん大丈夫だけど…」

「じゃあいいじゃん！…それとも、迷惑…かな？」

「いやいや。ありがたいよ。でも、曜ちゃんに悪くないかい？」

「全然！美味しいの作ってくるね！」

「まあその、無理しない程度でいいからね」

「うん！…ここでハルくんの胃袋を掴んで、アピールしないと…」

最後に小さく何かを言っていたようだが、中身を聞き取ることはできなかった。

しかし、さすがに歳下の女の子から食べ物を恵まれっぱなしというのは気がひけるな。

何かでお返しといきたいところだが…

「ちよ、ちよつと待ちなさい!」

「ん? 善子ちゃんどうかしのかい?」

「そ、その…わ、私もお弁当を作ってもいいわよ」

「ほう」

「え?」

善子ちゃんのそんな一言。

思いもよらぬ言葉だった。

「あれ? でも善子ちゃん、料理上手だったっけ…」

「あ、味付けが少し辛くなるだけよ!」

「ああうん、できれば辛過ぎないと嬉しいんだけどね」

「ええー! よつちちゃん! 最初に言ったのは私なんだよ!」

「ヨハネよ! でもほら、曜だけだと毎朝大変でしょ?」

「なるほど。まあ確かに毎日は大変だろうね」

「ちよつとハルくん！」

「そういうことよ」

（ちよつとよつちゃん！よつちゃんも作りたいのは分かるけど、よつちゃん料理得意じゃないじゃん！）

（だからヨハネよ！わ、私だって弁当の一つや二つ、なんとかなるわよ）

（そういつて前も辛すぎるラーメン作ってルビイちゃん泣かせてたじゃん！）

（ぐ、偶然よ！）

（すごい心配なんだけど…大丈夫なの？）

（大丈夫よ。そ、それにその…わ、私だって、ハルにその…）

（アピールしたいの？）

（ぐぬっ！…そ、そうよ！）

（はあ…もう、わかつたけど、ハルくんのお腹に優しいもの作ってあげてね）

（わ、わかつてるわよ）

二人が向こうでヒソヒソ話をしている。

なんかの相談だろうか。

「とりあえず、1日交代で作るね」

「再三になるけど、本当にいいのかい？朝、結構忙しいだろう」

「大丈夫だよ！やりたくてやるんだし！」

「善子ちゃんもいいのかい？」

「もちろんよ。わ、私だってその…やりたくてやるんだから」

「そうかい。二人ともすまないね」

そんなわけで、明日から弁当を持ってきてくれることになった。

思わぬ提案だったが、正直すごく助かる。

手作りかどうかは分からないが、朝から美少女と顔を合わせることができて、その上

お弁当まで貰えるのだ。

お腹がなったというだけでこの状況。

いやはや、なんともツキがあるなあ。

※

「ハルくん！おはよーそろー！」

「おはよう曜ちゃん。本当に持ってきてくれたんだね」

「あれ？嘘だと思つてたの？」

「そういうわけじゃないけどね。朝大変だっただろう」

「曜さん、意外に朝は強いんです」

「そうだね。よく知ってるよ」

「えへへー。そういうわけなんで、はいこれ」

曜ちゃんから水色の袋を渡される。

もしかしなくても、中に入っているのはお弁当だろう。

感触としては、プラスチックの容器にでも入っているんだろうか。

「どうもありがとうね。感謝しながらいただくよ」

「ん。じゃあ行つてくるねー」

「ああ、行つてらっしゃい」

手を振つて曜ちゃんが学校に向かうのを見送る。

「さて、こちらもお仕事頑張りますかね」

朝からのプチ幸福に背中を押され、ちよつとだけ気合が入るのだった。

「いただきます」

お昼時。

手を合わせてから、曜ちゃんにもらった弁当をいただく。

お昼にこうして普通の食事を食べるのは実に5日ぶり。

人によつては大したことないかもしれないが、これまで普通にお昼ご飯を食べていた俺には、この5日間は結構大変だった。

そんなわけで、このありがたいご飯に最大限の感謝を込めつつ食事をいただくことにする。

風呂敷を解いて弁当箱の蓋を開ける。

パツと目に飛び込んできたおかずたち。

卵焼きにウィンナー、ブロッコリーにりんご。

定番かつカラフルなそれらは、シンプルでありながら食欲をひく魅力的なおかずたちだ。

一緒に入っていたご飯用の容器も開けることにする。

俺がそんなにたくさんは食べないことを知っているからだろう。

比較的広さのある容器だが、深さがあまりなく、多すぎない程度にご飯が詰められていた。

そこまでは特に違和感はない。

が、少しだけ気になることがある。

「これは…」

「ご飯には、桜でんぶで装飾が施されていた。

その絵は…。」

「あああああああああああー！」

「うわあ！よ、曜ちゃんどうしたの？」

「急に大声出したらびっくりするじゃない」

「ま、間違えた…」

「間違えた？…何を？」

「…お弁当…」

「お弁当って…今日ハルさんに渡したっていうお弁当？」

「…うん」

「間違えたって…じゃあそれがハルくんに渡すはずだったお弁当なの？」

「うん…といつても、間違えたのは渡すはすのご飯なんだけどね」

「ご飯って、お米のこと？間違えて渡すって何さ」

なあ」

そんなことを考えつつ俺はご飯をいただくのだった。

『開けないでええええええええ！』

「浦の星女学院は今日も賑やかだねえ」

そんなことを呟きながら。

※

「じゃ、じゃあこれあげるから」

「ありがとう。すまないね」

「や、約束だしねっ」

「ん、いただくよ」

「わ、私は学校行くから！それじゃ！」

「あ、気をつけるんだよー」

今日は善子ちゃんから弁当をいただいた。

明日はまた曜ちゃんが持ってきてくれるらしい。

感謝感謝である。

ちなみに、昨日お弁当箱を返す際に曜ちゃんに

「ありがとう。心がこもっててすごく美味しかったよ」

と言ったら

「~~~~~っ！うわあああああああ！」

といった感じで、顔を真っ赤にして叫びながら走って行ってしまった。

そんなわけでもあまりお礼を言えなかった。

「今日はちゃんとお礼を言わないとね」

「さて…いただきます」

昨日に引き続き2日連続でお弁当。

しかも女の子からいただいたもの。

ありがたい。

って、感想のバリエーションがなくなりつつある。

が、まあ事実なので仕方なし。

そんなしょうもないことを考えつつ、お弁当の蓋を開ける。

今回のメニューは…

「カレールライスか」

昨日の曜ちゃんのものとは打って変わって、一品もの。

これはこれで大いにありだとは思う。

味についても、よっぽど大失敗はしにくい料理だし、それも大丈夫だろう。

問題は辛さ。

善子ちゃんは極度の辛党だから、それだけが不安要素だ。

そう思いつつも、スプーンに掬ったカレールを口に運ぶ。

これは…

「おお…おいしい」

予想以上に普通に美味しかった。

味を合わせたのか、それとも作り方通りに手順を踏んだのか。

いずれにしても、文句無しの出来栄えだ。

「ジャガイモが多くて食べ応えがある。肉は…これは豚肉か」

誰に聞かせるわけでもないカレールの具実況をしつつ、食べ進めていく。

そんなとき、お弁当箱の下に一枚のメッセージカードを見つけた。

さつきまで気づかなかったが、お弁当と一緒に入っていたらしい。

『ハルへ』

せつかく私がつったんだから、感謝して食べなさいよね!』

そんな文が書かれていた。

言われずとも感謝はしているんだけどね。

だがたしかに、せつかくこう言われているのだ。

なんか特別な形で感謝でも…

あ、たしか善子ちゃんはお昼ご飯外で食べることが多いって言ってたっけか。

…ふむ…よし。

思いついたことを実行すべく、扉のところに立つ。

浦の星女学院すぐそばにあるうちの店。

当然、ここに立てば目の前にはその校舎が存在する。

そこに向かって俺は…

「すううううううー…善子ちゃあああああん! ありがとうおおおお!」

大声で叫んだ。

感謝をこの場で大声で伝えることにしたのだ。

なんでそんな方法なのかって？

もちろん、なんとなくさ。

「今の声、ハルさん…かな？」

「なんか叫んでたずらね」

「多分善子ちゃんの名前叫んでたね」

「そうずらねえ。ってあれ？善子ちゃんどうしたずら？」

「くくくっ！なんであのバカ、感謝を直接叫んでるのよくっ！」

「善子ちゃん？」

「大丈夫ずら？というかどうかどうしたずら？」

「くくっ！なんでもないわよ！ハルのばかあああああ！！」

善子ちゃんが叫んだ気がした。

うーん…

気のせい…かな？

夕方、弁当箱を取りに来た善子ちゃんから強烈なアツパーをくらった。
感謝を示したつもりだったんだが、それじゃあだめだったらしい。

「音すごいねー」

「ちよ、ちよつと怖いです…」

「これはまだ帰れそうにないね」

「そうだねえ」

「す、すいません、雨宿りに使っちゃって…」

「いやいや、そんなことは気にしなくていいから」

臨時休業でありながら、店にはお客さんが二人。

本日うちにやってきているのはルビィちゃんと果南ちゃん。

目的は…というより理由は雨宿りである。

なんでまたこの二人がわざわざうちに雨宿りに来ているのか。

本日、朝の7時頃に県全域に暴風警報が発令された。

これが出ると、基本的に学校は休みとなる。

もちろん浦の星女学院として例外ではなく、早々に今日の授業は無しとされた。

しかしながら、この連絡というのは直接生徒に伝わるといふことはない。

要するに、朝の天気予報を自分で見て確認するのが通例である。

それでも不安なら学校に電話して聞く。

そういうものだ。

ここまででは特に引つかかることはない。

俺が通っていた高校もそうだったしね。

さて、じゃあなんでルビィちゃんと果南ちゃんがうちに来ているか、だが…。

「外、これだけ雨も風もあるのによく学校があると思つたね」

「仕方ないでしょ、朝はまだマシだったし、天気予報見忘れたんだから」

「昨日の時点で、台風がかなり接近してると話だったと思うんだけどね」

「そうだったっけ？」

「そうなんだよ」

「えっと、その、私も天気予報見忘れちゃって…」

「ダイヤちゃんから、『ルビィは寝坊が多いから天気予報を見る余裕がないのですわ』って聞いたことがあるよ」

「ピギヤ!?!ち、違うんです!ちや、ちゃんと昨日の夜は天気も確認したんです!だからちゃんと傘も忘れないように用意して…」

「ああ、うん。教科書とかもビニール袋に入ってたもんね。ちゃんと防水仕様にしたんだね」

「そ、そうなんです!…でも…」

「案の定寝坊して、肝心の天気予報を見る余裕がなかった…」

「…はい」

そういうわけである。

二人とも学校が休みになっていことに気付かずに登校。

学校に人がいないことに気付いて、ようやく休みになっていることを知ったわけだ。

ちなみに、ルビイちゃんがダイヤちゃんが止められなかった理由は、単にダイヤちゃん

んがルビイちゃんの外出に気づかなかったことらしい。

家が広すぎて、人が出て行くのもすぐにはわからないだね。

「いやー、帰ろうとしたら雨も風もすごいことになってね。バスも止まっちゃった

んだもん」

「ルビイも同じです…」

「一応学校に確認に行つてよかったよ」

長い付き合いの彼女たちが、来なくていい日に学校に来てしまうというのはこれが初めてではない。

以前にも何度かあったのだ。

だから、今回ももしかしたらと思念のため高校の方に様子を見に来たのだ。

そして、帰る手段を無くした二人を見つけたというわけである。

「まさか二人もいるとは思わなかったけどね」

「さすがハルだよなー。ありがたやありがたや」

「感謝してくれるのは嬉しいけどね。もうちよつと天気予報くらい見ることをお勧めするよ」

ちなみに、二人ともお迎えを呼ぶのは残念ながらできないらしい。

どちらも、ご両親はお出かけもしくはお仕事の関係で外に出てしまっているのだ。

果南ちゃんのところはダイビングショップなので、こういう日は本業は不可能。

しかし、機材等に関してはこういう日でもやらなきゃいけないことは多いんだそう
だ。

そういうわけで、お迎えの体制が整うまでうちで待機しているというわけである。

「俺の車が使えればよかったんだけどね」

「車検？つていうのに出してるんだっけ？」

「そうだね。もちろん代車は借りてはいるんだけど…慣れない車でこの天候は少し怖い
からなあ」

「大丈夫ですよ。その、は、ハルさんと一緒にいるのも私、好きですから…」

「そうかいそうかい。嬉しいことを言ってくれね」

「うゆ…そういう意味ではないんですけど…」

「おっ？」

顔を赤くしていたかと思えば、若干苦笑い気味になるルビイちゃん。

「慣れた車ならこの天気でも運転できるの？」

「かなり低速になるけどね」

「あ、じゃあ原付バイクで送ってくれてもいいよ？楽しそうだし」

「二人乗りは道路交通法違反だよ。というか、仮に乗れてもこの天気で乗る気なのかい君は」

「わ、私は振り落とされそうです…」

「後ろから支えてあげるよー」

「しかも三人乗りを想定してたのか。言うまでもないけど却下だよ」

自殺行為もいいところである。

「まあ、お迎えが来るまで大人しくしておくれ。夕方頃にはルビイちゃんのお母さんが来れるみたいだからね」

「はーい」

※

「…暇だね」

「お昼ご飯食べていきなりそれかい」
「やることは確かにはないですけどね」

正午過ぎくらい。

相も変わらず外からは風の音と雨の音が鳴り響いている中、うちにあつた食材で適当にお昼ご飯を済ませた俺たち。

食事を済ませた直後くらいに、果南ちゃんがぼやいたのが先ほどの一言である。
確かにやることはあんまりないんだけどね。

「んー…なんかやることないの？」

「残念だけどね。今日は仕事もできないからねえ」

「仕事ないのはいつもじゃないの？」

「はっはっは。痛いところをつくね」

傷つくじゃないか。

「あ、えつと…は、ハルさん、がんばルビイ！」

「ありがとうねルビイちゃん。その優しさが胸に染みるよ」

歳下の女の子に同情される時点で、なんだか逆に哀れな気もしなくはないけど。

「まあそれはともかくとしてさー。こうなんか、ちよつとくらい何か…」

果南ちゃんがそこまで言った時だ。

『バチン！』

そんな音と共に、視界が一瞬で黒に染まった。

何事かと照明を見ると、先ほどまで部屋を照らしていたはずの光が消えていることに気付いた。

「…停電…かな？」

「あ、あわわわ…ま、真っ暗です」

「昼間だけど…雨戸閉めてると暗いねー」

「とりあえず二人とも危ないからあまり動かないようにね」

「あ、ブレーカー見てくるね」

「は、ハルさん？果南さん？ど、どこですかあ〜」

「二人とも俺の話聞いている？」

スマホを灯にしてブレーカーを見に行く果南ちゃん。

あわあわ言いながらフラフラしているルビィちゃん。

どちらも俺の言う通りにする気はないらしい。

とりあえずこの状態でルビィちゃんを放っておくのも忍びないので、まずはそちらに向かうことにした。

果南ちゃんと同じくスマホを灯にしてルビィちゃんの方に歩く。

近づくと、今にも泣きそうな顔でこちらを見ているのが分かった。

「は、ハルさあん……」

「ほら、大丈夫だから。そんな不安そうな顔しなくていいよ」

「うう……く、暗いのはダメなんです……」

「普段からこの町は夜相当暗いと思うんだけどね」

「きゅ、急に暗くなるのはダメなんです……」

「そうかいそうかい。俺はここにいるし、余計なこともしないから安心してくれ」

「は、はい……」

そう言いながら手を握ってくるルビイちゃん。

目一杯に涙を滲ませて手を握ってくるその様子は、余裕のなさをこれでもかというくらい見せつけてくれる。

小動物さながらのその様子。

つい庇護欲が掻き立てられる。

「これもまた、ルビイちゃんの魅力の一つだね」

「な、なんの話ですか？」

「なんでもないよ。ルビイちゃんは可愛いなって思っただけさ」

そう言いながら、握られていない方の手をルビイちゃんの頭に乗せる。

いい高さである。

「うゆ…な、なんでこんなタイミングで言うんですか…」

それからほんの数分して、ブレーカーを見に行っていた果南ちゃんが戻ってきた。

「ハル。残念だけどこれ、台風のせいで停電したっぽいよ」

「あ…：やっぱりそうかい。ブレーカーが落ちるほど電気使ってなかったしね」
となると、復旧はいつになるか分からないな。

幸い、電気が必要になることは今のところないし、気温も暑すぎるわけではないから
エアコンも不要。

「こちらからやれることも特にないので、大人しく復旧を待つことにしようじゃない
か。」

「ハル、普段と変わらないね」

「逆に君が少し楽しそうなのはなんでだい」

「なんでって…：昼間なのに真っ暗だと、なんかテンション上がるでしょ？」

「そ、そうですか…？」

「果南ちゃんはそうなんだってさ」

「す、すごいです…」

「いや、ルビイは逆に怖がりすぎでしょ」

「うう…だ、だって…」

先ほどまで暇だと嘆いていた果南ちゃんはこの状況にご満悦らしい。

暗くなっただけで、何か変わったというわけではないんだけどね。

「念のため懐中電灯を出そうか」

「あ、私にとるよ。どこにあるの？」

「タンスの上なんだけど…とれるかい？」

「うーん…椅子借りるね」

「気をつけるんだよ」

「はーい」

タンス側にある椅子を足場にして懐中電灯に手を伸ばす果南ちゃん。

よくよく考えると、彼女の制服のスカートが結構短いわけだし、椅子に乗って手を伸ばしている今だと、太ももあたりはわりときわどい露出になってそうだ。

「は、ハルのエッチ…」

「なんで人の考えが読めるんだい」

「か、顔見たらわかるし…」

「こっちは肝心のスカートすら見えないくらい暗いのに、よく表情が見えるね」

「い、一応スマホの光があるし」

「ああ、それもそうだね。いや、それでも人の考えが読めるなんて大したものだよ」

「ハル、わかりやすいし。変態だし。バカだし」

「最後2ついる？」

やりとりをしつつ、果南ちゃんから懐中電灯を受け取る。

点灯することを確認し、先ほどまで灯の代わりになっていた果南ちゃんのスマホも、その役割を終えるのだった。

ポウっと。

さつきまでとはまた違ったタイプの間接照明が部屋を照らし出す。

三人で会話もなくその灯を眺める。

外から聞こえる騒がしい風の音に対して、俺たちの間にはゆったりとした空気が漂っていた。

気がつくのと、先ほどから俺の手を握っているルビイちゃんの力が少し抜けている。

表情も、少しだけ恐怖感が緩和されているように見える。

「ルビイちゃん、ちよつと落ち着いたかい？」

「あ、は、はい。といっても、怖いのは相変わらずなので、できればまだ…」

「ああうん。手は好きだけ握っててくれ」

「あ、ありがとうございます。…えへへ」

妹みたいとはいえ、彼女も立派な華の女子高生。

こうして手を握っていられるのも、長い付き合いだからこその特権だ。
権利は行使しないと勿体ない。

「…ハル、鼻の下伸びてるよ」

「この状況では否定できないね」

「むー…」

表情がよく見えないが、果南ちゃんから不満に似たオーラを感じる。

なんでだろうか。

なんて思ってた時だった。

ルビイちゃんと繋いでいるのとは逆側の手を果南ちゃんに握られた。

「おや？」

「な、何さ」

「いや、珍しいな…って」

「わ、私だつて暗いの怖いから」

「え？ いやいや、さつきまであんなに元気に…痛たたたたたつ！手、手割れるっ」

「余計な詮索しなくていいのっ」

「わ、わかったから力抜いてくれ」

ものすごい力で手を握られた。

痛い。

まだじんじんするよ。

「あ、あはは…ハルさん、大丈夫ですか？」

苦笑いのルビイちゃんに心配される。

果南ちゃんが不満げだった理由が、この子にはわかっているらしい。

そのすぐ後。

3人仲良く手を握りながら和室で腰を下ろした。

地面に置かれた懐中電灯が部屋をぼんやりと照らす。

そこに大した会話はなく、明かりに同じくぼんやりとした空気が流れる。

「…なんだか眠くなってきたやつた」

「うゆ…私もです」

「寝ても大丈夫だよ。適当な時間で起こすからね」

「んー…そうしようかなー」

「毛布でもいるかい？」

「いや、かえって汗かいちやいそうだからいいよ」

「そうかい」

「私もです」

「了解だよ」

しばらくして、どちらともなく寝息が聞こえてくる。

なんというか、こうして警戒されていないのは男としてどうなんだろうかと思わなくもない。

いや、警戒されるよりはずっといいんだけどね。

万が一に手をだそうものなら、反撃で俺は瀕死になるだろうし。

二人の寝息が聞こえてきてから数分。

やがて、俺にも睡魔がやってきた。

んー…

まあ、少しくらい俺が寝てもいいだろう。

そんなことを思いながら、俺自身も眠りにつくのだった。

夕方。

迎えに来たダイヤちゃんの手をつないで寝てる俺たちを発見。

破廉恥だと言われてお説教をされたのは言うまでもない。

「何か弁明はありまして?」

「:よく入れたね」

「鍵は開いてましたわよ」

「雨戸とシャッターを閉めて、扉の鍵を閉め忘れたのか。我ながらドジだね」

「うふふ。そうですね。おかげで、ハルさんの破廉恥な行いを取り締まられたのですから、結果オーライですわ」

こめかみに青筋が浮かんでいるダイヤちゃん。

まあ自分の見えないところで、親友と妹が手繋がれて寝てれば怒りたくもなるかな。それでもお手柔らかにしていただきたいが。

店を襲う台風は去ったけど。

俺を襲う台風は、まだしばらく勢力を振るっていた。

普通の1日と布屋さん8

「ラーメン?」

「イエース!」

「ほら、この前新しいとこできたでしょ?一緒に行かない?」

目の前でそんなことを言っているのは、千歌ちゃんとマリーちゃん。

時刻は夕方。

ちようどこれから晩御飯の準備に取り掛かろうかと考えていた時だった。

今から行くねというメツセージから約2分。

準備も何も全くさせる気がない早さで二人はやってきた。

「もちろん行くのは構わないんだけど…なんというか、珍しいね」

「珍しい?」

「うん。君らが二人でいることもだし、その君たちにラーメンに誘われることがだよ」
「そうだった?」

「鞠莉さんと二人っていうの、結構あるよ?」

「そうなのかい」

「おかしい?」

「いや、おかしいってことはないよ」

よくよく思い返せば、マリーちゃんは今でも後輩の面倒見はかなりいいし、千歌ちゃんも持ち前の明るさで誰とでも仲良くなれるタイプだ。

案外波長の合う二人なのかもしれない。

「それで、ラーメンというの?」

「あれ?ハルくんラーメン知らないの?」

「ラーメンっていうのは、古くは明治時代に中国人が初めて日本でお店を開いたことが発祥とされるフードです。中華麺と呼ばれる麺と、スープをメインにして構成されているんです」

「いや、そういうことじゃなくて。ラーメンは知ってるから」

ていうか知らない日本人てほとんどいないだろう。

「なんでわざわざ誘いに来たのかって聞いてるんだよ」

「今日練習の時にね、ちかっちとラーメンの話で盛り上がったのよ」

「うん」

「それで、二人で行こうってなったんだけど…女子高生二人だと、ラーメン屋さんって

ちよつと入りにくくて」

苦笑い気味にそういう千歌ちゃん。

「なるほどね。まあ確かに…わからんでもないよ」

とはいえ、ここ最近はず井屋とかラーメン屋とかでも、女性だけで来ているのはそこそこ目にするが。

それでも、女子高生二人だと入りにくいというのはあるかもしれない。

「そういうわけで、ハルを誘いに来たんでーす」

「それ自体に特に何かを言うつもりはないんだけどね。生憎、あまりお金がないんだ」

「アイシー、アイシー。ハルが常時金欠なのはこつちもよくわかってまーす」

「お金に余裕のあるハルくんなんて、もうハルくんじゃないもんね」

「おやおや、言ってくれるじゃないか」

悲しくなるからやめてほしい。

事実なのでなおさらだ。

「お金なら心配ないでーす。普段お世話になってるからーって、マミーにギフトカードを渡されてるからねー」

「お世話について…むしろ鼻屑にしてもらってるのはこつちなんだけどね。ていうか、ギフトカードでラーメン屋でも使えるのかい」

「最近はどういうお店もちよくちよくあるみたいだよ？」

小原グループの所有する淡島ホテル。

そのホテルは、うちの大のお得意様の一つだ。

そのため、昔から家絡みで付き合ひがあり、向こうも俺のことを知っている。

それもあつてか、こうしてお食事の助けを得ることはちよいちよいあつたりするのだ。

とはいえ、いくら彼女自身がお金を出すわけではないと言つても、理由もなく奢つてもらふというのは気がひけるなあ。

そんな考えを、マリーちゃんには読まれていたらしい。

「断るのはノーだよ。人の厚意を無碍にするのは、返つてマナー違反だからね、ハル」
「そう言われてしまうと、こちらとしては反論できないね」

ギフトカードをくれたのは彼女の親御さん。

理由は普段のお礼。

それを理由に、自分を納得させることにする。

「…わかった。ありがたく厚意に甘えるとするよ」

「オツケー！」

「ハルくん来てくるの？ やったー！」

そんなわけで、3人で最近できたらしいラーメン屋に向かう。

車で移動すること15分程度で目的地に到着した。

「わー…さすがにちよつと混んでるね」

「できたばかりで、明日が土曜日だからね。しかも夕飯時とくれば、それなりには混むだろう」

「まー大人しく待ちましょ」

行列というほどでもないが、店から若干はみ出る程度に人が並んでいる。

パツと見る限り、俺たちの前に三組ほどのお客さんがいたようだ。

とはいえ、ラーメン屋だったらそこそこの回転率はいいだろうし、待ちくたびれるってことはないだろう。

適当に雑談でもしてればすぐかな。

「そういえば、今日はなんでラーメンの話になったんだい」

「最初は、ラーメンっていうよりはカップ麺の話だったんだよ」

「そこから、最近できたこのお店の話になったの」

「ああなるほど。千歌ちゃんはともかく、マリーちゃんはあまり来なさそうなイメージ

だよ」

「イエース。だからとっても楽しみです」

「私もー！最近はあるまり行つてなかったからね！」

ちなみに俺もここ最近ラーメン屋に行つた記憶がない。

まあお金ないし、外食自体が非常に少ないんだけどね。

あ、でもカップ麺ならよく食べてるな。

「…ハルくん、カップ麺はラーメンとはもはや別の別の食べ物だと思うよ」

「相変わらず人の心を読むのが上手だね」

「相変わらず考えを外に出すのが上手ね、ハル」

「返す言葉もないよ」

そんな話をしていたら、どうやら俺たちの番まで回つてきていたらしい。

店員さんにテーブル席へ案内され、メニューを開く。

そこに掲載されている様々なラーメンたち。

思つていたより種類が多い。

その全てが、空腹のこの状態では魅力的に見える。

「ハルくんのオススメは？」

「この店は初めて来るしなんとも言えないね」

「じゃあオススメのラーメンの味は？」

「あえて言うなら全部だね」

「あはは。ハルくんらしい答えだね」

誰が答えることになっても同じことを言いそうだけどね。

そんな会話をしていたら、メニューを見てマリーちゃんと言。

「んー…ラーメンって、思ってたより安いのねー」

「そう？どこもこんなもんじゃない？」

「そうだね。俺にも普通の値段に見えるよ」

「へー…」

ラーメンの値段は、だいたい600円から900円程度。

人によって若干の感じ方に違いはあるだろうが、それでも十分常識の範囲内の値段だ
と思う。

だが、マリーちゃんにはそう見えなかったらしい。

「そういえば聞き忘れていたけど、ギフトカードはいくら分を持ってきてるんだい？」

「んー…もつと高いものだと思ってたからねー。これくらい？」

そう言つてギフトカードを見せてくれる。

その金額は…

「・いち、じゆう、ひやく、せん…十万…十万円…」

「…十万円のギフトカード」

「…何を考えているんだい君は」

「だって相場がわからなかったんだもん！」

「十万円のラーメンでどんな味するんだろう？」

「そもそもこの世にあるのかい、そんなの」

「パパに頼んで探しとくよー」

「いや、そんなことをわざわざ頼んでもいいよ」

「大丈夫大丈夫。見つけたらハルにも食べさせてあげるから」

「そういう心配じゃなくてね。というか食えんよ、そんな高いもん」

あれ？ギフトカードってお釣り出ないんじゃないの？

だとしたらこれ、相当勿体ないことをしてるんじゃないのか…？

そう思ったけど、マリーちゃんがニコニコしながらメニューを見ているのを見て口を

開けないことにした。

まあもしもの時は俺が払おうじゃないか。

予算はうん、なんとか、ぎりぎり、紙一重で、足りると思う。

結局のところ。

俺が味噌、千歌ちゃんが塩、マリーちゃんが醤油ラーメンを頼むこととなった。待つこと数分程度。

三人揃ってお食事が到着。

箸を割り、いただきますの言葉とともに、三人仲良くラーメンに手をつける。

「うん、おいしい」

「おおー！これはいいよー！」

「ん〜デリシヤス！」

三者三様の反応ではあるが、全員おいしいと感じたのは同じのようだ。

「ハルくんもこれ味見してみよーほら」

千歌ちゃんがそう言いながら自分のラーメンをこちらへやってきた。

一緒に入っているバターの香りが鼻腔をくすぐる。

「いいのかい？じゃあ一口いただくよ」

そう言って蓮華でスープを一杯だけいただく。

うん、これはこれでとてもおいしい。

千歌ちゃんにお礼を言おうとした時。

なぜだかその顔が赤くなっていることに気付いた。

「千歌ちゃん、どうしたんだい？」

「そ、それ…わ、私の蓮華…」

「え？ああ、俺のを使うとスープの味が混ざっちゃうと思ったからそうしたんだけど…
まずかったかい？」

「ええ?!いい、いや、そ、そうじゃないけど…か、間接キス…」

声がどんどん小さくなってしまつて最後の方がほとんど聞こえなかった。

顔は逆にどんどん赤くなっているが。

とはいえ、確かにこれはよくなかったのかもしれない。

そんなことを思つた直後。

「ハル！ちかっちばっかかりずるいよ！こっちも味見してちょうだい！」

「何がどうずるいのさ」

「いいからほら！」

「まあ、くれると言うならいただくけどさ」

さっきの反省を活かし、今度は自分の蓮華でスープを掬う。

「つて、なんで自分の蓮華を使うの!?!」

「ええ？いや、さっきの千歌ちゃんとのやりとりから反省したんだけど…」

「反省するのはその鈍感さだけでーす！」

「なんでこのタイムニングで鈍感の話が出るんだい？」

「ハルが鈍感だからです」

「堂々巡りだね」

意図は分からないが、言われた通りにマリーちゃんが渡してくれた蓮華を使ってスー
プをいただく。

うん、こつちもやつぱりおいしい。

「…これ、思ってたよりだいぶ恥ずかしいですねえ…」

「あ、鞠莉さんもやつぱりそう思う？」

「ラーメン食べながらドキドキさせられるなんて思ってたでーす」

「なんの話をしてるんだい？」

「うるさい鈍感」

ラーメンは温かいのに、この子たちが少し冷たい。

全員が食事を終えるのに、そんなに時間はかからなかった。

箸を置き、仲良くご馳走様。

まだまだ人が並んでいる様子もあつたし、早々に席を立つことにする。

「美味しかったね!」

「ミートウー!また来ましょう」

「そうだね。賛成だよ」

適当な話をしつつ帰路を辿る。

なんでもない話をしながらちよつとおいしいものを食べる。

たまにはこんな一日もいいだろう。

車で三人と話しながら、そんなことを思つたのだった。

※

ちなみに。

お会計時にお金は俺が払つた。

さすがに、三千円もかかつてない食事のために十万円分のギフトカードなんて使えません。

マリーちゃんには気にするなと言われたが、半ば強引にこちらから財布を出したのだ。

その結果…

「あれ？ハル、これ、ギフトカードよね。どうしたの？…かなり高い額のものみたいだけど」

「封筒に入ったものを勝手に見るのは感心しないが…善子ちゃんもやつぱりそう思うかい」

「そうだよ、よつちゃん。どれどれ…つてうわ！十万円分!?。どうしたのこれ」

「曜ちゃん、君もやつてることは同じ…まあいいや。それ、小原家からいただいたんだよ。この前のお礼ですってね」

「お礼つて…あんた達が言った場所つてラーメン屋でしょ？そんなたくさん食べたの？」

「そんなわけないだろう。金額なんてせいぜい三千円つてとこだよ」

「どういう経緯でこれがお礼として出てくるのよ」

「もともとこれで払うつもりだったから、受け取ってくれって言われちゃってね」
「どういこと?」

大雑把に経緯を話す。

マリーちゃんが十万円のギフトカードを持ってラーメン屋に連れて行ってくれたこと。

さすがにお釣りの出ないそれで払わせるのは気が引けて、結局俺が払ったこと。

「なるほどねー」

「じゃあそのまま受け取ればいいじゃない。悪いことしてるわけじゃないんだし」

「悪いことじゃないかもしれないけど。三千元払ってお返しに十萬円のギフトカードもらうって、もうこれほとんど窃盗だよ」

「いやいや、マイナスに考えすぎでしょ」

「とりあえずは大事に保存しとくことね」

「まあうん…：そうさせてもらおうよ」

目の前の封筒に入っている高額ギフト券。

その後金庫に入れられたこいつが、本来の役割を果たす日が来るのか。

それは、今の俺には分からない。

普通の1日と布屋さん9

最近、なんだか『鈍感』という言葉を聞くことが多くなった気がする。理由は残念ながら分からない。

でも、言われることが多くなったのは確かだと思う。

別にそれについて何かする必要があるわけではない。

ないが…

鈍感と一言呟く子の多くが恨みがましい視線を向けてくるので、若干考える必要があるんじゃないかと思いついてる。

今度誰かうちに来た時にでも軽く相談してみようか。

※

「確かに、いい加減ハルさんの鈍感っぷりはなんとかするべきだと思いますわ」

「そうなのかい」

「あはは…でも、確かにちよつとくらい改善してもいいかもね」

「そうはいつても、何をどう改善すべきなのかね」

「自らの鈍感っぷりに気づかないことが、鈍感の鈍感たる象徴ですわ」

「…哲学的な話かい？」

本日うちへやってきたのはダイヤちゃん和梨子ちゃん。

「…最近珍しい組み合わせで来ることが多いなあ。

「何か言いたいことでもありませんか？」

「いや、そういうわけじゃなくてね。珍しい組み合わせだなと思って」

「んー…確かに、ハルさんのところにダイヤさんと来るのは珍しいかも」

「そうですね。でも、そんなに珍しい組み合わせでもないですわ」

「ほう」

「梨子さんは、比較的やかましい2年生組の中では一番大人ですから。話しやすいので

す」

「なるほど。でも、やかましきだったら君らも負けてな…ぐえ」

「そこまで言ったところで、ダイヤちゃんからクツションが投擲された。

「痛くはないけど、言葉はそこで途切れてしまった。」

「何か言いましたか？」

「…心当たりがないよ」

「それならよろしいですわ」

「あ、あはは…」

それを見て梨子ちゃんは苦笑い気味である。

というか、この行動そのものが、ダイヤちゃんががやかましい側にいる証拠になっている気がするんだけど。

もちろん口にはしない。

口にしたらくツシヨンとは比べ物にならないものが投げ込まれそうだし。

「はあ。まあいいですわ。話を戻しましょう」

「梨子ちゃんとダイヤちゃんが意外に仲が良いって話かい？」

「それよりも少し前ですわ」

「鈍感の話のところね」

「ああ、そういえばそういう話だったね」

「もう。その話を振ったのはハルさんよ」

「そうだったね。忘れていたよ」

「鈍感の原因は頭の悪さにありそうですわね」

「否定はできないけど、それだと解決もできなさそうだ」

「いえいえ。逆に、鈍感が治れば頭もよくなるかもしれないわよ」

「それは魅力的な提案だね。それじゃあ頭をよくするためにも、鈍感を治すのに協力しておくれ」

「結局そこに戻るのね」

ダイヤちゃんからの皮肉が一段楽し、またしても梨子ちゃんが呆れた様子を見せてくれた。

かと思えば、すぐにダイヤちゃんとヒソヒソ話を始めるのだった。

「…ダイヤさん、ハルさんの鈍感って治るんですか？」

「…やる前に諦めるのはポリシーに反しますが、正直ほぼ不可能だと思いますわ」

「…やつぱりそうなんですか？」

「鈍感の治療はこれまでに私たちが取り組んできましたわ。でも、微塵の効果も見せませんでしたわ」

「ある意味、鈍感ゆえにとってことなのかな…」

「ですので、今回は直接鈍感を治すのは諦めますの」

「ええ？じゃあどうするんですか？」

「それは…」

内緒話が終わったらしく、二人がこちらへ姿勢を向き直す。相談は終わったらしい。

「話し合いは終わったかい？」

「ええ。鈍感を治すのは不可能という結論に至りましたわ」

「それは困ったね」

「もう少し困った感じを出してもいいんじゃない？」

「そう言われてもね」

「仕方ないので、まずはハルさんの中にある『人を好きになる気持ち』に火をつけることを目標としましょう」

「ほう」

「まずは人の気持ちに気付く前に、自分の気持ちに気付く必要があると思いますので」

「ああ、なるほど」

「遠回りにはなつてしまいましたが、このアンポンで朴念仁のハルさんではこれくらいのことから始めるしかありませんし」

「そうですね」

「最後の一言はいらなかったね」

そう言う俺の一言は軽くスルーされた。

「まあ、話を持ちかけたのは俺の方だしね。感謝の証としてお茶でも入れるよ」

「あら。ありがとうございます」

「あ、手伝おうか?」

「いや大丈夫だよ。少し待っていてくれ」

冷蔵庫からお茶を取り出し、プラスチックのコップに注ぐ。

適当なお茶請けと一緒にお盆に乗せてダイヤちゃんと梨子ちゃんの元へ。

今日のお茶請けはカステラだ。

一応お菓子屋さんで買ったものなので、結構美味しい：はず。

「さて、それじゃあ具体的にどうするのか聞こうかな」

「先ほども言ったように、まずはハルさんが人を好きになる気持ちを理解する必要がありますの」

「そういうえばハルさん、好きな人いるの?」

「そういう話は以前にもあったような気がするよ。あ、それと好きな子ならいるよ」

「ええ!!? いるの!?!」

「そんなに驚くことかい」

「…梨子さん、気持ちは分かりますが話は最後まで聞いた方が良いですよ」

「これでもまだまだ若い男子なのだ。」

好きな女の子の一人や二人、いても当たり前というものだろう。

「そ、その好きな人というのは……？」

「女子高生」

「……………へ？」

「案の定ですわね」

「隠す気もないからね」

「外で口にしたら捕まりますわよ？」

「君たち以外の前ではしないさ」

「私の方から警察に連絡いたしましょうか」

「手厳しいね」

「つて、そうじゃなくて！」

俺とダイヤちゃんが話していたら、梨子ちゃんが間に入ってきた。

こうして机をバンバンされるのは少し久しぶりな気もする。

別に机をバンバンしてもらいたいわけではないんだけどね。

そんなことを考えている最中、梨子ちゃんが話を続ける。

「こういう話の時に好きな子が女子高生つて、話が進まないでしょ！」

「そう言われてもね。好きなものは好きなんだよ」

「そうじゃなくて！もうちよつとこう…いるでしょ！特定の人が！」

「うーん…あ、そうだね」

「誰か心当たりが!？」

「A q o u r s のみんなが大好きだよ」

「だからそうじゃなくて！」

「梨子ちゃん、今日はずいぶんテンション高いね」

「誰のせいだと思ってるの!？」

いつもに比べて大きな声を出しながら、やつぱり机を叩く梨子ちゃん。

机がかわいそうではあるが、たまにはこういう梨子ちゃんも新鮮でいいかも。

などと思っていたら、ダイヤちゃんがそれをなだめにかかっていた。

「梨子さん落ち着いてください。ハルさんがこんな感じなのは今に始まったことではありませんわ」

「でもこれだと…」

「ええ。このままでと埒があきませんので…ちよつと趣向を変えていきます」

「ほうほう。それはいい案だね」

「…誰のせいだと思ってますの」

ダイヤちゃんは完全に呆れている様子。

「こちらから『ロマンチックな状況』を提案します。ハルさんは、それに対して見合うと思う女性を考えてください」

「大喜利みたいだね」

「妄想の中でも、誰か一人を『ヒロイン』として考えるのは恋愛を意識する重要なステップなんだそうですわ」

「な、なるほど」

「面白い考え方だね。どこかで聞いた話なのかい？」

「恋愛心理学の本に載ってましたわ」

「…まあ、勉強熱心なのはいいことかな」

図書館とかに置いてあったのかな。

というか、その恋愛心理学の本を俺に貸してくればよかったんじゃないかな？

そんなことを考えたけど、口にはしないことにした。

「では早速…目を瞑ってください」

「ん」

「…ハルさんは今、夜景の綺麗な展望台位の上にあります」

「うむ」

「今日一日、ショッピングデートを楽しんだ最後の締めとしてそこにいるのです」

「うんうん」

「満天の星空と、地上を明るくしているビル群。天然の光と人工の光が同時に存在するその場所。さあ、横を向いた時…横にしているのは誰ですか？」

「…果南ちゃん…かなあ」

「ええ!？」

「な、なんでですか!？」

「なんでって…昔からちよくちよく天体観測する仲だしね。星空っていうと、彼女が出て来やすいかなあ」

「な、なるほど…」

「ぐぬぬ…悔しいですが、確かに果南さんのアタックの仕方は有効だったようですわ…」
アタックってなんのことだろう。

打撃的な話かな？

「違いますわ」

「口にした覚えはないんだがね」

「ハルさん、本当に分かりやすいわね」

「梨子ちゃんとはまだ半年くらいの付き合いのはずなんだけど…よくわかるもんだ」

「私は鈍感じゃないからね」

ため息とともにそんなことを言われた。

多分それが皮肉で言ってるであろうことは、さすがの俺にもわかった。

「はあ…まあ気を取り直して次にシチュエーションに行きますわよ」

「おっと。他にもシチュエーションがあるんだね」

「いくつも異なる状況を挙げて、最も多く登場する女の子が自分の強く意識する女の子なんだそうですわ」

「そういうものなんだね」

「そういうわけで次ですが…」

その後。

ダイヤちゃんと梨子ちゃんから色々なシチュエーションを提案された。

しかし。

しかしである。

「…なんでこうなるんですの…!」

俺の答えをメモしていた紙を、破れんばかりに握りながらダイヤちゃんが言う。

「…見事にバラバラね」

もう何度目かの呆れ梨子ちゃん。

結果的に、挙げられた状況に対して全部で別の女の子が拳がった。

当初の目的であつた、強く意識している女の子探しには不適切な回答だつたようだ。

「これでは誰が好きかと絞れないではないですか！」

「そう言われてもね」

「しかもハルさん、私とダイヤさんの名前も挙げてたわね」

「そりゃああのシチュエーションならね」

コンサートの後、余韻に浸りつつも勢いで告白する。

和服を着て、手をつなぎながらお祭りデート。

前者は梨子ちゃん、後者はダイヤちゃんといるのが頭に浮かんだのだ。

「まあ根本的に、そういう妄想をしたところで、それが現実になる可能性は皆無だろうけどね」

「…鈍感も全く改善の様子が見られませんわ…」

「はあ…そうですね…」

「ずいぶんため息が多いね」

「誰のせいよ」

今度はジト目の梨子ちゃん。

まあこれはこれでかわいい。

「そんなに深く考えなくてもいいんじゃないかな？むしろ、最初に言っていた通り、A q o u r s 全員が好きということの証明になったじゃないか」

「あのですねえ…じゃあ仮に、A q o u r s のメンバーから告白されたらハルさんはお付き合いまするんですの？」

「告白？……………現実離れしすぎて想像ができないね」

「意味ないじゃありませんか！」

「何度か言っているけど、妄想ならともかく、現実で俺が君たちに手を出すのは犯罪すれすれの行為なんだよ」

「女子高生大好きっていいながら今更そんな…」

「手は出さないからね」

「はあ…前途多難ですわね…」

「そうですね…」

相談したのは俺の方なのに。

なぜだかその日、俺よりずっとたくさんため息をつく二人の姿がそこにあった。

※

「ダイヤー！昨日梨子とハルのところに行っただって？」

「どんなトークをしたのー？」

「鞠莉さん果南さん。いつもの雑談ですわよ」

少女は親友二人に昨日の内容を話す。

鈍感という症状は、一切の改善を見せなかったという結論を最後に据えて。

「というか、私と梨子さんに鈍感の治し方を聞いた時点で、ハルさんの鈍感さが顕著に出ているのです」

「ああ、確かにねー」

「治らない病気だねー」

「まあ…そのおかげで、誰かに先を越される心配も少ないんだけどね」

「それもそうですねえ」

「告白しても流されそうなレベルですからね」

「それに、女子高生には手が出せないってことなら、一番早く高校を卒業できる私たちが有利なのかも」

「オー。そういう考えもありですねー」

「果南さんはポジティブですわね」

「そりやあ長い付き合いだからねえ。…鈍感を治すのは、もう諦めたよ…」

「…ポジティブっていうか…」

「…悟っているんですのね…」

晴れやかな青空を見上げる彼女たち。

その表情は。

少しだけ曇っていたそう。

ボウリングと布屋さん

『カコーン!』

ピンがボールに弾かれ、音を立てて倒れていく。

複雑な形で残ってしまったピンを見て、先ほどボールを転がした女の子が苦笑いをしてしながら友達と話している。

そんな平和な姿を見て、俺は思わず微笑んでしまうのだった。

「モノローグで嘘をつかないでくださいます?」

「どうせひらひらしてるスカート見てテンション上がってたんでしょ?」

「ハルさん、顔に出てるぞら」

「最近の君たちは超能力でもあるかのように心を読むね」

今日はAZALEAのメンバーたちとボウリングにやってきた。

お客さんからボウリングの券をもらったので、偶然うちに来ていた彼女らを誘ったのだ。

「んー…ボウリングなんていつ以来かなー」

「私も久しぶりですわ」

「おらは初めてすら」

「そうかいそうかい。まあせつかくだし楽しんでつてくれ」

ちなみに俺も相当久しぶりである。

感覚が鈍ってなきやいいんだけど……どうだろうか。

受付とシューズのレンタルを済ませ、自分たちのブースへやってきた。

頭上に存在するモニターには、俺含めて四人の名前が表示されている。

『カナン』

『ハル』

『ハナマル』

『タイヤ』

「ちよつと待ってください」

「なんか一人名前がおかしいね」

「あはは！タイヤって！」

「変わった名前すら！」

「笑い事ではありませんわ！なんでこうなってますの!?!」

お腹を抱えて大笑いしているカナンちゃん。

遠慮しながらも笑いを堪えきれないハナマルちゃん。

対して、怒っているタイヤちゃん。

じゃなくてダイヤちゃん。

「受付に名前書いて出した時に、何かの不備があったのかな」

「誰ですの!?! 名前表を提出したのは!?!」

「私じゃないよー」

「俺も違うよ」

「…あ、丸だったずら」

思い出したような花丸ちゃん。

「…よく果南さんと笑ってられましたわね」

「か、完全に忘れてたずら。えっとその…ごめんなさい」

「…素直に謝られると怒る気が削がれますわね」

「まあまあタイヤちゃん。花丸ちゃんもきつとわざとじゃないだろうからね」

「そうそう。ここは抑えてね…ブフツ!」

「二人はバカにしますわよねえ!」

「いや、そんなことはな…ぐえ」

ダイヤちゃんからドリリンクが投擲された。

250mlの小さいやつだ。

「はあ…まあいいですわ。気を取り直してボウリングをやりましょう。花丸さんも気にしないでいいですわ」

「ダイヤさん…っ。優しいずらっ」

「花丸さんがドジするのは今に始まったことではありませんしね」

「そうそう。さすがダイヤ」

「うんうん。さすがダイヤちゃん」

「…それに、怒りの矛先はあちらに向きそうですからね」

「?」

ダイヤちゃんの怒りの視線がこちらに向いた。

まあ、花丸ちゃんが萎縮しているよりはいいだろう。

…俺と果南ちゃんが萎縮することになりそうだけど。

※

「さあ！チーム対抗戦ですわ！」

「ダイヤちゃん、勝負好きだね」

「私もだよ！」

「そういえば君もだったね」

「チーム対抗すら？」

「ええ。分け方は…くじ引きでいいでしょう」

「くじなんて用意してないよ？」

「スマホのアプリであるのですわ」

「そんなものもあるのかい。便利なもんだね」

「昨日曜さんに教えてもらいました」

「ダイヤ、それが見せたかったんだね」

スマホのアプリでくじ引きを行う俺たち4人。

その結果…

ハル・花丸 VS 果南・ダイヤ

「…いやいや。なんでこの組み合わせ？」

「なんでって…くじ引きだしね」

「年齢的なバランスは取れてるすら」

「能力は？」

「ハル、経験者なんでしょ？」

「俺の運動神経がよくないことは知ってるだろう？」

「球技のコントロールだけやたらいいのは知ってるよ」

「いや、確かにボウリングの球もコントロールは自信があるけど……」

「じゃあ大丈夫だね！」

「さあ、最初は果南さんからすわよ！」

「最近の君たちはスルー率が少し高いね」

「いよーし！って、まだボール持ってきてないよ」

「ボール、取りに行くぞら？」

「そうだよ」

「私が荷物を見ておくので、とりあえず3人で取りに行ってください」

「ん。頼むよ」

そんなわけで果南ちゃん、花丸ちゃんとともにボウリングの球を借りに行く。

棚に重さの違うボールが並べられており、好きなように持ち出せることになっている。

その種類は結構多く、初めて来た時はどの重さがいいか悩んだものだ。

歳をとって、それまで投げられなかった重さが投げられるようになったときは、自分も成長したものだとしみじみ思ったりもする。

「んー…ど、どれを持ってっいたらいいから？」

「とりあえず最初は軽いやつにしたらいんじゃないかな」

「じゃあこれなら？…おお、結構重たいからっ」

「大丈夫かい？俺が持とうか？」

「だ、大丈夫ならっ」

若干心配だが、まあさすがに一番軽いやつだし大丈夫だろう…多分。

それよりも俺は自分の心配をしないといけない。

何と言っても、俺のボールは…

「あれ？ハル、一番重いやつ使うの？」

「その通りだよ」

「大丈夫なの？」

「とりあえず片手で持てるくらいには大丈夫だよ。ほら」

「…顔が引きつってるけど」

「…気のせいさ」

両手持ちの状態から、実際に転がすまでに片手で持っている時間は非常に短いのだ。

だからうん、なんとか大丈夫。

その後、ダイヤちゃんもボールを持ってきて、全員の準備が完了。
いよいよ勝負開始である。

「よし！じゃあ行ってくるね！」

ボールを持ってブオンブオン回しながらレーンに向かっていく果南ちゃん。
それを見て花丸ちゃんが戦慄している。

「ま、まる、あんな風にボールを振り回せないでらっ」

「うん。大丈夫。あれは完全に悪いお手本だからね」

「果南さん！危ないですよ！」

「え？ああ、ごめんごめん」

「…ボール、すごく重いぞら。あんなに動かせないぞら」

「そうだね。俺を含めた普通の人間にはあれはできないし、あんな動きはボウリングに
必要ないから」

そんな話をしながら果南ちゃんを眺める俺と花丸ちゃん。

『パコーン！』

果南ちゃんの手を離れた球は勢いよくピンをなぎ倒していった。

「おぉー！全部倒れたぞらー！」

「初っ端からストライクかい。容赦ないね」

「ただいまー！どうどう？なかなかいい感じでしょう？」

「とてもいい感じだと思うよ。さすがだね」

「そうでしょう。えへへ」

話していたら、画面の表示が切り替わった。

『次に投げる人：ハルさん』

そんな表示になっている。

「次は俺の番だね」

「ハルさん、ファイトぞらー！」

「コントロールはいいようですし、期待してますわよ」

「かつこいいとこ見せてよね」

「ハードルがどんどん上がっていくね」

ボールを両手で持ち狙う場所を決める。

息を一つ入れ、モーションへ入る。

自分の身体能力には明らかに不釣り合いな重さのその球を、遠心力と慣性に任せて動

かす。

そして放たれたボールは、徐々にピンの方へ向かっていき……

『カコーン』

9本のピンを倒すことに成功した。

うむ、なかなか悪くないじゃないか。

などと思っていたら。

「球遅っ！」

「ハルさん、ボウリングでも球遅いんですのね」

「で、でも、フォームは綺麗だったずら！か、かつこよかったずらよ！」

「花丸ちゃんは励ましてくれるのかな？」

まあ彼女たちのコメントもおかしいわけではない。

俺の投擲する球は、コントロールこそ人並み以上だが、そのためにスピードを大幅に犠牲にするのだ。

当てるだけならまだしも、ある程度の威力あつてこそそのボウリングで、スピードが皆無というのは案外手痛い。

俺が重たいボールを使うのは、この威力不足を補うためなのだ。

そのせいで余計スピードが落ちてるのは確かだが。

ちなみに、人並み以上のコントロールという自信はあるが…

『ガコン』

「あー、惜しかったね」

「あそこが残ると難しいですわね」

「でも9本なら多いぞら！」

といった感じに、確実にスベアとかストライクが取れるほどの制球があるわけではないのだ。

そういうわけで、俺と素人の花丸ちゃんペアは、勝負するにはあまりに戦力不足なわけである。

「…まあ、別に頑なに勝たないといけないわけではないからいいか」

「ん？ハル、なんか言った？」

「いや、何も言っていないよ。こういう時間もいなくなって思ってたね」

「どうしたんですの、突然」

「なんとなくだよ」

「つ、次は丸ぞらっ」

花丸ちゃんがボールを持ってレーンへ向かう。

その後ろ姿を見ると、なぜか心配になるのは、俺だけじゃないはず。

「花丸ちゃん、力抜いて投げるんだよ」

「そうそう。スピードはいらぬからね」

明らかに未経験であることが伺えるフォームから投擲された一球。

スピードもなければ回転も綺麗とは言えないその一球。

いや、俺よりは早いけど。

それは、ゆっくりとピンの方へと吸い込まれていき。

『カコーン』

やがて全部のピンを倒すのだった。

「…あれ？」

「おおー！」

「なんてこった」

「ぜ、全部倒しちゃったぞらー！」

まさかのストライク。

ビギナーズラックってやつかな。

「すごいじゃん花丸ちゃん！」

「ええ、ハルさんより立派な数字ですわ」

「それは言わなくてもいいんじゃない」

「ハルさん、丸、やったずら」

「ああうん。ナイスだよ、花丸ちゃん」

そんな一言とともに花丸ちゃんとハイタッチする。

小さい手だなあ。

「えへへ。嬉しいずら」

「さて。それじゃあ私の番ですわね」

「ダイヤー、かつこいいとこ見せてよー」

「ふふ。最善を尽くしますわ」

ダイヤーちゃんのダイナミックなフォームから投げ出された一球。

果南ちゃんほどではないが、結構なスピードでピンに向かっていき

『カコーン!』

8本のピンをなぎ倒した。

「うーん…嫌な残り方したね」

「スプリットっていうんだっけ、こういうの」

「すぷりつと?」

「そうそう。ああやって真ん中が空いて両サイドが残っちゃうことだよ」

「あの形だと両方倒すのは難しいんだよね」

倒し方としては、片方に上手いこと当てて弾いたピンでもう一本を倒すのが一般的。もしくは、コースと回転で球を曲げて両方に当てるかかな。

前者は、スピードのない俺にはまず不可能である。

いや、後者も狙ってできるほど技術はないけど。

ダイヤちゃんは前者のやり方で倒そうとしたみたいだが、残念ながら一本倒すのが一杯の結果となった。

「んー…ダメでしたわ」

「いやいや、9本は別に悪いスコアじゃないでしょ」

「同感だよ」

「これでチーム同士のスコアは同点ずらね」

「勝負はここからだね」

※

帰り道。

助手席に花丸ちゃんを乗せ、後ろに3年生二人という布陣で車を走らせる。

筋肉痛で震える腕を動かし、ハンドルを握っている現状。

結果的に。

やっぱり俺と花丸ちゃんのチームが負けた。

しかしながら、予想を裏切って思いの外善戦できた。

その理由として大きなのは、花丸ちゃんの活躍である。

果南ちゃんほどではないものの、結構なスコアを稼ぐことができていた花丸ちゃん。

一方俺の方は比較的安定して点が取れるのだが、大きく稼ぐというのはできず、ギリ差をつけられることになったのだ。

ちなみに果南ちゃんは言うまでもなく安定してハイスコアを稼いでいた。

逆にダイヤちゃんは相当なムラがあった。

稼ぐ時は一気に稼ぎ、稼げない時は平気でガーター連発とかやってたし。

「うーん、楽しかったね!」

「ええ。勝負も無事勝てましたし」

「丸も負けちゃったけど楽しかったぞら!」

「そうだね。筋肉痛がとんでもないことになりそうだけど」

「それはハルが運動不足だからでしょ」

「否定はできないね」

「もう。適度な運動は重要ですよ?」

「それはわかるけどね」

「ハルさん、運動嫌いじゃ？」

「そういうわけじゃないよ。体を動かす機会がなかなかないんだ」

「じゃあ私たちと練習する？」

「体力が着く前にお陀仏になりそうだし遠慮しとくよ」

ボウリング3ゲームで腕が震えている俺の体力で、A q o u r sの子たちと練習なんてしたら、本当に命が危険に晒されそうだな。

なんてことを思っていたら、花丸ちゃんが質問をしてきた。

「そういえばハルさん、前にもボウリングをやった経験があるって言ってたぞら」

「そうだね。それがどうかしたのかな？」

「いつ、誰とかなー…なんて」

「誰って…高校生のときに、友人とね」

「友人？ハルさん、男性のご友人がいたのですか？」

「それは一体どういう意味で受け取ればいいんだい？」

「ハルの周り、女の子多いもんね」

「それに関しては偶然だよ。そもそも高校は男子校だったわけだしね」

「ああ、そういえばそうだったね」

「じゃあ男性の友達と行ったんですのね」

「ああ、安心したずら」

あれ？

なんか勘違いされてるな。

「いやいや、一緒に行ったのは女の子だよ」

「…ええ？」

「…は？」

「…ずらっ？」

その瞬間。

車内の温度が少し下がった気がした。

凍る…とまでは行かないが、ひやりとするような感覚が肌を襲う。

あれ？…なんで？

「…ハルさん、冗談はやめていただけます？」

「…うん、ほんとにね」

「…俺が嘘をつけないのは、君たちがよく知ってるはずだけどね」

ちなみに、その一緒に行った女の子というのは、美渡さん。

つまりは千歌ちゃんのお姉さんである。

テスト終わりの打ち上げで遊びたいから付き合えと連れ出されたのだ。

5ゲームやって、腕がしばらく使い物にならなくなったのをよく覚えている。今でこそあれだが、美渡さんだってその当時はまだ立派に女の子だったのだ。なんてことを直接言ったら本当にしばらくかれそうなので、口にはしないが。

そんな話をしようと思っただけだ。

「そんな、ハルが…高校生の時に女の子と…」

「ありえせんわ…」

「お、お私たちの知らないところにライバルが…」

失礼なような、そうでないような。

なんにしても、とてつもなく驚愕している彼女たち。

そして、理由はわからないものの溢れている負のオーラ。

心臓を直接締め上げるような空気に、口を開けなかったのは言うまでもない。

お勉強と布屋さん

とある月曜日。

そんな日の午前10時頃。

「宿題がね！やばいの！」

バンツと、叩き割らん勢いで千歌ちゃんが机を叩く。

「話は聞くから、机を叩くのはやめてくれるかい」

「今言った通りだよ！宿題がやばいの！」

「君は俺の話を先に聞こうか」

言いながら机を叩く千歌ちゃん。

もう何度目ともしれない注意を口にしつつ、事情を聞く。

本曰うちへやってきたのは千歌ちゃん、曜ちゃん、ルビイちゃんの三人。

A q o u r s のユニットの一つであるC Y a R o n ! のメンバー達だ。

騒がしき…ではなく元気が売りの彼女達は、今日も今日とてその元気っぷりを見せて

けてくれている。

でも、いい加減机がかわいそうなので少し遠慮して欲しいところだ。ちなみに、俺と千歌ちゃんのやりとりを見て、曜ちゃんルビイちゃんは苦笑い気味である。

今日は祝日で学校はないらしく、A q o u r s の練習もお休みらしい。

そんな日に午前から来るのは珍しいなと思ったら、この状況である。

「宿題が…どうしたんだい？」

「全然終わってないの！」

「…それで？」

「手伝って！」

思わず言葉を失う。

別に宿題をやつてないことについてどうこう言うつもりはない。

自分が高校生だった頃に似たような経験はあつたしね。

言葉を失つた理由はそこではないのだ。

思わず呆れてしまった理由。

それは。

「…俺の学力を知ってるだろう。最低限教えることはできても、宿題を効率よく手伝えるほどの能力はないよ」

「それでもいいから！」

「いやまあ、君がいいならそれで構わないけどね」

「本当に!？」

「うん」

店も今日は休日で、特に断る理由もないしね。

と、そこであることに気付く。

「そういえば、千歌ちゃんはわかるけど、曜ちゃんとルビィちゃんはどうして来たんだい？」

曜ちゃんも、勉強が特別得意というわけではない。

しかしながら、部活のこともあるし最低限課題はこなすタイプだ。

ルビィちゃんは言うまでもなく根が真面目。

ダイヤちゃんから言われることもあるだろうし、本人がそもそも課題とかそういうのをサボるタイプではない。

要するに、千歌ちゃんと一緒に宿題で悲鳴をあげる二人ではないはずなのだ。

はずなのだが…。

「あー…あはは」

「その…すいません」

バツの悪そうな顔をする二人。

君たちもかい。

「君らが宿題をやつてないというのは珍しいね」

「いやー最近いろいろ立て込んでてさー」

「まあ忙しかったのはわかるよ」

「お、わかってくれる？さすがハルくん！」

「でも、やらなくていい理由にはならんからね」

「うげー。わかってるよおー」

口を尖らせる曜ちゃん。

かわいい。

「わ、私は自分なりにやっただんですけど…やる場所を間違えました」

半泣きで言うルビィちゃん。

なんというか…らしいといえづらい。

「やる場所って…何ページくらい間違えたんだい？」

「10ページほど…」

「なんというか…お疲れ様。手伝うから、一つずつ終わらせよう」

「はい…」

そんなわけで彼女達の宿題を手伝うことになった。

「とりあえず三人とも奥の部屋に行つててくれ」

お茶を取りに冷蔵庫へ。

ついでにメモ帳とシャーペンを持って和室へ行く。

部屋に入ると、すでに三人とも課題を開いていた。

「今更だけど、宿題で手伝うことつてあるの?」

「普段ならないんだけどね。今回の数学の宿題さ、答えが用意されてないんだよ」

「そうそう。なのに全問解いて来いって言われててさ」

「……言いたいことはわかるけどね。もう少し……自力で解こうという気概をだね」

「え?そもそも宿題つて答え見ないでやるものじゃないんですか?」

「……………」

「後輩に何か言つたらどうだい、君たち」

ルビイちゃんの素直な質問に、目線を逸らす先輩二人。

まあこの子らの気持ちも分かるけど。

早い話、彼女達では解けないところを解いてくれることだろう。

「でも俺、正直全部の模範解答考えられるほど勉強はできないよ。それはいいのかい?」

「それでいいんだよ! 私たちが全問正解なんてしたら、それこそ誰かのやつ写したつて

思われちゃうでしょ！」

「いや、実際に俺のやつ写すんだよね？」

「ハルくんは生徒じゃないから大丈夫」

「そんなもんかい」

「うん！」

というか間違えるのが前提になつてゐるのか。

否定は仕切れないけど、若干腑に落ちない。

「まあいいか。それで、ルビィちゃん俺にどうして欲しいのかな？君は答えももらつてゐるだろうし、あつても仮にあつてもそれを写したりはしないだろうに」

「は、はい。ただその…答え見てもわからなかつたところを教えてもらいたくて」

「ああ、なるほど」

表現は悪いが、宿題ごときでそこまでやる必要はあるんだろうか。

いや、勉強ができる子はみんな宿題とかも真面目にやつてるんだろう、きっと。

「よし、じゃあ始めようか」

「「おおー！」」

「が、がんばるびい！」

これだけ気合が入ってゐれば、3、4時間くらいは集中が続くかな。

※

「ううう…疲れた」

「私も…」

「…2時間で潰れるとは思わなかったよ」

「だって」

「もう、数字は見飽きたよ」

「じゃあ…ほら、このページをやったらどうだい。文字がいつぱいだよ」

「ぎやあああ！こんなのも残ってるの!？」

「いやあああ！やりたくなああい！」

「二人ともやかましいよ。ルビイちゃんは真面目にやってるんだから邪魔しないようにね」

「あ、大丈夫ですよ」

苦笑いしながらそう言ってくれるルビイちゃん。

いい子である。

とはいえ、時刻は正午。

そろそろお腹も減る頃だろうし、休憩のタイミングとしては悪くないだろう。

「あれ？ハルくんどうしたの？」

「お昼ご飯を用意しようと思ってるね。軽く何か作るよ」

「おー！いいねいいねー」

「あ、何か手伝いますか？」

「いや、大丈夫だよ。勉強しながら待ってておくれ」

「うへー。りようかーい」

「りようかーい」

不満顔で敬礼をしている2年生二人。

こんなペースで終わるんだろうか。

「はい、今日はオムライスにしたよ」

「いえーい！」

「いえーい！」

「い、いえーい？」

「無理に先輩に合わせなくてもいいんだよ、ルビィちゃん」

冷蔵庫に余っていた食材を使って作ったオムライス。

評判はいいみたいだ。

「んー、おいしいー」

「いやー、疲れた体に染み渡るねえ」

「すごい美味しいです」

「それはよかつたよ」

「ハルくん、ご飯作るの上手だよね」

「君らの好みを知ってるだけだよ。万人受けするほど美味しくはないさ」

「そうかなあ。これならうちの旅館でも出せるよ!」

「ほうほう。じゃあ店が潰れたら千歌ちゃんのところまで働かせてもらおうかな」

「ほ、ほんとに!?!」

「ん? まあ、潰れるようなことは極力避けるけどね」

「お、お店が潰れればハルくんがうちに…」

小声でよく聞こえないけど、なんだか千歌ちゃんが物騒なことをつぶやいている気がする。

「むー…」

「どうしたんだい、曜ちゃん」

「なんでもないもん！」

「？」

よくわからないが、曜ちゃんが口を尖らせている。

んー……こは話題を変えたほうが良さそうだ。

「そういえば、今日はなんでうちに来たのかな？」

「なんでって……勉強するためでしょ？」

「ああいや、それは分かるんだけどね。君たちの場合は勉強を教えてくださいそうなメンツが周りにいるだろう？」

千歌ちゃんの場合は姉が二人いる。

ルビイちゃんも同じく優秀な姉がいる。

曜ちゃんにしても、梨子ちゃんとかA q o u r sの先輩とか勉強を教えてくださいそうなメンバーはそれなりにいるはずなのだ。

「なんでわざわざわざわざうちだったのかな、って思ってたさ」

「決まってるでしょー。その周りの人たちが教えてくれなかったからだよ」

「教えてくれなかったって、志満さんや美渡さんがかい？」

「そうそう。自業自得だーって言われてさー」

「まあそれも正論だけどね」

「でもー」

「ちなみに梨子ちゃんも教えてくれなかったよ。というか、ダイヤさんが禁止したんだけどね」

「ダイヤちゃんが？」

『スクールアイドルであることを理由にして、勉強ができないなどと言うことはあつてはなりませんわ』

『まして、学校に与えられた課題で人のものを写すなど問題外!』
『というわけで、みなさん必ず自力で解くように!』

「だつてさー」

「なんとというか…さすがダイヤちゃんだね」

「真面目すぎるのも困り者だよー」

「まあそれも彼女のいいところだからね」

「あはは…あ、そういえばハルさんは宿題とかは真面目にやってたんですか？」
「俺? んー…そうだね。わりと真面目にやってた方だと思うよ」

「そうなの!？」

「嘘!？」

「…失礼な反応だね君たち。うちはばあさんが厳しかったからね。なんだかんだで真面目にやってたよ」

「そうなんですか」

「でもハルくん、成績って中の中じゃなかった?」

「元がよくないんだよ。だから真面目にやったところで、特別いい点はとれなかったの
」

「へー。でもなんかハルくんっぽいね」

「自分でもそう思うよ」

そんな雑談をしつつご飯を進める。

それから2時間ほどして、再び勉強を開始するのだった。

※

「お、終わったあああ…」

「つ、疲れた…」

「うゆ…」

そんな声とともに机に突っ伏す三人。

あれからさらに数時間かけてようやく全員が宿題を終えたのだった。

「お疲れ様三人とも」

「う〜い…」

突っ伏しながらガツポーズを見せてくれる千歌ちゃん。

もう顔を上げる力も残ってないらしい。

「…冷蔵庫に羊羹があるんだけど、食べるかい？」

「食べるー」

「私もー」

「る、ルビイもいいですか？」

「そりやもちろん。三人分持ってくるよ」

冷蔵庫を開けて羊羹を取り出す。

あらかじめ切り込みが入れてあり、ちょうど3分割されている。

お盆に取り分けようの皿と爪楊枝を乗せて奥の和室へ。

三人ともさつきまでと変わらず机に突っ伏していた。

「持ってきたよ。取り分けるからちよつと待って…」

そこまで言った時だった。

「ハルクくん」

曜ちゃんの一言に遮られた。

「どうしたんだい」

「私、今、とても疲れてます」

「そうだね」

「手を動かす元氣、もうないの」

「それは困ったね」

「でも、羊羹は食べたいのです」

「…どうしたいんだい？」

多分何か伝えたいんだろうけど、俺にはまだ分からない。考えていたら、曜ちゃんが顔だけ上げてこつちを向いた。

「手が使えないけど、口は開きます」

「そうだね。喋れてるもんね」

「そして、羊羹が食べたいのです」

「…それで？」

「さすがに分かるでしょー。ほらー」

そうやって口を開けている曜ちゃん。

その姿はさながら、餌を待つ雛鳥である。

まあ要するに、食べさせろと言うことだろう。

断る理由もないし、役得つてことでやらせてもおうじやないか。

「はい、じゃあ口開けてね」

「あ、う、うん」

「どうしたんだい。もしかして間違つてたかな？」

「え、あ、いや、そうじゃなくてね。うん、こ、心の準備が…」

「なんのときさ。ほら、あーん」

「あ、あーん…ん」

口に入れてまたすぐ下を向いてしまった。

気のせいかな耳が赤い気がする。

「味はどうだい？」

「…あんまり分らない」

「もうちよつと味わっておくれよ」

「うるさいバカ」

「なんでさ」

頭に疑問符を浮かべていたら、裾を掴まれたことに気づく。

掴んでいるのは…

「ルビイちゃん？」

「は、ハルさん」

「どうしたんだい？」

「…ルビイも、手が動かないです」

「…ふむ」

「…でも羊羹は食べたいのです」

「…あー…顔、上げられるかい？」

「はい」

曜ちやんと同じく、口を開けるルビイちゃんにあーんをしてあげる。

曜ちやんよりさらに小動物っぽさが見える。

「おいしいかな？」

「うゆ…はい…」

「あれ？」

ルビイちゃんまで顔をつつ伏してしまった。

さつきからどうしたんだろうか。

そんなことを考えていたら、また裾を掴まれた。

「今度は千歌ちゃんかい」

「二人だけずるい」

「君も羊羹食べたいのかな？」

「そういう事じゃないけどそれでいいよ」

「えつと…じゃあほら、口開けてね」

「うん！はい！あーん！」

「…どう見ても元氣いっぱいに見えるんだけど」

「気のせいだよ！ほら！」

「まあいいけどさ。はい、あーん」

「ん…んー、おいしい！」

「それはよかった。じゃあこのあとは自分で…」

「あーん」

「…何をしてるんだい？」

「何って、まだ羊羹あるでしょ？」

「あるけど」

「だからほら。あーん」

「…あーん」

「ん。えへへ」

満面の笑みを見せてくれる千歌ちゃん。

なんというか、羊羹でここまで喜んでくれるというのはありがたいものだ。

「つてちよつとハルくん！こつちもまだ羊羹残ってるよ！」

「こ、こつちもです！」

「ええ？君たちもかい」

「ほら！」

「ハルくん！」

「あーんです！」

そう言いながら机をバンバンする三人。

どう見ても元氣余ってるよね。

そう思いつつも、可愛らしい三人を前に文句は言えないのだった。

とある夜と布屋さん

とある夜。

いつもなら睡眠に着くこの時間。

俺はいつもと違うベッドに寝転がっていた。

天井に広がるのはいつもの和室の風景…ではない。

シミなど一切ない綺麗なその天井は、逆に俺から落ち着きを奪う。

夜でもエアコン完備。

冷蔵庫の中の飲み物は飲み放題。

一人で使うには大き過ぎるベッド

そして、ふかふかの布団。

何一つとつても、俺が普段寝ている環境とは異なっている。

その環境というのは…

「まさか、マリーちゃんのとこのホテルに泊まる機会があるとは…」

この辺でも最高級のホテルである小原家所有のホテル。

その一室に、俺は宿泊しているのである。

なぜこんな事態になっているのか。

理由は非常に簡単である。

家の近くの電線が断線し、電気がストップしたため。

1日くらい電気がなくても大丈夫だろと言われればその通りなのだが、いい機会だからと宿泊させてもらう事になった。

いい機会というのは。

『今日は、Guilty Kissのメンバーでお泊まり会をやるのよ』

『どうせハルも家で電気が使えないなら、うちに泊まる方がいいと思いまーす』

『できればその、ハルさんがブレーキ役としていてくれると嬉しいな…なんて』

という事である。

こちらとしても願ってもいない機会なので、喜んでお願いした次第である。

しかし。

しかしだ。

どうやらこの環境は俺には贅沢過ぎたらしく、現状のように寝つきが悪いという事態になったわけだ。

我ながら、貧乏生活が板についていると思う。

※

「……一旦散歩でもするか」

あれから10分ほど目を瞑っていたが、やはり眠りにつく事ができなかった。なので、気晴らしに外を散歩する事にする。

散歩といっても、本当にホテルの周りをうろうろした程度。

ほんの15分程度だ。

それでもほどよい疲れが体を包み、気分良く寝れそうな状態で布団に入ろうとしたその時。

布団の妙な膨らみに気付く。

「……なんだこれ」

どう見ても妙な状態で膨らむ布団。

若干の警戒をしつつ、ゆっくりとめくっていく。
すると。

「……………グッドイブニング、ハル」

「……………うん、こんばんはマリーちゃん」

そこにはマリーちゃんがいた。

「……………」

「……………」

お互い、目は合わせているものの言葉を発する事ができない。

しばらくして、ようやくマリーちゃんが口を開くのだった。

「…その、これには事情があるの」

「…とりあえず聞くから、話して見てくれ」

「…トイレ行つて、帰り道が分からなくなつて」

「…ここ君の家だよ。しかも部屋にトイレあるよね」

「……………」

「……………」

再びの沈黙。

なんというか、とても反応に困る。

とはいえ、ずっとこのままというわけにもいかない。

仕方なく、こちらから事情を聞く事にする。

「怒らないから、事情を話してくれると嬉しいよ」

「ハルの布団に入り込み：間違えた、人肌恋しくなつたんでーす」

「いやいや。君の部屋には今日善子ちゃんと梨子ちゃんもいるだろう。その二人で我慢しておくれ」

「なんていうか：サイズの問題で」

「だからって男と二人で寝るわけにはいかんだろう。諦めてくれ」

「ぶー。ハルは私と寝るのが嫌なんですか？」

「そんなわけないでしょうに。でもね、俺がここで選択を誤ると、明日から俺の寝床は家じゃなくて監獄になるんだよ」

「：なんでハルのとこに来たか全くわかってないでーす：」

「なんか言ったかい？」

「言つてないでーす。この鈍感！」

「ぐえ。枕を投げたら痛いじゃないか」

「ハルなんて枕の山に埋もれて寝れなくなっちゃえばいいんだ！グツナイ！」

そのまま部屋を出て行ったマリーちゃん。

なんで怒ってたんだろう。

「…寝れない」

マリーちゃんとのやり取りで目が覚めてしまったこともあり、結局あの後また寝れなくなつた俺。

「…もう一度散歩でもするかな」

今度はホテルから少し離れたところまで歩いた。

時間はさつきの散歩から少し長く、20分ほど。

再び程よい疲れをまとつた状態で布団に入り込もうとしたとき、またしても違和感に気付く。

布団に膨らみがある。

「…マリーちゃん、また忍び込んだのかい」

ため息を吐きながら布団をめくると…

「…あ」

「……………」

そこには墮天使の姿が。

じゃなくて。

「…善子ちゃん」

「な、何よ」

「…俺の言いたい事が分かるかい」

「…きよ、今日はその、堕天使が横で寝てあげるわ」

もじもじしながら言うヨハネちゃん。

慣れていないセリフは言うもんじゃないね。

「理由を聞こうか」

「そ、その、冷蔵庫が止まってお気に入りのお菓子が全滅したハルを励ましてあげようと思ってる」

「とてもありがたい提案だけど、丁重にお断りさせてもらおうよ」

「な、なんでよ！」

「堕天使と一晩明かすと、今度は俺が堕天使しそうだからね」

「は、ハルも堕天使になるの？」

「どちらかというと獣とか狼か…いややめておこう」

「へ？」

「ともかく、簡単に男の部屋に忍び込んだりしてはいけないよ」

「…ハルのところ以外行かないわよ…」

「もう一度頼むよ」

「なんでもないわよバカ！」

「いた。…まさか一晩で二回も枕を投げつけられるとは思わなかったよ」

「ふん！ハルなんて、枕の山に埋もれて寝れなくなっちゃえばいいのよ！」

怒って部屋を出て行く善子ちゃん。

マリーちゃんの時とデジャヴを感じる。

わざわざ励ますために来てくれたのはとても嬉しいが…

マリーちゃんといい善子ちゃんといい、もう少し危機感を持つて欲しいものである。

「…やっぱり寝れない」

善子ちゃんとやり取りにより、再び四散してしまった睡魔。

あの墮天使はこの睡魔という魔物だけはきっちり退治してくれたようだ。

などとくだらない事を考えていても、睡魔が蘇るといふ事はしばらくなさそうだった。

「…散歩かな」

本日三度目の散歩。

さすがにもう遠くまではいけない。

今度は非常に短い距離の散歩。

だいたい5分程度歩いてから部屋に戻ってきた。

なんだかんだ言って疲れたがたまりつつある事もあり、比較的すぐ眠くなってきた。うん、これなら寝れそうだ。

思いながら布団に入ろうとして、違和感に気付く。

布団にまたしても膨らみがある。

「……………」

さてどうしたものか。

などと考える事はもうない。

もう三度目ともなれば慣れたもの。

躊躇なく布団をめくるとそこには…

「…あ」

「……………くんぼんは梨子ちゃん」

「あ、えつと…こ、くんぼんは」

「理由を話してくれると嬉しいんだけど」

「…その、みんながハルさんの布団に潜り込んだって聞いて…」

「…わざわざ話したのかい、あの二人は」

「それでその…わ、私だけやってないっていうのは…」

「ああ、仲間はずれみたいで嫌だったのかな」

「え？ いや、そういうわけじゃ…いえ、それでいいわ」

「お？」

少し違つたらしい。

「他の二人にも言つたけど、仮にも男の部屋に夜忍び込むのはさすがに危ないよ。俺じゃなかったらどうなつてたことか」

「…ハルさん以外の人のところに忍び込むわけないでしょ…」

「もう少しポリウムを上げてくれると嬉しいよ」

「朴念仁つて言つたのよ」

「そんなに短い言葉だったかな」

「もう！ハルさんのバカ！」

「ぐえ。…二度ある事は三度あるつてやつかな」

枕が投擲された。

今晚三度目である。

「ふん！ハルさんなんて、枕の山に埋もれて寝れなくなつちやえばいいんだ！」

「なんでみんなそのセリフを残していくんだい」

どう考えても偶然かぶる言葉じゃないはずなのに。

※

あれからどれくらい経ったんだろうか。

彼女たちとのやり取りで、程よく疲労が溜まったらしくあの後すぐ眠る事ができた。

のだが、どうにも寝苦しさを感じ目が覚めてしまった。

なんというか、体の動きが制限されているような…

重たい瞼をなんとか開け、自分の体を視界に捉える。

真つ先にそこに映ったのは、自分の腕ではなく、とある女の子。

というか。

「…マリーちゃん…」

「んん…ハルー…」

完全に寝ているらしい。

こうなるとさすがに起こし辛いな。

なんて思っていたら。

「私と一緒に墮天…うへへ」

「…善子ちゃんもかい」

というか、その一緒に墮天したのって俺じゃないよね？

いや、どうでもいい事なんだけどき。

「うーん…ハルさん…ふふ…」

「…で、息苦しさの正体は君かい」

胸のあたりに顔を乗っけている梨子ちゃん。

どうやら三人に取り押さえられるようにして掴まれていたようだ。

これ自体は男としてはこの上ない幸福なわけだが…。

「…さすがに、ちよつと寝苦しいんだけど」

なにせ身動きがまともにとれないのだ。

せめて寝返りが打てるくらいのスペースくらいは確保したい。

そう思い、彼女たちの拘束を解こうとした。

しかし。

「気のせいか、解こうとすればするほど締め付けがきつくなっている気がする」

というか気のせいじゃない。

動こうとすればするほど、腕を掴む手に力が込められている。

つて、いやいや。

いたたたたたつ。

折れる、というか外れるっ
ぬぐおおおおおおおお。

声を出すと彼女たちを起こしてしまいそうなので出せないが、これは痛い。

いつそ一旦起こして解いてもらおう。

そう思つた時だ。

「すー…」

「むにゃむにゃ…」

「すびー…」

三人の天使のような寝顔を見てしまった。

ああ。

これは…

体の痛みと、彼女たちの可愛らしい寝顔が天秤にかけられる。

結果は言うまでもない。

「今のうちに、きつちり目に焼き付けておくとしようじゃないか」

徐々になくなりつつある感覚を無視し、全神経を目に集中するのだった。

翌日。

全身が痛みのあまりしばらく動かせなかったのは、言うまでもないことだろう。

※

「ハル、本当に手はださなかつたねー」

「分かつてはいたけど、なんとなく複雑だわ」

「女として魅力がないのかって思っちゃうよね」

「ハルの事だし、魅力は感じてるんだろうけどねー」

「口ではセクハラ発言ばかりのくせに、結局一線を越えようとはしないわよね」

「それだけ大人って事なのかなあ」

「それもあるんだろうけど、多分ハルのおばあちゃんの影響だと思うヨ」

「…ああ、そういえば厳しかったわね」

「だとしたら、まだまだ先は長いのかなあ」

「でしようねー」

そんな会話が あつたことは、ハルには知る由もなかつた。

駄弁るAqoursと布屋さん

梅雨。

日本に住んでいる以上、決して避けられぬこのシーズン。

雨が降り、湿度が増し、夏に片足突っ込んだ季節であるがために不快感指数が急激に上昇するこの時期。

我らが布屋にも、そんなシーズンに心を折られた者が来ているのだった。

「もー！ほんつと、雨ばっかりで嫌になっちゃう！」

「ほんとずらー！毎日毎日、雨雨雨！本もベタついて読みにくくなるずらー！」

「気持ちわかるけど、あまりお店で騒がないでくれるかな」

「だってえ…」

本日うちんにやってきているのは、千歌ちゃんと花丸ちゃん。

珍しい組み合わせに見えて、息が合いそうなコンビだと思ふ二人である。

そんな彼女たちは、今日もスクールアイドルの練習のために準備に取り掛かっていたそう。

他のメンバーたちがそれぞれの用事で少し遅れる中、この子たち二人はすぐにでも練習が始められるように気合を入れて準備を行っていた。

準備が完了し、いよいよメンバーが揃うのを待っただけ！という時だった。

「なんであのタイミングで雨が降るのー！」

「神様のいじわるずらー！」

「神様はそんな小さいいじわるしないんじゃないかな」

というか、仮にもお寺の娘がそういうことを言っていていいのか。

俺は特に気にしないけどさ。

何はともあれ、彼女たちの言うようにせっかく練習の準備は万全となっても、屋上で練習をしている彼女たちにとって、雨はダメなのだ。

どれだけやる気があっても、それは安全面を軽視する理由にはならない。

そんなわけで、盛大に溢れたこのやる気だけが現状行き場を無くして暴走しているわけである。

気持ちにはわからんでもないが、正直やかましい。

「練習はできないけど、そのまま外でも走ってきたらどうだい？」

「今雨降ってるよー！」

「君はそういうの気にしないじゃないか」

「今日はそのなんていうか…お日様の下で練習したかったの!」

「そうすら!それに、こんな雨の中で練習なんてしたら風邪をひいちゃうすら!」
「それについては心配いらないよ。なんとらは風邪ひかないって…ぐへ」

大事などこはぼかしておいたのに、言い切る前にクツションが飛んできた。

うちの商品の一つなのだが、最近投擲される事が当たり前になりつつある。

「まあその…なんだい。他の事で気を紛らわせたらいんじゃないかね?」

「他の事…?」

「例えば何すら?」

「なんでもいいよ。暇つぶしになるような事、何か考えたらいいじゃないか」

「ん…あ、じゃあなんかお話ししようよ、ハルくん!」

「…元気に暴れたいんじゃないの?」

「口を元気に動かせばいいから!」

「おー!丸もお話ししたいすら!」

「君らがそれでいいならいいんだけどさ」

さつきまでお日様どうこう言ってたけど、それはいいんだらうか。

俺と話すという行為、どう考えても元氣ハツラツにやることではないと思う。

もちろん、彼女たちが一方的にテンションを高く話すのは自由だが…。

やかましすぎないようお願いしたいものである。

※

「じゃじゃーん！実はこんなものを持ってきているのです！」

「これは…本かな？」

「恋愛心理学ずら？」

「そう！盛り上がる話題といえ、やっぱり恋バナ！でもハルクくんはその手の話は全然面白い話がないから、心理テストっていう形で盛り上がろうと思つて！」

「なんかバカにしてない？」

「なるほど。それなら超鈍感で鈍すぎるハルさんでも恋バナに参加できるずら」

「ねえ、やっぱバカにしてるよね？」

「じゃあ早速いつてみよー！」

「おおー！」

俺の話は一切聞かずに話が進んだ。

とてつもないスルーっぷりである。

というか、もともとは外で遊べない鬱憤を晴らすためにうちに来ていたはずなのに、

どこからそんな本を取り出したのか。

もしかしてずっと持ち歩いていたのか？

だとしたらなんというか。

察しがいいというか勘がいいというか。

なんにしても、ご苦労なことである。

「お題は、恋愛偏差値測定ってやつだよ」

「ドーンと来いずら！」

「恋愛偏差値？」

「恋愛偏差値」

「その偏差値はどこに基準を設けているんだい？」

「細かいことは気にしちゃダメずら」

「そうそう。高ければ高いほどいいんだよ！」

「そういうものかい」

恋愛偏差値が高いってことは、恋人ができやすいってことなのかな？

それとも、モテやすいってことなのかな？

なんにしても、俺の恋愛偏差値は低そうだけど。

「とうわけで質問です」

「うむ」

Q1. 好きな人にどうやって告白する？

「告白…」

「4つの選択肢から選んでね」

「普通に告白、告白待ち、ムードを作って告白、見守り続ける…と」

「うーん…私は普通に告白かなあ」

「丸も…多分普通に告白するぞら」

「俺は…うん、多分普通に告白するだろうね」

「ええ!? ハルくん、好きな子いるの!?!」

「ぞら!?!」

「なんでそうなるんだい。仮にいたとしても、そんなに驚くことかね」

「そりゃ驚くよ!?!というか、ほんとにいるの!?!」

「だ、誰ぞら!?!」

「食いつきすぎだよ。ちよつと落ち着いてくれ」

ひとまず彼女たちを落ち着かせ、お茶をすする。

俺の好きな人くらい、この子たちもよく知っているだろうに。

「それで、ハルくんが好きな人は誰なの!？」

「誰って…君らも分かっているじゃないか」

「分かっている…?」

「……あ」

「俺が好きなのは女子高生だよ」

「言い切った!」

「って、そうじゃないでしょ!?!好きな人だよ!好きな人!」

「机をバンバンしないでおくれ」

「範囲広いぞら!もうちよつとこう…絞って!」

「じゃあAqoursのみんなが大好きだよ」

「…う、嬉しいけど…そうじゃなくて」

「…こういうのはずるいぞら」

怒ったり赤くなったり忙しそうだ。

それから少しして、2問目の質問へと移行。

Q2. 初デート！どこへ行く？

「これは、恋人になつてから初めてののつてことだよね？」

「そりゃあそうでしょ」

「恋人になる前にも、二人きりで出かけることはあるかもしれないけど、それはデートにはカウントしないのかね」

「カウントするかもしれないけど、なんかこう…気分が違うでしょ」

「まあそうだね」

ちなみに選択肢は、遊園地、水族館、ゲーセン、相手任せの4つである。

「んー…私は遊園地かな！二人で色々遊びたいし」

「丸はあまり賑やかだと目が回っちゃいそうだし、水族館かなあ」

「俺は…うん、多分相手任せだね」

「えー」

「ハルさん、男らしくないぞら」

「そう言われてもね」

確かに、こういうとき率先して行き先を決められる人物というのは男らしさがあるの
だろう。

逆に言えば、それがパツとできないからこそ、俺には彼女がないのだとも言えるわ

けで。

「まあ、誰かと付き合う際は俺を引っ張ってくれそうな人と付き合うってことでね」

「確かにハルくんの周り、なかなか男らしき溢れる女の子多いもんね」

「そういうことさ。何事も適材適所にね」

「それは何か違う気がするすら」

正直なところ、恋人とデートなどしたことがないので、どこに行くかと言われても実感がわかないのである。

実際に恋人ができれば、きっと相手に合わせて行き先も変わるだろうし。

だから、本音の回答としては、相手次第で変わると言ったところかな。

そのまま、いくつかの質問に答えていく。

そしてついに最後の質問となった。

質問の内容は。

『恋人に言って欲しい言葉』

「ほう」

「言って欲しいこと…」

「ずら」

ちなみに選択肢だが。

『好きだ!』、『愛してる!』、『一生一緒にいたい』、『一緒にいると落ち着くよ』の4つである。

「私はやっぱり、ストレートに『好きだ!』って言われたら嬉しいなあ」

「愛してるじゃないんだね」

「そ、そこまで言われると、し、心臓が耐えられないかも…」

「なるほど」

実に乙女チックな理由である。

「丸は、一緒にいると落ち着く…かな」

「ああ、なんかわかるよ」

「花丸ちゃんらしいねー」

「そ、そうかな? えへへ」

花丸ちゃんの・場合は実際そばにいますと落ち着くし、言われることも今後あるだろう。

「それで」

「ハルさんはどれずら!?!」

「そうだねえ」

恋人。

つまりは好きな人。

であるならば、どれを言われても嬉しいことには変わらないわけだ。

逆に言えば、どれかに絞るといふのは難しいわけで。

「どれを言われても、嬉しいとは思うんだけどね」

「そういうのいらないから」

「早く決めるすら」

「なんか厳しいね君たち」

うーん…

そうだなあ。

あえて一つに決めるなら…

「一生一緒に…かなあ」

「おおー」

「なんでずら？」

「恋人になる以上、長く一緒にいたいじゃないか。相手もそう思ってくれてたら嬉しいかなって」

「なるほどなるほど」

「ハルさん、結構乙女ずら」

「君たちには負けるよ」

そんなわけで最後の選択が終了し、恋愛偏差値発表である。

未だに恋愛偏差値ってなんだという疑問は消えないが、まあとにかく発表されるらしい。

「えーっと、ハルくんは…あれ？」

「ん？」

「どうかしたずら？」

「いやー…あれ？おっかしいな」

「おかしいって、結果がかい？」

「うん」

「おかしいって何がずら？」

「ほら、これ」

そう言つて千歌ちゃんが結果のページを見せてくれる。

選択肢から、恋愛偏差値がどう出てくるかが書かれているそのページ。

そこから簡単に俺の数値を計算する。

すると…

「…ハルさん、70以上あるぞら」

「だ、だよね。私の計算ミスじゃないよね」

偏差値70。

70点ではなく、偏差値が70というのは、平均に比べて相当高いということ。

つまりは。

「自覚はなかったけど、俺は恋愛の達人だったんだね」

「彼女ができたことすらないのに！」

「好きな人もまともにできてないのに！」

「いやいや、好きな子ならさつき言ったようにAqoursのみんな…」

「それはもういいから」

言葉を遮られた。

「どうやらこの子達から見ると、俺は恋愛の達人というには相応しくないみたいだ。

無理もない。

俺もそう思うし。

「しかも私の恋愛偏差値50もないし…」

「丸は45以下ぞら…」

「はっはっは。まあぜひ鍛えてくれたまえ」

「むっかー！」

「ハルさんだけおかしいぞらー！」

「そう言われてもね」

「……最近、鈍感鈍感とよく言われるようになっていたので、正直ちよつと嬉しい。

ついドヤ顔にもなってしまうというものだ。

「むーっ！鈍感のくせにー！これ全然当たってな…っであれ」

「千歌ちゃんどうしたぞら？」

「…恋愛偏差値って、恋愛のやり取りが上手いかどうかだよね？」

「多分…そうぞら」

「てことは、相手に好かれる…要するにモテるかどうかって、鈍感って関係ないよね

？」

「そういえばそうぞらね」

「逆に、好きな人を振り向かせられなければ低い…」

「…あ」

「二人してなんの話をしているんだい」

「コソコソ話しているわけではないのだが、言っている意味がイマイチわからない。

「ハルくんの恋愛偏差値が高いから、色んな子に好かれてて…」

「丸たちのが低いからハルさんに気づいてもらえない…」

「…この本、当たってるね」

「…ずら」

「…なんで急に暗くなったんだい」

さつきまでの威勢はどこへ行つたのやら。

急激にテンションを下げる二人。

よくよく思い出すとこの子達は練習できないフラストレーションを晴らしに来たわけだが。

この感じだと、あまり発散できたようには見えなかった。

駄弁るA q o u r sと布屋さん2

「暇ね」

「そうかい」

「ねえ」

「なんだい？」

「暇なんだけど」

「さつき聞いたよ」

「暇なんだけどー」

「そう言われてもね」

さつきから暇暇とやかましくしている少女。

現代に再誕した堕天使ヨハネこと、津島善子ちゃん。

そしてその横で善子ちゃんとは正反対に、静かにしている梨子ちゃん。

俺、善子ちゃん、梨子ちゃんの三人は今お店の奥の和室にいる。

時刻はお昼時。

そんなわけで、お昼ご飯を食べるためにこちらにいたのでした。

「よっちゃん、そんなに暇って言っても、時間は進まないわよ」

「それはわかっているけどー。あとヨハネよ」

「しかも、待つ時間なんてせいぜい3分くらいじゃないか。我慢しなさいよ」

「くーっ。なんでカップ麺の待ち時間ってこんなに長く感じるのかしら！」

先ほどから善子ちゃんが暇だと嘆いている理由は今のとおり。

今日のお昼ご飯は、梨子ちゃんが食べてみたいということでカップラーメンになった。

お湯を入れてからの数分間。

長くても5分程度のこの待ち時間。

善子ちゃんはこの待ち時間に文句を言っているのであった。

「そんなに待ちきれないならもう開けたらいいんじゃないかな？」

「麺が固いままじゃない」

「ラーメンには固麺っていうのもあってね」

「カップ麺でそれをやると、スープが絡みにくくなるのよ」

「それなら我慢しておくれ」

「はあー…」

「カップ麺って、どれもこれくらいの時間待つものなの？」

「そうだね。だいたい3分から5分くらいじゃないかな」

「へえー：そういうものなのね」

「梨子、本当にこういうの食べないのね」

「体によくないって、あまり食べさせてもらえなくて」

苦笑いでそんな風に言う梨子ちゃん。

なんというか、育ちの良さを感じさせる。

「逆に善子ちゃんは結構食べてるよね」

「そうね。ハルと一緒に食べることも多いしね」

「君がおうちから持ってきてくれることもそこそこ多いからねえ」

「知り合いが箱でくれたりするんだけど、そんなに食べれないってなるのよ」

「へえー。そういうのもあるのね」

「もらえるのは珍しいけど、箱で買う人は案外いると思うよ」

「どうして？ 飽きたりしないの？」

「んー：もちろん飽きるんだけど：なんでか、数日したらまた食べれるんだよね」

「あー、気持ちわかるわ」

「ほへー：」

素直に驚いている様子の梨子ちゃん。

そんな話をしているうちに、待ち時間の3分が経過。
ようやく食事でありつけるようになるのだった。

※

「そういえばこのカップ麺の件で思ったんだけどさ」

「うん」

「Aqoursって、育ちの良い子が多いわよね」

「また脈略もなく話が行くね」

「なんとなく思ったのよ」

善子ちゃんと二人、洗面台で洗い物をしている時。

特に前置きもなくそんな話題を出してきた彼女。

ちなみに梨子ちゃんは机を拭いていくれている。

そんな梨子ちゃんを横目に見つつ、善子ちゃんとお話を続ける。

「育ちの良さっていうと、食事のことかい」

「食事だけじゃないわ。ぶつちやけお金持ちかしら」

「例えば？」

「そうねー…まあ梨子はさつきみたいにかップ麺すら食べたことがないわけよ」
「そうだね」

よくよく考えると、梨子ちゃんは東京でピアノが弾ける家に住んでいたわけで、それって普通のお家にはなかなか難しいことのはずだ。

少なくとも俺の今の経済力じゃまず無理だろう。

「で、鞠莉とか黒澤家は言うまでもないじゃない?」

「まあそうだね」

「なんの話をしているの?」

「おや梨子ちゃん。机を拭いてくれたのかな?」

「ええ。ふきん、持ってきたんだけど…なんの話をしていたの?」

「梨子たちはお金持ちよねって話してたのよ」

「なにそれ?」

ざっくり話の流れを梨子ちゃんに説明。

と言つても、そんな長く話していたわけではないけど。

「というわけで、A q o u r s は金持ちが多いって話だったわけよ」

「もともともは、育ちの良い子が多いって話だったはずだけどね」

「そうだったっけ?」

「そうだよ」

「育ちの良さとお金持ちって、そこまで繋がらない気もするけど…確かに、お金持ちのお家の子は多いわよね」

場所をちよつとだけ変えて、先ほどまでご飯を食べていた机のところへやってきた。

三人で机を囲み、みんなでお茶を飲む。

食後のゆつたりした空気を楽しみつつ、先ほどの話を続けるのだった。

「千歌ちゃんも自分を普通だなんだと言っているけど、あれでこのへんじや有名な旅館の娘だし」

「曜のとこだって結構立派なお家よね」

「花丸ちゃんのところはお寺だし…」

「庶民は善子ちゃんだけ…ああいや、墮天使だから庶民ではなかったね」

「今それを言われると完全に嫌味ね」

「いやはやまさか。君は立派に墮天使なんだからね」

「はっ倒すわよ」

普段はヨハネって呼ばないと怒るのに。

「ちなみに、育ちの良さに関してはみんな良いと思うよ」

「そうなの？」

「俺が偉そうに判定できることではないけどね」

「年上なんだし、それはいいんじゃない？」

「というか、育ちの良さって何を基準に判断するの？」

「んー…自然に出る態度…とか？」

「言動とか、食事の振る舞いとか、そういうところに出るとは言うわね」

「まあうん、なんとなく君らからは育ちの良さを感ずるんだよ」

「曖昧ね」

「はつきりした定義がないからこそ、感じさせるといふ表現になったんだろうさ」

「難しい話ね」

「どうだろうね。あ、そういえば饅頭があるんだけど、食べるかい？」

「そつちも唐突ね」

「ふと思いついてね」

「もらっていいの？」

「もちろんだよ」

「私もいただくわ」

「ちよつと待っててね」

奥へ行き、饅頭をお皿に乗せる。

それとともにお茶を持って部屋へ戻る。

部屋へ戻ると、さつきまでと変わらず梨子ちゃんと善子ちゃんの姿がある。和室だからだろうか。

二人とも正座で座っており、背筋も自然な形で伸びている。

「おかえり、ハル」

「おかえりなさい…つて、どうしたの、ニヤニヤして」

「いやいや。なんでもないよ。ただ育ちの良さを感じていただけさ」

「なんのこと？」

「なんでもないよ。それより、饅頭をいただこうじゃないか」

梨子ちゃんと善子ちゃんの前にお茶請けのお菓子、饅頭を置く。

スーパーで買ったやつだが、果たして評判はどうだろうか。

「これは…よもぎ饅頭？」

「そうだよ。善子ちゃんでもこれはわかるんだね」

「バカにしてんの？」

「以前よもぎ餅を見せた時は、抹茶の餅とか言ってたからね」

「へ？抹茶？」

「や、やかましいわ！」

三人でお話をしつつよもぎ饅頭をいただく。

お値段のわりには餡も多くて美味しい。

十分お得な買い物と言つて良さそうだ。

食べ始めて10分くらい経つてからだろうか。

梨子ちゃんが、再び先ほどのお話を持ち出してきた。

「さっきのお話なんだけどね」

「育ちのやつ？」

「そうそう」

「どうしたのよ」

「うん。ハルさんも、結構育ちの良さつてあるんじゃないのかなつて」

「残念だけど、お金は本当に全然ないよ」

「いや、育ちの良さとお金持ちはイコールにならないつて話したでしょ」

「そうだけど、俺がそんなことを言われてのは生まれて初めてだからね」

「そうなの？」

「でも、私もハルの育ちは結構良い方だと思うわよ」

「おやおや。善子ちゃんまで嬉しいことを言つてくれるじゃないか」

「というか、あのおばあさんの影響でしょ」

「十中八九そうだろうね」

「前にも、厳しいおばあさんだったって言ってたよね」

「まさに鬼婆って感じだったわよ」

「そうだね。仮に少しでも俺に育ちの良さを感じるところがあれば、まああの婆さんの教育の賜物だろうね」

そしてこの会話を見て、きつと天国からほくそ笑んでいるだろう。

「でも、なんでハルさん、これまでそういうこと言われなかったのかしら」

「そういうことって？」

「育ちがいいとか…かな？」

「そりゃああれでしょ。言動」

「言動？」

「そんなにおかしな事を言っている自覚はないんだがね」

「嘘でしょあんだ。日頃の変態発言に自覚ないわけ？」

「あー…なるほど」

「ちよつと梨子ちゃん、何に納得しているんだい」

「確かにあの発言があると、品の良さが薄れるわね」

「薄れるどころか完全に上書きでしょ」

「はっはっは。ひどいじゃないか」

さつきまで珍しく褒められていたはずだったのに、なぜか今度は悪いところを指摘される流れになっている。

一応、発言する相手には気を使っているんだがね。

「まあ、とどのつまりあれね」

「あれってなんだい」

「どんな環境で育てられても、頭の中までは矯正できないってことね」

「そうね」

「…否定はできないね」

て事は結局。

育ちの良さとか品の良さをちゃんと見せられるかどうかは。

その人自身によるところが大きい、と。

言い方を変えてみれば。

A q o u r s の子達はみんないい子達って事でいいのかな。

いやこは。

いいって事にしておこう。

残り一口のサイズとなったよもぎ饅頭を口に放り込みつつ。

俺はそんな事を思ったのだった。

駄弁るAqoursと布屋さん3

「はあ？嫌いなもの？」

『そうそう。ハルくん、何か嫌いな食べ物あったかなーって』

「んー…。多分ないんじゃないですかね」

『多分って何さ』

「好き嫌いで食べ物を分別できるほど、食事に余裕がなくてですね」

『…ちゃんと食事とってる？』

「とってるつもりです」

夜。

もう間も無く布団に入ろうかと思っていた時間。

唐突に、千歌ちゃんのお姉さんである美渡さんから着信が入った。

要件はお食事のお誘い。

なんでも、親戚からずいぶんたくさんのお食材を頂いたらしく、それを一緒に食べないかという事だった。

こちらとしては願ってもいない事なので、もちろん快諾。

その際、先ほどのような好き嫌いの話になったのだった。それから少しの間、なんでもない話をしてその日の電話は終了となった。

※

「と言う事があつてね」

「んー…好き嫌いかー」

「ハルさん、なんでも食べられるんですね」

「そういう自覚はないけどね。まあ嫌いな食べ物はないかな」

「そういえばハルくんは好き嫌いがないよねー。なんでなんだろう？」

「なんで…まあ理由としては二つかな」

「二つ？」

美渡さんとの電話の翌日。

お店にはルビィちゃんと曜ちゃんの二人がやってきていた。

以前、俺がルビィちゃんに泳ぎ方を簡単に教えた事があつたが、あれ以降もルビィちゃんなりに泳ぎの練習を続けているらしい。

で、曜ちゃんは水泳部なので泳ぎ方に関しては正にプロフェッショナル。

少なからず、俺なんかよりはずっと頼りになるだろう。

というわけで、この二人は時々一緒に練習をしているようだ。

今日この二人が一緒に来たのは、その帰りという事。

仲良くできているようだなによりである。

「好き嫌いが無いのに理由があるんですか？」

「一応ね。一つは祖母だね」

「ああ、ハルくんのおばあちゃんかあ。ルビイちゃんはあつた事ある？」

「ええ、ありますよ。…あれ？でもハルさんのおばあさん、そんなに厳しかったかなあ

？」

「え!?!そりやあもう鬼のように厳しかったじゃん!」

「そうだね。俺から見ても鬼婆って感じだったけど…確かに、ルビイちゃんには優し

かった記憶があるよ」

「そうなの!?!」

「そ、そんなに驚くことなんですか…?」

「だって…ねえ」

「…まあ、曜ちゃんの言いたい事もわかるよ」

「厳しかったもんねえ。というか、なんでルビイちゃんには優しかったんだろう」

などと言う曜ちゃん。

だが、正直考えるまでもなく理由はわかる。

「そりゃあれだよ。日頃の行いだね」

「ええー！私の日頃の行いが悪かったみたいじゃん！」

「いくら小学生の時とはいえ、布屋さんに泥だらけの服着たまま釣ったザリガニを持つてくるような行動を、日頃の行いが良いとは言わないんだよ」

「でも餌提供したのはハルくんじゃん」

「だから俺も怒られたよ」

「あ、ハルさんも怒られたんですね」

「千歌ちゃん、私、ハルくんの三人で正座したもんねー」

「あー…あはは…」

苦笑い気味のルビィちゃん。

そりゃあ反応に困るよね。

「あ、好き嫌いが無い理由、二つあるんですよね？えっと、二つ目は…」

「ああ、そういう話だったね」

「まあ私は予想つくけどねー」

「え、そうなんですか？」

「うん。大体ね」

「ほうほう。じゃあせつかくだし当ててもらおうかな」

「ヨーソーロー！」

敬礼しながら答えてくれる。

自信満々のようだ。

俺が好き嫌いが無い理由。

曜ちゃんに当てられるかな。

「あれでしょ。お金の都合で、食事に贅沢言う余裕なんてないから、でしょー」

当てられた。

「正解だよ。よくわかったね」

「え、せ、正解なんですか？」

「好き嫌いできるほど贅沢できない生活なんだよ」

「あはは。ハルくんも大変だよねー」

「最低限食べていられるだけでも運が良いと思ってるよ」

「そ、その…大変、なんですよ」

「慣れたけどね」

逆に言えば、好き嫌いが無いからこそ問題なく生活しているとさえ言えなくもない。

まあいずれにしても、特に不満がないのは嘘ではないのだ。

なんて事を思っていたら、ふと曜ちゃんが何か考え事をしている事に気づく。
はて。

「曜ちゃん、何か考えているのかい？」

「んー…ちよつとねー」

「どうしたんですか？」

「いや、どうせなら私だって好き嫌いは直したいんだよね」

「わ、私もです」

「で、ハルくんをお手本にでもしようと思っただけだよ」

「したら良いんじゃないのかな」

「いや、できないでしょ」

「あー…あはは…」

「そうかね？」

「普通のおうちは、好き嫌いしたら食事に困るような生活してないから」

「それもそうだね」

「あ、じゃあ、ハルさんのおばあちゃんは、どうやって嫌いな食べ物を無くそうとしてたんですか？」

「あー、ばあさんの方のやり方かい」

小学校低学年くらいの時だったかな。

俺がまだ食べ物の好き嫌いをしてたのは。

たしかその頃は…

「嫌いだから食べられないって言うのと、特に何も言わずに皿を下げられていたよ」

「あれ？ そうなんですか？」

「てつきり強引に口に放り込まれると思ってたよー」

「いや、話はもちろんここでは終わらないんだよ。次の日、倍の量になって同じものが出て来るんだ」

「……………うお」

「……………き、きついですね…」

「その際にもばあさんは何も言わないんだ。そこでも食べないでいると…」

「い、いると…?」

「次の日、さらに倍になって出て来る」

「……………おおう」

「……………ど、どんどん増えてくつてことですか?」

「そうだね。一度、一週間くらいそのやり取りを繰り返したことがあったんだけどね」

「いや粘りすぎでしょ」

「もう皿から溢れるような状態になってたよ。しかも、ばあさんはそれを見てニコニコしてた」

「それは…怖いね」

「そうだね。恐怖以外の何ものでもなかったよ」

「る、ルビイには厳しそうです…」

「曜ちゃんも、このやり方をご所望なら俺の方から君の家に連絡を…」

「いやいいから!」

鬼気迫る表情で言われた。

まあ嫌だよな。

俺もめっちゃ怖かったし。

喉が乾いたということなので、お茶を汲むべく冷蔵庫へ向かった。

3つのコップに冷たいお茶を入れ、お店の方へ戻ってくる。

曜ちゃんとルビイちゃんにお茶を渡し、再びお話を始めるのであった。

渡した直後、このお店、店主が裏に下がっても全然問題ないねーと笑いながら曜ちゃ

んに言われたことは、ここでは流しておく。

「そういえばルビイちゃんは何が嫌いななの？」

「食べ物：ですよね？えっと、ルビイはわさびです」

「わさび？あの辛いやつ？」

「え？辛いのもあるんですか？」

「どうなんだろ？」

「辛いというよりは、マヨネーズと組み合わせると辛さを抑えてくれるとは聞いたことがあるよ」

「ほへー」

「マヨネーズとわさびって、組み合わせることある？」

「どうだろうね」

少なくとも自分はあまり見たことがない。

「やっぱりあの辛さがダメなの？」

「はい。あのツーンとしたのが苦手で…」

「あー。苦手な人には厳しいよねえ」

「マスタードとかとはまた別のタイプだしね」

えへへと、苦笑い気味のルビイちゃん。

苦手なものと言っても、わさびを食べれないと困るような状況はあまりないし、そこまで生活に影響はなさそうだ。

「曜さんにも苦手なものとかあるんですか？」

「私？うん、私にも苦手な食べ物あるよー」

「刺身…だったかな？」

「お刺身…ですか？」

「そうそう。ハルくん憶えてたんだねー」

「そりゃあね。長い付き合いだから」

「そ、そっか。憶えててくれたんだ。…えへへ」

苦手な食べ物の話をしているのに、なぜかニコニコしている曜ちゃん。

どうしたんだろうか。

まあそれはともかく。

「お刺身、美味しいと思うんだけどね」

「んー…みんなそう言ってくれるんだけどさー。どうにもダメなんだよねー」

「何か理由でもあるんですか？」

「いやー…多分ないはず」

「なんとなく好きになれない、と」

「苦手な食べ物なんてそんなものじゃない？」

「あー…でもわかります」

「ねー」

「そんなもんなんだね。…でも、ここ海の町だよね。刺身を見る機会は結構多いんじゃないの？」

「そうなんだよねえ。私、この町は基本的に大好きなだけだよ。そこだけ不満かもー」

机にぐでーんとしながら言う曜ちゃん。

暑さで伸びる猫みたいだ。

「でもね、曜ちゃん」

「んー？どうしたの、ハルくん？」

「お刺身っていうのは、ものにもよるけど基本的には贅沢な食べ物なんだよ」

「まあ…ねえ」

食材そのものが高級というのもある。

だがそれ以上に。

「お刺身はある一定の技術を持った人のみが調理できる食事でもあるんだ」

「まあ、ちよつとした高級料理にされる理由だよね」

「つまりはお刺身っていうのは…」

「ちよ、ちよつと待ってハルくん」

お刺身の魅力について語っていたら、途中で曜ちゃんに遮られてしまった。

「どうしたんだい？」

「いや、それこつちのセリフだから」

「ハルさん、お刺身好きなんですね」

「どうか何でそんなにお刺身の肩持つの。そんなに好きだったっけ？」

「好き…うん。確かにそれもあるね」

「それもって何さ」

「さっき言っただろう。お刺身っていうのはね、一応は贅沢な食事なんだよ」

「そうだね」

「そうですね」

「つまりは、だよ」

「？」

頭に？マークを浮かべる二人。

そんな二人に、俺は一言告げるのだ。

「俺にとつてはね、滅多に食べられない高級料理なんだ。嫌いだから食べないなんて、

もつたいないじゃないか」

そのセリフを口にする俺は、どんな表情をしていたんだろうか。鏡なんてもちろん置いていないその時は、それは分からなかった。しかし。

「…なんか、ごめんね」

「…ハルさん、今度余ったお刺身持ってきてあげますからねっ」

曜ちゃんルビィちゃんの二人は。

見たことないくらい憐れみと同情を含んだ表情をしていた。

「…私、今後は好き嫌い気をつけるね」

非常に複雑そうな表情でそんな言葉を口にする曜ちゃん。

その表情を、俺はしばらく忘れることができないのであった。

駄弁るAqoursと布屋さん4

「曜ちゃんつてさ、なんでハルくんが好きなの？」

「え、ふえっ？」

「み、美渡さん？と、突然どうしたんですか？」

「いやー、なんとなく気になってさー。ほら、梨子ちゃんも理由をどうぞー！」

「え、ええええ!!」

天気は晴天。

外は蒸し風呂のような暑さの本日。

私、高海美渡はここ、淡屋のお店番をしているのであった。

もう店主の友人の多くが忘れていると思うけど、ここ淡屋はハルくんのお店です。

正しくは、かつてハルくんのおばあちゃんが経営していたお店で、現在はその孫で

あつたハルくんが継いだお店。

そんなお店の店番を、なぜ私がしているのか。

理由は簡単。

私がお仕事の話を持ってきてきている時に、ハルくんに別のお仕事が入ったから。

別に私の持つてきたお仕事は急ぎのものでもなかったし、そちらのお仕事を優先してもらったのだ。

そんなでもって、ハルくんが帰ってくるまでこうしてお店番をしているというわけである。

手伝っていたこともあつたし、それくらいどうってことはないんだけど、正直途中から暇になっていた。

そんなところに、千歌の同級生であり友達の曜ちゃんと梨子ちゃんがやってきたのだった。

そうして、今に至るわけである。

「いや、ハルくんがいい人だつてのは分かるよ。うちの千歌からしたら、普通であることを全肯定した上、それを魅力として受け取ってくれるんだから、千歌に好かれるのも分かる。でもね」

「は、はあ」

「曜ちゃん、君はまあとても可愛いじゃない？」

「え、えつと…」

「その上、運動もできて性格もよくて、普通とは程遠い魅力の塊なわけじゃん」

「そ、その…」

「梨子ちゃんも、曜ちゃんに負けず劣らず可愛いしき、ピアノできるんでしょ？」

「い、一応……」

「で、優しくてやっばどこか都会らしい綺麗さがある」

「あ、あの……」

「どう考えてもハルクんと釣り合っていないじゃん！」

「そ、そんなことないから！」

「そ、そうですよ！」

別に千歌の恋愛成就のために言ってるわけではないよ？

本当に純粹に疑問なんだよねー。

「というわけで、ハルクんの何が好きなのか気になったわけよ」

「そ、そもそも釣り合っていないとかそういうのは……」

「まあまあ、それはいいから。とりあえずほら、あるでしょー？」

「結局、そこに落ち着くんですね……」

曜ちゃん梨子ちゃん共に困り顔。

「ここにはハルクくんもいないしき。たまには惚気もいいもんでしょ？」

「ん、ん……」

まだ納得しきれていない様子。

でも、もうあと一歩かな。

「それにさー」

「は、はあ」

「曜ちゃんも梨子ちゃんも、お互いがどれくらいハルくんを好きなのか知りたくない？」

ニヤニヤしながら。

それでいて煽るように。

私はそんな言葉を口にするのだ。

そんな私の言葉に彼女たちは…

「む、むむむ…」

「ぞ、それは…」

ふふふ。

悩んでる悩んでる。

ライバルの想い。

聞いてみたい気持ちもあるんだろうなあ。

「まあそんなわけだから、はい、曜ちゃんからとりあえずハルくんの良いところを一つど

うぞ」

「うえええ…え、えつと…」

ようやく堪忍してくれたらしく、考える動作に入ってくれた曜ちゃん。
さてさて。

どんな惚気を披露してくれるかなあ。

「や、優しいとこ…かなあ」

「ほうほう。例えば？」

「ハルくん、普段はセクハラみたいな発言ばかりだけど、なんだかんだ言つて大事な時は茶化したりしないじゃん？」

「そうだねえ。ハルくんはそういうタイプだねえ」

「Aqoursの時もそうだったけど、困ったり悩んだりしていると、ハルくんの方から声をかけてくれるの」

「…うん。そうだね」

「何でもかんでも手を貸そうとしたりはしないんだけどね。それでも自分のために最善の答を探そうとしてくれてるのがすごく伝わってきて…」

「うんうん。そんなところに惚れ込んでいると」

「う、う…」

もう茹でたタコのごとく真っ赤の曜ちゃん。

そのまま目の前のクッションに顔を埋めてしまった。

可愛らしいなあもうっ。

「それでそれで、梨子ちゃんはどうなのかな？」

「わ、私ですかっ？」

「そりやあ次は梨子ちゃんのターンでしょ。曜ちゃんも頑張ってくれたんだから、ね」

「う、うう…その、私、東京からこっちに來たんですけど…」

「そうだねー。初めて会った時に言ってたね」

「前にいた高校、女子校だったんです」

「千歌から聞いたよー。あれでしょ。μ'sのいたところだったんでしょ？」

「ええ」

「確か高校名は音ノ木坂高校だったはず。」

「梨子ちゃんが入学してきた日、千歌が運命だーって騒いでたし。」

「その高校、女子校だったんです。というか、それまで私って男の子と接する機会って全然なくて…」

「浦の星も女子校だしねえ」

「それで、男の人ってちよつと怖いものって思ってたんです」

「あー。なるほどね。で、そんな時にハルくんと会ったと」

「はい」

私も基本女子校だったし、気持ちは分からなくてもない。

ただ、生まれも育ちもここ沼津の自分としては、そこまで男性に抵抗はなかったりする。

ただ、梨子ちゃんは私と違って育ちがとてもいいのだ。

男性に対してちよつとした抵抗が生まれても仕方ないと思う。

「ハルさん、大人っぽいじゃないですか」

「あー…。うんうん、そうだね」

いや、あれは大人っぽさっていうよりジジくささでしよ。

もしくはオヤジくささ。

というのは、本人の名誉と梨子ちゃんの夢のために言わないでおく。

「こつちに来て不安ばかりだった私にとつて、落ち着いた物腰の優しさって、すごく安心できたんです」

「おー。なるほどねえ」

恐怖心から安心感へのギャップもあって、大人っぽさがとても魅力に写ってしまったわけだ。

まああれも、落ち着いてるっていうか物事に対して鈍感だから、反応が悪いだけな気もするけど。

「今まで感じていなかった優しさに、梨子ちゃんは惚れ込んでいます」
「~~~~~」

何も言わないけど、表情から伝わってくる意思。

さつきの曜ちゃんよろしく、こちらも真つ赤つかだ。

ハルくん。

君はこんなにも可愛い子たちに惚れ込まれているんだねえ。

だというのに…。

「あの鈍感っぷりは、生まれ変わっても治らなさそうだしなあ」

目の前で赤さを増す茹でダコを見つつ、私は思わず呟くのだった。

※

「やっと帰ってこられた…」

美渡さんとお仕事の話をしている最中、別件が入ってしまったのが今から2時間前。

本来なら1時間程度で終わるはずだったその用事が、思わぬ手違いによりその倍か

かってしまった。

早足で戻ってきたために少々あがっている息を整えつつ、扉を開く。

同時に、ひんやりとしたエアコンの風が流れ込んで、汗を蒸発させていく。

「ただいま戻りましたよ」

「ああ、おかえりハルくん」

「こんにちはハルくん」

「おかえりーハルくん」

「君達も来ていたんだね。いらっしやい、二人とも」

普段俺が座っているところに、現在座っているのは美渡さん。

そして、そこでお話していたのは曜ちゃんと梨子ちゃんのようなのだ。

二人とも若干顔が赤く見えるのはこの暑さのせいなんだろうか。

「ただいまです美渡さん。店番どうもです」

「はい、冷たいお茶。それと、干してあったタオル、取り込んだいたからね」

「すいませんね。助かりますよ。あ、これ。途中で買ってきたアイスです。よければど

うぞ」

「おおう。いいじゃんいいじゃん」

「曜ちゃんと梨子ちゃんもいるみたいだし、多めに買ってよかったです」

なんていうやり取りをしていた時だった。

「じー…」

横から何やら視線を感じるのだった。

「えつと…何かな、二人とも」

「なんていうか…」

「息びったりだな…って」

「息？」

「ああ、私とハルくんでしょ。そりゃあそうでしょ。何年同じやり取りしてると思ってるのよ」

「店番してもらうの、初めてじゃないですもんね」

「ねー。そろそろお給料をもらっても良いレベルじゃない？」

「あそこに缶の貯金箱ありますよ」

「あれ、中身全部小銭だったよね」

「お金には違いありませんよ」

「それはお給料じゃなくてお小遣いだよ」

呆れる美渡さん。

「このやり取りももちろん初めてじゃない。」

「…やっぱり」

「…息びつたり」

「ん？」

またしてもジト目の梨子ちゃんと曜ちゃん。

小声で何かを呟いたようだが、聞き取ることにはできなかった。

「二人とも、どうしてこつちを見ているのかな」

「いやいや。理由はわかりやすいでしょ。二人とも私に嫉妬…」

「わー！」

美渡さんが途中まで話したときに、二人によつて遮られてしまった。

なんて言おうとしたんだろうか。

気になるけど、本人たちが明かしたくなさそうなのでここは追求をやめておこう。

というわけで、適当に話題を変えることにする。

「そういえば美渡さん」

「んー？どうしたのかなハルくん」

「さつきまで3人で何を話してたんですか？」

「ええ?!?!」

なぜか曜ちゃんと梨子ちゃんがえらく動揺している。

あれ。

これも触れちゃいけない話題だったんだろうか。

「おやおや、気になるかねハルくんや」

「ええ、まあ」

「あつはつは。まあ隠す必要はないしねー。教えてあげ…」

「だめー!!」

「おおっと。どうしたんだい二人とも」

「ちよ、ちよつと美渡さん！」

「隠す必要がありますから！」

「まあまあ。好きなどこ伝えたくらいじゃ、ハルくんには気持ちなんて伝わらないって」

「そ、そうかもしれないけど！」

「だ、だめなものはダメなんです！」

「二人とも心配性だなあ」

「なんの話をしてるんですか？」

「ハルさんには関係ないから!!」

「だったらなんで隠すんだい…」

関係ないなら教えてくれてもいい気がするんだけど。

「くつくつく…。やっぱり二人とも可愛いねえ」

「なんの話かは分かりませんが、二人が可愛いという話に関しては一切の異議なしですね」

「ハルくんはそういうところあつさり口にするよね」

「嘘は言つてませんし」

「あつはつは。そういう点は確かに大人かも」

「なんのことです?」

「こつちのことだよ」

「はあ…」

まあいいや。

追求しても教えてくれなさそうだし。

「あ、そうだハルくん」

「今度はなんですか?」

「ちよつと質問してもいいかね」

「質問?別にいいですけど、どうしたんです?」

「ちよつとねー。曜ちゃんと梨子ちゃんの好きなどころを教えてよ」

「ええええ!」

「ちよおおおお！」

「好きなところ…ですか？」

「そうそう。あるでしょ」

「そりやあいくらでもありますけど」

「そうだろうねえ。曜ちゃんと梨子ちゃんも、聞いてみたいでしょ？」

「うっ…」

「そ、それは…」

「ということだね、どうぞ」

「何がということですか。こんなに注目されると、さすがの俺でも恥ずかしいですよ」

「普段のセクハラ発言をあつさり口にしないとそりやないでしょ」

「返す言葉がありませんね」

仕方ない。

ここは観念して、二人のいいところ発表といこうじゃないか。
なに。

実際いくらでもあるのは事実。

少々恥ずかしかったけど、俺は彼女たちのいいところを約2時間ほど語り続けたのだった。

これでもかなり端折ったのだが、どうやら長かったらしく、美渡さんには途中から文句をつけられたのだった。

ちなみに。

梨子ちゃんと曜ちゃんの二人はその間ずっとクッションに顔を埋めていた。

「こんだけAqoursのみんなを大好きなハルくんは、嫉妬なんて必要ないのにねえ」

呆れたように美渡さんがつぶやいた一言。

俺にはなんのことかはわからなかった。

駄弁るAqoursと布屋さん5

「成績？」

「イエース」

「ハルさん、高校の時はどんな成績だったのかなーって」

「どんなって…特に語る事のない普通の成績だよ」

「成績で普通って何よー」

「平均通りの成績ってことずら？」

「そんな感じだよ」

「いやいや。順位ならともかく内申点とかで平均なんてないヨ」

「全国の高校生たちの内申点で平均点をとれば、俺の内申点と一致する自信があるよ」

「なんか違うけどすごいぞら！」

7月の終わり。

つい先日、いよいよAqoursに3年生が加わり、あるべき姿になったかかと思えば、その数日後に学校が終業式を迎えた。

それから数日後の今日。

遊びに来ていた彼女たちと、なんとなく学校の成績のお話をしているのだった。

「ハルの成績って、案外聞く機会ってなかったよねー」

「そうだったずら？」

「付き合いこそ長いけど、歳の差が3つだから中学以来同じ学校で生活するという事はなかったからね」

俺が中学の時は彼女たちは小学生。

俺が高校の時は彼女たちは中学生。

そんな感じで、同じ教育課程にはいなかった俺たち。

中学生と高校生で成績の話をする事自体は可能なわけだが、その二つでは成績に対する価値観が異なってしまう、単純な比較はできなかつたりするのだ。

そのため、なんだかんだで俺は彼女たちと成績の話をした事がなかったのだ。

「もつとも、単純に成績の差がありすぎて、話す意味がなかったというのも大いにあるとは思うけどね」

「でも、ハルさんだって平均はあつたずら？」

『『平均はある』という考え方と『平均しかない』という考えには、そもそも天と地の差があるんだ』

「あー…なるほど」

「もう。そんなこと気にしなくていいって言ってるのに。大体、そんな事言ったら果南は平均ないよー」

「学校休んでた期間が長いからさ」

「休む前からお世辞にもいいとは言えなかつたけど」

「…コメントは控えておくよ」

まあ、確かに果南ちゃんの結果はお世辞にも良いとは言えないが…。

でも、うん、赤点取るほど悪いわけでもないから大丈夫。多分。

「ちなみに花丸ちゃんはどうなのかな」

「丸は…文系は悪くないと思うんだけど、理系が苦手で…えへへ」

苦笑いでそう言う花丸ちゃん。

いかにも花丸ちゃんといった感じで、ちよつと微笑ましい。

「苦手があつても得意があるならそれで十分さ。苦手もまた個性つてね」

「おやおやく。じゃあ苦手がない私は個性がないですかー？」

「苦手がないこともまた個性さ。というか、やっぱり君は苦手教科はないんだね」

「いえーす」

「す、すごいずら…」

お忘れの人も多いとは思うけど、マリーちゃんは学園の理事長さんなのだ。

ともすれば、学業は確実にものにしなくてはならない。

そう考えれば、彼女はきつちりと自分のやることを全うしているわけだ。

本人は涼しい顔をしているが、それは並大抵の努力でできることじゃないだろう。

「ん？どうしたの、ハル」

「いや、素直に感心していたんだよ。すごいなと思ってね」

「そ、そう？ふふ。そうでしょー」

「ああ。本当に、大したものだと思うよ」

「そ、そつか…ふふふ」

いつもとは違う、微笑むような笑顔を見せてくれるマリーちゃん。

綺麗だななんて思っていたら、再びマリーちゃんが口を開いた。

「ほら、ハル。そんなに褒めてくれるならやることがあるでシヨ？」

「やること？」

「イエース。ほら」

「そう言つて、自身の頭を指差すマリーちゃん。

なるほど。

うん、さすがの俺も、これは何をすべきかわかった。

「えつと…これでいいのかな」

「あ…ん。正解です」

彼女の髪型を崩さないように頭を軽く撫でる。

というよりは、ほとんど頭の上に手を載せているだけかな。

何はともあれ、正解だったようで何よりだ。

「むー…鞠莉さん、羨ましいですら…」

「ん？どうしたんだい、花丸ちゃん」

「なんでもないですらっ」

「…なんでもないのになんで怒っているのさ」

「っーん」

「…っ」

怒っている…というほどでもないのかな。

でも、確実に機嫌を悪くしている。

はて。

「ふふ。そうですねー。確かにこれは、私だけじゃなかったですねー」

「なんの話だい？」

「国語で平均点のハルには厳しいです」

「それは困ったね」

「だから、私の言うことを聞けばいいのです」

「…なんか腑に落ちないけど、まあここはおとなしく従うよ。どうすればいいのかな」
「その空いた左手、それをちよつと上にあげるのでーす。あ、右手はこのままダヨー」
「うむ」

言われるまま、左手を持ち上げた直後。

今度はマリーちゃんが手招きで花丸ちゃんを呼んだ。

「ほら、丸ちゃん」

「え？」

「え、じゃないでしょ。こつち、おいでよ」

「あ…う、うん…お、お願いするずら」

そのまま、左手の下にやってきた花丸ちゃん。

マリーちゃんと同様、こちらも頭の上に手を置いて軽く撫でる。

花丸ちゃんが怒っていたのは、自分も頑張っているのにマリーちゃんだけが褒められたことが原因だったのかな。

「んー…半分正解かな」

「やっぱり鈍感ずら」

「人の考えを当然のように読むんじゃないよ」

「手から伝わってきてまーす」

「君たちの頭からは考えが読めないんだけど」

「国語の勉強が足りないから」

「国語万能だね」

人の心を読むようになるとは知らなかった。

その後、十数分間頭を撫で続け、俺の思考を読まれ続けるのであった。

※

「ハルの成績は全部平均点だったの？」

「5科目と呼ばれるような主要科目に関しては、テストも内申点も平均ど真ん中だったね」

「もう逆に才能すら」

ちなみに、中学の時は国数英理社の5科目に加えて、保健体育、技術家庭・科、音楽、美術の4科目で計9科目で構成されていた。

高校はもう細分化しすぎて覚えてないけど、とりあえず4科目は保健体育以外なかつ

たのは憶えている。

「てことは、高校の成績は完全に平均通りだったのねー」

「一応体育もあったんだけどね。そこも平均通りだったよ」

「ハルさん、よく体育で平均がとれたずらね」

「保健科目で稼げるからね。自慢じゃないけど、相当いい点を取ってたよ」

「コメントに困りまーす」

両手をあげて呆れる様子を見せてくれるマリーちゃん。

花丸ちゃんは苦笑い気味だ。

「中学の成績もそんな感じだったずら？」

「そうだね。高校のときと大差は…ああ、一つ大きな違いがあったよ」

「違い？」

「そうそう。一つだけ得意な科目があつてね」

「初耳でーす」

「何が得意だったずら？」

中学の時、5教科に関してはほぼオール3だった俺。

しかしながら、4教科の中には一つだけ5しか取っていなかった科目があるのだ。

それが何か。

布屋さんの孫ということを考えれば、自然とわかるだろう。

「技術家庭科は、ずっといい点だったよ」

「え？なんで？」

「ハルさん、家庭科目得意だったずら？」

「…君たちはこのお店を何のお店だと思ってるんだい」

「雑貨屋」

「あつはつは。涙が出てきそうだよ」

久しぶりに少し傷ついた。

確かに、この子達の目につくところではあまり仕事はしてないかもしれないけどさ…。

「ソーリーソーリー。ジョークだよ。私がそんなの忘れるわけないでしょ。ね、花

丸ちゃん！」

「え？…も、もちろんそうずら！わ、忘れるわけないずら！」

「……」

花丸ちゃんは忘れてたようだ。

いや、うん、いいんだけどさ…。

「ほ、ほらハル！技術家庭科の点よかったんでしょ！その話してよ！」

「そ、そうずら！」

「なんか釈然としないけどね。…まあいいか」

強引な流れではあったけど、せっかくなので俺の成績自慢をさせていただく。

「布屋さんってこともあってね、裁縫関係はまあ人より詳しいわけだよ」

「そうだねー」

「で、ご飯作ることが多かったから、調理関係の方も得意だった」

「ハルさんの作るご飯、おいしいぞら〜」

「そんなわけで、基礎になる知識がもともと多かったこともあって、家庭科は人より得意だったんだ」

「なるほどー。あれ、でも技術科目は？」

「丸は機械とか苦手だから、そっちは本当にダメだったぞら」

「うん、電子辞書をパソコンっていうくらいだしね」

「ハンドドライヤーを普通のドライヤーみたいにして使うくらいだもんねー」

「そ、それは忘れるぞら!」

顔を赤くしてあわあわしてゐる花丸ちゃん。

可愛い。

「技術系科目に関しても、婆さんができない分俺が憶えてたんだよ。婆さん、機械まとも
にできないくせに機械の恩恵は受けてたからね」

「機械の恩恵？」

「エアコンとかパソコンとか：洗濯機とかかな」

「普通の家電ですなー」

「壊れたら直せって無茶を言われることも少なくなくてね。弄れるところは自分で弄ってたんだ」

「す、すごいぞら…」

そんなもん中学生に頼むなよといつも思っていた。
ていうか今でも思う。

「まあそういうわけで、技術科目までできるようになったというわけだよ」

「そんなとこまでバーバの影響があるのねー」

「すごいお婆さんだったぞらね」

「うん：そうだね。すごい婆さんだったよ」

人使いの荒さが。

「でも得意科目が技術家庭科と保健かー：変わってるねー」

「確かに、そういう人はいなかったぞら」

「珍しいタイプだとは思うよ」

ちなみに。

それを理由に一つとんでもないあだ名をつけてくれた方がいらっしやった。

そのあだ名というのは…

「その得意科目を見て、『下ネタと機械を一緒に煮込んだ男』って言ってくれた人がいたよ」

「おー！ハルっぽい！」

「ハルさんっぽいずら！」

「あれ？バカにしてない？」

笑いながら合ってる合っていると連呼する彼女たち。

今一度、彼女たちが俺をどう認識しているのか問い直す必要があるそうだ。

そう思う日だった。

※

5年ほど前。

「うわー…ハルくん、また技家に5ついてるよ」

「美渡さん、勝手に通知表見ないでくださいよ」

「まあまあ気にしないで。それより、技家、すごいじゃん」

「唯一の得意科目ですからね」

「保健体育は3：ああ、保健でとったのね」

「俺が体育で点をとったという可能性を考慮してください」

「あつはつは。ありえないでしょ！」

「…ノーコメントです」

「しかしあれだね。これだけ得意科目が偏つてると…何かあだ名をつけたくなるね」

「いや、勘弁してください」

「…なぜあだ名を聞く前に否定するのさ」

「碌な予感がしないからです」

「まあまあ、そう言わずにさ」

「…できる限りまともなものにしてくださいよ」

「オツケー！んー…保健が得意…エロい…下ネタ…」

「おい」

「技術…電気…機械…」

「中学生の連想ゲームですか」

「家庭科…料理…焼き料理、煮込み料理…」

「あなたは家庭科で何を学んでるんですか」

「よし！3つの特徴を混ぜて、『下ネタと機械を一緒に煮込んだ男』にしよう！」

「長いし言いにくい！全然あだ名として機能してないじゃないっすか」

「じゃあ略して『下ネタ』」

「保健の先生に謝ってくださいこの野郎」

夕日が差し込む店内。

くだらない話をするその二つの影。

終わりの意味もないそのやり取りは。

その後もしばらくの間続いていたのだった。

駄弁るAqoursと布屋さん6

『~~~~~』

大した音量でもない目覚ましですが部屋に鳴り響く。

時刻は朝の6時半。

いつものように起き、食事をとり、身支度を整える。

そうして店の前を箒で掃く。

この段階で時刻は7時半。

普段であれば、この時間に浦の星女学院の女の子たちが登校してくるのだが：

もちろん夏休みの今、登校してくる子はあまりいない。

部活で出てくる子もいるにはいるが、そういった子も普段ほど早く登校してくることはないのだ。

「花…いや、華が足りないな」

思わずそんな言葉が口をつく。

眩いた直後だった。

「ハル何言ってるの？お花ならその辺にあるじゃん」

「果南さん、ハルさんの言う花というのは、地面から生えてるようなお花のことを指してはいないのですよ」

言いながら、傍に立つ影が二つ。

それが果南ちゃんとダイヤちゃんであることは、そちらを見るまでもなくわかる。

「おはよう二人とも。今日はずいぶん早いね」

「おはよー、ハル」

「ハルさんおはようございます。私は普段からこの時間には学校に来てますわよ」

「それもそうだったね」

改めて彼女たちの方を向き、挨拶を交わす。

二人ともちゃんと制服を着用しており、これから学校へ向かうのであろうことが伺える。

Aqoursの練習は基本的には朝からやっている。

ので、学校がある日は基本的には今日くらい早い時間から練習をしているわけだ。

加えて、ダイヤちゃんに関しては練習がない日でも生徒会活動のために朝早く来ている。

ほとんど毎日、この時間には学校へ来ているのだ。

「と言つても、まだ夏休み中だろう。練習にしても生徒会活動にしても、さすがにここま

で早く来る必要はないと思うけどね」

さつきまでのはあくまで平日のお話であり、休日は事情が変わる。

そもそも授業がないのだから、そんな朝早くから作業をする必要はないのだ。

だから、こんなに早くから来る必要はないのだが…。

「ああ。もしかして夏休みが終わったと勘違いしたのかい？」

「そんなわけないでしょ」

「そんな間違いする人、見たことが…いえ、一人いましたわね」

「君の目の前にね」

「胸をはれることではありませんわよ」

何を隠そう、俺は夏休みの終わりの日を間違えたことがあるのだ。

「…ハル、そんなことあったの？」

「いやはや、恥ずかしい思い出だよ」

「本当に恥ずかしい経験ですわね」

「言い訳させてもらおうとね、夏休みって8月31日までだと思ってたんだよ」

「ああ、それで9月1日に学校に行ったんだね」

「果南さん、一見納得が行くように聞こえますが、その年の9月1日は土曜日です。学校の事情に関わらず、学校は休みだったんですよ」

「土曜日も学校があると思っていてね」

「何年前の教育カリキュラムですの」

「というかダイヤ、よくそんな事情知ってるね」

「その日、偶然会いましたからね。学校帰りのハルさんに」

「お恥ずかしいところを見られちゃったね」

「本当に恥ずかしい姿です」

「あつはつは。ハルも馬鹿だねー」

返す言葉もない。

まあそれはともかくとして。

「それで、学校に早く来た理由はなんなのかな」

「ああ、そういうえばそんな話だったねー」

「そうだよ。間違っても俺の高校時代をいびるために来たわけじゃないだろう」

「それも悪くありませんが…また後日としましょう」

「100年後くらいに頼むよ」

「数日中にしようよ」

「…勘弁してくれ。じゃなくて」

話がそれまくりである。

「学校に来てたのは、花の水やりです」

「水やり？」

「うちの高校、花壇あるでしょ？あれの水やり」

「あれって、生徒が水をあげてるのかい」

「普段は緑化委員がやってますわ」

「ああ、専用の委員会があるんだね。普段っていうのは？」

「私は生徒会ですし、果南さんは委員会には入っていませんわ」

「そうだよね。俺の記憶だとそうだったはずだし」

となると、今回の水やりは本来はこの子達がやることではないのだろう。

「今日は、緑化委員の方がみんな予定が入ってしまっているそうです。それで、生徒会に代わりの水やりを頼まれたんですよ」

「まあ夏休みだしね。予定が被っちゃう日もあるだろうさ」

「ですから、今日は代わりに水やりに来たのです」

「そういうことー。私はそのお手伝いだよ」

「なるほどね。とはいえ、マリーちゃんが一緒にやらないのは珍しいね」

「鞠莉も呼んだんだけどねー」

「今日は別の用事があるそうです」

彼女も理事長だしね。

夏休みでもお仕事とかあるんだろうか。

「それで、緑化委員に代わって花の水やりに来たと。ご苦労様だよ」

「水やりはこれからだよ」

「あれ？終わったからこつち来たんじゃないのかい」

「いえ、これから行くところですよ」

「わざわざ行く前にここに寄ったのかい：嫌な予感がするんだけど」

「あ、察してくれたんだ。ハルにしては珍しいね」

「じゃわざわざわざ口にするまでもありませんわね。さ、行きますわよ」

つまりあれだ。

手伝えってことだろう。

「…外、すごい暑いんだけど」

「そりゃ夏だしね」

「暑いのは当然ですよ」

「…水やりの範囲は？」

「学校全体に散らばってますので、手分けしてやりましょう」

「ハルは大人だし、ちよつと広めにねー」

「はっはっは。殺す気かい？」

これからどんどん上昇していく気温の中で、そんな運動したら本当にくたばってしまう。
う。

「もう、大げさだなあ」

「まあさすがに、広くやってももらうのは冗談ですわ」

「安心したよ。心底ね」

そんなわけで、彼女たちの水やりに伴行することとなった。

花の水やり……俺が高校の時にやった記憶はないから、学校でやるのなんて中学以来だ。

※

「ほーれ、早く大きくなるんだよー」

「果南さん、それは雑草です。これ以上大きくなったら困ります」

「あれ？」

「なんで花壇の外にまで水をやってるんだい君は」

「そこに花があったから？」

「それは花じゃなくて草だね」

ホースが一個しかなかったので、結局三人一緒に花の水やりをすることになった俺たち。

これなら間違いなく俺は必要ないとは思うが、たまには朝日を浴びながら学校を歩くのもいいだろうと自分を納得させた。

決して、帰ろうとしたらダイヤちゃんから恐ろしいオーラを感じたとかではない。

雑草から枯れた花に至るまで、形が植物であれば片っ端から水を与えようとする果南ちゃん、それを止めるダイヤちゃんとともに学校を歩く。

始めてからやく15分程度。

雲ひとつない空から降り注ぐ太陽光は容赦なく辺りを熱している現状。

「それにしても暑いね…」

言っても意味のないそんな一言が、つい口から漏れてしまう。

「夏ですからね」

「夏だもんねえ」

「改めて君たちの体力には脱帽だよ」

「水やり程度で感心されましても…」

「ハル、普段どんな生活してるのさ」

「君たちの知つての通りの生活だよ」

特に意味もない雑談。

そんな中、果南ちゃんから唐突にこんな話題が。

「そういえば、植物ってなんで歩かないんだろう」

「…はい？」

「果南ちゃん、暑いなら休んでいいんだよ」

「いや、頭がおかしくなつたわけじゃないから。ほら、植物ってき、水がないと死んじゃうじゃん？」

「そりやそうだね」

「動物もそうですしね」

「そう、それ！動物は自分で動いて水を飲みに行つたり食べ物を取りに行つたりするわけじゃん。でもき、植物ってそれができないわけだよ」

「んー…まあ、結構環境に命を委ねてるところはありますね」

「なるほど」

要するにだ。

水が必要になつても、その土地が乾いていれば植物は自発的に水を取りに行くことはできない。

太陽光が必要になっても、運悪く影になってしまつたらちよつと動いて日向に行くこともできない。

動ければ、そういう融通が聞くんじやないかと、そう言つてるわけだ。

「私だつたら、すぐそこに水があるのに、飲めないなんて耐えられないしさー」

「確かに…私も、黙つて待つのは性に合いませんわね」

「…君たちならそうかもね」

「ハルは違うの？」

「俺は…うん。動かなくていいならそれはそれで」

「…考えがダメ人間のそれですわね」

「大人っていうのはそういうものさ」

「全国の大人に謝ってください」

でも確かに、動けないというのもそれはそれで味気ない。

結局、都合のいい時は動きたくて都合の悪い時は動きたくないのが人間という生き物。

「とはいえ、植物が動くようになったらそれはそれで気持ち悪いね」

「足の生えたひまわり…悪夢ですわね」

「食虫植物とか？」

「あれはあくまで虫を誘い込むものだしね」

「というか、あれが動くのはより気持ちが悪いですわ」

あの恐ろしい見た目をした食虫植物が、虫を捕食するために走り回る姿を想像する。

…人類の存続に関わりそうだ。

「ハルさん、一応言っておきますが」

「うん？」

「植物になるということは、基本的にはエネルギーを光合成によって生成します」

「そうだね」

「てことは、昼間は可能な限り日光を浴びて生活をするということ、頭に入れてもいい

のでは？」

「…・確かに」

「あはは。今日の日差しでダメなんだから、ハルには植物生活は無理そうだねー」

「…1日目で熱中症になりそうだよ」

「史上最も情けない植物ですわね」

「ハル、人間でよかったねー」

「そう思うことにするよ」

俺の目の前で、堂々と咲き誇るひまわり。

その花は、一直線に太陽を仰ぎ見る。

それはもちろん、この瞬間だけじゃなく。

花が枯れるその時まで、この子達はずっと太陽を見続けるのだ。

「考えるだけで、背筋が凍りそうだよ」

「暑さの話なのにね」

「暑すぎる話だからですわね」

『植物なめんなよ』

足元に生える雑草が、そんなことを言っている気がしたのだった。

駄弁るAqoursと布屋さん7

「ねえハル」

「なんだい、果南ちゃん」

「ハル〜？」

「マリーちゃん、どうしたのかな」

「ハルさん？」

「ダイヤちゃんまで、どうしたのさ」

とある昼下がり。

今日は久しぶりに三年生三人組がうちへやってきていた。

ついさつきまでは普通に話していたのだが、トイレに行つて帰ってきたらこんな感じである。

名前を呼ばれて、返事をしたかと思えばすぐ別の子に呼ばれる。

こんな風に回されること三周目に突入だ。

「…そろそろ、何をしたいか教えて欲しいね」

「三周回るまでは律儀に返事するなんて、さすがハルだねー」

「面倒見の良さがでてます」

「突っ込むのがめんどくさかったただだよ」

「別に、大した事情があるわけではありませんわ」

そんな言葉とともに、目の前にあるお茶に口をつける。

今日は冷たい緑茶だ。

「今日ね、名前の呼び方が話題になったんだよ」

「呼び方？」

「ファーストネームとか、ラストネームとか…」

「あとはさん付けとか呼び捨てとかですわね」

「ああ、なるほど」

ファーストネームは…日本語で下の名前だっけか。

俺の場合ならハル。

ラストネームは…苗字だっけ？

「ハル、それくらいイングリッシュはさすがに覚えるべきですよ」

「俺、口にしてなかったはずなんだけど」

「頭の上にはなマークが浮かんでますわよ」

なんてこつたい。

「まあまあそれはともかく、呼び方だよ、呼び方！」

「はあ」

「ハル、A q o u r s のみんなのことなんて呼んでるか覚えてる？」

「みんなちゃん付けだね…つて忘れるはずないだろう」

「今更だけど、なんでちゃん付けなの？みんな歳下だよ？」

「そう言われてもね。君らだつて歳下にちゃん付けすることはあるだろう。ダイヤちゃんなんて、さん付けの子の方が多いと思うがね」

「それはそうですが…なんというか、それとはまた別なのです」

「別なのかい」

「そもそもそんなこと、今までほとんど意識したことなかった。

「まさかと思うけど、さつきわざわざ俺に返事をさせたのは、そのことを確認するためだったのかい？」

「イエース」

「で、案の定ハルは何度呼んでも私たちを呼び捨てにはしなかったと」

「当たり前だろうに」

「そもそもハルさん、呼び捨てにする間柄の人がいるのですか？」

ダイヤちゃんからそんな疑問をかけられる。

「ふむ…」

改めて聞かれると、確かにあまり呼び捨てしてる人はいないな。

「ああ、一応、高校の時の友人とか中学の時の友人は呼び捨てだったよ」

「ま、まさか女の子!？」

「いや、高校男子校だし」

「中学校の時はどうでしたの!？」

「…なんでそんなに食いついてくるのさ。中学の時も、女の子を呼び捨てにはしてなかったよ」

「そつちもやつぱりちゃん付けだったんですかー？」

「いや、さん付けだったよ。同級生の女の子をちゃん付けはちよつと抵抗があつてね」

「んー…なるほど…」

顎に手を当ててダイヤちゃんが唸る。

何か考え事だろうか。

かと思えば、マリーちゃんと果南ちゃんを部屋の端っこに呼んでヒソヒソ話を始めた。

「…これ、一応ちゃん付けの方が距離は近いんでしょうか…」

「んー…どうなんだろう…」

「というかハル、そんなこと考えてなさそうです」

「でも、分けてるってことはちゃん付けとさん付けに境界線自体はあるのでは？」

なんの話してるんだろう。

残念ながら聞き取ることにはできない。

「ああ、もしかして、君たちもさん付けで呼んだ方がいいのかい？」

「なんでそうなるのさ」

「いや、ヒソヒソ話してたから」

「別に大したことじゃないです。あ、でも、確かにさん付けは一度聞いてみたいかも」

「あー確かにねー」

「悪くないですわね」

「ということではい」

「はいって…いや、構わないけどさ」

「ほんと一つ咳払い。」

では改めて…。

「ダイヤさん」

「びぎいつ」

「果南さん」

「うげえっ」

「鞠莉さん」

「ノー！」

それぞれが唸ったり悲鳴をあげたりしてる。

なんなんだ一体。

「すごく…：他人行儀ですわ…」

「なんか、距離を置かれてるみたいで…」

「ハートにダメージがきまーす」

「・妙な他人行儀感があるね。とはいえ、ダイヤちゃんに至っては普段からさん付けじゃないか」

「普段からなら問題はないのです！」

「じゃあ普段からさん付けで呼ぶかい？」

なんて、なんの気もなく言った瞬間。

三人がすごい形相で机に乗り出してきた。

「ハルの鬼！」

「悪魔！」

「セクハラ魔！」

「これは理不尽と言わざるを得ない」

挙句にこの言われようである。

まあ要するに、さん付けはダメらしい。

俺としても、どうにも今更呼び方を変えるのは難しいからこれでいいんだけどさ。

「んー…やっぱさん付けはだめですねー」

「そうですね。そういう意味では、ちゃん付けの方が距離は近いと言えそうです」

「ハルの中学校の時の同級生達よりは、私たちが身近つてことだよねー」

「「…うふふ」」

三人で話し始めたかと思えば、なんかニヤニヤし始めた。

人のことを鬼だ悪魔だと言った割には、機嫌は悪くないようだ。

「せっかくだし、呼び捨てもやろうよ」

「呼び捨てって…君たちをかい？」

「イツグーッド。普段は私たちが呼び捨てだし、今日はハルの呼び捨てだねー」

「私はさん付けですが…でも悪くないと思いますわ」

「…まじでかい」

呼び捨てか…

ん…

「何？嫌なの？」

「嫌というか…慣れないんだよ。女の子呼び捨てすることなんてそうそう…というより一度も経験がないからね」

「じゃあ初体験だ！」

「そんな大それたものでもないとは思うけどね」

まあだからと言って、そこまで拒絶する理由もないんだけどさ。

向こうも引き下がるつもりはなさそうだし、ここは彼女らのリクエストに答えるとしてしよう。

さつきと同じくして、咳払いを一つ。

「えーつと…その、ダイヤ…？」

「は、はいっ…ですわ」

「果南」

「うっ…うん」

「鞠莉」

「ひゃ、ひゃあ〜っ」

三人とも、名前を呼ばれた直後に顔を隠してしまふ。そのせいで、どんな表情をしてるか読み取ることとはできないのだった。

「…は、破壊力、すごいですわね」

「これは…全力でランニングするより心臓がドキドキするね」

「ふ、ふたりとも動揺しすぎです。が、外国ではむしろ名前の呼び捨てがノーマルなんだから…」

「顔、真っ赤ですわよ」

「むぐうつ」

また三人で集まって内緒話をしている。

今日は隠し事がずいぶん多いことだ。

※

「ていうことがあつたらしいじゃん？」

「…耳が早いね、君たち」

「鞠莉ちゃんが嬉しそうに話してくれたからねー」

「まあ別に隠し事でもないしね…って、なんか千歌ちゃんと曜ちゃん機嫌悪くない？」

「べつつにいいー。そんなことないもんっ」

「そうだよーだ」

「…そうは見えないよ」

「あ、あはは…」

慣れない呼び方を三年生相手にした翌日。

本日は2年生三人組がやってきた。

話題は昨日に引き続き名前の呼び方。

ただ、なぜか千歌ちゃんと曜ちゃんが御機嫌斜め。

不機嫌そうに口を尖らせている。

梨子ちゃんはその横で苦笑いだ。

「…彼女達はなんで怒ってるんだい？」

「なんでって…そりゃ呼び方のことで、よ」

「呼び方って…昨日のことなんて、さん付けと呼び捨てをしたくらいなだけどね」

「どう考えてもそれが原因よ…」

梨子ちゃんが呆れたようにしている。

と言つてもね…。

「別に、私たちだつて長く一緒にいるのに呼び捨てなんてされたことない、なんて思つてないもん」

「そうそう。別に悔しくなんてないし、羨ましくだつてないもん」

「つて本人達は言つてるけど」

「ええ!?!その言葉そのまま信じちゃうの!?!」

「あれ?ダメだったかな」

「ダメつていうか、どう見ても嘘つていうか…」

「ふむ」

女心は難しい。

いやまあ、常日頃鈍感つて言われてるし、今更なんだけどき。

「じゃああれかい、昨日と同じくあの二人にさん付けすればいいのかい?」

「…一週間くらい口聞いてもらえなくなるわよ」

「それは困るね」

「じゃなくて、呼び捨てよ呼び捨て。あと二人じゃなくて三人よ」

「ああ、そつちかい。…三人?」

千歌ちゃん。

曜ちゃん。

「梨子ちゃんも呼び捨てにするの？」

「だ、ダメかしら？」

「いや、そういうわけじゃないんだけどね」

なんだろう。

呼び捨てが流行ってるのかな？

そんなわけではないよな。

「ハルさん、言つといてなんだけど、それはハルさんが考えるだけ無駄だと思う」

「人の心を読むのも流行りなのかい」

「流行ってるなら、その技術は真つ先にハルさんが習得すべきだと思うわよ」

「その時は頼むよ」

「教えても絶対習得できなさそうね」

今度はため息の梨子ちゃん。

そんな話をしてたら、今度は千歌ちゃんと曜ちゃんがこつちへやってきた。

「もう、ハルくん！」

「そろそろなんで私たちが御機嫌斜めだったか分かったでしょ！」

「怒ってないんじゃないのかい」

「怒ってないもん！御機嫌斜めだったただけだもん！」

「日本語って便利だね」

「そうじゃなくてー！」

机を乗り出してくる千歌ちゃんと曜ちゃん。

このままだと埒があかなさそうだし、梨子ちゃんの言う通りにするとしようか。

「えっと、呼び捨てすればいいのかな」

「そう！そうだよ！ハルくん！」

「なーんだ分かってるんじゃない！」

「…さっきそれで怒ってないとか言って…いや、やめておこう」

こほんと一つ咳払いをして、彼女達の名を呼ぶ。

「千歌」

「くくくっ」

「曜」

「う、うん…えへへ」

「梨子」

「は、はいっ…うへへ」

反応は…おおよそ三年生と同じかな。

案の定表情を隠してしまい、どう思っているのかは読み取れない。

「う、うひゃー！こ、これはドキドキするね！」

「う、うん。果南ちゃんたちの言ってた通りだよー！」

「か、顔から火が出そうっ」

そしておきまりの俺に聞こえない内緒話。

いい話なのか悪い話なのかも分からない。

怒っているわけではなさそうだけど…

どうなんだろうか。

ちなみに。

さらに翌日、一年生三人組がやってきて同じことがあったのだが…

「うわああ！る、ルビィちゃんが気絶したぞら！」

「ちよ、ちよつとハル！なんとかしなさいよ！」

「いやいや。名前呼び捨てしてされて気絶する病気なんて見たことないんだけど。どう

対処しろと？」

「こ、今度はさん付けで呼び直すぞら？」

「逆のシヨックでトドメになるわ！」

プチ騒動になったのだった。

駄弁るAqoursと布屋さん8

『ミーン ミーン ミーン』

「あつっ…」

「あついずら…」

「あ、あはは…うゆ…あついですね…」

「…気持ちわかるけど、あまり連呼しないでほしいね」

机に伏せたり椅子にだらしなくもたれかかったりしているのは、本日うちへやってきた一年生三人組。

みんなうちわを持ってはいるのだが、蒸し風呂のような暑さになっているこの部屋では、扇いだところで焼け石に水でしかない。

気温がまだまだあつつい夏の午後1時。

雲一つない青空でなお、その存在をこれでもかと主張する太陽。うちのお店は現在臨時休業中となっているのだった。

その原因は、この暑さ。

「最初、暑いから休業って何事かと思ったけどね」

「エアコン壊れちゃったって聞いて納得しました」

「でも、扇風機まで一緒に壊れたのはなんでずら…?」

「それは俺が聞きたいんだがね」

「くつくつく…それこそ墮天使の呪い…」

「電気機器になんの恨みがあるんだい、その墮天使は」

「地球温暖化の天罰ずら?」

「ずいぶん地球に優しい墮天使だね」

灼熱の気温に、エアコンと扇風機の故障。

正直、こちらとしてもまともな接客などできそうにないし、お客さんにもこの中で商品の話などしたくないだろうと考え、本日は臨時休業にしたのである。

当然、店の扉にも『本日臨時休業』と書いて紙を貼っておいた。

その上で、暑さを凌ぐためどっか涼しい所にでも行こうと思っていた所に、一年生三人組がやってきたわけである。

「いよいよ経営が成り立たなくなつて、閉店するのかと思つたわ」

「さ、最初は焦りました」

「びっくりしたずらー」

「俺はすごい形相で入ってきた君たちにびっくりしたんだけどね。というか、休業つて

書いてあっただろう。閉店なんて書いた覚えはないよ」

「あんたの休業って、そのまま再開しないパターンになりそうじゃない?」

「善子ちゃん俺をどう見てるんだい」

なんて話をしている間も、気温が下がることはもちろんない。

冗談を言い合うのもいいけど、まずはこの蒸し風呂空間から出なくては。

「さつきも話したけど、エアコンの修理が終わるのは明日のお昼らしいからね。ひとまず気温が下がる夕方まで俺はどこかに行くよ」

「行く当てでもあるの?」

「喫茶店とかカラオケとか漫画喫茶とかかな。別に公園とかでもいいんだけど…」

「この時間だと、屋外はどこでも暑そうですね」

「そういうこと。だからどこかエアコンの効いた場所にも行こうと思ってるよ」

「ふーん」

できればあまりお金がかからない所がいいんだけど…

どこにしようかな。

図書館とかも悪くはないかな。

などと思っていた時だった。

「丸たちも、ついていってもいいはずら?」

花丸ちゃんからそんな質問を投げられた。

思わぬ質問だ。

「君たちもかい？そりやあもちろん構わないけど……どこに行くかも決まってるよ？」

「もともと暇つぶしで来てるようなものなんだから、暇が潰せればそれでいいわよ」

「わ、私もご一緒したいですっ」

善子ちゃんとルビイちゃんもわりと乗り気みたいだ。

一人でいるよりはもちろんこの子達といった方が楽しいし、こちらとしてはありがたい話である。

「君たちがいいならぜひ頼むよ。俺の暇つぶしに付き合っておくれ」

※

「……まあ、確かに涼しいには涼しいと思うけど」

「おおー！綺麗ずらー！」

「人が全然いないですけど……いい場所ですね」

「穴場スポットだからね。俺含めて、一般の観光客の人はほとんど来ない場所だよ」

眼前に広がる海。

全力で日光を降り注ぐ太陽に対して、海面もまた真正面からその光を反射する。

綺麗に輝く海面とこの暑さは、今海水浴をするのに十分適切な条件だということを目と肌で感じさせてくれる。

「あの会話から海に来るとは思わなかったわ。喫茶店行くとか言ってなかった？」

「もともと一人でどっか行くつもりだったからね。四人だったらここがいいかなと」

「別に不満があるわけでもないんだけどね。びつくりしただけで」

「それはよかったよ」

正直、善子ちゃんの言うように行く場所としてはあんまり適切な感じはしない。

とはいえ、本当に行き先に困ったのも事実。

そんな時、ふとこの場所を思い出したので、これも縁だと思い彼女たちを連れてきたのだった。

嫌な顔されたらまた別のところでも行こうと思っていたが、思いの外評判は悪くなさそうだ。

「ハルさんもこっちくるずらー！」

「波、冷たくて気持ちいですよー！」

「つてあんたたち、水着着てないんだからあんまり濡らしちゃダメよ！」

「ちよつとくらい大丈夫ずらー」

ちなみに、来る途中にみんなのおうちに寄って水着は持ってきてある。

一般的な海水浴スポットではないので更衣室は近くにないので、車の中か岩場の陰を使つてもらふことになるかな。

「つて、うわー！スカートが水浸しずらー！」

「言わんこつちやない。ほら、もう早く着替えるわよ」

「あ、私も」

そんな会話の後、スカートの端をつまんだ花丸ちゃんと善子ちゃんルビィちゃんの二人が戻ってきた。

「そんなわけで着替えるわ」

「うん。それがいいと思うよ」

「スカート、結構濡れちゃったずら」

「と、とりあえず乾かそうね」

「ただでさえ服も薄着なんだから、透けちゃったらどうするのよ、まったく」

「俺は透けてても一向に構わないよ」

「その時はハルの目を魔術で目潰しするから」

「…先に言っておくけど、砂浜の砂を眼球めがけてかけることを、世間では魔術とは言わないからね」

だから手に握った砂を早く放して欲しい。

「じゃ、じゃあ向こうで着替えてきますね」

「ハルさん、覗いちやダメずらよ？」

「うむ。それはフリ…ああ、冗談だから睨まないで善子ちゃん」

このままだと握った砂を早くも投擲されかねない。

そんな危機感を感じた俺は、おとなしく口を閉じるのだった。

「ハルさん、待たせてごめんずら！」

「おかえり花丸ちゃん。そんなに待ってないよ。善子ちゃんとルビィちゃんは？」

「よくわからないけど、少し遅れてくるって言ってたずら」

「ほう」

どうしたんだろう。

体調でも悪いのかな？

そんな心配をしつつ、水着の花丸ちゃんを見る。

身長は非常に小柄で、まだ幼さを感じさせる雰囲気。

栗色の髪とオレンジの水着の組み合わせは、なんとなく温かみを感じさせる。

そして何より。

「…とても高校一年生とは思えないね」

あるところを見てそんな言葉が口をつく。

いやまあ、どこことは明言しないことにしておくが。

「ん？何の話すら？」

「ただの独り言だよ」

「そう言われると気になるすら」

「…あまり深く聞こうとすると、痛い目を見ることになるよ」

俺が。

だからだ話をしていたら、やがて善子ちゃんとルビイちゃんもやってきた。

黒を基調としたいかにもそれっぽさを感じさせる水着を着ているのが、善子ちゃん。

逆に、なんとなく普段とギャップを感じさせる青色の水着を着ているのがルビイちゃんである。

「お、お待たせ」

「お待たせしました」

「おかえり二人とも。ちよつと遅かったね」

「ま、まあね…」

「あ、あはは…」

どちらもなんだか複雑な表情をしている。
はて。

「二人とも、なんだか様子が変だね。どうかしたのかい？」

「ずらっ？」

何気なくした質問。

だが、質問したら明らかに暗い空気が流れ始めた。

ずう〜ん。

そんな音が聞こえてきそうだ。

「…ずら丸と並ぶのよ」

「…どうあっても自信なくします…」

まるで眩くように。

そして呪詛のように、口からそんな言葉を漏らす二人。

「…コメントに困るね」

先ほど、花丸ちゃんのスタイルに魅力を感じただけに、なおさら言葉に詰まる。

「ここは下手なことを言うのはよそう。」

「まあそうは言っても、君たちだって十分すぎるほど魅力的だよ。かわいいし、よく似

合ってる」

「ほ、本当に？」

「嘘は得意じゃないんだ。言葉通りに受け取ってくれ」

「そ、そう？は、ハルも案外わかってるじゃない」

「か、かわいい…。えへへ」

思ってたより効果があつた。

さつきまでの暗さは結構緩和されたようだ。

などと思つた矢先。

「…ハルさん、丸は魅力的じゃなかったぞら…？」

もちろんこの言葉の発信源は花丸ちゃんである。

あちらを立てればこちらが立たず。

言うまでもなく、みんな魅力的なのは事実なんだけどなあ。

※

「いてて…筋肉痛が…」

「海で遊んだだけで筋肉痛なんて、運動足りてないんじゃない？」

「ま、丸も痛いずら…」

「運動不足はお揃いだね、花丸ちゃん」

「不名誉なお揃いね」

「あ、あはは…」

翌日。

体が軋むような動きをする俺と花丸ちゃん。

想定してたより海を楽しんだ俺たちは、案の定日頃の運動不足が祟って筋肉痛に襲われているのだった。

「花丸ちゃん、Aqoursの練習では筋肉痛あまり起きなくなってきたのにね」

「ストレッツとか入念にしているからならなかったずら…」

「確かに、準備運動はしたけど、終わってからはほぼしてないね」

「いや、それにしても情けないでしょ」

呆れる善子ちゃんと苦笑いのルビィちゃん。

しかしながら、その表情に昨日のような不快感の色はない。

修理の完了したエアコンが、部屋の気温を快適に保っているのが理由だろう。

「そういえば昨日のこと、ダイヤちゃんたちに話したのかい？」

「ああ、はい。昨日帰ったら、どこに行ってたんだーって聞かれたので…」

『ルビイ、今日はハルさんのところに行ってたんですのよね?』

『あ、うん。そうだよ。ちよつとはしやぎ過ぎちゃった』

『ふふ。楽しめる時楽しむのはいいことです。それで、何をしてたんですの?』

『人気のないところでね、遊んでたんだよ』

『……ひとけのないところ?』

『うん!ハルさんが昔から知ってる穴場スポットで、善子ちゃんと花丸ちゃんの三人で遊んだの!』

『……な、なな……!ど、どういうことですか!?!』

『え、ええ?いや、ハルさんが、汗だくになっちゃうからちゃんとした場所に行こうって

……あれ?お姉ちゃんどうしたの?』

『なんでもありませんわ。ただ鞠莉さんと果南さんに連絡をとっているだけです』
『うゆ?』

『つていうことがありました。お姉ちゃん、なんであんなにびつくりしてたんだらう』

『ダイヤさん、面白いずらー』

『そうね。確かに面白いことになってそうね』

「ちよつと待って」

なんかすごく嫌な予感がする。

てか善子ちゃんは勘付いてるよね。

「ルビイちゃん」

「なんですか？」

「…俺たちが昨日どこに行つたかはちゃんと話したのかい？」

「どこつて、人気のないところに…」

「海つてちゃんと行つたかい？」

「あ、言っていないかもです」

「かもじゃなくてどちらかはつきりしてくれると嬉しいね。場合によっては俺の今後に関わるんだ」

「いや、この流れだと多分言っていないでしょ」

冷静なツツコミは善子ちゃん。

いや、今場合は冷酷とも言えるかもしれない。

『ブルルルルル』

タイミング良くか悪くか。

スマホにメールの着信音。

表示される相手の名前。

『黒澤ダイヤ』

タイトルはなく、本文が一言。

『鞠莉さんと果南さんを連れて、今からそちらに行きます』

「案の定誤解されてるわね、これ」

「楽しそうに言わんでくれ」

「まあ、誤解を解くのは手伝ってあげるわよ」

「ほ、本当かい？」

「まあ」

「鬼の形相した三人が、私の話を聞いてくれたらね」

「……………」

背筋が凍ったように冷える。

寒気に鳥肌が立つ。

エアコン、まだ直す必要はなかったかな…。

駄弁るAqoursと布屋さん9

「衣替えの季節がやってきたね」

「そうだねー」

「ねー」

「そうね」

6月の上旬も上旬。

つい先日6月になったばかりの今日。

服装を夏仕様に替えた千歌ちゃんと曜ちゃん。

まだ冬服のまま梨子ちゃんの三人が今日はうちへ来ている。

Aqoursの二年生三人組だ。

「普段の冬服も可愛いけど、夏服もよく似合ってるよ、二人とも」

「そ、そうかな？えへへ」

「私たちはこれで二度目だけだ……ハルくん、毎年同じこと言ってるよ？」

「毎年思っているからね。嘘は一度も言っていないよ」

「ナチュラルに口説きにいくのは、二年前から変わらずってことなのね」

「恐らくもつと前からだよ、梨子ちゃん」

「なんの話かな？」

「ハルさんは変わってないって話だよ」

「褒め言葉かな？」

そう言ったため息をつかれた。

なんなんだい。

「それはそうと、梨子ちゃんはまだ冬服のままなんだね」

「特に理由があるわけでもないけどね。まだ夏服にしようと思うほど暑さを感じることはないから」

「確か一週間くらい衣替え期間があるんだったかな？」

「そうだよー。6月の1日から一週間だね」

「千歌ちゃんと曜ちゃんは1日に夏服にしたのかな？」

「私はそうだよー。この方が動きやすいしね！」

「私も同じだよー。理由も同じで、動きやすいからだよー！」

「君たちらしい理由だね」

普段からアクティブな彼女たちらしい理由だと思う。

ちなみに梨子ちゃんはセーラー服の上に水色の薄いカーディガンを着用している。

色と厚さが違うけど、冬の花丸ちゃんと同じスタイルだ。

「ただ、だね」

「ん？」

「君たち、スカート丈が相当短いという自覚はあるかい？」

「え？そんなことないよ？」

「みんなこんなもんだよー」

「確かに、千歌ちゃんとか曜ちゃんは短いわよね」

「まあ君も大概短いんだけどね」

ちなみに、梨子ちゃんのスカート丈は、千歌ちゃんたちと比べて一卷き分だけ長くなっている。

といつても、もともと短いスカートを基準にしているので、梨子ちゃんのスカート丈だって決して長いとは言えないんだけどね。

「で、それがどうしたの？」

「いや、そのスカート丈であんまり動くと中見えるからね。気をつけなさいよと」

「は、ハルくんのエッチ！」

「そう言われてもね」

「ハルくん、スカートが短いから女子高生が好きなの？」

ジト目でそう言う曜ちゃん。

「まさかそんなわけないだろうに。女子高生の魅力なんて、普通の男性なら5時間くらいは余裕で語れるものさ」

「長い長い！」

「それは普通の男性に対して失礼だと思うの」

「ハルくん……」

ジト目から引き気味の目に変わった。

「ま、まあそれはともかく、6月は案外まだ冷える事もあるから、私はまだ長袖のままかな」

「そうだね。梅雨の季節でもあるし、湿度はともかく気温は冷え気味の日はちよいちよもあるかもね」

「でも逆に暑い事も多くない？」

「それでも、まだ6月だし、限度があるから大丈夫よ」

「そっかー」

そんな話をしている最中、気づいたらお茶がなくなっている事に気づく。

「ついでと思い、彼女たちにもお茶がいるか聞いたところ。」

「私はあったかいお茶がいいな」

「あ、じゃあ私も」

「私は冷たいのがいいな」

服装だけでなく、お茶の好みも季節の間の影響を受けているようだ。

さすがに一人分のためにお茶を沸かすのは面倒なので、冷蔵庫のお茶をコップに移し、レンジでチン。

風味が落ちたりするかもしれないけど、まあそこまで気にしないでしょ。

お茶をコップに入れてお盆に並べる。

ついでにお茶受けのカステラを乗せて、再び店の方に戻る。

改めて考えると、営業時間にこうして普通に席を離れるというのは如何なものかと思う。

「あ、おかえりハルくん。：：どうしたの、複雑そうな顔して」

「この店、営業は大丈夫かなって」

「あはは。営業がギリギリなのはいつもの事でしょう」

「あんまり笑える事じゃないんだけどね」

「で、でも、ちゃんと黒字ではあるんでしょ？」

「なんとかね」

みんなにお茶を配り自分も温かいお茶を飲む。

うん、レンジでチンしたやつでもいけるね。

「そういえばさっきの話だけどき」

「さっきのつて…デッドラインギリギリのうちのお店のことかい？」

「いや、そっちじゃなくてさ」

「衣替えの話じゃない？」

「そうそう」

「お店の話は、これ以上続けると悲しくなりそうだしねー」

「その発言で俺は悲しくなりそうだよ」

「あはは」

そんな会話の後、再び千歌ちゃんが会話を続ける。

「ハルくんは夏服と冬服、どっちが好きなのかなーつて」

「どっち…かい」

「あ、確かに私も気になるなー」

「そ、そうね」

「そんな事気にしても仕方ないだろうに」

「い、いいじゃん！な、なんとなく気になるの！」

まくし立てられるように言われる。

言いたくないわけでもないし、聞かれるのは別にいいんだけどね。

「その話をするなら、まずはそれぞれの魅力について考えようじゃないか」

「あ、語るパターンだこれ」

「ハルくん、手短にね」

「そんなに話す事あるのかしら」

軽くあしらわれてる気もするけど、なんだかんだ聞いてくれるあたり優しい。

ありがたく語らせてもらおうじゃないか。

「まずは冬服についてだけどね」

「あ、冬服からなんだね」

「冬服の魅力は、まずはやっぱり萌え袖だね」

「萌え袖？」

「袖がちよつと長くて、手とかが隠れてるやつだね」

「半分隠れてたり、全部隠してたりするのもあるんだよー」

「曜ちゃん詳しいね」

「これでも衣装係ですから」

敬礼してそう言う曜ちゃん。

そう考えると、俺よりこの子の方が制服の魅力は語れるんじゃないかな。

「男の子から見た魅力と、女の子から見た魅力は別だからねー」

「なるほどね。どうやって俺の心を読んだかは、この際突っ込まないでおくよ」

「そんなわけで、男性から見た冬服の魅力をどうぞ」

「…曜ちゃん、なんかノリノリになってきてない？」

「…衣装の話になると、曜ちゃん結構周り見えなくなるから」

千歌ちゃんと梨子ちゃんがなんかひそひそ話している。

まあ気にしないで続けよう。

「次に、マフラーや耳当てといった小物の充実っぷりだね」

「夏にも小物はいろいろあるでしょ？」

「もちろん。そう言う意味では夏のものも魅力的なんだけど…冬は小物の存在感が割と

大きいものが多くてね」

「んー…確かにそうかも」

「でも、その魅力だところいう暖かくなってきたときは魅力が下がりそうね」

「いやいや、逆にこの時期だからこそ目立つ冬服の魅力もあるのさ」

「ほうほう！」

思ったより曜ちゃんがノリノリで聞いてくれる。

「それはね、上着を脱ぐ瞬間なんだ」

「ぬ、脱ぐ…」

「や、やっぱりエツちな目線で…」

「いやはや、そう決めつけるのはちよつと早いよ。俺は何もまとっている布が減るから魅力的になると言っているわけではないんだ」

「どういうこと？」

「普段羽織っている上着を脱ぎ、それまで見慣れなかったシャツになる…その動作自体が色気、もとい魅力として映るのさ」

「…難しいね」

「うーん…脱ぐ瞬間…」

「…あ」

何かを思いついたような梨子ちゃん。

どうしたんだろうと思ったときだ。

「きよ、今日はちよつと暑いわね」

そう言いながら、制服の上に来ていたカーディガンを脱ぎ始めた。

「まあ夏直前だしね。上着、脱ぐのかい？」

「え、ええ」

「あああ！」

「梨子ちゃんずるい！」

「な、何がかしら？」

よくわからないけど、なぜか揉めているようだ。
はて。

「ほ、ほらハルくん！夏服！夏服の良いところも語ってよ！」

「ああ、それはいいけど、千歌ちゃんはこの話題、あんまり乗り気じゃなかったように見えたんだけど、気が変わったのかい？」

「い、いいでしょ！別に！」

「な、なんで怒ってるのさ」

まくし立てられつつ、リクエスト通りに夏服の魅力を語ることに。

「夏服の魅力はまず何と言っても、肌の露出だね」

「あ、もしもし警察ですか？」

「あはは、梨子ちゃん。もうちよつとくらい話を聞いてくれても良いんじゃないかな？」

「手短にお願いな」

「ハルくん、やつぱりエッチな目線で見てるんじゃないか」

「いいかい三人とも」

仕切り直して改めて話を始める。

まずは梨子ちゃんが携帯から手を放すようにしたいところだ。

「肌の露出と言つてもね、別にそれは破廉恥な意味のみではないんだ」

「はあ」

「健康的で若さを感じるそれが見えること自体が、魅力的に映るのさ」

「…全然イヤらしさが取れてないような気がするんだけど」

「夏服であること自体が、こう、無防備に見えたりとか、他にも透けやすさがあつたりとか、そういうのも魅力になるんだ」

「イヤらしさ増したよ！もうなんかハルくんが口を開く度に破廉恥さが増してくよ！」

「完全に墓穴を掘り進んでるわね」

あれ？

なぜか夏服の魅力が伝わらない。

「やっぱいいかがわしい理由で好きなんじゃない！」

「あ、あくまで芸術的な意味でだね」

「芸術に謝って」

「いやまあ、ぶつちやけ冬服に比べて小柄もしくは身軽に見えて冬服では感じられなかった『可愛さ』を感じられるっていう魅力はあるんだけどね」

「それ最初に言おうよ！」

「それが一番清純な理由に聞こえるよ！」

そういうことらしい。

結局のところ。

「冬服は『綺麗さ』、夏服は『可愛さ』という魅力を、制服は持っているのさ」

「なんか強引にまとめに来たわね」

「これ以上話すと本当に通報されかねないからね」

だから良い加減携帯を下ろして欲しい。

「そんなわけで、夏服を見ると冬服が、冬服を見ると夏服が魅力に見えてしまうんだ。贅

沢だけどね」

「そんなもんなんだねー」

「毎日交互だったら嬉しいかもね」

「そんな人いないでしょ」

「ぜったいめんどくさいしねー」

「そうね」

そりゃそうだ。

毎日衣替えしながら生活する人なんて聞いたことないし。

※

「あれ？今日は曜ちゃんと千歌ちゃんが冬服ずら？」

「逆に梨子ちゃんも夏服なんだね」

「と、特に理由はないのよ？な、なんとなく変えようかなって」

「でも、昨日の今日でいきなり変えるなんて…変なことするのね」

「そ、それはもういいんじゃないかな？ほ、ほら、練習しよ！」

「…なんか怪しいわね」

そんな会話が学校であつた事は、もちろんハルの知るところではない。

デートの持ち物と布屋さん1

「デートに持って行くもの…?」

「そうそう」

パソコンの画面を見て呟く。

俺が現在見ているのは、スクールアイドルの公式プロフィールが書かれたホームページ。
シ。

個人のプライバシーを侵害しない程度に、スクールアイドルのプロフィールが記載されており、気になったりしたアイドルの情報を読む事ができるサイトである。

もちろん、本人の許可なく情報が公開される事は無いし、公開してもいい情報を自分で決める事も可能である。

「ライブ運営が公式にしているサイトでもあるので、個人で情報を公開するのに比べて信用性も高いのです」

「載せる情報も人によってだいぶ違うんです」

先日、三年生組が教えてくれたこのサイト。

実際、数多くのアイドルの情報が公開されているが、その内容は様々のようだ。

写真の公開をしている人もいればそうで無い人もいる。

その他にも、年齢、学年から人によっては身長や体重まで公開している人もいる。

「…身長はともかく体重は公開する意味あるのかな？」

「軽いと可愛らしく見えるでしょ？」

「あれだけステージで踊ってるんだから、ある程度筋肉もついてるだろう？だとすれば、相応の体重があるのもおかしく無いと思うんだけどね」

「ガールズはそんな単純じゃ無いのでーす」

「俺が単純みたいだね」

「当たってるではありませんか」

「手厳しいね」

そんな会話をふと思ひ出し、何の気なしにホームページを覗いたのがついさつき。

そんな中で、『アンケート』なるものを見つけたのだった。

「何週間かに一度、スクールアイドルにアンケートをとってるんだよー」

「それでその結果を公開するのよ」

「これも参加は自由なんだよー」

本日うちに来ている二年生三人組がそう話してくれる。

「ちなみに、アンケートっていうのはどんなものがあるんだい？」

「んー…そうだねえ…」

「前は、『朝起きてから最初にやること』だったわ」

「ふむ」

『『スカートとズボン、どっち派？』とかもあったねー』

「俺はスカート派…じゃなくて、なるほど、そういうアンケートなんだね」

「ハルくんは…」

「スカートが好き…」

「そんなしょうもない事、憶えなくていいよ」

「それでもって、今回のアンケートがこれだ。」

『デートに持っていきたいもの』

「持っていききたいものって…お金とか？」

「いや、それも大事だけど」

「じゃあ…念のためキャッシュカードかな」

「お金の話から離れて」

そういうものではないらしい。

まあアイドルのアンケートなわけだし、ある程度夢のある話にしろってことなんだろうか。

「俺にはなかなか思いつかないけど、みんなは何か書いているのかい？」

「ふふん！何を隠そう、今回はA q o u r sのメンバー全員参加だよ！」

「ほう。それはまた」

「あ、ある人をみんな思い浮かべながら考えたのよ……！」

梨子ちゃんが若干身を乗り出してそう話す。

きつとその目は何かを訴えている……気がする。

「り、梨子ちゃんそれ言うの……！だ、大胆だね……」

「た、たまにはこれくらいはね」

「ある人……かい。ああ、誰か一緒にデートに行きたい人がいるのかい」

そういうえば、前に好きな人がいるとか言ってたような……。

「確かにこういうのは、ある程度シチュエーションを思い浮かべるのが重要だしね。いいことだと……あれ、なんで暗い表情してるの」

「……持つてくもの、とりあえず鈍感修正器って書くべきだったわ」

「……うん」

「…そうだね」

「お？」

なぜか負のオーラが漂ってる気がする。

とはいえ。

「せつかくだし、みんなの書いたものを覗かせてもらおうかな」

「それはもちろんいいんだけど…なんか恥ずかしいね」

「変なものでも書いたのかい？」

「ち、ちがうよ！ふ、普通のだよ！」

やりとりの後、ページ内からアンケート結果へ飛ぶ。

ずらつと並べられたアイドル達の回答の中から、A q o u r sのメンバー達の回答を
発見。

「千歌ちゃんは…お弁当、だね」

「う、うん。や、やつぱりなんか恥ずかしいね」

「いやいや。可愛らしい答えじゃないか。デート慣れしているような雰囲気も感じさせ
ず、アンケートの回答としてはとても良いと思うよ」

「…なんか評価のポイントが違う…もう！そうじゃないでしょー！」

「評価？」

「だ、だからその…は、ハルくんがデートに行くなら、お、お弁当を持ってくるのはどうか…とか!」

「俺なら?」

歳下の彼女がデートに弁当を作ってきてくれる…

ふむ。

「個人的にも、すごく嬉しいと思うよ」

「ほんと!?!」

「もちろん。万が一俺が女の子とデートにでも行くことがあれば、ぜひとも作ってきてほしいものだよ」

「う、うん! 作るよ!」

「いや、万が一にでも彼女ができたらの話だよな?」

なんで千歌ちゃんが作る話になってるんだろうか。

そう思ったが、なんだか嬉しそうにしている千歌ちゃんを見てその言葉を口にするのはやめることにした。

「それで梨子ちゃん… 『手作りのお菓子』 なんだね」

「え、ええ。変… かな?」

「いやいや、まさかそんな。梨子ちゃんらしいなって思ったよ」

「それは褒め言葉なの？」

「もちろん。女の子らしくて素敵だと思うよ」

「そ、そっか…えへ」

梨子ちゃんの様子を見るに、悪い気はしていなさそうだ。

手作りのお菓子…うん、梨子ちゃんらしくていいよね。

可愛らしさもあるし。

千歌ちゃんと言い梨子ちゃんと言い、二人とも手作りのものを考えたわけだ。

やっぱりこういうところは可愛らしいよなと思う。

なんて思っていたら。

「は、ハルくん！私のは!? 私のはどうなの!？」

曜ちゃんが机に乗り上げん勢いで問い詰めてきた。

そんな必死に聞くことでも無いと思うんだけど、やっぱり女の子としてのプライドと

かあるんだろうか。

「えっと曜ちゃんのは…『カロリーメイト』」

……………。

カロリー…メイト。

いわゆる、栄養調整食品の一つ。

なんていう堅苦しい分類は置いといて、一般的なイメージはそこそこ美味しい非常食ってところだろうか。

いや、もちろん味の感じ方は人それぞれだけど、売り上げとか知名度とか考えると、やっぱり人気はあるんだと思う。

ちなみに俺も、お金に困るとちよいちよいお世話になる。

けど、この場ではそんな情報はほほ意味なんてない。

というか、焦点がそこじゃない。

「一応確認したいんだけどさ」

「ん？」

「これ、お題は千歌ちゃんや梨子ちゃんと同じなんだよね？」

「そりゃあねー。二人と同じで、『デートに持っていきたいもの』でありますよー」

「…デートに…ね」

俺の感覚が間違っているのか。

いや、さっきまでの二人を見るに多分そんなことはないはずだ。

「ハルさん、困ってるわね」

「まあ…そりゃ困るよねー」

「あ、あれ？ハルくん？」

さすがに妙な空気を感じ取ったのか、曜ちゃんが尋ねてくる。さて、どう返したのか。

「あ、あの…：やっぱり変…：なのかな？」

不安そうな表情で聞いてくる曜ちゃん。

こういうとき、嘘を上手くつけないのはちよつと不便だ。

「…一般的ではないね。でも、その、なんだ、曜ちゃんらしさはすぐ感じられるよ」

「ハルさん、苦しいけどなんとか言い繕ったわね」

「嘘つけないから、ああいうフオローしかできないんだらうねえ」

「そこ、余計なことを言わないように」

幸い、二人とも小声なので曜ちゃんには聞こえていないようだが。

「そっか…：私らしい、か…：ねえ、ハルくん的にはその…：嫌、だったりするの？」

「俺は曜ちゃんらしさを悪いことなんて思っていないからね。君らしいものが持ち物にあつても、それは良さとして映るんだよ」

「そ、そう？…：うん、それならいいかな。へへへ」

笑顔に戻ってくれた曜ちゃん。

なんとかフオローはできたらしい。

「…：私が言うのもなんだけど、曜ちゃん、ちよろいわね」

「ちよろい？」

「…なんでもないのよ」

さつきよりさらに小声のお二人。

なんの話をしているんだろうか。

しかし…

カロリーメイトが来るとは思わなかったな。

ていうかどんなデートを想像してるんだろう。

なにはともあれ。

思いもよらぬ回答だったけど、まあこれはこれで面白かった。

うん。

どうせだし、他の学年の子も覗いて見ることにしようじゃないか。

そう思い、俺は早速一年生三人組に連絡をとるのだった。

デートの持ち物と布屋さん2

「で、話っているのがこれ？」

「あー。懐かしいアンケートすら」

「アンケート取ったのは今から一週間くらい前だから、そんなに懐かしむほど昔ではないと思うけどね」

「これがどうかしたんですか？」

昨日呼んだ一年生三人組と一緒に仲良くパソコンの画面を覗く。

パソコンには昨日二年生たちと一緒に見ていた、スクールアイドルの公式ページが映し出されている。

画面中央に表示されているのは『デートに持っていきたくないもの』の文字。

二年生たちの回答がなかなか面白かったので、他学年の子達の回答も見ようと思いついた俺。

それでもって、どうせなら本人たちの話も聞こうと考え、こうして一年生の子達を呼んだわけである。

「俺はまだ君たちの回答を見てないんだけどね、せっかくなら本人たちと見ようと思っ

「たんだよ」

「あー…なんか二年生組は一緒に見たって言ってたわね」

「そうだね。一緒に見たよ」

「…なんの罰ゲームよ」

「大勢の人に公開している情報なんだし、何も罰ゲームってことはないだろう」

「一緒に見るのがハルさんじゃなければそうだったすら」

「なんでよりによって頭に浮かべてた当人と一緒に見なきゃいけないのよっ」

「あ、あはは…」

善子ちゃんが微妙に聞こえづらい音量で何か言っている。

花丸ちゃんの声はそれなりにはつきり聞こえるのだが、残念ながら会話の内容は分からない。

「まあでも、ハルさんならこの会話を聞いてても気付かないすら」

「これで気づけるなら、そもそも先輩たちの時に気付かれてるよね」

「そりやそうかもしれないけどさ」

でもなんとなく馬鹿にされてる気がする。

まあいいか。

「それで、最初の話に戻るけどね」

「うん」

「結局これ、一緒に見てくれるのかい？」

「丸は大丈夫ずら！」

「わ、私もですつ」

「じゃ、じゃあ私も見るから！」

「お、三人ともご一緒してくれるんだね。それはよかったよ」

「…せめて空気から何か察しなさいよ」

※

三人に冷たい緑茶を渡しつつ、パソコンの画面を見る。

見ているのはもちろん、スクールアイドルの公式サイト。

『デートに持っていききたいもの』と題されたそのページにはスクールアイドルの名前と、その回答が記されている。

その中から、彼女たちの名前を探していく。

苗字はともかく、ルビイちゃんの名前は結構目立つ。

そのため、案外すぐに見つけることができた。

「えっと、ルビイちゃんの持っていきたいものは…」

「わ、私が最初ですか!？」

「る、ルビイちゃんのが一番気になったずら!？」

「そ、そうなのハル!？」

「いや、普通に目に付いたただけなんだけど。というかあんまりこちらに迫ってこないでくれよ。照れるし暑いじゃないか」

「じゃあもうちよつと照れてる様子見せなさいよ」

「実際こうして照れているじゃないか」

「顔に、暑苦しいって書いてあるずら」

「迫ってくるのが美少女でも、暑いものは暑いんだね」

「やかましいわ」

いきなり本題からそれた。

パソコンに視線を戻し、ルビイちゃんがデートに持っていきたいものを見る。

『『アイドルグッズ』だね』

「デート、ライブにでも行くことを想定したの?」

「ルビイちゃんらしいずらー」

「そ、それもなくてないんだけど…それだけじゃないんだよ」

「ほうほう。ライブ以外に、アイドルグッズを持っていきたい理由でもあるのかい」

「そ、その…わ、私、デートなんてしたら多分、心臓が破裂しちゃうくらいドキドキしちゃうから…」

「うんうん」

「その、気分を落ち着けるために、あつたらいいなって…」

もじもじしながら話してくれるルビイちゃん。

照れながら上目遣いでそう話す姿は、まさに恋する乙女のそれだ。

かわいいの一言に尽きるね。

「いいハル、あれが照れってやつよ」

「確かにそうだけど、正直今言うことじゃない気がする」

「ルビイちゃん、すごくかわいいずら〜」

「え？ええ？」

デートの緊張緩和のために、常日頃持っているものを所持しておきたいと。

ルビイちゃんらしい理由だと思う。

「花丸ちゃんの言うように、可愛い理由だと思うよ」

「本当ですか？」

「もちろん」

「…もしハルさんの恋人が、デートにこういうの持ってきてても、ハルさんは嫌じゃないですか?」

「ルビイちゃんみたいないな理由なら、それも好印象だね」

「そ、そうですか。…えへへ」

安心したような表情のルビイちゃん。

それを横目に、次は花丸ちゃんの回答を見ることにする。

「さて、次は花丸ちゃんだけど…」

「ま、丸ずら!」

「うん。ダメだったかな?」

「そ、そういうわけじゃないずらよつ。ちよつとびつくりしただけ…うん! 覚悟決めたずら!」

「そんなに気合を入れる必要はないと思うけどね」

言いながら画面を見る。

花丸ちゃんの、デートに持っていききたいものは…。

「…二つ、あるね」

「二つあるわね」

「これ、二つ答えても良かったんだね」

「確かに、ルール上は一つに絞れとは書いてないですね」

「ああ、そうなのかい。じゃあ二つあるのは大丈夫なんだね」

うん。

ルール上問題ないのであれば、二つ回答があることについてはスルーでいいだろう。

ところが、だ。

内容については、引つかかることがある。

「一つは文庫本、だね」

「ルビイちゃんと同じで、ないと落ち着かなくて」

「うん。それはなんとなく分かるよ。花丸ちゃんらしいとも思うしね」

「そうね。問題はそこじゃないわね」

「…うん」

花丸ちゃんの回答二つ目。

そこに書かれていたものは。

「俺の目がおかしくなければ、『まくら』って書いてあるよ」

「あんたの頭は時々おかしいけど、目はおかしくないわよ」

「頭がおかしくなるのはお互い様かな」

「この回答を見るに、ズラ丸も大概だと思うけどね」

「となると、まともなのはルビィちゃんだけかい。4人中3人がおかしいのなら、むしろおかしいことが普通と言えるんじゃないかな」

「そんなことはどーでもいいのよー！」

「二人ともどうしたずら？」

「うゆ？」

話ぐだいぶずれたけど、要するに花丸ちゃんはデートに枕を持っていきたいと書いたわけだ。

…いや、やっぱりおかしいよね、これ。

「花丸ちゃんは、枕をどうやって持つていくつもりなんだい」

「か、カバンにいれるずら」

「そうかい。そりやあ大きなカバンが必要になるね」

「あはは。花丸ちゃん、ちよつと変わってるね」

「いやいやいやいや！違うでしょ！どう考えてもちよつと変わってるってレベルじゃないでしょー！」

「おや、善子ちゃん、ようやくツツコミのお時間…ぐえ」

善子ちゃんからクッションが投擲された。

跳ね返ったクッションは、すぐ近くのパソコンにもお茶にも当たらず地面に落下。

素晴らしいコントロールである。

「どこの世界に枕持ってデート行く女子高生がいるのよ」

「え？何かおかしいはずら？」

「ほとんどおかしいわよ」

善子ちゃんほどはつきり言うつもりはないけど、まあ確かに一般的ではないかな。

とはいえ、理由は聞いておきたいものだ。

「ちなみに、枕を持っていきたい理由はなんだい？」

「あ、うん。丸ね、お昼寝とか好きなんだ」

「ふむふむ」

「それでね、こ、恋人とかできたら、一緒にお昼寝とかできたらいいな…って」

指を合わせて恥ずかしそうにそう話してくれる花丸ちゃん。

顔を赤くしながらもそう話してくれるその姿は、可愛いという表現以外の言葉では表

せなさそうだ。

「えつと…やつぱり、おかしいはずら？」

「いや、全く。素晴らしいよ。よくよく考えると、枕の一つや二つ、持ってきてもおかし

いことなんて何もなかったね」

「おい」

善子ちゃんからはジト目で見られていた気がするが、気にしないことにしておく。

「さて、最後は善子ちゃんだね」

「そうね」

「まあ、正直予想はできるけどね」

「丸もずら」

「えつと…る、ルビイも…」

「なんですと!?!」

「むしろ予想されなれないと思っていたのかい。おそらく、A q o u r s のメンバー全員が、君の回答にはだいたい予想がついていると思うよ」

「な、なんてこと…私のアカシックレコードがどこからか漏洩して…」

「君が普段から口にしてるからね。アカシックレコードというより、むしろオープンソースだね」

「難しい言葉が並んでよく分からないすら」

「あはは。そうだね」

話している俺もなんの話をしているか忘れそうだし、ちゃんと本題に入るとしよう。

「でも！私はあなたたちの予想を裏切ってみせる！さあ！とくとご覧なさい！墮天使のアンサーを！」

自身の回答が映し出されたページを開き、その画面を俺たち三人に見せてくれる善子ちゃん。

胸を張って紹介してくれるのは、なんだかんだ初めてのパターンだ。

画面に映し出された回答は…。

『悪魔の羽』ずら

『悪魔の羽』だね

「おやおや善子ちゃん。現実にならないものを書いちゃダメじゃないか」

「あるのー！というか、反応薄！」

まあある程度予想できてたしね。

多分、彼女とある程度交友のある人間なら、9割くらいの人が予想できる気がする。

「で、悪魔の羽って何ずら？」

「くつくつく…それはもちろん…これよ！」

「あ、善子ちゃんがよく持つてる羽だね」

「それ、悪魔の羽だったんだね」

「驚いたでしょう？」

「そこで驚かせたかったのかい」

「どうか。」

「デートに持っていきたくないものなのに、いつも持ってるの?」

「うぐつ!いい、いいでしょ!別に」

「もちろんいけないとは言わないけどね。もつと珍しい道具とか持つてくものだと思つてたよ」

「魔術書とかずら?」

「か、乾燥したカエルさんとか…?」

「持つてないわよ!」

机をバンバンしながら言う善子ちゃん。

「というか、ルビイもズラ丸も、なんだかんだ普段から持つてるものだったでしょ!」

「それもそうだね」

「だから、別におかしくないの!」

「なるほど」

なんて会話をした直後。

ルビイちゃんから思わぬ言葉が。

「あ、じゃあ善子ちゃんも、緊張を紛らわせるために悪魔の羽を持つていくんだね」

「は？」

「確かに、普段身につけているものを持つていくのが丸たちと同じなら、理由もきつと同じなら」

「なあつ！」

「ああ、そういえば二人は緊張しちゃうのを落ち着けるためにつて持ち物選んでたね」

「ち、違うわよ！」

「ふふ。善子ちゃんも女の子だもんね」

「そんなに照れなくてもいいずら〜」

「ち、違うつてばー！」

「なるほどね。君もなかなか可愛らし…ぐえ」

「またしてもクツションが投擲された。」

「明らかに威力がさつきより高い状態で。」

「そ、そんな理由じゃないから！そんな温かい目でみるなー！」

「顔面にクツションを受けたせいで、正直目を開けるのが痛いんだけどね」

「よくよく考えると、堕天使が悪魔の羽つてどうなんだろう。」

「堕天使といえ、背中に黒い羽が生えてるイメージはあるけど…。」

「あれつて、悪魔の羽なのかな？」

それとも墮天使の羽？

そんなどうでもいいことを、顔を真っ赤にしながら叫ぶ善子ちゃんを見ながら思っただった。

デートの持ち物と布屋さん3

「さて、俺の要件はすでに聞いているかな」

「イエース。みんなが話してくれました」

「デートの持ち物、だよね」

「あのアンケート、ハルさんが気にしているなんて意外でしたわね」

「気にしているってほどでもないんだけどね。なんとなく目にとまったんだよ」

昨日、一昨日と話題にしていたデートの持ち物のお話をすべく、本日は三年生三人組に来てもらった。

もうすでに一年生や二年生から話は聞いてるらしく、事情はあまり説明しなくても良さそうな様子だ。

「ちなみに、私たちの回答をハルさんはまだ見てないのですよね？」

「そうだよ。どうせなら初見の方が面白いだろうからね」

「ナイスジャツジでーす！」

親指を立ててそういうマリーちゃん。

「確かに、その方が面白いかもねー」

「ハルさんにしては気が利きますわね」

二人に關しても納得のご様子。

ふむ。

この反応を見ると…。

「三人とも、俺に回答を見られるのに抵抗はなさそうだね」

むしろ、ある程度自信を持っているようにも見える。

「当然ですわ。人に見せられないような回答など、公表するわけありませんから」

「ミートウーです。誰に見られてもノープロブレム」

「私はそこまで言えないけどねー。でも、隠すほどのものではないかなー」

「なるほどね。君たちらしいよ」

せっかくそう言ってくれてることだし、早速みんなの回答を見て行くとしよう。

「ほらハル、もうちよつとそっち詰めてよ」

「いや、これ以上はほとんど限界だよ。できればそっちに詰めて欲しいんだけど」

「こちらもギリギリ画面が見れる状態ですわ」

「もー！あんまり暴れないでくださいーい」

四人で横に並んでパソコンの画面を覗く。

左から順に、俺、果南ちゃん、ダイヤちゃん、マリーちゃんの状態だ。

20インチにも満たない画面を見るには、4人はちよつと多い。

一年生や二年生の時は、自分の回答とかに關しては直接画面を見ることはなかったの
で、こんなに詰め詰めで画面を眺めることはなかったのだが…。

この子たちは、自分たちの回答だろうとすっかり見たいらしい。

「自分たちが何を答えたかくらい、憶えてるだろう？ そんなに強引に見る必要はないと
思うけどね」

「なんとなく見ておきたいんだよ！」

「ガールズの複雑な事情なのでーす」

「一年生や二年生は、自分の回答は恥ずかしいから直接は見れないって言ってたよ」

「それもまた乙女の嗜みですわね」

「女心は複雑なんだね」

どうあつてもこの子たちは退いてくれる気がないので、このまま4人仲良く横に並
んで見ることにする。

若干狭いけど、まあこれも致し方ない。

「最初はマリーちゃんかな」

「オツケーでーす！」

「なんで鞠莉から?」

「名簿順だね」

苗字、小原だし。

あれだけ人に見せることに抵抗を示さなかったのだ。

きつと、常識的かつちよつとしたスパイスの効いた回答をしてくれているだろう。

そんな期待を胸に、俺はマリーちゃんの見返りを見るのだった。

「鞠莉さんの回答は…」

「あ、これだね。えつと…」

「「キヤツシユカード」」

「イエース！」

「……………そうくるかい」

完全に予想の斜め上。

いや、決して悪いわけではないんだけど。

でも先日、二年生組とデートに持っていくものを話した時は、キヤツシユカードについては何となく難色を示していた気がする。

歳をとると、考えにも違いが出てくるってことなんだろうか。

初めから男性にお金を出させる気がないというのは、プラスに考えられることだろ

う。

まあ、マリーちゃんのお家の経済力を考えれば、おそらく大概のものはそのカード一枚でなんとかなるんだらうけどね。

…男としては少々情けなくなりそうだ。

俺がそんなことを考えていた時だった。

「鞠莉さん…」

「鞠莉…」

ダイヤちゃんと果南ちゃんの声が耳に入る。

二人も、さすがにコメントに困って…。

「素晴らしいですわ！さすが鞠莉さんです」

「うんうん。ハル…じゃなかった、相手の男の子のお財布事情を考えてあげてるんだね

！」

「イエース！二人はわかってくれると思ってましたー」

あれ？

思ってたのとだいぶ違う反応。

てつきりツツコミでも入るのかと。

まあうん、お金にしつかりとした意識をもっているからこそなんだろう。

そういうことにしておく。

「ハルとのデートだと、そんなにマナーは使わなさそうだけどねー」

「じゃあなんでキャツシユカードなんて書いたの？」

「お金のことは心配しなくてもいいアピールです」

「返ってハルさんのプライドに傷をつける気もしますが…まあ、お金のことであの人にプライドは見えませんか」

三人がヒソヒソ話をしている。

内容は聞こえないけど、失礼なことを言われている気がする。

「さて、次は私ですわね」

「そうだね。ダイヤちゃんの回答を見せてもらおうか」

「ダイヤはやつぱり手堅い回答なのかな？」

「そういうイメージはあるね」

「いやいや、案外裏をかいてくる可能性もありまーす」

「どこの裏だい？」

「ハルの思惑じゃない？」

「それなら普段からできてるよ」

常日頃、この子たちの行動読めたことほとんどないし。

「話が逸れてますわよ」

「そうだったね。えっと、ダイヤちゃんの回答は…」

『着替え』

「んー…普通だね」

「んー…ノーマルですわね」

「え、これ普通なの？」

「やはりそうですか…インパクトには欠けると思っていましたわ」

「俺は結構びつくりしたんだけど」

着替え？

…使い道がイマイチ分からない。

ダイヤちゃんのことだ。

まさかいやらしい目的ではあるまい。

「なんで着替えなんだい」

「なんでって…着替えが必要になることは色々あるでしょう？」

「そりゃあるかもしれないけどさ…その言い方だと、いやらしい意味で取られても文句

「は言えないと思うよ」

「おやおやハルく、いやらしいことつてなんですか？」

「あはは、ハルも男の子だもんね」

「は、破廉恥ですわよ！」

「…俺がおかしいのかい、これ」

マリーちゃんと果南ちゃんは中学生男子のようにニヤニヤしている。

いやらしいのはどっちなんだい、まったく。

「この辺りといえば、海の町でしょう？ですから、水場で遊ぶことも多いと思ったから着替えと書いたのです。決して破廉恥な意味ではありませんわ！」

「まあダイヤならそうだよね」

「なるほどね」

ドラマとか映画とかで見る、キャツキャウフフとしながら水の掛け合いをするやつ。

あんな感じのデートを想像したと。

「でも、ハルが水辺で遊んだら足を取られて倒れちゃいそうです」

「そうだねー。運動神経、お世辞にもよくないからねえ」

「そのための着替えですわ」

「あ、それハルのための着替えだったんだね」

「さすがダイヤでーす」

またしてもひそひそ話をし始めた。

案の定、失礼なことを言われている気がする。

「さて、最後は果南さんですわね」

「そうだねー」

「果南がデートに持っていきたいもの…想像できないでーす」

「同感だね」

そう言っても、ここままでまともに予想ついたらのなんて正直善子ちゃんくらいだけ
ど。

「うーん…まあ、そんなに変わったものではないよー」

「そう言って普通の物を挙げてくれたのは、これまで千歌ちゃんと梨子ちゃんくらい
だったんだよ」

「まるで私が普通じゃないみたいですよわね」

「そうでーす。私だつて至つてノーマルだったはずでーす」

「そう思うなら他のアイドルの回答をちゃんと見てくれたまえ」

着替えはともかくとして、キャッシュカードなんてそうそういないはず。

…いないよね？

「まあまあ、それはともかく。私の回答見るんでしょ？」

「そうだね。それじゃあ失礼して…」

画面に映し出される果南ちゃんの回答。

そこに表示された文字列。

『サバイバルキット』

「いや、これはどう考えても普通じゃないよね」

「さすが果南さんですわ！」

「果南、やるねー」

「その反応も普通じゃないね」

ちよつとちよつと。

「あれ？ハル的には何か引つかかる感じ？」

「何かっていうかほとんどまるまる引つかかかってるんだけど」

「どうしたんですか、ハルさん？」

「今日のハルはいろんなとこに違和感感じてますねー」

「その俺が浮いてるような空気にするのはやめてほしいんだけど」

だんだん俺がおかしい気がしてきた。

もしかして俺がおかしいのかな？

デートにサバイバルキットを持っていくのだから、現代では何もおかしくない。

今時、有事に備えてこの手の物はみんな一つくらい…

…いや、やっぱおかしいって。

「うん、申し訳ないんだけど、やっぱ俺の知り合いにデートにサバイバルキット持っていく人はいないや」

「ここにいないじゃん」

「一人しかいないよ」

「今後は私も、こういうのを用意する必要があるのでしょうか？」

「ケースバイケースでありかもです」

「ごめん、三人に訂正だ」

まあそれはともかくとして。

「で、なんでサバイバルキットなんだい？」

「サバイバルするため？」

「デートでサバイバルが必要になることは恐らくないはずだけど」

「ほら、もしもの事があるでしょ？」

「そのもしもが起こらない場所に行く事を、俺は強くオススメするよ」

「今更ですけど、サバイバルキットが必要になりそうな場所に行つて、ハルさんはもつんでしようか？」

「んー…確かに、体力ないもんなあ」

「でも、生命力に関しては結構高そうだよー？」

「あのおばあちゃんに鍛えられてるもんねえ」

「逆に、それだけ鍛えられてなぜあんなに体力ないんでしょう？」

案の定聞こえない会話をする三人。

んー…なんなんだろうか。

※

「はあ？デートに持っていききたい物？」

「そうです。千歌ちゃんたちとそういう話をしたんですよ」

「わざわざ電話してきたかと思つたらそれって…」

「ちよつと自分の感性に自身が持てなくてですね」

「はあ？」

その日の夜。

俺は美渡さんと電話していた。

一年生、三年生の回答を見て、自分の感覚がずれているのではないかと不安になったためだ。

「…美渡さんなら何持っていていきます?」

「何って…そりやいっばいあるでしょ」

「適当に一つ挙げてください」

「一つって難しいね。うーん…とりあえずハンカチかティッシュユかなあ」

「…美渡さん」

「どうしたのさ」

「安心しました」

「…いや、本当に何があったのよ」

よくある1日と布屋さん1

ベルトコンベアに乗せられ、皿が周る。

皿に乗せられている寿司たちは、自分たちが人間の腹に収められるのを今か今かと待ちわびている。

それは果たしてどんな気分なのだろうか。

噛み砕かれ、腹に入れられ、消化液で溶かされるのを待つその時間は、死刑の時間を待つ死刑囚のそれと同じ気分なんだろうか。

「…いや、食事中になんてこと考えてるのよ」

「ハルさん、なかなか詩人ずらね」

「うゆ…ちよつと食べ辛くなっちゃうね」

「おっと。それは申し訳なかったね」

謝罪を口にしつつ、みんなのコップにお茶の粉を入れていく。

それが4つできたら、机に装備されている蛇口からお湯を入れてお茶が完成である。

時刻は・夕方のお食事時。

道を歩けばどこかしらの家から、美味しそうな晩御飯の香りが漂ってくるこの時間。

俺は1年生3人組を連れて回転寿司のお店にやってきた。

一皿100円の全国どこにでもあるチェーン店だ。

誘ったのは俺。

彼女たちを呼んだのは特に理由はなく、偶然うちにいたからだ。

「さあさあ。好きなものを食べてくれたまえ」

「おおー！ハルさん太っ腹ずらー！」

「で、でもいいのかな？」

「まあハルが良いって言ってるしいんじゃない？」

「その通りだよ。今日は遠慮なく食べておくれ」

「了解ずらー！」

「ずら丸は普段から遠慮なく食べてるじゃない！」

そんな会話をしながら、今日のお昼のことを思い出す。

この子たちをこのお食事に誘ったときのことだ。

※

「回転寿司？」

「そうそう。一緒にどうかね？」

A q o u r s の練習を終えた1年生3人組。

今日も今日とて特に理由もなくうちへやってきた彼女たち。

そんな彼女たちに、俺は晩御飯を一緒にしないか声をかけた。

行き先は回転寿司のお店。

「そりゃあ連れてってくれるならありがたいけど……」

「ハルさん、お寿司屋さんに入れてくれるはずら？」

「まあ1000円寿司だけだね」

「いくら1000円寿司って言ったって、4人分ってなるとそこそこ値段はるわよ」

「だ、大丈夫なんですか？」

「今更だけど、食事を誘った女子高生にお金の心配をされるって、なかなか笑えないね」

「女子高生に制服の魅力語るよりは幾分ましだと思っただけだね」

「誰のことを言ってるか分からないね」

「お金より頭の心配したほうがよかったかしら」

「あつはつは。今日は辛口だね善子ちゃん」

話がそれた。

「まあそれはともかく、お金のことなら心配しないでくれ」

「何かあったんですか？」

「回転寿司を誘っただけで何かあったと心配されるのは、さすがに情けなくなってくるね」

「それだけみんなに愛されてるってことすら」

「なるほど。花丸ちゃん、いい解釈をするね」

「えへへ。そうずら？」

「そうじゃなくて！お金の話はどこいったのよ！」

再び話がそれたところで、善子ちゃんが机をバンバンし始めた。

「何を隠そう、この前宝くじに当たってね。一万円だけどね」

「宝くじですか？」

「おおー！ハルさんすごいずら！」

「そんなわけで、普段から世話になっている君たちに幸せのおすそ分けをと思つてね」

「そうやってすぐ使うから常に金欠になるんじゃないの？」

「まあまあ、そう言わずにね。こういう形で入ったお金は、あまり手元に置いておかないようにしたいのさ」

「にしたつて、他に使い方あるんじゃない？」

「君たちの為に使う以上の使い道は、残念ながら俺には思いつかないからね」

「…そ、そう」

「・善子ちゃん、照れてるぞら」

「ま、まあ、急にあんなこと言われたら、誰だつて照れちゃうよね」

善子ちゃんが少しの間こつちを見てくれなくなった。

なんだろうという表情をしていたら、花丸ちゃんとルビィちゃんが苦笑いをして
た。
はて。

※

「回転寿司つて、普通のお寿司屋さんではまず見ないお寿司とかあるわよね」

「そうだね。正直ネタにしか思えないのかもあるね」

「寿司だけにね」

「……………」

「ちよつと、なんか言つてよ」

「え、今、なにか言うところだったぞら？」

「は、花丸ちゃん、今のはね、お寿司の具を指す『ネタ』とギャグつていう意味の『ネタ』

で意味が被つてて……」

「説明やめて！余計恥ずかしくなるから！」

「まあまあ善子ちゃん。寿司でも食べて落ち着きなさいよ」

「ネタの話振つたのはハルでしょうが！」

言いながら机をバンバンしそうになつたところで思いとどまつた善子ちゃん。

そうやってブレーキがかけられるなら、うちでもちゃんとブレーキかけて欲しい。

特に必要もなかったやり取りの後、みんなでお寿司に手をつける。

回る寿司を見て未来ずらと叫ぶ半丸ちゃんを横目に、俺はとりあえずサーモンをチョ

イス。

「じゃ、とりあえず注文入れるけど、あんたちも何かいる？」

「善子ちゃん、その機械は何ずら？そこから寿司が出てくるずら？」

「ち、違うよ花丸ちゃん。その機械で注文するとね、欲しいお寿司を直接流してくれるん

だよ」

「おぉー！未来ずら〜！」

「これ、今から5年以上前からあるシステムなんだけどね」

「ずら丸からしたら機械は全部未来よ」

「当たり前前に存在する機械に対して、あえてそれが特別だと感じる感性を持つてるんだ

ね」

「そんな難しいこと考えてないわよ」

「あ、俺は炙りサーモンをよろしく頼むよ」

それから数分。

みんなで寿司を食べている時、ルビイちゃんがこんなことを言った。

「お寿司つて、上手に食べるのが難しいですよね」

「上手に、かい？」

「はい。ルビイ、いつもネタとご飯が離れちゃつて…うゆ…また」

「ああなるほどね。箸で食べるならネタを下にして食べたらいいよ。下からネタを支え

るようにしてね」

「えつと…あ、いけそうです」

そのままなんとか一口で食べるルビイちゃん。

こうやって箸で食べる際は、ネタを下にして一口で食べるのがマナーなんだと昔婆さ

んが言っていた。

マナーなのはわかるけど、シャリに醤油つけた瞬間に鉄拳制裁はどうかと思つた。

「でも、ルビイは口が小さいから、一口でつていうのはちよつと大変ですね」

「まあゆつくり食べたらいいさ。あんまり堅苦しくならずね」

「あはは。はい。そうします」

まあ確かに、ルビイちゃんくらいの子には一口では食べ辛い寿司もあるだろう。

なんて思つてふと横を見たら、花丸ちゃんがいとも容易くお寿司を丸呑みしていた。しかも次から次に口に放り込んでいる。

「もぐもぐ……うん、おいしいずら」

「堪能してるね、花丸ちゃん」

「ずら！ まだまだいけるずらよ」

「そうかい。今日は好きだけ食べてくれ」

一方、善子ちゃん。

「…善子ちゃん、その醤油はなんだい？」

「なんだいって…そりゃ醤油でしょ」

「俺の使ってるやつと、なんか色が違うんだけど」

「わさびのせいじゃない？」

「いやどんだけわさび入れたの君」

「多少辛いほうが美味しいのよ、ほら、ハルも使つてみる？」

「遠慮しとくよ。ネタの味が死にそうだし」

「逆よ。際立って美味しくなるの」

「お寿司屋さんによつては追い出されそうな暴挙だね」

善子ちゃんの醤油皿。

そこに存在する醤油の色は、なんか少し緑色っぽくなってる。

見てるだけで食べているお寿司が辛くなりそうだ。

ルビイちゃんに至つてはわさびが相当苦手だったはずだし、間違つて使わないように見ておかないと。

「あ、花丸ちゃん、醤油取つてくれる？」

「ん。つて、もう残つてないからね」

「本当だね。店員さんが補充し忘れていたんだね」

「とりあえず店員呼んだから、その間は私の醤油使つていいわよ」

「いいの？善子ちゃんありがとね」

「…あ、ちよ、ちよつと待つて…」

俺の制止もむなしく。

善子ちゃんの悪意のないトラップをもろに受けたルビイちゃん。

その瞬間に大きな悲鳴があがったことは、まあ言うまでもないだろう。

※

「うわー！これ美味しそー！」

「千歌ちゃん！こつちもこつちも！」

「ちよつとお二人とも！あんまり大声を出すのははしたないですよ」

「とか言いながらダイヤもずつとそわそわしてるじゃん」

「ダイヤもきつと本当なら一緒にはしやぎたいんでーす」

「そ、そういう訳ではありませんわ！」

仲良くお寿司を食らう二年生と三年生。

昨日の話をA q o u r sの練習中に聞き、早速うちへやってきた彼女たち。

なんとなくこうなる気はしてたけど、実際彼女たちの食欲を前にすると腰がひける。

宝くじで当てた金額は一万円。

…足りるのか、これ。

「…あの、ハルさん」

「…なんだい、梨子ちゃん」

「さつきからお寿司にも全然手をつけてないし、大丈夫？」

「…どうってことはないさ」

「顔、真っ青よ」

「わさびの色がうつつただけさ」

「それはそれで大分問題あるでしょ」

「まあ心配しないでくれたまえ」

そう。

俺はこの子たちの笑顔があればそれでいいのだ。

うん。

例えこれで彼女たちの食事代が宝くじのあたり金額を遥かに凌駕しようとも。

そして俺の財布に大打撃を与えようとも。

彼女たちが笑ってくればそれで…

ってああダイヤちゃん、そんな初っ端で高いプリンをなぜ頼むんだい。

ちよつ、千歌ちゃんとか曜ちゃん、それは一貫で200円もするやつじゃないか。

マリーちゃんは何んでお寿司屋さんでポテトを食べてるんだい。

「…顔、ますます青くなってるけど」

「…わさび、食べ過ぎたみたいだ」

その日久しぶりに。

俺は女子高生に恐怖を覚えたのだった。

よくある1日と布屋さん2

『今日の運勢12位の星座は……こちら!!』

俺が普段見ているニュース。

その最後にある、星座占いのコーナー。

画面上にはいかにもテンションが下がりそうな演出とともに、12位になってしまった星座の名前が映し出されている。

というか俺の星座だ。

『今日は何をやってもうまくいかない1日』

『やることなすこと、裏目に出ることばかりでしょう』

テレビから、今日最も運勢の悪い星座についてあれこれコメントが流れている。

これ、いつも思うけど7位とか8位みたいな中途半端な星座にはコメントもないわけだし、ある種こつちの方が得した気分をすと思うんだ。

「ドベなんだし、これくらいは楽しませてやるといふことなのかね」

ちなみにラッキーアイテムは『空から落ちてくる異物』。

より運気が下がりそうなんだけど。

※

「ハル、占いとかできない?」

夕方。

本日うちにやってきたのは3年生のメンバーたち。

そんでもって、この妙な話題を出したのは果南ちゃんである。

つい今朝、最悪の運勢を占っていたと聞いたところでこの話題。

「また急だね」

「なんかね、ダイヤの大好きなμ sのメンバーには、タロットカード占いができる人がいたんだってさ」

「東条希ちゃん…だったかな」

「オー、ハル、知ってるのー?」

「μ s自体は結構有名だしね。もちろんそんな詳しく知ってるわけではないけどさ」

「でしたら話は早いですわね!つまりはそういう事なのです!」

「…申し訳ないけど、どういうわけか全然わかんないよ」

μ sに占いをできる人がいたからといって、俺に占いができるかを聞く理由にはな

らんだろうに。

「μ、sの参謀でもあつた希さんは、かつてμ、sのピンチには占いを行う事で危機を逃れていたそうですわ」

「参謀って…」

「ワターシたちも、未来予知の能力を身につける必要がありまーす！」

「つて言つて、鞠莉もダイヤも、朝から張り切つてるんだよねー」

「占いと未来予知つて同じものなのかね。というか、それにしたつて急だね」

ダイヤちゃんがμ、sに憧れてたのは昔からだし、いきなりなんで占いの話なんて持ってきたのか。

「今朝、星座占いが一位だったんだつて」

「すつごい単純だね」

「つまりはノリと勢いでーす」

「たまにはそういうのも大事なのです！」

手をあげたりしながら元気にアピールしているダイヤちゃん。

そしてそれに乗つてテンションをあげてるマリーちゃん。

忘れかけてたけど、もともとこの子たちはかなりアクティブなタイプの子達だ。

時々、こういうよくわからない話をよくわからない理由でもつてくるのである。

「果南ちゃんも占いができるようになりたいのかい？」

「んー…私はそういうの、あんまり信じてないしなあ。あ、でも、やるのは面白いと思うよ」

「まあ、未来予知はともかく験担ぎくらいにはいいかもね」

そんな会話の後、三人仲良くパソコンを覗き込む。

インターネットブラウザを開き、『占い』で検索。

予測してはいたけど、多種多様な占いの種類、方法がヒットした。

「たくさんあるんですね」

「オー！ジャパニーズフォーチュンテレーリング！」

「ふぉーちゅんてりんぐ？」

「確か英語で『占い』って意味だったはずだよ」

「ちなみに星占いなら『ホロスコープ』ですよ」

「今は星占いはできないですけどね」

「星占いに星座占いは入るのかな？」

「んー…入りそうではないかな…」

特に何でもない会話をしながら占いを見ていたら、とある変わった占いを発見。

『下駄占い』

「懐かしいね」

「何ですの、これ」

「アイドノンノーでーす」

「ダイヤと鞠莉は知らないの？ハルと私はやった事あるよー」

「そうなんですの？」

「だいぶ小さいときだけどね」

下駄占い。

『明日天気になーれ』という掛け声とともに下駄を放り、地面に落ちた下駄が表を向いていれば翌朝は晴れ、裏を向いていたら雨になるという占いだ。

なんかここまで話に出てきたものは若干毛色が違うが、とりあえずこれも占いのひとつではあるだろう。

「これ、全然当たらなかつたよねー」

「そうだね、占い自体は全くとっていいほど当たってなかつたね」

代わりに、果南ちゃんや千歌ちゃんが投げた下駄が俺の頭に当たるとはしよつちゆうあつたけど。

「んー…やってみたいでーす！」

「え、これを？」

「私も興味がありますわ」

「ダイヤも？てつきり行儀が悪いとか言うと思つてたよ」

「いや、ダイヤちゃんなら普通にやりそうだと俺は思つてたよ」

「ハルさんの中の私は、ちよつと暴れん坊なんですの？」

「ちよつとじゃないよ。君たち三年生組は全員恐ろしいくらいアクティブだからね」

「アクティブねえ」

「要するに脳筋つてことですかー？」

「ああなんだ。ちゃんと自覚はあ…ぐべ」

「さあ三人とも、下駄を持って外に出ますわよ！」

「イエース！」

「あ、ハル、倉庫の下駄借りるよー」

人の顔面にクッションを投げつけた拳句、スルーする三人。

そういうところが脳筋と…いや、今度は下駄が投げられそうなのでやめておこう。

「足で放る？」

「そうそう。ボールを蹴る時みたいな感じで」

「靴飛ばしの要領だね」

「なかなかクレイジーな占いですねー」

「変わった占いなのは事実だね」

話をしつつ、とりあえずお手本として果南ちゃんがやることになった。

「じゃ、お手本見せるからよく見てね、二人とも」

「頼むから今回は上に打ち上げてくれよ」

「昔は横に飛んでたんですの？」

「俺の頭の方に飛んでたよ」

「上といえば上でーす」

「直撃なんてしようもんなら、俺の魂が上に逝くことになるよ」

「ふふふ。面白い冗談ですわね」

割と笑えない冗談だけどね。

まあそれはともかく、うちの物置にあつた下駄を片足に装着し、果南ちゃんが投擲する準備を完了。

そして。

「明日天気になあれ」

そんな掛け声とともに下駄は空へ舞った。

そしてそのまま空にキラーン。

地上に落ちることなく星になるのだった。

「…落ちてこないでーす」

「あちゃー。やりすぎたかあ」

「もう、果南さん力を入れすぎですわよ」

「そういう問題じゃないよね」

とんでもない速度で空に投げられた下駄は、あまりに高く上がりすぎてそのまま帰る

ことはなかった。

…どんな力だい。

「じゃ、次は私でーす」

下駄が帰ってこなかったたので、物置から新しい下駄を持ってきて再開。

今度はマリーちゃん番だ。

「マリーちゃんはある程度力加減をしておくれよ」

「気をつけまーす」

「そうですわよ。下駄がかわいいそうです」

「俺もかわいいそうですよ?」

確かに一生履くことはないであろう下駄だったけどさ。

「じゃあ行つくよー! 明日サニーになあれえええええい!」

「俺の話聞いてた?」

俺の話の何を聞いていたのかわからないマリちゃんはそのまま下駄を全力で投擲。

投擲されたそれは、案の定空に消えていった。

「というか、君たちちよつと力強すぎじゃない?」

あの脚力で蹴られたら、俺の体重でも10 m以上飛ばされそう。

…セクハラ発言、控えたほうが良さそうだ。

「さあ! 最後は私ですわよ!」

「張り切ってるね、ダイヤちゃん」

「そりゃあ前二人が不甲斐ない結果だったのですから。当然ですわ」

「ぶーぶー! 私だって全力だったんだぞー!」

「そうでーす！ 私たちなりに頑張ったんでーす！」

「そもそも頑張つてやるものじゃないんだよ、これ」

「まあまあお二人とも、ここは私に任せてくださいいな」

まだやつてもいけないのにドヤ顔のダイヤちゃん。

…やらかしそうだな。

「では…明日天気になーれ！」

ある程度力加減をされて投擲された下駄。

相変わらず高々と上がったものの、今回は行き先を見失う程でもなかったそれは、少ししてちゃんと帰ってきた。

そして。

『ガチャーン』

うちの瓦屋根に落下。

「…屋根の上に乗ったね」

「屋根の上でどうなってるんでーす？ 裏？ 表？」

「いや、見えないよ」

「ふふん。私としたことが、少々やり過ぎてしまいましたわ」

「なんでドヤ顔？」

結局。

この子たちに下駄占いが向いていないことだけがはっきりわかったのだった。

※

「やっぱり、占いといったらもつと簡単なものだよね」

「それで手相占いか」

「インターネットにもやり方がたくさんのもつてますからねー」

「それで、君たちは何について占ってくれるんだい？」

「んー…手相占いだけでも、たくさん種類があるんですね」

「あ、これなんていいんじゃない？」

「おおー！ウエディンググライン！」

ウエディンググライン？

…ああ、結婚線か。

というかその訳はそれで正しいのか？

それはともかく、確かに手相を見るなら結婚線は定番の一つだろう。

左右側から伸びる感情線。

その線と小指の間の線は結婚線と言われており、結婚を迎える年齢や、結婚後の生活模様についてなどを分かるとされている。

定番だけあって、ネットで見るまでもなく簡単な知識なら俺でも知っているやつだ。

「それだったら、俺がみんなのやつを見てあげるよ」

「え、ハル、手相見れるの？」

「見れるってほどじゃないけど、ほんのちよつとくらいなら知識があるよ」

「おー。ぜひお願いしまーす！」

「じゃ、左手を出しておくれ」

マリーちゃんから左手を差し出してもらい、結婚線を見るべく手を見る。

当然、その際に手を握ることになるわけだが…

その辺でなんだかマリーちゃんの様子が変わり始めた。

「なんでマリーちゃん、顔を伏せてるのさ」

「…なんでもないです…」

気のせいかな顔が赤くなっている気もするが…

あんまりよく見えない。

「鞠莉、実はうぶだよねえ」

「手を握られただけで真っ赤ですからね」

「だ、ダイヤたちだって人のこと言えないですっ」

「わ、私は手を握られたくらいでそんな…」

「ダイヤ、それフラグ」

なんの話をしてるかは分からなかったけど、マリーちゃんに頼まれて二人の手相も見ることになった。

二人とも、マリーちゃんと同じく手相を見ている途中に顔を伏せてしまった。

理由を聞いたら、占いで少しは人の心も読めと怒られた。

心を読む能力なら、普段この子たちが俺に使っているんだから、それを教えてくれたらいいと思うんだけどね。

「じゃあねー、ハル」

「さようなら、ハルさん」

「チャオ」

「またね、三人とも」

帰っていく三人を、店先まで送る。

最初は何かかと思つた話題だったが、なんだかんだ面白かつた。そこで、ふと思ひ出した。

「そういえば、今日の占いはドベだつたつかけか」

やつぱりあんなの当てにならないね。

これといつた不幸なんてなかつたし。

「所詮、占いは占いつてことかね」

なんて。

口にした直後。

屋根の上から何か滑り落ちてくる音が耳に入った。

その音につられてそちらを向いた瞬間。

『ゴスー!』

鈍い音と共に下駄が顔面に直撃。

多分、さつきダイヤちゃんが屋根の上のつけたやつだ。

「ぐ、ぐおおおおおつ」

い、痛い。

めちやくちや痛いっ。

『なみにラッキーアイテムは空から落ちてくる異物でくす』

朝、テレビでお姉さんが言っているのを思い出した。

どこが幸運のアイテムなんだ。

直撃した事自体が不幸じゃないか。

まだまだ痛む額を抑えつつ、そんなことを思ったのだった。

よくある1日と布屋さん3

「善子ちゃん、この本返すよ。ありがとね」

「ん。どうだった、この本」

「たまにはライトノベルもいいものだね。なかなかエキサイティングで面白かったよ」
「ふふん。そうでしょうでしょう」

会話をしつつ、先日借りていた本を善子ちゃんに返す。

「堕天使のヒロインとともに地上で問題を解決していくお話だった。」

「堕天使のヒロインっていうのも、味があつてよかったよ」

「え、ほ、ほんど?」

「ああ。可愛らしくてあれはあれで素敵だと思ったよ」

「そ、そう。…わ、私もその、堕天使…だからね」

「ん? そうだね」

「…はあ。これはわかってないわね」

「おお?」

なんでか善子ちゃんが肩を落としているように見える。

…はて。

そんなやり取りを見ていたダイヤちゃんから質問が飛んできた。

「それ、なんの本ですか？」

「ラノベよ、ラノベ。ダイヤ、知らないの？」

「ラノベ？…聞き覚えのない単語ですわね」

「うええ。そんなことあるの？」

「ライトノベルだね。明確な定義はないんだけど…まあ普通の文学に比べて挿絵が多くてとっつきやすい本だとも思ってくればいいかな」

「へー。ハルさん、そういう本も読むんですね」

「普段はあまり読まないけどね。たまにはと思つてさ」

おだやかな昼下がりに。

本日うちへやってきたのは善子ちゃんとダイヤちゃん。

珍しい組み合わせではあるが、テンション上がるとよくわからない暴走をするという点では同じの二人だ。

「ところで、この本を貸したのは一昨日くらいだったはずなんですけど、案外すぐ読めたのね」

「時間はいっぱいあったからね」

「…一昨日、昨日、今日と、どの日をとつてもハルさんの仕事が休みの日はないのですが…」

「店はやってたよ」

「仕事はそんなになかったと」

「誤解を招く言い方はやめておくれよ。常時暇だったわけじゃないさ」

「でも本を読むくらいには暇だったんでしょ」

「最近の日本人には暇な時間というものが欠けているとは思わないかい」

「確かにそれはそうですね」

「ハルの暇な時間が分けてあげられたらいいのにね」

「…話題を変えようかな」

分の悪い会話になりそうだ。

言われていることが事実だけになおさら。

「ところでこの本なんだけどき」

「うん」

「高校生くらいの子たちがいろいろな超能力を使ってたね」

「そうね。学園異能物の本だからね」

「が、学園異能……？」

三人でお茶を飲みつつ借りていた本の話をする。

「この手のジャンルといえば、ライトノベルではそれなりに一般的だ。」

「現実世界では見られない力……いわゆる超能力とかそういうのを使う人が、学園生活を送っているような分野のお話だよ」

「学校に通うような人間が超能力を使うということですか？」

「超能力そのものが学園の勉強科目になってたりっていうパターンもあるわね」

「学校で超能力を教えるんですの？それではまるで宗教ではないですか」

「いや、そういう話だとだいたい能力使用することが常識の世界になってるのよ」

「争いの絶えない世界になりそうですわね……」

「戦ってる描写が中心になってることを考えると、当たらずとも遠からずって感じかな」

「そんなこと考えて読む本じゃないわよ、これ」

話している中で、ふとこんなことを思いつく。

「仮に好きな能力が手に入るとしたら、君たちはどんな能力がほしいかな」

「能力っていうと……さっきから言ってるような不思議な力のことですか？」

「そうそう。こんな力があつたらいいな〜とか、思つたりしないかい」

「みんな一度は考えるわよね」

「そういうものですか?」

「確かに、異能系の本を読むと思わず考えちゃつたりはするね」

「なるほど…」

納得すると、少し考え始めるダイヤちゃん。

「こんな話でも真面目に考えてくれるあたり、ダイヤちゃんは相変わらず真面目である。」

とはいえ、大真面目にぶつ飛んだことを言うのもダイヤちゃんの特徴なんだけど。

「…そうですね。私はこれでしょう!」

「思いついたんだね」

「聞かせてよ」

「ええ、もちろんですわ。私が欲しい不思議な力は…」

そこで少しためて。

「海を割る能力ですわ!」

ドヤ顔でそう言った。

なんというか、ダイナミックでダイヤちゃんらしいといえばダイヤちゃんらしい。

「海の上を歩くんじゃないやなくて、割るのかい」

「ええ。その方が現実味が無くて面白いではないですか」

「あえて現実味がない物を選ぶあたり、ダイヤも大概あれよね」

「まあその、現実と仮想の境界がはつきりしてるのは、彼女の長所だからね」

少なくとも、墮天使を名乗る善子ちゃんに比べれば、よく現実は見えてるだろう。

だからこそ、理想を語ったりするときはそれはそれはぶっ飛んだことを言うわけだが。

「それで、善子ちゃんは…まあ聞く必要はないかな」

「なんでよ!」

「いや、だいたい想像つくしね」

「大方、黒魔術関係の何かではないですか?」

「うぐっ」

凶星だったようだ。

まあそうなるよね。

「聞きたいんだけど、黒魔術関係の力って何さ」

「そりゃあもう、サタンより与えられし魔の力のことよ」

「…日本語で頼むよ」

「最初から最後まで日本語よー」

「というか、それだったら常日頃自分にはそういう力があるんだって言ってる気がするんだけど。」

「いや、実際にはないのはわかってるけどね。」

「…その、私だって、む、昔はちよつとだけ別の力が欲しかったりはしたのよ」
「ほう」

「そうなんですの?」

「それについては初めて聞いた。」

「善子ちゃん、中二病関係以外で欲しがっていた異能があつたのか。」

「それはとても興味があるよ」

「ええ。私もです」

「…そ、その、あんまり他の人には言わないでよね」

「他の人に言いにくいことなのかい」

「そ、そうじゃないけど! その…ちよつと恥ずかしいのよ」

「ますます気になりますわね」

「さっきまでの威勢はどこへやら。」

「なんかもじもじしている善子ちゃん。」

少しして、ポツリと言葉を発した。

それは、もちろん彼女が昔欲しかったらしい能力についてだ。

「と、友達を作る能力が、欲しかったのよ…」

「……………」

「……………」

沈黙が場を支配する。

何か言わないといけないのは分かるのだが、考えれば考えるほど言うべきことが思いつかなくなる。

というか、言葉の代わりに涙が出てきそうになる。

「…ちよつとハルさん、この空気、なんとかしてくださいましっ」

「…無茶言わんでくれよ」

ダイヤちゃんと小声でそんな話をする。

なんとか善子ちゃんに聞こえないようにしないと。

「…いや丸聞こえだから」

「なんてこつたい」

「なんてこつたいじゃないでしょ。…そんなに気を使わなくていいわよ」

「ですが善子さん…」

「ヨハネよ。…言つたでしょ、あくまで昔欲しかった力だつて」

「今は違うのかい？」

「そうよ。…だつて、その…」

なんだか少し言いくそそうに。

それでいて、ちよつとだけ嬉しそうに、善子ちゃんは言葉を続けた。

「友達、もうたくさんできたし…」

そつぽを向いているが、その顔が赤く染まっているのは後ろからでも分かる。

思わず笑みを浮かべていたら、横からダイヤちゃんが善子ちゃんの方に歩いて行つた。

そして。

「もーっ。善子さん、可愛すぎますわ〜」

「ちよ、急に何よ!」

善子ちゃんに後ろから抱きついてそんなことを言いだした。

今にも頬ずりでもしそうな勢いで善子ちゃんを猫可愛がりしている。

「そういうことは何も照れて言う必要なんてないのです! 私たちは真正正銘の友達なの

ですから！」

「ちよつ。暑いからあんまりひつつかないでつ。こうなるから言いにくかつたのよ！」

「もう。照れなくていいんですのよ」

「うがーつ。はーなーしーてー」

抱きついてくるダイヤちゃんを押しして離そうとする善子ちゃん。

その気になれば力づくで離せるだろうに、そうしないあたり彼女なりに思うところもあるんだろうな。

「…何ニヤニヤ見てるのよ」

「いやいや。なんでもないよ」

「なんかむかつくわね」

「それは困ったね」

「ていうか、これ引き剥がすの手伝ってよ」

「満足するまでは付き合つてあげることだね」

「しばらくはこのままですわね」

「なんでダイヤ自身が答えるのよ！」

「まあまあ、友達のじゃれつきくらい付き合つてあげたまえよ」

「あー！もう！だから言いたくなかつたのよー！」

その後。

数分に渡ってダイヤちゃんと善子ちゃんのじゃれつきは続いていた。

※

「…で、ハルが欲しい能力ってなによ」

若干むすつとしながら善子ちゃんが言う。

むすつとしてはいるものの、やっぱりどこか少し嬉しそうで、どうにもそれを見る
とこちらの表情が緩んでしまう。

「ハルさん、顔がにやけてますわよ」

「お互い様だね」

「あら。それは困りましたわね」

「…むかつくわね、ほんとに」

「ふふふふふふふ」

「気持ち悪いわ!」

これ以上は善子ちゃんが本当に怒りそうなので、そろそろ本題に入ることにする。

本題っていうのはもちろん、俺が欲しい不思議な力だ。

「そうだね…俺が欲しいと思う力は…」

どうせなら、普通じゃ絶対できないタイプのがいいかな。

空を飛ぶとか水の上を歩くとか。

なんて、純粹に考えていた。

だというのに。

「女子高生を生み出す能力かしら」

「女子校に自由に忍びこめる能力とかでは？」

そんな風にヤジが飛んできた。

ヤジというか茶々？

「君たちは俺をなんだと思ってるんだい」

「自分の胸に聞いてみなさいよ」

「ちゃんと守るべきラインは守っているはずだがね」

「その線引きはかなり危ないところにひいてますわよ」

返す言葉が思いつかない。

一応、その手の話をする相手も選んでいるのだが、その当人に言われてしまうとね。

「ま、まあそれはともかく。俺なりに欲しいと思う能力はちゃんとあるよ」

「そうなの？」

「気になりますわね」

「そこまで大それたもんじゃないよ」

俺がほしい、ちよつと不思議な力。

それは…。

「お金が湧いてくる能力、かな」

「……………」

「……………」

沈黙。

どうやら、意図せずして空気を凍らせる技を身につけていたらしい。

「…なんでしょう。また涙が出てきましたわ」

「…私のと一緒にしないでよ」

理想の超能力を語ったら、女子高生に同情された男。

そんな情けなさの塊の男の姿が。

そこにはあった。

ちなみにその後。

「俺が欲しい能力、鈍感を解決する能力っていうのもいいかもね」

「それは無理」

「超能力の限界を超えてますわ」

「…君たちは俺をなんだと…」

そんな会話もあつたことを付け加えておく。

よくある1日と布屋さん4

練乳の入ったカップを片手に、食べられるイチゴを探してまわる。

といつても、見つけるのにそんなに苦悩はなく、見渡せばあちこちに獲物はあるのだからね。

「ん。おいしいずら〜」

「うんうん。ほんとにおいしいね。手が止まらないよ」

「焦らなくても、イチゴは逃げないんだから。あ、ほら、花丸ちゃん、練乳口についてるわよ」

「ん。えへへ。梨子ちゃんありがとうずら」

花丸ちゃんの口元を、梨子ちゃんがウエットティッシュで拭く。

それを見つつ、俺は改めて口にイチゴを放り込むのだった。

春のとある1日。

俺は梨子ちゃん、花丸ちゃんと共にイチゴ狩りへやってきていた。

※

「ハルー、ストロベリーハントに興味はない？」

「すとりベリーはんと？…イチゴ…狩り」

「イエース」

「イチゴは好きだし、イチゴ狩りももちろんできるならしたいとこだけどね。そんなお金はないよ」

「あはは！それはわかってまーす」

「それはそれで癪だけどね」

ここの発端はイチゴ狩りの前日。

マリーちゃんがうちへやってきたときの話である。

「行きたいのに縁がないハルを、うちのイチゴ狩りへ招待してあげまーす」

「招待？」

「イエース。うちの提携してるところに、そういうのをやっているとこがあつてねー。そろそろ季節も終わりつてことで、好きなように食べてくれていいって言われてるんでーす」

「え、そういうのつて、そうやって後処理されるものなのかい？」

「よくわからないけど、ビニールハウス一個分、好きなように食べていいから、フレンズ

でも呼んでストロベリーハントしてくれって言われてるよ」

「…改めて、住んでる世界に違いを感じるよ」

しかもマリーちゃんのお知り合いの農園。

イチゴの価格もそれなりに高いやつになりそうだ。

「ああ、それで、俺をそれに招待してくれるのかい」

「イエース。あとは梨子つちと花丸つちが来ることになってるので、その保護者役も兼ねてねー」

「二人なんだね。あれ？君は来ないのかい？」

「私はちよつと時間の都合が悪いのでーす。人数が少ないのは、さすがにタダで9人みんなっていうのはねーって」

「おや。いい気遣いじゃないか」

「うん。ダイヤがそう言ったの」

「…ああ、納得だよ」

「で、じゃんけんで勝った二人が行くことにしたんでーす」

「なるほど。それでその二人なんだね」

保護者代わりと言っても、その二人なら特に注意して見る必要もなさそうだ。

うん。

せつかくだし、楽しませてもらおうじゃないか。

※

そんな経緯の元、今日ここへ来たわけである。

予想通り、二人とも特に注意して見張る必要もなく、俺は食べる方に集中できている現状だ。

「しかしあれだね。贅沢な食べ放題だね」

「一個一個のイチゴもすごい甘くて美味しいしね」

「しかも大きいすら。幸せすら〜」

特に何も考えずに口にイチゴを放り込んでいる最中。

よく見ると、梨子ちゃんだけ食べるペースがゆったりなこと気付く。

「おや。梨子ちゃん、イチゴはあまり好きじゃないのかい？」

「え？別にそういうわけじゃないけど…」

「その割にはゆっくり食べてるね」

「そ、そうかしら？」

「そうすら。丸もハルさんも、もう50個以上食べてるのに、梨子ちゃんだけまだ10個

くらいしか食べてないすら」

「いや、それはどう考えても二人が食べすぎだから！というか、花丸ちゃんはともかく、ハルさんは普段そんなに食べないじゃない。どうして今日はそんなに食べてるのよ…」
「どうしてって…そりゃあ、食べれるときに食べておかないと、この先いつこんな贅沢な食事ができるかわからないじゃないか」

「…思ってたより悲しい理由だったわ」

「ちなみに昨日の晩御飯は何を食べたすら？」

「白いご飯と味噌汁だね」

「…おかずは？」

「味噌汁」

「……………」

「おやおや。なんて悲しい目をしているんだい」

「誰のせいだと…」

「は、ハルさん、お腹減って死にそうになったら、死んじやうまえに丸のお寺に来るぞらよっ。」

「そうならないように気をつけるよ」

イチゴの話をしていたはずなのに、なんでか俺の話になった。

しかも結果的に女子高生二人に同情された。

理由はわかるけど、情けないからそういう目をしないでおくれよ。

「まあ、それはともかくだね。梨子ちゃんと花丸ちゃんは、普段イチゴ狩りに来たら何個くらいイチゴ食べるんだい」

とりあえず話題を変えろ。

「普段って言っても…そもそも、私イチゴ狩りなんて初めてなのよね」

「おや」

「向こうに住んでたときはそもそもこういう農園を目にすることもあまりなかったしね」

「さ、さすが都会ずら」

「いや、このくらいで都会っぽさはないと思うけど…」

「ま、丸は生まれたときから畑ばっかり目にしてきたから、見たことないなんて信じられないずら…」

「私も別に見たことなかったわけじゃないけど…」

花丸ちゃん特有の都会に対する考え方。

相変わらず、なんか若干おかしい。

「それで、花丸ちゃんは普段のイチゴ狩りでは何個くらい食べてるんだい」

「んー…普段は数えることもないから…。どれくらい食べてるかはわからないすら」
「なるほど」

「確かに、食べ放題なのにわざわざ数える必要はないわよね」

「モトを取ろうとする人は数えるらしいよ」

「今日取るべきモトなんてないのに、なんで数えてるのよ」

「多分癖になってるんだね」

「…ダイヤさんじゃないけど、はしたないわよ」

ため息まじりにそう言われた。

確かに否定はできない。

それからさらに30分ほど。

食べていたイチゴもいよいよお腹に溜まり始めたくらいのタイミングである。

「私はそろそろお腹いっぱい。二人は？」

「丸はもう少しだけ入るすら」

「俺も、もう少しだけ詰め込んでおきたいね」

「…その表現はやめましょう」

梨子ちゃんはとりあえずもうご馳走様のようだ。

20個も食べてないんじゃないか？

「先に言っておくけど、20個って結構多いからね？」

「え」

「え、じゃないでしょ。普通は…あれ？普通ってどれくらい食べるんだろう」

「100個くらい」

「それはないから」

今度はジト目で言われた。

実際、普通のイチゴ狩りってどれくらいみんな食べるんだろう。

…食べ放題なんだし、食べられるだけ食べようと思ってしまうのは、やっぱりちよつと違うんだろうか。

「それにしても本当、二人ともよくそんなに入るわね」

「丸は普段から食べてるから平気ずら」

「なんでそれで太らないんだろう。…羨ましい」

「そうは言ったって、君も全然太ってないじゃないか。羨ましがるとはなさそうだけどね」

「食べても太らないのと、太らないように食べないのじゃあ天と地の差があるのよ」

「そんなもんかね」

「丸は気にしたことないずら」

「…ずるい」

「な、なんだか梨子ちゃんの視線が怖いぞら」

睨む…というよりは、呪うような視線を向ける梨子ちゃん。

別に梨子ちゃんだってこれっぽっちも太ってないんだから、気にする必要なんてないと思うんだがね。

「まあ、太る太らないはともかく、たくさん食べるのは良いことだと思うよ」

「そう?」

「ああ。ほら、女の子が美味しそうにものを食べてる姿って、可愛いじゃないか」

「…そ、そう?」

「幸せそうに食べている姿は、こっちまで幸せな気分になるからね」

「…わ、私が食べてる姿も…その、か、可愛いとか、お、思うの?」

「そりやそうさ。もともと可愛い梨子ちゃんが、より可愛く見えるよ」

「…イチゴ、もう少しだけとってくるわ」

「梨子ちゃんちよろいずら!今日はマシだと思ってたけど、やっぱりハルさんが絡むと、梨子ちゃんボンコツずら」

「な、何が?わ、私はちよつとお腹が減っただけよ?」

「動揺が全然隠せてないぞらよつ。別に止めるつもりはないけど、そんなに露骨だとさ」

すがのハルさんにもバレるすら」

梨子ちゃんの花丸ちゃんが急に小声で話し始めた。

よくわからないけど、梨子ちゃんがもう少しだけイチゴを食べるのはわかった。

「せっかくだし、さつき俺が見つけた良いスポットを教えてあげるよ。甘いのが多い場所があるんだ」

「…ハルさん、全然気づいてなかったすら」

「は、ハルさんが可愛いって…うへへ」

「こっちはこっちでポンコツ化が治っていないすら…。善子ちゃんのツツコミ疲れ、今だけちよつとわかった気がするすら」

なんでか別方向に気合が入っているように見える梨子ちゃん。

これまたなぜか疲れの色が見える花丸ちゃん。

そんな二人を連れて、俺は先ほど見つけた絶好のストロベリーハントスポットへ向かうのだった。

※

翌日。

浦の星女学院二年生の教室にて。

「あれ？梨子ちゃんどうしたの？今日随分元気ないね」

「…うん、朝ごはん、抜いたからね」

「ええ!?!ど、どうしたの!?!体調でも悪いの?」

「いいえ、そういうわけじゃないのよ。…ただのダイエット」

「だ、ダイエット?」

「なんでまた急に…?」

「…昨日、食べすぎちゃって…体重、増えた」

「昨日って…鞠莉ちゃんの言ってたイチゴ狩り?」

「イチゴ狩りで太るって…どれだけ食べたのさ」

「ハルさんと花丸ちゃんと同じくらい」

「へー。あれ?でも花丸ちゃん、朝練のときに太ったーなんて言ってたかなあ」

「ハルくんとも朝偶然会ったけど、特にそんなことなさそうだったよ?」

「…同じ量食べたのに、太ったのは私だけ…」

「納得…:いかないい…:」

誰に伝えるともないその声は。

朝の教室に溶けていくのだった。

よくある1日と布屋さん5

「頭で考えてることを…」

「文字にする機械？」

「そうそう」

「うーん…」

「胡散臭いなあ」

「まあそうだね」

夏休みのお昼頃。

今日は曜ちゃん果南ちゃんの幼馴染組がうちへやってきていた。

いつものようにお茶をすすする彼女たちの前には、普段は目にしないような商品が置いてある。

一辺40cm程度の立方体をしているそれは、下の方にはプリンターのような機械が付いている。

パツと見はちよつと形の変わったプリンター。

ただし、普通のプリンターと大きく異なる点が一つ。

そこから伸びる配線。

本来ならUSBケーブルになっていような配線の先には、血圧測定器のような腕に巻くバンドが付いている。

「これを腕に巻いて言葉を話すと、頭で考えてることが文字になってプリントアウトされるらしい。」

「嘘発見器の超発展版？」

「とても本当にそんなことができるとは思えないんだけど…」

「まあ掘り出し物だし、試す価値くらいはあるだろうと思つてね」

「試す？」

「ハルが試せばいいじゃん」

「もちろん試したんだけどね。サンプル数は多い方がいいだろう」

「試したんだつたら、さっきの『らしい』ってどういうことなのさ」

「それにサンプルつて…ハルくん、この機械何かに利用したいの？」

「いや、全然」

「じゃあなんで…」

「興味本位だよ。本当に人の思っていることが読み取れるなら、単純に面白いだろう？」

「まあ確かに、ハルくんにはかなり欠けてる力だもんね」

「不本意ながらね」

呆れるように納得している曜ちゃん。

そんな話をしている最中、果南ちゃんがリストバンドをいじり始めた。

「これ、着けるだけで本音を書き出してくれるの？」

「そうだよ」

「ふーん……。というか、こんなのどこで手に入れてきたのさ」

「昨日リサイクルショップに売ってた」

「胡散臭！」

「絶対偽物だよこれ！」

「偽物も何も、本物なんてないだろう、これに」

「そうだけど！」

ちなみに店員さんからは、『え、これ買うんですか……。ああいえ、買っていただけなら良いんですけど……』と言われた。

さすがの俺でも、店員さんもこれが胡散臭い商品だと思っっているのは察しが付いたよ。

とはいえ、間違ったこと書き出しまくってくれてもそれはそれで面白いと思いつてきた次第である。

「はあ…まあいつか。じゃあ最初は…はい」

そう言つて、果南ちゃんがリストバンドをこちらに差し出す。

「あれ？果南ちゃんが最初にやるんじゃないの？」

「こういうのはい出しっぺからでしょ」

「俺は構わないけど…あんまり意味はないと思うよ」

「そういえばさつき、自分でも試したつて言つてたよね」

「意味がないつてどういうこと？」

「んー…そうだね、結果を見てもらった方が早いと思うよ」

リストバンドを装着し、機械のスイッチを入れる。

普通のプリンターと似たような起動音の後、『スタンバイ』の文字が青く点灯した。

『準備オツケーだよ。何か適当に質問しておくれ』

と、書いた紙を二人に見せる。

「…なんでスケッチブックで会話してるの」

『声を出すと片っ端から文字にしちゃうからね。紙がもったいない』

「そういう融通は効かないんだね」

『安物だからね』

「多分そういう問題じゃないと思うよ」

まあいつかという言葉とともに、果南ちゃんが改めてこちらに向き直る。

ちなみに、話していない間に頭で考えたことは文字に起こされることはない。

そんな説明をスケッチブックでした後、二人が俺に質問をしてきた。

「えつと…じゃあそうだね、まずは、今日の朝ご飯は？」

「無難な質問だね。朝はパンを食べたよ」

「ハルくんが朝洋食って珍しいね」

「昨日安売りしているのを見つけてね」

「そんなことだろうと思っただよ」

「次…ハルくんの好きなものは？」

「女子高生」

「リストバンドじゃなくて手錠にするべきだったかな」

「手は出さないから勘弁してほしいね」

「はあ…じゃあ三つ目…夏の好きなのところは？」

「女の子が水着になつてくれることかな」

「これ、嘘じゃないならそれはそれで問題があるんじゃない？」

「君たちの質問が悪いよ」

「ハルくんの答えが悪いんだよ！」

そんな話をしていたら、ガガガ、ピーという音とともに装置から紙がプリントアウトされて出てきた。

もちろんそこには、俺が会話した際に頭に思い浮かんだことが文字になっている。

出てきた紙を果南ちゃんを取り、曜ちゃんとともに早速確認。

眺めている二人の表情が、少しずつ曇っていくのがわかる。

「…あの、これ、どういう装置だったわけ？」

「頭で考えてたことを文字にする機械だね」

「…話してたことを文字にしてくれる機械じゃないよね？」

「そりゃあそうだよ」

「……………」

苦い顔をする二人。

理由はちよつとだけ想像つく。

多分、俺が昨日自分で試した時と同じことが起こったんだろう。

「俺が話したことと、全く同じ文章がプリントされているだろう？」

「なんで知ってるの!？」

「自分でも試したって言っただろう？その時も全く同じ結果だったんだよね」

「何それ。やっぱりこの機械、偽物なんじゃない？」

リストバンドを外しつつ、二人と会話をする。

呆れというか、案の定というか、そういう表情の果南ちゃん。

対して、曜ちゃんは何かを考えているようだ。

「曜、どうかしたの？」

「んー…確かに、話すことと頭で考えてることが全く同じっていうのはおかしいとは思
うんだけど…」

「だけど？」

「ハルくんだしなあ…と」

真面目な顔でそんなことを言い出した。

いやいや。

「どういうことかね」

「…確かに、曜の言う通りかも」

「果南ちゃん？」

曜ちゃんの言葉に、納得を示す果南ちゃん。

ちよつとちよつと。

「ハルくんのことだし、どうせ嘘はつけないからって頭で考えたことそのまま口にして
そうなんだよね」

「ありそう！」

「俺は単細胞生物かい」

「じゃあ逆に聞くけど、さっき質問に答えてた時、頭で何考えてたのさ」

「何って……」

……あれ。

何か考えてたっけ。

「……そもそも考えてなかったって顔ね」

「だから話したことがそのままプリントされたんだねえ」

「機械を使っけてないのになんで俺の考えがわかるんだい」

※

「じゃ、せっかくだし私たちもやってみようか」

「ヨースロー！」

敬礼をしつつリストバンドを装着する曜ちゃん。

なんだかんだ言いながらも付き合ってくれる二人。

「スイッチを入れたら、話す度にプリントアウトされちゃうからね。巻いたらこれを

使つて会話してくれ」

「了解であります！なんかこれはこれで新鮮ー」

「確かに、あんまりやらないよね」

「君ら二人はアクティブだし、15分静かにしてくれつて言つても難しいタイプだもんね」

「…あれ？バカにしてる？」

「元気なのはいいことさ」

「…やっぱりバカにしているような…まあいつか。はい、装着完了ー」

「オツケー。じゃあスイッチ入れるねー」

果南ちゃんのそんな合図とともに、機械のスイッチがONになる。

さつきと同じく、プリンターの立ち上がるような音がし始めた。

「さて…それじゃあ早速質問と行こうかね」

『カモーン』

「じゃあ…A q o u r s の活動は楽しいかい？」

「もちろん！毎日が新鮮だし、やつと見つけた千歌ちゃんと全力で取り組めることでもあるし、みんなといるのも楽しいし、すごく充実してるよ」

「そうかいそうかい。それはよかつたよ」

「つて、明らかに本音のこと聞いても、機械が嘘を発見できてるかわからないじゃん」
「ああ、それもそうだね。わざと嘘で答えてもらうかい？」

『多分それだと、なんて嘘をつこうか頭で考えちゃうから、結局口で言ったことがそのまま文字になっちゃうよ』

「確かにね。…文字数長いのによくすぐに書けたね」

『そうでしょー』

ドヤ顔の曜ちゃん。

「ということは、嘘をつこうつて思わないで、思わず本音を隠しちゃうような質問が良いわけだね」

「早い話、隠したいことを聞けばいいんだね…なるほど」

納得した様子の果南ちゃん。

その顔には、若干悪い笑みが浮かんでいることがわかる。

この表情は、小さい頃にイタズラとか思いついた時にしていた表情と同じだ。

何か思いついたんだろうか。

「…曜」

「…果南ちゃん、なんか嫌な予感がするよ」

「あはは。大丈夫大丈夫。そんなきつい質問はしないつて」

『絶対だよ?』

「おっけーおっけー。じゃあねえ…曜の好きなものは?」

「ほう」

「なあ!?ちよ、ちよつと果南ちゃん!」

なぜだか曜ちゃんが焦り始めた。

身を乗り出して果南ちゃんに詰め寄る。

対して果南ちゃんは、曜ちゃんのこの反応を予測してたらしく、落ち着いている。

「まあまあ、曜ちよつと落ち着いて。私は別に、好きな人なんて聞いてないよ」

「どういうこと?」

「好きなものならなんでも良いんだよ。食べ物でもスポーツでも」

「まあ、それなら…」

よくわからないけど、納得した曜ちゃん。

好きなものか…。

「ええつと、私の好きなものは…」

と、そこまで話して、曜ちゃんがなぜか口を止めた。

何か思いついたようだ。

表情を見ると、あまり良いことを思いついたわけではないみたいだが。

(だ、だめだ……。好きな人を言うわけじゃないのに、さっきの果南ちゃんとの会話で意識しちやつたせいを言ってもハルくんの顔が頭に……こんなの、後で文字にされたら絶対にバレちゃうじゃん！)

「どうしたんだい、曜ちゃん」

「どうしたの、曜」

「う、うううう……い……」

「い？」

「言えるわけないでしょハルくんのばかあああ！」

なぜか怒鳴られた。

ちなみに、その際に考えてたことはちちゃんとプリントアウトされたらしいけど、出てきた直後に曜ちゃんに隠されて見せてもらえなかった。

果南ちゃん曰く、機械はちゃんと機能してたらしい。

※

「さて、じゃあ機械が壊れていないことも分かったし、今日はこれでお開きつてことで」「あれ？ てつきり果南ちゃんもやると思ってたんだけど」

「いやいや、機械が壊れてないかの確認でしょ？ だったらもう十分じゃない？」

「なるほどね。確かにそうかもね」

「うんうん。じゃあ私はそろそろ…」

果南ちゃんがそこまで言った時だ。

ガツという音とともに、果南ちゃんの方が掴まれた。

「かなんちゃくくん…なに、帰ろうとしているの？」

「あ、あれ、曜、どうしたの？」

「どうしたのじゃないでしょ？ 私はあるな恥ずかしい思いしたんだから、もちろん果

南ちゃんも同じことやるんだよね？」

「あ、あはは…な、なんのことかな…ダツシユ！」

「逃がすか！」

急に走り出そうとした果南ちゃんに、それをものすごい反射で捕まえた曜ちゃん。

さつきからどうしたんだろうか。

「はーい、果南ちゃん、リストバンドつけるねー」

「ちよ、曜？ あの、ニコニコしてるのが逆に怖いんだけど…」

「気のせいだよー。お返ししようなんて考えてないからねー」

なんて言いながら果南ちゃんの腕にリストバンドを巻きつける。

若干強引にも見えるのは果たして気のせいなのか。

その直後、なんの迷いもなく装置のスイッチを入れた。

「さーて果南ちゃん…質問には正直に答えてね…」

「あ、あはは…その、お手柔らかに…」

「大丈夫大丈夫。私だってちゃんと分かっているからね」

「だ、だよ。曜ならちゃんと…」

「果南ちゃんの好きな人は？」

「曜の嘘つき！」

「ほうほう。果南ちゃんの好きな人かい」

そういえば前にもいるって言ってたような…。

誰かっていうのは、確かに俺も気になるね。

「ハルくんも気になるでしょ？」

「まあそりやね」

「い、い…いないよ！」

「あれ、そうなのかい。前はいるって言ってた気がしたんだけど」

「い、いや、それは…」

「まあまあハルくん。それこそ、嘘かどうかは後で機械がちやんと教えてくれるから」

「確かに、それもそうだね。結果を楽しみにしようか」
「う、うううう…ハルのばかああああ！」

また怒られた。

プリントされた答えだが、途中で紙が尽きたらしく、大事なところは文字になつていなかった。

気にはなつたけど、まあ確かにこういうことはこんな方法で聞いていいものではないだろうしね。

これはこれでよかつたんだろう。

ちなみに。

これ以来この機械は倉庫に封印になった。

「ほ、ほら、人の心の中を覗くなんてやっぱいいことじゃないでしょ？」

「は、ハルはただでさえ人の心に鈍感なんだから、機械になんて頼ったら、ますます鈍感になつちやうでしょ？」

二人にそう言われたためである。

言っていることはごもつともだし、言われたようにしまうことにしたが…。

なんとなく、本音で言っていなかったように見えたのは気のせいかな。

機械を仕舞ってしまった今、それを確かめる術はないのだけどね。

イベント事と布屋さん

雨の日と布屋さん1

「やってしまった…」

目前で止む気配を見せない雨を眺めつつ、そんなことをぼやく。

今俺がいるのは駅。

商売の話で隣町に用事ができたのが先週。

そのために今日電車を使ったのだが、せっかく天気もいいので歩いて駅まで行こうと考えたのが今朝。

そして、天気予報を見てなかったためにこの雨の中で帰る術を無くし、雨宿りしているのが今である。

「傘を買う…いや、お金がもつたいないしな…」

まあ要するに、「雨が降る可能性を失念しており、傘を持ってくるのを忘れたのだ。

駅とうちの距離的に、歩くのは余裕だが、この雨ではさすがにびしょ濡れになるだろう。

しかしながら、傘を買うには少々お金がもつたいなく感じてしまう。
最近金欠なのだ。

「仕方ない……か」

覚悟を決め、構えをとる。

この雨の中をダツシユして帰ろう。

そう決めた直後だった。

「おーい！ハルくーん！」

少し遠くからそんな声が聞こえた。

そちらに目をやると、傘をさしたままこちらに駆けてくる少女が視界に入る。

あれは……曜ちゃん？

その向こうには千歌ちゃんと梨子ちゃんの姿が見える。

そんな3人がこちらにやってくるまで、時間はそんなにかからなかった。

「3人も、こんにちは。どうしたんだい？」

「ハルくんが遠くから見えたからねー。慌ててこっち来たんだよ」

「よくあの距離から俺の姿が分かったね」

「雨の中で飛び込みの姿勢とるような人、ハルくんくらいだし」

「飛び込みじゃなくてクラウチングスタートだよ」

「いや、それもおかしいから」

梨子ちゃんにそう言われる。

「ハルくん、どうせ傘忘れたんでしょ」

「おや、よく分かったね」

「それ以外の理由で雨の中で走ろうとする人はいないでしょ」

「そういう趣味かもしれないじゃないか」

「そんな人見たことないわ」

「それもそうだね」

そんな会話の後。

「えつと…じゃあハルくん、私の傘、入ってく？」

千歌ちゃんがそんなことを言った。

「それはありがたいけど…いいのかい？」

「う、うん／＼私もその…嬉しいし」

最後の方が小さくてよく聞こえなかったが、相合傘を許可してくれるようだ。

思わぬ提案である。

「じゃあ失礼して…」

入れてもらう以上、傘を持つのは俺の役目だろう。

そう思い、千歌ちゃんから傘を受け取ろうとした時だった。

「ちよつと待ったー!」

曜ちゃんと梨子ちゃんからそんな声が飛んできた。

なんだろうか。

「な、なんで千歌ちゃんと相合傘なの!」

「え、なんでつて…千歌ちゃんが許可してくれたから…かなあ?」

「だ、だったら、わ、私も大丈夫よ!」

「もちろん私もだよ!」

「いや、そう言われてもね」

なんと反応すればいいのか。

よく分からないけど、彼女達も傘に入れてくれるらしい。

みんなあれかな、傘を持ってくれる人が欲しいのかな。

とはいえ、当然だが傘は一つあれば十分なので、誰かのに入れればいいのか…。

「千歌ちゃんの傘じゃちよつと小さいですよ?ほら、私のなら二人余裕だよ」

「ああ、梨子ちゃんずるい!」

「梨子ちゃんのじゃ女の子っぽ過ぎるんじゃない?ほら、私のなら男の子が持つても大丈夫なデザインだよ!」

「曜ちゃんまで！で、でも、最初に言ったのは私なんだよ！私のに入るべきだよ！」
「ぐぬぬぬぬ〜」

…なんでこうなるんだろうか。

いくら傘持ちが欲しいにしても、二人で入れれば濡れやすくなってしまうだろうに。
そんなに傘持つて歩くのが嫌なのか？

結局。

3人が交代で入れてくれる事になった。

適当なタイミングで交代しつつ、傘を持って彼女達と帰り道を歩く。

なんでもない事を話しながら歩く帰り道。

こういうのも悪くない。

「よし、そろそろ交代だよー」

「うーん…まあ仕方ないかあ」

「ルールだからね」

「最後は…梨子ちゃんが入れてくれるのかな？」

「ええ。ど、どうぞ」

「ありがとう。失礼するよ」

「あ……う、うん／＼／＼」
傘を受け取り、梨子ちゃんを最大限カバーしつつ自分も傘に入れる位置をキープする。

自然に距離は近くなる。

「…カップルみたい」

「ねー…」

後ろからなんだか恨めしい視線を感じる。

「ふふふ／＼／＼」

梨子ちゃんはあまり気にしてないらしい。

なぜか嬉しそうにしているし。

それから数分歩いたくらいの時だ。

『ブオオオオン』

歩道のない細い道を歩いていた・時、後ろからトラックがやってきた。

「おっと」

「ひゃっ」

ほとんど減速もせずにやってきたもんだから、思わず大きく避けてしまった。

それがまずかった。

「今のトラック、危なかったねー…」

「そうだねー。ハルくんたち、大丈夫…」

後ろから声をかけてくれる二人の言葉が、途中で止まる。

おそらく、この光景を見たためだろう。

トラックを大きく回避した俺は、当然すぐ横にいた梨子ちゃんにぶつかつた。

そして、倒れそうになつた梨子ちゃんを思わず抱きとめてしまったのだ。

つまり。

千歌ちゃんと曜ちゃんから見たら、俺は今梨子ちゃんを抱いているように見えるわけだ。

「あー…えつと、その…これにはわけがあつてだね」

「~~~~つ／＼／」

梨子ちゃんは言葉を発しない。

というよりは、言葉が出ないといった感じである。

そして、これを見た千歌ちゃんと曜ちゃんは。

「…何、してるのハルくん」

「…これ、どういうこと？」

黒いオーラを身にまとい、明らかに怒りの色を見せている。

…まずい。

「…弁明の時間をくれると嬉しいんだけど」

「…5文字でどうぞ」

「…ごめんなさい」

その後。

千歌ちゃんの家で正座をさせられてお説教をされた。

「いくらトラックを避けるためだからって、急に抱きつくのはだめだよ！」

「抱きついたつもりはなかったんだけどね。反省してるよ」

「女の子にだって、心の準備が必要なんだから！」

「心の準備？」

「で、でも、私はその…ちよつと嬉しかったかな…って／＼／＼」

「ん？ 梨子ちゃん、もう一回頼むよ」

「な、なんでもないので／＼／＼」

「むー…梨子ちゃんだけずるい！」

「そうだそうだー！」

「…抱きつくのはダメって話だったよね？」

「急に抱きつくのがダメなの！」

「…どう違うのかがよく分からないんだけど」

「こ、心の準備があれば、その…わ、私は大丈夫だよ！」

「いや、大丈夫と言われてもね…」

それでどうしろと。

まさかと思うけど、ハグしろという訳ではあるまい。

「は、ハルくん」

「ん？」

気付いたら曜ちゃんが後ろにいた。

どうしたんだろうか。

振り返ろうと思ったけど足が痺れていてうまく動けなかった。

結構痺れてるな。

そんなことを思った瞬間。

「えい」

「おお？」

「なあ!？」

「曜ちゃん!？」

後ろに感じる体重。

曜ちゃんが…抱きついてきたのかな？

「えへへ…ど、どうかかな？／＼／＼」

「どうっていうと」

「か、感触…とか？」

「…それは、どう答えるのが正解なんだい」

「や、やっぱ忘れて！／＼／＼」

感触…

胸の感触があるような無いような…

いや、あまり深く考えるのはよそう。

「曜ちゃんずるい！わ、私だって！」

「ぐえ」

曜ちゃんを押し出すようにして千歌ちゃんが飛びついてきた。

背中にかかる体重が2倍になる。

「あ、千歌ちゃん！今は私の時間だよ！」

「曜ちゃんはまだ楽しんでしょ！次は私だよ！」

「むむむむ〜」

「あの…背中では争うのはやめてほしいんだけど」

重すぎる…というわけではない。

でも、長時間の正座のせいでもう足が痺れまくっているのだ。

ここに彼女達の体重がかかっているの、正直限界が近い。

これ以上重みが増えたら、痛みで悲鳴が出そうだ。

「足の痺れがすごいんだ。できればどいて欲しいんだけど…って、ん？」

目の前に落ちる影。

少し振り返ると、梨子ちゃんの姿がそこにあつた。

「ああ、梨子ちゃん、二人をどかすのを手伝ってくれるのかい？」

多分そうなんだろう。

そうであつてほしい。

ここにもう一人分の体重はまずいのだ。

「わ、私だつて…っ」

「え、ちよ、梨子ちゃん…？」

「え、えーい！」

「ちよ、ちよっと待っ—！」

悲鳴が、木霊した。

なんで彼女達は抱きついてきたのか。

そんな疑問がふと思い浮かんだが、この痛みで分かった。

女の子に気安く抱きついてしまった俺に罰を与えるために、こうして抱きつくことで痛みを与えようとしたのだろう。

そんなことを考えていたら。

「ハルくんの鈍感―」

その一言とともにさらに体重をかけられたのだった。

違うのか…。

じゃあ、なんで抱きついたりしたんだい…。

そんな疑問。

もちろん答えをくれる人はいなかった。

雨の日と布屋さん2

「またやってしまった…」

自分の浅はかな行動を嘆きつつ、これからどうするべきかを考える。

手に夕飯の食材が入ったビニール袋を持って、バス停から外を眺めている現状。眼前に広がる景色。

雨、雨、雨。

足元に存在する水たまりには絶え間なく水が供給され、波紋が休まることは無い。

そして俺は、そんな中で帰る術が無い。

はい、またやってしまいました。

傘を忘れました。

今日は普通に買い物に来ていた。

そして、朝は天気予報を確認していたし、出かける前は傘を持っていくつもりでいたのだ。

いたのだが…

「なーんで直前で忘れちゃうかなあ」

自分に向けてそんなことを呟く。

こういうことは、案外よくある……気がする。

できれば買ったものを濡らしたくはない。

だが、ここから店に戻って傘を買いに行つても、その過程で濡れることは避けられ無
いだろう。

であるならば、ここから家まで走つた方が良い。

そう考え、早速スタートの構えを取る。

その時だった。

「……あんた、何してんの」

不意にそんな声がかかる。

振り向くと、そこには墮天使ヨハネこと善子ちゃんがいた。

「もちろんクラウチングスタートだよ」

「ハルさん、ランニングでもするずら？」

「まあ走ろうとはしてたね」

「い、今、雨降ってますよ？」

「最近暑いからね。涼もうと思つたんだ」

「嘘つくならせめてビニール袋隠しなさいよ」

「ハルさん、傘忘れたずらね」

「あはは…」

善子ちゃんだけでなく、花丸ちゃんとルビイちゃんも一緒だったようだ。

善子ちゃんと花丸ちゃんは呆れ。

ルビイちゃんは苦笑いをしている。

そんな彼女達について、一つ気になることがある。

それは今の彼女達の格好についてだ。

「ん？どうかしたの？」

「ああ、その、変わった格好だな…と」

「格好？あ、この服ずら？」

「服…といえるのかい、それ」

「今日は雨だったんで、こういう格好なんですよ」

「俺の知ってる雨の日の格好とは少し違うね」

彼女達は今、傘をさしていない。

だからと言って、雨具を装備していないわけではない。

彼女達が身にまとっているのは、雨合羽…でもない。

確かこれは…

「ポンチヨ……つて言うんだったかな」

「その通り！」

ふんすと聞こえてきそうな表情を見せてくれる善子ちゃん。

「またなんでポンチヨ？傘はなかったのかい？」

「あつたんですけどね」

「ばあちゃんがポンチヨをくれて……」

「くくく……この墮天使には、傘よりポンチヨの方が似合うでしょ？」

「ああ……なるほど」

くれたそれを、善子ちゃんがノリノリで装備したと。

ポンチヨ。

傘や雨合羽とはまた異なる雨具である。

形式としてはマントに近いかな？

フードが付いているものもあれば、そうでないものもある。

着方によっては、確かに墮天使っぽく見えなくもない。

「しかし、よくポンチヨなんて持ってたね」

「花丸ちゃんのお家にあつたんです」

「昔はよく使ってたみたいすら」

「へー。そうなのかい」

「ふふふ。どう？かっこいいでしょ！」

そう言つて、バサアとポンチョを広げて見せてくれる善子ちゃん。

ああ、こらこら。

そんなに前を開けたら雨具としての役割を果たせないじゃないか。

そんなことを思いながら、花丸ちゃんとルビイちゃんを改めて眺める。

善子ちゃんとは違い、きつちり前を閉めてフードも被っている。

小さいカバンでも背負っているのだろう、背中のあたりに若干の丸みを感じられる。

小柄の二人がポンチョに身を包むその姿。

これは…

「丸い…」

ついそんな一言が口をついた。

「…もしかして、丸たちのことずら？」

「ふ、太って見えますか!？」

「ああいや、そういうわけではなくてね」

二人してシヨックを受けているように見える。

違う違う。

「てるてる坊主みたいで可愛らしいなって思ったんだよ」

「そ、そうずら……？」

「そ、そうですか……えへへ」

「……いやそれ、褒められてるの？」

「善子ちゃんは墮天使っぽくて素敵だよ」

「そ、そう。……うへへ」

うへへへ。

まあなんにせよ三人ともよく似合っているなあとは思ふ。

それが褒め言葉なのかはなんとも言えないが。

「そういえばハル、傘ないのよね？」

「そうなんだよね」

「それで雨宿りしてたずらね」

「さつきまでね」

「走り出そうとしてたのはどうしてなんですか？」

「もちろん、雨宿りを諦めて走って帰ろうとしてたんだよ」

「……結構雨降ってるわよ」

「見ればわかるよ。でもどうしようもなくてね」

「止む気配もないですもんね」

「そういうことさ」

そんな会話をしているこの時間も、雨はその強さを弱めることはない。

夕飯の準備もしたいし、そろそろ帰らないと時間がもつたいな。

「まあそういうわけだから、俺は行くよ」

「いやいや、ちよつと待ちなさいよ」

「どうしたんだい？あんまり時間に余裕はないんだが」

「とりあえずそのクラウチングスタートをやめてくれる？」

「ハルさん、その構えしないと走れないすら？」

「その通りだよ」

「適当言うんじゃない！」

「あ、あはは…」

そんなやり取りの後。

「雨具、ないんですよ？ほら、これ貸してあげるわよ」

善子ちゃんがそう言いながら何かを差し出してくる。

「これは…」

「折りたたみ傘？」

「そ、そうよ。私はその…使わないから」

黒を基調とした折り畳み傘。

サイズは大きくないだろうが、荷物を濡らさないようにするには十分だろう。

これはありがたい。

「えつと…いいのかい？」

「いいから！ほら、早く受け取ってよ」

「ありがとう。助かるよ」

「う、うん…」

お礼を言つて傘を受け取る。

なんでか善子ちゃんが少し照れているように見える。

「…善子ちゃん、ハルさんの笑顔で照れてるすら」

「そうだね。私も折りたたみ傘持つておくべきだったなあ…」

花丸ちゃんとルビイちゃんが横でコソコソ何かを話しているが、あまりはつきりは聞こえない。

気にしないでおこう。

刺してみると、傘のデザインはいかにもな中ニスタイルだった。

…周りに人はいないし、たまにはこういう傘もいいだろう。

ということにしておく。

雨が降る中を四人で歩く。

「そういえば、みんなは何してたんだい？」

横を歩く善子ちゃんにそんな質問をする。

そんな質問に返事をしてくれたのは、後ろの花丸ちゃんとルビイちゃんだった。

「もともと、今日はみんなでうちに来てたずら」

「花丸ちゃんの家にかい」

「そうなんです。だから来た時は私も善子ちゃんも傘持ってたんですよ。天気予報では降水確率100%でしたし、当然だとは思うんですけどね」

「…当然…うん、そうだね」

「…ルビイ、傘持ってないハルにそれはきつい一言ね」

「え？あ、ち、違うんです！こ、これはその…」

「うん、まあ、言ってることは間違ってるからね。気にしないでいいよ」

「あはは…」

聞いた話によると、この子達は買い物物帰りの帰りだったそう。

買い物に行く際、花丸ちゃんのおばあちゃんがポンチョをくれたらしく、カッコイイという理由でそれを着て来たんだそう。

おばあちゃんの考えたこととして予想できるのは……
買い物のために両手を空けさせるため。

風が少し吹いているので、傘が飛ぶ可能性を考えた。
といったところかな。

ちなみに彼女達の買ったものについては、傘を貸してくれたお礼として俺が今持っている。

片手で傘を持っているので、もう片方の手に荷物が集中して若干歩きにくいですが、これは仕方ない事とする。

「……あれ？じゃあなんで傘を持ってきたのさ。花丸ちゃんの家置いてきてもよかったと思うんだけど」

「うう…っ…そ、それは……」

「善子ちゃん、もしかしたらハルさんが雨宿りしてるかもしれないからって、わざわざ持ってきたはずだよ」

「ほう」

「ず、ずら丸！」

俺が傘を忘れて出かけることを予測されていたのか。

びつくりである。

「善子ちゃん、前2年生の人たちがハルさんと相合傘したって聞いて、羨ましそうだったもんね」

「なあっ！る、ルビイまで！ち、違うのよ！べ、別にハルがいたら真っ先に傘を貸してあげようとか、あわよくば私も相合傘をなんて考えてないんだから！」

「そ、そうかい」

すごい剣幕で迫られながらそう言われる。

いまいち内容が掴めない。

が、まあ一応心配してくれて傘を持ち歩いていてくれたようだ。

感謝である。

「…ハルさん、言葉のまま受け取っちゃったずら」

「あはは…さすがだね」

「にしても、よくここにいる事まで読めたね。傘忘れの件といい完璧な予想だよ」

「そ、そう？ま、まあ、これでも墮天使だしね」

「善子ちゃん、今日以外も毎日傘持つて歩いてたずら。道もハルさんがいそうな道を歩こうとしてたし、そんなに偶然でもない…」

「ぎゃあああああああああ！」

慌てたように花丸ちゃんの口を塞ぐ善子ちゃん。

「ち、違うから！ふ、普段持ってた傘は日傘だから！あ、歩いてたのはその…たまには別の道を歩こうと思っただけだから！」

「わ、わかったから、花丸ちゃんを解放してあげてくれ」

そんな会話をしながらさらに歩く事数分。

もう間も無く花丸ちゃんのおうちに着こうかというくらいするとき。

それは起きた。

歩道の隅にとある花を見つけた。

「これ、アジサイだね」

「わー本当ですね。綺麗です」

「ずら〜」

「ふふ。そうね」

雨の日の定番といえやはりこの花だろう。

もともと5月から7月にかけて花を咲かせるらしいが、どうにも雨の日の花というイメージがある。

そんなアジサイが薄暗い道端でその存在をアピールしている。

思わず足を止めていたら、花丸ちゃんとルビイちゃんがそこにしゃがみこんでアジサイを眺め始めた。

「二人とも、裾を地面につけないように気をつけてね」

「はーい」

仲良く返事をする二人。

「ハルも、そこ大きい水たまりあるから気をつけなさいよ」

「おっと。ご忠告ありがとう。でもまあ大丈夫だよ。誰かに押されたりもしない限り、落ちたりしないさ」

「…なんか、フラグにしか聞こえないわね」

「フラグ？」

「あんたがA q o u r s に立てまくってるものよ」

「おお？」

なんのことはよく分からなかった。

アジサイを見て喜ぶ二人と、それを外から眺める俺と善子ちゃん。

実に平和な絵面である。

そこまではよかった。

「ん？あれ、カエルかしら」

「そうだね。これも雨の日の定番だね」

「…結構大きいわね」

「んー…そうだね。つて、顔が少し引きつってるよ。カエルは苦手なのかい？」

「女子でカエルが好きなのってあんまりないわよ」

「へえー」

花丸ちゃんとルビィちゃんの視界には入っていないらしい。

二人はカエルの方を見ていない。

それを知ってか知らずか、カエルは徐々に二人に近づいていく。

「…これ、まじいんじゃない？」

「そうなの？」

「いや、だつて…」

善子ちゃんがそこまで言った時だ。

「あ、カエルずらー」

「え？」

花丸ちゃんが、その存在に気がついた。

そして、それにつられてルビィちゃんもそちらを向く。

直後。

それまでゆっくり進んでいたはずのカエルが突如猛ダツシユ。
振り向いたルビイちゃんの顔に張り付いた。

「あ」

「え？」

「うわ」

「……………」

思わず声が漏れる俺、花丸ちゃん、善子ちゃん。

ルビイちゃんは、数秒無言になった。

そして。

「ぴ……ぴぎやあああああああああああああああ」

とてつもなく大きい悲鳴をあげて体を大きくのけぞらせた。

「びいぶうっ」

そのままルビイちゃんの頭部が後ろにいた俺の腹部を直撃。

不意をつくその一撃に、俺は大きくバランスを崩す。

「つて、ちよっ」

ただでさえ荷物の持ち方のせいで不安定だった俺に、これはクリティカル。

当然、バランスを保つ事はできず転倒する。

その転倒先は…

さつき善子ちゃんと話していた水たまり。

まじか…

姿勢を保つ事を諦めて、ゆっくり倒れていく俺はそんな事を考えながら倒れるのであった。

『バシャーン』

「ハルさん大丈夫ずら!？」

「わ、わわわ、ごめんなさいハルさん!」

水たまりに倒れている俺にそんな声をかけてくれる花丸ちゃんとルビィちゃん。

「ああ、大丈夫だよ。心配しなくても、荷物は濡らしてないからね」

倒れる際、傘と荷物だけは濡らさないように位置をキープし続けた。

うん、ここから見ても荷物は大丈夫そうだ。

まあそのせいで受身は取れなかったの、体はまるまる水たまりに浸かっているが。

そんな俺を見て、善子ちゃんはなんだか呆れ気味である。

「恋愛フラグは回収できなくても、こういうフラグはきっちり回収するのね」

「…なにを言ってるかはわからないけど、とりあえず荷物だけ受け取ってくれ」
その後。

花丸ちゃんの家でシャワーを貸してもらった上に、ご飯までご馳走になってしまった。

こういうのも、怪我の功名…と言うことになるのだろうか。
帰り道、そんなことを考えるのだった。

雨の日と布屋さん3

「…今日は降らないんじゃないのか…」

公園の木陰に隠れながら、そんな一言を呟く。

木陰に隠れている理由は、雨を避けるため。

そう。

またしても雨宿り中なのである。

しかし今回はこれまでと違い、ちゃんと天気も持ち物も確認してから家を出た。

天気予報では降水確率は10%となっていたし、それを確認した上で傘は持つてこなかったのだ。

そのはずなのに…

「なーんで雨降ってるんですか…」

今日は仕事でも買い物でもない。

ただの散歩で外に出ていた。

出た時はいい天気だったし、外出の際は

『うん、今日はいい天気だ』

とか言っていたのだ。

「はあ……」

家を出る時のことを思い出しつつ、ため息をはく。

今日は幸いにも荷物はないし、このまま走って帰るとしよう。

そう思い、いつものようにスタートの構えをとったときだった。

「…雨の日にクラウチングスタートを切るというのは本当だったのですね」

聞き覚えのある声が入ってきた。

姿勢を変えずにそちらを向くと、そこにいたのはダイヤちゃんだった。

「やあこんにちは、ダイヤちゃん」

「こんにちは、ハルさん」

「こんな天気の日には、公園までくるなんてどうしたんだい？」

「どうしたというセリフは、その姿勢の方が言う言葉ではありませんわ」

「返す言葉もないね」

「いいからその姿勢はやめていただけますか？」

言われて姿勢を直す。

そんなとき、向こうからさらに二人の女の子が近づいてくるのがわかった。

「あれは……マリーちゃんと果南ちゃん？」

「ええ」

「三人で公園まで来ていたのかい？」

「そうですわ。理由とかそういうお話は、揃ってからいたしましょう」

傘を閉じてダイヤちゃんが木陰に入ってきた。

すぐにマリーちゃんと果南ちゃんがこちらにやってきたかと思えば、彼女たちも傘を閉じて木陰にやってきたのだった。

「ハルー、ちやおく」

「やつほー、ハル」

「二人ともこんにちは。今日はどうしたんだい？」

「どうって？」

「雨の日の公園に、君たちが用があるとは思えないんだけど」

「ああ、ここきた理由？ハルを探しに来たんだよ」

「俺を？」

「イエース！」

「……話が見えてこないよ」

「まあ要するにね」

今日特に用事もなくうちにやってきた三人。

来たはいいけど、店には俺がいなかった。

しかし車は置いてあり、店と家のどちらにも鍵がかかっていたことから、外出していることを察したらしい。

普段だったらそこで帰るところだったのだが…

「一年生も二年生も最近ハルと相合傘をしたって聞いてたんだよね」

「一年生とはしてないけどね」

「私たちもハルとレイニーをエンジンジョイしたのよー」

「雨を楽しむって訳せばいいのかな？」

「一応、傘を忘れている心配もあったので、こうして軽く探しに歩いていたのですわ」

「探しについて…よくここが分かったね」

「すぐに分かったわけじゃないよ。一時間くらい探したしね」

「一時間!?!」

思わず大きな声を出してしまった。

「傘を貸すために一時間歩いてたのかい？」

「私は歩くの好きだし、そんなに嫌でもなかったよ。ハルの心配もあったしね」

「わたりしもノープロブレム！たまにはレイニーも悪くないです」

「わ、私はお二人に付き合っただけです。別にハルさんの心配はしてませんわ」

「そんなこと言っつてー。バカでも風邪をひく時はひいてしまうのですわ…とか言っつたのに」

「ネー」

「ふ、二人とも！」

わざわざ心配して探し回ってくれたらしい。

バカとか言われてる気がするけど、まあうん、照れ隠しつてことにしよう。

※

「ハル、もう少しこつち寄らないと濡れちゃうよ」

「ああ、そうだね」

「あ、果南ずるいよー。こつちも空いてるよー」

「マリーちゃんもありがとね」

「お二人とも、ハルさんがそこにはなおさら濡れてしまいますわ。ほら、こちらへ」

「ちやつかりハルを持ってかないでよ！」

三人に引つ張られながら傘の中へ入れてもらう。
美少女三人に引つ張りだこ。

これ自体は至福の時間と言っていていいだろう。

状況が状況でなければ。

「…あの」

「ん? どうしたのハル」

「…いや、傘に入れてほしいんだけど」

「何を言ってるの? こうしてちゃんと入れてあげてるじゃん」

「…入れてもらってるって言えるのかい、これ」

さて、現在の状況についてだが。

まず俺は彼女たち三人に囲まれた状態となっている。

ダイヤちゃんが俺の前。

右後ろをマリーちゃん。

左後ろに果南ちゃんが配置されている状態だ。

歩き出す時にこの配置にしようという提案をしたのがマリーちゃん。

『三人で話し合った結果です』

そんなことを言っていた。

『それで歩くのはいいけど、傘はどうするんだい。俺一人で三本も持てないよ』
『傘をハルが持つのは前提なんだね』

『借りる身なんだ。それくらいは当たり前だろう』

『そういう考えも嫌いではないですけど、今回はハルさんは傘を持たなくていいですわ』
『え、そうなの？』

『ええ、傘は私たち三人で持ちますので』

『…どういう状態になるのか分からないんだけど』

そんな会話の・末、木陰から出る俺たちだったが…
どうなるかはすぐ分かった。

俺を取り囲む三人とも傘を差したのである。

つまり。

前方に傘を差すダイヤちゃん。

右後ろに傘を差すマリーちゃん。

左後ろに傘を差す果南ちゃん。

という布陣。

そして俺はその中央。

そう。

ほとんど傘の恩恵を受けていないのである。

「あの、気を使ってくれるのは嬉しいんだけど、できれば普通に入れてほしいんだ」

「ノー。それをやるとハルと相合傘をやる時間が三分の一になっちゃうでしょ！」

「言いたいことと聞きたいことがあるけど、とりあえずこれは相合傘ではないと思うんだよ」

「一緒に傘に入ってたなら相合傘でしょ？」

「入ってたらね。俺の体は見ての通りもうベッタベタなんだよ」

「あら、なんでそんなに濡れてますの？」

「状況をもう一度よく見直してくれ」

三人がそれぞれの傘を差している状態。

そして、そのど真ん中に位置する俺。

俺の頭上には、ちょうど三つの傘の端が存在しており、定期的に頭部に水を流し込んでいるのだ。

人によつてはいじめに見えると思う。

というか最早傘ないほうがマシな気がするんだけど。

そんなことを思っていたら、どうやら顔に出てしまっていたらしい。

「もー、ハル、そんなに不満？」

果南ちゃんからそんなことを言われた。

「不満がないといえば嘘になるね。…何度も言うけど、気を使ってくれるのはありがたいんだ。できれば普通に入れてほしいんだよ」

「ハル、そもそも何で私たちが相合傘をしたいか分かってる？」

「急にどうしたんだい。…相合傘をしたい理由…？」

「そうだな…」

今回は彼女たちが傘を持っているから、傘持ちがほしいということではないだろう。だとすれば…

「高校時代、女の子とそういう経験がない俺に、同情してくれている…とか」

「…二つの意味で悲しくなりますわ」

「うわあ…」

「ハル…」

三人に同情と呆れが混ざったような表情をされる。

間違っていたらしい。

「はあ…まあ理由はいいや。なんにしても、私たちはハルと相合傘をしたいんだよ」

「まあそれはもちろん良いんだけどね。できればもう少しくらい誰かの傘に入れてくれると嬉しいんだ」

「そうだねえ…じゃあ、はい」

そんな言葉とともに、果南ちゃんに腕を引つ張られた。

そのまま、ほぼくつつきそうなくらいの距離で果南ちゃんの傘に収まる。

「こ、これで、濡れないね」

「そうだね。とはいえ、あんまり近いと果南ちゃんの服を濡らしちゃうから。もう少し

離れて良いよ」

「あ、だ、大丈夫だから」

なぜかうつつむく果南ちゃん。

嫌がつてはいなさそうだが…。

「あー！果南が抜け駆けしてる！」

「果南さん！それは契約違反ですわ！」

俺と果南ちゃんを見てそんな声をあげる二人。

なんの契約なんだろう。

「いやー、ハルが傘に入りたいて言うから、つい」

「うん。やつば傘に入るならこういう形だね。ありがと…」

お礼を言おうとした直後。

今度はマリーちゃんから腕を引つ張られた。

「おおっと」

「ほらハル！こっちの傘のほうがビッグだよー」

そしてマリーちゃんの傘に収まる俺。

「あ、鞠莉、ハル取らないでよ」

「今度は私の番だよー！」

「ふ、二人とも！ハルさんも何か言ってください」

「何かって言われてもね。とりあえずこうして傘に入れてくれるのはありがたいよ」

「そうではなくて！」

何でかダイヤちゃんが怒っている。

やっぱりダイヤちゃんから見たら、親友二人がこんな男の至近距離にいることに我慢ならないんだろうか。

それについてはちゃんと彼女の心配を消しておくとしよう。

「ダイヤちゃん」

「な、なんですか？」

「心配しなくても、俺は彼女たちに手を出したりしないよ」

「急になんの話ですか？」

「あれ？」

怒っていた理由は間違っていたらしい。

「…ハル、何を考えたらそんなセリフが出てくるのさ」

「手を出さないってどういうことデスカー!」

呆れる果南ちゃんとまた声をあげるマリーちゃん。

そんなとき。

今度はダイヤちゃんに腕を引つ張られた。

「おお?」

「か、傘の大きさなら私のが一番大きいですわ。だから、傘のサイズで判断するなら私に入るのが一番かと」

そういうダイヤちゃんの頬には、少し赤みがかかっているように見える。

こういうことに慣れていないだろうに、優しいものである。

そんなことを思いつつ、これでひと段落するかなと思っていた矢先。

「ちよつとハル!最初は私の傘に入るって話だったでしょ!」

「ぐええ」

首元を掴まれて果南ちゃんの傘に入れられる。

苦しい。

「ちよつと果南!それを言うなら始めは三人で分割って約束だったじゃん!」

「ぐええ」

そう言いつつ果南ちゃんから解放された俺の首元を掴むマリーちゃん。

今度はマリーちゃんの傘に入れられた。

「鞠莉さんだつて、傘のサイズでつて言いましたわよ！傘のサイズなら私の傘に入るのが妥当ですわ！」

「ぐおお」

ダイヤちゃんの傘に入れられた。

もちろん首元を掴んで。

「「ぐぬぬぬぬぬ〜」」

そもそも何でこんなことを争っているのかが分からない。

しかし、酸欠になりかけている俺の頭は、その疑問に答を出すほど活動ができない状態である。

ひとまず休息がほしい。

そんなことを思っていたのだが。

運命というやつは、なんとも残酷なもので。

「ハルはこつちー！」

「ノー！こつちだよー！」

「こちらにいただきますわー！」

「三人とも、あんまり揺さぶられると…！」

三人にたらい回しにされた俺。

いや、これはたらい回しと言えるのか？

まあそれはともかく、あちこちに細かく移動をさせられた俺はやがて平衡感覚を失っていた。

つまり。

立つてられなくなって足がもつれたのである。

それだけなら良かった。

でも、そうは問屋が降ろさなかった。

「あ」

思わず漏れる、そんな一言。

足がもつれ、転倒しそうになっている俺の眼前には、田んぼが広がっていた。

こんな雨の日だ。

そこに存在する土は、それはさぞ良い感じに服を土色に染め上げてくれるだろう。

姿勢の立て直しを諦めた俺は、せめて顔くらいは汚れないよう頭の位置だけ考えて。そのまま田んぼにダイビングしたのであった。

「わー！ハルー！」

「ハルが田んぼにフオールインしたよ！」

「そんなこと言ってる場合じゃありませんわ！とりあえず今助けますわ！」

三人がそんなことを言っている中で。

「そういえば、一年生といた時は水たまりに倒れただけで済んだんだったなあ……」
つぶやいたのは、そんなしょうもない一言だった。

※

「…あれ、ハルくん？」

「美渡さんじゃないですか。どうしたんですか。バスならもう終わってますよ」

「それくらい分かっているって。雨宿りだよ、雨宿り」

「傘忘れたんですか？」

「そうなんだよねー。スマホも忘れちゃって助けも呼べなくてさー」

「なるほど。じゃあ…はい、これどうぞ」

「…折りたたみ傘？」

「そうです。使ってください」

「…ありがたいけどさ。…ハルくん、傘差してるのになんでもう一本持つてるの？」

「一本じゃないです。あと八本持ち歩いてます」

「多すぎでしょ！何考えてるのさ？」

「ちよつと色々あります」

「ハルくん、雨の日に対してトラウマとかあったっけ？」

「最近少しかったです」

「最近？何で？」

「いや、理由を一言で説明するのは難しいんですけどね」

「うん」

「…人の傘を借りたり、相合傘をすると、確なことがないなあ…って」

「…何かあったの？お姉さんが聞いてあげるよ」

俺がいかにかに相合傘というものに幻想を抱き。

俺がいかにかに女の子と傘を共にするということを舐めていたのか。

そしてその結果どうなったのか。

人の雨具を借りるといふことがどれだけ重大なことか。

美渡さんにそんな話をしつつ、帰り道を歩いたのだった。

話していくにつれて、美渡さんが少し頭を抱えていき。

「鈍感と不運が合わさるとこういうことになるのね…千歌、御愁傷様」
そんなことを言った気がするが、何でかは俺には分からなかった。

キャンプと布屋さん1

以前3年生のみんなから聞いていたキャンプの話。

それが明日に迫っていた。

予定では1泊2日。

屋外活動を楽しみつつ、バンガローに泊まるらしい。

キャンプ場までは片道1時間程度。

沼津にもキャンプ場はあるのだが、少しくらい外に出たいという意向でその場所になつたらしい。

まあたまにはそういうのもいいだろう。

夏休みは練習をよく頑張っていたわけだしね。

明日のための荷物が一通り揃っている事を改めて確認する。
そんな時だった。

『ブルルルルルルル』

携帯のバイブが鳴った。

電話のようだ。

画面に表示されている名前は…

『高海 美渡』

千歌ちゃんのお姉さんだ。

電話が来るのは少し珍しい。

「はい、もしもし」

『あ、ハルくん？今いい？』

「こんにちは、美渡さん。どうしました？」

『明日の事でちよつとねー』

「ああ、そういえば美渡さんも一緒に来るんですよ？」

『そうそう。さすがに大人がハルくん一人だと厳しいでしょ』

「そうですね。助かりますよ。ただ、仕事とか大丈夫だったんですか？」

『大丈夫大丈夫。あ、それでね』

「はい」

『ハルくん、お酒飲めたつけ？』

「酒？まあ一応飲めますけど」

『オツケー。じゃあ持つてくねー』

「え、それだけですか？」

『そうだよ?』

「別にメールとかでもよかったんじゃ…」

『私、そういうのめんどくさくて嫌なのよねー』

相変わらずである。

そんなどうでもいい電話をして、準備を再開する。

準備がきっちり整ったとき、時刻は夜の12時を回ろうかというタイミングであった。

思いの外、時間がかかっていた。

「準備にこれだけかかるとは…」

案外、俺も気合が入っているようだ。

※

「では! 思いつきり楽しめますわよー!」

「「「「おおー!!」」」」

「お、おー!」

「無理に合わせなくていいのよ」

「みんな気合入ってるずらく」

「君たち1年生が1番落ち着いてるね」

翌朝。

浦の星女学院前に揃う11名。

Aqoursの9人と、俺、美渡さんの大人2名である。

ここからマイクロバスで移動するらしい。

手配したのは小原家だ。

最初はヘリコプターでも出そうかと言っていた。

俺が酔うので断ったが。

運転も小原家の用意した運転手さんがいるらしい。

その人に軽く会釈をしてバスに乗る。

間も無くして動き出すバス。

「今日行くのはどういうキャンプ場なんだい？」

横に座る千歌ちゃんに聞く。

「なんかね、いろいろ遊べるんだって！」

「ほうほう。例えば？」

「んー…釣りとか、バーベキューとか、あと、アスレチックとか！」

「アスレチック?」

「そう! んー…なんていうんだろ…: ロープとかの遊具とかそういうの!」

「ああ、多分フィールドアスレチックかな」

アスレチックという単語だと、本来の意味は運動である。

しかし、キャンプ場にあるような遊具もアスレチックと呼ばれる事は多い。

これは本来フィールドアスレチックというのである。

自然の中で、一定のコースを目安に作られた遊具群とでも表現するべきだろうか。

「ちなみに、予定とかは決まっているのかい?」

「予定?」

「スケジュールみたいなの」

「んー…: テキトー?」

「まあそうだろうね」

キャンプでそんなに細かい日程は決めていないか。

「あ、でもね、いくつかがやりたい事はみんな決めてるんだよ!」

「ほう」

「えーとね…」

そこまで千歌ちゃんが言ったところで、後ろの席から曜ちゃんと梨子ちゃんが会話に

入ってきた。

「まずはバーベキューだよ！キャンプの定番！」

「やるのは明日の昼だけだね」

「帰る前にやるんだね」

「バーベキューの前にフィッシングよ！」

「釣った魚も焼くのかい？」

「当然ですわ！」

「掴み取りでもいいよね？」

3年生も入ってきた。

…果南ちゃんは掴み取りにするらしい。

「夜に肝試しもするぞら！」

「うゆ…こ、怖いです…」

「ふふふ…堕天使にかかれば幽霊などたわいもない」

「ああ、確かにそれも定番だね」

最後は1年生である。

みんなは怖いものは平気なんだろうか。

さっきの感じだと、アスレチックにも行くみたいだ。

体力配分をしつかりしとかないな。
ちなみにこの間、美渡さんは寝ていた。

「とうちやくーく！」

「いえーい！だいしぜーん！」

「シャイニー！」

「緑生える山！」

「綺麗な川！」

「広大な自然！」

「「「「これぞキャンプ!!」」」」

順に、千歌ちゃん、曜ちゃん、マリーちゃん、果南ちゃん、ダイヤちゃん、花丸ちゃんである。

Aqoursのテンション高い組だ。

「みんなー、荷物下ろすの手伝ってー」

「うゆ…お、重いっ…ピギイ！」

「ルビィ、大丈夫？ほら、こっちは私が持つから」

「俺も持つから、君らは軽いものを持ってきてくれ」

「あ、じゃあこれも頼むわね」

「20歳以上の方は自分で持つてください」

「えー、私も女の子なだけどー」

「あなたは女性です。女の子じゃないです。そもそも、俺より美渡さんの方が力あるじゃないですか」

「もー。あ、じゃあみんなの分くらいは持つてね。はい」

結構重たいダンボールを美渡さんから受け取る。

「なんですか、これ」

「ジューズだよ」

「ああ、なるほど。だったら持たないといけないですね…ってこれ酒じゃねーか」

「ジューズでしょ」

「どこがみんなの分なんですか」

とはいえ返すわけにもいかないので、そのままバンガローまで持つていく。

重いんだけど、どんだけ持つてきたんだ。

他の荷物を持つてくれている善子ちゃんと一緒に歩く。

と言つても、すぐ側だが。

バンガローは1つに5人は寝れそうなサイズだ。それを4つ使う予定らしい。

3部屋が寝泊まりで、1つは荷物用とのこと。

1泊ごときのためにやる配分ではない。

ちなみに、借りたバンガローの数は、キャンプ場のもの全てである。

というか、このキャンプ場は貸切なんだそう。

小原家と黒澤家で手配したらしい。

聞いた時、驚きすぎて言葉を失った。

「案の定、荷物置きバンガローはスツカスカだね」

「そうね」

ジューズを置く。

部屋の中は明らかに空きがある。

「ハル、この部屋で寝るんだっけ？」

「そのつもりだよ」

寝るスペースがあるか心配だったが、こうしてみるとその必要な無用だったみたい

だ。

どう考えても、この荷物室で寝れる。

そもそも、個人の荷物は自分たちの場所に持ち込んでいるし、ここにあるのは共用の備品。

バーベキュー用品だったり、食料だったりだ。

11人分は確かに多いが、バンガロー1個まるまる使うほどではないのだ。

そんな時、ふと思った。

「個人備品以外で何を持ってきてるんだらうか」

「何って…普通にキャンプ用品じゃないの？」

「用意したのは誰なんだい？」

「全員ね。必要と思うものを体育倉庫に置いとけて言われてたの」

「なるほど。てことは、互いが持ってきた荷物は把握できていないものもあるわけだ」

「そうね」

興味本意で覗いてみることにした。

「まあ共用のどこにあるんだし、見ても問題はないわよね」

「見ちゃいけないものなら、個人で持って来るだろう」

とりあえずは近くにあった段ボール。

蓋をあけると…

「…これ、何？」

「μ、sの応援グッズだね」

「…なんで？」

「ファンだからだろうね」

「…あの姉妹よね、持ってきたの」

「まあ、μ、sの大ファンといえはあの2人だね」

「…何考えてんのかしら」

善子ちゃんが頭を抱えている。

段ボールの中にあつたのは、うちわやペンライトだった。
μ、sの応援グッズであることはすぐわかる。

「…次、いきましょ」

「そうだね」

横の段ボールを開ける。

中にあつたのは、スポーツグッズだ。

「物自体は普通ね」

「そうだね」

「…でも…何、この量」

「…そうだね」

野球ボール、グローブ、バスケットボール、サッカーボール、バドミントンラケット、シャトル…

「いや、このくらいはまだ分かるけど」

スケボー、折りたたみ自転車、トレッキングシューズ、ロープ…

「どこに行く気なのよ」

「ある意味、キャンプ用だね。というよりは登山か」

そして加えて。

テント。

「バンガローだって連絡あったじゃないのお！」

「か、彼女も楽しみにしてたのさ。張り切りすぎたんだろう」

さらにあたりを見渡す。

またしても段ボール。

「これは…」

「…パンね」

「…パンだね」

それなりに大きな段ボールいっぱい詰められるパン。
色んな種類が入っている。

「持ってきたのは、多分あの子だろうね」

「…そんなにいらないうつて言っておいたのに…っ」

その後、幾つか見てみたが個人の趣味全開な物が多かった。

別に何か言うつもりもないが。

ちなみに善子ちゃんは儀式用の道具を持ってきていた。

ロウソクとかそういうの。

「し、仕方ないじゃない！個人の荷物に入らなかったんだし！」

そう言っていた。

キャンプ1日目、午前。

荷物を降ろして昼ご飯を食べただけだが。

先が思いやられた。

「…大丈夫か、これ」

キャンプと布屋さん2

キャンプ1日目午後。

お昼のおにぎりを食べて30分ほどした頃。

「午後は、話していたアスレチックかな？」

「うん！」

「そうかい。楽しんできてくれ」

「あれ？ハルくんは行かないの？」

「生憎、そこまで体が動かないんだ。夕飯の準備でもしておくよ」

「ハルくん、ちよつといいかな？」

美渡さんから声をかけられた。

少し離れた位置に移動する。

「どうしたんですか、美渡さん」

「夕飯の準備は私がやっておくから、ハルくんは行つて来なよ」

「美渡さんに悪いですよ」

「こんだけ時間あつて2人もいらないうて。ほら、みんなのお守り、よろしくね」

「でもですね…」

「よろしくね」

「…はい」

なんか分からないが、すごい圧力を受けたのでみんなに付いて行く事になった。

※

アスレチックコースはキャンプ場によって難易度も規模もかなり異なる。

子供を対象としているところは、大人には小さいくらいの遊具が並ぶし、逆に大人向けともなるとそれ相応の難易度で作られているものもある。

ここのフィールドアスレチックは比較的大人向けの物のようだ。

落下すると水に落ちるようなものである。

「当然、勝負形式で行きますわよ!」

「いえーい!」

「そこなくちや!」

「まあ、そうなるだろうとは思っていたよ」

「勝負方法はどうするの?」

「やっぱりタイムアタックじゃない？」

「そうですわね」

タイムアタック。

つまりは、アスレチック走破にかかった時間で勝負するということだ。貸切だからこそでできる勝負方法ではある。

他に人がいたら危なすぎるからね。

もちろん、今日は他に人がいないので勝負そのものに異論はないが…

「ま、丸には難しそうすら…」

「うゆ…る、ルビィも…」

「私も、そもそも走破できる自信がないわ」

花丸ちゃん、ルビィちゃん、梨子ちゃんが言う。

そうなのだ。

そもそも、走破できることが前提となる以上、ギブアップしてしまうとこの勝負は成り立たなくなってしまう。

「うーん…確かにそうだね」

「あ、じゃあこうしよう！」

曜ちゃんが何か思いついたようだ。

「チーム戦にしよう！」

「チーム？」

「そう！リレー形式でタイムアタックするの！それなら、難易度の低いところを、苦手な人が担当できるでしょ？」

「オー！グッドアイデア！」

確かに、このアスレチックは比較的簡単なエリアとそうでないエリアではつきりと分けられている。

分業制なら、花丸ちゃんたちでもなんとかなりそうだ。

「じゃあチーム分けだね。どうやって分ける？」

「ユニットごとで良いんじゃないかい？」

「そうですね」

偶然にも、ユニットごとに分ければ花丸ちゃん、ルビィちゃん、梨子ちゃんがきつちり別れるのだ。

能力も、まあそれなりに均等だろう。

「決まりだね！じゃあ10分後にスタートで、それまではチームごとに作戦会議だよ！」

「オーケー！」

「じゃあ俺は審判の準備を…」

「あ、ハルくんも参加だからね？」

「…え？」

あれ？

「タイムアタックの勝負だし、1つのチームがやってる間はどうせ他のチームは休みなんだし」

「審判はあまったチームがやれば良いわね」

「…え？」

ちよ。

「当然、負けたチームは罰ゲームですわ！」

「おー！望むところだよ！」

いやいや。

「ちよつと待つてくれ。その勝負、俺も参加なのかい？」

「当然！」

「間違いなく勝てないんだけど」

そもそも、俺が1人で踏破できるかも怪しいのに。

「まあまあ、罰ゲームは軽いものにしとくから」

「…負けるのはほぼ前提なんだね」

否定はできないが。

とはいえ、ここでグダグダ言っても仕方ない。

俺も大人で男なのだ。

逃げずに勝負といこうじゃないか。

「よーし！じゃあ10分後に集合ね！」

くAZALEAく

くじの結果、最初はAZALEAになった。

運動神経の良い3年が2人のチームだ。

「あ、足を引つ張りそうで申し訳ないすら」

「そんなの気にしなくて良いよ」

「そうですね。どれだけ遅れようと、私たちが取り返してみせますから」

「それより怪我だけは気をつけてね」

「あ、ありがとうすらー」

チームワークは心配なさそうだ。

果南ちゃんもダイヤちゃんも、こういった勝負事ではかなりの負けず嫌いだ、それ

と同じくらい後輩を思いやる気持ちを持っている。

いい先輩をやっているようで安心したよ。

「よーし、じゃあそろそろスタートだよ！3年生の2人も、交代場所に向かってね」

「はーい」

「わかりましたわ」

3人が位置につく。

「よーい…スタート！」

マリーちゃんの合図で、花丸ちゃんがスタートする。

「は、花丸ちゃんががんばってー」

「いい調子だよー！」

「あ、そこ、気をつけてー！」

「ずら丸！ほら、足元ちゃんと見てー！」

「が、がんばるずらー！」

花丸ちゃんに、たくさんの応援が飛ぶ。

最初の人が担当するのは、難易度的には最も低いエリア。

下に水が張られているわけでもなく、落ちてもすぐ戻ってこれるようなもの。

ちなみにこの勝負、落下してもやり直して良いというルールである。

ただし、その場合はそのポイントの最初からとなるので、タイムロスにはなるのだが。苦戦はしていたようだが、なんとか花丸ちゃん担当場所は制覇できた。

「だ、ダイヤさん、あとは任せるすら！」

「ええ！よく頑張りましたわ！」

AZALEA 2 人目はダイヤちゃん。

バトン代わりのリストバンドを花丸ちゃんから受け取り、勢いよくスタートする。

難易度的には中。

ポイントの幾つかは地面に水が張られており、やり直せると言っても落ちたくはないエリアだ。

「おねえちゃん！がんばって！」

「ダイヤー！いいところみせてー！」

「がんばれー！」

相変わらずの応援。

ダイヤちゃんの動きはかなりダイナミックだ。

障害をいささか無駄のある動きで踏破していく。

体力がある程度あるからこそその力技と言った感じか。

「フハハハハハ！こんなもの、壁でもなんでもありませんわー！」

当の本人は効率とかはまったく気にしてなさそうだ。

まあ、楽しそうで何よりである。

「さあ、ラストは任せましたわー！」

「うん！」

ダイヤちゃんから果南ちゃんへ、最後のバトンパスだ。

最後の区間は難易度は最も高い。

ある程度の運動神経が求められるものも多い。

水が張られているポイントも多く、踏破すること自体がなかなか大変に思われる。

思われたのだが…

「…早くね？」

「おー！さすが果南！」

「果南ちゃんすごい！」

「あれに勝たないといけないのかー。大変だね」

「…すごいとかそんなレベルじゃないわよね」

「…君にもそう見えるかい」

梨子ちゃんも亜然としていた。

ポイントの一つに、綱渡りがある。

距離は短い完全に紐一本のコースと、手すりが付いているが距離が長いコースに枝分かれしているポイントがある。

果南ちゃんは迷わずに前者に向かって行った。

そしてそのまま。

決して太くはない綱の上を、全速力で駆け抜けていく果南ちゃん。

足元などまともに見ずに突っ走って行く。

「ど、どうしようよっちゃん。私、あんなことできないわ」

「ヨハネよ……少なくとも、梨子の区間にあの難易度はないから安心していいわ。あと、あんなの私も無理」

「というか、他にできる人がいるのか?」

そんな会話をしている間に、果南ちゃんがゴールイン。

ほとんどペースを落とさずにゴールした。

俺が想定していたより、ずっと早いタイムだったのは、言うまでもない。

〈Guilty Kiss〉

2番目はGuilty Kissだ。

順番は梨子ちゃん、善子ちゃん、マリちゃん、順番らしい。

特別運動が苦手という子がいない分、バランスのいいチームだ。

「2人とも、絶対に勝つわよ！」

「勝てるかはわからないけど……全力は出すわ」

「魔界の住人たちよ……堕天使ヨハネに力を！」

そんな意気込みを元に、スタート地点に着く彼女たち。

「よーい……どーん！」

梨子ちゃんが出発する。

さつきの花丸ちゃんに比べると、少しだけ早い。

「梨子ちゃん！がんばれー！」

「がんばれー！」

「なんというか。見てて安定感があるね」

「一歩一歩確実にって感じするよねー」

もともと、梨子ちゃんは本人が言っていたほど運動神経が悪くない。

千歌ちゃんの話によると、犬に追われた時には千歌ちゃんの家のレストランから梨子

ちゃんの家のレストランに飛び移ったらしい。

結構な跳躍が必要なはずだ。

「梨子ー！あとちよつとよー！」

「うん！つとー！はい！」

「受け取ったわ！墮天使召喚！」

そんな掛け声とともにスタートした善子ちゃん。

ずいぶん活き活きしているように見える。

そんなでもって、結構早い。

「これぞ！墮天使のステップ！」

「墮天使の羽ばたき！」

「そして、ヨハネの跳躍！」

無駄なセリフがポンポン出てくるのに、動きにはまったく無駄がない。

口と体を、別の人間が担当しているかのようにかみ合っていない。

「よ、善子ちゃん、すごいですね」

「うん、2つの意味でね」

「よっちゃん！グッドペースよー！」

「ヨハネよ！はい！」

マリーちゃんにリストバンドが渡る。

ここまでのタイムは、若干Guilty KissがAZALEAを上回っている。

「おー。さすが鞠莉。早いねー」

「そうですわね」

確かに早い。

マリーちゃんもダイヤちゃん同様、動きがダイナミックだ。

とはいえ、さすがに果南ちゃんほど早くない。

これは、最終的にどうなるかわからないな。

そう思っていた時だった。

「ノー！おっぱいが重たいヨー」

マリーちゃんが、そんなことを言った。

「ちよっ！」

「ま、鞠莉ちゃん！」

「……………」

…あまり見ないようにはしていたのだが。

確かに、結構揺れている。

あそこまでダイナミックに動くと、さすがに下着があつても揺れるらしい。

…いや、さすがに下着はつけてるよね？

「…えい！」

『ビシー！』

「うぐうおおおおお！目がああー！」

何も言っていないのに目潰しをされた。

今回はその手の話は一切していないというのに！

「ハルくんのえっち」

「さすがに、今回は俺のせいではないはずだ」

目を抑えながら、そう返す。

ゴールの瞬間は見ていなかったが、AZALEAより少し遅いタイムだったらしい。

くCYaRon！く

「鞠莉さん！ハルさんもいるのですよ！なんて発言をするのですか！」

「えー。だってー」

「だってじゃありませんわ！」

「そうだよ、マリーちゃん」

「ハルまでそんなこと言うの？」

「当然だろう。君だって女の子なんだからね。迂闊にそういう事を言っ
てはいけないよ」

「…ハル、誰に言ってるの？」

「ああ、マリーちゃんはそっちにいるのかい」

先ほどの目潰しの影響がまだ残っている。

視界がぼけているのだ。

「よーし！準備オツケーだよー！」

「こっちもー！」

「る、ルビイもですー！」

「じゃあ行くよー。よーい…スタート！」

CYaron!がスタートする。

先頭バッターはルビイちゃん。

「わ、わ、と、つとと」

ルビイちゃんは、運動神経そのものが絶望的に悪いという事はない。体力もそれなりにある。

直線を走るだけなら、同年代の平均かそれより上のタイムがでるだろう。

問題は、その不器用さ。

どうにも、動きの効率がよろしくない。

お世辞にもテンポよくとは言いつらいペースで進んで行く。

こうなる事は予測できたが。

「ルビイちゃん！がんばるぞらー！」

「見ててハラハラするよ」

「あつはつは、可愛らしいねー」

「オー！ベリーキュート！」

「ルビイ！ちゃんと足元を見るのですわ！」

幾つかやり直しはしていたものの、それでもなんとか進んで行くルビイちゃん。頑張っているのは、十分伝わってきた。

「ルビイちゃん！あとちよつとー！」

「は、はい！お願いします！」

「うん！任せてね！とおーう！」

リストバンドを受け取り、千歌ちゃんがスタートする。

なかなかいいペースだ。

完璧というほどではないが、割と無駄なく進めている。

「千歌ー！がんばれー！」

「ちかつちー！」

特にコメントする事がなくて逆に困る。

まあ言い方を変えれば、無難にこなしているという事だが。

「ハルくん！今失礼な事考えたでしょー！」

「なんでそんな位置から心を読み取っているんだ」

「曜ちゃん！あとはよろしくね！」

「ヨーツロー！」

曜ちゃんにバトンが渡り、最後の走者がスタートする。

彼女の進み方も、千歌ちゃんと同じで無駄なくといった感じだ。

特に大きなミスをする事もなく進んで行く。

曜ちゃんは、普段こそ元気ハツラツといった感じだが、こういう時は結構冷静な判断

もできる。

それが分かりやすく現れているようだ。

「ハルくん！もつとほめていいよー！」

「だからなんで心を読むんだい。しかもその距離から」

曜ちゃんがゴールした。

タイムは…

「うーん…今の所私たちがドベだねー」

「あー、負けちゃったかー」

「うゆ…ごめんなさいです」

「いやいや、ルビイちゃんのせいじゃないから」

「そうそう。チームでやった結果だからねー」

というわけである。

さて、じゃあアスレチックはこれでおしまい…

「じゃ、最後はハルだねー」

「頑張つてね、ハルくん！」

「頑張つて下さい！」

くそ。

やはり覚えていたか。

正直、彼女たちがこれだけいい勝負したのだし、もう俺の出番はいらなと思うのだが。

「だめだよー、ハルくん」

「そうよ。みんなやったからこそ、一人だけやらないのはだめなんだから」

「心配しなくとも、ハルさんにはハンデがありますわ」

「ハンデ？」

それは初耳である。

「さすがに、一人だと体力的にきついでしょ？」

「だから、ハルはミスせずにゴールできたらそれで勝ちって事にしてあげるよ」

「なるほど」

確かにそれなら、ゆっくりやればなんとかなるかもしれないな。

そんな、甘い考えをしていた事を、数分後に後悔した。

ゴールはおろか。

中盤で落下。

よりにもよって水エリアである。

「…みんな、これをあの勢いで走っていたのか…」

水に浸かって

もう傾きつつある太陽を眺めながら

そんな事を、眩くのだった。

キヤンプと布屋さん3

夕方。

みんなが美渡さんを手伝って夕飯の準備をしている頃。

俺は、山道を歩いていた。

理由は、肝試しの準備である。

アスレチックレースにてぼろ負けを喫した俺に与えられた罰ゲーム。

それは、肝試しの驚かせ役をやることであつた。

肝試しのコースは数百メートルの山道。

登りは緩やかだが曲がりくねつた道が非常に多く、また明かりもほぼないという、肝試し御用達のコースである。

山道だけあつて、木があちこちに生い茂つているので、驚かせるスポットは沢山ある。

しかし、驚かせ役が俺一人。

定番である後ろから声をかけるとか、物を叩いて音を出すとか、そういうのをやるにはある程度人数がいてこそだ。

「やて…どうしたものか」

一通りコースを見てみたが、やはり難しそうだ。

共用荷物の中に肝試し用品があったのだが、いずれも人力で起動するものだった。

「…驚かせるたびに、次のスポットまで走って先回りするのを繰り返すか…」

体力に自信はないが、それしか思いつかない。

そう思い、音を立てずに先回りできるようなコースを探すことにする。

「…あれ？」

気付いたら、見知らぬ場所まで来ていた。

どうやら、道を探すのに夢中で森の中に入りすぎたらしい。

こんなことで遭難はあまりに馬鹿馬鹿しいので、道を引き返そう。

そう思ったときだった。

人がいた。

白装束を着た、髪の長い人。

シルエットだと女性に見えるが…。

今日は貸し切りだったはずだ。

迷い込んでしまった人かな？

俺は。

その人に声をかけることにした。

※

「よーしー！できたー！」

「おー！ナイススメール！」

「おいしそうだねー」

ハルが肝試しの準備に行っている間。

私たちは晩ご飯の準備をしていた。

作っていたのは、キャンプの定番料理、カレーライス。

カレーの担当は主に2、3年生。

ご飯の担当が主に1年。

と言っても、私はあまり料理は得意じゃないから、物運びとかの力仕事担当だ。

「かなーん！ちよつといいー？」

「はーい、今行くー」

鞠莉に呼ばれたので、そちらに向かう。

「ハルってまだ戻ってきてないわよね？」

「ハル？うん、見てないよ」

「遅くない？」

「うーん…確かにそうだね。様子見てくるよ」

「1人で大丈夫？」

「大丈夫大丈夫。遅くなったら先食べてて」

そんなわけで、山道にハルを迎えにきた。

「おーい！ハルー！いるー？」

「あー、果南ちゃん、聞こえるかい」

案外・すぐ声が返ってきた。

すぐ近くにいらしい。

気をかき分けて、向こうからハルがやってきた。

「どこまで行ってたの？心配したんだから」

「いや、申し訳ないね。ちよいと野暮用があつてね」

そんなことを言いながら近づいてきた。

そして、ようやくその姿が見える。

「もう、遭難でもしてるかと…思った……………」

「ん？どうしたんだい？」

思わず、言葉を失った。

木をかき分けて出てきたのは、紛れもないいつものハル。

でも。

一つだけ。

本当に一つだけ、大きく違うところがある。

それは。

「あ、あの、ハル？」

「さつきからどうしたんだい。そんなに驚いて。俺の顔に何かついてるかい？」

「いや！顔じゃなくて背中！背中についてる！というか憑いてるから！」

そう。

背中に。

黒髪の女性が、覆いかぶさるように乗っかっていたのだ。

その様は、明らかに生きている人間のそれじゃない。

「背中？虫でもついているかい？申し訳ないがはらつてくれるかい？」

「祓う!?無理、無理だつて！」

「え、君でも無理なサイズなのかい？」

「だ、だつて人間大だし……」

「でか過ぎじゃね!？」

とりあえず、これだけ普通に会話ができるということとは、今の所害は無さそう。

「と、とりあえずみんなの所に戻ろう？晩御飯、もう出来てるよ」

「おっと。そうだったかい。それはありがたいね」

背中にとんでもないものを背負ったままのハルと一緒に、みんなの所へ戻る。

どうやら、ハルには見えてないらしい。

でも、この……多分幽霊だけ……この人は、私のことをはっきりと認識しているみたい

で、さつきからめつちやこつちを見てる。

これ、みんなにも見えるのかな……。

「もう！ハルくん遅いよ！」

「本当よ、まったく」

「すまなかつたね。肝試しの準備が大変だったんだ」

「そ、そんなに気合い入れて作っちゃったの？」

「うう…」

「大丈夫だよ、ルビイちゃん。丸がついてるすら」

みんながあたり前のようにハルと会話している。

誰一人として、ハルの背中に張り付くそれにコメントをしない。

私にしか、見えていないらしい。

ハルも戻ったということ、すぐに食事の時間になった。

みんなで作ったカレーライス。

美味しい。

とても美味しいのだけど…。

「あれ？果南どうしたの？なんか顔色悪いよー？」

「…うん、ごめん、気にしないで」

「体調が悪いなら早めに言うのですよ？」

「2人ともありがと」

鞠莉とダイヤが声をかけてくれた。

親友2人は、こういう時は本当によく気付いてくれる。

「果南ちゃん、大丈夫かい？」

「ごめん、ハルは黙って」

「あれ？」

ハルもこういう所は気付いてくれる。

原因がハルそのものだけ。

「ハルくん、気合い入れてくれたんだねー。自信はどう？」

そんな質問をしたのは曜。

ニコニコしている。

ハルの仕掛けたものくらいでは驚かされないだろうと思っているんだろうなあ。

「正直、君らを驚かせられるほどの自信はないよ。まあ雰囲気だけでも楽しんでくれ」

「一人じゃそんなもんだよねー」

「本物の幽霊でもいれば、それで存分に驚かせるんだけどねえ」

「あつはっはっは」

いるじゃん！

幽霊！

自分の背中に！

その幽霊は、笑っている曜をじっと見続けている。

普段は幽霊なんて気にしていない私だけど、明らかにおかしい光景にさすがに動揺してしまおう。

だというのに。

みんなは、何事もないかのように笑っている。

楽しそうにしている。

「はあー……」

ごちそうさまを済ませ、しばしの休憩時間。

頭を冷やすため、私は一人で川のところまで来ていた。

せつかくのキャン普なのに。

ハルの背中に幽霊を見つけてからと言うもの、ペースを乱されっぱなしである。

そんなことを、考えてしまう。

考えて、思った。

「……あれ？」

ハルの、背中？

私ですら、そうそう何度も味わえない、好きな人の背中。それを。

そんな場所を。

あの幽霊は、何時間も独占しているの…？
腹が、たつてきた。

『バシヤツ』

顔に、思い切り水をかける。

気を引き締める。

「幽霊相手でも、ハルは譲れないや」

ねえ。

幽霊なんか。

その背中、いつまでも預けておけないんだよ。

「ねえハル」

「ん？どうしたんだい、果南ちゃん」

「あの…肩とか背中とか、重くない？」

「おお、よくわかったね。実はさっきから妙に凝ってるね」

「見てたらわかるよ。ほら肩もんであげる」

「おっと、助かるよ」

「あら、果南優しいのねー」

「ふふ。急にどうしたのですか？」

鞠莉とダイヤにそんなことを言われてしまう。

確かに、普段の私らしくないかも。

でもね、普段の私に戻るために必要なことなんだよ。

ハルの後ろに立つ。

そこにへばりつく幽霊は、私の方をじつと見ている。

怖くないかと言われれば、そんなことはない。

けど。

「…そこはねえ…君らの場所じゃないんだよね…」

つぶやいて。

左手で、ハルの肩を揉む。

そして。

右手は。

幽霊の顔面を、思い切りつかむ。

「!!!???!?!?
」

声は出ていないものの、幽霊が驚いていることがわかる。

訳も分からないといった表情のまま、徐々にその姿を消していく幽霊。

「おく。すごい軽くなったよ。マッサージ上手だね、果南ちゃん」

「運動する上で、こういうのは大事なことからね」

「さすがだ」

幽霊の姿は完全に消え去った。

成仏、したのかな。

「あれ？こんなところにソルトなんてあったかしら？」

「片付け忘れていたのでしょう。戻しておきますわ」

「あ、それは私がやつとくよ」

幽霊つて、食塩でも効くんだね。

ポケットに塩の入った瓶を入れながら、そんなことを思ったのだった。

※

「よし、じゃあこの組み合わせで、一組ずつコースを回ってきてくれ」

「ハルさんはどこにいるずら？」

「仕掛けのために、ある場所に留まっているよ」

「こ、こんなに暗いのにすごいですね…」

「まあ大人だからね」

「わ、私は大人になっても平気にはならなさそう…」

いや、ハルは幽霊に対してまで鈍感だから平気なだけでしょ。

そう思ったけど、さすがに口にはしない。

15分後に最初のペアがスタートということ伝えて、ハルは持ち場に向かっていった。

「ハルくん、どういう仕掛けしてるんだろー。楽しみだねー」

「る、ルビイはどちらかいとうと不安です…」

「大丈夫！この曜さんに付いてきなさい！」

「お、お願いします！」

最初のペアは、曜とルビイの組み合わせ。

くじ引きで決まったので、特に理由はない。

「そろそろ時間ですわ」

「ヨーソロー！」

「い、行つてきますっ」

懐中電灯を持って、山道へ入っていく2人。

本物の幽霊は成仏させたし、よっぽど大丈夫でしょ。

そんな考えは、甘かったらしい。

『ピギアアアアアアアアアアアアアアアア』

『ひゃあああああああああああああああ』

「おおー！いい悲鳴！」

「オー！ナイスボイス！」

「うう…行きたくない…」

「くくく…墮天使とゴースト…本来は相容れぬ存在が、今宵交錯するのよ」

「…善子ちゃんは楽しそうでいいすら」

「ヨハネ！」

…曜が、悲鳴？

声のトーンからして、楽しんでいた悲鳴には聞こえなかった。

あのハルに、曜が本気で怖がるようなものが作れるの…？

無理だね。

絶対無理。

じゃあ…あの悲鳴は…

そこまで考えた時だった。

山道入り口に、人の姿が見えた。

それは、先ほど私が成仏させた人にそっくりで。

一瞬だけこつちを見たかと思えば、そこには挑発するかのような笑みを浮かべてい

た。

まだ、終わっていないかったんだ。

「…上等だよ…」

最初にあれを見た時とは違う。

成仏させる方法はわかったんだ。

そっちがその気なら。

「この勝負、受けて立とうじゃん」

ポケットに入っている食塩の瓶を握り、そう呟いた。

キャンブと布屋さん4

肝試しが始まった時、俺はコースのゴール地点にいた。

実は、肝試しの準備自体はほぼできていないのだ。

理由は、準備中に他の事をしていたため。

気づいたら時間がだいぶ経過してしまっており、まともに準備ができなかったのである。

諦めた俺は、誰かが持ってきた驚かせグッズを適当に配置し、自分はゴールで待機する事にした。

人を感じて、音を出したりするような装置だ。

真つ暗なところでやれば、びっくりさせる事くらいはできるだろう。

A q o u r sの子達には、気合が入っていると云ったが、あれは嘘。

ああ言っておけば、それなりに警戒心くらいは煽れるだろうし、市販のグッズでもそこそこ怖く見えるだろうと思っただのだ。

ところが。

事態は、思わぬ方向に転んだ。

俺が用意した驚かせスポットには辿り着いていないはずなのに、悲鳴が聞こえてきたのである。

はて。

どうしたのだろうか。

確かに、森は暗く音もないため、ちよつとした光や音ですら、恐怖心を煽る材料にはなるだろう。

しかし、それくらいで悲鳴をあげるような子達ばかりではない。

よほど大丈夫だとは思うが、何かあったのか少し心配になる。

念のため、すぐにでも動けるようにしておこう。

そう、考えていた時だった。

「ぴぎやあああああああああああああああああー！」

「うひやあああああああああああああああああー！」

ものすごい声を出しながらこちらへ走ってくる陰が2つ。

よく見なくても、ルビィちゃんと曜ちゃんだとわかる。

あと10分はかかると思っていたのだが。

ずいぶん早いゴールだ。

2人はそのまま勢いを緩める事なくこちらへ走ってくる。

そしてそのまま…

「ハルさあーん！」

「ハルくーん！」

2人に飛びつかれた。

「ぐえー！」

「は、ハルくん！ゆ、幽霊！幽霊いた！」

「あ、あ、あわわわわわわわわ」

「は、話は聞くから手を離してくれ」

ルビィちゃんは首、曜ちゃんは腹に抱きついている。

というよりは、もはや締め上げられていると表現するべきか。

彼女達をなんとか落ち着かせ、話が聞けるようになったのはその数分後だった。

おそらく、次のペアが出発した頃だろう。

「そ、それで、どうしたんだい？」

「うう、ぐす。ゆ、幽霊、出たんです」

「さっきも言っていたね。その、疑いたくはないが…」

「ほ、本当にいたんだよ！」

「曜ちゃんも見たのかい」

「うん…」

話を聞くと。

森の中を歩いていたら、何かの気配を感じたらしい。

最初は俺のしかけた何かだと思って近づいたら、明らかに人でも機械でもないものがそこにいたそう。

姿だけなら、長い黒髪をした女性。

でも、その姿からはまるで生気を感じなかったらしい。

「見間違いとかなではないのかい？」

「ち、違うとおもいます…」

「…何か理由があるのかな」

「…透けてたの…体」

「…そうかい」

そもそも、俺は人型のグッズを置いていない。

設置中に、そんなものがあつた記憶もない。

幽霊の存在の有無に関わらず、俺のあずかり知らぬ状況が構築されている事は確かだよ。

「とりあえず、ほかのみんなを待とう。何かするのはその後だよ」

その後、続々とみんながゴールしてくるが、ことごとく口を揃えて幽霊が出たという。

「あぎやあああああああああああ！」

「ごふっ」

「ノオオオオオオオオオオオオ！」

「あがっ」

「きやあああああああああああ！」

「あべしっ」

その度に彼女らの体当たりを受け止める。

というかなんでみんな突撃してくるの？

それが目的じゃないよね？

8人が帰ってきて、残りは果南ちゃん1人だ。

「果南ちゃんはなんで1人？」

「よくわからないけど、私は後から行くから先に行っていてくれて」

「うーん…少し危ないね」

「私もそう言ったんだけどねー」

「…仕方ない、少し様子を見てくるよ」

「き、気をつけてね！ゆ、幽霊出るから！」

「…まあ、心に留めておくよ」

※

山道を戻り、果南ちゃんに合流を試みる。

めちやくちや長いわけでもない距離だ。

すぐ合流できるだろう。

少しして、懐中電灯の明かりと思わしき光が視界に入る。

おそらく、あれが果南ちゃんだろう。

「おーい・、果南ちゃー…ん？」

見えた明かり。

それは、ものすごい勢いでこちらへ向かってきた。

その明かりが、投擲された懐中電灯である事に気付いたのは、俺の顔面にそれがヒツトした直後だった。

『バゴオ!』

「ぐうおおおおおつ! い、痛い! さっきまでよりさらに痛いっ!」

あまりの痛みに、顔を抑えて地面を転がりまわっていたら、人影が近づいてきた。

「あれ? ハル?」

「あれじゃないだろう。何をしているんだ、君は」

「いや、ちよつとゴーストハントを」

「幽霊がいるかいけないかは別として、懐中電灯は投擲していい道具じゃない」

「いやー、他に投げるものが無くてね」

「懐中電灯も投げるものじゃない!」

まるで反省する様子がない。

というか、この子だけは幽霊に対して全く怖がる様子がない。

「君も幽霊と出くわしたのかい?」

「うん。だからハンティング中」

「どういう発想をしたらそうなるんだ…」

「と言つても、ずっと見えてるわけじゃないけどね。それより、ハルこそ出くわしてない

の?」

「幽霊? あいにく、そういうのは信じていないんだよ」

「いや、私も信じてはいなかったんだけどね…」

そのときだった。

『幽霊は…いますよ…』

頭に直接語るかのように、そんな声が聞こえた。

「…果南ちゃん？」

「いや、違うよ…でも、私にも聞こえた」

「…なんてこつたい」

『あなたは、心底幽霊を信じていなかったから見えていなかったんです…』

声が続く。

とても低い、女性の声。

『でも、みんなの様子やその子との会話で、少しだけ信じようという気持ちが生まれた』

ノイズが混ざったかのような音。

それなのに、言いたい事がはっきりと聞き取れる。

『今のあなたは、私の姿を見れるはずですよ…』

「だったら、見せて欲しいものだね…」

遠くから話しているようにも聞こえる。

近くでつぶやいているようにも聞こえる。

『何を言ってるんです…最初からいるじゃないですか…』

「…どうということかな…」

『あなたに見えていなかっただけで…私は…』

声が、徐々に大きく、はっきりとしてくる。

そして。

してやったり顔の果南ちゃん。

状況を掴めない俺。

地面を転がる幽霊という、とてもシユールな光景がそこには出来上がっていた。

「…誰か、説明を頼むよ」

パニックを通り越して、呆然である。

『ぐすつ…そのですね、私、ここで幽霊をやってます。名前はない…というか忘れま
した』

「ああ、まあ、うん。幽霊なのはわかるよ」

とりあえず落ち着いたところで、話を聞くことにした。

よく見ると、意外に綺麗な顔立ちをしている。

『ここで、幽霊として細々生きてました』

「いや、生きてない…いや、続けてくれ」

『でもそろそろ、成仏しようかと思ってたんです』

「成仏って、自分でできるものなの？」

『未練さえなければ、割とすんなり』

「へえー……」

そんなものなのか。

なんかすごい変な感じだ…。

『ただ、一つだけ未練があつて、成仏しきれなかつたんです…』

「未練？」

『はい…お墓のことです』

「お墓？」

「…まさか、あのお墓のことかい？」

「ハル、心あたりあるの？」

「ああ、ちよつとね…」

果南ちゃんに事情を話す。

肝試しの準備が適当になつてしまつた最大の理由である。

準備のために森に入った時、俺は古びて汚れてしまつていたお墓を見つけた。

霊というのはもつぱら信じていなかつた俺だが、死者に対して敬意を払わないほど腐つたつもりはない。

手の込んだことはできないが、最低限見栄えくらいは良くしようと、土を払い、枯れた花を撤去、水をかけておいたのだ。

人様のお墓に触れるのは気が引けたが、そのまま放置というのも同じくらい気が引けたので仕方ない。

『私の未練は、お墓がみすばらしくなってしまうことだったんです』

「…それが未練になるのか」

『私たち幽霊にとつて、生きた人間に魅せられる唯一の姿がお墓なんです。だから…』

「あ…私はなんか分かる気がする」

「へえ…あれ？でもあの時、お墓の前を人が通り過ぎたような」

そう。

そもそもお墓を見つけたのは、この幽霊にそっくりな女性がいたのを見つけたからだ。

近づいていったところで、気づいたら彼女は消えていたのだが。

『それ、私です』

「え？でも、幽霊を信じていないハルには見えないんじゃないや…」

『幽霊を信じていない人には、一瞬だけ姿を見せるんです。それだと人間だろうっていう考えの人は見ることができませんから』

「人間と勘違いして見ることができるとかー。曖昧な判定だなあ」

「そもそも、幽霊という存在自体が曖昧な存在だろう」

『話を戻しますが、お墓を綺麗にしてもらったことで、私の未練は晴れました。もう成仏しようと思ったんですけど』

「うん」

『彼が、困っていることを知って、最後に恩返しをしようと思ったんです』

「…それが、肝試しの手伝いってこと？」

『はい』

「…本物のお化けで肝試しは、今後は一生経験しないだろうね」

というか、勘弁願いたい。

道理で、みんなが尋常じゃなくらい驚いているわけだ。

『それじゃあ私、そろそろ行きますね』

「えっと…成仏するってことかな？」

『はい…これで、未練は無くなりましたから』

「その…協力には感謝するよ。ありがとう」

『こちらこそ、お墓、ありがとうございます』

彼女の体が、徐々に透けていく。

この世から、その存在を消去しようとしているのだ。

ああ、そうだ。

伝えることがあったんだ。

「君の名前、だけどね」

『?』

「お墓に、『愛』って掘ってあったよ。それが君の名前じゃないかなって。苗字は、残念ながら読み取れなかったがね」

『…愛…ふふ…そうですか』

「いい名前だよ。あの世で自慢するといい」

『ええ…そうします』

「えつと…ごめんね、何回も殴っちゃって」

『いえ…でも、幽霊と知って攻撃してきたのは、あなたが初めてでした』

「あー…つい」

「つい、で拳を出すのはどうなのかな」

「あ、つい拳が出そう。ハルの方に」

「勘弁してくれ」

「あ、ねえ、一個だけ聞いていい?」

『ええ、どうぞ』

もう時間もないだろうに。

どうしたんだろうか。

「なんで、肝試しの前にハルに張り付いてたの？あれ、手伝いと関係ないよね？」

『あー…それはですね。最初は、気付いて欲しくてやってたんです』

「それは申し訳なかったね」

『でも、その…だんだんその背中にいると安心するようになって…離れられなくなっちゃったんです』

「ほう」

「なあ!?そ、それってまさか…!」

『ふふ。そろそろ時間です。2人ともさようなら』

「ああ、さようなら」

「ちよ、ちよつと!」

彼女の姿が見えなくなる。

果南ちゃんは何か言いたげだったようだが。

私が生まれ変わったら…

絶対、会いに行きますね

耳に、そんな声が聞こえた気がした。

「さて…みんなの元に帰ろうか。…どうしたんだい、果南ちゃん」

「いや…なんでもないよ。なんでも。はあ〜」

「なんでもないならため息なんてつかないでくれよ」

「まさか…こんなところで、あんなライバルが…」

「さつきからなんなんだい」

「うるさい朴念仁」

「なんか最近、そのセリフをよく聞くなあ」

キャンプー日目。

その日の肝試し。

そこで出会った幽霊は。

ちよつと可愛らしい女の子だった。

キャンプと布屋さん5

夜。

色々なことがあつた1日だったが、今日はもう寝るのみだ。

A q o u r s のみんなは、すでにバンガローに入っている。

バンガローの班分けは：

果南、梨子、花丸、善子、ルビィ

の5人。

ダイヤ、鞠莉、曜、千歌

の4人。

こんな感じに分かれている。

後者のグループには、寝る際は美渡さんが混ざる事になっている。

ちなみに今は。

「ハルくん、お疲れさん」

「どうも。まあ確かに疲れましたね」

一日の疲れを癒すべく、俺と美渡さんはお酒を飲むのだった。

「いやー、大変だったねー」

「美渡さんは何かしてましたっけ？」

「ご飯作ってたじゃん」

「肝試しの時は？」

「おつまみ作ってたよ。ほら、これ」

「…おいしいですね」

「そうでしょー」

煮物をもろう。

文句なしにおいしい。

「まあ、俺も楽しみましたからね。特に何かを言うつもりはないです。ただ…」

「ただ？」

「明日は、美渡さんが動いてください」

「それは嫌」

「嫌じゃないです」

「えー。疲れるじゃん」

「あんたキャンプに来たんですよね？」

「私は子守よ。それに、ハルくんが一緒にいた方があの子達も喜ぶって」

笑いながら言われる。

これは、明日もこの人のアクティビティには期待できなさそうだ。

「それよりほら、せっかくいつもとは違う夜なんだから、普段とは違う話をしようよ」
「例えばどんな話ですか？」

「うーん…そうだねえ…恋話、とか」

『ガタガタガタ!』

美渡さんの言葉に反応したかのように、2つのバンガローの方から音が聞こえる。

まだ起きていたんだね。

「くつくつく。みんなわかりやすいねえ」

「何の話ですか？」

「なんだろうねえ」

美渡さんが愉快そうに笑っている。

まあいいか。

「恋話って…それ、前にダイヤちゃんたちにも聞かれましたよ」

「どうせ、話せるような経験はない、とか言ったんでしょ？」

「よく分かりましたね」

「わかりやすいからね、ハルくんも」

そうなんだろうか。

「じゃあどうするんですか。いきなり恋話終わっちゃったじゃないですか」

「いやいや、私の恋話っていう選択肢はどうしたのよ」

「美渡さんの恋話？あつはつはつは。面白いじようだ……ぐべ」

「なんか言った？」

「な、何も言っていないです」

というか言い切れなかった。

言い切る前に空になった空き缶が飛んできたからだ。

缶を拾い、机に乗せる。

「まあ、私の恋話しても意味ないからねー。…みんなも、聞きたいのはそれじゃないだろうし」

「みんな？」

「気にしなくていいよ」

「そうですか」

この手の話は、追求しないに限る。

改めて目の前の酒に口をつけ、話を続ける。

「じゃあ結局恋話なんてできないじゃないですか」

「別に、無理に恋愛に繋げる事だけが恋話じゃないの」

「どういう事ですか？」

「ハルくんの周り、女の子多いでしょ？その子達についてどう思うーとか」

「女の子って：A q o u r sの子達ですか？」

「そうそう」

「どう思うって：手を出したらほぼ犯罪ですよ？」

「別にお付き合ひするだけなら問題ないでしょ？そりゃあ、あつちのほうで手を出したらアウトだけどさ」

そう言つて手でジェスチャーをする美渡さん。

右手親指と人差し指で輪を作り、左手人差し指をその中通すジェスチャーである。

まあ、夜の営みの事を指しているのは想像つく。

美渡さん、めっちゃニヤニヤしてるし。

「おっさんですかあんたは」

「せっかく大人2人で夜に、それもお酒が入った状態なんだからちよつとくらいお下品な話でもいいでしょ」

「それ、普通は男から言うことだと思っんです」

「そうかなあ」

「…まあ、たまにはいいでしょう。付き合いますよ」
「よーし！そうこないと！」

※

「よーし、じゃあさつそく聞いていきましよう」

俺は2本目、美渡さんは3本目の酒を開け、改めて話を続ける。

「質問するんですか？」

「ハルくんが自分から下ネタを振るのは無理でしょ？」

「…否定はできませんね」

「だから、私が振ってあげるよ」

「恥じらいをもってください」

普段から若干セクハラ発言をする俺だが、確かに下ネタは自重しているつもりである。
る。

「というか、女子高生相手にそんなことしたら、本当に豚箱行きである。」

「そうだね、最初は軽めに行こうか」

「そうしてください」

「うーん…じゃあ、『一番おっぱいを揉んでみたい子』」

「よし、じゃあお疲れっす。おやすみなさい」

「ああ！ちよつと！」

「直球すぎます。もうちよつとくらいひねってください」

「えー。下ネタありつて言つたじゃん」

「これじゃあ下ネタじゃなくて猥談です」

「もー…じゃあ、好きなおっぱいのサイズでいいよ」

「…それもかなりグレーゾーンですが…まあそれくらいなら」

と言つて、正直困る質問である。

「そうですね…まあ、そこにおっぱいがあるというのが分かるサイズであれば、それが好みですかね」

「小さすぎるのは嫌、と」

「・まあ、よつぽど小さすぎなければどのサイズでも愛せます。さすがに、そこに無ければ愛せません」

「あつはつは」

「うう…ルビィは…小さすぎるかなあ」

「私も、小さいかなあ…」

「2人とも気にしすぎずら」

「そうそう」

「ずら丸と果南は、余裕があるからそう言えるのよ」

「んー…大きい方が好きって分けじゃないのネー」

「そうみたいですね」

「ダイヤさん、ちよつと安心してる？」

「他の3年生は大きいもんねー」

「やかましいですわっ」

バンガローから声が聞こえている気がするが、気のせいだろうか。

「じゃあ次は…」

しょうもない話を交わす、大人2人。

こうして、夜は更けていった。

朝。

目覚ましはとくにかけていなかったが、いつもの習慣で目が覚めた。とはいえ、昨日は結構遅くまで起きていたので、まだ眠い。

外から人の声は聞こえてこないの、みんなもまだ寝ているのだろう。

「…もう一眠りするか…」

そう考え、目を瞑ろうとした時。

左半身に違和感を感じた。

昨日、慣れない運動をしたために筋肉痛にでもなったのかと思つたが、一応確認。

「うくん…ムニヤムニヤ…」

千歌ちゃんかそこにいた。

俺の腕を抱くようにして眠っている。

「…トイレに行った際に間違えたのかな」

なんにせよ、気持ちよさそうに眠っている。

起こすのは少々忍びない。

「…まあ、いいか」

特に気にせず、そのまま眠ることにした。
意識が、すぐに途切れる。

「おい、ハルくん。千歌ちゃんいるー…つて、千歌ちゃん、ずるい！」

「うーん…えへへ…」

「…千歌ちゃん、ぐっすり寝てるなあ…私も、少しくらい良いよね。えへへ。お邪魔します」

※

「3人とも、何か弁明はありまして？」

「…すいません。今回の件に関しては、一切の記憶がございません」

「あー…ごめんね、ハルくん」

「いやー、私も起こしに来たはずだったんだけどねえ」

時刻は朝7時半。

・起こしに来てくれたダイヤちゃんは、俺の両隣に千歌ちゃんと・曜ちゃんが一緒に

寝ているのを発見。

そのまま3人とも正座をさせられ、お説教タイムという訳である。

「とりあえず、事情くらいは聞いても良いんじゃない？」

「そうねー」

果南ちゃんとマリーちゃんがそう言ってくれる。

事情については俺も聞きたい。

「えつとねー。夜、私トイレ行つて…そのまま寝ぼけてこつち来ちゃったんだー」

「寝るとき気づかなかつたの？」

「さすがに気づいたんだけど、久しぶりのハルくんの匂いで、安心しちゃつて」

「そのまま寝たと」

「あはは…」

「…曜ちゃんは？」

「私は、千歌ちゃんがバンガローからいなくなつてるのに気づいて…ハルくんのところにいるかもつて思つて起こしに来たんだー」

「…それで？」

「えつと…千歌ちゃん見てたら、羨ましくなつたといいますか…まあそんな感じ」

「ミイラ取りがミイラね」

「俺の無罪は証明されただろう」

「…さすがに、今回は怒れませんわね」

ダイヤちゃんが呆れている。

「ねえ、ハル」

「ん？どうしたんだい」

ようやく解放された俺に、善子ちゃんが話しかけてきた。

「さっきの2人の話聞いて、あの子たちの気持ちに気付かないの？」

「気持ち？」

「そうよ。仮にも女子が、いくら夜つて言つたつて男相手に落ち着くつて言ってるのよ。

なんか気付くことあるでしょ？」

「うーん…ああ、そういうことか」

「!!」

「あれだろう。慣れない土地と環境で少し寂しかったんだね。俺はあの子達の兄みたい

なものだから、安心したのかな」

「…も面白いわ」

「あれ？」

間違えたらしい。

アスレチック、リアルゴースト肝試し、大人の猥談を経たキャンプ1日目。
そのキャンプは。

2日目を迎えるのだった。

キャンプと布屋さん6

「さあ！釣って釣って釣りまくるヨー！」

「いえーい！」

マリーちゃんと曜ちゃんが高々に釣竿を掲げる。

結構危ないので遠慮していただきたい。

「さて、釣りの時間は今から3時間程度。その間、各々自由に釣りを行う。それでいいですわね？」

「「はーい！」」

3時間。

釣り経験がほぼない自分としては、十分なのか短いのかはよく分からない。

みんなが、釣り道具一式を持って散っていく。

「よし。こつちも準備しますかねー」

「任せちゃっていいんですか？」

「オツケー。あの子達、頼むね」

美渡さんがバーベキューの準備を始める。

相変わらずのご飯係だ。

もちろん俺も手伝いを申し出たが、例のごとく断られた。

最低限の手伝いということで、荷物と食材を運ぶのを手伝う。

食材については、基本的にはシンプルなものばかりだ。

若干、明らかに日本製のものじゃないものがいくつか見られるが、誰が持ってきたかは大体見当つくので、そこはスルー。

美渡さんならうまく調理してくれるだろう。

「つと、これで全部ですね」

「お疲れさん。あとは私がやっつくよー」

「いや、セッティングまでは手伝いますよ」

「あら。じゃあそこまでは任せるよ。私、野菜切つとくから」

「了解です」

今日は天気良きそうなので、フライシートは張らなくていいだろう。

美渡さんが使っているのは別のキャンプ用机を組み立て並べていく。

さらに、コンロも3つ組み立ててセット完了。

火付けは…みんなが揃ってからの方がいいかな。

そんなわけで、準備自体は完了である。

「お、できたみたいだね。ありがとうー」

「いえ。じゃあ、あとは頼みます」

「ほーい」

釣り道具を持って歩き出す。

とりあえずは、みんながどこにいるかを把握しておくために歩くことにした。

※

とりあえず川沿いを歩く。

早速3つの人影を見つける。

「成果はどうだい？」

「あ、ハルさん。まだ釣れないぞら〜」

「私もです」

「同じくよ」

そこにいたのは、花丸ちゃん、ルビィちゃん、善子ちゃんの1年生トリオである。

「そうかい。まあまだ大した時間も経ってないからね」

「ハルさんは何してるはずら？」

「俺は見回りだよ。いい場所があれば釣りに参加するがね」

「そ、その、お疲れ様です？」

「ああ、ありがとう」

ルビイちゃんに気を使われてしまった。

「とりあえずは水分補給だけしっかりしておいてくれ」

「はーい」

「そっちも、体力ないんだから気をつけてよね」

「おや。心配してくれてありがとう」

「なっ。し、心配とかじゃないからっ」

「善子ちゃん。わざわざ隠す必要ないずら」

「あはは。そうだね」

「違うから！」

「じゃあまあ、気をつけておくれ」

「あ、こら！」

あの3人なら特に問題もないだろう。
そう考え、別の場所に向かう。

上流へ行くとさらに別の3人を発見。

「あれ？ハル？どうしたの？」

「いや、それはこっちのセリフだよ。何をしてるんだい」

「んー…マス掴み？」

「今は釣りをする時間じゃないのかい？」

「でもこっちの方が効率いいよ？」

「いや、そうかもしれないけどね…」

「キヤーツチ！2匹目よー！」

「あ、ちよつと暴れないでください！」

見つけたのは3年生トリオ。

だが、3人とも腕まくりに縛った髪と手掴み体制である。

行きは釣竿を持って行ったはずなんだが。

「君たち、釣りとは何かご存知かい」

「当然ですわ！」

「今の君たちは魚釣りをしていないことは自覚してるかな？」

「フィッシュが獲れれば同じよ」

「…まあ、それで楽しいなら何も言わないよ」

「ハルもやる？釣糸垂らすよりはこっちの方が効率いいよ？」

「遠慮しておくよ。俺には真似できなさそうだしね」

「そっかー」

ちなみに、この魚獲りについてはちゃんと許可を得ているらしい。

「よっぽど大丈夫だとは思いますが、怪我には気をつけるように」

「はいーい」

「もちろんですわー！」

「それじゃ、がんばってください」

3人に手を振り、さらに上流へと進む。

やがて3人の人影を見つける。

「そーれー！」

「うわ、冷たーい！曜ちゃんやったなー！」

「あはははー！」

「2人とも、服濡れちゃうわよー」

釣りは…していないようだ。

「えーと…調子はどうかな?」

「あ、ハルさん。…見ての通りよ」

「まあ…こうなる気はなんとなくしていたよ」

とはいえ。

この子たちが多少魚を獲れなかったところで、3年生が結構捕まえているので問題はないだろう。

というか、別に1匹も釣れなかったところで何か不利益があるわけでもない。

楽しくやれるなら、ぶっちゃけた話、何をやっててくれてもいいのだ。

「梨子ちゃんは、混ざらなくていいのかい?」

「ええ!?だって…」

「釣りのことは気にしなくていいよ。もちろん、あれに混ざりたくないならそれで構わないしね」

「そういうわけじゃないけど…」

「それに、だよ。あんだだけ暴れまわってしまったら、この辺の魚なんて簡単には釣れないだろう。同じ時間を過ぐすなら、遊んだ方が得策だと思うよ」

「…そうね。うん。そうするわ」

靴を脱いで川の方へ駆けていく梨子ちゃん。

やがて、飛び交う水が3人分に変わるのだった。

「滑らないように気をつけるんだよ」

「「はい」」

※

釣りが始まって2時間半。

つまりは釣り終了予定の30分ほど前。

Aoursのメンバーは水遊びに興じていた。

「そーれー」

「えーい！」

「きゃー！冷たーい！」

「くつくつく…この墮天使に水など…って誰よ！私にかけたの！」

「そんなところで突っ立ってるからだよー」

「ピギヤー！」

「ああ！ルビイちゃんがこけたぞらー！」

9人の美少女たちが、川の水と戯れる。

そんな光景を、俺は魚を捌きながら眺めるのだった。

もちろん、彼女たちが釣ってきた魚である。

…いや、大半は釣ったというより獲ってきたと言うべきかもしれないが。

「結局、釣りは飽きちゃったのかー」

「いえ、これ以上は食べられないからって、俺がストップをかけたんです」

「ああ、なるほどねー。で、時間を持て余して水遊びと」

「まあそうですね」

着替えはあるのだろう。

ほとんど全身水浸しなレベルで遊んでいる。

水も滴るなんとやら。

目に優しい光景である。

「どう、あれを見て」

「素晴らしい光景ですね」

「いやいや、そうじゃなくてね」

「ん？何が言いたいんですか？」

「あの子達が水に浸かっている姿なんて、そんなに珍しいものでもないでしょ？」

「まあ、すぐ近くに海がある環境ですからね」

「そうそう。でも、今は普段と決定的に違う点があるの」

「違う点ですか」

「水着だよ」

「……………言いたいことは分かりました」

彼女たちは今、水着は着ていない。

さらに、水浸しのシャツはきっちり肌と肌に張り付いている。

要するに濡れ透け状態だ。

よくよく見ると、現段階で結構きわどい状態である。

シャツが張り付いて体のラインがはつきり浮き出ていたり。

下着のラインと思われるものが浮いている子もいらつしやる。

…というか、濡れて透けてる子もいる有様だ。

「いやー、若いつていいねー」

「…俺、ここにいない方がいいのでは？」

「いやいや。せつかくあの子達が無警戒なんだよ？堪能しとかないと」
「とてつもなく眼福なのは確かですが：正直目線のやり場に困ります」
「プールとかではガン見してるんでしょ？今更何言ってるのさ」

「水着は本人公認の上だと思ってます。さすがに下着はあかんでしょ」
「変なところで紳士的だねえ、ハルくんは」

「常に紳士的でしょうが」

「そんな紳士に、試練を与えてあげよう」

「…何をするつもりですか」

「くつくつく…」

美渡さんが何やら嫌な笑みを浮かべている。

この表情の美渡さんは、大概ろくなことを考えていない。

何をするつもりか警戒態勢に入ったその時だった。

「おーい！みんなー！ハルくんも水遊びしたいってー！」

「……………はい？」

「いいよー！」

「ハルもこつち来なよー！」

「カモーン！」

「だってさ」

「だってさじゃありません。いや、まずいですって」

この人、俺を単身であの場所に放り込む気らしい。

あの環境に男を放り込むって…

生肉畑にライオンを放つようなもんだぞ。

「大丈夫だって。本人達は気づいてないし」

「大丈夫なわけじゃないでしょう。俺、男ですよ？わかってます？」

「だから気を利かせてあげたんでしょ？ほら、行った行った」

「…どうなっても知らないですよ」

洩々、彼女たちと水遊びを楽しんだ俺。

目線は、極力彼女たちの服にやらないように常に目を見続けた。

何があっても、彼女たちを見る時は目だけを見続けた。

なぜか照れているような気がしたが、多分気のせいだろう。

そして。

誰かが濡れ透け状態に気づいた。

当然、飛ぶ悲鳴。

誰かのパンチにより飛ぶ俺。

うん。

知ってたよ。

なんで教えてくれなかったのって打撃を食らう未来を、俺は知ってたよ。でも、教えたら教えたでデリカシーがないって攻撃されるじゃないか。

だから。

「美渡さんが…伝えてくれれば…万事解決だったん…だ」

「こういうのをスマートに納められないと、紳士とは言えないねえ」
そんな悪魔の言葉が、耳に聞こえたのだった。

キャンプと布屋さん7

「さあみんな！じゃんじゃん食べてねー」

「おいしいー！」

「いい焼き加減ね」

「ハルさん、バーベキュー上手ずらー」

「そうだねー」

「その褒め言葉、初めて聞いたわ」

誰かの拳により気絶させられた俺だが、その後美渡さんに水をかけられて起こされたのだった。

そしてすぐにバーベキュー準備に取り掛かり、こうしてみんなに食事を提供しているというわけである。

「ハルくん、おかわりー！」

「肉が欲しかったら美渡さんに言ってくれ。こっちは火加減とか見るので手一杯なんだ」

「ハルさん、ずいぶん慣れてるのね。こういうの結構経験があるの？」

「まあちよつとね」

その話は後日機会があれば彼女たちに話すこととしよう。

今はどうでもいいことだ。

そもそも、肉をうまく焼いているのはどちらか言う俺よりも美渡さんである。

現在の役割分担は、俺が火の調整と食材を焼く係。

美渡さんが焼けたものを取っていく係である。

「みんな、肉を食べるのはいいが、野菜もちゃんと食べるんだよ」

「そっだよみんなー。肉ばっかりだと太るよー」

「！！！！」

一部が美渡さんの言葉に反応しているようだ。

「でも食べれるときに食べておきたいずらー」

「私、食べてもあんまり太らないんだよねー。動いてるからかな」

「わたしも太らないでーす」

花丸ちゃん、果南ちゃん、マリーちゃんが言う。

「ぐぬぬぬぬ…スタイルいい組は余裕持ってるわね…」

「はあ…羨ましい」

「全部胸に行ってるのかなあ」

「[c.]」

スタイルについてはノーコメントとしておこう。

ちなみに3人はあまり自覚は無いようだ。

聞く人によれば結構煽っているようにも受け取られそうなものだが。

「まあまあ、みんなまだまだ成長期なんだから。気にせず食べてくれ」

「そうそう、ほら、これでも飲んでさー」

「いや、余計なこと言ったの美渡さんじゃないですか」

「あれ？そうだったけ？」

そう言いながら、美渡さんがみんなに飲み物を配っている。

缶ジュースみたいだ。

「はい、ハルくんも」

「ありがたいですけど、まだ火番してるんで、その辺に置いてもらえますか？」

「ほーい」

それから30分ほどだろうか。

しばらく食材を焼き続けていた俺だが、みんなの食事ペースが少し落ち着いてきたの

で自分も頂くことにする。

「さて、俺も食事を…ん？」

今気づいた。

渡された飲み物、あまり見覚えのないデザインだ。

というか、これって…

「…アルコールって書いてあるんだけど」

まさか、これをあの子達に…？

嫌な予感がして、机の方で食事をするみんなのところへ行く。

「ちよ、ちよっといいかいみんな」

「ん？どうしたんですか？」

「…いや、実はね、飲み物がね…」

「飲み物？特におかしいところはありますか？」

「うん」

「…そうかい。俺の気のせいだったみたいだ」

いや、おかしい。

確信した。

彼女達はアルコールを摂取している。

だつて。

「…千歌ちゃん。その口調はどうしたんだい？」

「え？なに言ってるんですかー。私、いつもこうじゃないですかー」

「そうだよハルくん。どうしたのー？」

千歌ちゃんが、丁寧語でしゃべっている。

すぐに、美渡さんに事情を聞くことにした。

「ちよつと。どうなってるんですか、これは」

「あー。私が渡したやつ、間違えてたみたい。まあ、そんなに強いやつじゃないし大丈夫でしょ」

「そういう問題じゃないでしょうが」

「とりあえず、飲んでない人探した方が良いんじゃない？」

「…はあ…。そうします」

机の上の空き缶を見る。

それぞれの前に置かれた空き缶達。

いずれもフタが開いている。

「全員飲んでるね」

「全員飲んでますね」

って、そうじゃなくて。

「美渡さん、責任をとってちゃんと面倒見てください」

「あの子達次第かなー」

「はい？ どういう意味…」

そこまで行つた時だった。

「ちよつとー、いつまで私たちを無視するのー」

「そうよー。かまつてよー」

そんな声がかかった。

声の発信源は、果南ちゃんとマリーちゃんだ。

ぱつと見、そこまで普段とは差がないように見えるが…

「こつち来てよー」

「ほら、ご指名だよー」

「……………」

「他の子の相手しとくから、そんな目しないでよ」

「…はあ…」

仕方なく彼女たちのところへ行く。

美渡さんの他人事のような顔が、どうにも恨めしかった。

く酔いどれ3年の場合く

「ハルく。うふふ」

「あ、果南ずるいく」

「あの、どこにも逃げないからとりあえず放してもらえないだろうか」

「いや！」

左に果南ちゃん、右にマリーちゃんがいる。

二人に腕を組まれており、これ自体は男としては嬉しい状態である。

ちなみに目の前にダイヤちゃんがいる。

なぜか無表情で何も言わずにこちらをずっと見続けている。

正直怖いのだが、両側の二人のせいでそれどころじゃない。

「もー。普段は私だつて我慢してるんだから、今日くらいいいでしょー」

「我慢つてなんだい」

「ふふふ」

ニコニコしている果南ちゃん。

「ハルー。えへへー」

「君もずいぶん甘えるね」

この状況で考えるのもなんだが、果南ちゃんとマリーちゃんはアルコールが入ると甘えん坊になるみたいだ。

普段は彼女らなりにお姉さんをやっているのだ。

たまには、甘える側になりたいのだろうか。

それはいい。

それはいいんだ。

でもね。

「…腕が、感覚を失い始めてるんだけど」

「うふふ〜」

普段はそれなりに加減してくれているんだなあと思わされる。

リミットの外れた彼女たちの腕組みは、それはそれは尋常じゃなくらい締まっている。
というかもはや極まっていると言うべきなのか。

「…たりとも…」

「ん？」

「ん？」

ダイヤちゃんが何かを呟いた。

なんだろうか。

助けてくれるんだろうか。

そう思ったのだが。

「…二人とも…ずるいですわあああ！」

そう叫んで、飛びついてきた。

ものすごい泣きながら。

「私だつて…私だつて甘えたりないのですわあああ！」

「ぐおおおお。い、痛い痛い」

ダイヤちゃんは泣き上戸のようだ。

泣いて飛びついてきた彼女を受け止めたのは良いが、案の定力加減が一切されていな
い。

「あー！ダイヤずるい！」

「のー！私もー！」

「ちよ、ちよつと待つてくれ二人とも。君ら三人に今抱きつかれたら、さすがに俺も限界
に…」

「いやー、ハルのエッチ」

「もー。ハルも男の子なんだから」

「いや、そつちじゃなくて。命の……ってー」
悲鳴が、木霊した。

「酔いどれ1年の場合」

「ハルさん、大丈夫？」

「大丈夫ずら〜？」

「ほら、痛いところ教えて。冷やしてあげるわ」

「ありがとう。とりあえずは大丈夫だよ」

悲鳴を聞いた美渡さんに救出され、今度は1年生の相手をする事になった。

1年生のみんなは、そこまで強い影響を受けてはいないようだ。

「あんまり我慢しちゃダメよ。あの子達、加減を知らないんだから」

「いや、まあ、あの子達の愛情表現って事でね」

「……ハルさん、ああいう事したら愛情を感じるはずら？」

「正に痛いぐらいの愛情をね」

「ふ〜ん……えいっ」

「むぐっ」

「なっ!」

「ピギヤっ!」

突然、花丸ちゃんに抱きとめられてしまった。

思わぬ行動に、何もできず彼女の胸に顔を埋める形となってしまう。

「ふふふ。ハルさん、愛情感じるずら?」

とても優しい声が聞こえる。

心を落ち着かせてくれるような、そんな声だ。

愛情…きつと、家族に向けるような愛情なのだろう。

暖かい気持ちを感じる。

「は、花丸ちゃん…いいな…今くらい、良いよね…」

「ん?どうしたんだい、ルビィちゃ…」

「え、えいつ!」

「おっと」

背中に、誰かの体重がかかる。

多分、ルビィちゃんだろうが。

「ま、前は花丸ちゃんが担当してるので…う、後ろからは私が愛情を注いであげますっ」

「なるほど…それは嬉しいね」

「そ、その…はい」

「ていうか、胸に顔うずめてどうやって声出してんのよ、あんた」

「企業秘密だよ」

花丸ちゃんの胸に顔を沈めつつ、背中にルビイちゃんがくつついていてという妙な絵面になってしまった。

普段なら、ダイヤちゃんあたりに破廉恥だと一蹴されそうな状態である。

「…ハル、思ったより落ち着いてるわね」

「こういう役得な幸せを経験しているときは、下手に動かない方が良さだろう。幸せを噛み締めてるんだよ」

「…役得って、なんの役よ」

「何って…兄みたいなものじゃないのかな」

「…まあ、あんたはそうよね」

「あれ？違った？」

「…普段なら、鈍感って言って終わらせるところだけどね…今日はヒントをあげるわ」

「ほう」

「その子たちがあんたに伝えている『愛情』っていうのは、家族愛とかじゃないわよ」

「そうなのかい」

「そうよ。…それと、ね」

「ふむ」

「私も、同じ気持ちを持つてるわ」

「へえ…」

「これ以上は、自分で考えてちょうだい」

愛情。

俺に対する、家族に向けるそれとはまた別のもの。

それは、一体どんな種類の感情なのか…。

…

だめだ。

まったくわからない。

そんな結論を出した瞬間。

「ずらー！」

「うゆー！」

「ていー！」

「痛ー！」

花丸ちゃんからチョップ。

ルビイちゃんから頭突き。

善子ちゃんからパンチをもらった。

「な、何をするんだい」

「「なんとなく」」

ひどいじゃないか。

「酔いどれ2年の場合」

「ハルさん、なんだか疲れてますね」

「どうしたの？さっきまでなんかイイコトしてたんでしょ？」

「言い方が若干いやらしいよ。そりゃ、心は癒されたがね」

残念ながら、頭と心は休んでいないのだ。

状況の著しい変化と、普段はあり得ない状態への対応。

心がどれだけ癒されようとも、物理的な疲れは取れないのだ。

∴自分で言ってて情けないな、これは。

ちなみに、今は2年生3人と共にいる。

1年生に理不尽なアタックを食らった少し後、2年生だけ何も無いのはずるいと言わ

れてここにやってきたのだった。

「あらあら…それは大変ですわね」

「…そうだね」

相変わらず敬語の千歌ちゃん。

違和感が半端じゃない。

「あつはつは…ハルくん、体力ないもんねー！」

そして曜ちゃんは何か事に笑っている。

しかも少々おっさんテイストだ。

笑い上戸みたいだ。

「……………」

そして梨子ちゃんはさつきからだんまりである。

ダイヤちゃんとはまた違い、なんというかずいぶん色っぽい目でこちらを見ている。

例えて言うなら、ダイヤちゃんがじーつとこつちを見ていたのに対し、梨子ちゃんは

ぼーつと見ている感じだ。

「…梨子ちゃん、どうかしたかな？」

「ふふふ…いえ、見とれているだけです」

「…そうかい」

「ふふふふ」

何か話しかけてもこんな感じである。

ある意味一番怖い。

「あらあら、梨子さん、ハルさんにお熱なんですね」

「あつはつは！若いねー」

「ふふふふ」

「……………」

シユールというか、もはやカオスな領域である。

特に何かされるわけでもなく、こちらから何かをする必要もない。

しかし、3人が3人ともこちらを見ている状態。

それが、普段通りなら問題はないのだが…

「あらあら〜」

「あつはつは」

「ふふふ」

この有様である。

「ねえ、ハルさん」

「な、なんだい？」

「一つ、お願いしてもいい?」

「お、俺にできる事ならね」

「ふふふ。ハルさんはじつとしてればいい事よ」

「ほう」

一体何をすればいいのか聞こうとしたら、梨子ちゃんがこちらに近づいて来る。

かなり近い距離まで顔が来たところで、指を自身の唇に当て、呟いた。

「キス…しましょ?」

「…はい?」

耳を疑った。

が、すぐに正気に戻った。

理由は、梨子ちゃんの行動が予想より遥かに早かったため。

何かを聞く前に、梨子ちゃんの唇がすぐ前まで迫ってきたのだ。

「ちよ、ちよつと待つんだ」

「あら?嫌だった?」

「そういう問題じゃなくてだね」

彼女のおでこを押さえ、なんとかそれを止める。

この子は、今正気ではない。

そんな状態の女の子の唇を奪うなど、俺には残念ながらできないのだ。

「おいおいハルくん！そこは男らしくガバーっと！」

「あらあら…妬げちゃいますねえ」

「いや、そんな事言つてないで止めてくれよ」

梨子ちゃんはキス魔になるらしい。

俺、酔つてキス魔になるのは都市伝説だと思つてたよ…。

もちろん、逃げ切ったさ。

※

帰り道。

その車内。

みんなすつかり疲れてしまったようで、完全に寝てしまっている。

なので、バス車内は非常に静かだ。

「ハルくん、キャンプどうだった？」

「そうですね…いろいろ衝撃的でした」

「そっかそっか」

「まあでも…楽しかったですね、とても」

「あはは。そっかそっか。それはよかったよ」

「最後のあれについては、必ず反省してくださいよ」

「機会があればねー」

「絶対に次の機会を作らないでください」

美渡さんとそんな会話をする。

反省の色は皆無のようだ。

「しかしあれだね…あの子たちなりに、結構アタックのある2日だったね」

「アタック…？ああ、たしかに結構攻撃されましたね」

主に3年生から。

「いや、物理的な話じゃないんだけど…。つーか気付いてよ。あれで誰の想いも感知できないうって、ハルくんの神経どうなってるのさ」

「なんのことです？」

「はああああ。こりゃあ、千歌たちの恋、始まるのすら難しいわねえ」

なんの話かまったくつかめない。

しかしかなり大きなため息をつかれた。

帰宅し、キャンプ場では捨てられなかったゴミを処理しているときの出来事。

『カランカラン』

「おっと」

手が滑って、ジュースの空き缶を落としてしまった。

それは、みんながバーベキューのときに飲んだあれの缶だった。

まったく、このお酒のせいで…

そこで、あることに気づく。

…あれ？

缶に書かれている成分表示の欄。

そこには、『清涼飲料水』と書かれていた。

え、アルコールは…

よく見るとそこに書かれていたのは。

『アルコールみたいな風味！』

……………あれ？

※

「いやー。お酒を飲んだふりをするドツキリなんて、よく考えたねー」

「ねー。しかも大成功だったね！」

「さすがのハルくんも、今回は焦ってたねー。いやー、愉快愉快」

「私は…さすがに恥ずかしかったですわ。いくらクジ引きで当たってしまったとはいえ、泣き上戸なんて…」

「でも、すごい演技だったぞら」

「わ、私は気付かれないようにするので精一杯でした」

「私も…というか、よりによって、き、キス魔…なんて」

「それ、一番の当たりだヨー？」

「いや、人によつては一番のハズレだから」

「で、でも、ネタばらしとかしなくていいんですか？」

「ネタばらしをしてみようと、次が出来なくなりますがわ」

「同じ状況にしても、警戒されちゃうもんねー」

「イエース！これは、ハルには内緒にしておきましょうー」

「ま、たまには自分の鈍感っぷりを認識するのもいいんじゃない？」

そんな会話が、帰った後でされていた事を、ハルは知る由もないのだった。

(んー…勢い余って強く抱きつきすぎちゃったけど、たまにはいいよね…。また機会ないかなあ)

(やっぱハルの腕は落ち着きまーす。絶対、ネクストチャンスを作るんだからー)

(泣き真似はさすがに恥ずかしかったです…まあ正面から抱きつけたのは良しとしましょう)

(は、ハルさんを抱きとめてしまった…思い出すだけで恥ずかしいすら…)

(うう…す、すりすりしてしまった…ま、まだ感触が…！)

(ハルの事だし、想いはちゃんと伝わってないわよね…いや、それはそれで複雑だけど…)

(私はただの笑い上戸だったしなあ。もっと可愛いのがやりたかったなー)

(お姉さんをやるって、結構難しかったな。ダイヤさん、普段からあれで話すのはすご

いや)

(き、き、キスを迫ってしまった…！こ、これからど、どんな顔して会えばいいの!?)
まして、彼女達の想いなどなおさらだ。

記憶喪失と布屋さん 1

私の名前は高海千歌。

浦の星女学院に務める高校二年生。

私には、ずっと昔から想いを寄せている人がいる。

この想いを、いつか伝えよう伝えようと思いつながら早数年。

遠回しに気持ちを伝えようとはしているけど、意中のその人は決して気持ちに気付かない。

そして私も、そこでもう一步踏み出せない。

気付けば、彼の周りには私より魅力的な女の子がたくさんいるようになっていた。

私が大好きな人。

だから、他の人が好きになっただけで疑問はない。

でも、やっぱりそれを黙って見てるのは苦しい。

もう、見てるだけじゃ嫌。

想いを。

私が数年に渡って持ち続けてきたこの想いを。

彼に、伝えよう。

鈍感なんて言葉では片付けられないほど人の気持ちに疎い彼だけど。

真剣な告白を誤魔化すような人じゃない。

心に決めてやってきたこの淡島神社。

彼：ハルくんを呼んだ時間まで、あと10分。

心臓が高鳴って、呼吸も落ち着かない。

初めてのライブより緊張してる気がする。

それでも、伝える。

もう逃げない。

スマホを見る。

時間まで、あと5分。

深呼吸をしたその時だった。

『ブーン、ブーン』

「うわあー！」

思わずスマホを落としそうになった。

着信が入ったのである。

電話相手は…志満姉。

「もう…なにさー、このタイミングで」

そう言いながら受信ボタンを押す。

「千歌ちゃん!？」

直後に志満姉のそんな言葉が入ってきた。

珍しく慌てている様子。

「はーい、私今忙しいんだけど…」

「あのね、落ち着いて聞いてほしいんだけど。」

「何?どうかしたの?」

「ハルくんがね…」

「…ハルくん?」

思いも寄らない名前が出てきた。

だって、ハルくんはこれから私と会うんだよ?

今ここで、ハルくんの話題なんて…

少しだけ嫌な予感がし始める。

無言になった私に対して、志満姉はこう続けた。

「ハルくんが、交通事故に巻き込まれたって…」

「……………え？」

神様は。

いや、神様までもが。

私の想いを伝える事を邪魔したがるらしい。

※

「……………」

視界に広がっているのは、白い天井。

俺がいるのは、多分どこかのベッド。

そう。

どこか。

ここがどこだか、俺には分からない。

場所だけじゃない。

状況も、時間も。

自分自身でさえも。

何一つとして分からない。

ひとまずは上体を起こし、周りを見る。

ここは…病院なんだろうか。

よく見ると俺の腕には点滴が刺さっている。

何も思い出せないが、とりあえず自分の身に何かあったのかと予想する。

もちろんその答えは出ないけど。

「…ナースコール、すればいいかな」

枕元にあったボタンを押し、看護婦さんと呼ぶ。

お医者さんと看護婦さんがやってきたのはその一分後くらい。

そして、診断を言い渡されたのは、それからさらに検査を経て数時間後だった。

「…記憶喪失…ですか？」

幾つかの検査の後、その結果をお医者さんから言い渡された。

この話を横で一緒に聞いているのは、高海志満さん。

どうやら普段僕がお世話になっている人のようで、今日も保護者代わりとして来てくれているらしい。

「はい。それも、どうやら局所的なものようです」

「局所的……?」

「そうです。ハルさん、このボールペンの芯を出してもらえますか」

「え? あ、はい」

渡されたボールペン。

ノック式のペンで、当たり前だけど芯を出すことができる。

「はい。じゃあ次に、信号で止まれを示す色は何色ですか?」

「赤……ですよね」

「そうです。というように、日常生活に関する知識に関してはほぼ問題ありません。ただ、『人物』に関する記憶が抜け落ちてしまっているようです」

「それが、局所的な記憶喪失ってことですか?」

「そういうことです」

そういうことらしい。

確かに、さつき目が覚めた時もナースコールのことは普通に知っていたし、生活自体はできそうだ。

ただ、自分のことを含めて人の名前とか顔が全然思い出せなくなっている。

俺が何者で、普段一緒にいるような人まで思い出すことができないのだ。

後は地名や思い出。

人物つながりのためか、家や生活圏、また旅行で言ったような場所まで思い出せなくなってしまうている。

これはなんというか…

不思議な感じである。

「えつと…これは元に戻るんでしょうか…?」

「はい。あくまで一時的なものでしょうからね。事故の際に脳が強く揺すられて、言ってみればど忘れしている状態です。数日もすれば思い出すことができると思いますよ」
「そうですか。それはよかったです」

横で志満さんがとても安心した表情を見せてくれる。

こんなに心配してもらえるととは。

「これに関しては、きっかけがあればより思い出しやすくなります。ですので、今日からは家の方で生活をすることにしましょう。幸い、体には異常もありませんでしたし」

そんなわけで、志満さんの車で俺の家に送ってもらおうことになった。

送ってもらおう途中、自分の身に何があったかをざっくり教えてもらい、おおよその状

況を理解することはできた。

自分はどこかに行くために外を歩いていた。

その際交通事故に巻き込まれ、丸一日気を失っていたらしい。

とはいえ目立った外傷はなく、気絶してた理由は脳震盪が原因だそうだ。

記憶喪失もその延長で、お医者さんの言っていた通り生活していれば自然に思い出すことができそうとのこと。

「はい、着いたよ。ここがハルくんのお家兼お店だよ」

「これが…」

古びた…いや、歴史を感じさせるその建物。

お店の入り口に掲げてある、『淡布屋』の看板。

中に入ると、並べてある布や裁縫道具、その他雑用品の数々。

そして、奥に見える少し大きな木製の机と椅子。

「そこに、いつもハルくんがいたんだよ」

「ここに…ですか」

「うん」

何かに導かれるように椅子に座る。

記憶を思い出すことは、さすがにない。

でも、とても落ち着く。

頭が覚えていなくても、ここが僕の居場所ということ体を覚えているようだ。

「ハルくん、普段はそこで人と話してたり読書したり、外の女子高生を眺めたりしてたんだよ」

「……………え」

いやいや、ちょっと待つてくださいいよ。

「……………ここ、仕事場…ですよね？」

「そうだねー。でも、仕事のためにそこに座ってるって感じではなかったかなあ」

「……………女子高生を…見てた？」

「うん。それはそれは楽しそうにね」

「……………俺、なんのためにここにいたんですか？」

記憶を取り戻すことに若干の抵抗が湧いてきた。

いや、普段はバリバリ仕事をして、ほんの時々癒しを求めていたんだろう。

そういうことにしようじゃないか。

…それでも女子高生眺めるのはどうなんだろう…。

そんな疑問が頭をよぎった時だ。

唐突に店の扉が開かれた。

『バツタアアアン！ガランガラン！』

扉の所にあるベルが、これでもかというくらい鳴り響く。

：お、この景色はなんだか見覚えがある気がする。

扉を開けたのは、橙色の髪をした女の子。

髪を片側だけ三つ編みで留めていて、なんとなく志満さんと近い雰囲気を感じさせる。

肩で息をしながらやってきたその子。

どうやら走ってきたらしく、汗もかいているようだ。

「志満姉！ハルくんが帰って来たって本当!!?…って」

声をあげていたその女の子と目が合う。

どうやら僕の知り合いらしい。

「ハル…くん？」

「えつと…ただいま…でいいのかな？」

「ハ…ハルくううううん！」

「ぐええ！」

思い切りこちらに突っ込んできた。

なんでだろう。

こんな光景もデジャヴを感じる。

…記憶を失う前の僕、どんな生活をしてたんだろうか…

何はともあれ、まずはこの子に事情を説明するでしょう。

心配してくれてみたいだし、きつとそれなりに仲のよかった子のはずだ。

「えええええ!!記憶喪失ううう!!」

目の前の少女、高海千歌ちゃんが叫ぶ。

本人の要望で、彼女のごときは千歌ちゃんと呼ぶ事になった。

あと敬語も禁止された。

「じゃ、じゃあ、私のごとも覚えてないの…?」

「えつと…その、申し訳ないけど…」

「あ…そつかあ…そつかあ…」

明らかにテンションが下がっていく千歌ちゃん。

忘れられたことにだいぶショックを受けてしまっているようだ。

いくら記憶を失っているからって、女の子を悲しませるなんて男のやることじゃない。

「ここは何でもいいから声をかけなくては。」

「千歌ちゃん!」

「ふえ!」

千歌ちゃんの手をとり、彼女の目を見て言葉を繋ぐ。

「今は君の記憶はないけど、必ず取り戻すよ。だからそれまで待つてくれるかい」
できる限り真面目な顔で彼女に言う。

言つて目をじつと見続けていたら、顔を赤くし始めてそっぽを向いてしまった。

「…そ、その、とりあえず手、放してもらつていい?」

「あ、ごめんよ」

「…女誑しつぷりが普段より上がつてる気がするよ…」

「なんの事かはあんまり分からないけど、さつきよりは元気が出たようでなによりである。」

「あ、せっかくハルくん戻ってきたんだし、みんなにも教えてあげなきゃ!」

「みんな?」

「うん! A q o u r s のみんな!」

「アクア…?」

「そうだよ! えつと…細かい説明は後でするけど、ハルくんが仲良い人たちだよ!」

「なるほど。確かに記憶を取り戻すきっかけになるかもね」

「うん！ここだと狭いから…部室に行こう！」

そんな会話の末、Aqoursというグループの部室に向かう事となった。

その際、志満さんは美渡さんという方にも連絡をしようと行ってお家の方へ帰って行つたようだ。

部室で待つ事数分。

その間に、Aqoursというグループについてお話を聞いた。

Aqoursというのは、千歌ちゃんの所属するスクールアイドルグループであること。

そのメンバーたちと俺は交流があるらしく、仲も良好であるという事。

「…まあ、良好って程度にしか考えてないのはハルくんだけなんだけどね」
「？」

その一言はどういう意味かは分からなかった。

そんな時だった。

「千歌ちゃん！ハルくんが戻ってきたって本当!?…って」

「えっと…こんには」

一番最初にやってきた女の子。

肩ぐらいの長さの髪を揺らしてその子はやってきた。

この髪の色は…ミルクティーングレイージュユって言うんだったかな。

いや、ミルキーゴールド？

「ハ、ハルくん…?」

「そうですね。すいませんが、まずは自己紹介から…」

そこまで言った時だ。

前触れもなくその女の子がこちらに飛び込んできた。

「ハルくうーん!」

だが、今回は千歌ちゃんの時とは違う。

念のためを思つて身構えていたのだ。

今の俺なら、女の子の一人や二人、受け止めてみせるさ。

「よかったあああああああ!」

「ぐえええ」

やっぱ無理でした。

想定を遥かに上回る力で飛び込んできた。

その後、続々とAqoursのメンバーたちがやってくる。

そしてその度に彼女たちのありがたい突撃をこの身で受け止めるのであった。

「『『『『『記憶喪失ー!?!』『』『』『』』』』』」

本日何度目かの反応。

まあ珍しい例だよな。

「…でもいつもと様子が変わりませんわ」

「本当に記憶ないの？」

「残念ながらね」

「記憶がないっていう演技…はハルには無理ね」

「そんな大きな嘘、ハルにはつけないよねー」

「信用があるみたいで何よりだよ」

「いや、そういう意味じゃないわよ」

普段の俺は嘘を付かないらしい。

いい事じゃないか。

全員の名前を覚えるため、自己紹介をしてもらった。

思い出せたという事はないが、それぞれの名前がすんなり入ってくる。

俺にとって思い入れが深い名前なんだと感じた。

ちなみにこの子たちにも敬語は禁止された。

しかし揃いも揃って美人揃い。

またとんでもない交友関係だと自分に感心してしまう。

「申し訳ないんだけどね、記憶を取り戻すのに協力してくれると助かるよ」

そう言っつて頭を下げる。

それを見て、彼女たちはなんだか複雑そうな顔をしている。

「それはもちろん協力するけど…」

「記憶喪失になった人って、普通こんな感じなの？」

「もつと性格が変わるイメージだったはずら」

「そうなのかい？というか、俺の性格は変わってないんだね。自分では分からないよ」

「うん。まんま普通のハル」

「へえ。性格が体に染み付いてるんだね」

「…鈍感まで染み付いてなきやいいんだけど」

「急に敏感になられてもこまるけどねー」

「なんの話かな？」

「気にしなくていいですわ」

「それよりこれからどうするか考えましょう」

「普段はこつちが甘えちゃうし、今回は私たちに頼ってね！」
「ありがとう。助かるよ」

彼女たちを見渡し、もう一度頭を下げる。

見渡して表情を確認すると、全員から優しい雰囲気を感じる。

記憶を失う前の自分は、この子たちとどんな友好関係を築いていたんだろうか。
ふと、そんなことを思ったのだった。

『ザザーン ザザーン』

防波堤に座り、水平線に沈んでいく太陽を眺める。

A q o u r s の子達との話が終わり、その帰り道にこうして海にきたのである。

明日から一日ずつ、彼女たちとお出かけすることになった。

各学年の3人組と一緒に街を見て周ることで、記憶を取り戻すきっかけにしようとのこと。

右も左も分からない自分にとって、これはとてもありがたい。

でも、先ほどから感じていた疑問がますます強くなってきた。

彼女たちと俺は、どんな関係なのか。

ただの友人として、あんなに好意的にしてくれるものなのか。

それとも…

「やあやあ、ハルくん」

考えている途中、後ろからそんな声がかかった。

振り向くと、そこには一人の女性がいた。

女の子ではなく、女性。

その見た目は、志満さんよりはつきりと千歌ちゃんに似ている事を思わせる。

「えっと…こんにちは」

「記憶喪失なんだって？あ、私は高海美渡だよ。千歌のお姉ちゃんね」

「あ、やつぱりそうなんですね」

ニカつとした笑み。

しかし、なぜだかこの人には勝てないと、記憶のどこからか聞こえてくる。

「調子はどう？」

「体調自体は良好です。精神的にも不調は特にないですね」

「そっかそっか。それはよかったよ。記憶は戻りそう？」

「それはなんとも言えないですが…まあ戻したいとは思いますが」

「そうだねー。千歌たちも、やっぱ思い出して欲しいだろうしねえ」

「ああ、その事なんですけど、一つ聞きたい事があって」

「聞きたい事？」

「そうです。…俺とAqoursの子達って言うのは、どういう関係なんですか？」

「ほうほう。というのはい？」

「うーん…なんというか、優しすぎるというか…自分の自意識過剰出なければ、あの子達の好意は友情以上の物を感じます。あの中の誰かと、自分は何か特別な関係なのかな…と」

それを聞いた美渡さんは、一瞬ポカンとしているようだった。

しかし、すぐにその表情は笑いに変わっていき…

「とく…べつ…く、くくく、あははははははははは」

爆笑し始めた。

「えつと…何かおかしなこと言いました？というか、やっぱり間違っていましたか？」

「いやいや、むしろ逆。ハルくん、記憶ない方が敏感なんだねえ。く、くくく」

「敏感？」

そういえばAqoursのみんなも似たような事を言っていたな。

記憶喪失と布屋さん2（更新停止中）

昼前の駅。

俺は適当に日陰に入りつつ善子ちゃん、花丸ちゃん、ルビイちゃんが来るのを待っていた。

平日とはいえ夏休み。

思いの外人が多く、彼女たちを見つけるのは少し苦労するかなと思っていたのだが。

「…やっぱり、かわいい女の子は目をひくね」

遠目からでも、彼女たちがこちらへ向かってきているのが分かった。

向こうもこちらに気づいたようで、早足にこっちへやってくる。

「こんにちはハルさん。待たせちゃいましたか？」

「こんにちは。いや、待ってないよ」

「いつからいたの？」

「ほんの5分くらい前に来たばっかさ」

「おー。会話が恋人同士みたいすら」

「まあその…恋人…だしね」

「あ、そ、そうでしたね…えへへ」

「まあその、美渡さんから事情は聞いたよ。悪かったね、そんな大事な事まで忘れてて」

「え、い、いや、大丈夫ずら。うん。丸も昨日知ったし」

「え？」

「あ、間違えた。ハルさんの記憶喪失を、昨日知ったずら」

「まあ、なつたの昨日だしね」

「ずーらーまーるうー？ちよつと黙って」

「ご、ごめんずら」

善子ちゃんが俺と花丸ちゃんを遠ざけるように間に入ってくる。

ここちらからは善子ちゃん表情は見えないが、花丸ちゃんの顔を見るになんか怖い顔をしてるらしい。

「ちよつと。あんたいきなりバラす気？」

「そ、その、丸、こういうの慣れてなく…」

「私だつて慣れてないわよっ」

「それに、ハルさん見てたら罪悪感も…」

「それもわかるけど…仕方ないでしょ。みんなで話し合っただから」

二人でヒソヒソと話し始めた。

内容は聞こえないが、ちよつとだけ真面目な話らしい。

※

「私たち全員が彼女おおおおおおお!?」

「ずらあああああああ!」

「びぎやあああああ!」

善子ちゃん、花丸ちゃん、ルビィちゃんがそんな大声を上げる。

今の時間は午前9時。

ハルくんの記憶を取り戻そうツアーの時間まであと2時間と迫っている今。

私のお姉ちゃん…美渡姉が昨日の夜ハルくんに放ったとんでもない一言について、みんなに伝えるためにこの時間に集まってもらったのだ。

美渡姉が放った一言。

『ハルくん、A q o u r s のみんなとお付き合ってるから』

そんな言葉をハルくんに伝えたことを、今度はみんなに伝えたのが今さつき。

そしてその反応が、さつきの1年生。

「なんというか…さすが美渡さんっていうべきなのかなあ」

「この事態を逆手にとるとは…」

「たくましいですねー」

3年生のみんなはそんな反応。

1年生ほど動揺はしてないみたい。

「か、か、かの…!」

「あわわわわわ」

梨子ちゃんと曜ちゃんも結構パニックになってる。

無理もないよね…。

「ど、どういふことなのか詳しく話さないよ!」

「そうですね。とりあえず状況を整理したいですわ」

「ああうん、えつとね…」

『あ、美渡姉おかえり。…どうしたの、そんなニヤニヤして』

『ちよつと面白い事があってね。いや、これから面白くなるのかな?』

『何企んでるの?』

『そんな警戒しないでよ。隠すつもりもないし教えてあげるから』

『なんか逆に不安になるね』

『信用ないなあ。まあいいや。実はね』

『ハルくんが、Aqoursの子達全員と付き合ってることにしといたよ』

『……………へ？』

『やったね千歌。念願のハルくんの彼女だよ！』

『え、いやいやいやいや、ちよつと！』

『じゃ、そういう事だから頑張つてねー』

『ちよつ！美渡ねええええええええええ』

「つて事があつてね」

「そ、それだけですか？」

「テキトーずら！」

「もうちよつとなんか無かったのー？」

「うーん…『Aqoursのメンバー全員がハルくと付き合ってる』つていう情報以外

は、特に話してないみたい」

「とんでもない大嘘だけどね」

「誰も告白すらしてないしね」

「あー…あはは」

そこで思い出した。

ハルくんが事故に合う直前、そういえば私は告白しようとしてたんだっけ…

また次回かなあ…

そんな事を考えていた時だった。

「ちなみにハルくんはそのことをバツチリ信じてるってさ」

「なんで疑わないのよ…」

「まあ、うん。なんでだろうね」

「普通は疑うと思うんだけどね」

「ハル、普通じゃないからね」

果南ちゃん言葉に反論できる人は特にいなかった。

普通かって言われると、うーんって感じだし。

「ねえ、私たちってこれからハルに会いに行くのよね？」

「そうだね」

「ま、まさか、か、彼女として会いに行くんですか…?」

「ずら!?!」

「そりゃあ…ハルくんは信じちゃってみたいだし」

「ど、どうすんのよ!」

「どうするって…デートすること自体は予定通りでシヨ?」

「そ、そうだけどそうじゃないですつ」

「まあ…ルビイちゃんたちの言いたいこともわかるけどね」

いきなりこの状況に放り込まれても、私ならいつも通りに振る舞える自信はない。

「わ、私もいつも通りやれる自信がないんだけど…」

「私も、多分相当意識しちゃうと思うなー…なんて」

梨子ちゃんと曜ちゃんが言う。

「確かに気恥ずかしい部分もあるけど…これもせっかくの機会だし、楽しんだ方が得じゃない?」

「同感ですわ」

逆に、三年生はこの事態にも前向きみたい。

さすがだと思ふ。

「それに、みんな、これは一つのチャンスだとも思うヨー」

「チャンス？」

「イエース！」

鞠莉ちゃんがみんなを見渡す。

誰もそれを止めないのを確認して、話を始める。

「記憶を失くす前のハルは、そもそも私たちをあまり恋愛感情で見えてないです」

「あーうん、そうだね」

「しかーし、私たちを女の子として意識していないわけではないです」

「そんなようなこと言ってたわね」

「女の子として意識してるのに、付き合うのは無理ってこと？」

「そうなんです！そしてその理由は…私たちと付き合うことに魅力を感じていないから
だと思っんでーす!!」

「そ、そうなんですか!？」

「え、いや、本当に!？」

「…いや、単純に私たちが女子高生だから、手を出そうと思えないんじゃない？」

「シット!」

私の一言は鞠莉ちゃんのそんな一言でシャットアウトされてしまった。

「だから今回の件で、私たちと付き合うことが魅力的なことだって思わせるんでーす!」

「おお」

「なるほどー」

「そうすれば、ハルさんも私たちとお付き合いを考えるかもしれないぞら！」

「え、いやいや、そんな上手くないかないでしょ」

「私もそう思う…」

「ねえ、リリーもそう思うでしょ？」

「…ハルさんが、私を…うへへ」

「あ、これポンコツモードだわ」

各々が色んな思惑を・持っている。

とりあえず、この鞠莉ちゃんの考えについては。

賛成か納得派が、果南ちゃん、ダイヤさん、梨子ちゃん、花丸ちゃんにルビィちゃん。

納得いかない派が、私、曜ちゃん、善子ちゃんの三人。

まあ梨子ちゃんが賛成派なのかはわかりにくいけど。

でも、納得いつてないようには見えない。

「とにかく、今回の記憶取り戻そうツアーはそういう意味でも大事なものになりますわ」

「気合入れていこうねー」

「」「」「おおー！」「」

「…どうしようね」

「はあ…まあ、後ろ向きよりはいいんじゃない」

「そうだねー。ハルくんと遊ぶのは私も楽しみだし」

「それもそっか。うん、お互い、暴走しないようにだけ見張つてこうね」

「一番暴走しそうな三年生には、私たちと同じ考えの人はいないけどね」

「…まあ、ハルくん丈夫だし」

「声、震えてるわよ」

※

「あくまで付き合つてることを前提に話を進めようって言ったのはあんたちなんだから、責任持つてばれないようにしなさいよ！」

「そ、そうずらね！がんばるよ！」

ヒソヒソ話しているかと思えば、花丸ちゃんが拳をぐつとして気合を入れ直していた。

「どうしたんだろうか？」

「あの、ハルさん」

「ん？どうしたんだいルビィちゃん」

「えっと、今日の予定についてなんですけど」

「ああ、どこ行くとかは任せるよ。というか、あんまり場所の記憶もなくてね。案内とかしてくれると嬉しいんだ」

「あ、はい！とりあえず最初は、街をうろつこうかなって思ってます。その後遅めのお昼を食べて、まだどこかにつつまもりです」

「ん。それで大丈夫だよ」

「ちゃんと考えてきてくれたらしい。」

いくらお付き合いしてるからといって、昨日の今日でここまですぐ行動してくれるとは。

感謝に尽きるね。

「さて、それじゃあ早速行こうか。エスコート、よろしく頼むよ」

「あ、は、はい！」

「だからってそんなに気合を入れなくても……って、どうかしたのかい？」

善子ちゃんたちにも声をかけ、歩き出そうとしたとき、ルビィちゃんがこちらをじつと見ていることに気づいた。

具体的には、俺というよりは俺の手。

うーん…これは…。

「…手、繋ぐ？」

「えっあ、いや、そうじゃなくてっ」

「あ、違ったのかい。それは申し訳ない」

「あ、そ、それも違ってっえ、えっと…その、お、お願い…します」
「ん」

ルビイちゃんの小さい手を握る。

手汗大丈夫かな。

そんなことを思っていた時だった。

「ああー！ハルさんとルビイちゃんが手を繋いでるぞらー！」

「なっルビイ、ずる…じゃなかった。えっと…は、ハレンチよ！」

「善子ちゃんがダイヤさんみたいなこと言い始めたぞら」

「え、えっと、一応はこ、こ、恋人同士ですから。だ、大丈夫ですっ」

「それなら丸も恋人だから手を繋いだっていいぞら。ハルさん、こっちの手を借りるぞらよ」

「ああ、もちろんそれは構わないよ」

「なあああ！」

右手にルビイちゃん。

左手に花丸ちゃん。

まさに両手に花である。

とても嬉しいのだけど、気恥ずかしさもすごい。

まさかと思うけど、記憶をなくす前の俺はいつもこんなことをしてたのだろうか。

そう思いつつも左右を見渡したところ。

「ふふふ」

「ずら」

幸せそうな顔が見えた。

うーん……まあそれならいいか。

そんな風に思った時だった。

「ちよ、ちよつとハル！」

善子ちゃんからそんな声がかかった。

「わ、私だってその……こ、こ、恋人なのよ！それなのにその……扱いつてのがあるでしょ！」

「なるほど。確かにそうだね」

とはいえ、両手は今のところこふさがっているし……

こういう時はいつでもどうしてたんだろうか。

そんなようなことを善子ちゃんに言ったところ。

「わ、私はいつも、こゝ、ここにいたわよ」

「…まじでか」

善子ちゃんがついた配置。

それは俺の上着の中。

夏だし、俺が着てきた上着は非常に薄い素材のジャケット。

その内側に善子ちゃんが入ってきたのだ。

俺の前に頭だけ出した状態。

イメージとしてはカンガルーの親子だろうか。

当然だが足は地面についていて自分で歩いているので、体重的な負荷は俺にはかかっていない。

かかっていないが…

「…あつつ」

「…そりやそうだろう。今夏だよ？」

そう。

暑い。

可愛い女の子とほぼ密着ということ、ドキドキもする。

けど、それによって互いの体温が上がり、状況がより悪くなっている。というか今の俺は周りからどう見られているんだ？

ぱっと見カンガルー状態の男が両手で女の子と手をつないでいる状況。正直近寄りたくない存在なのは間違いないだろう。

「…よし、それじゃあ街の散歩、行くわよ」

「丸はいいけど…大丈夫ずら？」

「善子ちゃんが大丈夫なら俺は大丈夫だよ」

「わ、私だつてもちろん大丈夫よ。こ、ここが私の定位置なんだから」

「初めて聞いたずら」

「でもその…熱中症とか…」

「俺も男だからね。恋人の期待を裏切ったりはしないさ」

などと格好つける俺。

九股なんてしている自分なのだ。

これくらい、耐えてみせるさ…！

15分後。

そこには暑さに耐えられなくなって木陰で休む俺と善子ちゃんの姿がそこにあった。

アニメ本編（2期）

2ndシリーズの幕開けと布屋さん

『ザッザッザ』

早朝。

いつものように店前を竹箒で掃きながら、俺はある方向を眺める。

眺める先にあるのは、店にとって重要なお客様である浦の星女学院。

つい昨日まで夏休みだったこの学校は、本日よりめでたく二学期の幕開けを迎えた。

高校生諸君にとっては、めでたくないかもしれないけどね。

俺にとっては、もうこれでもかかってくらいに待った日である。

校舎に入っていく女子高生たち。

眠い目をこすりながら歩く子や友人と話しながら歩く子。

いずれも、昨日までは見ることができなかつた景色だ。

「何を満足した表情してるんですの」

「どうせハルのことだし、女子高生見てニヤニヤしてたんでしょ？」

「2ndシーズンになっても、ハルは相変わらずです」

ニヤニヤ、もとい、ニコニコしながら校舎を眺めていた俺の横から、そんな声が聞こえてきた。

ダイヤちゃん、果南ちゃん、マリーちゃんの三人組。

Aquoursの三年生メンバーたちだ。

「おはよう三人とも。今日も早いね」

「おはようございます。今日は始業式の準備もありますからね」

「準備って、何かやることがあるのかい」

「椅子とか出すわけじゃないから、ほとんどないけど…一番の仕事はあれかな、ほら、みんなの前で話すやつ」

「理事長挨拶とかそういうのかな？」

「イエース！今日は私が、理事長としてお話ししますーす！」

「一応、私も会長として挨拶はしますけどね」

「なるほどね。それはぜひがんばってくれたまえ」

まあでも、その手の話ってなんだかんだ生徒はあまり聞いてないんだよね。

聞いてても一週間もしたら忘れるって感じだったし。

「そんなことありませんわ。私はちゃんと全て聞き入れています」

「ダイヤは真面目だなあ。あ、私は全然聞いてないよ！」

「俺と同じだね」

「ああでも、今日は鞠莉が話すし、ちよつとくらい聞いてもいいかも」

「全部聞いてください。あと、鞠莉さんだけじゃなく会長であるわ、た、し、の、は、な、し、もー」

果南ちゃんに顔を近づけて迫力たつぷりに言うダイヤちゃん。

「りよ、りよーかい…」

さすがの果南ちゃんもその迫力には太刀打ちできないようだ。

果南ちゃんが目線で、助けてくれとこっちに訴えかけているので、テキストに話題を変えらることとしよう。

「そういえば、そういうのって原稿は用意しておくものなのかい？」

「普通はそうですね。もちろん私も用意してありますわ」

「もちろん私はそんなものナツシング！フイーリングとその場の雰囲気でお話しでーす！」

「さすがと言えはさすがだね」

「何感心してるんですの！鞠莉さんも、用意するようになってあれほど言ったではありませんかー！」

「んー…。忘れてた」

「忘れてたではありませんー！」

今度は怒りの矛先がマリーちゃんに向いた。

まあでもあしらってるっぼいし、これはこれでいつか。

…ダイヤちゃんにはちよつと申し訳なかったけどね。

三年生組とバイバイしてから数十分。

生徒のほとんどは既に学校に入っており、もう歩いている子はいないような時間。

店の中の掃除をやっていた時だ。

窓の向こうに、知っている人影を発見。

ていうかあれ、どう見ても千歌ちゃんだね。

…遅刻かな、あれは。

※

「練習場所？」

「イエース。秋からはバスの終電時間がチェンジしちゃうので、長く練習できないん

でーす」

「それで、時間いっぱいまで練習できる場所を探している、と」

「オフコース」

夕方。

A q o u r s の練習を終えたマリーちゃんがうちにやって来ている。

「んー…協力したいのは山々なんだけど、あまり力になれそうにないね」

「ですよーねー」

「その分朝早く練習するとかはどうだい？」

「うん、その案も出たんですけどねー。どれだけ早くても、あと1時間多く練習するのが

限界でーす…」

「確かにね」

「駅の方からのバスならあるから、そっちの方で練習をしようっていうのが、今のところ

は最有力かなー」

「なるほど。俺もそれに賛成かな」

とはいえ、これから日が沈むのはどんどん早くなつていくのだ。

その辺踏まえて、安全には配慮して欲しいとも思う。

「何かあったら連絡しておくれ。その時は力になるからね」

「……………」

俺の一言に、マリーちゃんは言葉を返さなかった。

無視、というよりはなんだか他のことを考えている様子だ。

「…マリーちゃん」

「…あ、うん、なんだった？」

「ぼーつとしてたみたいだけど、大丈夫かい？」

「あ、うん。あはは。ソーリーソーリー」

笑顔でそう返すマリーちゃん。

それがいつもの笑顔じゃないことは、鈍感な俺でもよくわかる。

「何があつたんだい。話せるなら話してくれ」

「…何かあつたのかい？じやないのね」

「そう聞いて欲しいなら、もう少しうまく隠してくれよ」

「ううん。…ハルには、話さないといけないと思うから」

「話してくれるなら聞くけど…あまりいい話ではなさそうだね。お茶を汲んでくるから、気持ちの整理でもして待っててくれ」

「ん。…ありがとね」

冷蔵庫からお茶を取り出し、湯飲みに注ぐ。

季節を考えると、そろそろ暖かいお茶を用意する必要もあるかも。

そんなことを考えつつ、注いだお茶を持ってマリーちゃんのもの元へ戻る。

一口だけ口をつけた後、マリーちゃんが話し始めた。

「学校説明会の話って聞いてる？」

「ああ、そういえばダイヤちゃんが言っていたよ。気合も入ってるみたいだった」

確か9月の終わりだか10月の頭頃だったはず。

千歌ちゃんも、その参加希望者が増えてきたって喜んでた記憶がある。

「うん。その学校説明会。…それがね…中止に、なるの」

「……………」

なんとなく。

なんとなく、彼女の雰囲気からそれは察していた。

学校説明会の話題、それでいて話しづらそうなマリーちゃんを見ていれば、予想はで

きない話じゃない。

でも、やっぱり、それははっきり口にされてしまうと、心に来るものがある。

「…延期とかではなく、はっきりと中止、なんだね」

「…うん」

「…そうかい」

学校説明会の中止。

はつきりとは公言されていないものの、それは事実上の廃校決定だ。

これまで、廃校阻止を目標としてやってきたマリーちゃん、そしてAqoursにとつてあまりに重すぎる決定。

「それを、みんなには話してあるのかい？」

「…まだ誰にも話してないよ。ハルが初めて」

「そうかい。光栄なこと…とは、ちよつと言ひ辛いね」

Aqoursのみんなに、話さないわけにもいかないだろう。

とはいえ、これを彼女の口から言わせるのは、どうにも気がひける。

「俺の方からみんなに話そうか？」

「え？」

「君からだと言いくいだらう。彼女たちがマリーちゃんを責めることはないだろうけどね」

「…ううん。大丈夫。理事長なんだから、これくらいはしなないとね」

「君がそう言うなら無理には言わないけど…あまり一人で抱え込まないようにするんだよ」

「ん。ありがとね、ハル」

また、作った笑顔でそう言ってくれるマリーちゃん。

どうにもならない現実をぶつけられて、それでも受け入れようとするその姿。

…放っておけというのは、無理な話だ。

「みんなに話す時、俺も呼んでくれるかい？」

「え？ いいけど、どうして？」

「一応、みんなの反応を見ておきたいんだ」

「…あんまり、楽しいものじゃないと思うよ」

「それも含めて見ておきたいんだよ。それに…」

「それに？」

椅子に座るマリーちゃんの側に立つ。

そして、彼女の右肩に手を乗つけて一言だけ、告げておく。

「君が心配だからね」

「…ふふふ。こういう時は、頭にポンって手を置くものじゃないの？」

「髪を乱すのも悪いと思ってね。それにほら、さすがにそこまで度胸はなくて」

「千歌つちたちにはやってたくせに。相変わらず、肝心な時にカッコつかないでーす」

「返す言葉もないよ」

結局その後、マリーちゃんに手を引っ張られて、彼女の頭を撫でることになった。

頭ポンポンは、こういう時にやるにはまだ少し難易度が高いかなあ。

※

「やつほー、ハル」

「こんにちは、ハルさん」

「おや、こんにちは、二人とも」

翌々日、うちに果南ちゃんとダイヤちゃんがやってきた。

時刻は夕刻。

普段の練習終了の時間に比べて、まだ早いくらいの時間。

今日は練習はお休みなんだろうか。

「お茶でも飲んで行くかい？」

「いえ。今日はこの後練習がありますので」

「おっと、そうなのかい。新しい練習場所、見つかったんだね」

「そうそう。なんかね、曜のお父さんが見つけてくれたんだってさ」

「なるほどね。それはよかったよ」

「というか、なぜハルさんがそのことを知っているのです？」

「この前マリーちゃんが教えてくれたんだよ」

「ああ、その時に学校説明会のことでも聞いたんだ」

「そう言う反応ってことは、君達も聞いたんだね」

「鞠莉さんは隠そうとしていましたけどね。あまり、隠し事は上手くないようですわ」

「君も大概だと思っただけだね」

「……ほん。まあそれはともかく、鞠莉さんからは、ハルさんには既に話してあると伺っていますわ」

「で、今日みんなにも話すから、ハルも呼んでって頼まれたんだー」

「なるほど。呼びに来てくれたんだね。マリーちゃんは？」

「ああ、えつと……」

「……もう一度、お父様と電話をしようと書いていましたわ」

「……了解だよ。ちよつとだけ待つことにしようか」

電話の内容は、おそらく抗議だろう。

学校説明会の中止をなしにしてももらえないかの抗議。

今この場で、俺は何もできない。

だからせめて。

「あの子を笑顔で迎える準備だけしておこうか」

2ndシリーズのスタートと布屋さん

「うわー！ひろーい！」

「すごーい！」

「ここ、カーテン開けると鏡もあります！」

「いざー！鏡面世界へ！」

みんなの声が、スタジオに木霊する。

とてつもなく広い場所ではないものの、でっかい鏡に、防音設備の整った壁。練習するにはもってこいの空間だ。

なんでも、曜ちゃんのお父さんの友人が借りている場所らしい。

新しい練習場所へ行くからと呼ばれたついさつき。

電話を終えたマリーちゃんと合流し、この場所にやってきたのだ。

「これは…立派なスタジオだね」

「なんでさも当然のようにハルさんがいるずら」

「君たちの新しい門出と聞いてね。居ても立ってもいられなかったんだ」

「新しい門出って…練習場所変えただけよ？」

「重要なことじゃないか」

「重要かもしれないけど、別に門出つていうほどじゃ…いや、ハルくんこれ以上言っても意味ないか」

「お、よくわかつてるじゃないか。邪魔はしないから、ここで練習の見学をさせてくれると嬉しいね」

「見ても面白くないと思うよ?」

「そんなことはないさ。美少女9人を自由に眺められる機会なんて、そうそうあるもんじゃないからね」

「曜、窓開けて。こいつ放り出すから」

「はーい、窓開けるねー」

「おやおや善子ちゃん。そんな悪魔のような発想、いつからできるようになったんだい」
「墮天使だからね」

「あ、あはは…」

これ以上口を開くと、どんどん立場が悪くなりそうなので一旦黙ることにする。

その様子を見て、ルビィちゃんは苦笑い、その他の1, 2年生は呆れているようだった。

しかしながら。

普段なら真っ先に怒りに来るであろう3年生たちは、口を挟もうとはしなかった。きつと、説明会中止の話の話を切り出すタイミングを考えているんだろう。

やっぱり、ここは俺が話した方がいいのかもしれない。

そんなことを考えていたら、曜ちゃんがフォーメーションの確認をしようと言いつ出した。

「ちよつと待って」

そしてそれを、果南ちゃんの一言が止める。

「その前に、話があるんだ」

真面目な顔をして言う彼女を見て、1、2年生の子達もただ事じゃない雰囲気を感じ取ったのだろう。

黙って、次の一言を待っている。

「…鞠莉」

「…うん」

整った場を見て、果南ちゃんがマリーちゃんに次の言葉を促す。

やがて、その言葉は放たれた。

「実は…学校説明会は…中止になるの」

先ほどまでの騒がしきはどこへやら。

マリーちゃん言葉に、みんなそれぞれの反応こそあれど、言葉を発する子は居なかった。

「中……止」

ようやく漏れた千歌ちゃんのそんな言葉も、きつと意識して発した言葉ではないのだろうか。

「どういう意味？」

聞いたのは梨子ちゃんだ。

その質問に果南ちゃんが答えを返す。

「言葉通りの意味だよ。浦の星は正式に来年度の募集をやめる」

受け止め難い現実を、それでもはつきりと言葉にする果南ちゃん。

その目に映っているのは、同じ言葉をマリーちゃんから言われた時と同じ反応をしている1，2年生のみんな。

「そんな……」

「き、急すぎない？」

「そ、そうずらつ。まだ、2学期も始まったばかりで……」

「うん…」

そんな反応が返ってくることで、3年生のみんなからすれば想定内だったのだろう。

「生徒からすればそうかもしれないませんが、学校側はすでに2年前から統合を模索していたのですわ」

そしてそれを、マリーちゃんが必死に説得して先延ばしにしていた。

果南ちゃんとダイヤちゃんが、そうやって説明する。

説明の最中。

千歌ちゃんがマリーちゃんに詰め寄った。

「鞠莉ちゃん。…どこ？」

「ち、千歌っち…?」

マリーちゃん何かを言う前に、千歌ちゃんが外へ飛び出した。

「私が話す!」

話すっていうのは。

浦の星女学院の魅力を、マリーちゃんのお父さんにつてことかな。

千歌ちゃんの思わぬ行動に、梨子ちゃんと曜ちゃんがストップをかける。

「千歌ちゃん!」

「待つて！鞠莉さんのお父さんはアメリカなのよ！」

それを聞いてもなお、千歌ちゃんは引かなかつた。

「…志麻姉や美渡姉やお母さんにお小遣い前借りして、前借りしまくつて、アメリカ行つて、もう少しだけ待つて欲しいって話す」

背中越しに、千歌ちゃんの表情は伺えない。

「…千歌ちゃん」

「できると思う？」

二人の問いに、千歌ちゃんは答えるのだ。

「できるー！」

表情は見えないけど、きつと迷いの無い顔をしているのだろう。

千歌ちゃんの言葉に、皆何も言わない。

できるとならそうしたいという思いと、実際にはほぼ不可能であるという現実。場を支配するのは、重い空気。

ようやく、俺が口を開けるタイミングがやってきた。

「千歌ちゃん」

「…何？」

「マリーちゃんはさ、1年生の頃からお父さんを説得し続けてきたんだ」

「……うん」

「留学を途中で中断したり、自ら理事長になったり、これでもかかってくらい学校存続に力を注いだわけだよ」

「……」

「そのマリーちゃん、今度ばかりはどうしようも無いと言ってるわけだ」

「……っ！でも！」

言葉を続けようとした千歌ちゃん。

そんな千歌ちゃんの前に、マリーちゃんが立つ。

「千歌っち……ごめんね」

泣きそうな笑顔。

さすがに、千歌ちゃんも言葉を失ったようだった。

みんなの反応を見るためにこうしてノコノコ着いてきたわけだが。

笑顔じゃないAqoursを見るのは、本当に辛いものだった。

※

「ということがありましてね」

「ハルくん、なんのために行ったのよ、それ」

「様子見で行ったんで、まあ目的は達成できたわけです」

「女の子相手にまともに励ましの言葉すらかけられないなんてねえ」

「全くその通りですね」

「他人事じゃないんだから」

翌日、発注されていた商品を届けるべく、十千万旅館にやってきた俺。

千歌ちゃんの様子も知りたかったので、こうして美渡さんとお話ししているわけである。

「それで千歌はあんなテンションだったんだねえ」

「やっぱり千歌ちゃんは変でしたか」

「逆逆。千歌が変なのはいつもでしょ。なのに昨日の夕方から普通になってたからね。

何かあったんだろうなーとは思ったんだよ」

「ひどい言われようですね」

「最初は、てつきりハルくんに振られたのかと思っただけどね」

「?なんでそういう話になるんですか?」

「理由はまた後日考えたまえよ朴念仁。まあそれはともかく、何かしら励ましてあげて

よ」

「力になりたいのは山々ですけどね。・んー…まあ何か考えてみますよ」

「頼んだよー。あ、これ、依頼料のみかん」

「一個ですか」

「千歌が元気になったらダンボールごとあげるよ」

「契約成立です」

その日の夜。

美渡さんに言われたというのものもあるけど、俺自身も気になってしょうがないので、早速千歌ちゃんに電話。

説明会がなくなった以上、ラブライブで学校の名を上げて入学希望者を集めるのはほぼ不可能になった。

Aquorsの最初の活動理由がなくなったということだ。

それでもあの子達はラブライブを目指すのか。

それとも…。

『はい、もしもし。ハルくん?』

「こんばんは、千歌ちゃん。急に電話してごめんよ。今、時間大丈夫かい?」

『うん、大丈夫だけど…どうしたの?』

「なに。大した用事では無いんだけど…ちよつと君を励まそうと思つてね」

『…普通、そういうの言う?』

「回りくどいのは苦手だね」

『ふふ。ハルくん、結構おバカさんだよね』

「不本意だけどよく言われるよ。…元氣、無いんだつてね」

『誰かに聞いたの?』

「美渡さんからね。まあ、説明会中止の話聞いて、君が元氣とは思えないしね」

『うん…そうだね。今回ぼつかりは、結構…キツイかも』

「そうかい。スクールアイドル、やめるのかい?」

『やめたくなんかないよ。…でも、私が頑張つても、どうしようもないのかもつて。…ど

うしたらいいか、わかんないの』

「どうしたら、かい。そもそも、君はどうしたいんだい」

『そんなの、廃校を阻止したいに決まつてるよ。…そのために生徒の募集をまだ続けて

欲しい。説明会もやって欲しい…』

「声、どんどん小さくなつてるよ」

『だ、だつて!だつて…』

声は、そこで途切れてしまった。

次に話すことを考えているんだろうか。

それとも、言いたいことは決まっているけど、言葉にならないのかな。

いずれにせよ。

申し訳ないけど、俺の話を少し聞いてもらおうじゃないか。

どうしても聞いてもらいたいことがあるのだ。

「ライブをやっているときの君たちは、すごく輝いてたね」

『…へ?』

「常日頃、君たちの魅力は十分に感じているつもりなんだけどね。それでも、ライブのときの君たちは眩しいくらいに輝いてるんだ」

『ハルくん…?』

「廃校阻止のためのライブもそれはそれで結構。…でもね」

『……………』

「廃校のことだけ考えてやるライブは、なんというか、君たちの魅力を発揮仕切れないと思うんだよ」

『廃校のことだけ…』

「この状況で、ライブを楽しめとか言うつもりはないけどね。…廃校が決まったからも

うライブはできませんなんて、寂しいじゃないか」

『でも、廃校はもう決まっちゃったんだよ?』

「うん。だからこれは、俺のわがままなんだけどね」

『…うん』

「この一言だけ。」

「これだけは、伝えておきたいという一言。」

「俺はまだ、君たちが輝くところが見たいんだ」

『…っ』

Aqoursの一ファンとして。

ちゃんと、伝えたかった言葉。

「そうしたら…何か一つくらい、奇跡ってやつが起こるかもしれないよ」

『ハルくん…』

「俺の言いたかったことはこれだけだよ。まあ、参考程度に聞き流してくれ。ここから先は、君たち次第だからね」

もともと。

千歌ちゃんがスクールアイドルを始めたのは、廃校を阻止するためではなかったのだ。

今年の春。

東京で初めて、sを見たとき。

その輝きに触れて、憧れて、彼女はスクールアイドルになったのだ。

そしてA q o u r sも、やがて自分たちの輝きを持つようになった。

それが、こんな形で消えてしまうのは、悲しいじゃないか。

※

「それで、スクールアイドルを続けることになったんだそうです」

「いやー、びっくりしたよ。元気が無いと思ってた翌日に、早朝から家を飛び出してっただから」

「俺も、学校にみんなが集まり始めたときは驚きましたよ。みんなが来るだろうとは思ってましたけど、あんな早朝から来るとは思ってたので」

「そういうえば、ハルくんはみんなが来たときは学校にいなかったの?」

「さすがに、生徒でもないのにあの時間は入れないですからね。店の前からみんなが学校に入っていくのを見ましたよ」

「…千歌が出て行ったの、6時半くらいだった気がするんだけど、どんだけ前から学校見

てたのさ」

「朝の3時くらいからですね」

「…ハルくんはやっぱり馬鹿だねえ」

呆れ顔の美渡さん。

千歌ちゃんとの電話の翌日のことだ。

今朝、校庭に集まったA q o u r sのメンバーたちは今後とも活動を続けていくことを決めたらしい。

いやはや、よかったよかった。

「安心した表情しちやって。A q o u r sの子達より、ハルくんが一番喜んでるんじゃない?」

「ファン1号ですからね。そりやあ喜びますよ」

「確かに、どんだけアタクされても手を出さないあたりは、ファンの鑑かもね」

「なんの話です?」

「ハルくんはやっぱりおバカさんって話だよ」

「さっきの続きですか?」

残念ながら、美渡さんが何を言いたいかはあまりわからない。

あ、それはそうと。

「美渡さん、千歌ちゃんが元気になったらみかん一箱くれるって言ったの覚えてます？」
「もちろん覚えてるよ。えーと…ほら、これがそのダンボール」

店の外に置いていたらしいダンボールを抱えて、美渡さんが持ってきた。

時期は完全にずれてるけど、まあ秋のみかんというのも、これはこれで良いだろう。
そんなことを考えながら、ダンボールを受け取った。

そしてすぐに、その中身が空であることに気付く。

「つてこれダンボールだけしかないんですけど」

「ダンボールごとあげるって言ったでしょ」

「『ごと』ってついてるんだからみかんもくださいよ」

「中身はみかん一個だったから、ダンボールごとあげたのと同じでしょ」

「詐欺もいいところです」

「もー、文句多いなあ。あ、じゃあ中に千歌入れてあげるよ」

「意味がわかりません」

「ほら、ああ見えて千歌、胸にみかん二つ…」

「発想が最高にオヤジくさいです」

今度は俺が呆れる番だったらしい。

実際、あの子達が再び頑張ろうって思えたのはお互いの励ましだろうから、俺の力は

関係なかっただろうけどさ。
：お腹、空いたなあ。